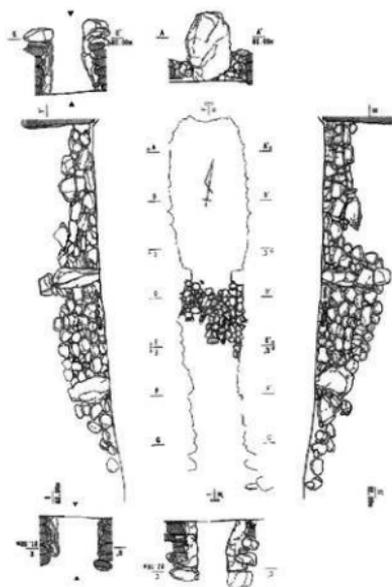


静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第151集

# 大屋敷C古墳群 大屋敷1号窯

平成11～14年度 (国)362号道路改良(2B一般) 工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊



2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第151集

# 大屋敷C古墳群 大屋敷1号窯

平成11～14年度（国）362号道路改良（2B一般）工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

▼ 大塚数C古墳群・大塚数1号家

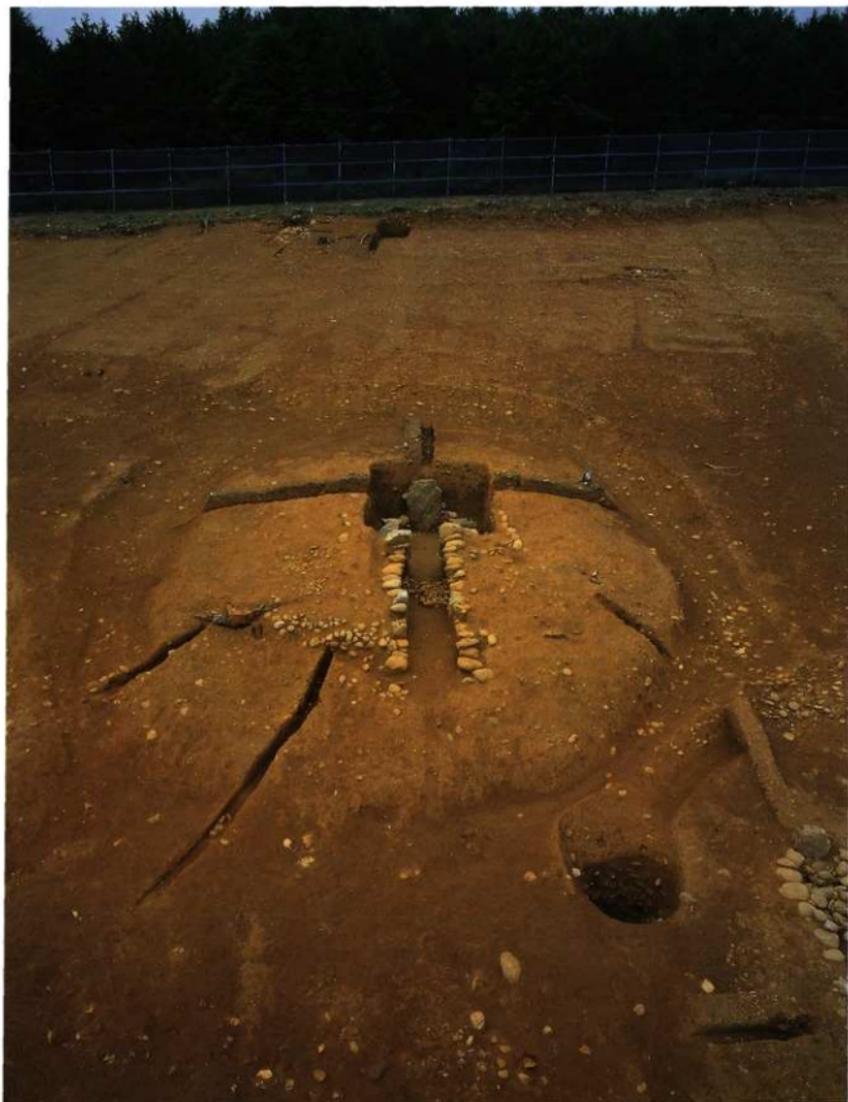


大塚数C古墳群・大塚数1号家の位置 ▲

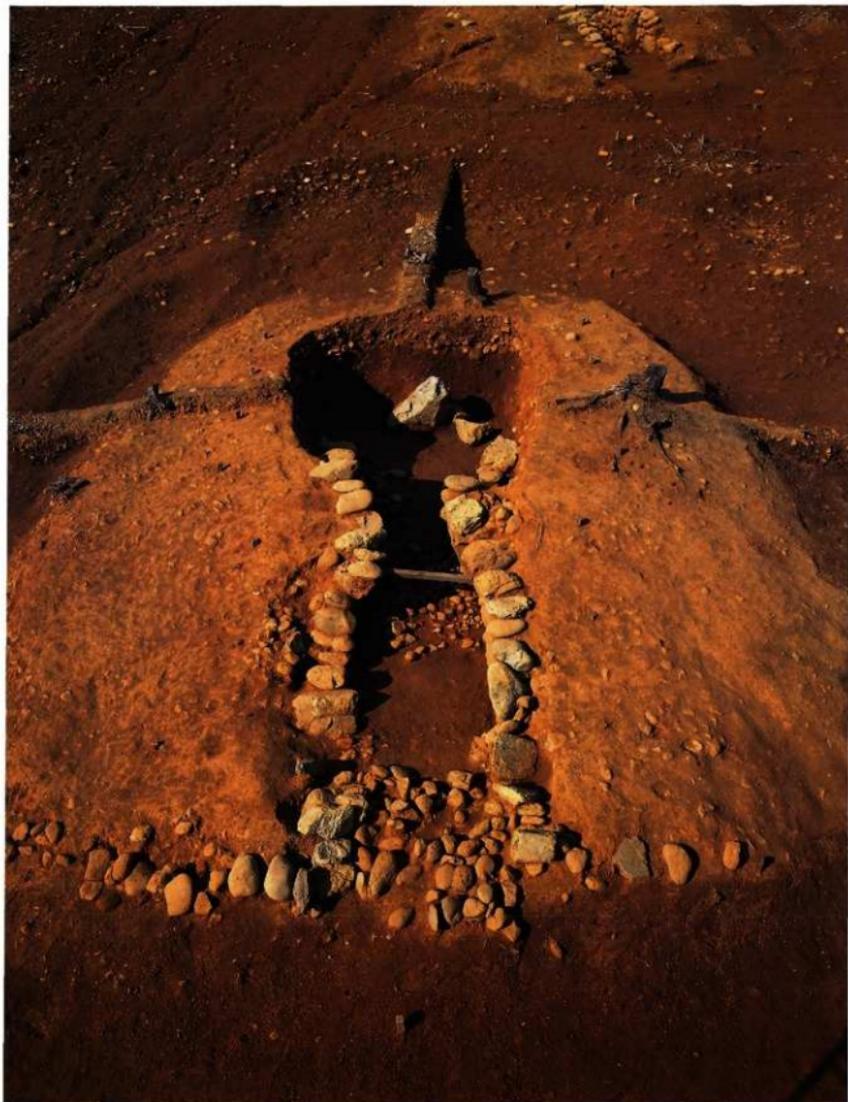


大屋敷C古墳群・大屋敷1号宮全景

(上が東)



大塚敷C19号墳



大屋敷C50号墳



大塚敷C22号墳出土遺物

卷頭図版 6



1 大屋敷1号窯全景



2 大屋敷1号窯近景



大塚敷1号窯出土灰釉陶器



大塚敷1号窟出土灰釉陶器碗・皿

## 序

天竜川が形成した平野の奥部、浜北市北部の丘陵地は天竜奥三河国定公園に指定され、静岡県森林公園として多くの市民の憩いの場として親しまれている。

この丘陵地には、本州唯一の旧石器時代の人骨(浜北人)が出土したことで全国的に著名な根堅遺跡がある。また、この地域の遺跡としては、6世紀前半の興覚寺後古墳や、7世紀前半の向野古墳をはじめとして大屋敷古墳群、高根山古墳群、雲岩寺(人形山)古墳群、向野古墳群などの大規模群集墳が多数所在する。さらに、律令期に入ると浜北市北部は龜玉郡とされ、灰釉陶器・山茶碗・瓦等を生産した吉名古窯跡群や大屋敷古窯跡群をはじめとする宮口古窯跡群や、昨年度に調査された川原寺式瓦や須恵器を焼成した篠塚瓦窯跡群が築窯される。それ以降、居館跡と考えられる中屋遺跡や、大屋敷墳墓群、高根山墳墓群などの中世の墳墓群、戦国期の大平城などが所在している。この浜北北麓丘陵は旧石器時代から江戸時代にわたる遺跡の宝庫である。

今回の調査は、このうち浜北市宮口の大屋敷地区にて実施された発掘調査であり、横穴式石室を埋葬施設とする大屋敷C古墳群の古墳51基、大屋敷古窯跡群の灰釉陶器窯1基を新たに調査することができた。

大屋敷C古墳群は、調査の結果、調査区内には7世紀前半から8世紀前半までに築造された横穴式石室を埋葬施設とする古墳が存在しており、いわゆる古墳時代終末期の大規模群集墳であることが判明した。大屋敷C古墳群は遠江における古墳の終焉や社会の変化を考える上で、貴重な資料を提供している。一方、大屋敷1号窯は、平安時代中頃の最終段階の灰釉陶器を焼成した窯であることが明らかとなり、窯構造や生産された器種が明らかとなった。今後宮口古窯跡群の操業体制や灰釉陶器の変遷、灰釉陶器から山茶碗への変遷過程を探ることや、宮口古窯跡群の供給範囲などを知る上で貴重な資料となった。

今後は調査担当者が調査成果を基に分析した研究成果に対して批評を願うとともに、本資料を分析に加えたさまざまな視点での議論が行われることを期待する。

最後になるが、静岡県浜松土木事務所、浜北市教育委員会、浜北市立龜玉中学校をはじめ調査に当たりお世話になった関係諸機関にこの場を借りて深謝するとともに調査に携わった調査員および調査や整理作業に従事した作業員の労を労いたい。

平成16年8月2日

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所 長 斎藤 忠

## 例 言

- 1 本書は、静岡県浜北市宮口5831-532ほか<sup>みやくち</sup>に所在する大屋敷C古墳群<sup>おほやしきしーこふんぐん</sup>及び大屋敷1号窯<sup>おほやしきいちごうよう</sup>の発掘調査報告書である。

なお、本書は2分冊で構成し、第1分冊には第I～IV章（大屋敷C古墳群）、第2分冊には第V～VI章（大屋敷1号窯）と写真版を掲載している。

- 2 調査は、(国)362号道路改良工事(2B一般)に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県浜松土木事務所から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、浜北市教育委員会生涯学習課の協力を得て、財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 発掘調査及び資料整理・報告書作成期間は下記のとおりである。

発掘調査期間は、平成12年1月6日～10月31日、平成13年10月1日～平成14年3月31日、平成14年7月1日～平成15年1月31日までの、延べ4年次23ヶ月間である。

資料整理・報告書作成期間は、平成15年7月1日～平成16年6月30日までの、2年次12ヶ月間である。

- 4 発掘調査及び資料整理・報告書作成は下記のとおりである。

年度	所 長	副所長	常務理事 (総務部長)	調査部長	調査部次長	調査課長	調査担当	総 務
平成11 (本調査)	斎藤 忠	山下 晃	伊藤友雄	佐藤達雄	佐野五十三	津藤嘉和 (2課)	大谷宏治 佐藤 淳	杉本敏雄(課長) 田中雅代(係長)
平成12 (本調査)	斎藤 忠	山下 晃	伊藤友雄	佐藤達雄	及川 司	篠原修二 (2課)	大谷宏治 佐藤 淳	杉本敏雄(課長) 田中雅代(係長)
平成13 (本調査)	斎藤 忠	山下 晃	桑田徳幸	佐藤達雄	及川 司	篠原修二 (2課)	榎田光俊 大谷宏治	本杉昭一(課長) 山本広子(係長)
平成14 (本調査)	斎藤 忠	飯田英夫	桑田徳幸	山本昇平	栗野克巳 佐野五十三	足立順司 (4課)	榎田光俊 大谷宏治	本杉昭一(課長) 鈴木潤生
平成15 (整理)	斎藤 忠	飯田英夫	桑田徳幸	山本昇平	栗野克巳 佐野五十三	足立順司 (3課)	大谷宏治	鎌田英巳(次長) 鈴木潤生
平成16 (整理)	斎藤 忠	飯田英夫	平松公夫	山本昇平	栗野克巳 佐野五十三	足立順司 (3課)	大谷宏治	鎌田英巳(次長) 鈴木潤生

- 5 現地での基準点測量、空中写真測量・空中写真撮影ならびに遺構の実測の一部を株式会社フジヤマに委託した。
- 6 遺構の写真撮影は調査研究員 大谷宏治が実施した。また、遺物の写真撮影は大谷宏治及び当研究所写真室担当職員が行った。
- 7 金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室長 西尾太加二が実施した。
- 8 発掘調査及び資料整理にあたり、当研究所評議員 向坂鋼二先生に3回にわたり現地指導を賜った。また、静岡大学名誉教授 伊藤通玄先生に石材の鑑定のご指導を頂いた。
- 9 本書は、調査にあたった調査員の所見をもとに執筆した。執筆分担当は下記のとおりである。  
調査研究員 大谷宏治  
自然化学分析(委託) ㈱パレオ・ラボ 山形秀樹(C14年代測定) 植田弥生(樹種同定)
- 10 本書の編集は、財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 11 発掘調査資料及び出土遺物は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

## 凡 例

- 1 現地測量においては、日本測地系(旧測地系)を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。なお、国土地理院ホームページにおいて世界測地系におけるおおよその位置を確認し、記載している部分もある。その場合には、世界測地系であることを明記した。
- 2 土色は小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1999『新版標準土色帖』(22版)に基づいて、分類した。
- 3 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。  
SF 土坑 SR 自然流路
- 4 土器は、須恵器、土師器(土師質土器)、灰釉陶器・山茶碗等の陶器に分けて、網掛けをしている。

土師器
  須恵器
  陶器

- 5 横穴式石室の墓壙に関して、墓壙底面に奥壁や立柱石などを掘るための掘り込み(土坑)や、石材の圧痕が確認できない場合は、基底石の図面をもって墓壙の図面に代えた。
- 6 浜北市教育委員会との協議により、古墳・遺構番号を変更したため、発掘調査時の古墳番号と異なる。本書をもって正式名称とする。なお、旧番号との対照は以下のとおりである。

第1表1 大屋敷C古墳群の新旧古墳番号対照表

旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号
C 1号墳	C 3号墳	C 3号墳	C17号墳	C 16号墳	C37号墳	C 29号墳	18号墳
C 2号墳	C 2号墳	C 4号墳	C19号墳	C 17号墳	C 36号墳	C 30号墳	C 34号墳
C - A号墳	C 6号墳	C 5号墳	C21号墳	C 18号墳	C 35号墳	C 31号墳	C 38号墳
C - B号墳	C 7号墳	C 6号墳	C22号墳	C 19号墳	C 23号墳	C 32号墳	C 43号墳
C - C号墳	C 8号墳	C 7号墳	C24号墳	C 20号墳	C 33号墳	C 33号墳	C 44号墳
C - D号墳	C 9号墳	C 8号墳	C25号墳	C 21号墳	C 39号墳	C 34号墳	20号墳
C - E号墳	C10号墳	C 9号墳	C26号墳	C 22号墳	C42号墳	C 35号墳	C51号墳
C - F号墳	C11号墳	C10号墳	C27号墳	C 23号墳	C 45号墳	C 36号墳北墳	C 40号墳
C - G号墳	C12号墳	C11号墳	C28号墳	C 24号墳	C46号墳	C 36号墳南墳	C 41号墳
C - H号墳	C13号墳	C12号墳	C29号墳	C 25号墳	C 48号墳	C 37号墳	C 47号墳
C - J号墳	C14号墳	C13号墳	C30号墳	C 26号墳	C 49号墳	C 38号墳	C53号墳
C - K号墳	C15号墳	C14号墳	C31号墳	C 27号墳	C50号墳	C 39号墳	C 54号墳
C - L号墳	C16号墳	C15号墳	C32号墳	C 28号墳	C 52号墳		

第1表2 土坑および自然流路の遺構番号対照表

旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号
SF01(1区)	SF01	SF07(3区)	SF07	SR01(2区)	SR01
SF02(1区)	SF02	SF08(3区)	SF08	SR01(3区)	SR02
SF03(1区)	SF03	SF09(3区)	SF09	SR02(3区)	SR03
SF04(1区)	SF04	SF10(3区)	SF10	SR03(3区)	SR04
SF05(1区)	SF05	SF11(3区)	SF11	SR04(3区)	SR05
SF06(3区)	SF12	SX01(2区)	SF06	SR05(3区)	SR06

また、今回の調査により大屋敷C古墳群と大屋敷A古墳群の間の谷部分で新たに発見した山茶碗・瓦片焼窯は大屋敷6号窯と命名した。

# 目 次

序	斎藤 忠
例言	(i)
凡例	(ii)
目次	(1)
挿図目次	(3)
挿表目次	(7)
巻頭図版目次	(7)
写真目次	(7)
第I章 発掘調査に至る経緯	(8)
第II章 調査の方法と経過	(9)
第1節 調査の方法	(9)
第2節 調査の経過	(12)
第3節 基本層序	(17)
第III章 位置と環境	(18)
第1節 地理的環境	(18)
第2節 歴史的環境	(19)
第3節 大屋敷古墳群・大屋敷古窯跡群の調査歴	(22)
第IV章 大屋敷C古墳群の調査	(23)
第1節 大屋敷C古墳群の概要	(23)
1 古墳および石室、遺物の名称	(23)
2 大屋敷古墳群の分布状況と概要	(28)
3 大屋敷C古墳群の概要	(30)
第2節 1区の調査成果	(37)
1 調査前の状況	(37)
2 古墳	(37)
(1) C 2号墳	37
(2) C 3号墳	40
3 古墳以外の遺構と遺物	(44)
(1) 遺構	44
(2) 遺構以外の出土遺物	45
第3節 3区の調査成果	(46)
1 概要	(46)
2 古墳	(46)
(1) 破壊された古墳	46
(2) C10号墳	53
(3) C14号墳	55
(4) C17号墳	57
(5) C18号墳	63
(6) C19号墳	68
(7) C20号墳	83
(8) C21号墳	89
(9) C22号墳	99
(10) C23号墳	108
(11) C24号墳	109
(12) C25号墳	115
(13) C26号墳	117
(14) C27号墳	119
(15) C28号墳	122
(16) C29号墳	126
(17) C30号墳	129
(18) C31号墳	137
(19) C32号墳	142
(20) C33号墳	145
(21) C34号墳	148

(22) C 35号墳……………150	(23) C 36号墳……………152	(24) C 37号墳……………158
(25) C 38号墳……………163	(26) C 39号墳……………166	(27) C 40号墳……………172
(28) C 41号墳……………174	(29) C 42号墳……………177	(30) C 43号墳……………185
(31) C 44号墳……………194	(32) C 45号墳……………196	(33) C 46号墳……………198
(34) C 47号墳……………205	(35) C 48号墳……………207	(36) C 49号墳……………211
(37) C 50号墳……………214	(38) C 51号墳……………227	(39) C 52号墳……………234
(40) C 53号墳……………235	(41) C 54号墳……………240	
3 古墳以外の遺構と遺物……………(245)		
(1) 陥し穴……………245	(2) 土坑……………247	(3) 自然流路……………247
(4) 遺構以外の出土遺物……………247		
第4節 観察表……………(255)		
第5節 大屋敷C古墳群の評価……………(267)		
1 墳丘に関して……………(267)		
(1) 外護列石・墳丘内石列……………(267)		
(2) 墳丘規模と石室形態……………(269)		
2 大屋敷C古墳群出土遺物に関して……………(270)		
(1) 副葬土器について……………(270)		
(2) 土師器甕の埋納と埋葬方法……………(272)		
(3) 鉄釘について……………(273)		
3 大屋敷C古墳群の群構成および横穴式石室の系譜とその変遷……………(275)		
(1) 大屋敷C古墳群の単位群構成……………(275)		
(2) 単位群と横穴式石室形態……………(279)		
(3) 横穴式石室の技術的系譜……………(279)		
(4) 大屋敷C古墳群の横穴式石室の変遷……………(283)		
4 大屋敷C古墳群の成立と終焉……………(285)		
(1) 鹿玉郡域における古墳の変遷……………(285)		
(2) 鹿玉郡域における横穴式石室の変遷……………(288)		
(3) 大屋敷C古墳群の成立の要件……………(291)		
(4) 大屋敷C古墳群の終焉……………(292)		
註……………(293)		
補記……………(293)		
参考文献……………(294)		

(第2分冊)

第V章 大屋敷1号窯の調査

- 第1節 宮口古窯跡群の概要  
 第2節 大屋敷1号窯  
 第3節 窯以外の遺構と遺物  
 第4節 観察表  
 第5節 自然科学分析

第6節 付編 大屋敷古窯跡群関連遺物

第7節 大屋敷1号窯の評価

引用・参考文献

謝辞

第VI章 調査のまとめ

図版 1～207

## 挿図目次

1 大屋敷C古墳群・大屋敷1号塚の位置	43 大屋敷C17号墳周溝出土土器実測図
2 大屋敷C古墳群・大屋敷1号塚調査区位置図	44 大屋敷C17号墳周溝遺物出土状況図
3 調査区グリッド配置図	45 大屋敷C17号墳横穴式石室検出状況図
4 3区確認調査試掘溝配置図	46 大屋敷C17号墳横穴式石室実測図
5 大屋敷C古墳群・大屋敷1号塚基本土層図	47 大屋敷C17号墳横穴式石室基底石および墓室実測図
6 大屋敷C古墳群・大屋敷1号塚の位置	48 大屋敷C17号墳横穴式石室遺物出土状況図
7 周辺の道路	49 大屋敷C17号墳横穴式石室出土土器実測図
8-1 古墳各部位名称図	50 大屋敷C17号墳横穴式石室出土土器実測図
8-2 横穴式石室の各部位名称と計測部位	51 大屋敷C18号墳墳丘測量図
9-1 大屋敷C古墳群出土土器分類図①	52 大屋敷C18号墳周溝遺物出土状況図
9-2 大屋敷C古墳群出土土器分類図②	53 大屋敷C18号墳周溝出土土器実測図
10 浜北北麓古墳群古墳分布図	54 大屋敷C18号墳横穴式石室検出状況図
11 大屋敷古墳群分布図	55 大屋敷C18号墳横穴式石室実測図
12 大屋敷C5号墳現況測量図	56 大屋敷C18号墳横穴式石室実測図
13 大屋敷C古墳群調査前地形測量図	57 大屋敷C18号墳横穴式石室基底石および墓室実測図
14 大屋敷C古墳群地形測量図	58 大屋敷C19号墳調査前測量図
15 大屋敷C古墳群1区地形測量図	59 大屋敷C19号墳地形測量図および墳丘立面図
16 大屋敷C2号墳地形測量図	60 大屋敷C19号墳墳丘盛土層断面図
17 大屋敷C2号墳出土土器実測図	61 大屋敷C19号墳周溝遺物出土状況図
18 大屋敷C2号墳横穴式石室施設実測図	62 大屋敷C19号墳周溝出土土器実測図
19 大屋敷C2号墳墓室遺物出土状況図	63 大屋敷C19号墳横穴式石室検出状況図
20 大屋敷C3号墳調査前測量図	64 大屋敷C19号墳横穴式石室実測図
21 大屋敷C3号墳墳丘測量図	65 大屋敷C19号墳横穴式石室階基石実測図
22 大屋敷C3号墳周溝出土土器実測図	66 大屋敷C19号墳横穴式石室基底石および墓室実測図
23 大屋敷C3号墳横穴式石室遺物出土状況図	67 大屋敷C19号墳盛土除去後地形測量図
24 大屋敷C3号墳横穴式石室実測図	68 大屋敷C19号墳横穴式石室遺物出土状況図
25 大屋敷C3号墳横穴式石室出土土器実測図	69 大屋敷C19号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図
26 1区土坑実測図	70 大屋敷C19号墳横穴式石室出土土器実測図
27 1区遺構外出土土器実測図	71 大屋敷C19号墳横穴式石室出土土器実測図
28 大屋敷C古墳群3区地形測量図	72 大屋敷C20号墳墳丘測量図
29 3区地形測量詳細図①	73 大屋敷C20号墳周溝遺物出土状況図
30 3区地形測量詳細図②	74 大屋敷C20号墳周溝出土土器実測図
31 3区地形測量詳細図③	75 大屋敷C20号墳横穴式石室検出状況図
32 大屋敷C6～9・11～13号墳出土土器実測図	76 大屋敷C20号墳横穴式石室実測図
33 大屋敷C10号墳地形測量図	77 大屋敷C20号墳横穴式石室基底石および墓室実測図
34 大屋敷C10号墳横穴式石室出土土器実測図	78 大屋敷C20号墳横穴式石室遺物出土状況図
35 大屋敷C10号墳横穴式石室検出状況図	79 大屋敷C20号墳横穴式石室出土土器実測図
36 大屋敷C10号墳横穴式石室および基底石・墓室実測図	80 大屋敷C20号墳横穴式石室出土土器実測図
37 大屋敷C14号墳地形測量図	81 大屋敷C21号墳調査前測量図
38 大屋敷C14号墳横穴式石室検出状況図	82 大屋敷C21号墳墳丘測量図
39 大屋敷C14号墳横穴式石室実測図	83 大屋敷C21号墳墳丘出土土器実測図
40 大屋敷C14号墳横穴式石室基底石および墓室実測図	84 大屋敷C21号墳墳丘盛土層断面図
41 大屋敷C14号墳横穴式石室出土土器実測図	85 大屋敷C21号墳横穴式石室検出状況図
42 大屋敷C17号墳墳丘測量図	86 大屋敷C21号墳横穴式石室実測図

87	大屋敷C21号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図	127	大屋敷C28号墳墳丘測量図
88	大屋敷C21号墳横穴式石室遺物出土状況図	128	大屋敷C28号墳墳丘および周濶出土土器実測図
89	大屋敷C21号墳横穴式石室出土土器実測図	129	大屋敷C28号墳横穴式石室および墓竈実測図
90	大屋敷C21号墳横穴式石室出土鉄製品実測図	130	大屋敷C29号墳墳丘測量図
91	大屋敷C21号墳盛土除去後地形測量図	131	大屋敷C29号墳横穴式石室検出状況図
92	大屋敷C22号墳調査前測量図	132	大屋敷C29号墳横穴式石室および閉塞石実測図
93	大屋敷C22号墳墳丘測量図	133	大屋敷C29号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図
94	大屋敷C22号墳墳丘出土土器実測図	134	大屋敷C30号墳墳丘測量図
95	大屋敷C22号墳墳丘盛土土層図	135	大屋敷C30号墳墳丘出土土器実測図
96	大屋敷C22号墳横穴式石室検出状況図	136	大屋敷C30号墳横穴式石室検出状況図
97	大屋敷C22号墳横穴式石室実測図	137	大屋敷C30号墳横穴式石室実測図
98	大屋敷C22号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図	138	大屋敷C30号墳横穴式石室基底石実測図
99	大屋敷C22号墳横穴式石室遺物出土状況図	139	大屋敷C30号墳墓竈実測図
100	大屋敷C22号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図	140	大屋敷C30号墳横穴式石室および墓竈遺物出土状況図
101	大屋敷C22号墳横穴式石室出土土器実測図	141	大屋敷C30号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図
102	大屋敷C22号墳横穴式石室出土玉類実測図	142	大屋敷C30号墳横穴式石室出土土器実測図
103	大屋敷C22号墳盛土除去後地形測量図	143	大屋敷C31号墳墳丘測量図
104	大屋敷C23号墳墳丘測量図	144	大屋敷C31号墳周濶遺物出土状況図
105	大屋敷C23号墳横穴式石室実測図および土層図	145	大屋敷C31号墳周濶および墳丘出土土器実測図
106	大屋敷C24号墳墳丘測量図	146	大屋敷C31号墳横穴式石室検出状況図
107	大屋敷C24号墳横穴式石室検出状況図	147	大屋敷C31号墳横穴式石室実測図
108	大屋敷C24号墳横穴式石室実測図	148	大屋敷C31号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図
109	大屋敷C24号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図	149	大屋敷C31号墳横穴式石室遺物出土状況図
110	大屋敷C24号墳横穴式石室および墓竈遺物出土状況図	150	大屋敷C31号墳横穴式石室出土土器実測図
111	大屋敷C24号墳横穴式石室および墓竈出土土器実測図	151	大屋敷C32号墳墳丘測量図
112	大屋敷C25号墳地形測量図	152	大屋敷C32号墳横穴式石室検出状況図
113	大屋敷C25号墳横穴式石室検出状況図	153	大屋敷C32号墳横穴式石室実測図
114	大屋敷C25号墳横穴式石室実測図および基底石・墓竈実測図	154	大屋敷C33号墳墳丘測量図
115	大屋敷C25号墳横穴式石室裏込め出土土器実測図	155	大屋敷C33号墳周濶出土土器実測図
116	大屋敷C26号墳地形測量図	156	大屋敷C33号墳周濶遺物出土状況図
117	大屋敷C26号墳横穴式石室検出状況図	157	大屋敷C33号墳横穴式石室検出状況図
118	大屋敷C26号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図	158	大屋敷C33号墳横穴式石室実測図
119	大屋敷C26号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図	159	大屋敷C33号墳横穴式石室遺物出土状況図
120	大屋敷C26号墳墓竈出土土器実測図	160	大屋敷C33号墳横穴式石室出土土器実測図
121	大屋敷C27号墳墳丘測量図	161	大屋敷C33号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図
122	大屋敷C27号墳横穴式石室検出状況図	162	大屋敷C34号墳地形測量図
123	大屋敷C27号墳横穴式石室実測図	163	大屋敷C34号墳横穴式石室実測図
124	大屋敷C27号墳横穴式石室覆土出土土器実測図	164	大屋敷C34号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図
125	大屋敷C27号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図	165	大屋敷C35号墳墳丘測量図
126	大屋敷C28号墳調査前測量図	166	大屋敷C35号墳横穴式石室検出状況図
		167	大屋敷C35号墳横穴式石室および閉塞石実測図
		168	大屋敷C35号墳横穴式石室基底石および墓竈実測図

- 169 大屋敷C36号墳墳丘測量図
- 170 大屋敷C36号墳周溝出土土器実測図
- 171 大屋敷C36号墳横穴式石室検出状況図
- 172 大屋敷C36号墳横穴式石室実測図
- 173 大屋敷C36号墳横穴式石室基底石および墓壇実測図
- 174 大屋敷C36号墳横穴式石室閉塞石実測図  
および遺物出土状況図
- 175 大屋敷C36号墳横穴式石室出土土器実測図
- 176 大屋敷C37号墳調査前測量図
- 177 大屋敷C37号墳墳丘出土土器実測図
- 178 大屋敷C37号墳墳丘測量図および墳丘盛土土層断面図
- 179 大屋敷C37号墳墓壇実測図および土層断面図
- 180 大屋敷C37号墳盛土除去後地形測量図
- 181 大屋敷C37号墳横穴式石室横乱土出土土器実測図
- 182 大屋敷C38号墳調査前測量図
- 183 大屋敷C38号墳墳丘測量図  
および墳丘盛土土層断面図
- 184 大屋敷C38号墳盛土除去後地形測量図
- 185 大屋敷C38号墳周溝遺物出土状況図
- 186 大屋敷C38号墳周溝および墳丘出土土器実測図
- 187 大屋敷C39号墳調査前測量図
- 188 大屋敷C39号墳墳丘測量図および墳丘盛土土層断面図
- 189 大屋敷C39号墳周溝遺物出土状況図
- 190 大屋敷C39号墳周溝出土土器実測図
- 191 大屋敷C39号墳墳丘出土土器実測図
- 192 大屋敷C39号墳横穴式石室実測図
- 193 大屋敷C39号墳横穴式石室遺物出土状況  
および墓壇実測図
- 194 大屋敷C39号墳横穴式石室出土土器実測図
- 195 大屋敷C39号墳横穴式石室出土玉類実測図
- 196 大屋敷C39号墳盛土除去後地形測量図
- 197 大屋敷C40・41号墳地形測量図
- 198 大屋敷C40号墳横穴式石室検出状況図
- 199 大屋敷C40号墳横穴式石室実測図  
および基底石実測図
- 200 大屋敷C40号墳前庭出土土器実測図
- 201 大屋敷C41号墳横穴式石室検出状況図
- 202 大屋敷C41号墳横穴式石室実測図  
および基底石・墓壇実測図
- 203 大屋敷C41号墳前庭遺物出土状況図
- 204 大屋敷C41号墳前庭出土土器実測図
- 205 大屋敷C42号墳調査前測量図
- 206 大屋敷C42号墳墳丘測量図
- 207 大屋敷C42号墳盛土土層断面図
- 208 大屋敷C42号墳周溝遺物出土状況図
- 209 大屋敷C42号墳周溝および墳丘出土土器実測図
- 210 大屋敷C42号墳盛土除去後地形測量図
- 211 大屋敷C42号墳横穴式石室実測図および土層図
- 212 大屋敷C42号墳墓壇実測図
- 213 大屋敷C42号墳横穴式石室遺物出土状況図
- 214 大屋敷C42号墳横穴式石室出土土器実測図
- 215 大屋敷C42号墳横穴式石室出土玉類・  
金属製品実測図
- 216 大屋敷C43・44号墳墳丘測量図
- 217 大屋敷C43号墳周溝遺物出土状況図
- 218 大屋敷C43号墳周溝出土土器実測図
- 219 大屋敷C43号墳横穴式石室検出状況図
- 220 大屋敷C43号墳横穴式石室実測図
- 221 大屋敷C43号墳横穴式石室基底石  
および墓壇実測図
- 222 大屋敷C43号墳横穴式石室閉塞石実測図
- 223 大屋敷C43号墳横穴式石室遺物出土状況図
- 224 大屋敷C43号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図
- 225 大屋敷C43号墳横穴式石室出土土器実測図
- 226 大屋敷C44号墳横穴式石室実測図  
および土層断面図
- 227 大屋敷C45号墳墳丘測量図
- 228 大屋敷C45号墳周溝出土土器実測図
- 229 大屋敷C45号墳横穴式石室検出状況図
- 230 大屋敷C45号墳横穴式石室実測図
- 231 大屋敷C45号墳横穴式石室基底石  
および墓壇実測図
- 232 大屋敷C46号墳墳丘測量図
- 233 大屋敷C46号墳周溝出土土器実測図
- 234 大屋敷C46号墳横穴式石室検出状況図
- 235 大屋敷C46号墳横穴式石室実測図
- 236 大屋敷C46号墳横穴式石室基底石  
および墓壇実測図
- 237 大屋敷C46号墳横穴式石室遺物出土状況図
- 238 大屋敷C46号墳横穴式石室出土土器実測図
- 239 大屋敷C46号墳横穴式石室出土鉄製品実測図
- 240 大屋敷C47号墳墳丘測量図
- 241 大屋敷C47号墳周溝出土鉄製品実測図
- 242 大屋敷C47号墳横穴式石室実測図  
および遺物出土状況図
- 243 大屋敷C47号墳横穴式石室出土土器実測図
- 244 大屋敷C48号墳調査前測量図
- 245 大屋敷C48号墳墳丘測量図

- 246 大屋敷C48号墳周溝遺物出土状況図
- 247 大屋敷C48号墳周溝および墳丘出土土器実測図
- 248 大屋敷C48号墳横穴式石室検出状況図および遺物出土状況図
- 249 大屋敷C48号墳横穴式石室および墓底石・墓塚実測図
- 250 大屋敷C48号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図
- 251 大屋敷C48号墳横穴式石室出土土器実測図
- 252 大屋敷C49号墳丘測量図
- 253 大屋敷C49号墳横穴式石室検出状況図
- 254 大屋敷C49号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図
- 255 大屋敷C49号墳横穴式石室墓底石および墓塚実測図
- 256 大屋敷C49号墳出土鉄製品実測図
- 257 大屋敷C50号墳調査前測量図
- 258 大屋敷C50号墳丘測量図
- 259 大屋敷C50号墳墳丘層図および墳丘見通し図
- 260 大屋敷C50号墳周溝遺物出土状況図①
- 261 大屋敷C50号墳周溝遺物出土状況図②
- 262 大屋敷C50号墳周溝出土土器実測図①
- 263 大屋敷C50号墳周溝出土土器実測図②
- 264 大屋敷C50号墳横穴式石室検出状況図
- 265 大屋敷C50号墳横穴式石室および閉塞石実測図
- 266 大屋敷C50号墳横穴式石室墓底石および墓塚実測図
- 267 大屋敷C50号墳盛土除去後地形測量図
- 268-1 大屋敷C50号墳横穴式石室出土土器実測図
- 268-2 大屋敷C50号墳横穴式石室出土鉄製品実測図
- 269 大屋敷C50号墳横穴式石室遺物出土状況図
- 270 大屋敷C51号墳墳丘測量図
- 271 大屋敷C51号墳周溝遺物出土状況図
- 272 大屋敷C51号墳周溝出土土器実測図
- 273 大屋敷C51号墳横穴式石室検出状況図
- 274 大屋敷C51号墳横穴式石室実測図
- 275 大屋敷C51号墳横穴式石室墓底石および墓塚実測図
- 276 大屋敷C51号墳横穴式石室閉塞石および遺物出土状況図
- 277 大屋敷C51号墳横穴式石室出土土器実測図
- 278 大屋敷C51号墳横穴式石室出土玉類・金属製品実測図
- 279 大屋敷C51号墳盛土除去後地形測量図
- 280 大屋敷C52号墳地形測量図
- 281 大屋敷C52号墳横穴式石室実測図
- 282 大屋敷C53号墳丘測量図
- 283 大屋敷C53号墳墳丘出土土器実測図
- 284 大屋敷C53号墳横穴式石室検出状況図
- 285 大屋敷C53号墳横穴式石室実測図
- 286 大屋敷C53号墳横穴式石室墓底石および墓塚実測図
- 287 大屋敷C53号墳横穴式石室出土土器実測図
- 288 大屋敷C53号墳横穴式石室出土鉄製品実測図
- 289 大屋敷C53号墳横穴式石室遺物出土状況図
- 290 大屋敷C54号墳墳丘測量図
- 291 大屋敷C54号墳横穴式石室検出状況図
- 292 大屋敷C54号墳横穴式石室実測図
- 293 大屋敷C54号墳横穴式石室墓底石および墓塚実測図
- 294 大屋敷C54号墳横穴式石室出土土器実測図
- 295 大屋敷C54号墳横穴式石室出土鉄製品実測図
- 296 3区土坑実測図①(陥し穴)
- 297 3区土坑実測図②(陥し穴)
- 298 3区土坑実測図③
- 299 3区自然流路(SR06)出土土器実測図
- 300 3・4区遺構外出土土器実測図①(須恵器・七輪器・灰輪陶器)
- 301 3・4区遺構外出土土器実測図②(山茶碗)
- 302 3・4区遺構外出土遺物実測図③(山茶碗・瓦ほか)
- 303 3・4区遺構外出土遺物実測図④(石鏃・煙管・銅銭)
- 304 静岡県における外濠列石・墳丘内石列を有する古墳分布図
- 305 西濃江・中濃江における外濠列石・墳丘内石列をもつ古墳
- 306 大屋敷C古墳群古墳規模・石室規模相関関係図
- 307-1 大屋敷C古墳群石室規模相関関係図①
- 307-2 大屋敷C古墳群石室規模相関関係図②
- 308 大屋敷C古墳群横穴式石室出土土器器種構成割合図
- 309 大屋敷C古墳群出土須恵器器種構成図
- 310 東海地方の鉄釘形態分類図
- 311 濃江の主な古墳出土鉄釘
- 312 大屋敷C古墳群単位群区分図
- 313 大屋敷C古墳群単位群別古墳消長図
- 314 大屋敷C古墳群時期別築造古墳と追分古墳
- 315 大屋敷C古墳群と類似する濃江の横穴式石室
- 316 濃江の奥壁を円礫積みする古墳(a 2 類)
- 317 大屋敷C古墳群横穴式石室変遷図
- 318 龜玉郡域における古墳の変遷
- 319 龜玉郡域における横穴式石室展開図

## 挿表目次

1-1	大屋敷C古墳群の新旧古墳番号対照表	27	大屋敷C35号墳横穴式石室規模
1-2	土坑および自然流路の遺構番号対応表	28	大屋敷C36号墳横穴式石室規模
2	遺跡地名表	29	大屋敷C37号墳横穴式石室規模
3	時期区分と対応関係	30	大屋敷C39号墳横穴式石室規模
4	大屋敷C古墳群概要	31	大屋敷C40号墳横穴式石室規模
5	大屋敷C2号墳横穴式石室規模	32	大屋敷C41号墳横穴式石室規模
6	大屋敷C3号墳横穴式石室規模	33	大屋敷C42号墳横穴式石室規模
7	大屋敷C10号墳横穴式石室規模	34	大屋敷C43号墳横穴式石室規模
8	大屋敷C14号墳横穴式石室規模	35	大屋敷C44号墳横穴式石室規模
9	大屋敷C17号墳横穴式石室規模	36	大屋敷C45号墳横穴式石室規模
10	大屋敷C18号墳横穴式石室規模	37	大屋敷C46号墳横穴式石室規模
11	大屋敷C19号墳横穴式石室規模	38	大屋敷C47号墳横穴式石室規模
12	大屋敷C20号墳横穴式石室規模	39	大屋敷C48号墳横穴式石室規模
13	大屋敷C21号墳横穴式石室規模	40	大屋敷C49号墳横穴式石室規模
14	大屋敷C22号墳横穴式石室規模	41	大屋敷C50号墳横穴式石室規模
15	大屋敷C23号墳横穴式石室規模	42	大屋敷C51号墳横穴式石室規模
16	大屋敷C24号墳横穴式石室規模	43	大屋敷C52号墳横穴式石室規模
17	大屋敷C25号墳横穴式石室規模	44	大屋敷C53号墳横穴式石室規模
18	大屋敷C26号墳横穴式石室規模	45	大屋敷C54号墳横穴式石室規模
19	大屋敷C27号墳横穴式石室規模	46	陥し穴の規模
20	大屋敷C28号墳横穴式石室規模	47	大屋敷C古墳群出土土器観察表
21	大屋敷C29号墳横穴式石室規模	48	大屋敷C古墳群出土玉類観察表
22	大屋敷C30号墳横穴式石室規模	49	大屋敷C古墳群出土金属製品観察表
23	大屋敷C31号墳横穴式石室規模	50	大屋敷C古墳群石製品観察表
24	大屋敷C32号墳横穴式石室規模	51	大屋敷C古墳群副葬土器器種別出土数
25	大屋敷C33号墳横穴式石室規模	52	造江における鉄釘用土古墳・横穴墓一覧表
26	大屋敷C34号墳横穴式石室規模	53	造江における円継積み奥壁をもつ横穴式石室墳一覧表

## 巻頭図版目次

1	大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯の位置	6	1 大屋敷1号窯全景
2	大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯全景	2	大屋敷1号窯近景
3	大屋敷C19号墳	7	大屋敷1号窯出土灰胎陶器
4	大屋敷C50号墳	8	大屋敷1号窯出土灰胎陶器碗・皿・托
5	大屋敷C22号墳出土遺物		

## 写真目次

1	重機による表土除去作業	11	現地説明会の様子②
2	大屋敷1号窯発掘作業	12	土器接合作業
3	1区表土除去作業	13	土器復元作業
4	3区表土除去作業	14	土器実測作業
5	古墳発掘作業	15	トレース作業
6	横穴式石室発掘作業	16	拓本採取作業
7	実測作業	17	データ入力作業
8	実測委託作業	18	保存処理(X線写真撮影)作業
9	ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影	19	写真撮影作業
10	現地説明会の様子①	20	遺物収納作業

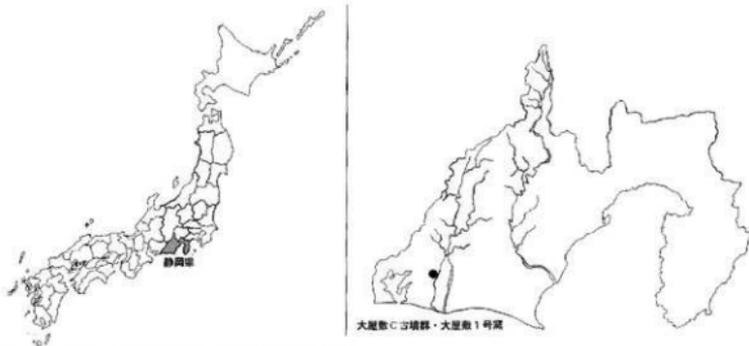
## 第 I 章 発掘調査に至る経緯

日本における交通の大動脈、東名高速道路の交通量の増加から第二東名高速道路が計画され、静岡県内を東西に横断する、東名高速道路の北側に路線が決定された。その路線内に位置する浜北市には、第二東名高速道路浜北インターチェンジが建設されることが決定し、それに伴いアクセス道路としての国道362号道路の交通量の増加、特に高速道路を利用する大型車の大幅な増加が予想された。しかし、現状での国道362号道路は路幅が狭い場所が数箇所存在し、大型車のすれ違いが不可能な場所や、見通しの劣悪な場所が存在するという事から、歩行者など地域住民の安全保障と、予想される交通量に耐えうる道路の拡幅が必要となり、国道362号道路のバイパス建設が計画された。静岡県浜松土木事務所工事2課では、浜北市教育委員会生涯学習課文化財係及び静岡県教育委員会文化課に対し、工事に先立ちこの路線内の遺跡の有無についての照会を行った。

浜北市教育委員会では、これに対し、昭和62年(1987年)に実施された分布調査の成果に基づき、国道362号バイパスの計画されたルート(開発予定地)内には大屋敷C古墳群、大屋敷A古墳群、大屋敷1号窯などが所在することを同課へ回答した。

この回答をもとに、静岡県教育委員会文化課と浜松土木事務所との協議により、路線上に位置する遺跡に対して順次確認調査、本発掘調査を実施することが決定した。その結果、まず大屋敷C古墳群、大屋敷1号窯が対象となった。大屋敷1号窯の所在は古くより灰軸陶器が採集され、場所はほぼ特定されていたため確認調査を実施せず本調査を実施することとした。また、大屋敷C古墳群は分布調査時には、墳丘が明瞭な古墳8基のみを認定しただけであるため、これらの古墳を除いた部分における古墳の所在について確認調査を実施し、その結果に基づき本調査を実施することとなった。

調査は、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が確認・本調査を実施することとなった。



第1図 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯の位置

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

開発予定地内の西よりに深く狭い侵食谷が位置し、この場所に大屋敷1号室の所在が推定されていたこと、またこの谷の東西の丘陵斜面地にはそれぞれ古墳および中世墳墓の存在が推定されていたため、この谷をもって調査区を区分し、谷の西側を1区、窯跡の所在が想定される谷部を2区、東側を3区、東側の谷を4区として調査を実施した(第2図)。

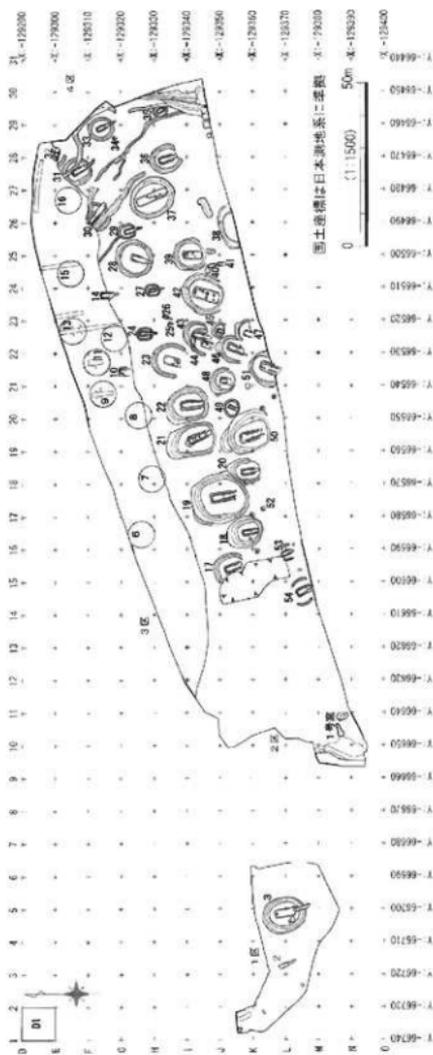
発掘調査は、旧国土地標(日本測地系とする)に準拠し、調査区全体を通して、標標杭を設定した。調査区の西北隅に当たる標標杭を基準とし、南北方向にA、B、C・・・と、東西方向に1、2、3と、名前をつけ、各調査区は西北の杭を基準と呼称した(第3図)。

古墳 古墳の調査は十文字に土層帯を設定し、墳丘表土の掘削および埋葬施設盗掘坑の土砂の除去を行った後、周溝および横穴式石室を検出する。周溝は土層として残す部分を基準に試掘溝を設定し、土層を確認しながら掘削し、周溝の土層が確認された段階で全体を掘り下げる。周溝から出土した遺物は出土状況の写真、図面を作成し、順次取り上げる。横穴式石室は検出状況写真、図面を作成後、土層図を作成しながら石室内の精査を実施し、遺物と閉塞石、敷石の精査を行い、写真撮影、図面作成を実施する。遺物の取り上げを行った後、この段階で各古墳の完掘写真を撮影する。横穴式石室の実測図を作成した後、裏込め土層の記録を作成しながら、横穴式石室の基底石を残して解体する。基底石の記録を作成した後、その石材を取り除き墓壇の掘削を行うとともに、墳丘盛土の除去を行う。最後に、盛土が残存する古墳は、盛土除去後の旧地形測量図を作成する。各年次の横穴式石室内の調査が終了した段階で空中写真撮影、空中写真測量を実施する。

窯 窯の調査は、表土除去後窯の主軸を設定し、この主軸線をもとに2mごとの発掘区を設定する。発



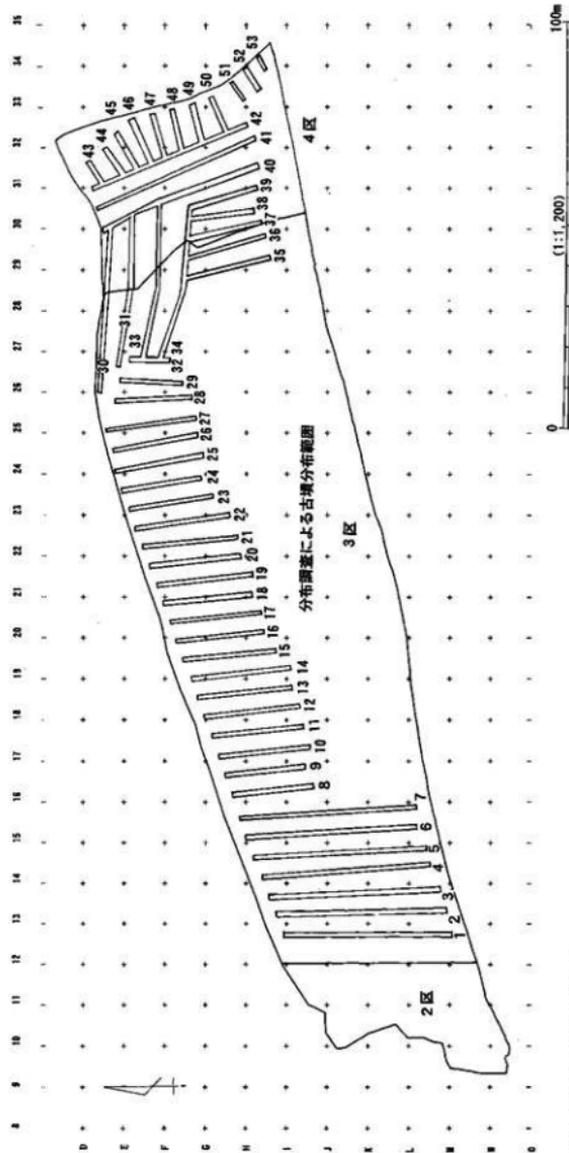
第2図 大屋敷C古墳群・大屋敷1号室調査区位置図



第3図 調査区グリッド配置図

大層敷C古墳群および大層敷1号墓の面土遺構

調査区	測地系		非測地系		日本測地系	
	緯度	経度	緯度	経度	緯度	経度
調査区全体	34° 50' 5~6"	137° 46' 3~4"	34° 49' 53~55"	137° 46' 15~25"		
1区 (1号墓)	34° 50' 5"	137° 46' 3"	34° 49' 53"	137° 46' 15"		
2区 (1号墓)	34° 50' 5"	137° 46' 5"	34° 49' 53"	137° 46' 18"		
3区 (西側)	34° 50' 8"	137° 46' 6"	34° 49' 55"	137° 46' 17"		
3区 (東側)	34° 50' 6"	137° 46' 14"	34° 49' 55"	137° 46' 25"		
4区	34° 50' 6"	137° 46' 14"	34° 49' 55"	137° 46' 25"		
3区調査区外 (6号墓)	34° 50' 8"	137° 46' 13"				



第4図 3区作区調査試行結果地図

掘区は竪の主軸(長軸)線をもとに、南側にA、B、C区、北側をZ、Y、X区、西側を竪の原点から4、6、8、10、12mに設定する。まず、この基準線に沿って試掘溝を掘削し、土層の堆積状況を確認した上で、各発掘区の北側および東側に土層帯を残し土層の観察をしながら、各層位ごとに遺物を残して掘削する。遺物は竪の主軸を基準にトータルステーション(以下、TS)で出土位置(X、Y、H)を記録して取り上げる。また、竪の操業年代および灰釉陶器の焼成に利用された薪材の樹種を自然科学分析から明らかにするために、炭化材を適宜採集し、分析に備える。

## 第2節 調査の経過

### 1 発掘調査の経過(写真1～11)

#### (1)平成11(1999)年度

平成11年度は平成12(2000)年1月6日から平成12年3月31日までの3ヶ月間調査を実施した。

発掘調査は、平成12年1月6日からプレハブの設営、発掘機材の搬入を行い、1月7日から2区の重機による表土除去を開始した。それがある程度進行した段階で、人力による表土除去を開始し、大屋敷1号窯、SF06、SR01を検出した。この段階で大屋敷1号窯の灰原は東西6m以上、南北12m以上の範囲に広がることが判明した。灰原付近は焼却炉として利用されていたため攪乱が著しく、まずその攪乱層を取り除いた。灰原調査は、大屋敷1号窯の主軸を延長し、2mごとに発掘区を設定し、まず各区に試掘溝を掘削し、土層の堆積状況を確認し、その土層に基づいて順次上層から掘削を開始した。各区、層位ごとに精査を進め、遺物が出土した状況の写真撮影を行い、TSで、出土位置を記録し、1点ずつ取り上げを行った。また、灰原の調査に併行して、竪の調査を実施し、試掘溝を設定し、土層を確認しながら順次掘削を進めた。遺物出土状況の記録を行い、遺物を取り上げた。

また、大屋敷1号窯の調査に併行して1月11日から3区の調査前現況測量図の作成を行い、その後確認調査を実施した。この確認調査は重機により5m間隔で試掘溝を掘削し、石室などの検出作業を実施した。6～16号墳の11基の所在が明らかとなった。さらに、3区東側の谷部分(4区)から、釉着した山茶碗が数点出土したことにより新たな窯が所在することが想定されたため、この部分の全面的な表土除去を実施し精査したが調査区内に



1 重機による表土除去作業



2 大屋敷1号窯発掘作業



3 1区表土除去作業



4 3区表土除去作業



5 古墳発掘作業



6 横穴式石室発掘作業



7 実測作業

は遺構は存在せず、遺物のみが出土するだけであり、調査区の北側用地外で馬爪形竈台や軸着した山茶碗、瓦などが表面採集できることから3区の調査区外に大屋敷6号竈が存在することが明らかとなった。

大屋敷1号室の調査が終了した3月11日に現地説明会を実施した。天候は不順であったが、地元住民をはじめ60名の参加があった。また、3月9日に大屋敷C古墳群の調査方針を建てるために、分布調査を実施した当研究所評議員 向坂鋼二先生に現地指導を受けた。

また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施するとともに、TSを用いたオフセット測量を実施した。

さらに、発掘調査に併行して、遺物の洗浄・注記・台帳作成、図面整理・台帳作成、写真整理・台帳作成などの基礎整理作業を実施した。

現地説明会終了後、大屋敷1号室の断ち割り調査を実施し、竈の構造を調査し、3月29日に調査を終了した。

## (2)平成12年度

平成12年度は、4月2日からプレハブの設置、発掘機材の搬入を実施した。調査は4月6日から1区の重機による表土除去を開始するとともに、人力により表土除去を行い、分布調査で確認されていた3号墳のほか新たに2号墳を確認した。

1区の表土除去が終了した段階で、3区の分布調査および確認調査により古墳の存在が確認された範囲の重機による表土除去を開始した。これにより調査区内に分布・確認調査で確認された19基のほか、墳丘が流出した古墳16基の計35基が存在することが判明した。

まず、斜面上側に位置する古墳から調査をはじめ、精査を実施したところ、6～9、11～13、15・16号墳の9基は棺の改竄により破壊されていることが判明し、石材や遺物が散乱するだけであることが判明した。これらの古墳は使用された石材の種類を記録し、写真を撮影し、全体図におよその場所を提示することに留めた。残りの26基のうち、当年度対象とするのは16基とし、斜面上

部、西北の側の古墳から順次発掘調査を進めた。調査は表土除去から開始し、埋葬施設と周溝の精査を行い、攪乱坑内の土砂を除去した段階で、横穴式石室の検出状況を図面化し、その後石室内の土層図を作成しながら精査を実施し、副葬品や敷石等の検出を実施した。遺物出土状況や敷石の写真撮影、実測が終了次第、横穴式石室の実測図を作成した。これと併行して周溝の掘削を実施し、遺物の出土状況写真を撮影し、出土状況図を作成した。3区の調査がある程度進んだ段階で、1区の古墳2基の調査を同様の手順で行った。

その後で、裏込め土層や、石室と墳丘との関係を確認するために、土層図を作成しながら解体し、基底石、墓壙の図面を作成した。盛土が残存した古墳に対しては、古墳築造前の旧地形測量図を作成し調査を終了した。

調査が進んだ10月12日に狭フジヤマに委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影、空中写真測量を実施した。空中写真撮影終了後の10月15日に現地説明会を実施し、地元住民をはじめ約100名の参加があった。

10月31日に調査を終了し、プレハブの解体及び発掘機材の撤収、遺物の移動を行った。

### (3)平成13年度

平成13年度は、平成13年10月1日から平成14年3月31日までの6ヶ月間調査を実施した。

平成12年度に確認した古墳10基の調査を進めた。手順は12年度同様、表土除去、周溝掘削、横穴式石室検出状況図作成、横穴式石室精査、写真撮影、図面作成の順に行った。墳丘及び横穴式石室の調査が進行した11月29日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

撮影終了後の12月1日に静岡県教育委員会主催の「平成13年度しずおか文化財ウィーク推進事業『きてみて埋蔵文化財』」に併せて現地説明会を開催し、地元住民をはじめ約110名の参加があった。

現地説明会終了後、順次、横穴式石室の解体および裏込めの調査、基底石・墓壙実測、墳丘解体・土層図作成、旧地形測量図作成を行った。また、調査当初より、図面整理・写真整理・土器の洗浄・



8 実測委託作業



9 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影



10 現地説明会の様子①



11 現地説明会の様子②



12 土器復合作業



13 土器復元作業



14 土器実測作業



15 トレース作業

注記作業などの基礎整理作業を実施した。

#### (4)平成14年度

平成14年度は、平成14年7月1日から平成15年1月31日までの7ヶ月間調査を実施した。当年度は調査対象範囲の残りの部分1,820㎡に対して調査を実施した。今年度の調査古墳番号は38～48、51、53、54号墳である。

7月1日にプレハブの設営、発掘機材の搬入を実施し、7月2日より分布調査時に確認された39、42、48号墳の表土除去を開始した。表土除去により新たに40～46号墳を確認し順次調査を実施した。7月18日から仮設道路とした部分の重機による表土除去を開始し、新たに古墳3基(47・53・54号墳)が存在することを確認した。一部(古墳7基)の横穴式石室の実測は藤フジヤマに委託した。

墳丘及び横穴式石室の調査が進んだ10月10日に藤フジヤマへ委託し、国土座標に基づいた基準杭を設置し、10月30日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量、空中写真撮影を実施した後、11月3日に静岡県教育委員会主催「平成14年度しずおか文化財ウィーク推進事業『きでみて掘藏文化財』」に併せて現地説明会を開催し、地元住民をはじめ約170名の参加があった。

現地説明会終了後の11月5日から、横穴式石室と墳丘の解体を開始し、基底石、墓域、墳丘土層などの図面を作成した。調査当初より、図面・写真整理、土器洗浄・注記などの基礎整理作業を実施した。

これらの調査が終了した1月20日から発掘機材及び出土遺物の搬出を行った。

1月31日に荷物の搬出を完了し、プレハブを大屋敷A古墳群の調査に引き継いで、大屋敷C古墳群のすべての調査を終了した。

#### 2 資料整理、遺物保存処理及び報告書作成の経過(写真12～20)

資料整理及び遺物の保存処理、報告書作成作業は、平成15年7月1日から平成16年6月30日までの2年次12ヶ月に渡って実施した。

## (1)平成15年度

7月1日より大屋敷C古墳群の遺構図面整理・版下作成作業、出土土器の接合・復元作業、出土遺物の実測作業を開始した。遺構版下が完成した段階で、全体図および遺構図の一部をトレース作業委託とし、残りのトレース作業を実施した。出土遺物の実測が終了した段階で、遺物図の版下作成を行い、トレースを実施した。また、遺物写真撮影を行い、遺構とともに写真図版の割付を実施した。図面整理、版下作成、トレース作業と併行して、報告書の執筆を行った。

また、出土した金属製品の保存処理を当研究所保存処理室において実施するとともに、大屋敷1号窟で採取した試料(炭化材)の自然化学分析を榊パレオ・ラボに委託し、分析を進めた。

## (2)平成16年度

平成15年度の資料整理作業を引き継いで、平成16年4月1日～6月30日まで実施した。報告文の執筆とともに、写真撮影、版下作成作業を行った。それらが終了した段階で報告書の編集作業を実施した。編集作業が終了した段階で、報告書印刷のための入札を行った。印刷は図書印刷所に委託し、平成16年8月に原稿・挿図・写真等を入稿したあと順次校正を実施し、出版に至った。

また、報告書作成作業と併行して、記録類および遺物収納作業を実施し、静岡県教育委員会文化課へ出土遺物および記録類を引き渡し、すべての調査を終了した。



16 拓本採取作業



17 データ入力作業



18 保存処理(X線写真撮影)作業



19 写真撮影作業



20 遺物収納作業

### 第3節 基本層序

大屋敷C古墳群、大屋敷1号窯の基本層序を、下記のように区分し、ギリシア数字で表記した。大きく表土を第Ⅰ層とし、周溝の流入土を第Ⅱ層、古墳の盛土および裏込めを第Ⅲ層、旧表土を第Ⅳ層とし、地山を第Ⅴ層とした。さらに細分はアラビア数字の1から順次番号を振った。

表土は腐葉土を多く含む現地表土を表土(Ⅰ-1層)とし、この表土下の流入土(Ⅰ-2層)と、攪乱の際の土砂(Ⅰ-3層)に区分した。

また、古墳の裏込め・盛土は基本的に外部からの搬入は確認できないため、さらに多年次に互り調査が継続することから年度ごとに表記が異なるのを避けるため、旧表土と地山の混和度により、5段階に区分し、統一を図った。

#### 第Ⅰ層 表土・攪乱土・流入土

- Ⅰ-1 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(表土)
- Ⅰ-2 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(流入土)
- Ⅰ-3 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(攪乱土)

#### 第Ⅱ層 周溝覆土

- Ⅱ-1 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR5/6(周溝覆土)
- Ⅱ-2 (褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝覆土)
- Ⅱ-3 (褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝覆土) …… Ⅱ-2層よりやや明るめ

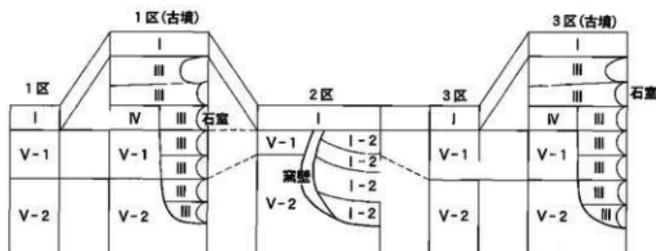
#### 第Ⅲ層 石室裏込め土・墳丘盛土(第一次墳丘)

- Ⅲ-1 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(旧表土を多く含む) 7.5YR4/6(裏込め・盛土)
- Ⅲ-2 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(旧表土をやや含む) 7.5YR5/6(裏込め・盛土)
- Ⅲ-3 (赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む) 5YR4/6(裏込め・盛土)
- Ⅲ-4 (明褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(地山①と地山②の混和) 7.5YR4/6(裏込め・盛土)
- Ⅲ-5 (明褐色系) 明褐色砂礫混じりシルト(地山②を多く含む) 7.5YR5/6(裏込め・盛土)

#### 第Ⅳ層 旧表土 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/4(旧表土)

#### 第Ⅴ層 地山

- V-1 赤褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(地山①)
- V-2 黄褐色砂礫混じりシルト 10YR5/6(地山②)



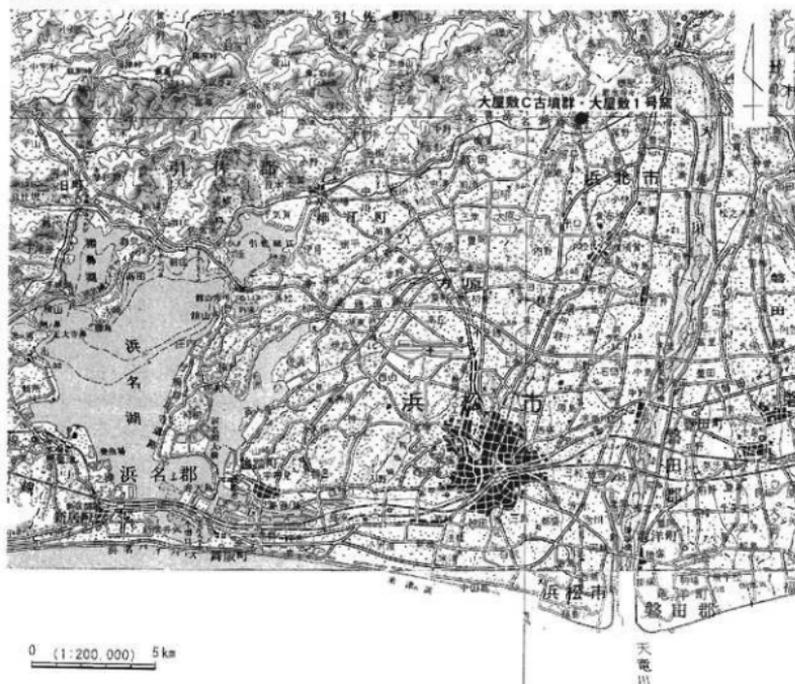
第5図 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯基本土層図

## 第Ⅲ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大屋敷C古墳群、大屋敷1号窯の所在する浜北市は静岡県西部に位置し、南は浜松市、西は浜松市・引佐町、北は天竜市、東は天竜川を挟んで磐田市・豊岡村と接している(第6図)。浜北市北部の丘陵地帯は自然豊かな天竜奥三河国定公園に属しており、そのうちの一部は静岡県立森林公園に指定され、県民の憩いの場となっている。

遺跡周辺は、赤石山系から太平洋に向かって派生する弓張山脈の先端にあたり、古天竜川の形成した天竜川平野に向かって熊手状に伸びる小尾根が伸延しており、「浜北北麓丘陵」と呼称されることもある。この弓張山脈の合間を源流に起源する天竜川が貫き、天竜市鹿島付近で東側に屈曲・南下し、太平洋に注いでいる。天竜川は何度も流路を変更しながら現在に至っている。現在の馬込川も天竜川の旧本流と考えられており、天竜川平野部の地形形成に大きく関わっている。天竜川は浸食が激しく、左右両岸に河岸段丘を形成している。西側が三方原台地、東側が磐田原台地である。その北側に北麓丘陵が位置している。大屋敷C古墳群、大屋敷1号窯は浜北市北部の山麓の熊手状に伸びる小丘陵の斜面に位置している。



第6図 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯の位置(国土地理院発行1:200,000地勢図「伊良湖畔」「豊橋」を複写して加筆。)

大屋敷古墳群は立地場所から大屋敷A、B、C古墳群の3支群に区分されており、大屋敷A・C古墳群が北麓丘陵斜面地に位置し、興覚寺後古墳を含む大屋敷B古墳群が大屋敷A・C古墳群の南側に広がる平地(三方原段丘面)に位置する。

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 浜北市内において特筆すべきは、根堅遺跡(第7図14)である。根堅遺跡は1960(昭和35)年に発見された。1962・63(昭和37・38)年に発掘調査が実施され、石灰岩地帯の割れ目状洞窟からヒョウヤトラなどの動物化石骨とともに2体分の人骨が出土し、「浜北人」と命名された。近年の再調査においても下層から出土した人骨は18,000年前、上層から出土した人骨は約14,000年前と鑑定され(松浦2002)、本州で唯一年代が確認された旧石器時代の人骨となり、学術上重要な資料となっている。この根堅遺跡のほかは断片的な遺跡や遺物は確認されていない(註1)。

**縄文時代** 縄文時代草創期の遺跡や遺物は確認されていない。縄文時代早期になると、大屋敷遺跡(42)において早期前半の粗縄文土器が採集され、また第二東名建設事業に伴う発掘調査130地点(120、茶ノ木田遺跡)において同様の粗縄文土器が出土している。両遺跡ともに遺構は検出されていないものの生活の痕跡が窺える。前期の遺跡は今のところ確認されていない。中期になると、遺跡の数が増加し、大屋敷遺跡、北谷遺跡(16)、勝栗山I遺跡(10)、向山II遺跡(20)などが出現する。後期から晩期にかけては、大屋敷遺跡(42)で条痕文系土器が採集されているほか、向山I・II遺跡(19・20)や白々原遺跡(1)などがあり、縄文土器や石蔵などが採集されている。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡も多くはない。芝本遺跡(26)・東原遺跡(27)では竪穴住居が数軒確認されるほか、方形周溝墓も確認されている。このほか大屋敷遺跡(42)で中期の白岩式土器が採集されるほか、山林遺跡(79)、舟岡山遺跡(96)などで弥生土器が採集されている。浜北市域の弥生時代の遺跡から出土する土器は、東海西部(愛知以西)に主に広がる山中式土器・欠土式土器と天竜川以東に主に広がる白岩式土器、菊川式土器が混在する状況を示しており、当時の天竜川の流路との関係もあり、弥生時代の交流や交易を考える上で非常に重要な地域といえる。

**古墳時代** まず、古墳の状況を見ておく。前期の遺跡は少なく、内野地区の三方原台地上に、奈良県天理市黒塚古墳や京都府山城町榎井大塚山古墳などと同型鏡である三角縁神獸鏡が出土した全長56.3mの赤門上古墳(84)や権現平山7号墳(87)が築造される。古墳時代中期前半には、神明社上古墳群(88)などが築造される。中期後半(5世紀後半)になると10~20m程度古墳で構成される群集墳が築造され、古墳数が急激に増加する。三方原台地上に神明社上古墳群(88)、観音ツブラ古墳(89)、辺田平古墳群(80)などが築造され、この時期に北麓丘陵に雲岩寺B(人形山)古墳群(32)、河岸段丘上の浜北面において於呂神社境内古墳をはじめとする御馬ヶ池(於呂神社境内)古墳群(22・23)が出現する。古墳時代後期前半には、北麓丘陵に全長35mの興覚寺後古墳(45)が築造され、これ以後北麓丘陵での古墳の造営が活発化し、古墳時代終末期(7世紀)に盛期を迎える。この時期に、大屋敷A・C古墳群(39・41)、高根山A古墳群(35)、雲岩寺C古墳群(33)などの大規模群集墳が築造される。また、向野古墳群中の向野古墳(4)では畿内地域の影響の強い大型の切石積両袖式石室が築造され、涼ノ御所古墳(3)では、当時の技術を結集して製作された金銅製透彫金具(銅付冠帽)が副葬される。一方で、内野台地上では権現平山古墳群(87)、太田坊古墳群(90)、富岡古墳群(91)などが築造されるものの、北麓丘陵と比較すると築造数は格段に少ないといえる。

つぎに集落に目を移すと、古墳時代前期~中期の集落は確認されておらず、山林遺跡(79)で前期~中期の土師器が採集されている程度である。後期にはいると、東原遺跡(27、D地点)において奈良時代



第7図 周辺の遺跡(国土地理院発行1:50,000地形図「鶴田」「浜松」「天竜」「三河大野」を複写して加筆。)

第2表 遺跡地名表

1 百々原遺跡	35 高根山A古墳群	67 沢上II遺跡	99 矢海遺跡
2 向野I遺跡	36 高根山墳墓群	68 白鷺I遺跡	下流A古墳群
3 向野古墳群(倉庫/塙所古墳)	37 高根山B古墳群	69 白鷺II遺跡	100 半田山G古墳群
4 向野古墳群	38 高根山C古墳群	70 前原I遺跡	101 半田山H古墳群
5 向野I遺跡	37 西ノ谷古墳	71 志野遺跡	102 半田山A古墳群
6 北坂堅古墳	39 大屋敷A古墳群	72 辺田原古墳	半田山II遺跡
7 勝栗山II遺跡	40 大屋敷B古墳群	73 船池遺跡	103 半田山B古墳群
8 勝栗山A古墳群	41 大屋敷C古墳群	74 男池遺跡	半田山C古墳群
9 勝栗山墳墓群	大屋敷I号墓	75 清水遺跡	104 半田山C古墳群
10 勝栗山I遺跡	42 大屋敷遺跡	76 新原遺跡	半田山I遺跡
11 勝栗山B古墳群	43 篠場瓦窯群	77 能ヶ谷古墳群	105 半田山D古墳群
12 泉A古墳群	44 大屋敷墳墓	78 巴ノ山古墳	106 半田山E古墳群
13 泉B古墳群	45 興覚寺後古墳	79 山林遺跡	半田山F古墳群
14 根堅遺跡	46 北新屋A古墳群	80 辺田平古墳群	107 初生遺跡
15 泉墳墓群	47 北新屋B古墳群	81 二本ヶ谷横石塚古墳群	108 有玉古窟
16 北谷遺跡	48 新屋古墳群	82 二本ヶ谷古墳群	109 瓦屋西A古墳群
17 中坊遺跡	49 新屋遺跡	83 二本ヶ谷横石塚古墳群	110 瓦屋西B古墳群
18 向山A古墳群	50 吉名古塚群	84 内野上古墳群(含赤門上古墳)	111 瓦屋西I遺跡
19 向山I遺跡	51 讀榮I遺跡	85 内野御陣屋跡	上右原遺跡
20 向山II遺跡	52 新池東遺跡	86 内野小西遺跡	112 隅田遺跡
21 向山B古墳群	53 讀榮古塚群	87 権現平山古墳群	113 八幡西遺跡
22 銅鑊ヶ池古墳群	54 讀榮II遺跡	88 神明社上古墳群	114 蛸子森遺跡
23 於呂神社境内内墳群	55 土取I遺跡	89 観音ツツラ古墳	115 八幡南遺跡
24 旧赤中中学校内遺跡	56 土取I遺跡	90 太田坊古墳群	116 服織神社境内遺跡
25 芝本古墳群	57 土取遺跡	91 富岡古墳群	117 恒武遺跡群
26 芝本遺跡	58 篠原敷	92 富岡大谷遺跡	118 彌生倉遺跡
27 東原遺跡	59 長者屋敷	93 象地石遺跡	119 社口遺跡
28 セツ塚遺跡	60 野口階遺跡	94 象地石遺跡	120 茶ノ木田遺跡
29 彦助堤	61 野口遺跡	95 佐左衛門山古墳群	121 中道遺跡
30 中屋遺跡	62 天神山遺跡	96 内野上古墳群	122 寺山遺跡
31 雲岩寺A古墳群	63 船池古墳群	97 舟岡山遺跡	123 大門西遺跡
32 雲岩寺B(人形山)古墳群	64 志野古墳群	98 衆地遺跡群	124 上海I遺跡
33 雲岩寺C古墳群	65 沢上B古墳群		
34 東ノ谷瓦窯	66 沢上II遺跡		

まで継続する集落が確認されるほか、現在調査中の第二東名建設工事に伴う発掘調査130地点(大門西遺跡・上海土遺跡, 123・124)において、7世紀代の堅穴住居数軒が確認されている。

古代 古墳時代後半～奈良時代には、篠場瓦窯群(43)が確認され、川原寺式軒丸瓦(標式:奈良県高市郡明日香村川原寺)と石川寺式軒丸瓦(標式:奈良県橿原市石川廃寺)などが生産されていたことが判明し、また環状瓶と呼ばれる特殊な須恵器が出土した。清水遺跡(75)では獣足付短頸壺などが出土しており、龍玉部衝の推定地の一つとなっている。また、東原遺跡(27)や向山I遺跡(19)で堅穴住居が確認されている。このほか大屋敷遺跡(42)や山林遺跡(79)では須恵器や土師器が出土しており、この時期の集落の存在が想定されている。

平安時代には、宮口地区は灰釉陶器を生産する窯業地帯となっており、吉名古窯跡群(50)や大屋敷古窯跡群(41ほか)などが操業しており、鎌倉時代の山茶碗生産に続く。

中世 鎌倉時代から南北朝時代にかけての方形居館と考えられる中屋遺跡(30)が赤佐地区に存在しており、山茶碗をはじめ白磁や瀬戸産陶磁器、瓦などが出土している。この時期には岩水寺が創建されていたと考えられている。また、中世になると、古墳時代の群集墳と同じような場所に多くの墳墓群が営まれる。代表的な例としては大屋敷墳墓(44)、泉墳墓群(15)、勝栗山墳墓群(9)、高根山墳墓群(35)などが挙げられ、大屋敷墳墓は興覚寺との関係、泉墳墓群と勝栗山墳墓群は岩水寺との関連が想定されている(久野1988)。

また、最近の調査により南北朝期の山城と考えられていた浜北市大平の大平城は、山林寺院を山城に代えていたことが判明している(浜北市2004)。

### 第3節 大屋敷古墳群・大屋敷古窯跡群の調査歴

#### 1 大屋敷古墳群の調査歴

大屋敷A・C古墳群に対して、1987(昭和62)年に浜北市教育委員会による分布調査が行われた以外、試掘調査、確認調査とも行われていない。大屋敷B古墳群では、興覚寺後古墳に対して1986・87(昭和61・62)年に確認調査が実施され(浜北市1989)、また龜玉<sup>カメタマ</sup>中学校の校庭南側に位置する大屋敷A古墳群中の1基(龜玉中学校内円墳、A46号墳)が浜名高等学校史学部により発掘調査され、横穴式石室を有する円墳であることが判明している(浜北市1989)。

#### 2 大屋敷古窯跡群の調査歴

大屋敷古窯跡群は、浜北市北部の土取<sup>つとり</sup>地区から尾野<sup>おの</sup>地区に広がる宮口<sup>みやぐち</sup>古窯跡群のうち、北麓丘陵<sup>きたろく丘陵</sup>の斜面に築窯された窯跡群で、灰陶<sup>はいとう</sup>陶器<sup>とうき</sup>焼成<sup>やうせい</sup>窯5基、山茶碗<sup>さんちやわん</sup>焼成<sup>やうせい</sup>窯1基の計6基で構成される。このうち大屋敷5号窯に対して浜北市営<sup>みんやう</sup>明神池<sup>あきのかい</sup>運動公園<sup>うんどうこうえん</sup>の建設に先立って1987(昭和62)年に確認調査、1988(昭和63)年に本調査が実施されている(第一次調査、浜北市教委1989)。

#### 注

1 注は各章ごとに注1から順次番号を付加し、章末に掲載する。参考文献は各章末にまとめて記載する。なお、各章の註・参考文献は、第三章は本頁、第四章は293～296頁、第五章は第2分冊125～127頁、第六章は131頁に掲載している。

#### 第三章 参考文献

- 久野正博 1988『浜北市北部丘陵地帯における中世墳墓の様相』『静岡県考古学研究』22 静岡県考古学会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2000『年報』16(平成11年度事業概要)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2001『年報』17(平成12年度事業概要)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2002『年報』18(平成13年度事業概要)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2003a『年報』19(平成14年度事業概要)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2003b『所報』106号
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c『鉢場瓦窯現地説明会資料』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003d『大屋敷A古墳群現地説明会資料』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004a『中原遺跡発掘調査現地説明会資料』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2004b『年報』20(平成15年度事業概要)
- 浜北市史編さん委員会 1989『浜北市史』通史編上巻 浜北市
- 浜北市史編さん委員会 2004『浜北市史』資料編 浜北市
- 浜北市教育委員会編・発行 1971『内野権現平山古墳群第3号墳・第4号墳』(浜北市史料)
- 浜北市教育委員会編・発行 1981『浜北市東原遺跡D地点 浜名高等学校による東原遺跡第1次・第2次発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 1988『浜北市北麓古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 1989『明神池運動場内遺跡群発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 1995『浜北市高根山古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 2000『内野古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 2001『平成12年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 2002『東原遺跡A地点・B地点』 静岡県西部農林事務所・浜北市教育委員会
- 松浦秀治 2002『浜北人骨 - 本州で初めて確認された旧石器時代人骨 - とその意義』『特別展 浜北ゆかりの文化財 - 見直そう郷土の遺産 -』記念講演会資料 浜北市教育委員会

## 第IV章 大屋敷C古墳群の調査

### 第1節 大屋敷C古墳群の概要

#### 1 古墳および石室、遺物の名称

今回報告する古墳および横穴式石室、遺物の名称を下記のように定義する。

#### ①古墳

**墳形** 円墳 横穴式石室の主軸側が長い楕円形も含む。

**墳丘** 第一次墳丘 墳丘を段階的に造成する場合、石室を覆う墳丘の中核となる盛土。

第二次墳丘 第一次墳丘を覆う盛土。これをもって墳丘は完成する。

**外護列石** 墳裾あるいは段築がある場合、各段の裾に積載された石列で、一段から数段積載される。

**墳丘内石列** 墳丘の構築段階で積載された石列で、墳丘完成時には墳丘内に全部あるいは一部が取り込まれたもの。

**周溝** 墳丘を区画するために掘削された溝。

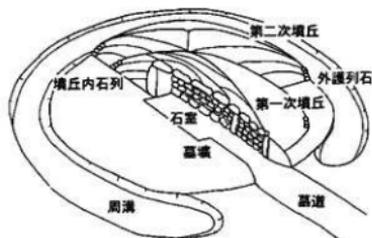
#### ②横穴式石室

**裏込め** 横穴式石室を構築する際、石材と墓壇との間に充填された土砂。

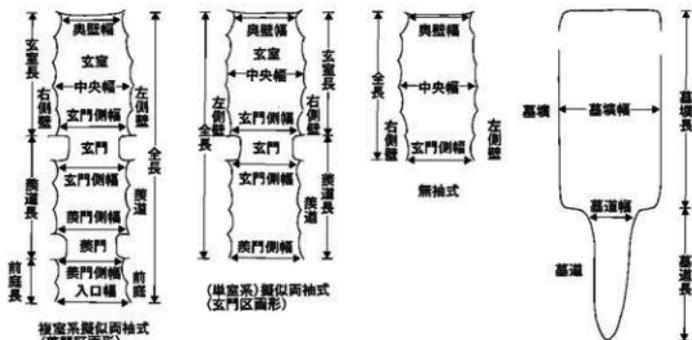
**墓道** 石室へ至る通路部分。

**墓墟** 横穴式石室を構築するために掘削された土壇。

**基底石** 横穴式石室を構築するにあたり最下段に据えられた石材。



第8図1 古墳各部位名称図



第8図2 横穴式石室の各部位名称と計測部位

複室系(複門区画形)擬似両袖式 玄門、羨門を有し、前庭、羨道、玄室で構成される。  
 単室系(玄門区画形)擬似両袖式 玄門のみを有し、羨道、玄室で構成される。  
 無袖式 玄門のない玄室のみで構成されるもの。

玄室の平面形 長方形 玄門側、中央部、奥壁側の幅がほぼ等しいもの。  
 胴張形 玄門側、奥壁側に比べて中央の幅が広く、側壁が弓なりを呈するもの。  
 奥窄まり形 玄門側、中央部に比べて、奥壁のみ幅が狭いもの。  
 長台形 玄門側の幅が奥壁側に比べて狭く、側壁が直線的なもの。

## ③遺物

大屋敷C古墳群の調査(1・3区)では古墳に伴う遺物として、須恵器、土師器、鉄製品(刀装具・鏃・刀子・釘)、装身具(耳環、玉類)が出土しており、名称の混乱を避けるため、報告書で使用する須恵器および土師器の器種の名称等を統一する。

須恵器 須恵器は杯身・杯蓋、無台杯・返蓋、有台杯・摘蓋、無蓋高杯、平瓶、台付長頸壺、脚付長頸壺、短頸壺、埴、長頸壺蓋、甌、フラスコ形瓶、広口壺に区分した(第9図2)。

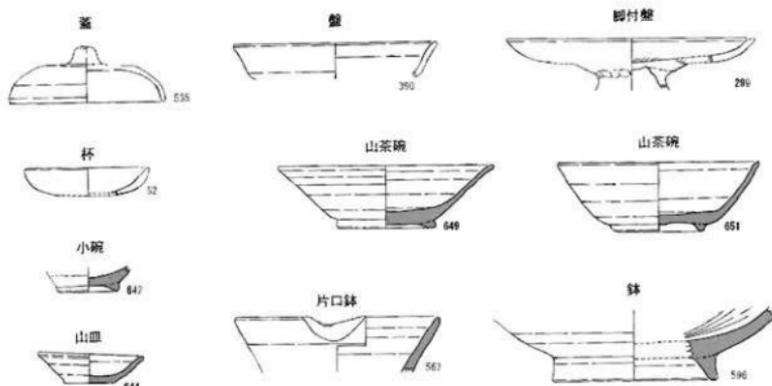
土師器 土師器は杯、壺、脚付壺、蓋、甕に区分した(第9図1)。

玉類 玉類は直径8mmで丸玉と小玉に区分した。丸玉は直径が8mm以上、小玉は直径が8mm未満の玉を指す。

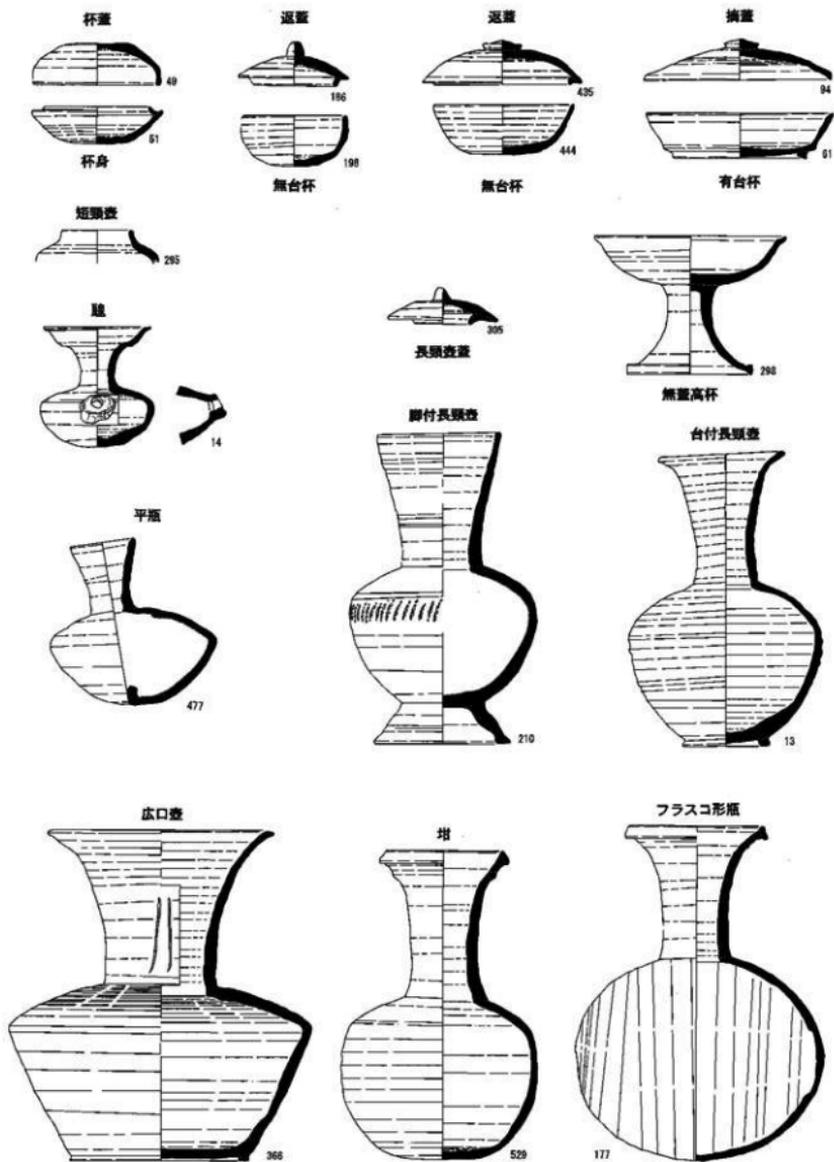
鉄鉄 頸部長が鎌身長長の2倍以上のものを長頸鎌とし、それ未満のものを短頸鎌とする。また、鎌身幅が1.5cmを越えるものを平根式、それ以下のものを尖根式とする。また、関は鎌身部分を「鎌身関」、茎と頸部の間の関を「茎関」とする。

このほか、3区東側および4区からは灰釉陶器、山茶碗が出土しており、山茶碗の器種の区分を行う。山茶碗は山茶碗、小碗、山皿、片口鉢、鉢に区分した(第9図1)。

なお、灰釉陶器の器種区分は第V章(第2分冊)で行っているため、そちらを参照されたい。



第9図1 大屋敷C古墳群出土土器分類図①



第9図2 大屋敷C古墳群出土土器分類図②

## ④時期

本報告においては、湖西古窯跡群を中心とした遠江の須恵器編年を使用する。以下に、他地域の須恵器編年とおおよその対応関係を示す(鈴木敏2001, 静岡県考古学会2003, 東海考古学フォーラム実行委2001)。

また、おおよその暦年代を記す。

第3表 時期区分と対応関係

遠江編年	猿投編年	陶邑田辺編年	陶邑中村編年	飛鳥編年	暦年代
遠江Ⅰ期中葉		TK208	I型式3段階		5世紀後半
遠江Ⅰ期後葉		TK23	I型式4段階		5世紀後半～末
遠江Ⅰ期末葉		TK47	I型式5段階		5世紀末～6世紀初頭
遠江Ⅱ期	H10	MT15	Ⅱ型式1段階		6世紀前半
遠江Ⅱ期前葉	H61	TK10	Ⅱ型式2段階		6世紀前半～中葉
遠江Ⅱ期中葉	塚ヶ池	TK43	Ⅱ型式3段階		6世紀後半
遠江Ⅱ期後葉	H15	TK209	Ⅱ型式4段階	飛鳥Ⅰ	6世紀後半～末葉
遠江Ⅲ期末葉	H16	TK217	Ⅱ型式5段階	飛鳥Ⅱ	7世紀前半
遠江Ⅳ期前半	H16	TK217	Ⅱ型式6段階 Ⅲ型式1段階	飛鳥Ⅱ	7世紀前半～中葉
遠江Ⅳ期後半	I17	TK46	Ⅲ型式2段階	飛鳥Ⅲ	7世紀後半
遠江Ⅳ期末葉	I17	TK48	Ⅲ型式3段階	飛鳥Ⅳ	7世紀末葉
遠江Ⅴ期前半	C2～I25	MT21	Ⅳ型式1段階	飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ	8世紀前半
遠江Ⅴ期後半			Ⅳ型式2段階	平城Ⅱ	8世紀前半



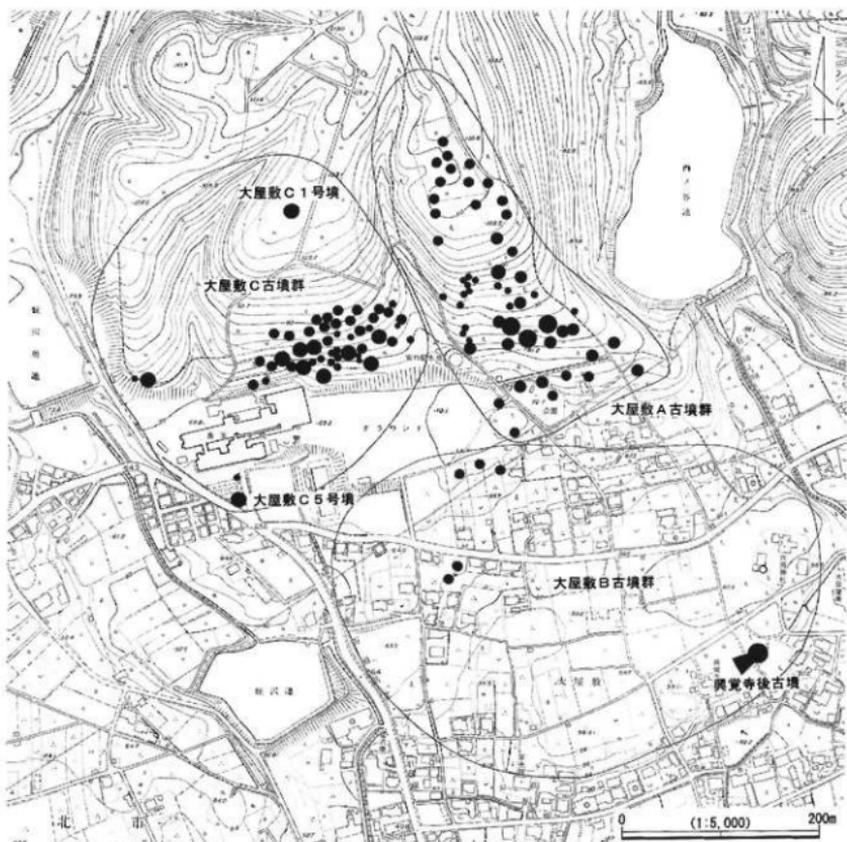
## 2 大屋敷古墳群の分布状況と概要

### (1) 浜北北麓古墳群の概要(第10図)

浜北市北部の北麓丘陵上に築造された古墳群は「浜北北麓古墳群」と総称され、天竜川が丘陵部を抜け、天竜川平野に現れる天竜市鹿島から浜北市宮口までの約5 kmの範囲に築造された古墳群である。東は浜北段丘面に築造された向山A古墳群や御馬ヶ池古墳群、丘陵斜面に築造された向野古墳群から勝栗山A・B古墳群、泉A・B古墳群、雲岩寺A～C古墳群、高根山A～C古墳群、大屋敷A～C古墳群と続き、西側に北新屋A・B古墳群や、新池東古墳などが所在している(第10図)。

### (2) 大屋敷古墳群の分布(第11図)

大屋敷古墳群は大屋敷A～C古墳群の総称として用いられており、浜北市宮口大屋敷地区に所在する古墳群を一括している。当古墳群は、浜北市立亀玉中学校の南側の平地に築造された大屋敷B古墳群



第11図 大屋敷古墳群分布図

と、鹿玉中学校北側の緩斜面に築造された大屋敷C古墳群、C古墳群と谷(今回の調査区でいうところの4区)を挟んで対峙する丘陵斜面に築造された大屋敷A古墳群に区分されている。

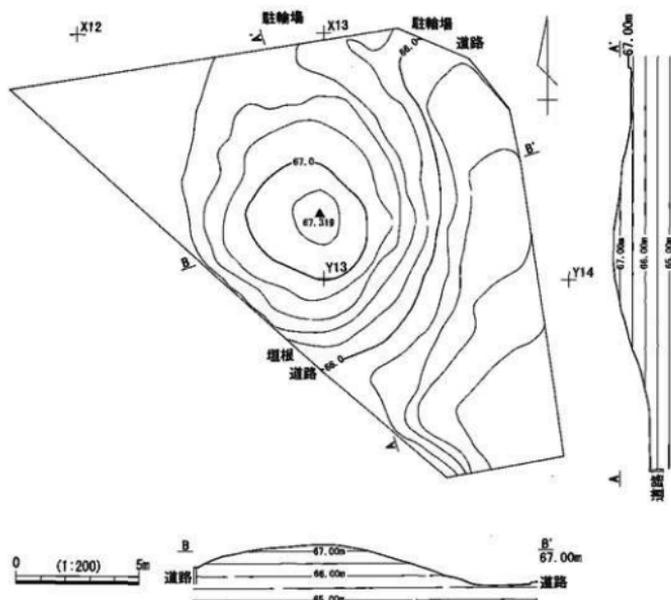
以下に、大屋敷古墳群内の主だった古墳について簡単に記述する。

**興覚寺後古墳** 大屋敷古墳群の所在する河岸段丘の先端部に築かれた主軸を東西に向ける全長35mをはかる前方後円墳であり、後円部には南に向かって開口する全長8.15m、玄室長5.6m、玄室幅2.5mをはかる片袖式横穴式石室を有する。横穴式石室内からは金銅装馬具、銀象嵌銅付大刀をはじめ須恵器などが出土している。これらの出土した須恵器等から遠江編年Ⅲ期前葉、6世紀前半～中葉に築造され、Ⅲ期中葉に追葬が行われたと想定されている(浜北市教委1988, 大谷2003)。

**大屋敷C4・5号墳** 大屋敷C5号墳(鹿玉中学校内古墳)は浜北市立鹿玉中学校内の校門近く、自転車置き場の南側に保存されている。現況測量調査の結果、道路により墳丘西側の一部が破壊されているが、南北12～13m、東西10～11m以上、高さ2mをはかる円(楕円)形の古墳であることが判明した(第12図、図版表紙)。周溝等の痕跡は確認できない。埋葬施設を推定するような指標は地表面には確認できないが、横穴式石室である可能性が高い。

大屋敷C4号墳はC5号墳の北側、自転車置き場の北側の垣根部分に位置しており、数列に並ぶ円礫が露出しているため、古墳と認定した。

**大屋敷C1号墳** 大屋敷C1号墳は丘陵の尾根上に位置しており、丘陵斜面に築造された大屋敷C古墳群中の他の古墳と距離的に離れている。分布調査では、古墳の中央部に石材が確認できることから、横穴式石室を埋葬施設とする古墳と想定されている。



第12図 大屋敷C5号墳現況測量図

### 3 大屋敷C古墳群の概要

#### (1)古墳の概要(第4表)

大屋敷C古墳群は、浜北北麓丘陵の緩斜面に築造された54基以上で構成される古墳群であり、今回発掘対象となった古墳51基はすべて横穴式石室を埋葬施設とする古墳であった。周溝が残存する古墳はすべて楕円形に近い円墳である。一部の古墳において盛土が残存しており、盛土は石室の裏込めと連続して盛られている一次墳丘であることが判明した。

横穴式石室は、古墳のほぼ中央に掘削された墓室内に築造されており、円礫と角礫を用いて構築されていた。石室規模が大型のものほど角礫を用い、小型のものほど円礫(河原石)を用いる傾向がある。石室は立柱石を有する擬似両袖式と、もたない無袖式がある。前者は羨門に立柱石を有する複室系(羨門区画形)擬似両袖式と、もたない単室系(玄門区画形)擬似両袖式に区分することができる。石室規模は、約0.5~8.0mをはかり、複室系擬似両袖式石室が大きく、無袖式石室が小さい傾向にある。

なお、古墳以外の遺構として、周囲よりやや低くなった部分に陥し穴を5基確認した。18号墳の東西の各1基、20号墳の西に1基、これらは約10m間隔で3基並列する。もう2基は50号墳と51号墳の間に掘削されていた。これらの配置から、陥し穴は1基単独で機能したわけではなく、計画的に配置された可能性が高いことが想定できる。

#### (2)遺物の概要(第4表)

大屋敷C古墳群の発掘調査した古墳51基のうち、埋葬施設が攪乱されたものを含めて、横穴式石室より須恵器をはじめとした遺物が出土した古墳は31基である。そのうち、鉄製品が出土した古墳10基(C18・19・21・42・46・49・50・51・53・54号墳)、玉類が出土した古墳7基(C17・19・20・22・39・42・51号墳)、耳環が出土した古墳1基(C42号墳)、須恵器が埋葬施設より出土した古墳28基、土師器が出土した古墳5基である。副葬品の主体は須恵器であり、出土点数の約8割を占める。出土した器種は、杯類が多数であり、杯蓋・杯身、返蓋・無台杯、摘蓋・有台杯、無蓋高杯、付付長頸壺・脚付長頸壺、罎、短頸壺、平瓶、フラスコ形瓶、甕(破片)などが出土している。土師器は少量出土しており、杯、盤、甕が出土している。

ガラス玉が出土した古墳は7基であり、C19号墳で黄緑色のガラス玉が出土したほかはすべて紺色である。鉄製品は、刀子(C19・42・49号墳)、鉄鏃(C19・21・42・46・50・51)、刀装具(C19号墳)、釘(C19・42・54号墳)である。

これらの出土遺物からみると、大屋敷C古墳群は7世紀前半に築造が開始され、多くが7世紀中葉~7世紀末葉に築造されたもので、8世紀前半に一部の古墳が築造され、追葬が行われたことが判明する。

なお、大屋敷C古墳群の範囲内に灰釉陶器焼成窯(大屋敷1号窯)と山茶碗・瓦焼成窯(大屋敷6号窯)が位置する関係で、古墳の墳丘や遺構外から灰釉陶器、山茶碗、瓦などが出土している。また、大屋敷C古墳群は大屋敷遺跡の範囲内であることから、打製石鏃5点、磨製石鏃1点、剥片2点、銅銭「太平通寶」1点、真鍮製?煙管1点が出土した。

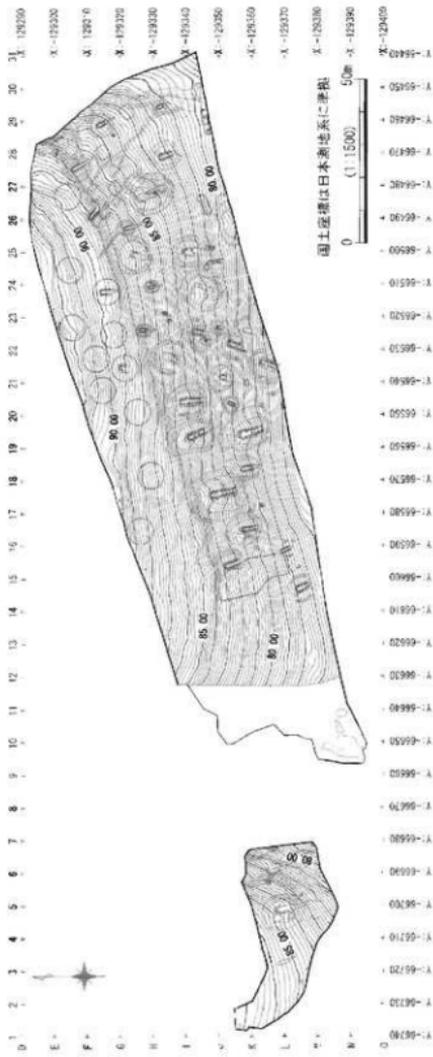


図13 大塚C古墳群調査地域の地勢図

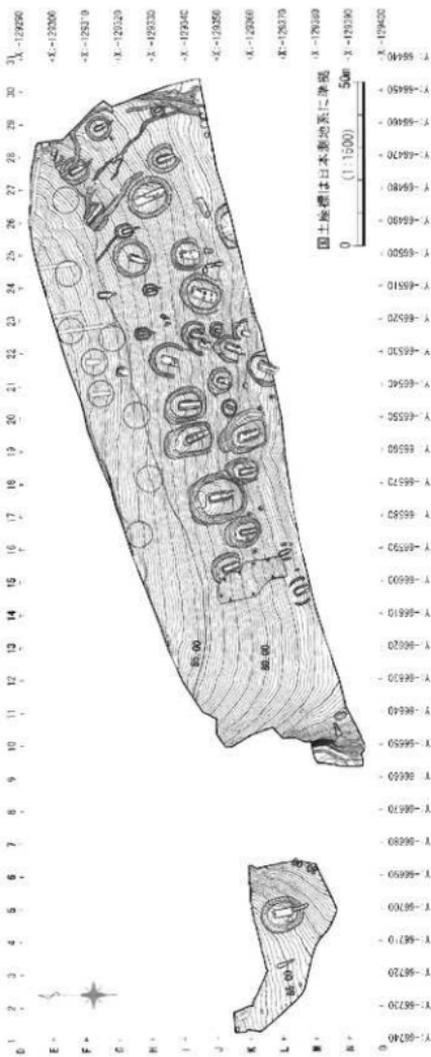


表14図 大塚遺C古墳群地影測画図

第4表 大屋敷C古墳群概要

古墳名	墳		墳丘施設	主軸方位	形状	室												
	墳形	墳径 (南北×東西)m				室 平面形	全長	室長	室高 最大幅	奥壁幅	玄門側幅	渡道長	渡道 最大幅	前後長				
C1	未調査				(未調査)													
C2	なし	--		N-22° 45' -W	横穴式石室か 横穴式土室	長方形	2.20+	2.20+	0.65+	0.60+	0.50+							
C3	円墳	9.1×7.0		N-10° 31' -W	横穴式石室	扇形?	4.40+	不明	1.10+	0.70+	不明							
C4	未調査				横穴式石室?													
C5	円墳	(12~13)×(10~11)			(未調査)													
C6	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C7	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C8	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C9	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C10	不明	改竄により調査		N-4° 35' -E	横穴式石室	扇形	1.75+	1.75+	0.80	0.70								
C11	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C12	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C13	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C14	不明	改竄により調査		N-3° 15' -W	単室系 擬似円柱式	長方形	3.20+	2.45	1.10	1.10	0.90	0.75+	0.80 前後					
C15	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C16	円墳	改竄により調査		--	横穴式石室(竪横)													
C17	円墳	8.0×7.5以上		N-21° 00' -W	単室系 擬似円柱式	扇形	4.45	2.65	1.20	0.85	1.10	1.80	1.15					
C18	円墳	6.6×5.5		N-10° 02' -W	単室系 擬似円柱式	扇形	4.60	3.25	0.85	0.40	0.75	2.25	0.85					
C19	円墳	13.3×10.6	墳丘内 石列	N-10° 31' -W	複室系 擬似円柱式	扇形	7.50	2.95	1.55	1.05	1.25	2.65	1.40	1.90				
C20	円墳	7.5×5.0		N-12° 15' -W	単室系 擬似円柱式	扇形	3.65	2.50	1.05	0.60	0.80	1.35	0.84					
C21	円墳	11.6×7.6	墳丘内 石列	N-24° 23' -W	単室系 擬似円柱式	長方形	5.45	3.25	1.30	1.05	1.10	2.20	1.40					
C22	円墳	9.4×7.0		N-5° 20' -W	複室系 擬似円柱式	扇形	6.30	2.80	1.35	1.20	1.20	2.30	1.20	1.20				
C23	円墳	7.5以上×5.3		N-15° 48' -W	横穴式石室	扇形?	3.60+	2.4 前後	1.40+									
C24	円墳	3.6×2.9		N-0° 02' -E	単室系 擬似円柱式	扇形	2.30	1.50	0.65	0.38	0.64	0.80	0.50					
C25	--	なし		N-20° 00' -E	無柱式	長方形?	1.00+	1.00+	0.40 前後	0.50								
C26	--	なし		N-17° 37' -E	単室系 擬似円柱式	扇形	1.35	0.90	0.45	0.35	0.40	0.45	0.35+					
C27	円墳	3.8×2.8		N-9° 14' -W	無柱式	扇形	1.90	1.90	0.75	0.50	0.50 前後							
C28	円墳	8.6×8.6		N-18° 55' -E	横穴式石室	扇形?	1.50+	1.50+	1.20									
C29	円墳	4.3×3.1		N-14° 46' -W	無柱式	長方形	2.25+	2.25+	0.80	0.60	0.75							

「+」は「以上」を示す。室高指数=室長÷室高最大幅、渡道長指数=渡道長÷室高、渡道幅指数=渡道最大幅÷室高最大幅

病室種	室			蓋		蓋頂等 有無	新葬品 (石室内)	墳丘・周溝出土遺物	築造時期	
	主要 階数	普通長 階数	普通幅 階数	形状	全長					最大幅
				長方形	2.90	1.30	有	(蓋頂)須惠部(無台杯2・横蓋2)	7世紀後半～ 8世紀前半	
				長方形	6.35	2.50	有	(石室)須惠部(横蓋1)；(石室欄土)須惠部(横蓋2・有台杯1・無蓋高杯1)；(石室欄土)須惠部(台付長頸蓋1・平瓶2・有台杯2)	7世紀後半～ 8世紀前半	
							破損	不明	(甕)須惠部(甕蓋1・杯身2・有台杯2・平瓶1・長頸蓋1)	7世紀後半～ 8世紀前半?
							破損	不明	(甕)須惠部(甕蓋1・無台杯?1・長頸蓋?・蓋縁口縁部1・無蓋高杯?1)	7世紀後半?
							破損	不明	(甕)須惠部(杯身2)	7世紀後半?
							破損	不明	(甕)須惠部(甕蓋1・横蓋1・有台杯1)	7世紀末～ 8世紀前半?
				長方形	2.50+	1.80	一部破損・ 床面攪乱	なし	(甕)須惠部(横蓋2)	8世紀後半?
							破損	不明	(甕)須惠部(甕蓋1)	7世紀後半
							破損	不明	(甕)須惠部(横蓋1・有台杯1・平瓶1・台付長頸蓋1・甕蓋1)	8世紀前半
							崩壊	不明	(甕)須惠部(無蓋高杯1)	7世紀後半?
2.23				長方形	3.85	2.00	一部破損・ 床面攪乱	(甕)土師器(杯1)	7世紀後半?	
							破損	不明	7世紀後半～ 8世紀前半?	
							破損	不明	7世紀後半～ 8世紀前半?	
2.21	0.68	0.96		長方形	5.10	2.50	有	玉壺(ガラス小皿2)・須惠部(杯身1・杯蓋2)・土師器(杯1)	(甕)須惠部(無蓋高杯1)	7世紀後半～ 8世紀前半
2.65	1.00	1.00		長方形	6.20	1.95	一部破損	(甕)鉄製品1	(須惠部)須惠部(甕蓋6・有台杯2・無蓋高杯1・甕蓋2)	7世紀後半?
1.40	1.90	0.90	0.90	長方形	6.80	3.05	有	玉壺(ガラス小皿26)・鉄製品(鉄釘3・刀子1・鉄鍬3・刀道具2)・須惠部(甕蓋4・有台杯1・無蓋高杯1)	(甕)須惠部(甕蓋4・横蓋1・無台杯1・有台杯6・無蓋高杯2・高杯1・平瓶2・玄奘瓶1)；(甕)須惠部(甕蓋2・フラスコ瓶1)・山家鏡1	7世紀前半～ 8世紀前半
2.28	0.54	0.80		長方形	4.35	2.10	有	玉壺(ガラス小皿24)・須惠部(台付長頸蓋1)	(甕)須惠部(横蓋1・有台杯2・樽?1)	8世紀前半
2.50	0.68	1.08		羽子板形	6.50	2.50	有	(石室)須惠部(横蓋1・無蓋高杯3・フラスコ瓶2・台付長頸蓋1・長頸蓋1)；(玄奘瓶土)須惠部(無蓋高杯1)・土師器(甕1)・鉄製品(横蓋1)	(甕)須惠部(横蓋1・無台杯?1・台付長頸蓋1)	7世紀後半～ 8世紀前半
1.20	2.07	0.82	0.89	長方形	7.10+	2.65	有	玉壺(ガラス小皿30)・須惠部(甕蓋9・有台杯5・杯蓋1・有台杯1・無蓋高杯3)・台付長頸蓋2・長頸蓋銅部1)・蓋縁口縁部2)	(甕)須惠部(杯身1・杯蓋1・横蓋1・甕蓋1・甕蓋1)；(甕)須惠部(甕蓋1・甕蓋1)	7世紀前半～ 8世紀前半
				長方形	6.00+	2.60	有	なし	なし	7世紀後半?
2.31				楕円長方形	2.90	1.70	無	(石室)須惠部(横蓋2・台付長頸蓋1)；(蓋頂)須惠部(無台杯3・有台杯3・フラスコ瓶1・長頸蓋1)	なし	7世紀末～ 8世紀前半
				長方形?	1.50+	1.30	有	(甕)須惠部(有台杯1)	なし	8世紀前半
2.00				楕円長方形	1.80	1.18	無	(甕)須惠部(杯蓋1)	なし	7世紀後半
2.53				楕円長方形	2.60	1.30	有	(甕)須惠部(無台杯?1)	なし	7世紀後半～ 8世紀前半
				長方形	6.00	1.90	有	(石室欄土)須惠部(甕蓋5・杯身6・甕蓋2・有台杯3)・有台杯4)・横蓋6・台付長頸蓋2)・平瓶2)	(甕)須惠部(甕蓋5・有台杯1・無台杯1・無蓋高杯?2)；(甕)須惠部(横蓋1・甕蓋1・横蓋2)	7世紀後半～ 8世紀前半
2.81				長方形	2.75	1.65	無?	なし	なし	7世紀後半～ 8世紀前半?

古墳名	墳 丘			主軸方位	形状	石							
	墳形	規模 (南北×東西)m	墳丘構造			石室 平面形状	全長	玄室長	玄室 最大幅	羨室幅	玄門幅幅	羨室長	側室 最大幅
C30	円墳	6.2以上×6.1以上		N-49° 26' -W	単室系 擬似円柱式	長方形	3.65	2.45	1.15	1.10	1.10	1.30	1.30
C31	円墳	6.5×5.3		N-27° 54' -W	単室系 擬似円柱式	脚座形	4.00	2.50	1.10	0.65	1.00	1.50	1.15
C32	円墳	2.0以上×3.0以上		N-72° 19' -W	横穴式石室	脚座形?	2.40+	2.40+	0.50+				
C33	円墳	6.0×5.0		N-27° 12' -W	単室系 擬似円柱式	脚座形	3.05	2.20	0.85	0.30	0.65	0.85	0.60
C34	なし	なし		N-26° 54' -W	無袖式	円形	0.55	0.55	0.50	0.30	0.35		
C35	円墳	3.2×3.05以上		N-27° 31' -W	無袖式	脚座形	1.95	1.95	0.70	0.60	0.55		
C36	円墳	7.0以上×6.8		N-16° 30' -W	単室系 擬似円柱式	脚座形	4.10	2.40	1.20	1.00	0.90	1.70	0.90
C37	円墳	10.8×9.0		N-22° 00' -W	横穴式石室	不明	破壊						
C38	円墳	14.0前後×9.0以上			調査以外のため 石室未調査	横穴式石室	未調査						
C39	円墳	7.4以上×7.0		N-2° 06' -W	単室系 擬似円柱式	脚座形	3.40+	2.60	0.90+	0.80	0.80		
C40	—	なし		N-7° 41' -W	無袖式	脚座形	2.10	2.10	0.60		0.55		
C41	—	なし		N-7° 41' -W	無袖式	長方形	1.30	1.30	0.75	0.70	0.75		
C42	円墳	10.8×8.8		N-17° 53' -E	単室系 擬似円柱式	脚座形?	7.10	2.80 前後	1.20+	1.20 前後		2.90 前後	1.40 前後
C43	円墳	7.3以上×6.4以上		N-12° 37' -E	単室系 擬似円柱式	脚座形	3.30	2.65	1.15	0.80	0.94	0.75	1.00 前後
C44	円墳	8.8以上×8.8		N-18° 46' -E	横穴式石室	不明	2.80+		0.90+				
C45	円墳	2.9×3.2		N-10° 52' -E	無袖式	脚座形	1.45	1.45	0.65	0.40	0.45		
C46	円墳	7.0以上×6.0		N-23° 20' -E	単室系 擬似円柱式	脚座形	4.30+	2.40	1.15	1.00	0.90	1.90	0.80+
C47	円墳	4.5以上×5.7以上		N-20° 46' -E	横穴式石室	脚座形?	2.35+	2.35+	0.70+	0.70+	0.90+		
C48	円墳	5.5×5.5		N-11° 26' -E	単室系 擬似円柱式	長方形	1.60+	1.60 前後	0.65	0.70+	0.80		
C49	円墳	3.7×4.3		N-22° 30' -E	単室系 擬似円柱式	長方形	2.30	1.80	0.60	0.45	0.45	0.50	0.6 前後
C50	円墳	10.3×8.0	外環 列石	N-15° 13' -W	単室系 擬似円柱式	脚座形	7.00	3.25	1.45	0.90+	1.25	2.30	1.20 1.45
C51	円墳	8.7以上×7.0		N-17° 57' -E	単室系 擬似円柱式	脚座形	5.20+	2.80	1.10	0.65	1.10	2.40+	1.10 前後
C52	なし	なし		N-31° 28' -W	無袖式?	奥室まり形	0.75+	0.75+	0.60	0.40			
C53	円墳	3.85以上×4.0		N-23° 24' -W	単室系 擬似円柱式	奥室まり形	2.80 前後	2.00 前後	0.80	0.60 以下	0.75	0.80	0.80
C54	円墳	5.4以上×6.4		N-28° 12' -E	単室系 擬似円柱式	長台形?	4.20	2.80	1.35	1.15	0.95	1.50	0.80

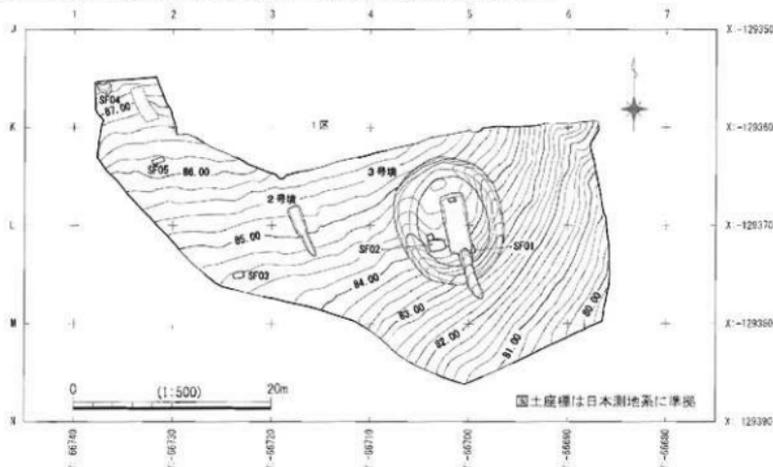
「+」「12°以上」を示す。玄室指敷→玄室長+玄室最大幅、羨室指敷→羨室長+玄室長、羨室幅指敷→羨室最大幅+玄室最大幅

前庭幅	石		形状	墓		盗掘等 有無	副葬品 (石室内)	墳丘・周溝出土遺物	築造時期	
	長さ 径数	幅 径数		長さ	最大幅					
2.13	0.49	1.13	長方形	4.50	2.50	有	(石室)須恵器(横置2・有台杯1・台付長柄蓋1)；(墓室)須恵器(長頸蓋1)；(周溝)須恵器(横置1)；(墳込め)須恵器(横置1)	(横置)須恵器(横置蓋2)・陶器(甕)	8世紀前半	
2.27	0.60	1.05	長方形	4.50	1.90	有	須恵器(平瓶1・無蓋高杯2)	(須恵)須恵器(杯蓋1・杯身?1・横置・短頸蓋1)；(墳込)須恵器(蓋蓋2・有台杯2・平瓶1)	7世紀後半～末葉	
			隅丸長方形	3.40+	0.80+	有	なし	なし	7世紀末葉～8世紀前半?	
2.59	0.39	0.71	長方形	3.70	1.65	有	須恵器(長頸蓋か平瓶1)	(須恵)土師器(脚付盤1)	7世紀後半～8世紀前半	
1.10			長方形	0.80+	1.00	有	なし	なし	8世紀前半?	
2.79			隅丸長方形	2.70	1.45	有?	なし	なし	7世紀後半～8世紀前半	
2.00	0.71	0.75	隅丸長方形	4.45	2.40	無?	(石室)須恵器(長頸蓋1・杯蓋2・脚台杯1・脚付長頸蓋1)；(石室覆土)須恵器(無蓋高杯1・平瓶1)	(須恵)須恵器(杯蓋1・杯身1+・長頸蓋1)	7世紀後半～末葉	
			長方形	9.80	2.70	有	須恵器(横置2・有台杯3・フラスコ瓶か埋1・長頸蓋4・脚付長頸蓋1・台付長頸蓋3)	(横置)須恵器(横置?・フラスコ瓶1)	7世紀後半～8世紀前半	
						有	未調査のため不明	(横置)須恵器(蓋蓋1・平瓶1・台付長頸蓋1・長頸蓋1・埋1)；(横置)須恵器(脚付長頸蓋1)	7世紀後半?	
			長方形	6.00	2.40	有	玉類(ガラス小玉1)・須恵器(蓋蓋1・横置1+・無蓋高杯1・蓋縁口縁部1・長頸蓋1)	(横置)須恵器(杯身1・杯蓋1・蓋蓋1・有台杯4・横置1・無蓋高杯1・蓋縁口縁部1・蓋縁口縁部1・長頸蓋1)；(須恵)須恵器(横置3・有台杯6・杯身1)	7世紀後半～8世紀前半	
3.50			長方形	2.40	1.15	有	(横置)須恵器(台付長頸蓋1)	なし	8世紀前半	
1.73			隅丸長方形	1.90+	1.30	無	須恵器(広口蓋1)	なし	8世紀前半～中葉	
1.10			長方形	8.20	3.30	有	(石室)須恵器(無蓋高杯1・台付長頸蓋1)；(石室覆土)須恵器(横置2・刀子・針心・玉類(ガラス小玉13)・須恵器(有台杯1・脚台杯?1・高杯脚蓋2・フラスコ瓶1・蓋縁蓋2)・土師器(蓋1)	(須恵)須恵器(横置4・有台杯4・無蓋高杯1+・平瓶口縁部1・平瓶口埋蓋部1)	7世紀末葉～8世紀前半	
2.22	0.29		長方形	3.90	2.40	無	(石室)須恵器(蓋蓋15・無台杯13)；(石室覆土)須恵器(蓋蓋1・短蓋か横蓋・無台杯1)	(横置)須恵器(横置1・有台杯4・広口蓋?)	7世紀後半	
			長方形	3.90+	2.15	有	なし	なし	7世紀後半	
2.23			長方形	2.20	1.40	無	なし	(須恵)須恵器(無台杯?)	7世紀末葉～8世紀前半?	
2.09	0.79		長方形	5.70+	2.70	有	(石室)須恵器(杯蓋8・杯身12・平瓶2)・鉄製品(横置1)；(石室前部土)須恵器(広口蓋1)	(須恵)須恵器(杯蓋1・短蓋1・平瓶1+埋1)	7世紀前半～後半	
			隅丸長方形	3.05+	1.65+	有	(石室覆土)須恵器(台付長頸蓋1・蓋縁口縁部1)	(須恵)鉄製品(不明鉄製品)	8世紀前半	
			隅丸長方形	3.50+	1.85	有	(蓋蓋)須恵器(平瓶2・横置口縁部1)	(須恵)須恵器(蓋蓋1・無台杯2・杯蓋1・無蓋高杯1・蓋縁口縁部1)・土師器(横置1)；(横置)須恵器(蓋蓋1・杯身1・長頸蓋2・埋蓋部1)	7世紀後半～8世紀前半	
3.60	0.28		長方形	3.15	1.20	無	鉄製品(刀子1)	なし	7世紀前半以降	
1.20	2.24	0.71	0.83	長方形	7.00	3.00	有	(石室)土師器(蓋1)・須恵器(フラスコ瓶1)；(石室覆土)鉄製品(横置1)	(須恵)須恵器(杯身3・短蓋1・無台杯1・横置?・有台杯?・平瓶4・無蓋高杯4・高杯?・埋蓋部1・蓋縁蓋3・長頸蓋3・埋蓋部1)	7世紀後半
2.55			長方形	6.50+	2.75	有	(石室)鉄製品(横置1)・須恵器(高杯1・平瓶1)；(石室覆土)須恵器(長頸蓋1)；(石室覆土)玉類(ガラス小玉1)	(須恵)須恵器(杯蓋1・杯身1・長頸蓋2・埋蓋部1)	7世紀末葉～8世紀前半	
			隅丸長方形	1.30+	1.10	有?	なし	なし	8世紀前半?	
			1.00 長方形	3.20	1.60	有	(石室)須恵器(台付長頸蓋1)・土師器(横置1)；(石室覆土)鉄製品(不明鉄製品)	(横置)須恵器(杯身1)	8世紀前半	
2.07	0.94	0.59	長方形	4.50	2.50	有	(石室)須恵器(横置1)；(石室覆土)須恵器(無蓋高杯1)	なし	7世紀後半	

## 第2節 1区の調査成果(大屋敷C2・C3号墳)

### 1 調査前の状況(第13図)

調査前の状況は松や樺などの樹木が繁茂しており、国定公園という名にふさわしい状況を示していた。樹木伐採後の調査前測量調査および現地の見解では、C3号墳のみ墳丘の高まりが確認でき、墳丘の中央部には盗掘による大きな穴が掘削されていた。C2号墳は高まりや盗掘坑などは全く確認できず、調査前地形測量図でも全く古墳を想定するような等高線は確認できない。



第15図 大屋敷C古墳群1区地形測量図

### 2 古墳

#### {1} C2号墳

##### ①調査前の状況

調査前の現況測量時には、後述するC3号墳と異なり、墳丘の高まりは全く視認できなかった。表土除去後新たに確認した古墳である。

古墳は、1区のほぼ中央、K3・L3グリッドに位置する。

##### ②墳丘・周溝(第16図、図版5・6)

前述したとおり、調査以前には高まりは確認することができず、重機による表土除去中においても全く確認できなかった。周溝の存在する可能性のある部分に試掘溝を掘削したが、周溝も確認できない。墳丘・周溝ともにすでに流出しているが、元来周溝が掘削されず、埋葬施設を覆う程度の盛土だけだった可能性もある。

##### ③埋葬施設(第18図、第5表、図版6)

埋葬施設は南南東に開口する横穴系の埋葬施設である。

遺存したのは敷石のみであり、壁面を構成する石材が残存しておらず、また、周囲からも石材が出土していないため横穴式石室とは断言できない。横穴式石室か、横穴式土壇(あるいは横穴式土室と呼称されることもある)の可能性もある。墓壇の掘方と敷石の間には左右ともに0.2~0.3m程度敷石が敷かれ

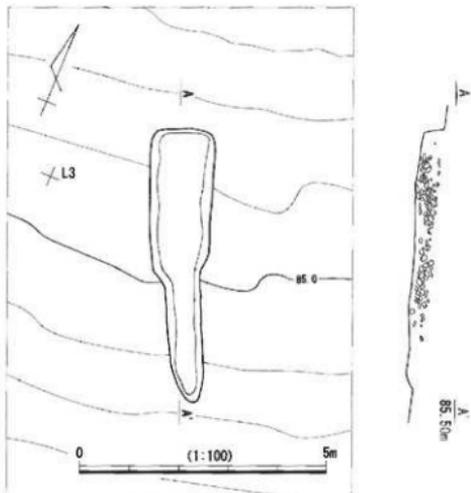
第5表 大屋敷C2号墳横穴系埋葬施設規模

主軸方位	N-22°48'-W	
石室全長	2.20m以上	
玄室長	2.20m以上	玄室最大幅 0.65m以上
玄室奥壁幅	0.60m以上	玄室玄門幅幅 0.50m以上

ない部分が存在している。遠江で確認されている横穴式土墳は墓域掘方付近まで敷石が敷かれているものが多いため、大塚敷C 2号墳はこの部分に0.2~0.3mの幅をもつ石材が据えられていた横穴式石室であった可能性が高いと推測している。

横穴式石室である場合には、側壁・奥壁ともに既に基底石まで抜き取られたもので、無袖式の可能性が高い。敷石の敷設範囲から、石室の内法は全長が主軸上で2.2m前後、幅は奥壁付近で0.65m以上、中央部で0.65m以上、入口付近で0.5m以上であったと推測する。敷石は、5~10cm前後の礫を敷設している。

**墓壇・墓道** 墓壇は、長方形を呈し、墓道に連結する。墓壇の全長は2.9



第16図 大塚敷C 2号墳地形測量図

mをはかり、奥壁側幅1.3m、中央部幅1.3m、入口側幅1.0mをはかる。敷石よりも0.4m下部まで掘削され、0.4m前後埋め戻し敷石を敷設している。敷石を敷設するために墓壇を埋め戻しているのは、墓壇と墓道を同時に掘削したが墓道床面と墓壇床面がほぼ同じ標高で雨水が流れ込んでしまうため、これを防ぐために墓壇を埋め戻し、水はけを考慮した可能性も想定できる。

墓道は墓壇より2.7m南まで掘削されている。深さは墓壇付近で0.3m、墓道南側で0.15mをはかる。

#### ④遺物の出土状況(第19図、図版6)

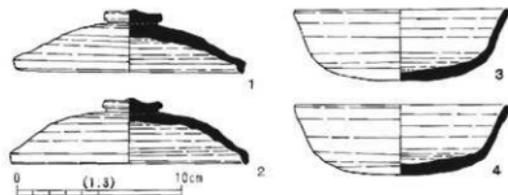
須恵器摘蓋 2点(1・2)・無台杯 2点(3・4)が女室すぐ南側の墓道から出土した。摘蓋は摘みを上にむけた状態で、無台杯は口縁部を上に向けた状態で出土した。正位で出土しているものの出土位置周辺から墓道にかけて小型の円礫が散在していることを考え合わせると、石室内部に置かれていたものが掻き出された可能性がある。

#### ⑤出土遺物(第17図、第47表、図版116・117)

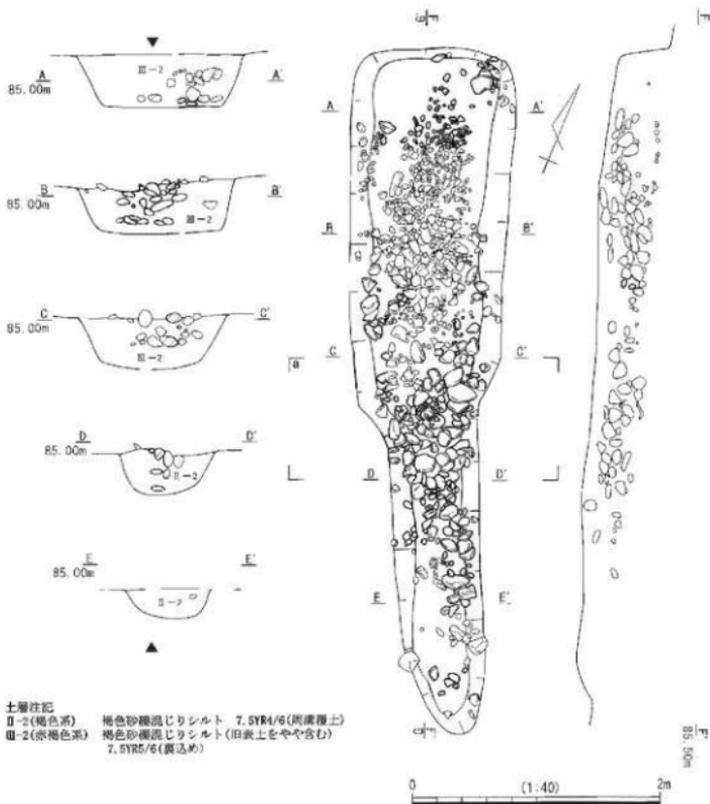
須恵器摘蓋 2点(1・2)、無台杯 2点(3・4)が出土している。摘蓋は大きな宝珠摘みを有し、天井部から外方に向かって開き、口縁端部を垂下させる形状を呈する。摘蓋の器高は約4.0cm、口径約14.0cm、摘み幅約3.5cmをはかる。無台杯は底部からやや外側に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径13.0cm、器高4.2、4.3cmをはかる。

#### ⑥小結

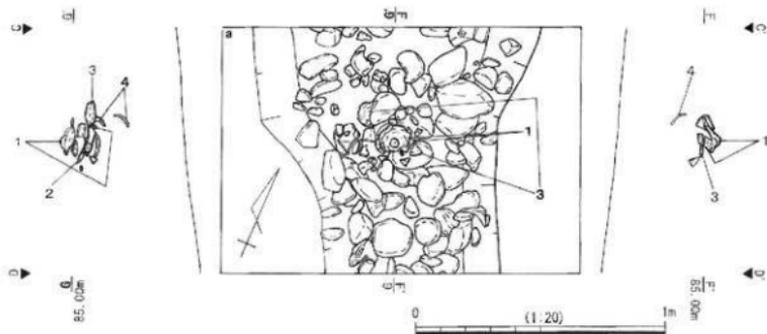
出土した須恵器の形態的な特徴から、遠江編年IV期末葉~V期前半、7世紀末葉~8世紀前半に位置づけることができる。出土した須恵器には時期差はないことから追葬が行われた可能性は少ない。



第17図 大塚敷C 2号墳出土土器実測図



第18図 大屋敷C 2号墳横穴系埋葬施設実測図



第19図 大屋敷C 2号墳墓室遺物出土状況図

## (2) C3号墳

## ①調査前の状況(第20図)

調査前は自然の雑木林であった。分布調査時に確認されていたとおり、墳丘状の高まりと、その中央部に円形の大きな窪みが視認でき、盗掘を受けた古墳であることが明白であった。

古墳はC2号墳の東側10mの、K4・5、L4・5グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第21・22図, 第47表, 図版5・7)

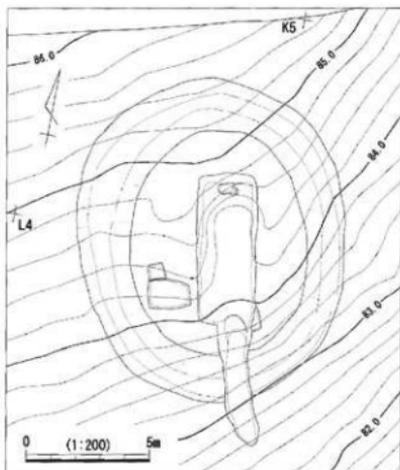
表土除去の結果、盛土は残存しておらず、既に出土したものと推断できる。墳丘は旧地形のやや高まった部分を利用し、周囲に周溝を巡らせることで、墳丘を区画している。周溝は全周しており、墳形は石室の主軸方位(南北)に長い楕円形を呈する。周溝は、北側で幅2.2m、深さ0.3m、西側で幅2.2m、深さ0.4m、東側で幅1.6m、深さ0.2m、南側で幅1.9m、深さ0.15mをはかる。墳丘規模は、南北9.1m、東西7.2mをはかる。墳丘南側は標高82.8m、北側は84.8mをはかり、現状での見かけ上の高さ(周溝との比高差)は2mである。

なお、周溝南側から須恵器摘蓋1点(5)、有台杯1点(6)が出土している。出土した位置から石室内にあったものが掻き出された可能性もある。

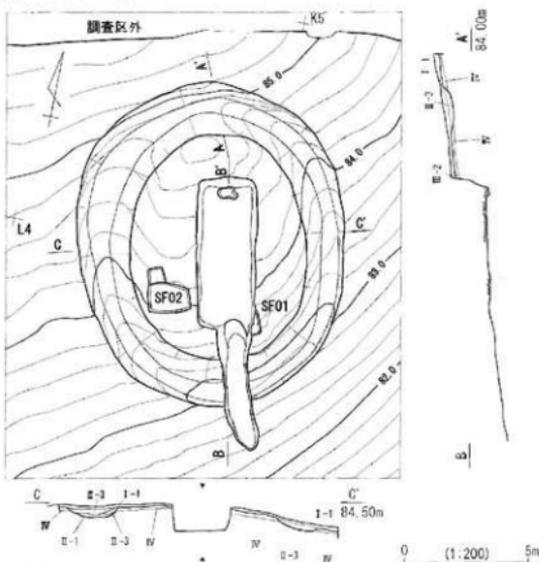
摘蓋(5)は天井部が欠損しており、口縁端部はほぼ垂直に折り曲げられる。有台杯(6)は底部が高台よりも突出しないものである。5・6ともに遼江編年V期前半に位置づけることができる。

## ③埋葬施設(第24図, 第6表, 図版7・8)

埋葬施設は古墳の中央に築造された、ほぼ南に向かって開口する横穴式石室である。石室 石材の抜き取りが著しく行われ、基底石までは完



第20図 大塚数C3号墳調査前測量図



土層注記  
 I-1 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(表土)  
 II-1 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR5/6(周溝覆土)  
 II-3 (褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝覆土)  
 III-2 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(割取土を多く含む) 7.5YR5/6(裏込め・盛土)  
 IV 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/4(田表土)

第21図 大塚数C3号墳墳丘測量図

全に取り除かれており、左右両側壁1石ずつ残存するのみであった。

墓壇の北側と中央の二箇所に敷石が遺存しており、北側は南北1.1×東西1.0mの長方形の範囲に、中央のものは南北1.0×東西0.6mの範囲に敷設されている。これらの敷石が原位置を保持しているかと仮定するならば北側の敷石と南側の敷石を比較すると、南側の敷石がやや東側に偏ることから右片袖式石室であった可能性があるが、石材が抜き取られている現状では断定はできない。

玄室の平面形は残存する敷石の幅が中央と奥壁ではほぼ等しいため長方形であった可能性が高いが、左側壁最奥の石材が斜めに据え置かれていることから胴張りであった可能性も残る。

横穴式石室は、残存する両側壁の石材が角礫であり、攪乱坑内より出土した礫も角礫が多いことから、主に角礫を用いて構築された可能性が高い。

残存する基底石は平坦面を内側に向ける小口積みである。

墓壇・墓道 墓壇は地山を標高83.4m付近まで掘削し、深さは北側で約1.3m掘り込まれている。平面形は長方形を呈し、古墳の外につづく墓道に連結する。墓壇規模は墓壇長6.35m、墓壇幅2.5mをはかる。墓道との連結部分は均等な両袖にはなっておらず、左袖側がわずかに袖を形成するのみである。本来左側は袖がなかった可能性もあり、敷石の残存状況も考慮すると、C3号墳は右袖式石室である可能性も残るが、遠江において7世紀前葉以降の片袖式石室は確認できないことから、擬似両袖式石室であった可能性が高い。

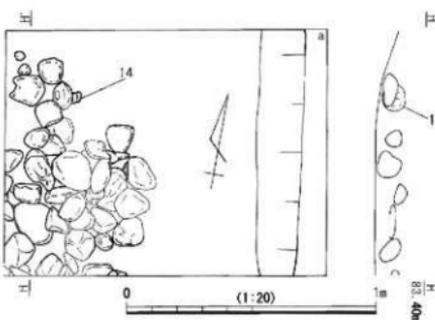
墓道は南東に向かって伸延しており、墓道長5.1m、墓道幅1.4m、墓道深さ0.55mをはかる。

#### ④遺物の出土状況(第23図、図版8)

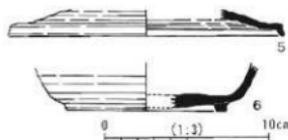
奥壁を掘るための土坑攪乱土の中から平瓶(15)、南側の敷石の北側から甕(14)が横倒しの状態で出土したが、ともに原位置を保持していない。また、墳丘内の墓道から底面より0.3m浮いた状態で摘蓋(7・8)・右台杯(10)・高杯1点(11)が出土した。さらに埋葬施設の攪乱土中から須恵器台付長頸壺1点(13)・右台杯1点(9)、平瓶1点(12)が出土した。

#### ⑤遺物(第25図、第47表、図版116~118)

出土した遺物はすべて須恵器である。南側敷石横から甕1点、墓道から摘蓋2点、右台杯1点、無蓋



第23図 大屋敷C3号墳横穴式石室遺物出土状況図



第22図 大屋敷C3号墳周溝出土土器実測図

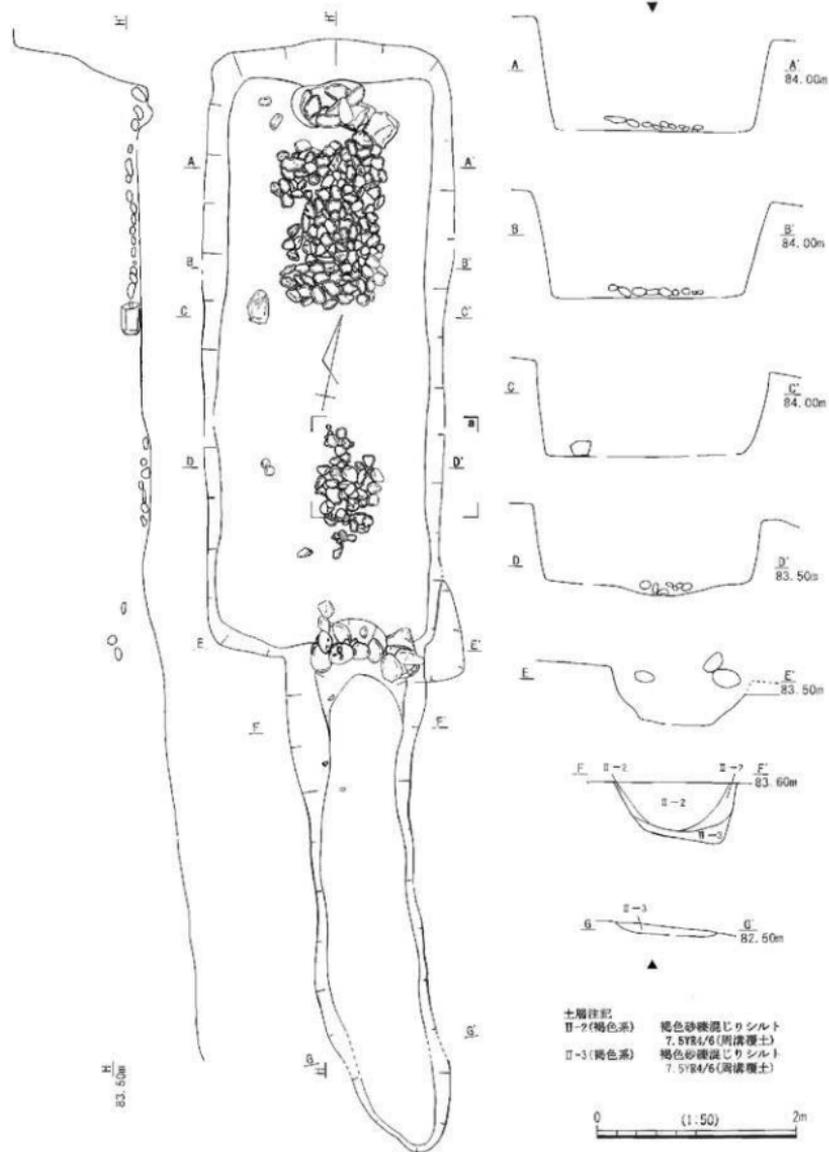
第6表 大屋敷C3号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-10° 57' -W		
石室全長	4.40m以上		
玄室長	不明	玄室最大幅	110m以上
玄室奥壁幅	0.70m以上		

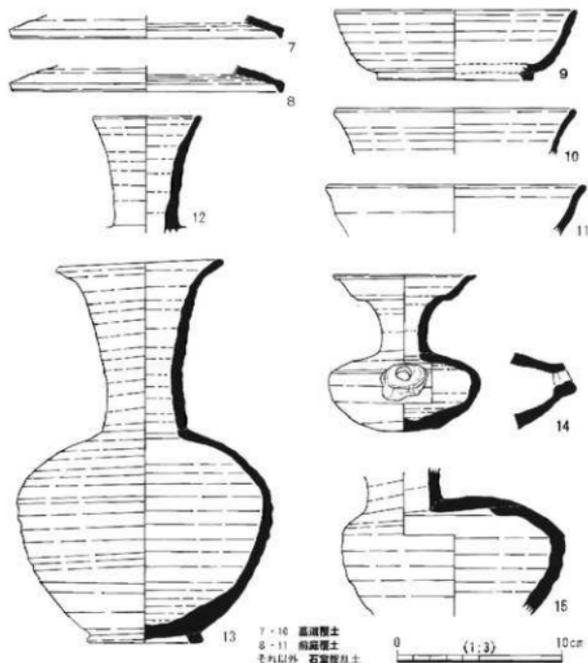
高杯1点、横穴式石室攪乱土内から右台杯1点、台付長頸壺1点、平瓶2点が出土している。

摘蓋(7・8)は大井部から八字形に広がった後、口縁部で垂直に垂下するものであり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径は約16.5cmをはかる。右台杯(9・10)は底部から外上方に向かって立ち上がるもので口縁端部は丸く仕上げられている。口径は約14.5cmをはかる。

甕(14)はやや肩の張る楕円形の体部に、嘴状注口が取り付けられたもので、頸部は



第24図 大塚敷C 3号墳横穴式石室実測図



第25図 大塚遺跡C3号墳横穴式石室出土土器実測図

7・10 黒瀬群土  
8・11 須恵群土  
それ以外 石室群土

ほぼ直立する。その上部は、急激に外方に向かって折れ曲がった後、さらに外上方に向かって立ち上がり、二重口縁を呈する。口縁端部はほぼ水平に外側に向かって引き出されている。器高9.5cm、口径8.6cm、胴部最大径9.2cmをはかる。

平瓶(15)は口縁部と底部が欠損している。肩部は丸みを帯び、最大径は肩部にある。胴部を作った後、円盤で一端口縁部を塞いだ後、頸部を取り付けるために円孔を穿ち、その縁口縁部に頸部を取り付けている。なお、後述する平瓶すべてはこの方法により頸部を接合している。12は頸部～口縁部片であり、頸

部から口縁部に向かって逆ハ字形に開き、口縁端部はやや内傾する平坦面に仕上げられている。

無蓋高杯(11)は、口径15.6cmをはかる。杯底部から彎曲しながら立ち上がった後、口縁直下で段をつけ、そこから斜め上に向かって開く形状を呈している。

台付長頸壺(13)は、やや肩の張る球形形であり、口縁部は頸部から逆「ハ」字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。肩は丸みを帯びており、胴部はのためが日立つ。器高23.3cm、口径9.8cm、胴部最大径15.5cm、高台径7.0cmをはかる。

#### ⑥小結

出土した須恵器・有台杯・摘蓋・台付長頸壺は遠江V期前半に位置づけることができ、逃が遠江IV期後半に位置づけることができるとすれば、C3号墳は遠江IV期後半、7世紀後半に築造され、遠江V期前半、8世紀初頭に追葬が行われた可能性が高い。

## 3 古墳以外の遺構と遺物

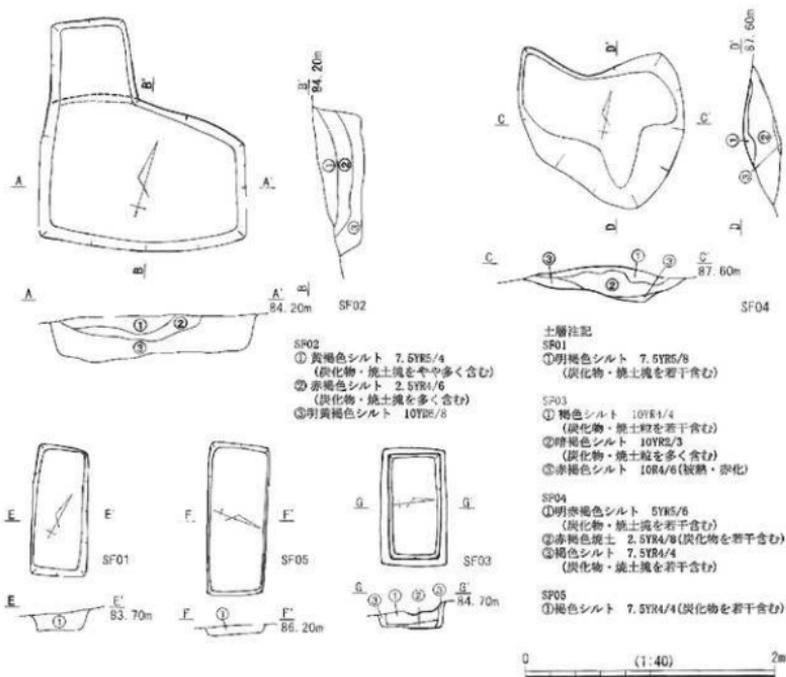
## (1) 遺構(第26図, 図版9)

1区では上述した古墳2基のほかにも土坑5基(SF01～SF05)を確認している。以下、番号順に報告する。

**SF01** SF01は、C3号墳の墳丘の南東側を破壊して掘削された長方形の土坑である。C3号墳の墓域を一部破壊して掘削されており、石室が崩壊してから掘削されたものである。東西0.45m、南北1.05m、深さ0.15mをはかる。焼土塊や炭化物が含まれるが用途は不明である。出土遺物はなく、帰属時期は古墳時代以降であるが明確ではない。

**SF02** SF02は、C3号墳の墳丘南西側を破壊して掘削されたL字形の土坑であるが、本来2基の長方形の土坑で、まず長軸を南北に採る土坑が掘削され、続いて長軸を東西に採る土坑が掘削されたことが判明した。前者は、南北0.7m以上、東西0.65m、深さ0.3mをはかり、後者は東西1.6m、南北1.25m、深さ0.4mをはかる。ともに焼土塊や炭化物を多く含むが用途は不明である。火葬墓の可能性があるが断定はできない。出土遺物はなく、帰属時期は古墳時代以降であるが詳細な時期は不明である。

**SF03** SF03は、C2号墳の西約7mの所に掘削された焼土坑である。内部には炭化物が多く含まれる土砂が堆積していた。四壁は被熱・赤化しているものの底部は赤化していない。東西0.85m、南北0.42m、深さ0.2mをはかり、赤化部の厚さは4cm程度である。火葬墓の可能性もあるが出土遺物はないため、時期・用途ともに不明である。



第26図 1区土坑実測図

**SF04** SF04はC 2号墳の北西側約20m、1区の北西隅角部に掘削された土坑である。不整形であり、東西1.35m、南北1.4m、深さ0.3mをはかる。内部には焼土塊を多く、炭化物を若干含むが、出土遺物はなく、用途不明である。

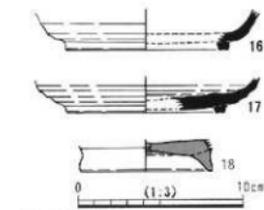
**SF05** SF05はC 2号墳の北西側13mのところ掘削された長方形の土坑であり、底部を検出した。東西1.25m、南北0.45m、深さ0.08mをはかる。出土遺物はなく、用途不明である。

## (2) 遺構以外の出土遺物(第27図, 第47表, 図版117・170)

C 3号墳周辺から須恵器有台杯2点(16・17)、灰釉陶器碗の底部片1点(18)が出土している。

**須恵器 須恵器有台杯(16・17)**は小片であり、器高・口径は不明である。高台径は約9.5cmをはかる。底部は高台よりも突出しないと想定する。時期は遼江V期前半、8世紀初頭に位置づけることが可能である。

**灰釉陶器 灰釉陶器碗(18)**は、高台径8.0cm、高台高1.0cmをはかり、底部内面には静止ナデ調整、底部は糸切り後ナデ調整である。高台は八字形に垂下するもので、二等辺三角形を呈する。こ



第27図 1区遺構外出土土器実測図

の形態・特徴は第V章で後述する大屋敷1号窟出土灰釉陶器碗と類似することから、1区の東側の谷部分(2区)に位置する大屋敷1号窟の生産品である可能性が高い。時期は11世紀前半～後半と推測する。

### 第3節 3区の調査成果(大屋敷C6～C54号墳)

#### 1 概要

##### (1) 調査前の状況(第13図, 図版10)

調査区北側(斜面上部)は静岡県西部農林事務所により檜の改植が行われ、檜林となっていた。調査区南側は赤松や樫などの自然林が繁茂しており、天竜奥三河国定公園の南端としての景観を呈していた。

今回の調査対象範囲には、浜北市教育委員会による分布調査の結果、古墳と認定できる高まりが数箇所において確認され、上述したように1区に1基確認され、3区には7基が確認されていた。調査前の現況測量調査の結果、3区には既知の7基のほか、これ以外に5基が確実に存在することが想定できた。したがって、3区には最低12基の古墳の存在が想定できた。また、これらの古墳は7～8m前後の墳丘規模を有する円墳であることを予測した。さらに、その高まりの中心には直径1mの大きな盗掘坑が確認でき、この盗掘坑の内部には奥壁と推測できる角礫や、側壁に使用された角礫や円礫が確認できることから、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが推測できた。

##### (2) 古墳の分布(第14, 28～31図, 図版10～13)

表土除去の結果、3区内には檜の改植により破壊された古墳9基、周溝・墳丘が残存する古墳32基、周溝・墳丘が流出した古墳あるいは築造当初より周溝を伴わないと推測する古墳8基の、総数49基を確認した。

これらの49基の古墳は等間隔に所在するわけではなく、古墳の周溝が一部共有されるもの(C19・C20号墳, C43・C44号墳, C46・C47号墳)や、隣接するため周溝の形を変形させているもの(C21・C22号墳)がある。また、3区東側は、古墳の間隔が西側に比べてやや粗である。また、C6・C17・C54号墳の西側の緩やかな斜面地には、東西約30mに渡って古墳は存在していない。一方、東側は谷底に向かって傾斜が急になる部分にも一部古墳が築造されている。築造に当たって何らかの制限あるいは墓道などによる規制があった可能性が高い。

古墳はすべて横穴式石室を埋葬施設としており、周溝が残存するものはすべて円(楕円形)墳であった。なお、古墳の番号は斜面上部西より東に向けて「己」字順に番号を振った。

#### 2 古墳

##### (1) C6～9・11～13・15・16号墳(破壊された古墳, 第14, 28～32図, 図版14, 118・119)

分布調査により古墳の存在が想定された箇所は確認調査を行わず本調査の対象とし、それ以外の部分は古墳の基数を確認するために、確認調査の対象範囲とした。確認調査は5m間隔で試掘溝を設定し調査を実施した。発掘調査前より浜北市教育委員会 久野正博氏から、調査区の北側部分は檜の改植が行われたが、その深度が不明であることから古墳(横穴式石室)の下部(基底石)が残存している可能性があることを教示された。この指摘を考慮して確認調査を進めたところ、円礫・角礫が集中する箇所を10箇所程度確認した。また、この周囲から須臾器の破片が出土したことから天井が崩落した横穴式石室を有する古墳が10基程度存在することを想定し、本調査では全面的に表土除去を実施した。その結果、予想以上に石材が散乱していたため、石材が集中する箇所に試掘溝を設定し調査を進めたところ、これらの部分は重機により檜の改植が実施され、掘削が深いところでは地表下約1mまで及んでいたため、古墳は大部分が破壊されていたことが判明した。ただ唯一幸運であったのは、一帯をかき混ぜるような改植ではなく、下の土と上の土を入れ替える程度であったために、横穴式石室は破壊されていたものの本来築造されていた場所がおおよそ判明したこと、改植の深度が浅くC10・C14号墳は一部が破壊されていたが、石室が遺存していたことである。

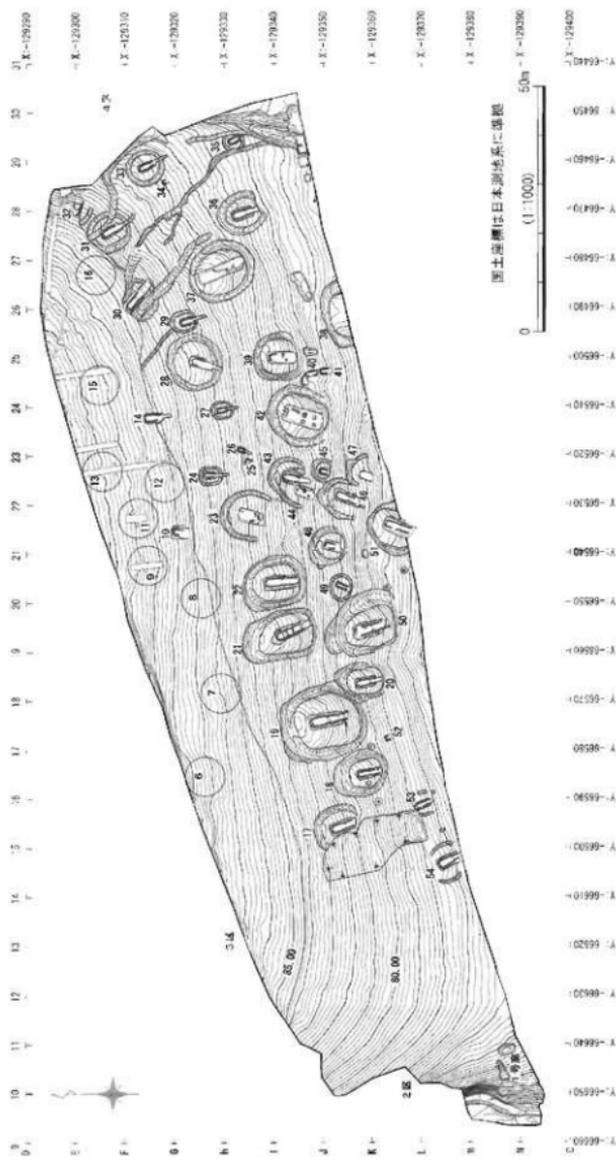
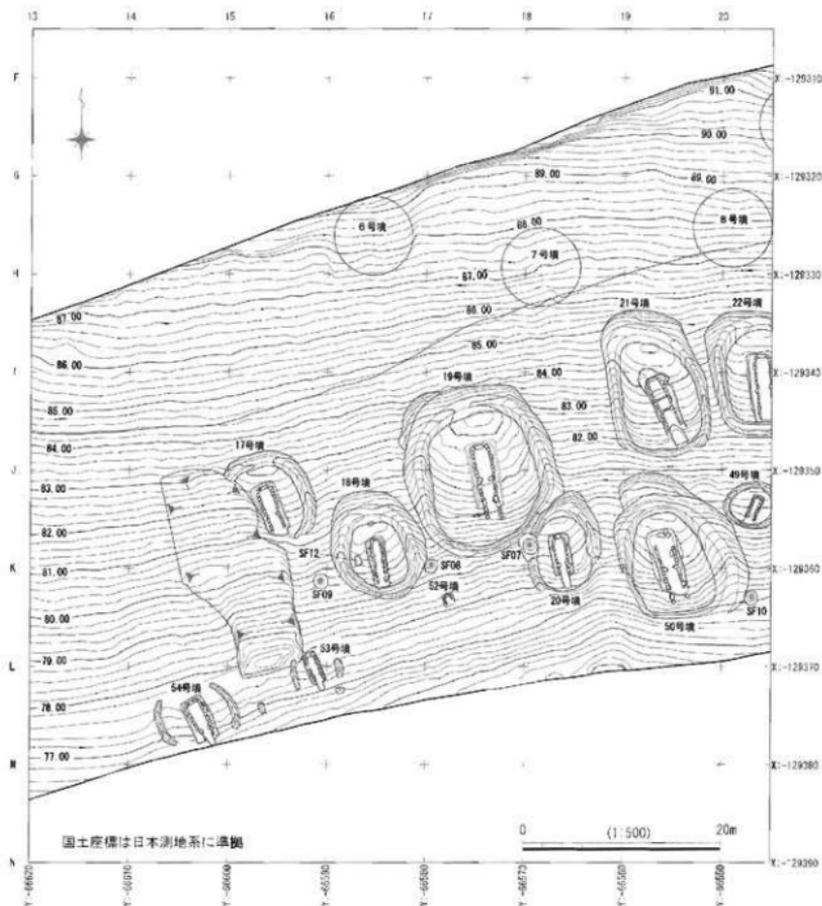
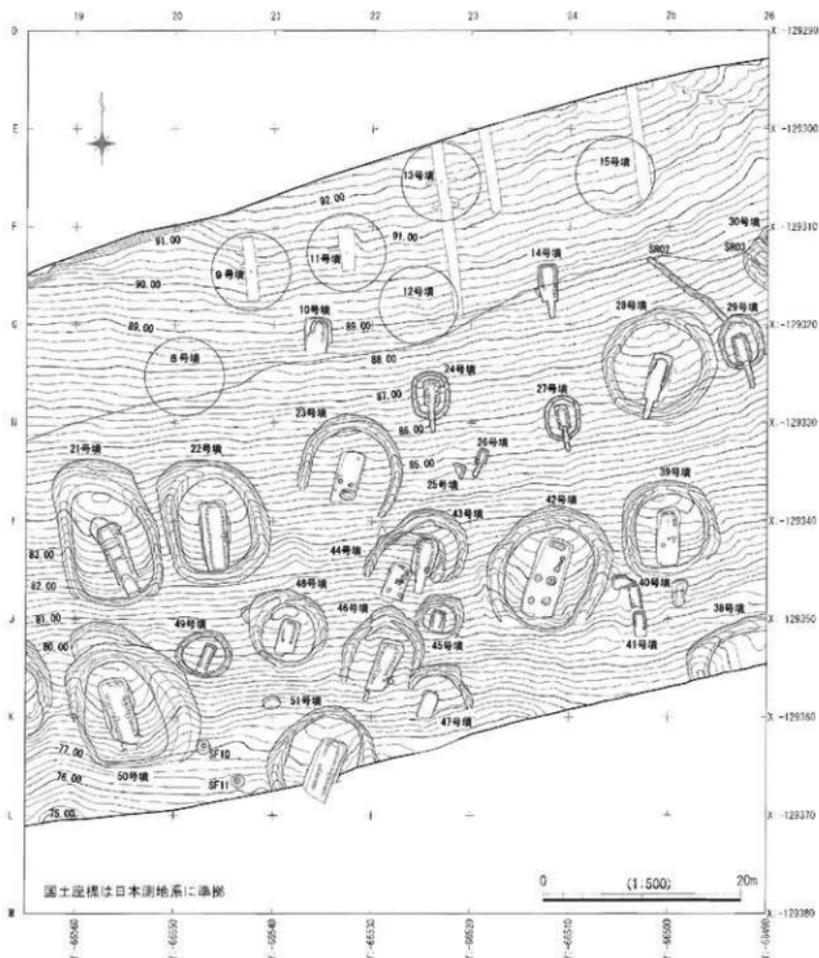


図28 大塚地区古墳群3区域の地形図



第29図 3区地形測量詳細図①

なお、この部分において横穴式石室を認定する条件として、円礫・角礫が集中して確認できるか、あるいは石材の周囲から遺物が出土する場所とした。この条件を満たす箇所は9箇所存在したため、改植された部分には少なくとも9基の古墳が存在したと推断した。全体図と詳細図に横穴式石室を有する古墳が存在した箇所に古墳番号を付加するとともに丸(図中、○)で示した。ここでは、その周囲から出土した須恵器について報告する。なお、楡の植林のための改植範囲は第14図および第28～31図に実線で記入した。また、○は大屋敷C古墳群の平均的な規模である直径8mで囲っている。

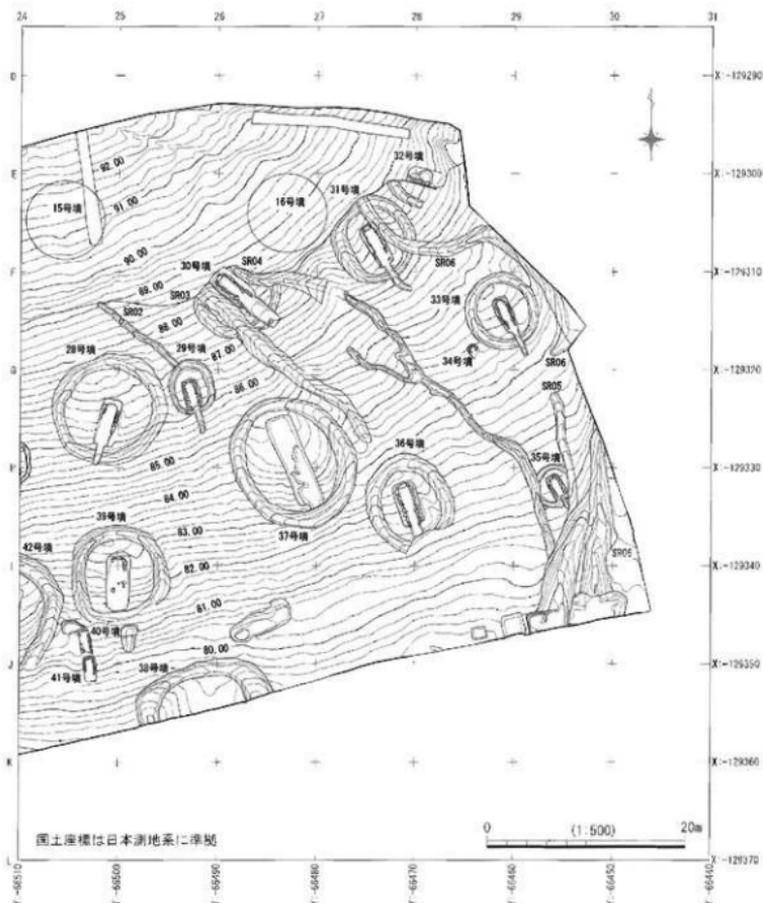


第30回 3区地形測量詳細図②

① C 6号墳

C 6号墳は、C19号墳の北側、G16グリッドに位置していた。円礫・角礫が確認できることから、円礫・角礫を併用する横穴式石室であった可能性が高い(図版14)。

C 6号墳の周囲からは須恵器返蓋1点(19)、杯身2点(20・21)、有台杯2点(22・23)、長頸壺1点(25)、平瓶1点(24)が出土している(第32回、図版118)。返蓋は、口縁部片であり、返りは口縁部より内側に入るものである。杯身(20・21)は底部の破片であり、21はへら記号「×」が描かれている。有台杯は底部からはほぼ垂直に立ち上がるもので、底部は高台とほぼ同じ高さまで下がる。長頸壺(25)は頸部から逆



第31図 3区地形測線詳細図①

八字形に開きながら立ち上がる。平瓶(24)は胴部片であり、肩は丸みを帯びる。これらの須恵器がC 6号墳に伴うものと仮定するならば、遠江Ⅳ期後半に築造され、遠江Ⅴ期前半に追葬された可能性がある。

### ②C 7号墳

C 7号墳は、C 6号墳の東側約15m(中心の間隔)、G17・18、H17・18グリッドに位置している。円礫・角礫が確認でき、円礫・角礫を併用する横穴式石室であった可能性が高い(図版14)。

C 7号墳の周辺からは返蓋1点(26)、無台杯1点(28)、無蓋高杯1点(27)、長頸壺2点以上(30~32)、壺瓶類口縁部1点(29)が出土している(第32図、図版118)。これらの遺物がC 7号墳に伴うと仮定するならば、築造時期は遠江Ⅳ期後半、7世紀後半に位置づけることが可能である。

## ③C 8号墳

C 8号墳は、C 7号墳の東側約20m、G19・20グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が存在しており、両者を併用する横穴式石室であった可能性が高い。

出土遺物は石材の周囲より須恵器杯身2点(33・34)が出土した(第32図、図版119)。口径は約8.5cmをはかる。これらの遺物がC 8号墳に副葬されたものであるならば、遠江Ⅳ期前半、7世紀前半に位置づけることが可能である。

## ④C 9号墳

C 9号墳は、C 8号墳の北東方向約15m、F20・21グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が確認できる。両者を併用する古墳であった可能性が高い。

遺物は石材の周囲から出土しており、須恵器返蓋あるいは摘蓋1点(35)、有台杯1点(36)が出土した(第32図、図版119)。出土した須恵器がC 9号墳に副葬されたとするならば、遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期前半、7世紀末～8世紀前半に築造されたか、追葬が行われた可能性が高い。

## ⑤C11号墳

C11号墳は、C 9号墳の東側約10m、E21・22、F21・22グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が確認できる。両者を併用する古墳であった可能性が高い。

遺物は石材の周囲から須恵器脚付長頸壺1点(37)が出土している(第32図、図版119)。脚付長頸壺は脚部が短く、肩は張るものの丸みを帯びている。肩部の上下に刺突文が施されている。これらの遺物がC11号墳に伴うものとする仮定が正しければ、遠江Ⅳ期後半、7世紀後半に築造された可能性が高い。

## ⑥C12号墳

C12号墳は、C11号墳の南東約8m、F22、G22グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が確認できる。両者を用いた横穴式石室であった可能性が高い。

C12号墳の周辺からは須恵器摘蓋1点(38)、有台杯1点(39)、平瓶1点(40)、台付長頸壺あるいは広口壺1点(41)が出土した(第32図、図版119)。41は肩が張り、肩は鋭角である。38は天井部からハ字形に開いた後、口縁端部でほぼ垂直に垂下する。これらの遺物がC12号墳に副葬されたとする仮定が正しければ、遠江Ⅴ期前半、8世紀前半に築造された可能性が高い。

## ⑦C13号墳

C13号墳は、C12号墳の北側約15m、E22・23グリッドに位置する古墳で円礫・角礫が確認できるため、両者を併用した横穴式石室であった可能性が高い。

周囲からは無蓋高杯1点(42・43)以上が出土している(第32図、図版13・119)。42は杯部破片で、口縁部直下は強くナダられ、口縁端部は内傾する斜面に仕上げられている。43は脚部の破片であり、ハ字形に開いた後、端部を垂直に垂下させるものである。これらがC13号墳に伴うものとするれば、遠江Ⅳ期後半、7世紀後半に築造された可能性が高い。

## ⑧C15号墳

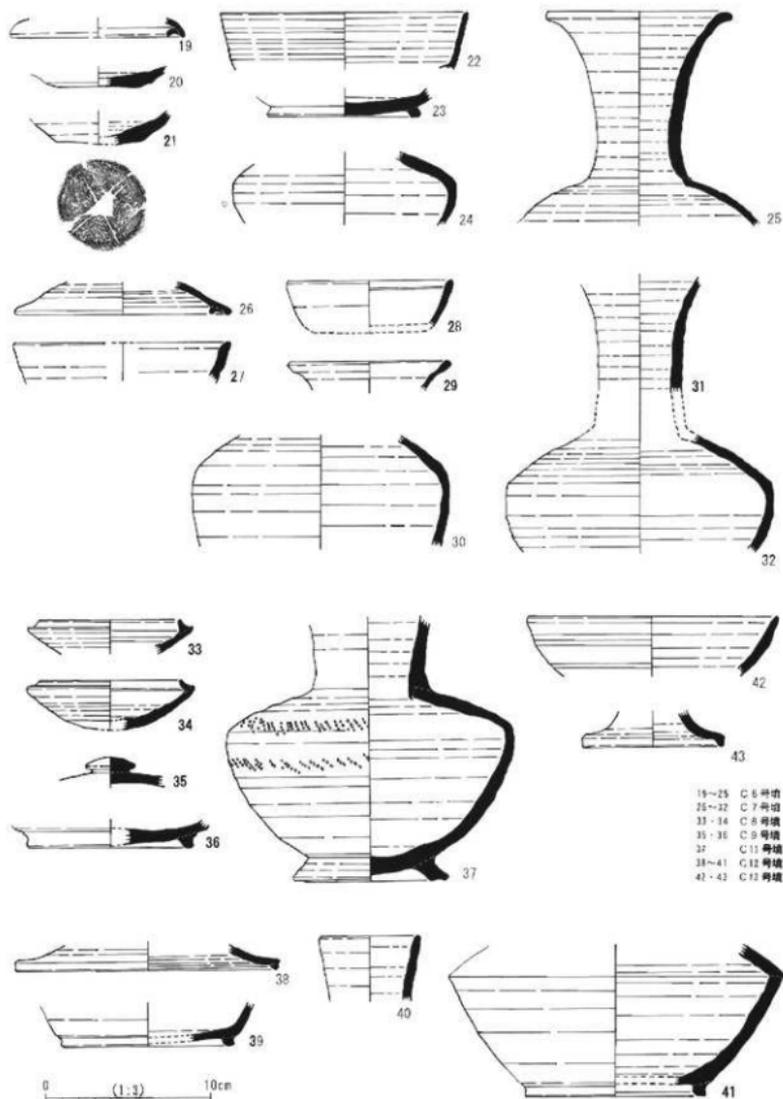
C15号墳は、C13号墳の東側約15m、E24グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が確認できる(図版14)。したがって、両者を用いて構築した横穴式石室を有する古墳であった可能性が高い。

周囲からは出土遺物はなく、築造時期等は不明である。

## ⑨C16号墳

C16号墳は、C15号墳の東側約20m、E26・27グリッドに位置する古墳で、円礫・角礫が確認できることから、両者を併用した横穴式石室を有する古墳であった蓋然性が高い。

周囲から遺物は出土しておらず、築造時期等は不明である。



第32図 大塚敷C 6~9・11~13号墳出土土器実測図

## (2) C10号墳

## ①調査前の状況

調査前には古墳を想定させるような高まりは確認することができなかった。確認調査時に、石材が集中することから横穴式石室の存在を想定した。

本調査に入り、精査を進めると棺の改植が実施され表層が破壊されており、当初は上記の9古墳のようにすべて破壊されていると考えていた。しかし、試掘溝を設定し、下部まで掘り進めたところ、横穴式石室の一部が残存していることが判明した。

古墳は、F21、G21グリッドに位置している。

## ②墳丘・周溝(第33図、図版15)

盛土・周溝は改植により破壊が進行しており、確認できなかった。

## ③埋葬施設(第35・36図、第7表、図版15・16)

埋葬施設はほぼ真南に向かって開口する横穴式石室である。石室の南側部分は改植により破壊されており、玄室の一部が残存するのみであった。したがって、無袖式か擬似両袖式横穴式石室か不明である。

石室 天井石は図中B-B'断面付近に長辺0.7m前後の角礫2点が確認できる。

石室は奥壁に大型の角礫を用いて鏡石としており、その横にやや大型の河原石を縦位に用いて構成している。奥壁の2段目以上は小口積みされている。基底石は長手を内側に向け、二段目以上は小口積みしている。裏込めの状況を調査すると、各段ごとに裏込めが確認でき、一段ずつ積載したことが判明する。

石室平面形は、玄室中央の幅が広く奥壁、玄門側が狭くなることから長方形か緩やかな綫張形である。基底石 基底石は右側壁の1石のみ小口積みがあるが他は長手積みしている。

使用石材 側壁に使用された石材はすべて河原石である。

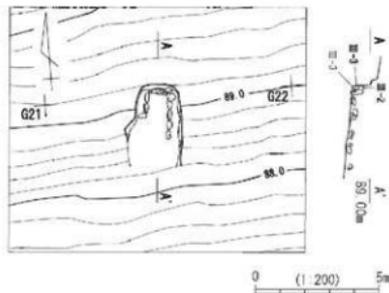
墓壇 墓壇は南側が破壊されており明確ではないが、長方形である可能性が高い。北側部分で地山を0.8m掘り込んでいる。長さ2.5m以上、幅1.8mをはかる。基底石は墓壇のほぼ中央に設置されている。

## ④出土遺物(第34図、図版119)

遺物は石室内からは出土しなかった。石室の攪乱土より須恵器摘蓋3点(44~46)が出土した。摘蓋は天井部が欠損している。天井から八字形に開いた後、口縁部でほぼ垂直に垂下し口縁部が丸く仕上げられるもの(46)と、斜め外方に向かって垂下し口縁部が丸く仕上げられるもの(44・45)の二者が存在する。口径14.0~15.2cmをはかる。

## ⑤小結

大屋敷C10号墳は、原位置を保持する遺物が出土していないため、築造時期は明確ではないが、石室攪乱土から出土した須恵器摘蓋がC10号墳に副葬されたものであると仮定するならば、遠江V期前半に

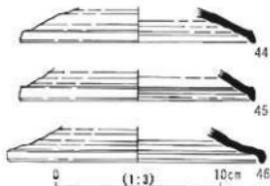


土層注記  
 III-2(赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(田土を多く含む)  
 7.5YR5/6(裏込め)  
 III-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む)  
 5YR4/6(裏込め)

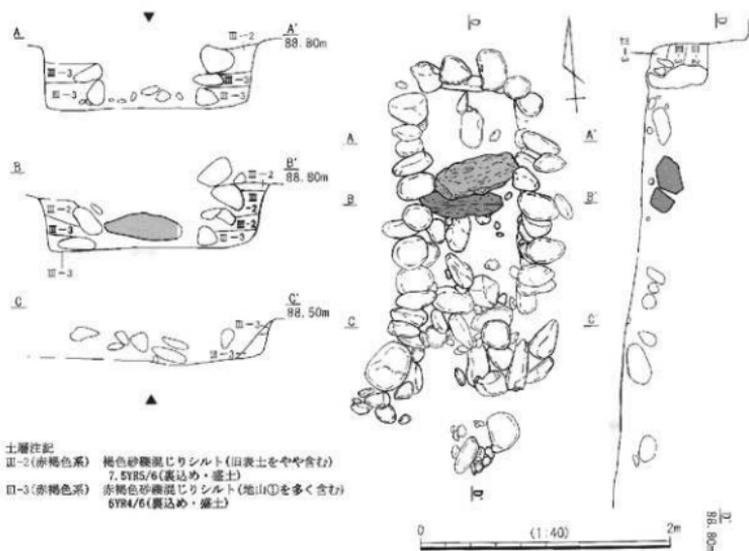
第33図 大屋敷C10号墳地形測量図

第7表 大屋敷C10号墳横穴式石室規模

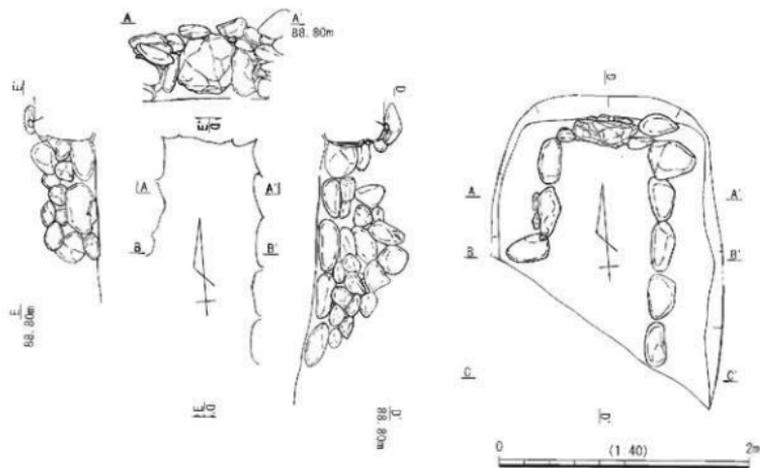
主軸方位	N-4°32'-E	
石室全長	1.75m以上	
玄室全長	1.75m以上	玄室最大幅 0.80m
玄室奥壁幅	0.70m	



第34図 大屋敷C10号墳横穴式石室出土土器実測図



第35図 大塚敷C10号墳横穴式石室検出状況図



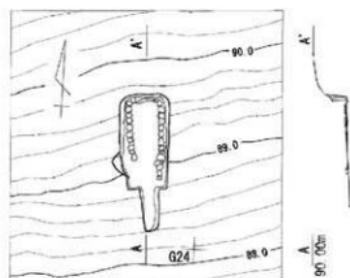
第36図 大塚敷C10号墳横穴式石室および基石・墓壇実測図

築造されたと考えられる。この仮定が正しいとした場合でも追葬に関しては明らかではない。

## (3) C14号墳

## ①調査前の状況

C10号墳と同様、椀の改植により破壊が進んでいると想定された。最終確認のため試掘溝を設定し、



第37図 大塚遺跡C14号墳地形測量図

調査を進めたところ、横穴式石室の上部および墳丘・周溝は破壊されているものの、横穴式石室の下部は残存することが判明したため調査を実施した。

古墳はF23グリッドに位置する。

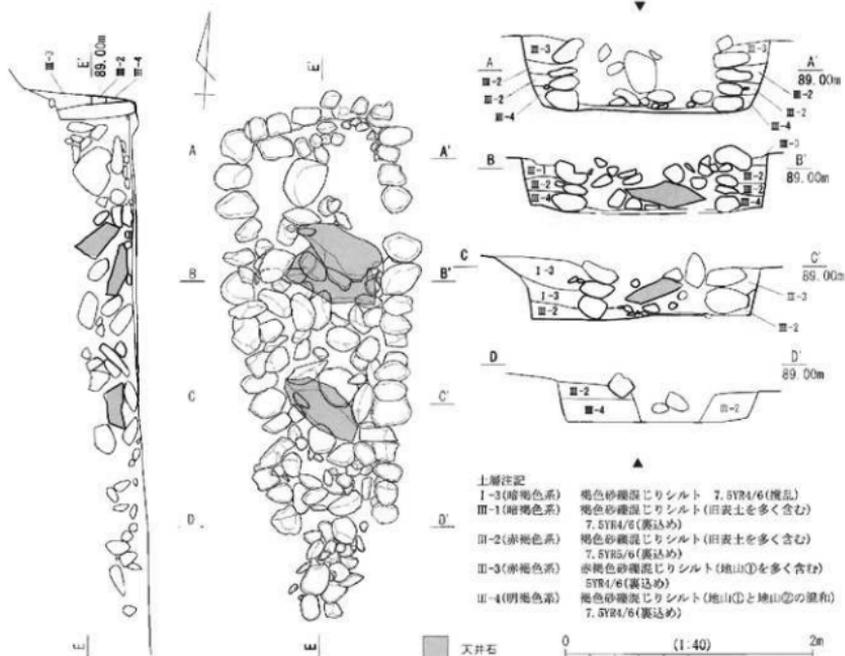
## ②墳丘・周溝(第37図, 図版17)

改植が行われ、周溝や盛土は確認することができないため、古墳の形状および規模等は不明である。

## ③埋葬施設(第38~40図, 第8表, 図版17~19)

埋葬施設は横穴式石室であり、一部が改植により破壊されているが、その他は良好に遺存している。

石室 単室系擬似両袖式石室であり、ほぼ真南方向に向かって開口する。



第38図 大塚遺跡C14号墳横穴式石室検出状況図

天井石 天井石は図中B-B'断面付近に長辺0.7~0.8mの角礫2石と、C-C'断面上で長辺0.7mの角礫1石の3石が確認でき、少なくとも玄室は天井が架橋されていた蓋然性が高い。

玄室 玄室平面形は奥壁側が広い長台形を呈する。

奥壁は大型の角礫を用いた鏡石であり、2段目より上段は円礫を平積みしている。

側壁は奥壁を挟み込むように設置される。立柱石は右側が倒れこんでいたが、左右ともに板状の角礫を用いていた。立柱石は奥壁に比べ一段低いものが利用されている。

羨道 羨道は、基底部分で3石構築されている。玄室幅とほぼ等しいと想定でき、長方形を呈する。

敷石 床面は攪乱されており、敷石は確認できなかった。

基底石 基底石は、一部に長手を内側に向けているものが確認できるが、それ以外は小口を内側に向けている。

使用石材 玄室、羨道ともに一部に角礫が用いられるものの、主に円礫(河原石)が用いられる。2段目以上は各段が水平になるように積載し、石材を小口積みする。

墓壕・墓道 墓壕は地山を0.9m以上掘りこんで、標高88.5m付近まで掘削している。墓道側がやや狭い長方形で、墓道へと続く。墓壕長3.85m、奥壁側幅2.0mをはかる。

墓壕床面には奥壁と左右の立柱石を据えるために小土坑を掘削している。基底石は墓壕内に収まり、左側壁側がほぼ墓壕に接するような状況で置かれ、右側壁側は0.1m程度離して置かれている。

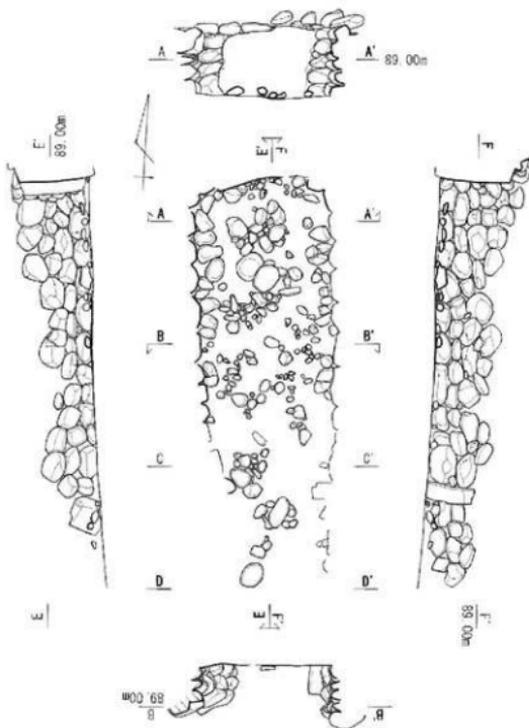
墓道はほぼ南に向かって伸延しており、墓道長1.7m、幅0.75m、深さ0.3mをはかる。

#### ④出土遺物(第41図, 図版119)

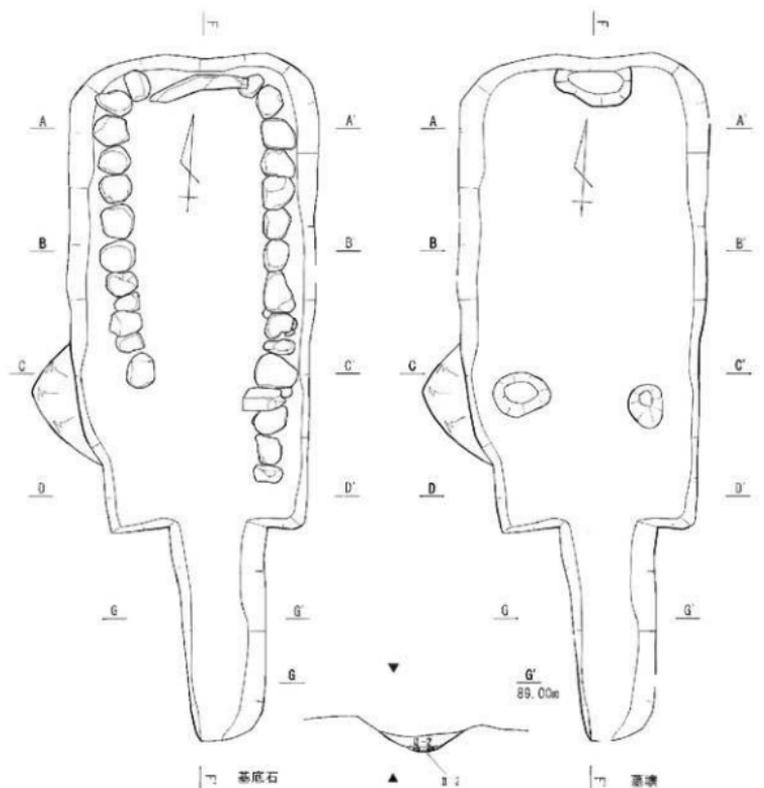
横穴式石室内より原位置を保持した状態で出土した遺物はない。横穴式石室の崩落土中より土師器杯

第8表 大屋敷C14号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-3°15'-W		
石室全長	3.20m以上	玄室最大幅	1.10m
玄室長	2.45m	玄室玄門側幅	0.99m
玄室奥壁幅	1.10m	羨道幅	0.80m前後
羨道長	0.75m以上		



第39図 大屋敷C14号墳横穴式石室実測図



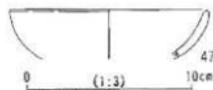
土層注記  
 II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.51M/6(墓道覆土)

第40図 大屋敷C14号墳横穴式石室基礎石および墓壇実測図

1点(47)が出土した。47は、半球形の杯で口縁端部は丸く仕上げられている。口径は11.8cmをはかる。

⑤小結

崩落土中より出土した土師器は小片であり、明確な時期を決定することはできないが、7世紀後半に位置づけられる可能性が高い。



第41図 大屋敷C14号墳横穴式石室出土土器実測図

(4) C17号墳

①調査前の状況

調査前には高まりや窪みなどは確認することができず、表土を除去し横穴式石室が検出されるまで古墳とは認識できなかった。古墳はI14・15、J14・15グリッドに位置する。なお、重機による表土除去

において調査員間の連絡ミスにより、墳丘西側を破壊してしまった。ここに深謝する。

## ②墳丘・周溝(第42~44図, 図版19・119)

墳丘北側は櫛の改植により表層部分は完全に擾乱され、それ以外の部分も盛土は確認することはできなかった。

周溝は、埋葬施設を取り巻くように円形に巡らされており、後述する他の古墳の状況から判断すると東西約7.5m、南北8.0mをはかる円墳であった蓋然性が高い。

周溝は北側で幅1.5m、深さ0.2m、東側で幅1.5m、深さ0.3m、東南側で幅1.3m、深さ0.1mをはかる。

なお、周溝東側底面より須恵器無蓋高杯1点(48)が出土した。48は口径15.6cmをはかり、口縁部に沈線を巡らせる。

## ③埋葬施設(第45~47図, 第9表, 図版20・21)

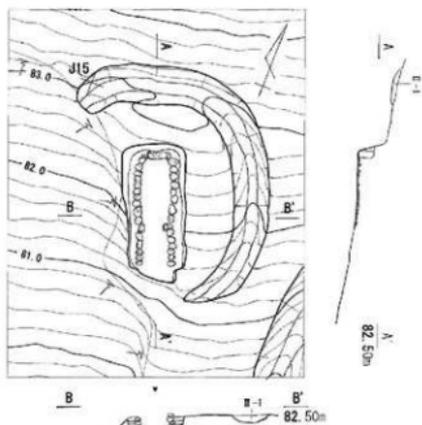
埋葬施設は古墳のほぼ中央に構築された横穴式石室で、南南東に向けて開口する。

天井石 天井石は玄室内で7石確認することができ、玄室は完全に架構されていたことが判明する。

玄室 玄室平面形は、玄室中央幅がやや広い緩やかな胴張形である。

奥壁は大形の角礫を用いて鏡石としている。

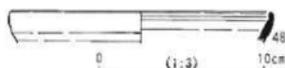
側壁は奥壁を挟みこんでいる。側壁は、基底石にやや大きな石材を用いるものの、2段目以降はほぼ



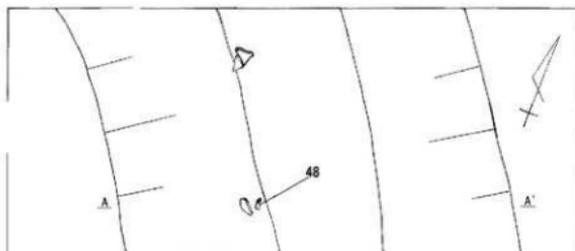
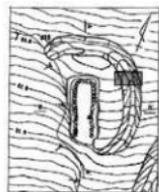
土層注記

II-1(赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト  
7.5YR5/6(周溝埋土)

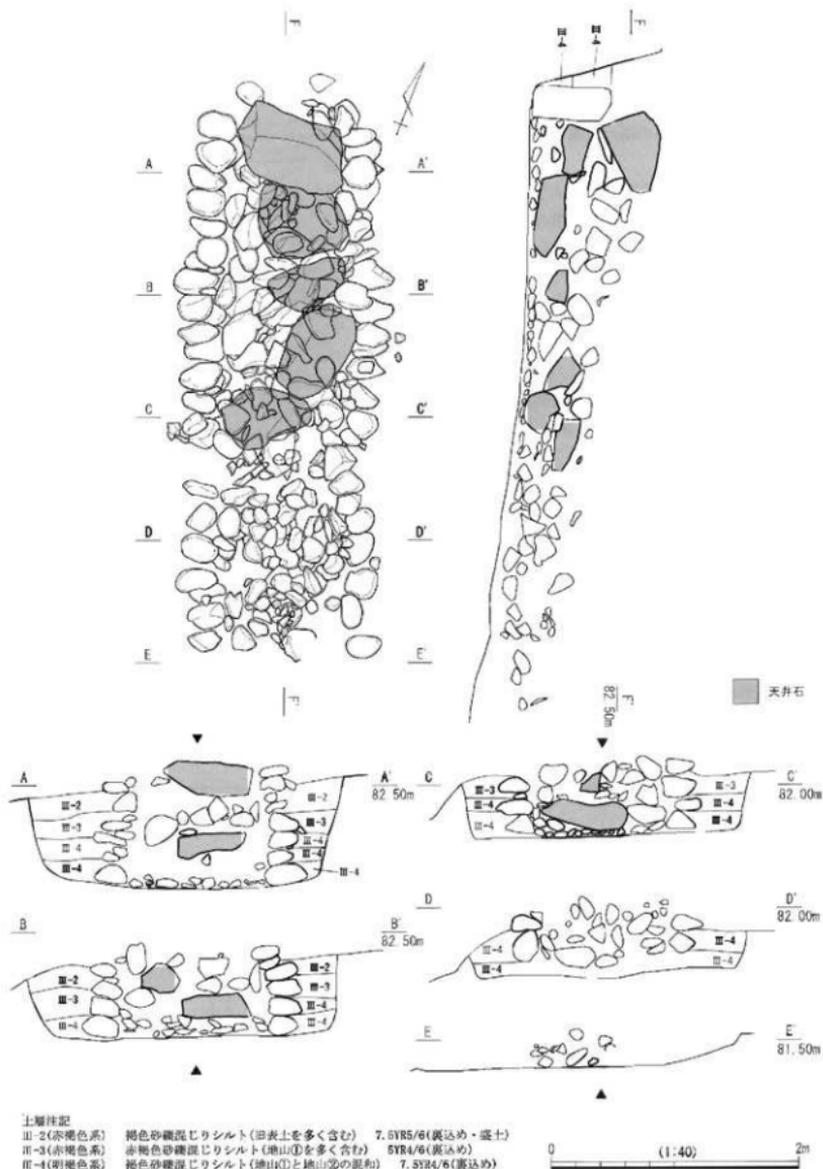
第42図 大屋敷C17号墳墳丘測量図



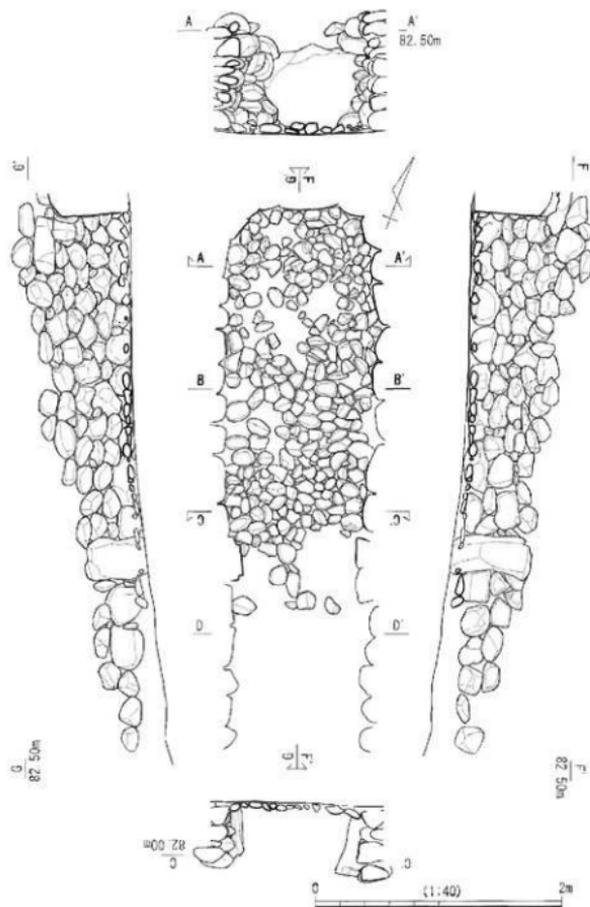
第43図 大屋敷C17号墳周溝出土土器実測図



第44図 大屋敷C17号墳周溝遺物出土状況図



第45図 大塚遺C17号墳横穴式石室検出状況図



第46図 大屋敷C17号墳横穴式石室実測図

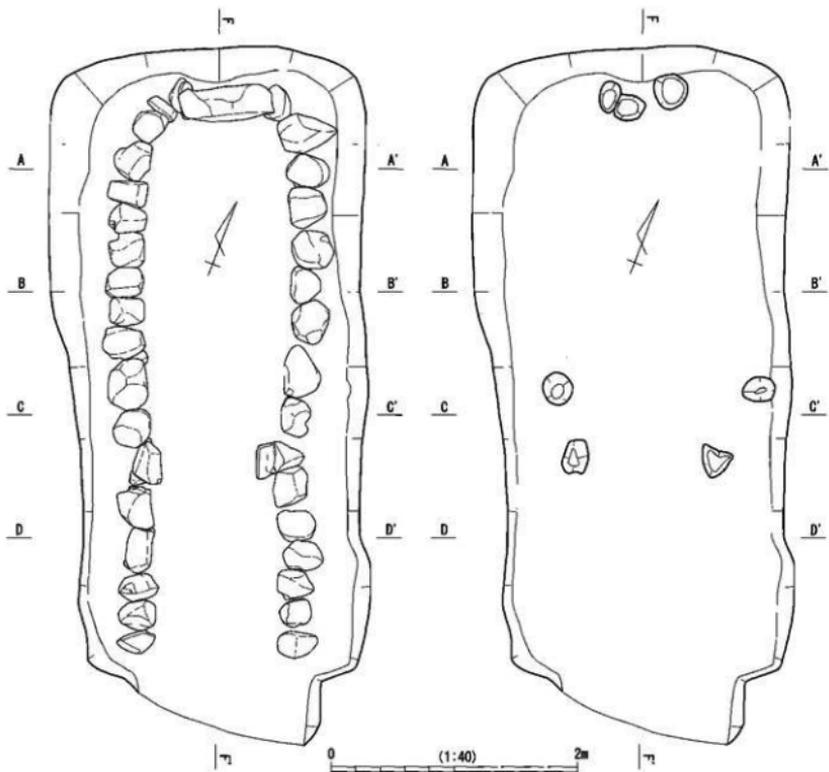
同じ大きさの石材を小口積みしている。各段は水平になるように積載されている。また、立柱石には左右ともに柱状の角礫が用いられており、側壁からやや(0.1m程度)突出している。側壁の持ち送り角度は約5～10度である。

**羨道** 羨道は基底石で右側壁5石、左側壁で6石据えられており、立柱石側の2石にやや大きな石材が用いられている。平面形は緩やかな胸張形であり、玄室玄門側幅と羨道幅はほぼ等しい。

**敷石** 敷石は奥壁から立柱石までで、羨道には及んでいない。敷石には10cm前後の小礫が多いが、

第9表 大屋敷C17号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-21°00'-W	
石室全長	4.45m	
玄室全長	2.65m	玄室最大幅 1.20m
玄室奥壁幅	0.85m	玄室玄門側幅 1.10m
羨道長	1.80m	羨道玄門側幅 1.00m
羨道玄門側幅	1.00m	羨道最大幅 1.15m



第47図 大塚遺C17号墳横穴式石室基底石および墓室実測図

中には20cm前後の河原石も使用される。

**基底石** 基底石は一部に長手を内側に向けるものがあるが、多くが小口を内側に向けている。

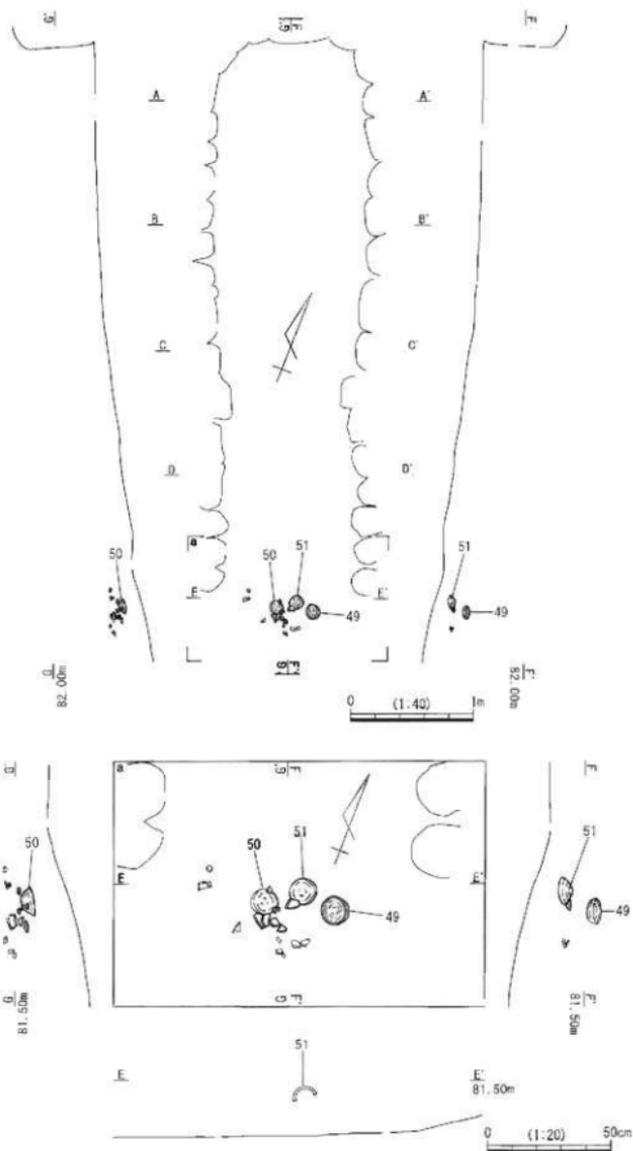
**使用石材** 側壁は、一部に角礫が使用される以外は、主に円礫(河原石)が使用されている。側壁の積載方法は、基底石は一部に長手を内側に向けるものがある以外は、平坦な小口を内側に向ける小口積みであり、2段目以上も小口積みしている。裏込めの状況から、基底石より1段ずつ積載していることがわかる。

**墓室・墓道** 墓室は長方形であり、幅の広い墓道へ続く。墓室規模は墓室長5.1m、幅2.5mをはかる。奥壁および立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。基底石は墓室内に取まり、墓道には及んでいない。基底石と墓室との関係は、左右両側壁ともに墓室よりやや離れて据え置かれている。

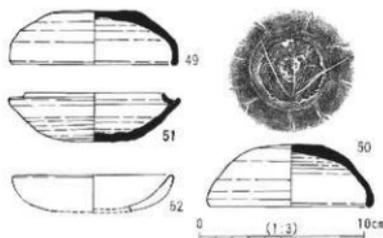
墓道は他の古墳と比較すると墓室に対しての幅が広い。南側部分が流出しているが、墓道長0.5m以上、幅1.5m、深さ0.1mをはかる。

#### ④遺物の出土状況(第48図、図版21)

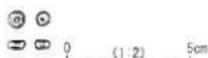
横穴式石室羨道入口より、攪乱された状態で、床面から0.2m浮いた状態で須恵器杯蓋2点(49・50)、



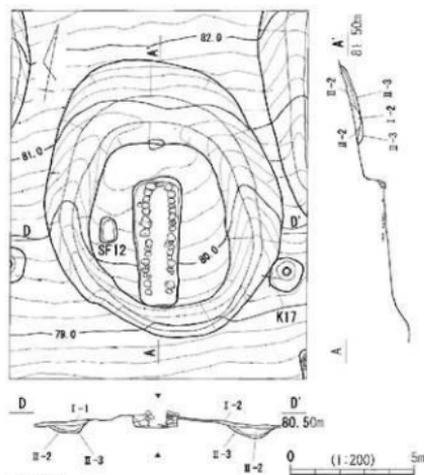
第48図 大屋敷C17号墳横穴式石室遺物出土状況図



第49図 大屋敷C17号墳横穴式石室出土土器実測図



第50図 大屋敷C17号墳横穴式石室出土土器実測図



第51図 大屋敷C18号墳墳丘測量図

西側で幅2.0m、深さ0.5m、南側で幅1.3m、深さ0.1mをはかる。

古墳は周溝の内側で南北6.6m、東西5.5mをはかる。現状での墳丘の見かけ上の高さは、周溝南側が標高79.0m前後で、墳丘北側が80.8m前後であることから、1.8m程度である。

また、周溝北西側で、底面より0.1~0.2m浮いた状態で須恵器が破片となって多量に出土した(第52図)。出土した須恵器は、摘蓋5点(55, 57~60)、有台杯2点(61・62)、無蓋高杯1点以上(63・64)、広口壺2点(65・66)が出土した(第53図)。

杯身1点(51)、土師器杯1点(52)が出土した。また、玄室の覆土を水洗したところガラス小玉2点(53・54)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第49・50図、図版120)

須恵器杯蓋2点(49・50)、杯身(51)、土師器杯(52)、ガラス小玉2点(53・54)が出土した。須恵器 杯蓋は口径約9.5cm、器高約3.5cmをはかる。50の犬井部にはヘラ記号「V」が描かれている。杯身は短く内傾するたちあがりが付くもので口径約8.0cmをはかる。

土師器 土師器杯は口径約10cmをはかる半球形の杯である。

玉類 ガラス小玉は、色調は紺色を呈し、直径5~6mm、高さ3mmをはかる。

#### ⑥小結

大屋敷C17号墳は出土した須恵器杯身は口径が8.0cmと最も小型化したものであり、遠江IV期前半、7世紀前半に位置づけるのが妥当である。したがって、C17号墳の築造時期は7世紀前半に築造された可能性が高い。出土遺物に時期差が確認できないことから、追葬に関しては実施されたかどうか不明である。

#### (5) C18号墳

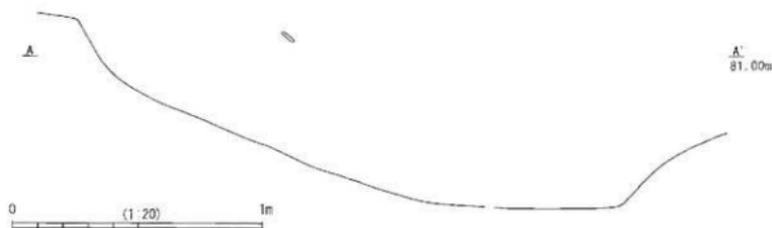
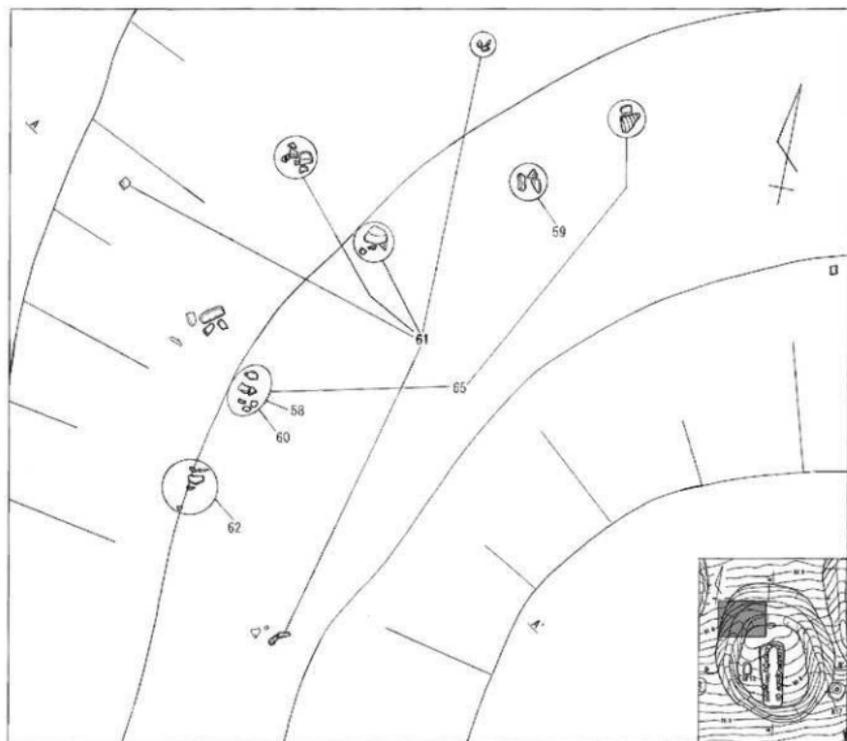
##### ①調査前の状況(図版21)

調査前はC19号墳の南西側にやや高まった場所を確認でき、古墳が存在する可能性が想定できた。古墳はJ16・K16グリッドに所在する。

##### ②墳丘・周溝(第51~53図、図版22・120)

盛土は確認することはできない。築造に当たっては周溝よりやや高まった部分を利用しているものと想定する。

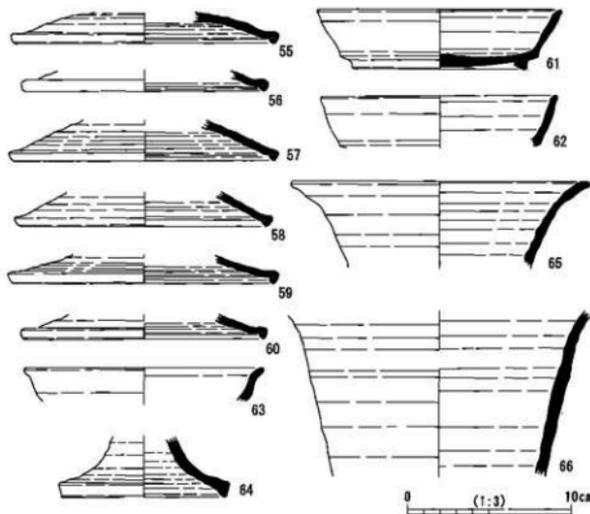
周溝は横穴式石室に沿って南北にやや長い(楕)円形を呈しており、全周する。周溝北側で幅3.6m、深さ0.3m、東側で幅2.6m、深さ0.5m、



第52図 大屋敷C18号墳周溝遺物出土状況図

これらの須恵器は出土場所が周溝の北西側であること、底面より0.1m以上浮いた状態で出土し斜面上部より流れ込んだような状況であることを考慮すると、C6、C17号墳など斜面上部の古墳に伴う遺物が流れ込んだ可能性が高い。

摘蓋(55～60)は天井部からハ字形に開いた後、口縁部で一端水平にした後、口縁端部を垂直あるいは内側に垂下させるもので、口縁端部の長さは非常に短い。口径は約14.5～16cmをはかる。有台杯(61・



第53図 大屋敷C18号墳周溝出土土器実測図

第10表 大屋敷C18号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-10° 02' -W	
石室全長	4.50m	
玄室全長	2.25m	玄室最大幅 0.85m
玄室奥壁幅	0.40m	玄室玄門側幅0.75m
羨道全長	2.25m	羨道玄門側幅0.75m
羨道玄門幅	0.60m	羨道最大幅 0.85m

62)は底部からやや外側に向かって立ち上がるもので、61の底部は高台と同じくらいまで下がる。無蓋高杯(63)の口縁部は底部から丸みをもって立ち上がった後、口縁部で屈曲し、斜め外方に向かって引き出されたもので、脚部(64)はハ字形に開いた後、底部を肥厚させるものである。広口壺(65・66)は頸部～口縁部の破片であり、頸基部

から口縁部に向かって逆ハ字形に広がるもので、後述するC41号墳出土の広口壺(第204図366)と同様の特徴を有する。これらの須恵器の帰属時期は遠江V期前半である。

### ③埋葬施設(第54・55・57図, 第10表, 図版23・24)

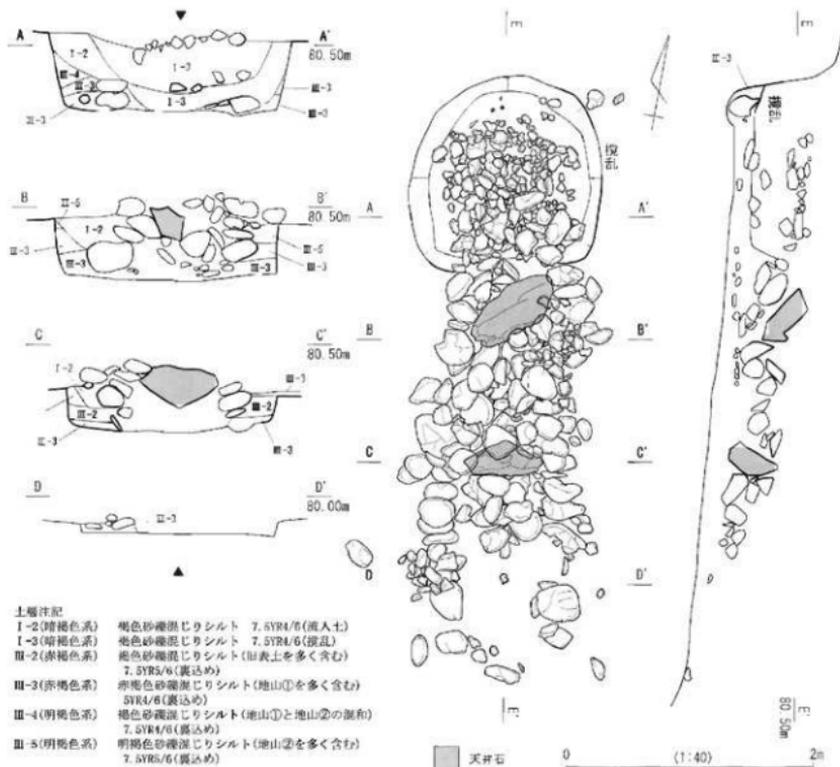
埋葬施設は古墳の中心に築造された横穴式石室で、ほぼ南に向かって開口する。玄室の北側が昭和以降の攪乱(ゴミ穴)により破壊されている。石室は、図上D-D'断面の北側部分で羨道が一端内側に入り込み、そこから南側はハ字形に開くようにも見えることから単室系擬似両袖式、複室系擬似両袖式石室の双方の可能性が考えられる。ここでは、単室系擬似両袖式石室として報告する。

**天井石** 天井石は図上B-B'断面とC-C'断面の部分に幅0.7～0.8m程度の角礫が確認でき、少なくとも玄室は天井が架構され、一部羨道にも及んでいた可能性を想定する。

**玄室** 平面形は玄室中央の幅が奥壁側、玄門側に比べて広く、奥壁側と玄門側がほぼ等しい胴張形を呈する。立柱石は側壁よりも内側に0.1m程度突出している。奥壁は大部分が破壊されていたが、残存している基部から角礫を用いた鏡石であったことが想定できる。側壁は奥壁を挟み込むように構築されている。側壁は基底石の一部を除いて小口積みされ、各段が水平になるように調整されている。立柱石は、右側壁側が円柱状の河原石を、左側壁側が角礫を用いている。左立柱石の上部は側壁4段目に対応している。側壁の持ち送りの角度は5～10度である。

なお、右立柱石は木根により石室内に押し倒されていたものを復元し、図化している。

**羨道** 羨道は中央の幅が広い胴張形で、玄門側の幅は玄室の幅とほぼ等しい。側壁の積載方法は玄室と同様、小口積みである。玄室の各段と羨道の各段は対応しており、立柱石を挟んでほぼ同時に構築された可能性が高い。



第54図 大塚敷C18号墳横穴式石室検出状況図

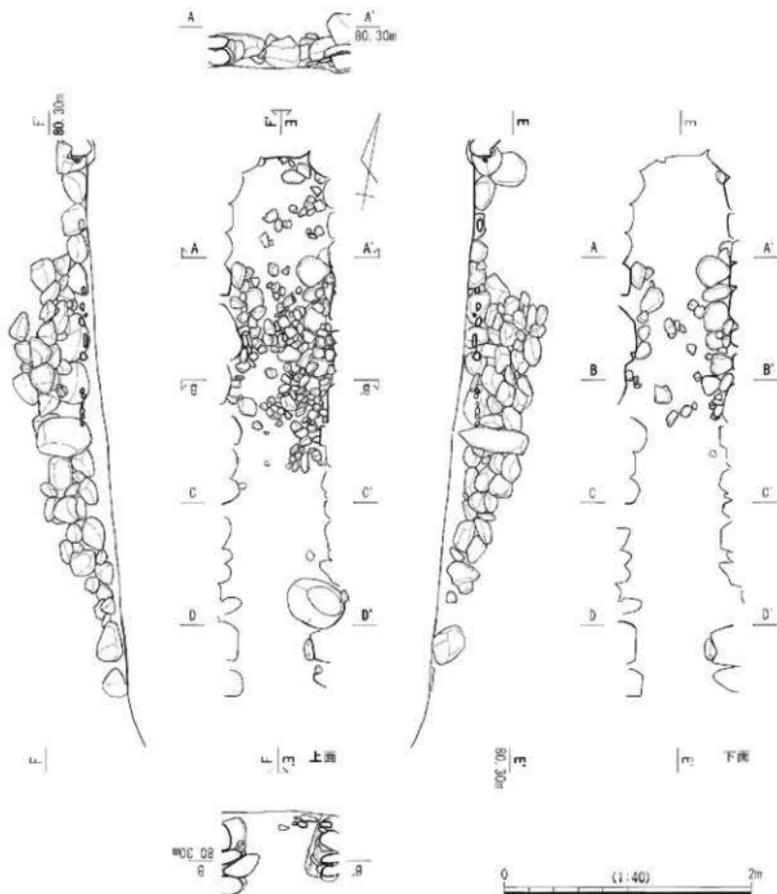
**敷石** 玄室奥壁側は掘乱されているため確認できないが、本来は玄室全体に敷石が敷設されていた可能性が高く、羨道の一部まで及んでいる。敷石は一部2面であった可能性があり、上面は10cm以下の円礫を敷設し、下面には20cm前後の円礫を敷設している。出土遺物がいないため、埋葬面が2面であったのか、敷石を2重に敷設しただけなのか判別できない。

**基底石** 基底石は一部長手を内側に向けるものも確認できるが、大部分が小口を内側に向けて据えられている。2段目以上も小口積みしている。玄門は側壁より内側に突出する立柱石であり、右側壁側は円礫、左側壁側は角礫を用いている。

**使用石材** 側壁に使用された石材は一部に角礫を使用する以外は主に円礫(河原石)を用いて構築されている。玄室・羨道ともに小口積みが基本である。

**墓壇・墓道** 墓壇は地山を掘りこんでおり、標高80.0m前後まで掘削している。平面形は奥壁側の幅が広い長台形で、墓道は確認できない。墓壇長5.2m、奥壁側幅1.95m、羨道側幅1.5mをはかる。基底石と墓壇との関係は、左側壁側が墓壇端近くに設置され、右側壁は左側壁よりもやや内側に据えられている。

墓壇には奥壁および側壁の一部、立柱石を設置するための小土坑が掘削されている。



第55図 大塚敷C18号墳横穴式石室実測図

④出土遺物(第56図)

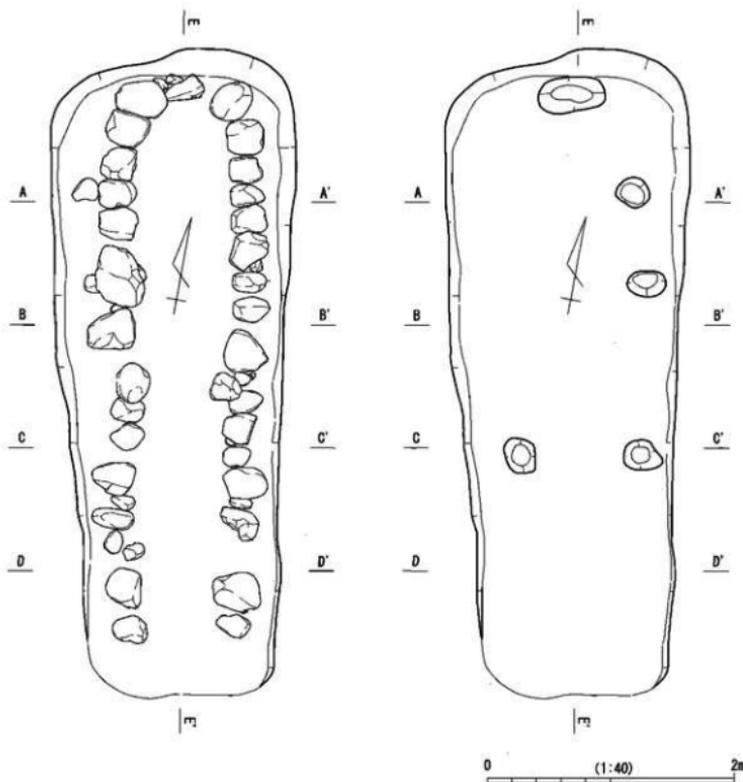
横穴式石室内より遺物は出土していない。玄室の攪乱坑内より鉄片が出土している。直径1mmの棒状である。その形状から古墳に伴うものとするれば鉄鍔の茎の可能性が高く、古墳に直接伴うものではなく、攪乱に伴う場合には、針金の可能性が高い。

⑤小結

大塚敷C18号墳は岡溝から須恵器が多量に出土しているが、上述したように斜面上部の古墳からの流れ込みの可能性が高いため、これらをもとにC18号墳の築造時期とすることはできない。したがって、



第56図 大塚敷C18号墳攪乱坑出土鉄製品実測図



第57図 大屋敷C18号墳横穴式石室基座石および墓槽実測図

横穴式石室内より出土遺物がないため築造時期、追葬等は不明であるが、大屋敷C古墳群では8世紀代に築造されたものはほとんどが無袖式でC18号墳は擬似両袖式であることから、7世紀後半に築造された可能性が高い。

## (6) C19号墳

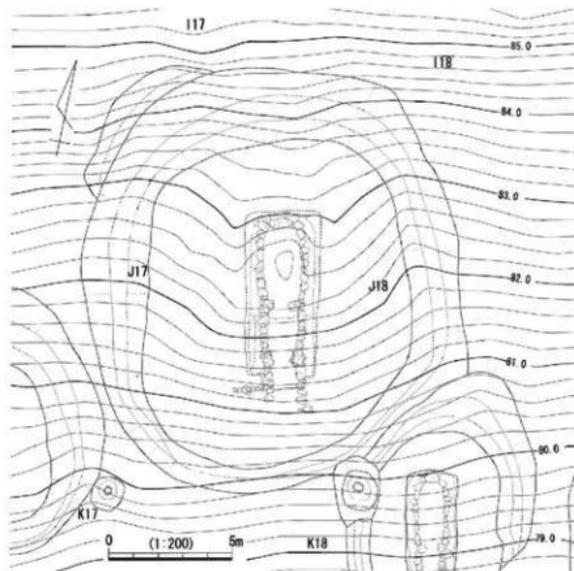
### ①調査前の状況(第58図, 図版25)

直径7~8mの円形の高まりが確認でき、その中央が大きく窪み、墳頂部には角礫が散乱していたため、盗掘を受けた角礫積み横穴式石室を内蔵する古墳であることが一目瞭然であった。このため分布調査時に古墳として既に認知されていた。調査前の測量図では、周囲より約0.4~0.6m程度盛り上がっていることから、盛土が残存していることも予想できた。

古墳はI16~18、J16~18グリッドに位置している。

### ②墳丘・周溝(第59~62, 67図, 図版25・26, 30・31, 121・122)

埋葬施設を取り巻くように周溝が掘削されている。墳丘南側は旧地形を削り出すことにより、段をつ



第58図 大屋敷C19号墳調査前測量図

けている。周溝は北側で幅2.8m、深さ0.6m、東側で幅2.2m、深さ0.5m、西側で幅2.7m、深さ0.6mをはかり、南側の削り出しの範囲は幅1.0mで、墳丘との高低差は0.5mをはかる。

南側からみた古墳の見かけ上の高さは周溝北側が標高79.4m前後、墳丘北側が83.3m前後であることから、3.9m程度である。

周溝の形状からみると墳形は(楕)円形で、周溝の内側で東西10.6m、南北13.3mをはかる。

盛土は横穴式石室の裏込めから続いており、地山①・②(第V層1・2、第I章第3節参照)の混和土を盛土して、第一次墳丘を形

成している。墳丘南側は横穴式石室構築前に石室の構築面を水平にするため低い部分に盛土している(第60図C-C'断面の墳丘西側の旧表土上Ⅲ-1層および第60図E-E'断面およびF-F'断面の旧表土上のⅢ-2・3・4・5層および第63図1のⅢ-2層)。なお、第二次墳丘は残存していない。

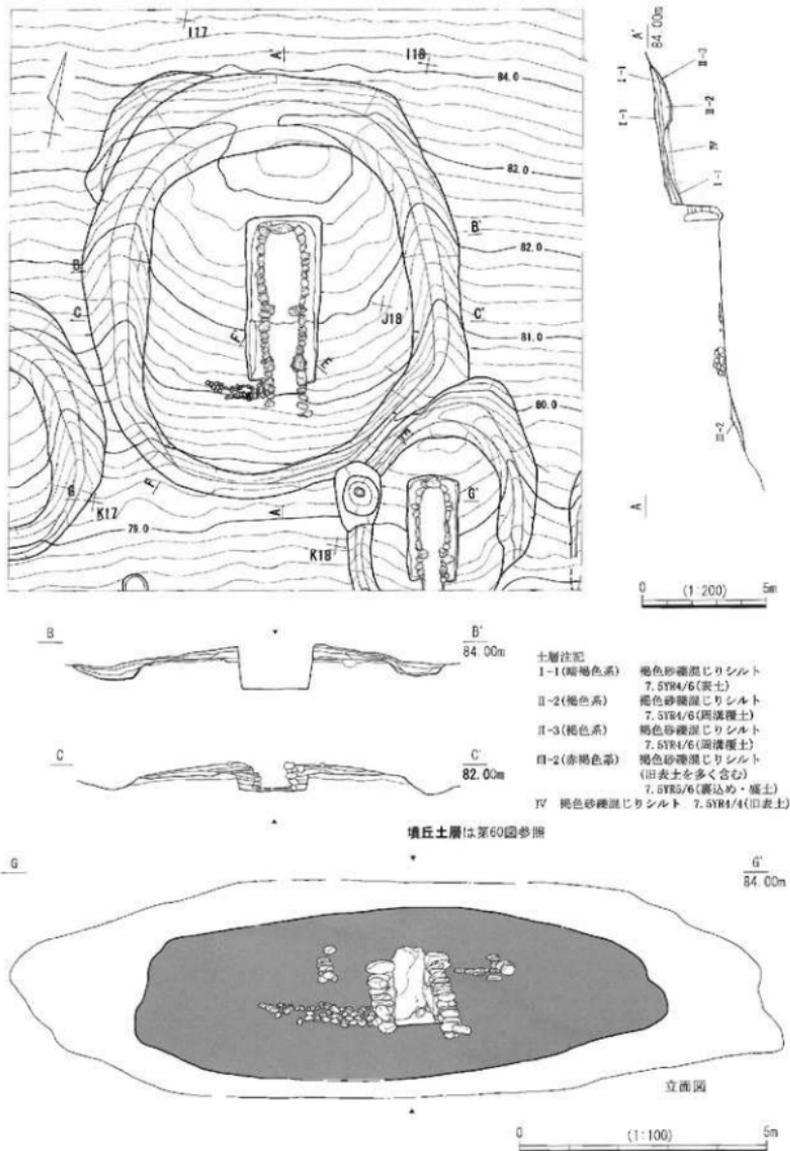
また、盛土内には3箇所墳丘内石列を確認することができる。墳丘南西側の墳丘内石列は、石室前庭側壁に組み込まれており、石室構築時に石室の裏込めとともに構築されていたことが判明する。2段目以上も石材の裏込めと同時に設置している。したがって、墳丘内石列は裏込めの安定を図る目的で設置された可能性が高い。

また、玄室側の墳丘内石列は、旧表土上に盛られた盛土内に据えられており、この石列の下部には墳丘西側で3層、墳丘東側で2層盛土が確認できる。石列が据えられた盛土は側壁6~7段目に相当しており、7段目あるいは8段目の積載にあたり、裏込めの指標としておかれた可能性もある。この石列は築造に使用された河原石より小型のものを玄室に沿って一直線に並べており、第63図D-D'断面付近で東西ともに石室側に向かって曲がり、玄門立柱石より南側、築造のほぼ中央部分に取り付くような状況を示す。使用された石材は長さ10~30cm程度の細長い円形の小口を合わせるように並べている。

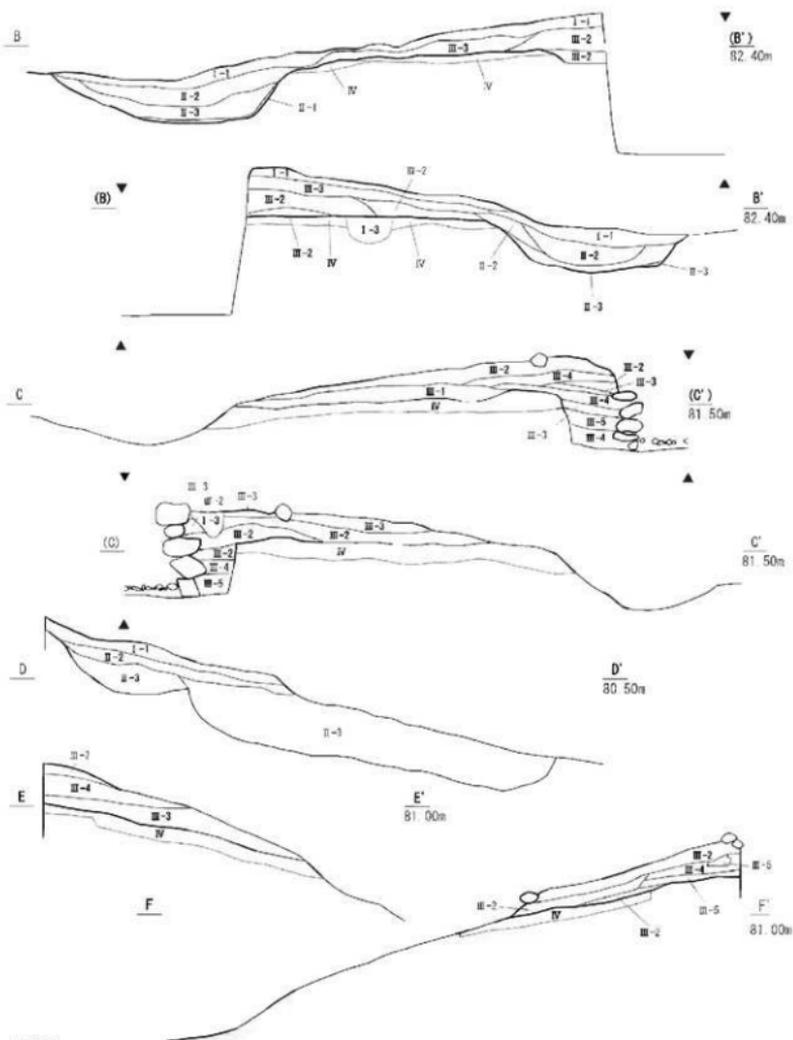
なお、盛土を除去すると第67図に図示したように、旧表土上にうっすらと炭化物を確認できる部分が3箇所存在する。築造当初は墳丘全体に広がっていたのか判然としない。この炭化物はわずかであり、古墳築造前の樹木の焼き払いによる炭化物としては少なすぎるため、古墳築造前になんらかの火を使用した祭祀が行われていた可能性が高い。なお、旧表土上で炭化物が確認できたのはC19号墳だけである。

また周溝南東側は、C20号墳の築造にあたり、周溝で破壊されており、C19号墳がC20号墳よりも前に築造されたことが判明する。

また、周溝北側から北西側にかけて須恵器が底面より0.2~0.3m浮いた状態で出土した(第61図)。完



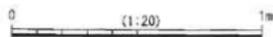
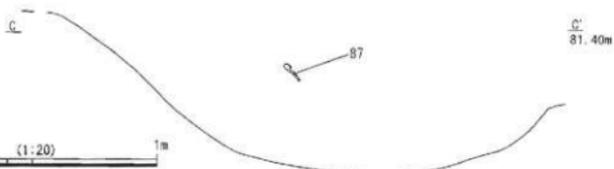
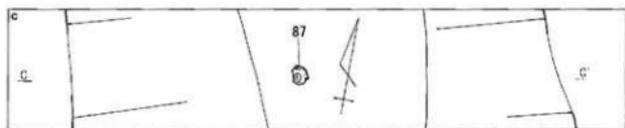
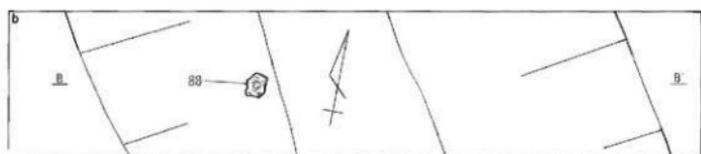
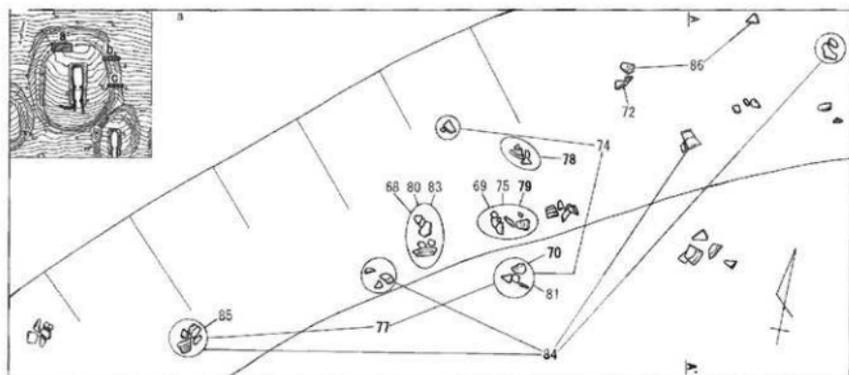
第59図 大塚敷C19号墳地形測量図および墳丘立面図



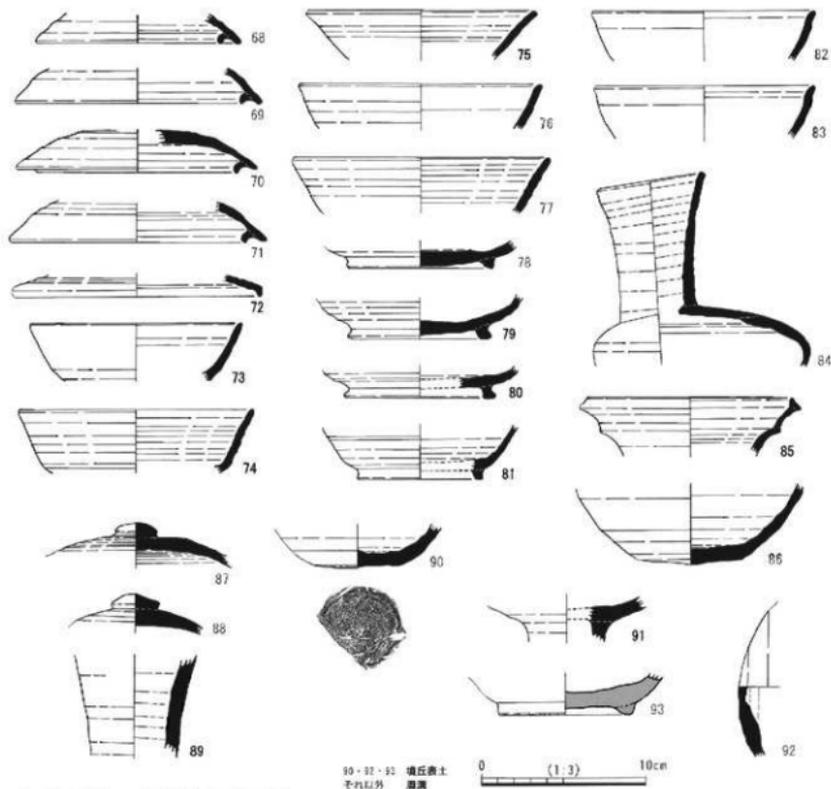
土層注記

- I-1 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7. SYR4/6 (盛土)
- I-3 (暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7. SYR4/6 (埋込)
- II-2 (褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7. SYR4/6 (周溝覆土)
- II-3 (褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7. SYR4/6 (周溝覆土)
- III-2 (赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト (田表土を多く含む) 7. SYR5/6 (裏込め・盛土)
- III-3 (赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト (地山①を多く含む) 7. SYR4/6 (裏込め・盛土)
- III-4 (明褐色系) 褐色砂礫混じりシルト (地山①と地山②の混和) 7. SYR4/6 (裏込め・盛土)
- III-5 (明褐色系) 明褐色砂礫混じりシルト (地山②を多く含む) 7. SYR5/6 (裏込め・盛土)
- IV 褐色砂礫混じりシルト 7. SYR4/4 (田表土)

第60図 大塚教C19号墳壇丘盛土土層断面図



第61図 大屋敷C19号墳周溝遺物出土状況図



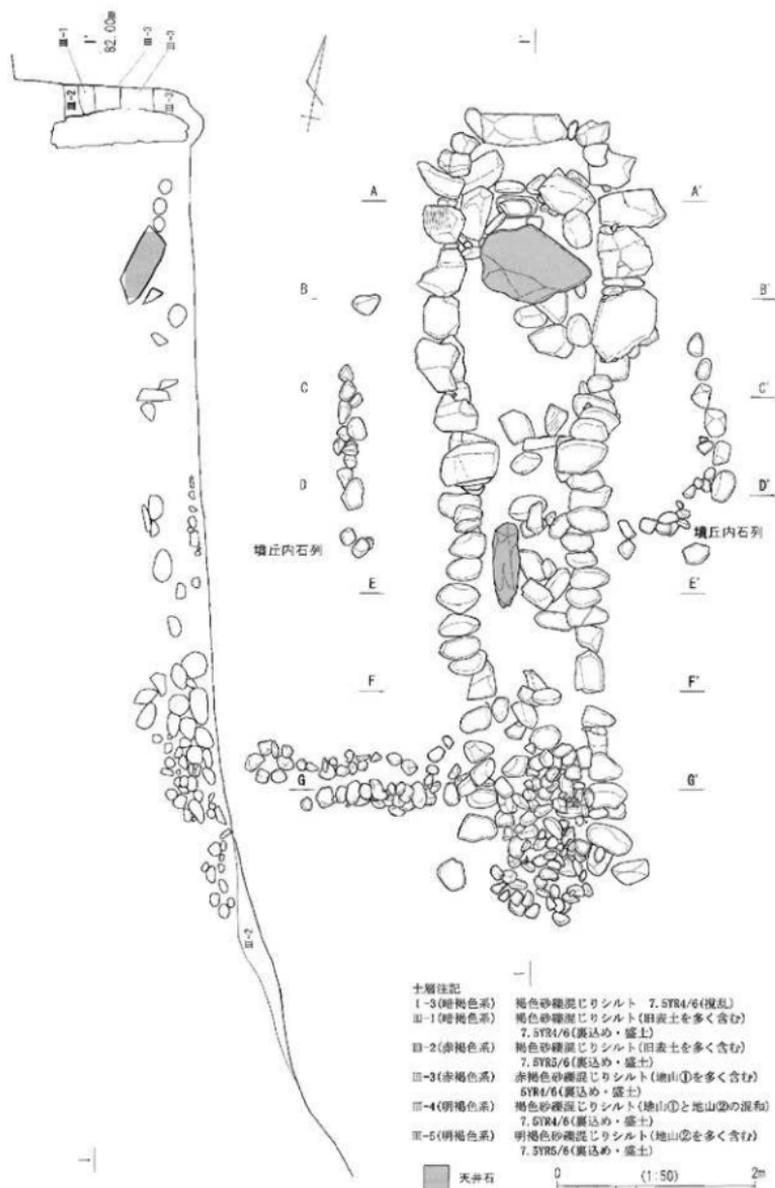
第62図 大塚遺C19号墳周溝出土土器実測図

形に近いものは少なく、破片となって散らばった状態で出土しており、C18号墳周溝出土遺物同様、斜面上部の古墳より流れ込んだ遺物である可能性が高い。また、周溝東側で底面より0.1～0.3m深い状態で須恵器(87・88)が出土しており、これらも直接C19号墳に伴うものではない。

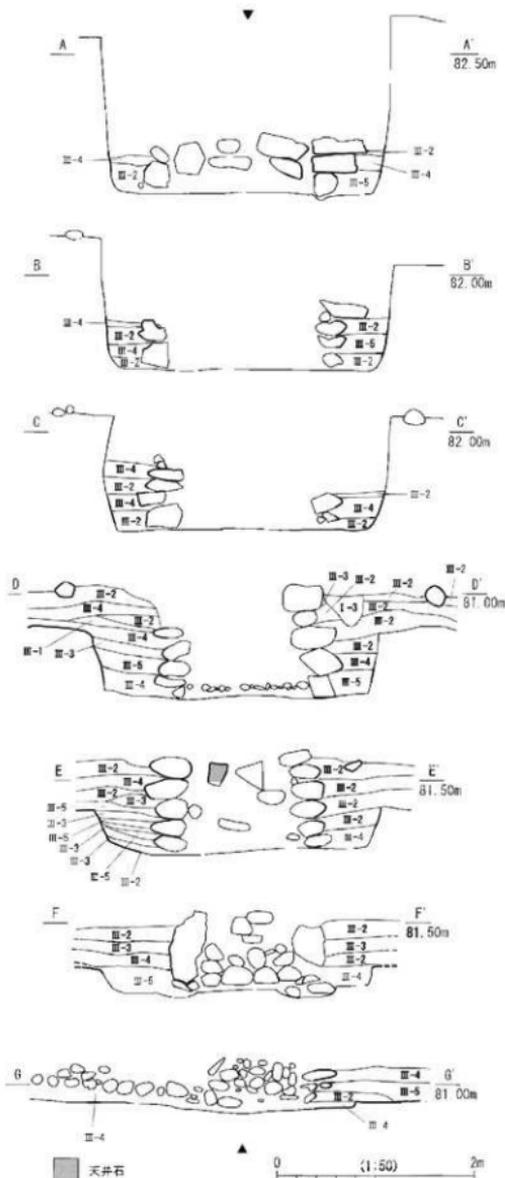
周溝および墳丘から出土した遺物には、返蓋4点(68～71)、摘蓋1点(72)、有台杯1点(75)、有台杯8点(73・74、76～81)、無蓋高杯2点(82・83)、高杯(91)、平瓶2点(84・85)、平瓶あるいは埴底部2点(86・90)、フラスコ形瓶1点(92)がある(第62図)。また、墳丘上からは山茶碗1点(93)が出土している。

返蓋は返りが内側に入るものがほとんどで、口径約10.0～13.0cmをはかる。有台杯は底部から外上方に向かって立ち上がるもので、やや丸みを帯びた底部であったと考えることができる。摘蓋は大きな擬宝珠で、天井部からハ字形に大きく開いた後、口縁端部を垂直に垂下させるものである。有台杯は底部が高台よりも高いもので、口縁部は底部から外上方へ向かってたちあがる。無蓋高杯は椀状の体部で、口縁端部は内傾する斜面となっている。

平瓶(84)は頸部の長いもので、逆ハ字形に広がる。肩は丸みを帯びている。85は平瓶の頸部～口縁部



第63図1 大塚敷C19号墳横穴式石室検出状況図



第63図2 大塚遺C19号墳横穴式石室検出状況図

の破片であり、頸部から逆ハ字形に広がった後、擬似口縁部をつくり、屈曲しさら外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は上に積み上げられている。

山茶碗は、高台に初級派が確認でき、高台は潰れた三角形を呈することから、後述する大塚遺6号室に伴う遺物である可能性が高い。

### ③埋葬施設(第63～66図, 第11表, 図版27～31)

埋葬施設は古墳の中央部に構築された横穴式石室で、ほぼ真南に向かって開口する。横穴式石室は羨門をもつ複室系擬似両袖式石室である。

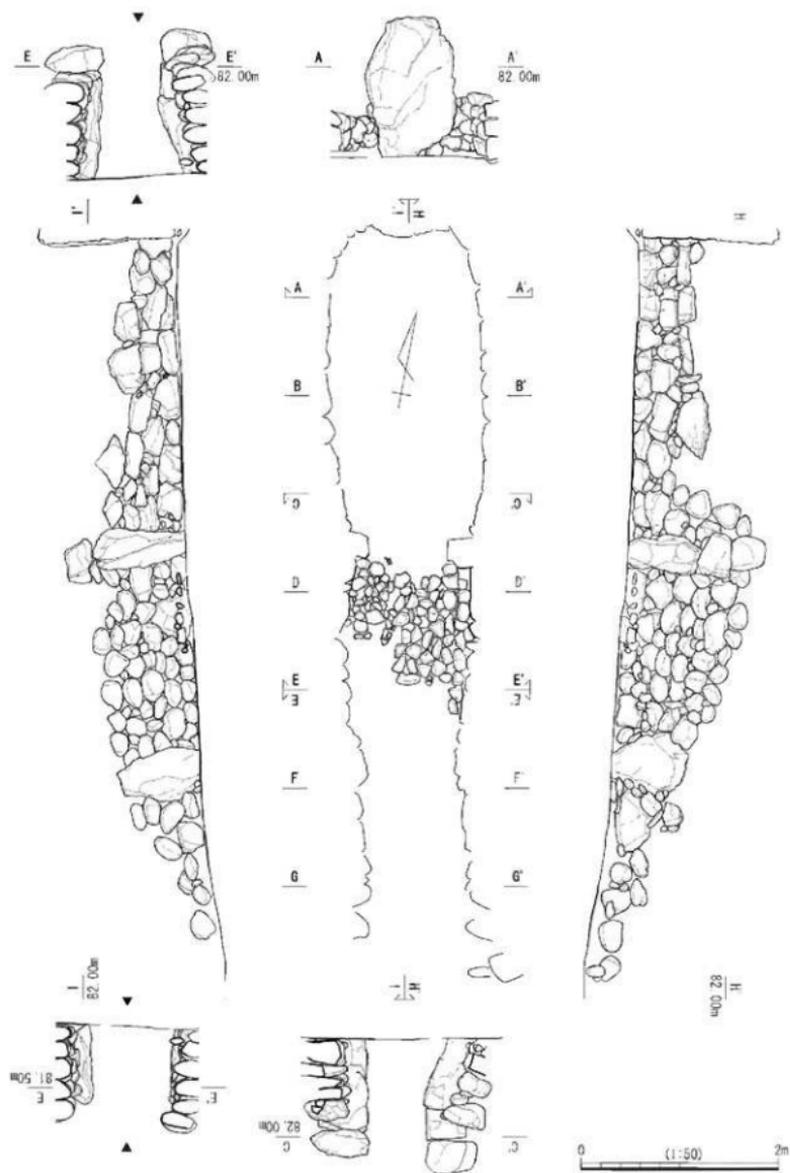
**天井石** 天井石は玄室で1石、羨道で1石確認した。ともに角礫である。

玄室側の天井石は幅1.2m、長さ0.8m、厚さ0.3mの大型の石材が用いられる。一方、羨道側の天井石は幅0.9m、長さ0.3mをはかる。2石しか確認できないため断言できないが、少なくとも玄室には天井が架構され、羨道にも及んでいた可能性が高い。

**玄室** 玄室平面形は中央部の幅が広く、奥壁側と玄門側がほぼ等しい扇形である。

玄室幅の玄室長に対する割合は50%、玄室奥壁幅の最大幅に対する割合は70%である。

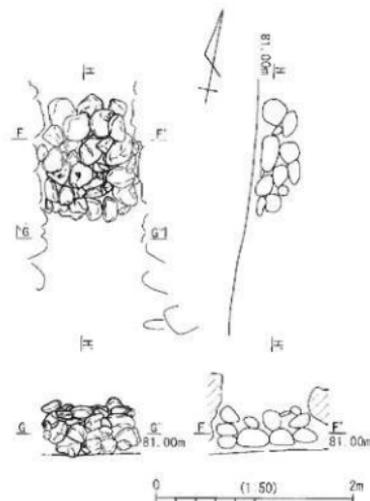
立柱石は大型の角礫を用いており、内側に向かって側壁から0.2m突出する。立柱石上には角礫が積載されており、左立柱石上は2段である。立柱石上部の石材と奥壁鏡石の上部がほぼ同標高であり、石室の構築に当たっては、この高さで大きな構築単位があるものと考えられる。



第64図 大屋敷C19号墳横穴式石室実測図

第11表 大塚遺跡C19号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-10° 31' W	
石室全長	7.50m	
玄室長	2.95m	玄室最大幅 1.55m
玄室奥壁幅	1.05m	玄室玄門側幅 1.25m
羨道長	2.65m	羨道玄門側幅 1.20m
羨道玄門側幅	1.05m	羨道最大幅 1.40m
前庭長	1.50m	前庭玄門側幅 1.10m
前庭入口側幅	1.40m	



第65図 大塚遺跡C19号墳横穴式石室閉塞石実測図

河原石の大きさは20～30cmで、ラグビーボール形のものが多い。

**基底石** 基底石の玄室側は主に角礫で、羨道と前庭は円礫で構成され、玄室と羨道ともに立柱石と奥壁に近い部分は長手を内側に向け、中央近くを小口積みしている。このことから考えると石室の構築に当たっては、まず奥壁と立柱石を指標石として設置し、その間を奥壁、立柱石側から設置し、中央で石材の長さを調整していたと考えることができる。

**使用石材** 側壁に使用された石材に関して玄室は主に角礫を、羨道と前庭側壁は主に円礫を用いて構築している。玄室は角礫を平積みし、角礫の隙間に小型の円礫を詰め込んでいる。基底石は2段目以降とほぼ同様の大きさであり、鑿石は用いられていない。羨道は基底石の一部にやや大型の角礫が用いられる以外は円礫を用いて小口積みしている。前庭は羨道と同様の使用状況である。

**墓壇・墓道** 墓壇の羨道～玄室部分は地山を掘りこんでおり、奥壁側で標高81.0m付近まで掘りこんでいる。現地表面との高低差は1.8mであり、両側に行くにしたがい、この高低差は減少する。一方、前庭部分は石室構築前に旧表土上に墓壇床面の標高に揃えるように盛土している。

墓壇の平面形は奥壁側がやや幅の広い長方形であり、短い墓道へと続く。墓壇規模は墓壇長6.8m、墓壇幅3.05mをはかる。

玄門立柱石および羨門立柱石を取り除くと、小型の石材が確認できる(第66図、図版31-2・3)。こ

側壁は30～50cm幅の角礫を平積みしており、一部に河原石が小口積みされる。各段が水平になるように積載されている。側壁は奥壁を挟み込むように構築されている。

奥壁は大型の板状の角礫を用いて鏡石としている。大きさは高さ1.4m、幅0.9m、厚さ0.3mであり、今回の調査で出土した最も大きな石材を使用している。側壁の持ち送り角度は5～10度である。

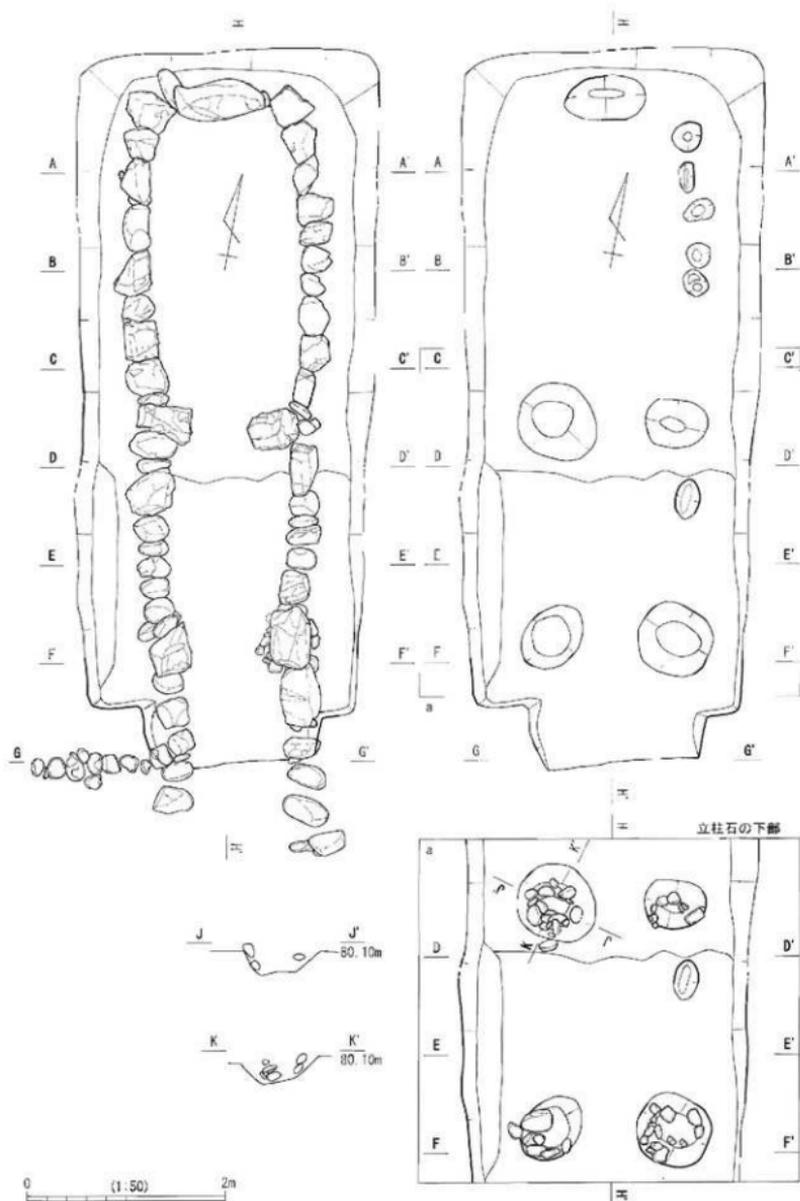
羨道 平面形は中央幅がやや広い胴張形で、羨門立柱石は側壁よりやや突出する程度である。

側壁は主に円礫を用いて積載されており、小口積みされている。羨道の各段の高さと玄室各段の高さはほぼ同標高であることから、立柱石を挟んで同時に構築された可能性が高い。

前庭 前庭は羨門から古墳外に向かってハ字形にわずかに開く。羨道と同じく、円礫を用いて小口積みされるが、左側壁の羨門南側の基底石のみやや大型の角礫を用いて長手積みしている。前庭入口は開放し、東側の石材が積層に巡るような状況を示すことから開口部石列が巡らされていた可能性もある。

**敷石** 玄室内は攪乱されており敷石は確認できない。一方羨道の玄室側に10cm前後の小礫を利用した敷石が敷設されている。敷石は、墓壇底面に若干土砂を充填し、その上に敷設している。

**閉塞石** 閉塞石は羨門立柱石部分に長軸を石室の長軸に平行させて河原石を積載している。用いられた



第66図 大塚敷C19号墳横穴式石室基底石および墓壇実測図

れは立柱石を据えるための土坑にある程度土砂を入れた後、小型の円礫を置き、その上に立柱石を据えることで立柱石の安定を図ったと考える。奥壁はやや大型の土坑を掘削し、奥壁を据えながら、不安定な部分にやや大型の石材を据えて安定を図り、土坑内に小礫は充填されない。

墓道は短く、僅かに長さ0.65m、幅1.8mをはかるのみである。

墓域・墓道と基底石との関係は、墓域内に羨門立柱石までが納められる。一方、前庭の一部は墓道外の横穴式石室構築前に段差を解消するために盛られた盛土上に設置される。

#### ④遺物の出土状況(第68・69図, 図版31)

遺物は石室内、玄門付近の墓域床面直上から鉄製釘2点(135・136)が接するように出土し、また閉塞石下から須恵器摘蓋1点(97)が出土した。また、玄室、羨道の攪乱土を水洗したところ、ガラス小玉26点(101~126)、鉄製刀子1点(129)、刀装具2点(127・128)、鉄鎌4点(130~133)、鉄釘1点(134)が出土した。さらに、閉塞石上からは崩落した石材に混じって摘蓋(94~96)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第70・71図, 図版122~124)

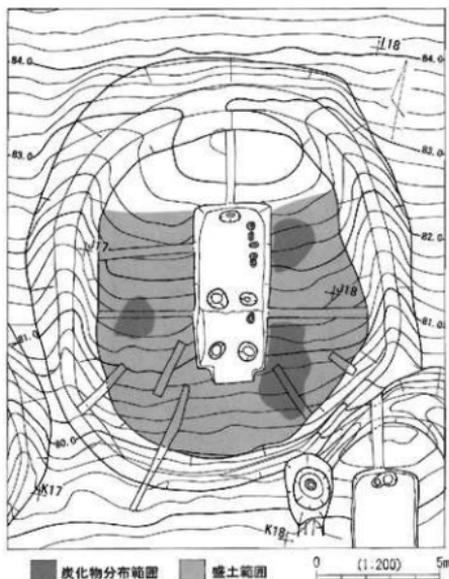
須恵器摘蓋4点、有台杯1点、無蓋高杯1点以上、ガラス小玉26点、鉄製刀装具2点、鉄鎌3点以上、刀子1点、鉄釘3点が出土している(第70・71図)。

須恵器 石室内から須恵器は摘蓋4点(94~97)、有台杯1点(98)、無蓋高杯1点以上(99~100)が出土した。

摘蓋(94・95)は大きな擬宝珠摘みを有し、天井からハ字形に開いた後、口縁端部を肥厚させるもので、口径部は尖らされている。摘蓋(96・97)はハ字形に開いた後、口縁部を垂直に垂下させるものである。摘蓋は口径約14.5~15.0cm、器高約3.5cmをはかる。有台杯(98)は底部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、そこから外上方へ向かって立ち上がるもので、口径14.8cm、器高3.9cmをはかる。無蓋高杯(99)は底部から外上方へ向かって立ち上がり、口縁端部は積み上げられている。高杯脚部(100)は、ハ字形に開いた後、底部を肥厚させるものである。

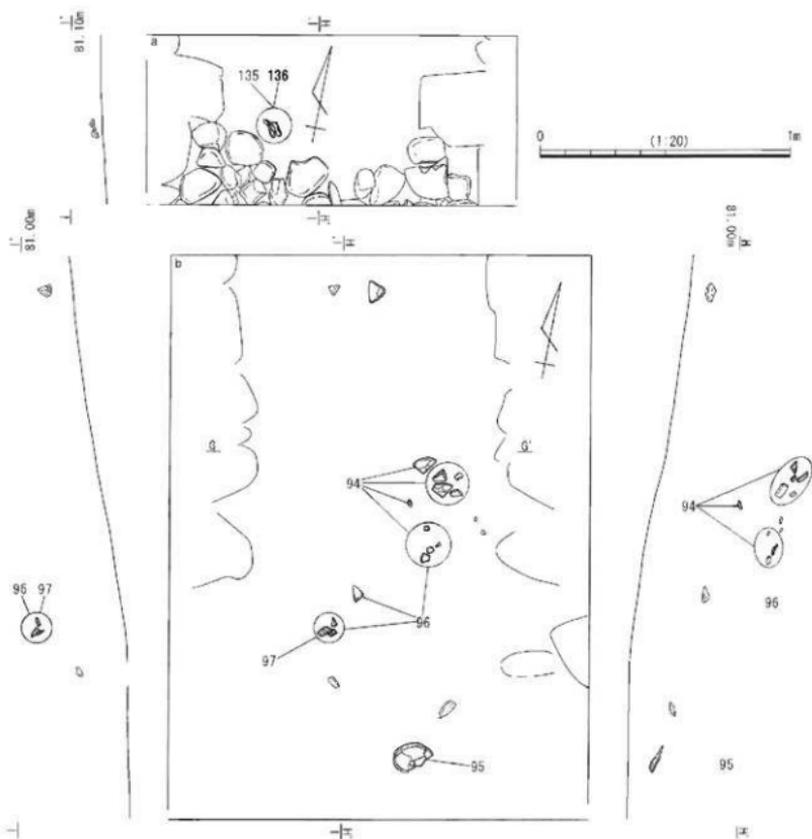
玉類 ガラス小玉は玄室の攪乱土中より26点(101~126)出土しており、色調は黄緑色1点(101)、紺色透明25点(102~126)である。101は直径7mmに復元でき、高さは5mmをはかる。紺色のものは直径5mm前後(102~122)と3mm前後のもの(123~126)に分類できる。高さは前者が3mm前後、後者が2mm前後である。

鉄製品 127の断面は三日月形であり、内側に向かって彎曲する。その形状から倒卵形の刀装具の破片と考える。おそらく鋼あるいは頭椎大刀の切羽の可能性が考えられる。128は、板状の幅が広い破片で



第67図 大屋敷C19号墳土除去後地形測量図





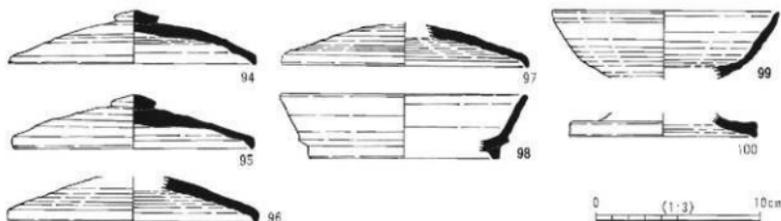
第69図 大屋敷C19号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図

鉄釘は原位置を保持した状態で出土した2点(135・136)と、玄室攪乱土より1点(134)が出土している。3点ともに釘身の中央でL字形に曲がっている。釘頭はT字形である。復元残存長約9~11cm、頭幅1.2~1.4cm、釘身断面は方形で、一辺8~9mmをはかる。135の釘身には木質が残存しており、木目は釘身に直交する。鉄釘の出土からC19号墳には釘で固定された木棺が少なくとも1棺は納められていたことが判明する。

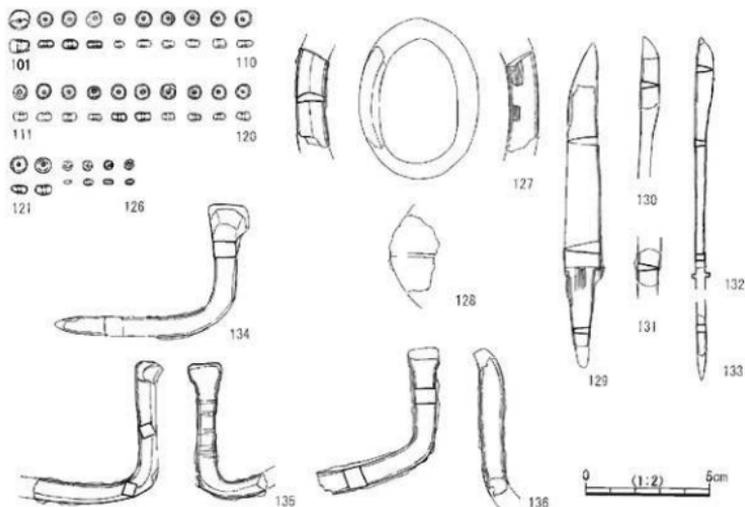
#### ⑥小結

大屋敷C19号墳は周溝南東側がC20号墳の周溝により破壊されているため、C20号墳の築造以前には構築されていたことは明らかである。

大屋敷C19号墳は閉塞石の下位より出土した須恵器摘壺は遠江V期前半であり、後述する大屋敷C20号墳と同時期であることから、遠江V期前半に造葬が行われた可能性が高い。その他の出土遺物から考えると、刀装具と推測する遺物が出土しており、推測どおり鉄製頸椎大刀の切羽であるとすれば、7世



第70図 大屋敷C19号墳横穴式石室出土土器実測図

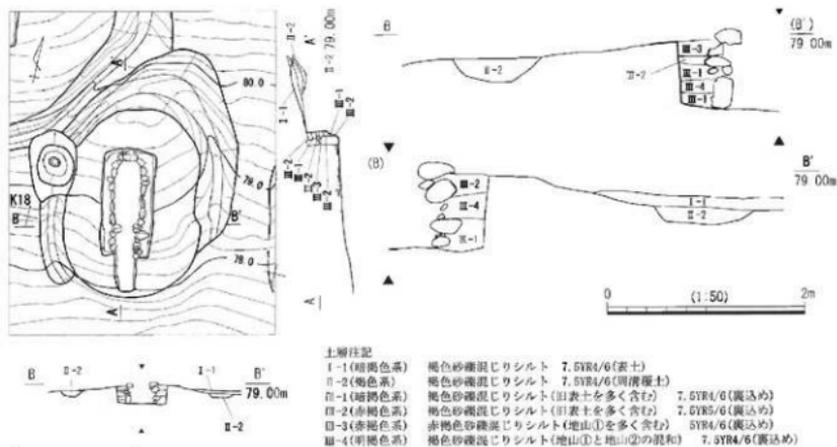


第71図 大屋敷C19号墳横穴式石室出土土器・鉄製品実測図

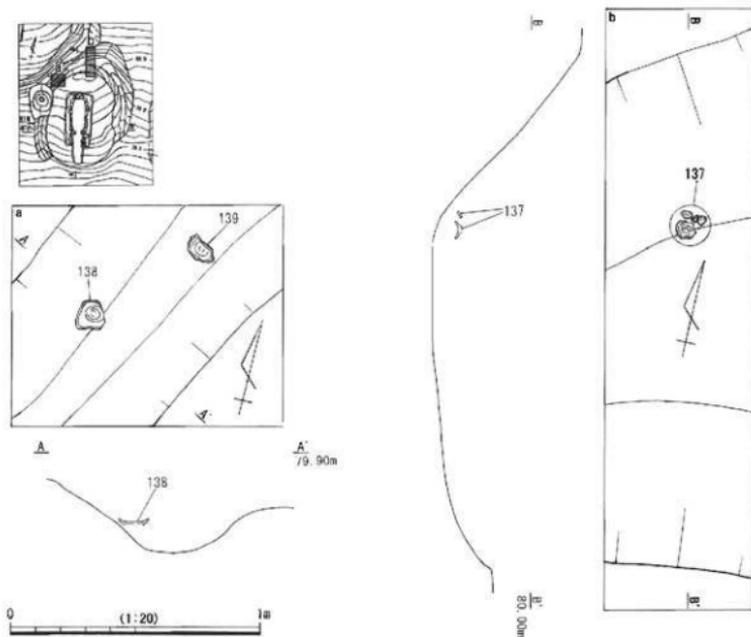
紀前半に遡る可能性がある。したがって、C19号墳は、少なくとも7世紀後半には築造されていた可能性が高く、7世紀前半に遡る可能性が高い。また、追葬に関しては、8世紀前半に少なくとも1回行われた可能性が高い。

また、C19号墳は今回調査した42基の古墳の中で、墳丘、石室ともに最大規模を誇り、副葬されたと考えられる遺物も唯一刀装具が出土し、鉄鍬、刀子、黄緑色と紺色の2色のガラス小玉を有するなど、大屋敷C古墳群の中で、階層的に上位に位置づけることができる。

さらに、遠江では稀少な鉄釘が出土したことで、釘で固定され運搬可能な木棺が採用されていたことが判明した。



第72回 大屋敷C20号墳頂丘測量図



## (7) C20号墳

## ①調査前の状況

調査前においては、全く古墳の存在を確認することはできなかった。重機による表土除去段階に、横穴式石室の天井石が露出したことにより、古墳であることが判明した。

古墳は、J18、K18グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第72～74図, 図版32・33, 125)

盛土は既に流出しており、確認できない。

周溝は横穴式石室に沿って掘削され、南側は流出している。現状での平面形はC字形である。周溝の規模は北側で最大幅2.8m、深さ0.4m、東側で幅1.5m、深さ0.2m、西側で幅1.0m、深さ0.2mをはかる。

C20号墳の墳形は南北にやや長い円墳で、規模は周溝内側で南北7.5m、東西5.0mをはかる。古墳の見かけ上での高さは、墳丘南側の標高が77.8m前後、北側の標高が79.8m前後であることから南から見て2.0mである。

また、周溝北側から北西側で、底部より0.1m浮いた状態で須恵器摘蓋(137)1点、有台杯2点(138・139)が出土した(第74図)。このほか増と推測する底部破片が1点(140)出土した。摘蓋(137)は大型の擬宝珠捺みを有し、ハ字形に開いた後、口縁端部を垂直に垂下させるもので、口縁端部は尖らされる。138は底部が高台よりも突出するものである。139は底部より内側に入るものである。140は底部に「一」のヘラ記号が描かれている。これらの須恵器は遠江V期前半に位置づけることが可能であり、8世紀前半に位置づけることができる。しかし、周溝底面より浮いた状態で出土していることから、C19号墳など斜面上部の古墳から流れ込んだ可能性もあり、C20号墳に直接伴うものか不明である。

なお、C19号墳との関係は、C19号墳の周溝南東側を破壊して、C20号墳の周溝が掘削されていることから19号墳よりは新しいことが判明する。

## ③埋葬施設(第75～77図, 第12表, 図版32～34)

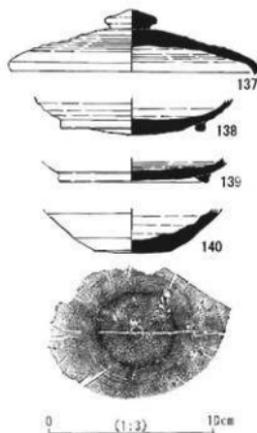
埋葬施設は古墳の中央に築造された、ほぼ真南に向かって開口する単室系擬兩袖式横穴式石室である。

**天井石** 原位置を保持する天井石はない。崩落した天井石は奥壁から玄門までの間に4石確認することができ、幅0.5～0.6m、長さ0.3～0.45mをはかる板状の角礫が用いられている。この4石の長さを足すと1.45mであり、玄室の半分程度の長さしかないので、これ以外の天井石は確認できなかったかあるいは斜面下部に流出した可能性が高い。最も南側の天井石が玄門付近で確認できることから、本来は少なくとも玄室には天井が架橋されていた蓋然性が高い。

**玄室** 玄室の平面形は玄室中央の幅がやや広い胴張形である。

奥壁は2段積みであり、下段は大型の板状角礫を1枚用いて鏡石としており、2段目も1段目よりもやや小型の板状の角礫を1

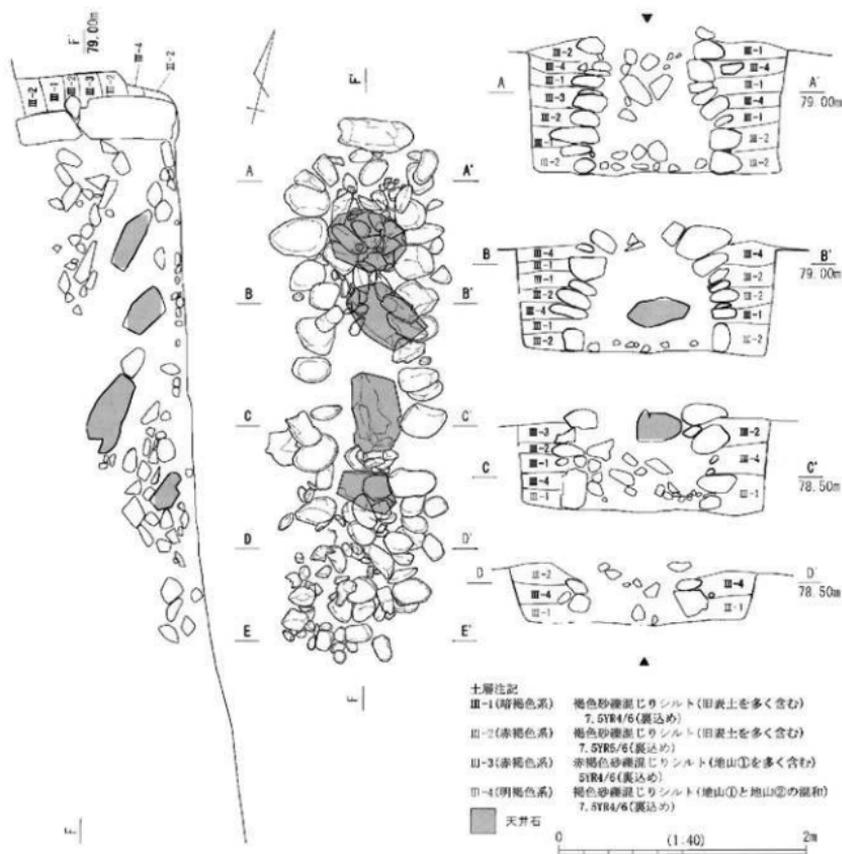
枚用いている。奥壁2段目は重機掘削により移動してしまったが、垂直ではなく、やや玄室側に内傾しており、側壁に持たれかけられていた可能性が高い。また、下段の奥壁の上には凹線が確認でき、2段目を内傾させた状態で固定



第74図 大塚敷C20号墳周溝出土土器実測図

第12表 大塚敷C20号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-13° 18' -W	
石室全長	3.85m	
玄室長	2.50m	玄室最大幅 1.05m
玄室奥壁幅	0.60m	玄室玄門側幅0.80m
羨道長	1.35m	羨道玄門側幅0.80m
羨道玄門側幅	0.80m	羨道最大幅 0.84m



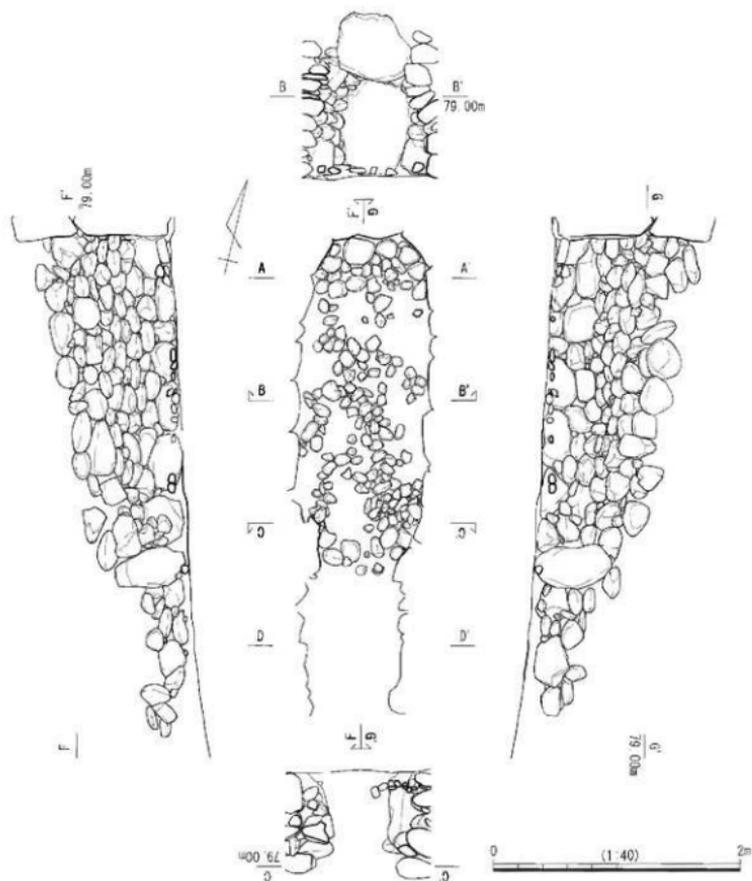
第75図 大屋敷C20号墳横穴式石室検出状況図

するための掘り積みであると考え。

側壁の下段は奥壁を挟み込むように構築され、最大で9段、約1.2m残存している。上段は奥壁の内側に当てるように積載されており、奥壁2段目は側壁に持たれかけられていた可能性が高い。側壁の基礎石は長手を内側に向けている。2段目以上は一部に長手積みのものが確認できるが、小口積みするものが大部分である。側壁の目地は各段がほぼ目地が通るように積載されているが、玄門に向かって下がる傾向にある。側壁の5段目が奥壁の下段上部と対応している。

側壁の持ち送りの角度は15~20度であり、最も残存状況の良い図中B-B'断面で最上部の側壁間の幅は0.5mをはかる。A-A'断面では幅0.7mであり、検出した天井石ではやや短い。

玄門は柱状の角礫を用いて立柱石としており、この立柱石は側壁より0.1m突出する。立柱石は玄室側壁4段目に対応しており、奥壁下段よりは1段低い。

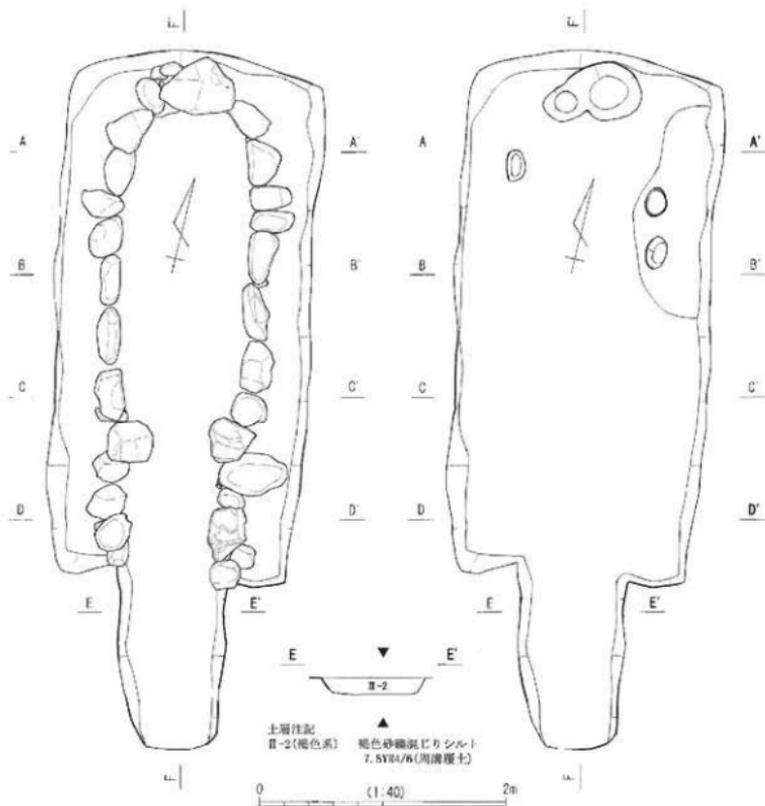


第76図 大塚敷C20号墳横穴式石室実測図

**羨道** 羨道は右側壁側基底石で4石分、左側壁で3石分の長さで構築されている。羨道の平面形は中央の幅がやや広い胴張形であり、玄室玄門側幅と羨道幅はほぼ等しい。左側壁の基底石に角礫を用いて平手積みする以外は小口積みしている。羨道と玄室の格段はほぼ水平であり、立柱石を挟んでほぼ同時に積載された可能性が高い。

**敷石** 床面は玄門付近が攪乱され、玄室内も空白が目立つものの、敷石は玄室全体に敷設されている。使用された石材は、10cm程度の小礫が主で、奥壁側に20cm前後の石材が敷設されている。羨道部分には敷石は確認できない。

**基底石** 基底石は河原石を主に用いて平手を内側に向けており、中央よりやや奥壁側よりのものが小口を内側に向けていることから、この部分で石材の長さを調節したと想定できる。したがって、基底石は



第77図 大塚遺C20号墳横穴式石室基底石および墓壇実測図

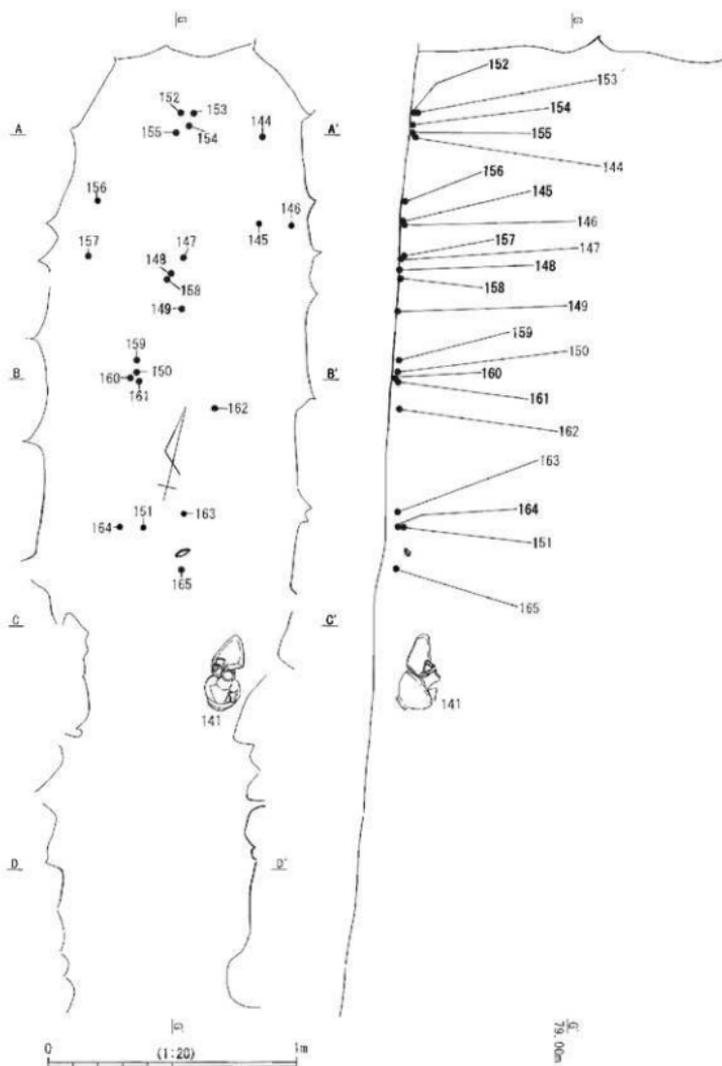
奥壁側、玄門側から同時に進められ、中央付近で石材を調整した可能性が高い。

**使用石材** 側壁に使用された石材は、玄室・羨道ともに主に円礫である。玄室・羨道ともに基底石は長手を内側に向けている。2段目以上は長手積みが一部で確認できるが小口積みが主体である。

**墓壇・墓道** 墓壇は地山を標高78.2m付近まで掘削しており、現地表面から1.4m掘り込まれている。墓壇平面形は長方形であり、幅の狭い墓道へと続く。墓壇規模は墓壇長4.35m、幅2.1mをはかる。墓壇と基底石との関係は、基底石は墓壇の中央に設置されており、偏りは確認できない。立柱石は土坑を掘削せず設置され、奥壁は小土坑を掘削し据えている。

#### ④遺物の出土状況(第78図, 図版33)

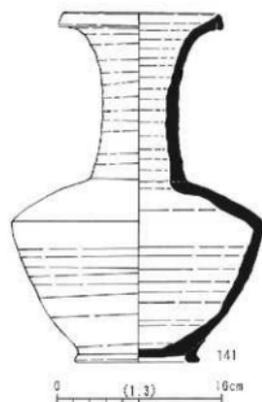
玄室内敷石上から全体に散らばった状態でガラス丸玉22点(144~165)が出土し、また玄門左側に須恵器付付長頸壺が立てかけられるように正位で出土した。また、石室覆土を洗浄したところガラス丸玉2点(142・143)が出土した。



第78図 大塚敷C20号墳横穴式石室遺物出土状況図

⑤出土遺物(第79・80図, 図版124・125)

須恵器台付長頸壺1点(141)とガラス丸玉24点(142~165)が出土した。



第79図 大塚遺跡C20号墳横穴式石室出土土器実測図

須恵器 台付長頸壺(141)は高台を有し、肩部に明瞭な稜線を有するもので、口縁部は頸部から逆八字形に開き、口縁端部は斜め下方に傾斜する。口径9.3cm、器高21.6cm、胴部最大径15.1cm、高台径7.5cmをはかる。

玉類 ガラス丸玉は、すべて紺色であり、直径約12~14mm、高さ9~11mm、孔径2~3.5mm、平均重量2gをはかる。ガラス丸玉には、気泡が目立ち、螺旋状に気泡が動いた様子を窺うことができ、製作技法は巻きつけによるものと考えられる。

#### ⑥小結

C20号墳はC19号墳の周溝の一部を破壊しており、C19号墳よりも新しく、築造した集団が何らかの関係を有していると推測する。また、玄室内より出土した須恵器台付長頸壺は、肩部が鋭角的であることから遠江V期前半に位置づけることができ、C20号墳は、8世紀前半に築造された可能性が高い。

#### (8) C21号墳

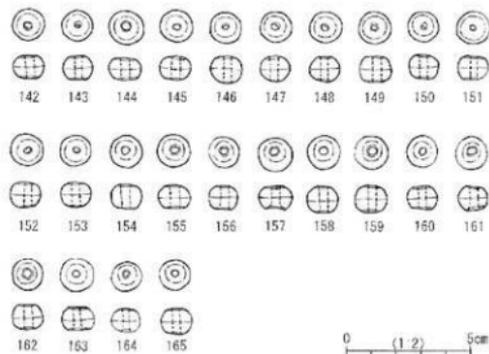
##### ①調査前の状況(第81図, 図版35)

調査前には周溝よりも0.4m前後の高まりが確認でき、その高まりは直径6m前後であった。その高まりの中央には大きな窪みがあり、周囲には角礫が散乱することから、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が存在することが明らかであった。

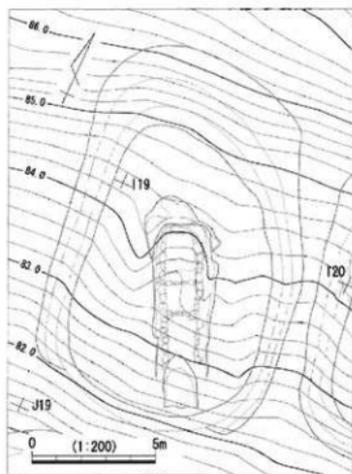
古墳はH18・19、I18・19グリッドに位置する。

##### ②墳丘・周溝(第82~84, 91図, 図版35・36, 126)

周溝はほぼ全周しており、南側は地山を削り出し周溝に代えている。周溝は南北にやや長い楕円形であり、規模は北側で幅3.5m、深さ0.7m、東側で幅1.2m、深



第80図 大塚遺跡C20号墳横穴式石室出土土器実測図



第81図 大塚遺跡C21号墳調査前測量図

さ0.5m、西側で幅1.2m、深さ0.4mをはかる。

周溝はC22号墳の周溝と近接するが、墳丘の西側は幅3.0m前後あるのに対し、東側は2.0m前後しかなく、C21号墳の周溝がC22号墳の周溝を避けるように掘削されていることから、C22号墳→C21号墳の順で築造された可能性が高い。

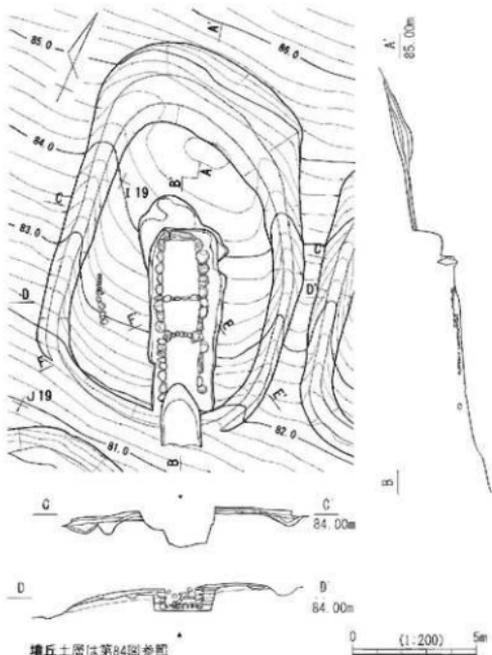
古墳は、やや不整形で、南北に長い円(楕円形)墳であり、根柢は周溝内側で、南北11.6m、東西7.5mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側の標高が81.6m前後、墳丘北側の標高が84.6m前後をはかることから、現状で南側から見て3mである。

墳丘には盛土が残存しており、石室裏込めから続く第一次墳丘である。第二次墳丘は確認できない。盛土は、旧表土と地山①・②を混和したもので、石室に向かって傾斜がつけられており、古墳の中央に向かって盛り上げられている。旧表土上には西側で2層、東側で2層確認することができ、したがって石室は少なくとも現状より上に2段は積載される可能性が高い。

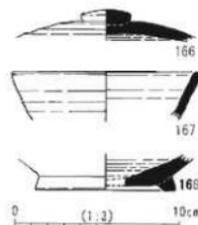
墳丘西側には外護列石あるいは墳丘内石列が設置されており、河原石の小口部分を接するように据えられている。長さは2.2mのみ残存しており、墳丘の西側肩部分よりも約1m内側に据えられている。盛土の最下層の中に取り込まれていることから墳丘内石列の可能性が高い。

なお、墳丘表土から須恵器摘蓋1点(166)、無台杯あるいは有台杯片1点(167)、台付長頸壺片1点(168)が出土している(第83図)。斜面上部の他の古墳から流れ込んだか、あるいは石室の掘削の際に巻き上げられた可能性がある。

摘蓋(166)は大型の縦宝珠柄を有する。167は無台杯の可能性が高く、底部から外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。台付長頸壺(168)は、底部の破片であり、底部は高台よりも垂下しない。高台径8.4cmをはかる。これらの須恵器は、細片であるため判断するのは難しく、遠江Ⅳ期後半～Ⅴ期前半の一時期に位置づけることができる。



第82図 大塚敷C21号墳墳丘測量図



第83図 大塚敷C21号墳墳丘出土土器実測図



③埋葬施設(第85～87図, 第13表, 図版36～38)

埋葬施設は古墳の中央に築造された、ほぼ真南に向かって開口する単室系擬両袖式横穴式石室である。

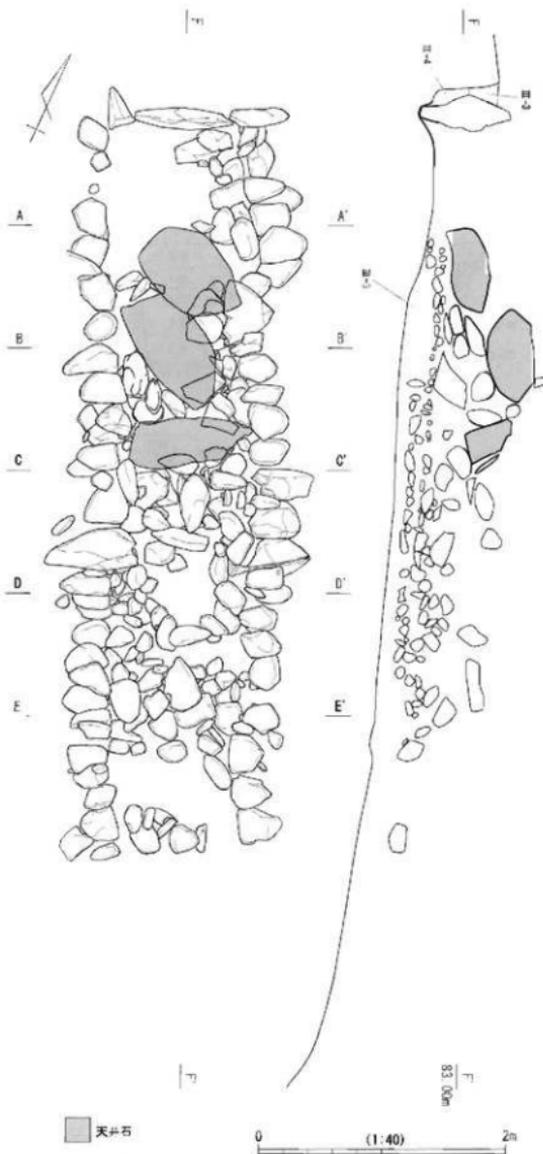
**天井石** 天井石は原位置を保持するものはない。崩落した天井石は奥壁から玄門にかけて3石確認することができ、幅0.9～1.0m、長さ0.4～0.6mをはかる角礫である。3石の長さを足すと1.5mであり、玄室を半分程度しか覆うことができないが、南側の天井石が玄門近くから出土していることを考慮すると、玄室には天井石が架橋されていた可能性が高い。炭遺に関しては、現状では天井石は確認することができない。

**玄室** 平面形は玄室中央の幅がわずかに広いが、玄門側と奥壁幅がほぼ等しく、中央がやや広い長方形である。

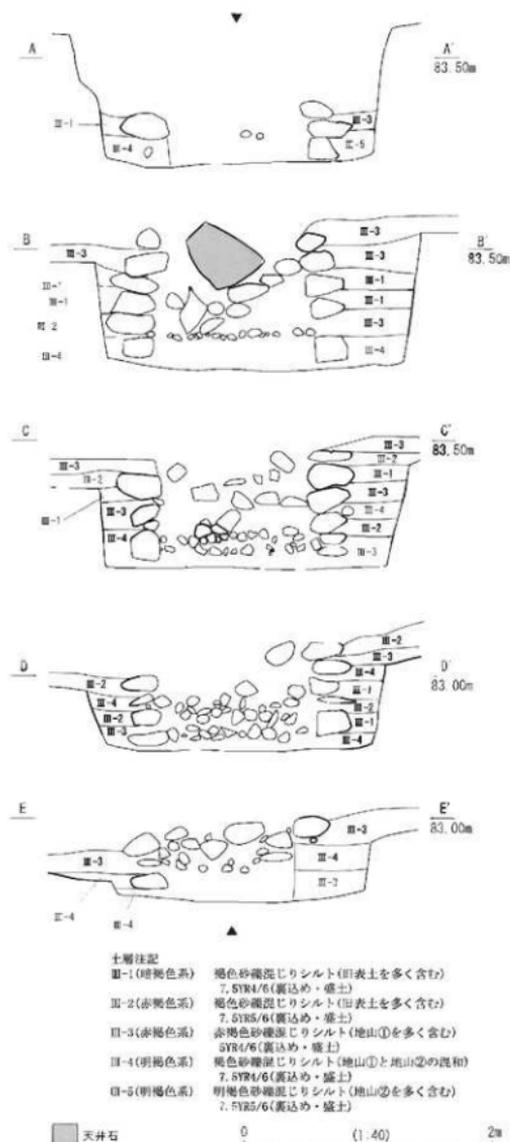
奥壁は大型の板状の角礫を用いて鏡石とし、右側壁との間に角礫を挟み込んでいる。2段目以降は攪乱されており、不明である。奥壁はほぼ垂直に樹立されている。

側壁は奥壁を挟み込むように積載され、最大で6段、高さ約0.9m残存している。玄室中央の傾斜角度は國中B-B'断面で約10度であり、わずかに持ち送りされる。

側壁は各段ごとに水平になるように積載されており、側壁5段目が奥壁鏡石の上部と対応する。側壁の基底石は長



第85図1 C21号墳横穴式石室検出状況図



第85図2 大塚数C21号墳横穴式石室検出状況図

手積みされており、二段目以上は長手積み、小口積みともに確認できる。

立柱石は、柱状の角礫を使用しており、玄室内側に向かって0.2m突出する。立柱石上部には1石ずつ小さな角礫が積載されており、少なくとも天井石との間に1石ははめ込まれていたことがわかる。

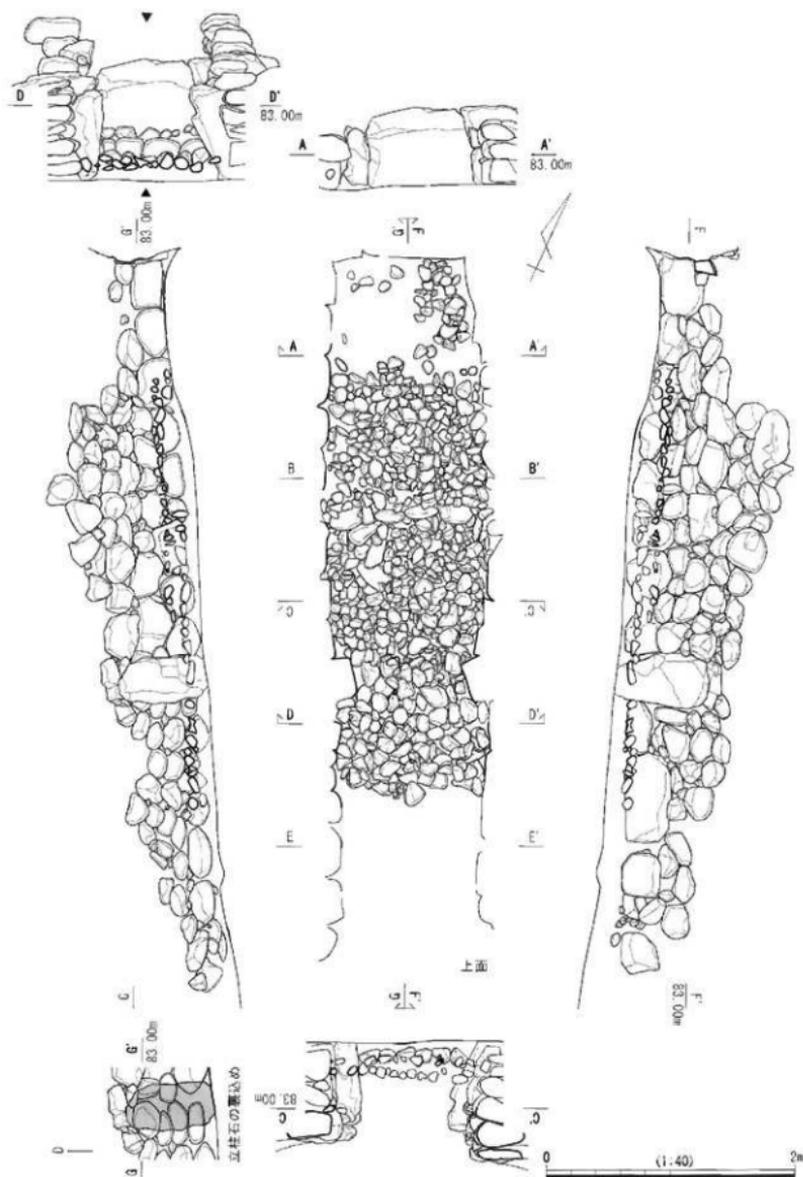
立柱石の裏側を調査したところ、第86図1左下に図示したように玄室と羨道の側壁は直接噛み合わさっておらず、立柱石を挟んでそれぞれが積載されたことがわかる。

墳丘の中心は玄室の奥壁側から1m南付近である。

羨道 羨道は、基底石で右側壁側8石分、左側壁で4石分残存し、最大で5段残存している。基底石は長手積みが多く、2段目以上は小口積みが主体である。E-E'断面の立ち上がりはほぼ垂直であり、持ち送りは確認できない。D-D'断面で持ち送りは約10度である。

羨道は各段が水平になるように積載されている。また、玄室とはほぼ水平になるように積載されていることから、玄室と羨道はほぼ同時に1段ごとに積載された可能性が高い。

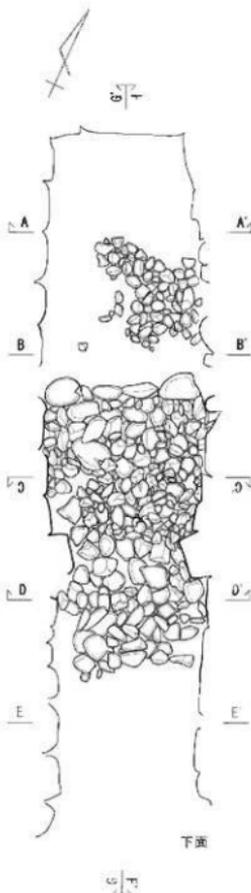
敷石 奥壁より約2mの位置に屍床仕切石が設置され、石室の主軸に直交して楕円形の円礫が小口を接するように4石が据えられている。この部分から南側には土砂を充填し敷石2面目を設置している。これは墓壕の段差を補正するため屍床仕切石を



第86図1 大塚南C21号墳横穴式石室実測図

第13表 大塚遺跡C21号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-24° 23' -W		
石室全長	5.45m		
玄室長	3.25m	玄室最大幅	1.30m
玄室奥壁幅	1.05m	玄室玄門側幅	1.10m
羨道長	2.20m	羨道玄門側幅	1.20m
羨道羨門側幅	1.40m		



設置し、土砂を充填することでその段差を解消し、その上に敷石を敷設したことから2面となった可能性が高い。

また、玄門部分も小礫を用いて区画している。

敷石は玄室奥壁側が攪乱により失われているが、玄室全面と羨道の玄室側0.7mの範囲まで敷設されている。なお、羨道側の敷石は1面である。

敷石に使用された石材は一部に20cm前後の円礫も確認できるが大部分が10cm前後の小礫である。羨道のほうがやや大きめの石材を用いる傾向にある。

**基底石** 基底石は玄室と羨道左側壁は角礫を用いて平手を内側に向けて設置しているが、羨道右側壁は河原石を用いて小口を内側に向けている。左右両側壁ともに屍床仕切石の部分に小型の石材を用いており、この部分で調整した可能性が高いことから、石材はまず奥壁と立柱石を据え、玄門側、奥壁側両方から設置した可能性が高い。

墓壁との関係は、基底石は墓壁に取りまり、墓壁右側壁側に偏って設置されている。

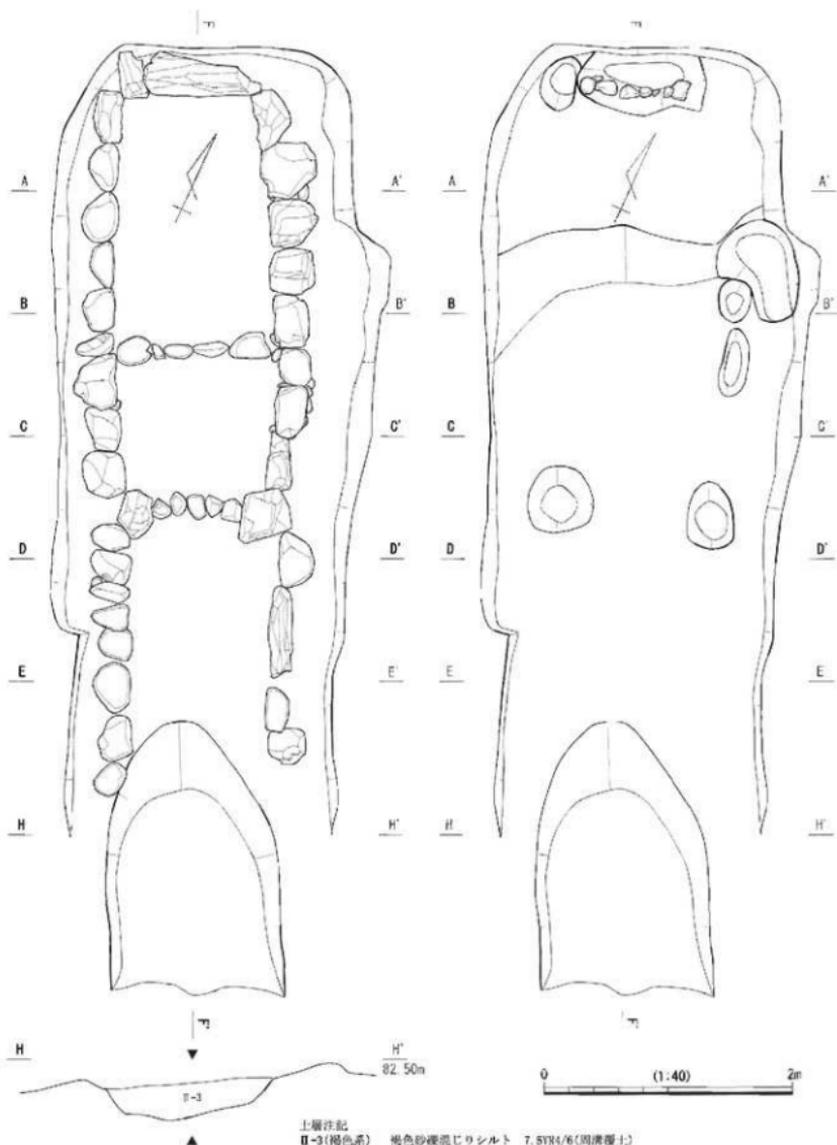
**使用石材** 側壁に使用された石材は、玄室の側壁には円礫とやや大型の角礫が用いられており、角礫は主に平手積み、円礫は主に小口積みされている。羨道には主に円礫が用いられる。

**墓壁** 墓壁は地山を標高82.8mまで掘削しており、奥壁側で現地表面から約1.4m掘り込んでいる。奥壁より1.7mの位置で左側壁に段差が確認でき、約0.3m東側に膨らんでいる。その部分の床面にも段差がつけられている。側壁の基底石にも段差が確認できること、他の古墳に関して墓壁床面はほぼ平坦になるように掘削されていることなどを考慮すると、C21号墳は掘削当初から、掘削途中で一回り大きく規模が変更されたか、あるいは墓壁の掘削位置がやや東側にずれ込んでいたため、途中で掘削方向を西側にずらした可能性の二者を考えることができる。

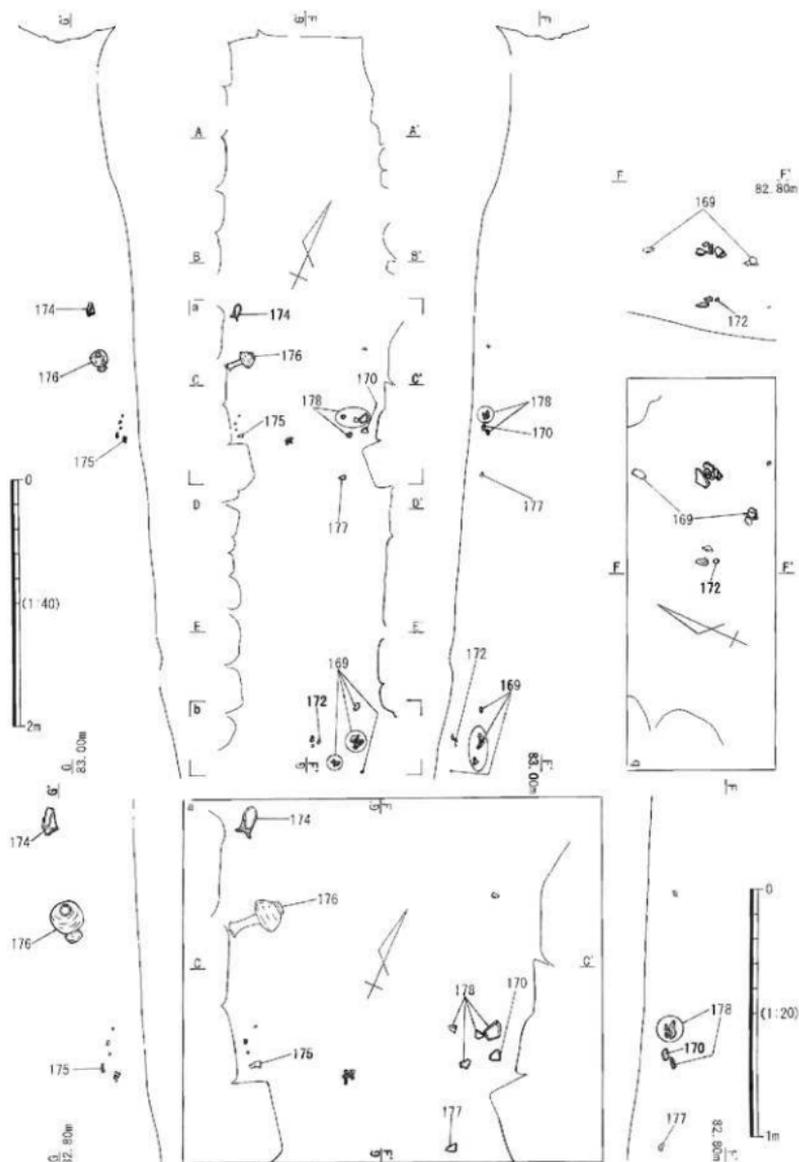
墓壁の平面形は羽子板形であり、右側壁側は奥壁より約5.0m前で肩がつけられ、左側壁側も同じ位置でわずかに段差を確認することができる。南側は開放している。南側は旧地表面をわずかに掘削しただけである。

墓壁の規模は、全長6.5m、最大幅2.5mをはかる。

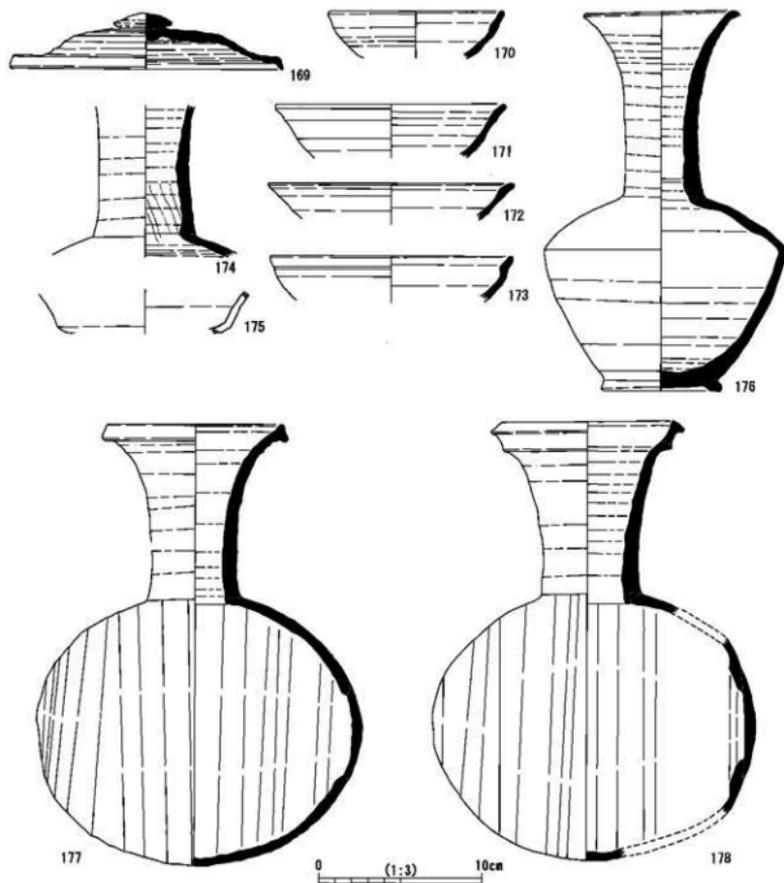
第86図2 大塚遺跡C21号墳横穴式石室実測図



第87図 大塚敷C21号墳横穴式石室基底石および墓横実測図



第88図 大屋敷C21号墳横穴式石室遺物出土状況図



第89図 大屋敷C21号墳横穴式石室出土土器実測図

④遺物の出土状況(第88図, 図版38)

玄室の右立柱石から玄室中央にかけて、右側壁に沿って敷石上より須恵器台付長頸壺(176・174)、杯身、土師器盤が出土し、左側壁側で敷石に混じって無蓋高杯(170)、フラスコ形瓶(177・178)が出土した。また、羨道入口部分から、床面よりやや浮いた状態で須恵器摘蓋(169)、無蓋高杯(172)が出土した。これらの須恵器は、玄室攪乱土より出土した須恵器と接合する。また、玄室攪乱土より無蓋高杯1点(173)が出土した。さらに玄室の攪乱土を水洗したところ鉄鏝の基片と推測する鉄片が出土した。

⑤出土遺物(第89・90図, 図版126・127)

須恵器摘蓋1点、台付長頸壺1点、長頸壺(壺瓶類頸部片)1点、無蓋高杯4点、フラスコ形瓶2点、土師器盤1点、鉄鏝1点が出土している。

須恵器 摘蓋(169)は、大型の擬宝珠橋みを有し、天井部は八字形に開き口縁部付近で一旦水平にした後、口縁端部をやや外方に向かって垂下させる。口径16.4cm、器高3.5cmをはかる。台付長頸壺(176)は、肩が張るもので、肩は鋭角である。口縁部は頸部から逆八字形に開いた後、口縁端部は外側に向かって橋み出されている。器高23.2cm、口径9.0cm、胴部最大径14.7cm、高台径7.3cmをはかる。長頸壺(174)は176とほぼ同様の造りを呈する。無蓋高杯3点(170~172)は碗形の胴部をもつもので、口縁端部は肥厚する。無蓋高杯(173)も碗形の胴部で、口縁直下で段を有し、そこからさらに外上方に向かって開くもので口縁端部は丸く仕上げられている。フラスコ形瓶はやや楕円形に近い胴部を有し、頸部は逆八字形に開いた後、口縁端部を肥厚させるもの(177)と二重口縁状にするもの(178)がある。ともに口径約10.5cm、器高26.8cm、胴部最大径約20.0cmをはかる。

土師器 土師器盤(175)は、水平の底部で、底から外上方に向かって立ち上がるものである。

鉄製品 鉄製品(179)は、鉄鍍の葉片の可能性が高く、先端は尖らされている。残存長3.6cm、幅4mm、厚さ4mmをはかる。

## ⑥小結

C21号墳は、玄室床面に段差が確認でき、同じ部分の墓壁にも段が確認できることから、一端墓壁奥壁から1.7mのところまで掘削された後、なんらかの理由で石室規模を大きくする必要が生じたため、墓壁の方向をやや西側に寄せ、墓壁北側を一回り大きくしている。

また、玄室の床面には屍床仕切石が配置されており、遠江では非常に稀有な施設を採用している。

C21号墳は出土した須恵器が、遠江Ⅳ期後半と、Ⅴ期前半に位置づけられることができることから、7世紀後半に築造され、8世紀前半に追葬が行われた可能性が高い。

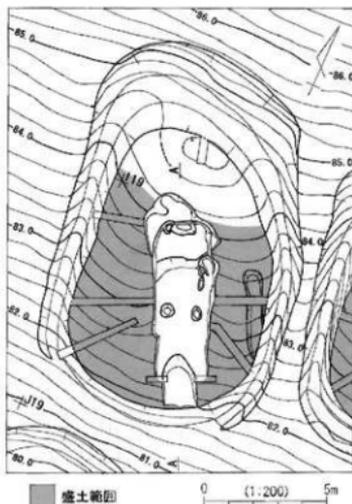
## (9) C22号墳

### ①調査前の状況(第92図、図版39)

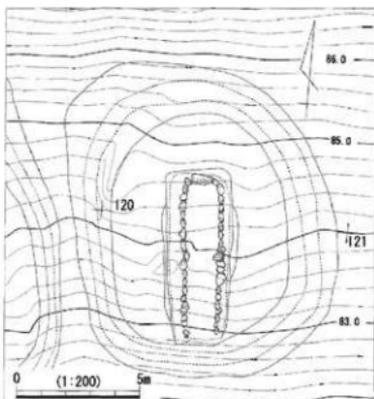
調査前の状況は、周囲よりも0.2m程度高い高まりが確認でき、その中央には窪みが確認できる。窪みの中には角礫が頭を覗かせており、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が所在することは明らかであっ



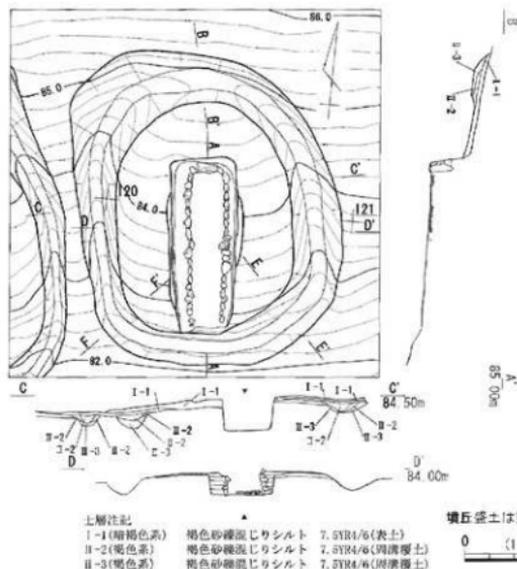
第90図 大屋敷C21号墳横穴式石室出土鉄製品実測図



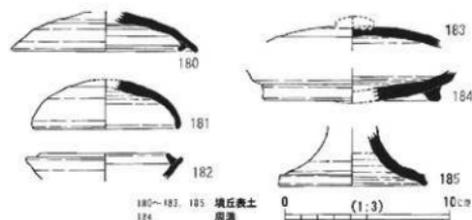
第91図 大屋敷C21号墳盛土除去後地形測量図



第92図 大屋敷C22号墳調査前測量図



第93図 大屋敷C22号墳墳丘測量図



第94図 大屋敷C22号墳墳丘出土土器実測図

た。この高まりから古墳の規模は6m程度と想定した。

古墳は、H19・20、I19・20グリッドに所在する。

## ②墳丘・周溝(第93~95, 103図, 図版39・131)

周溝はほぼ全周しており、墳丘南側は地山を削り出すことにより、周溝に代えている。周溝は楕円形に巡らされており、規模は北側で幅1.9m、深さ0.5m、東側で幅2.0m、深さ0.5m、西側で幅1.5m、深さ0.4mをはかる。南側は幅1.5m程度、深さ0.4mほど削り出している。

墳形は南北に長い円(楕円形)墳であり、規模は南北9.4m、東西7.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側が標高82.1m付近であり、墳丘北側が標高84.8m前後であることから、現状で南側から見て2.7mである。

墳丘盛土は古墳の中央から南側にかけて残存している。盛土は石室裏込めから続く第一次墳丘であり、盛土は地山①を多く含む混和上で旧表土上に盛り

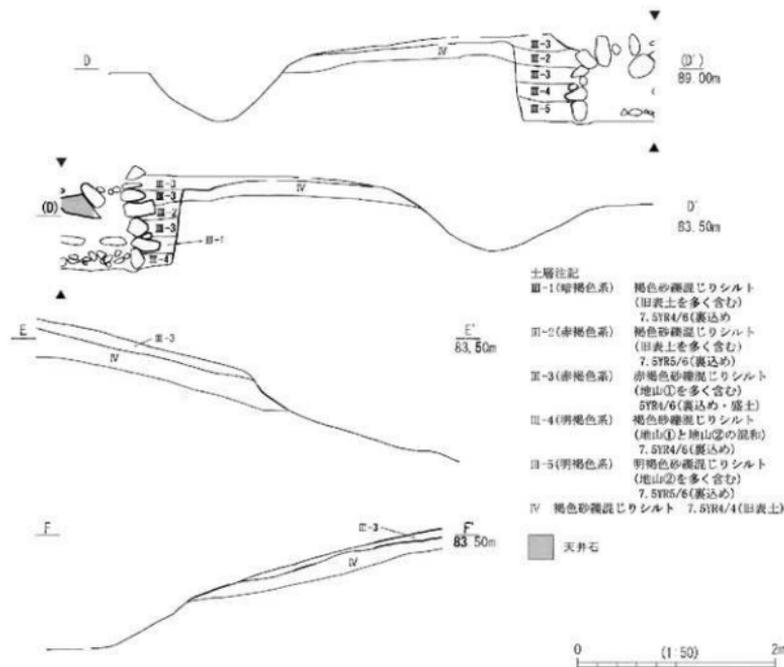
り上げられており、墳丘の中央に向かって高められている。

なお、墳丘の表土から須恵器杯蓋1点、杯身1点、返蓋か摘蓋1点、返蓋1点、高杯1点が出土した。埋葬施設の盗掘坑より巻き上げられたか、あるいは斜面上部の古墳より流れ込んだ可能性がある。また、周溝より有台杯1点が出土した。杯蓋(181)は半球形であり、口縁端部は丸く仕上げられている。杯身(182)は、短く内傾する立ち上がり有するもので、口径7.6cmをはかる。返蓋(180)は、返りが受け部よりも内側に入るものであり、口径11.0cmをはかる。183は返蓋または摘蓋片である。有台杯(184)は、底部が高台よりも突出するものである。高杯脚部(185)は、八字形に開いた後、端部をやや斜め外方に垂下させるものである。これらの須恵器は遠江IV期後半～遠江V期前半に位置づけることができる。

## ③埋葬施設(第96~98図, 第14表, 図版40~42)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された、南に向かって開口する複室系擬似両袖式石室である。

天井石 原位置を保持するものはない。崩落した天井石は奥壁から玄門立柱石までに4石確認すること



第95図 大屋敷C22号墳横丘盛土土層図

第14表 大屋敷C22号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-5° 20' -W	
石室全長	6.30m	
玄室長	2.80m	玄室最大幅 1.35m
玄室奥壁幅	1.20m	玄室玄門側幅 1.20m
羨道長	2.30m	羨道玄門側幅 1.15m
羨道羨門側幅	1.20m	
前庭長	1.20m	前庭羨門側幅 1.15m
前庭入口側幅	1.20m	

ができる。大きさは幅0.8～0.9m、長さ0.35～0.5mをはかるもので、板状の角礫が用いられている。4石の長さを足すと、1.6mであり、天井石は玄門立柱石までは架構された可能性が高い。羨道と前庭には天井石は崩落しておらず、架構されていたか不明である。

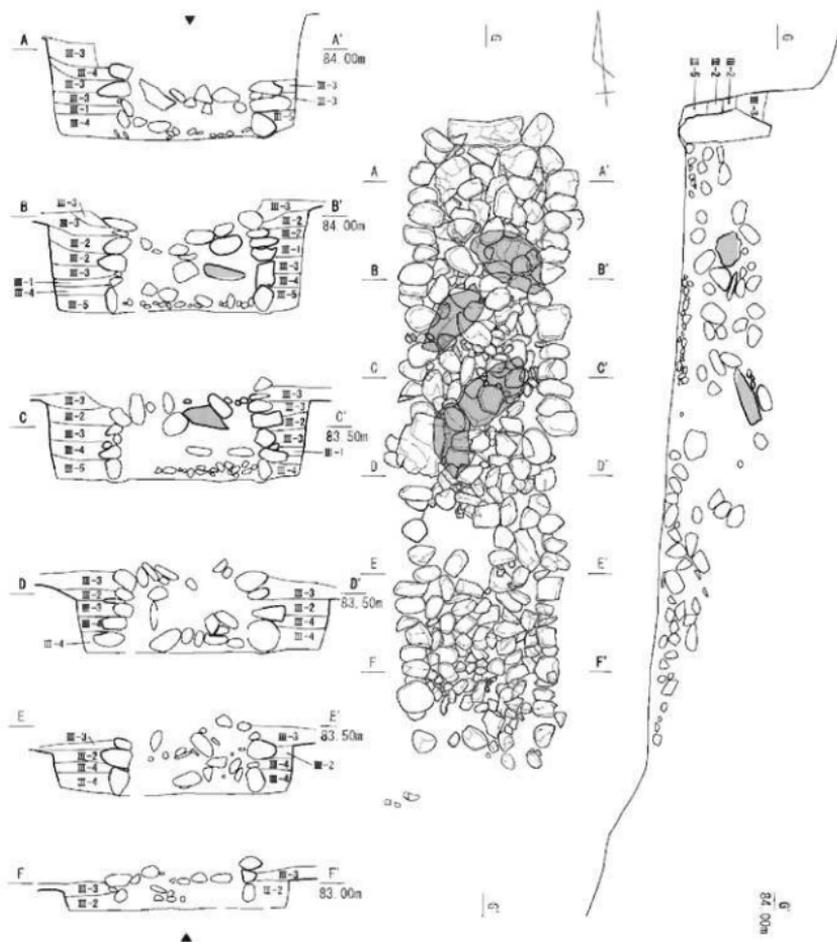
**玄室** 平面形は中央幅がやや広く、奥壁側、玄門側幅ともにほぼ同一の緩やかな割張形である。

奥壁は、大型の板状の角礫を用いて鏡石としている。側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、最大で6段、高さ1.1m残存している。

側壁の基底石は長手を内側に付けており、2段目以降は一部に長手積みがあるが、大部分が小口積みである。側壁の各段は日地が通るように積載されている。側壁の5段目が鏡石の上部に対応する。羨道の持ち送りは、A-A'断面で約10度、B-B'断面で約10度、C-C'断面で約10度内傾する。

玄門立柱石は、側壁から0.1m突出しており、内傾して樹立されている。玄門立柱石の上部には礫が平積みされており、C21号墳と同様に天井石との間に少なくとも1石を挟んでいることが判明する。この立柱石上部の石材間の幅は0.8mである。

また、立柱石上部は側壁4段目に対応し、立柱石上の積載された石材は5段目と鏡石上部に対応する。羨道 平面形は玄門側と羨門側の幅がほぼ等しい長方形である。羨道基底石にはやや大きい円礫が用い



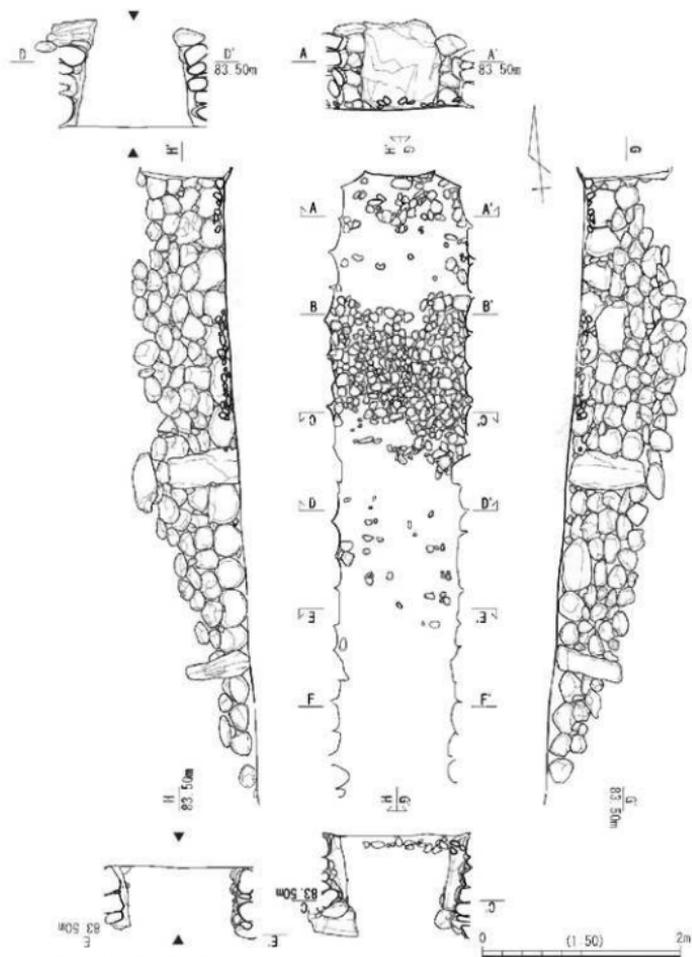
## 土層注記

- I-1 (暗褐色系) 褐色砂礫混じリシルト (巨表土を多く含む) 7.5YR4/4 (裏込め)  
 I-2 (赤褐色系) 褐色砂礫混じリシルト (巨表土を多く含む) 7.5YR5/6 (裏込め)  
 I-3 (暗褐色系) 赤褐色砂礫混じリシルト (地山①を多く含む) 5YR4/6 (裏込め・盛土)  
 I-4 (明褐色系) 褐色砂礫混じリシルト (地山②と地山③の混和) 7.5YR4/6 (裏込め)  
 I-5 (明褐色系) 明褐色砂礫混じリシルト (地山③を多く含む) 7.5YR5/6 (裏込め)

天井石

0 (1:50) 2m

第96図 大塚敷C22号墳横穴式石室検出状況図

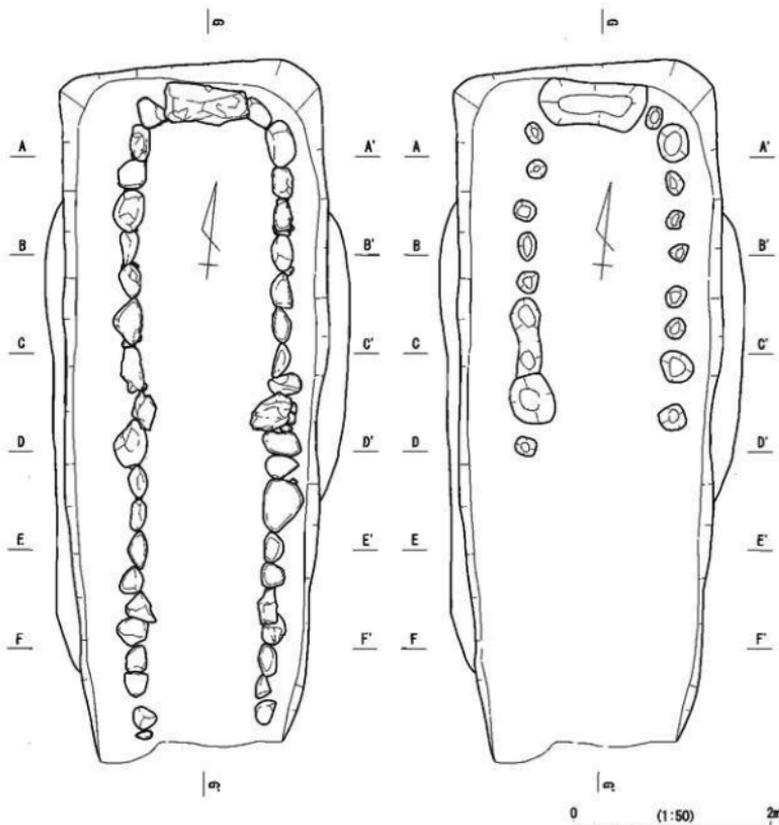


第97図 大塚遺C 22号墳横穴式石室実測図

られ、平手を内側に向けており、2段目以上は小口積みしている。羨道の持ち送りはD-D'断面で約15度、E-E'断面で約5度内傾する。

前庭 前庭は左右両側壁ともに4石分設置されており、最大で3段分残存している。平面形は、前庭入口幅がやや狭い逆台形である。基底石は平手積みされ、2段目以上は小口積みされている。前庭の持ち送りは看取できず、垂直に立ち上がる。

敷石 敷石は玄室奥壁側が攪乱されているが本来は玄室全面に敷設されていたと推測する。1面確認することができる。使用された石材は10cm前後の小礫である。



第98図 大屋敷C22号墳横穴式石室基底石および墓室実測図

**基底石** 基底石は角礫と円礫が用いられ、大部分が長手を内側に向けている。玄室は玄門立柱石の北側の石材のみが小口積みされており、この石材で長さを調整したと考えることから、奥壁側から石材が設置された可能性が高い。羨道は調整した痕跡は確認できず、どちらから設置されたか明瞭ではない。

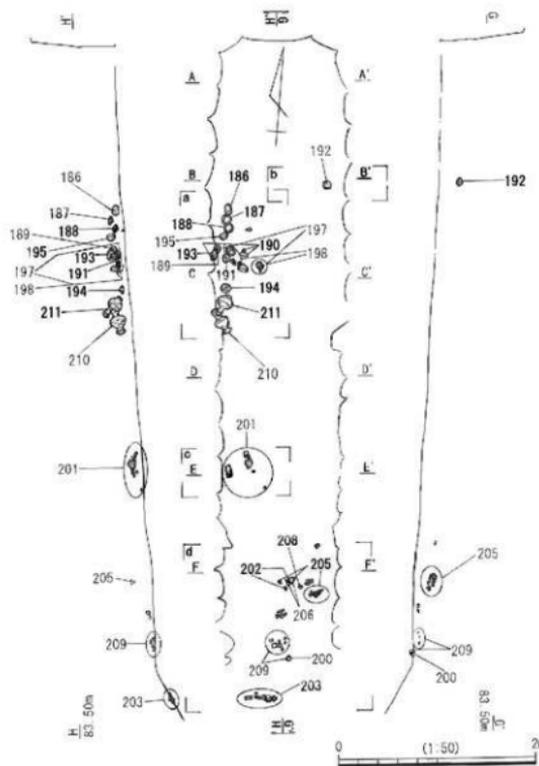
**墓壇・墓道** 墓壇は地山を標高83.1m付近まで掘削したもので、現地表面から1.3m掘り込まれている。墓壇の平面形は長方形であり、南側は開放している。墓道は確認できない。墓壇規模は、墓壇長7.1m以上、墓壇幅2.65mをはかる。

墓壇の底面には、玄室側の基底石と奥壁、立柱石を固定するための小土坑が掘削されている。

墓壇の両側壁上部は墓壇内部に向かって緩やかに傾斜しており、おそらく石材を設置する時の石材を引きずった痕跡か、あるいは裏込めに墓壇内に掻き込む際の痕跡と推測する。

④遺物の出土状況(第99・100図, 図版42)

遺物は玄室の右側壁側に、壁面に接するように脚付長頸壺2点(210・211)が斜めになった状態で、返



第99図 大屋敷C 22号墳横穴式石室遺物出土状況図

天井からハ字形に垂下した後、返りがつけられるもので、返りは受部よりも下に大きく突出する。上述の無台杯とセット関係にある。口径は6.4～6.7cm、受部径8.8～9.3cm、器高3.4～3.9cmをはかり、非常に規格性が高い。返蓋(193)は乳頭状の摘みを有し、丸みをもってハ字形に広がった後、返りが取り付けられるもので、返りは受部よりも突出しない。受部径10.8cm、器高3.7cmをはかる。返蓋(194)は大きな擬宝珠摘みを有し、ハ字形に開いた後、返りがつけられるもので、返りは受部よりも突出しない。口径(受部径)11.3cm、器高3.1cmをはかる。杯蓋(200)は半球形であり、口径11.8cmをはかる。返蓋(192)は、天井部にヘラ記号「-」が描かれる。有台杯(201)は、底部が高台よりも下がるもので、口縁部は底部から外上方へ向かって立ち上がり、口縁端部は摘み上げられる。口径14.0cm、器高4.5cmをはかる。底部にはヘラ記号「-」が描かれている。

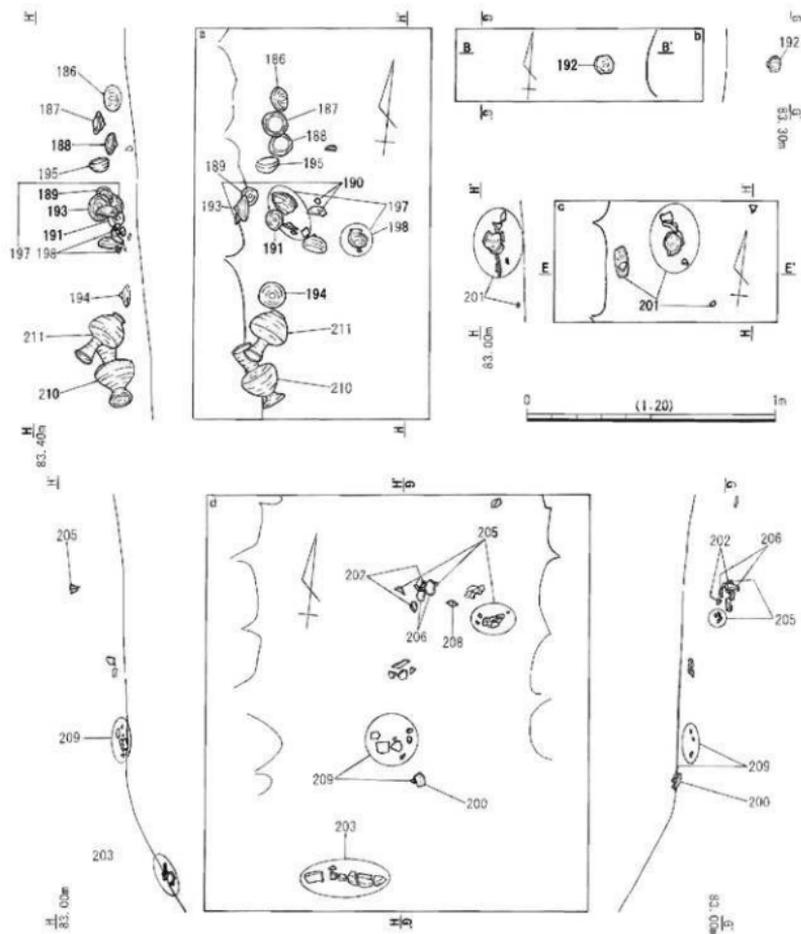
無蓋高杯は椀形の杯部を有するもので、202の口縁端部は丸く仕上げられ、203は口縁直下で段を有し、そこからさらに外上方へ向かって引き出される。口径15.4～16.4cmをはかる。204～206は高杯の脚部である。

207・208は平瓶あるいは長頸壺、フラスコ形瓶の口縁部破片である。口縁端部は、外側に折り曲げら

蓋9点(186～194)や無台杯5点(195～199)が片付けられ上を向けられたり下を向けられたりした状態で出土した。また、羨道右側壁側で有台杯1点(201)が出土し、前庭で杯蓋(200)、無蓋高杯2点(202・203)、高杯脚部(205・206)、長頸壺(209)が出土した。さらに玄室覆土を洗浄したところ、ガラス丸玉3点が出土した。

#### ⑤ 出土遺物(第101・102図, 図版128～131)

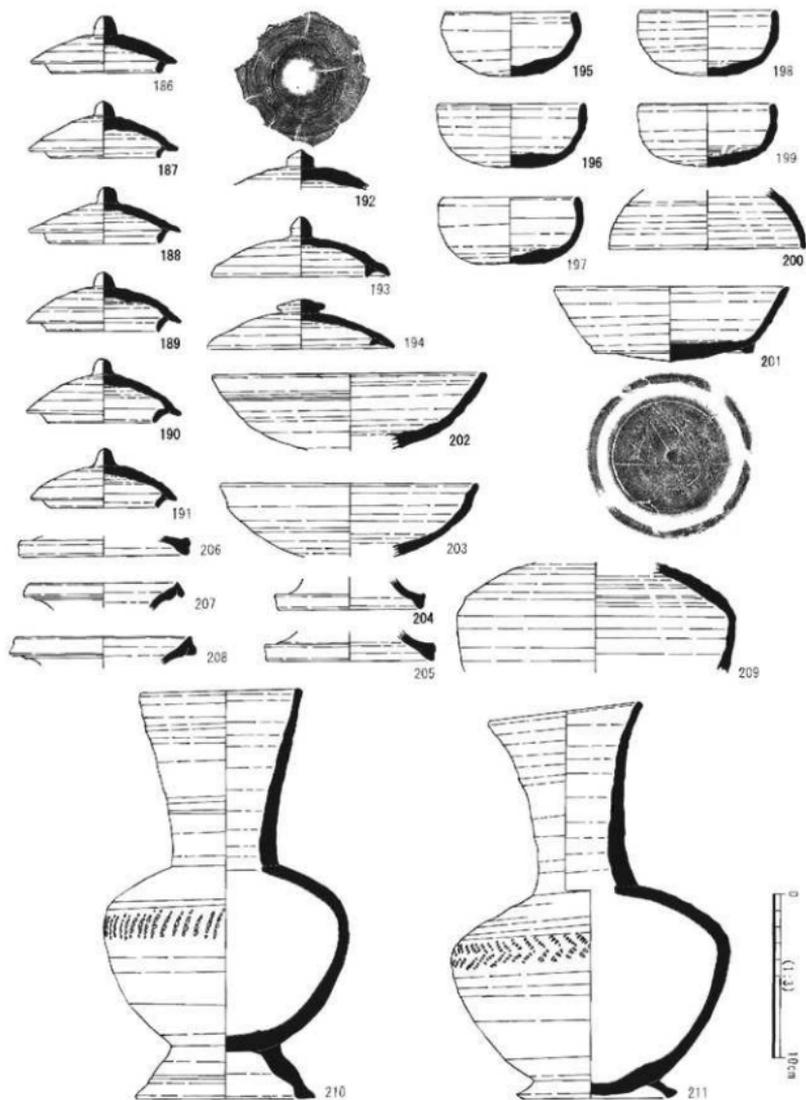
須恵器無台杯5点、返蓋9点、杯蓋1点、有台杯1点、脚付長頸壺2点、長頸壺胴部片1点、無蓋高杯3点以上、平瓶(長頸壺)口縁部2点、ガラス丸玉3点が出土した。須恵器 須恵器無台杯(195～199)は椀形であり、底部は丸みを帯び、口縁端部は丸く仕上げられる。底部は静止ヘラ削りされる。口径7.8～8.7cm、器高約4.0cmをはかり、非常に規格性が高い。返蓋(186～191)は乳頭状の摘みをもち、



第100図 大塚敷C22号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図

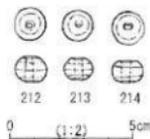
れ、外傾する斜面に仕上げられる。

脚付長頸壺は2点出土し、210の口縁部は逆ハ字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。肩は丸みを帯びており、肩に刺突文が施されている。胴部下半には回転ヘラ削りが施されている。脚部は、ハ字形に開いており、端部は外側に向かってつまみ出されている。器高25.0cm、口径9.5cm、胴部最大径14.8cm、脚部径10.8cm、脚高3.3cmをはかる。211の口縁部は頸部からハ字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。胴部は肩が張るが丸みを帯びている。肩には刺突羽状文が施されており、下半には回転ヘラ削りが施されている。脚部は短く、ハ字形に開くものである。器高23.8cm、口径9.1cm、胴

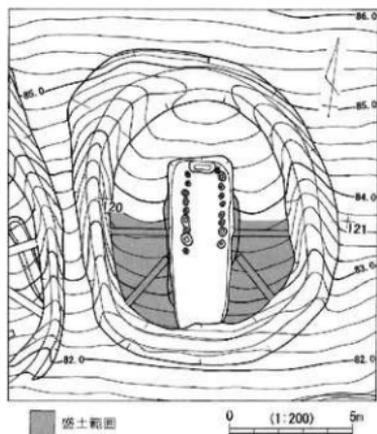


第101図 大塚遺C22号墳横穴式石室出土土器実測図

部最大径16.9cm、脚部径9.7cm、脚高0.8cmをはかる。長頸壺の胴部片(209)は、肩が張り、丸みを帯びている。玉類 ガラス丸玉は直径12～13mm、高さ9～10mm、孔径2～3.5mmであり、紺色を呈する。気泡が目立ち、螺旋状に動いた痕跡が確認できる。法量、色調、製作技法等C20号墳出土の丸玉と同様である。



第102図 大屋敷C22号墳  
横穴式石室出土玉類  
実測図



第103図 大屋敷C22号墳盛土除去後地形測量図

## ⑥小結

出土した須恵器は遠江Ⅳ期前半、Ⅳ期末葉、Ⅴ期前半に位置づけることができることから、7世紀前半に築造され、7世紀末葉と8世紀前半に追葬が行われた可能性が高い。また、C21号墳の周溝はC22号墳の周溝を避けて掘削されていることから、C22号墳→C21号墳の順で築造された可能性が高く、また近接して築造されることから何らかの繋がりがあったと考える。

さらに、C22号墳は、墳丘規模9.4mをはかり、石室規模も6mであり、大屋敷C古墳群の中では大型であることから、当古墳群では有力な古墳の一つであった可能性が高い。

## (10) C23号墳

### ①調査前の状況

調査前には全く高まりや窪みなどを確認することができなかったが、表土除去後、精査した段階で周溝を確認し、古墳であることを確認した。

古墳はG21・22、H21・22グリッドに所在する。

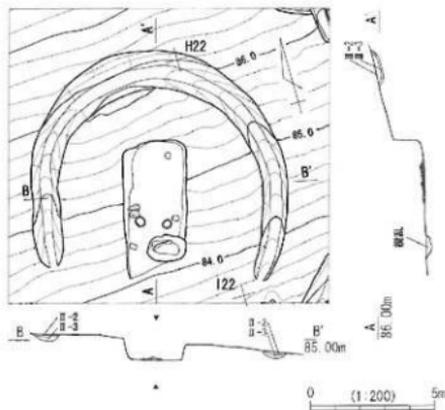
### ②墳丘・周溝(第104図、図版43)

盛土は流出しており、確認できない。

周溝に関して南側は流出して確認できないものの、横穴式石室に沿ってC字形に残存しており、本来は全周していたか、あるいは南側は削り出して周溝に代えていた可能性が高い。

周溝は、楕円形に巡らされており、規模は北側で幅1.5m、深さ0.3m、東側で幅1.0m、深さ0.2m、西側で幅1.1m、深さ0.25mをはかる。

古墳はやや南北に長い円(楕円形)墳であ



土層注記  
 II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.53E1/G(周溝覆土)  
 II-3(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.53E1/G(周溝覆土)

第104図 大屋敷C23号墳墳丘測量図

り、古墳の規模は周溝の内側で南北7.5m以上、東西8.3mをはかる。古墳の見かけ上の高さは墳丘南側が標高83.6m前後であり、北側が標高86.0m前後であることから、南側から見て現状で2.4mである。

なお、周溝や墳丘から遺物は出土していない。

#### ③埋葬施設(第105図, 第15表, 図版43)

埋葬施設は古墳の中央に築造された、南南西に向かって開口する横穴式石室である。墓壁の規模や立柱石を設置するためと推測する土坑が2箇所

第15表 大塚敷C23号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-15°48'-W		
石室全長	3.60m以上		
玄室長	2.4m前後	玄室最大幅	1.40m以上

で確認できることからすると、単室系あるいは複室系擬似両袖式石室であった可能性が高い。

**天井石** 天井石は全く確認できず、架構範囲は不明である。

**石室** 石室は大部分が失われており、右側壁の一部が残存するのみであった。

墓壁奥壁より3.4mの位置に2箇所土坑が掘削されており、またこの土坑が残存する右側壁のすぐ南に位置することからもこの位置に立柱石が設置されていた可能性が高い。この土坑と後述する敷石の範囲から考えると、玄室長は2.4m前後と推測する。

玄室平面形は、残存する右側壁の2石が立柱石に向かって幅を狭めることから、胴張形であった可能性が高い。残存する側壁は玄室、羨道ともに角礫を用いて小口積みしている。玄室と羨道の基底石はほぼ同じ高さであることから、ほぼ水平に積載されていた可能性が高い。

**敷石** 敷石は奥壁近くのみ残存しており、東西1.5m、南北1.6mをはかり、一部2面確認することができる。使用された礫は、10cm以下の小礫である。

**使用石材** 残存する石材は角礫であり、攪乱坑内からは角礫と円礫が両方出土したが、やや角礫のほうが多かったため、石室は主に角礫を用いて築造された可能性が高い。

**墓壁** 墓壁は地山を標高84m付近まで掘削しており、現地表面より約1.2m掘り込まれている。墓壁は南側が流出しているが、長方形である可能性が高い。墓壁長5.6m以上、幅2.6mをはかる。

奥壁を据えるための土坑は確認できない。一方、立柱石を設置するための土坑が2箇所確認できる。

#### ④出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑤小結

C23号墳は出土遺物がないことから、築造時期、追葬などに関して不明である。

また、C23号墳は残存状況が良好ではないものの、墓壁規模は幅2.6mで、敷石の範囲からすると玄室幅1.5m程度であり、大塚敷C古墳群の他の古墳と比較すると、C21・22号墳とほぼ同規模と考えることができ、横穴式石室の全長は6m程度であった可能性が高い。

### (11) C24号墳

#### ①調査前の状況

調査前には古墳の存在を認識できるような高まりや窪みは全く確認することはできず、重機による表土除去後、石材が集中することで確認することができた。

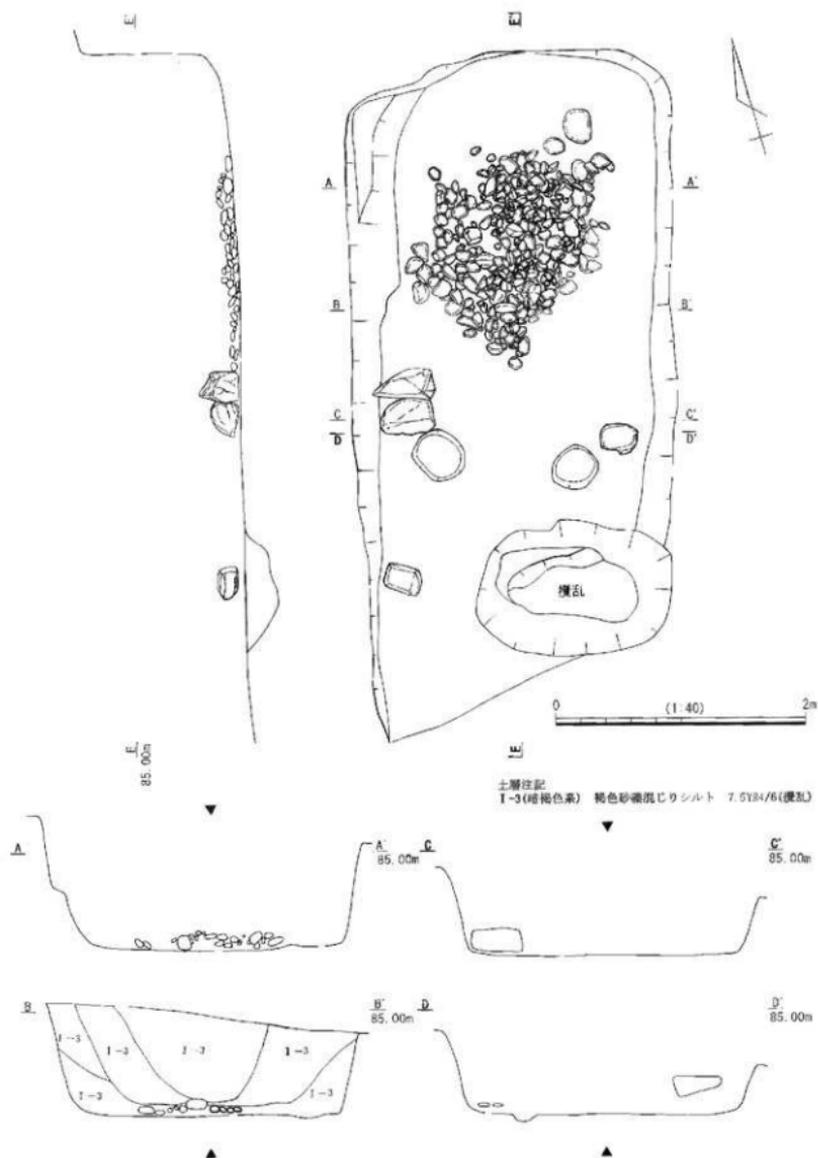
古墳はG22・H22グリッドに位置する。

#### ②墳丘・周溝(第106図, 図版44)

墳丘盛土は流出しており、確認できない。

周溝は全周しており、南北にやや長い楕円形である。周溝規模は北側で幅0.4m、深さ0.1m、東側で幅0.5m、深さ0.1m、西側で幅0.5m、深さ0.1m、南側で幅0.7m、深さ0.1mをはかる。

墳形は南北にやや長い円(楕円形)墳であり、周溝の内側で南北3.8m、東西2.9mをはかる。墳丘の見



第105図 大屋敷C23号墳横穴式石室実測図および土層図

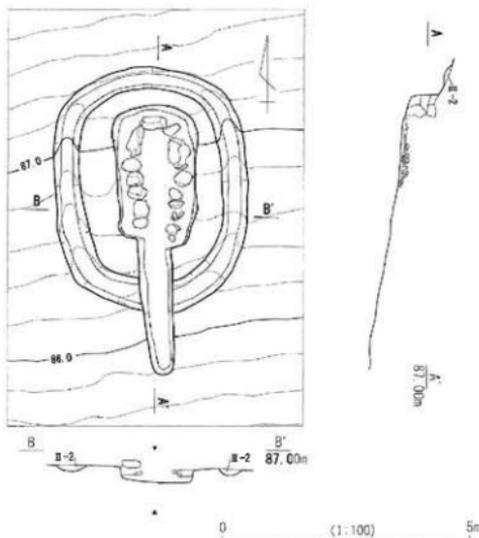
かけ上の高さは、墳丘南側で標高86.2m前後、北側で87.3m前後をはかることから、南側から見て現状で1.1mである。

③埋葬施設(第107～109図, 第16表, 図版43～45)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された、ほぼ真南に向かって開口する単室系擬似円袖式横穴式石室である。天井石 天井石は原位置を保持するものはない。崩落した天井石はB-B'断面近くで2石確認することができ、幅0.5m、長さ0.3～0.4mである。玄室には天井石が架構されていた可能性が高い。

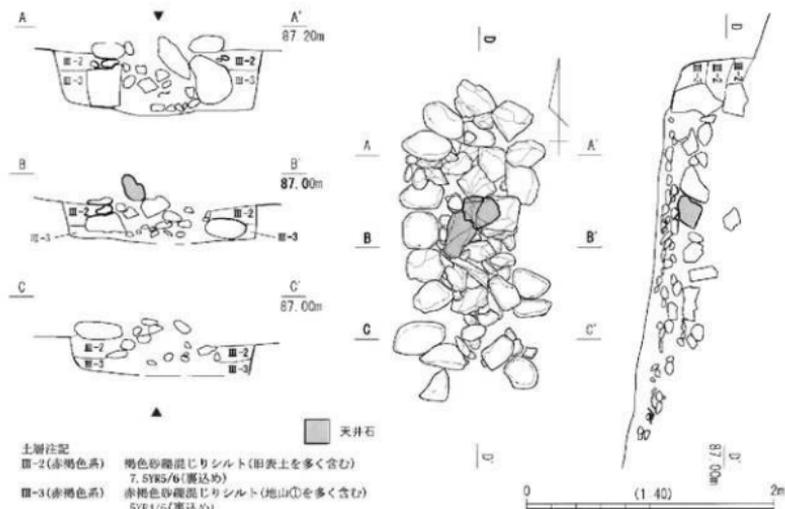
玄室 玄室平面形は玄室中央の幅がやや広い、胴張形である。

奥壁は、2段で構成されており、1段目がやや大きい角礫を用いて鏡石としており、2段目は板石状の角礫を平積みしている。奥壁はほぼ直立する。



土層注記  
II-2(赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR5/6(薄灰褐色土)

第106図 大屋敷C24号墳丘測量図



土層注記  
II-2(赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(田表土を多く含む)  
7.5YR5/6(薄灰褐色土)  
II-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(地山土を多く含む)  
5YR1/5(表込め)

第107図 大屋敷C24号墳横穴式石室検出状況図

側壁は奥壁1段目を積み込むように、2段目は奥壁を支えるような状態で積載され、最大4段、高さ0.7m残存する。側壁は角礫と円礫がともに用いられ、各段ともに目地が通るように積載される。左右両側壁ともに奥壁側の1石のみ大きな角礫が基底石に利用される。側壁は5～10度内傾す

る。奥壁側の側壁間は0.3mであり、崩落している天井石を架構できることから、本来4段目の上に天井石が積載されていた可能性が高く、石室の高さは0.7～1.0m前後であった可能性が高い。

立柱石は円礫を利用し、側壁から0.1m突出している。

羨道 羨道は右側壁で1石分、左側壁で2石分設置されるが、短小であり、羨道としての機能は果たしておらず、本来より前庭として機能していた可能性が高い。側壁は最大で2段残存し、小口積みされる。側壁は羨道と玄室の各段の高さがほぼ水平であり、玄室と羨道が同時に構築された可能性が高い。

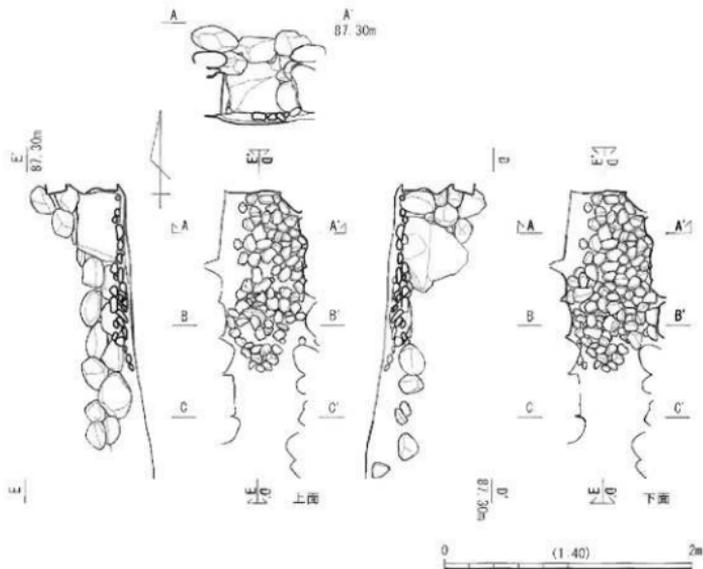
敷石 敷石は玄室内全面に敷設されており、一部2面確認することができる。追葬面が新たに敷設されたのか本来より2面であったのか明確ではないが、本来2面であった可能性が高い。敷石に使用された石材は、10cm以下の小礫である。

基底石 基底石は奥壁側のみ角礫が用いられ、それ以外は円礫が利用されており、角礫は長手を内側に、円礫は小口積みである。墓壁との関係は、基底石は墓壁の中心に設置されている。

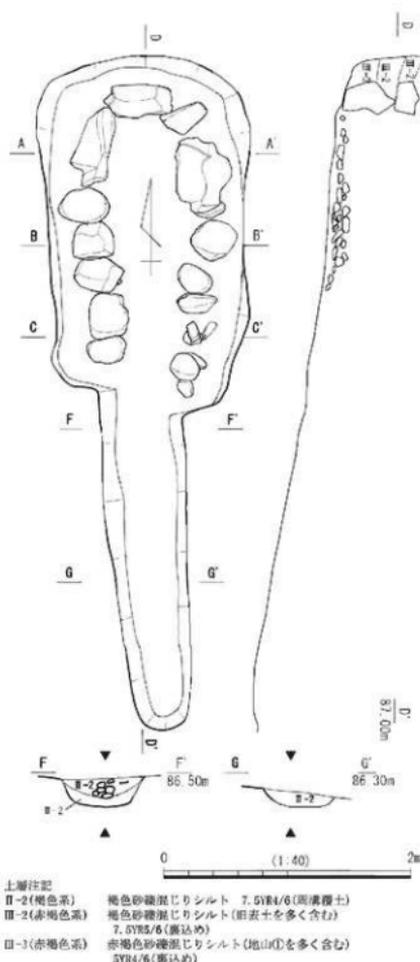
使用石材 側壁には主に角礫が用いられており、平坦面を内側に向け積載されている。

第16表 大塚敷C24号墳横穴式石室規模

主軸方位	N・0° 02'・E		
石室全長	2.30m		
玄室長	1.50m	玄室最大幅	0.65m
玄室奥壁幅	0.38m	玄室玄門舞幅	0.64m
羨道長	0.80m	羨道最大幅	0.50m
羨道玄門舞幅	0.50m	羨道入口舞幅	0.46m前後



第108図 大塚敷C24号墳横穴式石室実測図



第109図 大塚敷C24号墳横穴式石室墓石および墓室実測図

短くハ字形に開いた後、端部が外側に向かってつまみ出されている。器高24.6cm、口径10.2cm、胴部最大径16.2cm、高台径7.6cmをはかる。

羨道より出土した摘蓋(215)は中央が窪む大きな擬宝珠柄を有し、丸みをもってハ字形に開いた後、口縁端部を肥厚させ、下方につまみ出すものである。口径16.0cm、器高4.0cmをはかる。

墓道から出土した摘蓋(216)は、羨道から出土した摘蓋と同様の形状を呈するものの、口縁端部がわずかに異なり、216は肥厚させて終わる。口径は16.1cm、器高3.3cmをはかる。無台杯(217~219)は水

墓壇・墓道 墓壇は地山を標高86.5~86.6m付近まで掘削しており、現地表面から約0.7m掘り込んでいる。墓壇の平面形は略九長方形であり、墓道に連結する。墓壇規模は、墓壇長2.9m、墓壇幅1.7mをはかる。

墓道は、ほぼ真南に向かって伸延する。墓道長2.5m、最大幅0.65m、深さ0.2mをはかる。墓道の堆積状況を観察すると、2層確認ができ、上層から遺物が出土することから追葬が行われた可能性がある。

#### ④遺物の出土状況(第110図、図版45)

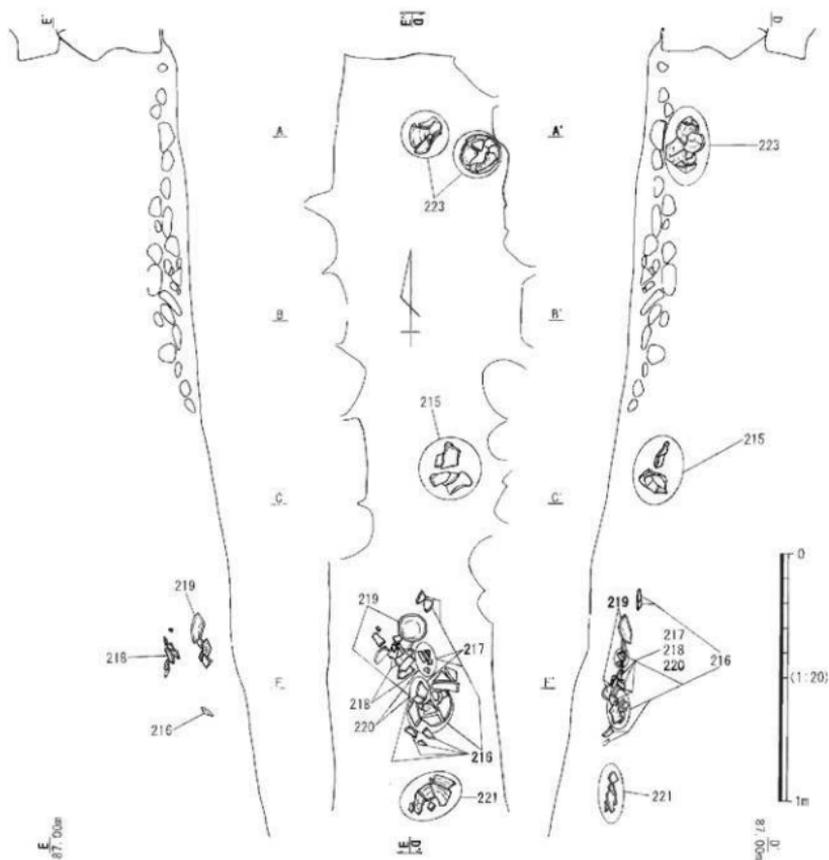
遺物は玄室内と羨道から墓道にかけて出土している。玄室左側壁に沿うように台付長頸壺(223)が正置されていた。また、玄門から羨道にかけて須恵器摘蓋1点(215)が床面からやや浮いた状態で出土した。さらに墳丘内の墓道で底面よりやや浮いた状態(上層)から摘蓋1点(216)、無台杯3点(217~219)、有台杯2点(220・221)が出土している。さらに、有台杯1点(222)、プラスチック瓶1点(224)、長頸壺1点(225)がさらに浮いた状態で出土した。

墓道より出土した須恵器のほうが若干古手の様相を示すことから、追葬にあたり掻き出された可能性もある。

#### ⑤出土遺物(第111図、図版132・133)

玄室より須恵器台付長頸壺1点(223)、羨道で摘蓋1点(215)、墓道から須恵器9点(216~222, 224・225)が出土した。

玄室より出土した台付長頸壺(223)は、頸部から逆ハ字形に開いた後、口縁端部を下方に折り返し、斜め外側に垂下させる。胴部は鋭角的ではないが肩が張り、明瞭な屈曲がある。胴部下半部には回転ヘラ削りが施されている。底部は頸を窄め、高台は

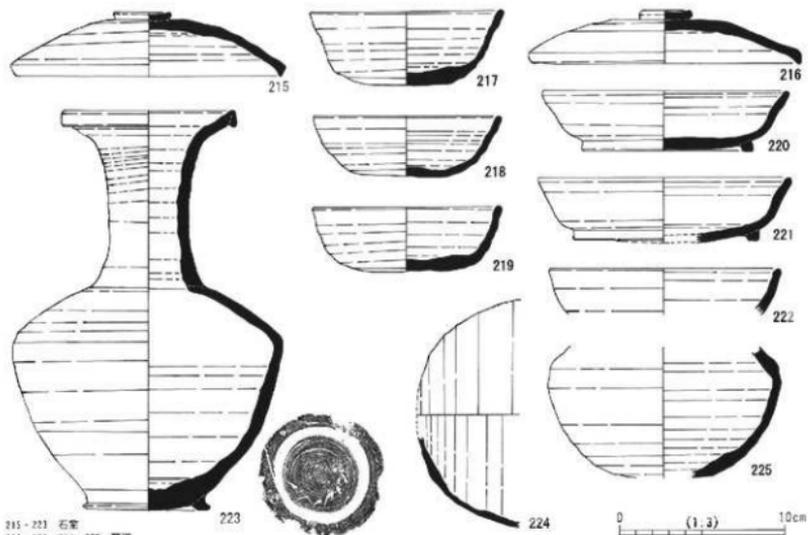


第110図 大屋敷C24号横穴式石室および墓室遺物出土状況図

平な底部から、外上方に向かって立ち上がるもので、口縁端部は丸く仕上げられている。胴部はのためが目立つ。口径約11.0～11.5cm、器高約3.5～4.5cmをはかる。有台杯(220～222)は、底部が高台よりも突出するもの(221)と、ほぼ同じ高さまでのもの(220)があり、口縁部は底部から外上方へ向かって立ち上がり、内面の口縁端部直下に沈線を巡らせている。口径13.8～15.0cmである。220・221は上述した摘蓋(215・216)と組み合わせられるものと考えられる。フラスコ形瓶(224)は胴部の破片であり、左期にはヘラ削りが施されている。長頸壺(225)は胴部片であり、肩が張り、丸みを帯びる。胴部下半にはヘラ削りが施されている。

#### ⑥小結

羨道から墓道で出土した須恵器は遠江IV期末葉～V期前半に位置づけることができ、玄室内で出土した長頸壺は遠江IV期末葉～V期前半に位置づけることができることから、C24号墳は7世紀末葉に築造



215～221 石室  
216～222, 224～225 墓室

第111図 大屋敷C24号墳横穴式石室および墓室出土土器実測図

され、7世紀末あるいは8世紀前半に追葬が行われた可能性が高い。

また、C24号墳の玄室長は1.5m前後で大人の伸展葬は不可能に近く、改葬骨あるいは火葬骨が納められた可能性や小児が埋葬されていた可能性も考慮する必要がある。

## (12) C25号墳

### ①調査前の状況

調査前には地形の高まりや窪み、石材の散乱は全く確認することができず、表土除去を実施するまで全く不明であった。

古墳はH22グリッドに位置する。

### ②墳丘・周溝(第112図, 図版46)

周溝や盛土は確認できないため、墳丘規模や墳形は不明である。築造当初より、石室を覆う程度の盛土だけであった可能性が高い。

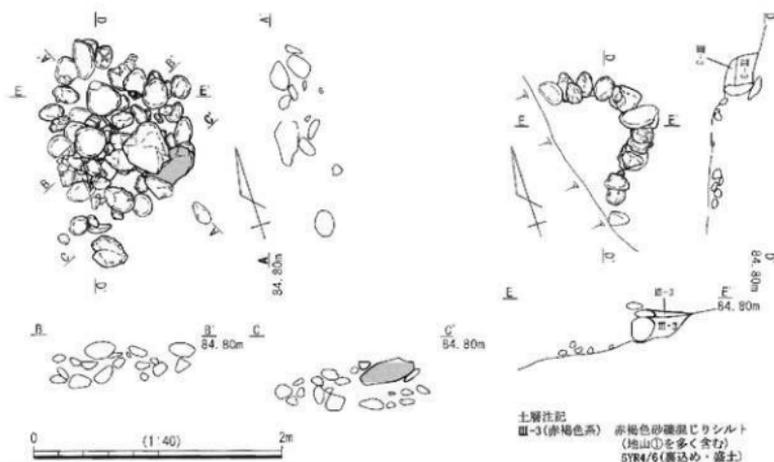
### ③埋葬施設(第113・114図, 第17表, 図版4G)

埋葬施設は南南西に向かって開口する無袖式横穴式石室である。

天井石 原位置を保持する天井石は存在しない。崩落した天井石と考える石材は2石確認することができる。ともにやや大型の河原石である。幅0.35～0.4m、長さ0.3mをはかる。



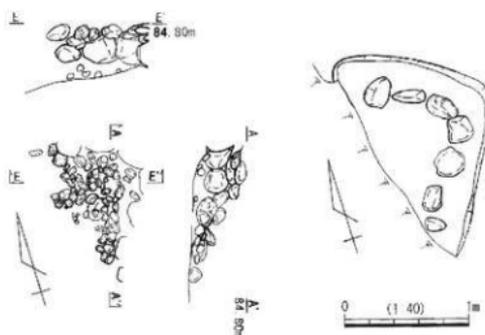
第112図 大屋敷C25号墳地形測圖



第113図 大塚敷C25号墳横穴式石室検出状況図

**石室** 右側壁は奥壁側の1石を除いて完全に破壊されている。

**奥壁**は2段積みであり、下段に側壁よりもやや大型の円礫を2石縦位に用いている。この2石の上部に円礫が小口積みされている。側壁は3段分残存しており、基底石は小口を内側に向け、2段目以上も小口積みする。側壁は日地が通るように積載されている。奥壁1段目の上部と側壁2段目がほぼ同一の高さである。**敷石** 敷石は10cm以下の小礫を敷設していたと想定できるが一部だけ残存するのみである。



第114図 大塚敷C25号墳横穴式石室実測図および基底石・墓壇実測図

**基底石** 基底石は河原石を用いており、小口を内側に向けた小口積みである。**墓壇**と基底石の関係は、墓壇のは中央に基底石が設置されている。

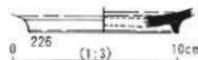
第17表 大塚敷C25号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-30°00'・E		
石室全長	1.00m以上	玄室最大幅	0.60m前後
玄室長	1.00m以上		
玄室奥壁幅	0.50m		

**墓壇** 墓壇は地山を標高84.3m付近まで、現地表面より0.3m掘削している。右側壁側の大部分が攪乱・破壊されており明瞭ではないが、南に向かって開放する長方形であった可能性が高い。墓壇長1.5m以上、幅1.3mをはかる。奥壁を抱えるための土坑などは掘削されていない。

## ④出土遺物(第115図, 図版133)

石室内から出土遺物はない。石室の裏込めから須恵器有台杯1点が出土している。有台杯(226)は、底部が高台よりも高いものである。

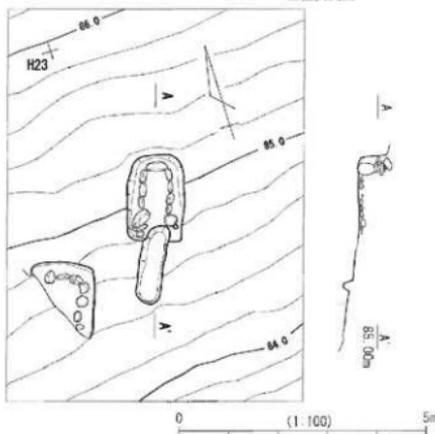


第115図 大塚敷C25号墳  
横穴式石室裏込め出土  
土器実測図

## ⑤小結

C25号墳は、石室内からの出土遺物はなく、築造時期は不明である。石室の裏込めから出土した須恵器有台杯がC25号墳に副葬されたものとするならば、遠江V期前半、8世紀前半の築造と考えることができる。

石室は全長1.0m前後と短く、大人を伸展葬することは不可能であり、改葬骨あるいは火葬骨を納めた可能性が高い。



第116図 大塚敷C26号墳地形測量図

## (13) C26号墳

## ①調査前の状況

調査前には高まりや石材の散乱は全く確認することができず、表土除去の際に立柱石が検出されたことにより古墳であることが明らかとなった。

古墳はH23グリッドに所在する。

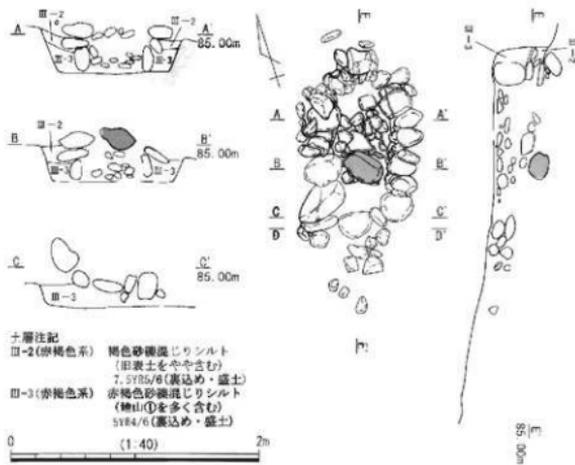
## ②墳丘・周溝(第116図, 図版47)

周溝や盛土を全く確認することができないため墳形や規模は不明である。築造当初より周溝は浅かれず、天井石を覆う程度の墳丘であった可能性が高い。

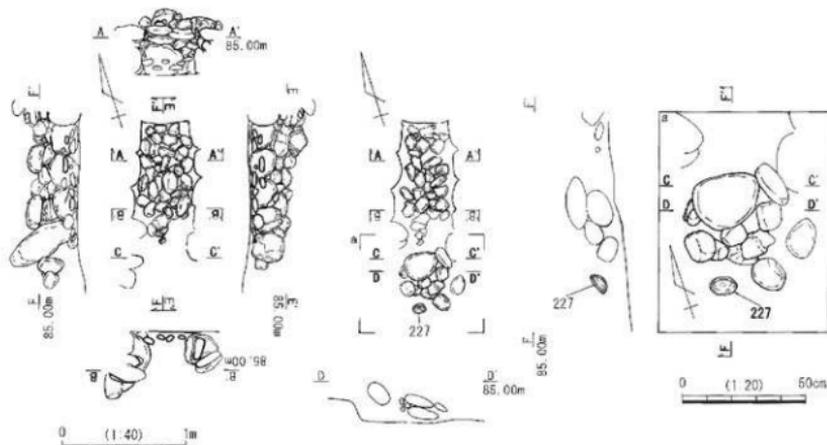
## ③埋葬施設(第117~119図, 第18表, 図版47・48)

埋葬施設は、南南西に向かって開口する小型の単室系擬似両袖式横穴式石室である。

天井石 原位置を保持する天井石はない。天井石は玄門側に1石のみ確認することができる。幅0.3m、長さ0.2mをはかる。玄室には天井石が架橋されていた可能性が高い。



第117図 大塚敷C26号墳横穴式石室検出状況図



第118図 大屋敷C26号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

**玄室** 玄室平面は玄室中央がやや広く、奥壁側と玄門側がほぼ同一の、胴形である。

奥壁は4段積みであり、1段目はやや大型の円礫を用いて鏡石としており、2段目以上は河原石、角礫を各段2石ずつ平積みしている。奥壁はほぼ直立する。

側壁は奥壁1～3段目を挟み込むように積載され、4段目は奥壁に接するように積載されている。側壁は、最大で3段残存しており、最下段にはやや大型の円礫を長手積みし、2段目以上は小口積み、平手積みの両方が確認できる。各段は目地が通るように積載されており、基底石と奥壁1段目、基底石2・3段目は奥壁の2・3段目に対応する。側壁の持ち送りはB-B'断面で約10度内傾している。

左右ともに明確な立柱石を用いており、特に右側の立柱石は奥壁よりも大きな柱状の河原石を縦位に用いており、上部は奥壁4段目に対応する。左立柱石は、側壁基底石よりはやや大型の円礫を用いており、側壁・奥壁2段目に対応する。立柱石は左右ともに0.1m程度側壁から突出している。

羨道(前庭) 羨道(前庭)は右側壁で2石分、左側壁で1石分構築されている。1段分残存しており、玄室基底石よりも高い位置に設置されており、短小であることから羨道として機能していた可能性は低く、前庭であった可能性が高い。側壁は小型の河原石を小口積みしている。羨道(前庭)の基底石は玄室の2段目とほぼ水平である。

**敷石** 敷石は玄室内の奥壁から立柱石まで全面に敷設された敷石であり、一部2面確認できる。

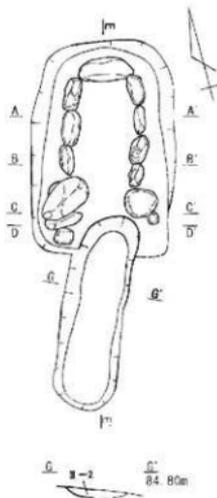
**閉塞石** 立柱石の部分河原石を敷石用いて閉塞している。利用された河原石の大きさは10～25cmをはかる。

**基底石** 基底石は河原石を用いており、すべて長手を内側に向けている。墓壇との関係は、墓壇のほぼ中央に基底石は設置されている。

**使用石材** 使用された石材は河原石が主体であり、基底石は長手を内側に向けたものが多く、2段目以

第118表 大屋敷C26号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-17° 37' -E	
石室全長	1.35m	
玄室全長	0.90m	玄室最大幅 0.45m
玄室奥壁幅	0.35m	玄室玄門側幅0.40m
羨道全長	3.45m	
羨道幅	0.35m以上	



土層注記  
II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト  
7.5TB4/6(周溝埋土)

第119図 大塚C26号墳横穴式石室  
基柱石および墓壇実測図

不可能であり、改葬骨あるいは火葬骨を納めた可能性が高い。一方で、石室規模は伸展葬が不可能なほど小型化しているにもかかわらず、立柱石を用いていることから、立柱石を用いて玄室と羨道を区分することに築造者が固執した結果と推測する。

#### (14) C27号墳

##### ①調査前の状況

調査前には地形の高まりや窪みなどは一切確認することができず、重機による表土除去後石材が集中することで初めて古墳と認識した。

古墳はG23・24、H23・24グリッドに位置する。

##### ②墳丘・周溝(第121図、図版49)

墳丘盛土は流出しており、確認することはできない。

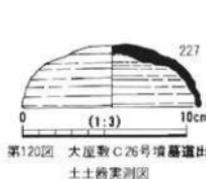
周溝は全周しており、やや南北に長い楕円形である。周溝規模は北側で幅0.8m、深さ0.4m、東側で幅0.9m、深さ0.2m、西側で幅0.8m、深さ0.25m、南側で幅0.9m、深さ0.1mをはかる。

古墳はやや南北に長い円(楕円形)墳で、古墳の規模は周溝の内側で南北3.8m、東西2.8mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高85.2m前後、北側で標高86.1m前後であることから、南側から見て現状で0.9mである。

なお、周溝や墳丘表土から遺物は出土していない。

##### ③埋葬施設(第122・123・125図、第19表、図版49・50)

埋葬施設は古墳のほぼ中央に築造された、ほぼ真南に向かって開口する無袖式横穴式石室である。



第120図 大塚C26号墳墓道出土土器実測図

上は小口積みが多い。

墓壇・墓道 墓壇は地山を標高84.7m付近まで掘削しており、現地表面から0.5m掘り込まれている。墓壇の平面形は隅丸長方形であり、墓道に続く。墓壇規模は墓壇長1.8m、幅1.15mをはかる。

墓道は南南西方向に向かって直線的に伸延している。墓道長1.25m、幅0.5m、深さ0.1mをはかる。

##### ④遺物の出土状況(第118図、図版47)

須恵器杯蓋(227)が墓道底面よりやや浮いた状態で出土した。墓前祭祀に伴う遺物である可能性が高い。

なお、石室内からは一切出土していない。

##### ⑤出土遺物(第120図、図版133)

須恵器杯蓋1点が出土している。

杯蓋(227)は半球形であり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径10.5cm、器高3.8cmをはかる。

##### ⑥小結

C26号墳の墓道より出土した須恵器はその特徴から遠江IV期後半に位置づけることが可能であり、C26号墳は7世紀後半に築造された可能性が高い。追葬に関しては不明である。

また、C26号墳は石室全長が1.35mと短く、大人を伸展葬することは

**天井石** 原位置を保持する天井石は存在しない。崩落した天井石は玄門入口付近で1石確認することができ、柱状の河原石が用いられている。幅45cm、長さ25cmをはかる。石室全体に架構されていた可能性が高いが、現状では明確ではない。

**石室** 石室平面形は石室中央がやや広く、玄門側と奥壁側の幅がほぼ等しい、緩やかな扇張形である。

**奥壁**は、やや大型の河原石を用いて鏡石としている。

**側壁**は奥壁を挟み込むように積載されており、最大で4段、高さ0.4m残存している。各段は目地が通るように積載される。ただし、石室南側の2～3石分は奥壁側の基礎石よりもやや高い位置に設置されており、この部分で玄室部と羨道部を区画していた可能性もある。

**側壁の基礎石**は円礫を用いて平手積みするものと小口積みするものがあり、2段目以上は小口積みが主体である。

**敷石** 敷石は2面確認することができる。1面目と2面目の間に遺物は出土しないことから通葬時に2面目が敷設されたとするよりは、築造当初より2面(段)敷石が敷設された可能性が高い。使用された石材は、10cm前後の小礫である。

**基礎石** 基礎石は左側壁側にやや大型の河原石を用いて長手面を内側に向けてのに対し、右側壁側は、やや小型の河原石を用いて、小口積みしている。左側壁は中央の小型の河原石のみ小口を内側に向けていることから、基礎石の設置に当たっては奥壁側と玄門側から開始し、中央で石材の長さを調整した可能性が高い。墓塚との関係は、墓塚内に収まっており、若干右側壁側に偏っているがほぼ中央に配置されている。

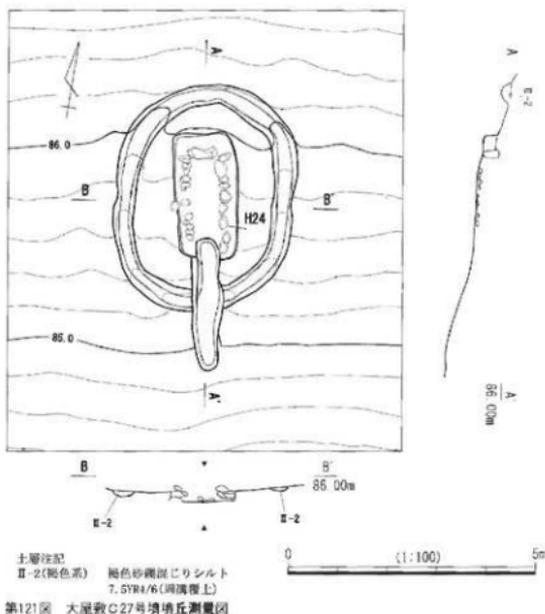
**使用石材** 使用された石材は一部に角礫が見られるものの、大部分が円礫である。

**墓竈・墓道** 墓塚は奥壁側で地山を標高85.6m付近まで掘削しており、現地表面から0.3m程度掘り込んでいる。墓塚の平面形は隅丸長方形であり、墓道へと連結する。墓塚規模は墓塚長2.6m、墓塚幅1.3mをはかる。墓塚床面には、奥壁や側壁などを固定するための土坑は掘削されていない。

墓道は、ほぼ真南に向かって伸延しており、墓道長2.25m、最大幅0.65m、深さ0.2mをはかる。

#### ④出土遺物(第124図、図版133)

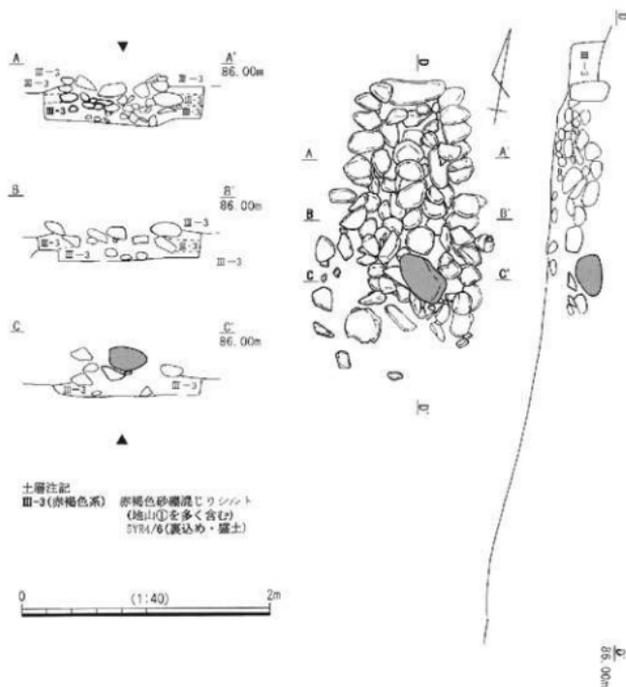
石室内より遺物は出土していないが、石室の覆土より須恵器無台杯あるいは有台杯の口縁部片が1



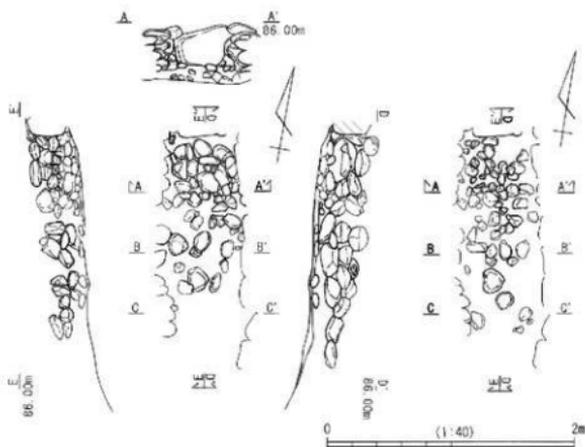
第121図 大屋敷C27号墳墳丘測量図

第19表 大屋敷C27号墳墳穴石室規模

主軸方位	N-9° 14' -W	玄室最大幅	0.75m
石室全長	1.90m	玄室玄門間幅	0.50m前後
玄室長	1.90m		
玄室奥壁幅	0.50m		



第122図 大屋敷C27号墳横穴式石室検出状況図



第123図 大屋敷C27号墳横穴式石室実測図

点(第124図228)出土した。

228は口径約12.4cmであり、その大きさから無台杯である可能性が高い。口縁端部は丸く仕上げられている。



第124図 大屋敷C27号墳横穴式石室  
覆土出土土器実測図

#### ⑤小結

C27号墳は石室内より出土した遺物はなく、明確な築造時期は不明である。追葬に関しては不明である。

C27号墳の石室を他の古墳と比較した場合、後述するC29号墳やC35号墳と同規模・構造の石室であり、ほぼ同時期の石室と考えることができるが、C29・35号墳ともに出土遺物がなく、築造時期は明確ではない。7世紀後半～8世紀前半に築造された可能性が高い。

### (15) C28号墳

#### ①調査前の状況(第126図, 図版51)

調査前は周囲より0.4mほど小高くなっており、その中心には大きな穴が空けられており、盗掘を受けている古墳であることは明らかであった。また、盗掘坑の周囲には石材が散乱しており、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることも想定できた。

古墳はF24・25、G24・25グリッドに位置する。

#### ②墳丘・周溝(第127・128図, 図版51・52, 134・135)

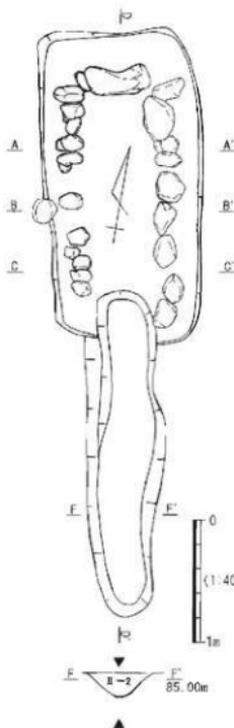
周溝は全周しており、やや南北に長い楕円形に巡らされる。周溝規模は北側で幅1.5m、深さ0.4m、東側で幅1.4m、深さ0.1m、西側で幅1.6m、深さ0.2m、南側で幅1.3m、深さ0.2mをはかる。

C28号墳は円墳で、古墳の規模は周溝の内側で南北・東西ともに8.6mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高85.4m、北側で標高87.4mであることから、南側から見て現状で2mである。

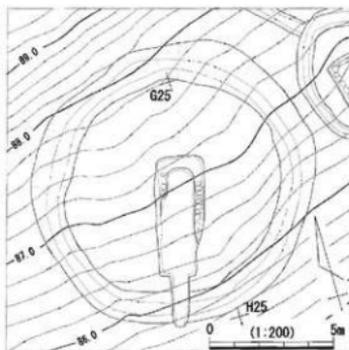
盛土は墳丘南側部分にのみ残存していた。盛土は旧表土の上に地山①と②の混和物が直接盛られており、古墳の中心に向かって盛り上げられる。石室裏込めから続く第一次墳丘であった可能性が高い。

なお、周溝の底面より0.2m以上浮いた状態で、多数の須恵器が出土した。出土した須恵器(第128図)は、摘蓋5点(267～271)、有台杯1点(272)、無台杯1点(274)、無蓋高杯2点(264, 273)が出土している。

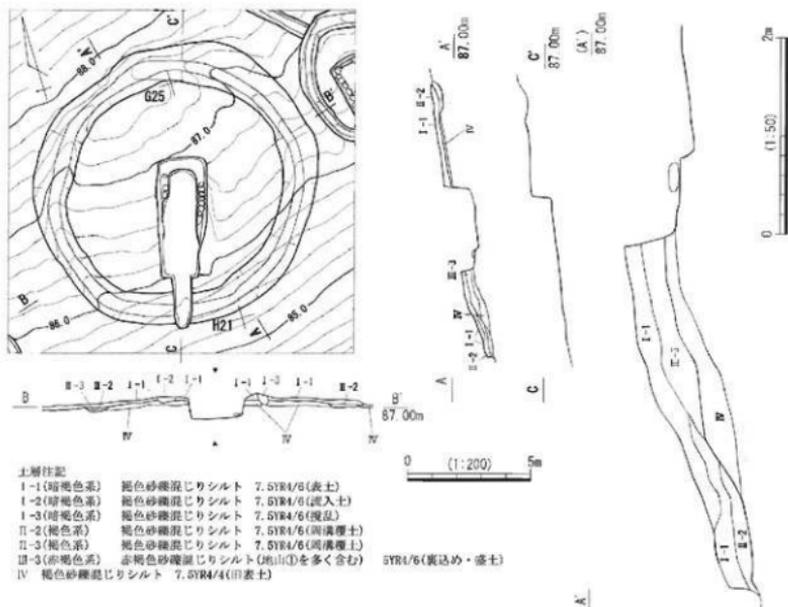
摘蓋は大型の擬宝珠柄を有するもので、天井部から丸みをもって八字形に開いた後、口縁部をほぼ垂直に引き出し、口縁端部を尖らせるもの(269)と、天井部から直線的に八字形に開いた後、垂直に引き出され、口縁端



土層注記  
II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト  
7.5YR4/6(高濃度土)  
第125図 大屋敷C27号墳横穴式石室基底  
石および墓室実測図



第126図 大屋敷C28号墳調査前測量図



第127図 大塚遺跡C28号墳墳丘測量図

部が尖らされるもの(267・268)と、さらにハ字形に開いた後、口縁部を引き出し、口縁部を方形にするもの(270・271)がある。口径は14.6～15.0cmをはかる。有台杯(272)は、底部が高台より突出するかあるいはほぼ同じ高さまで下がるものである。無台杯(274)は水平な底部から外上方に向かって立ち上がる。無蓋高杯(273)は、碗形の杯部で、口縁部は外側へつまみ出されている。

これらの須恵器は、274が遠江IV期末葉、それ以外は遠江V期前半に位置づけることができる。

### ③埋葬施設(第129図, 第20表, 図版52)

古墳のほぼ中央に築造された、ほぼ南南西に向かって開口する横穴式石室である。石室の大部分が破壊されており、墓竈底面も攪乱されているが、墓竈の規模を考慮すると、無袖式ではなく単室系か複室系擬似両袖式石室であった可能性が高い。

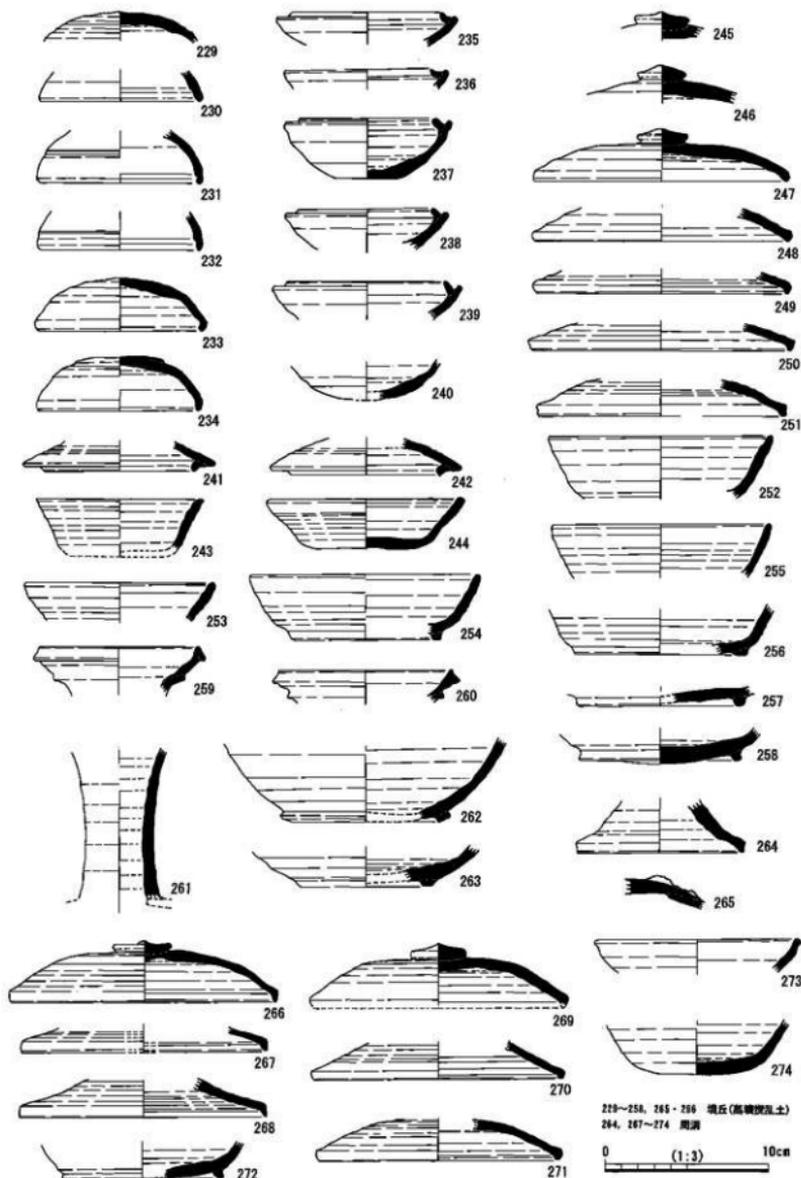
**天井石** 天井石は確認することができず、不明である。

**石室** 基底石のみ残存する。石室の平面形は残存する左側壁の状況から玄室中央部の幅が広い胴張形であった可能性が高い。右側壁の基底石は長手を内側に向ける一方で、左側壁は小口を内側に向けるものが多い。墓竈との関係は、左側壁が墓竈壁面に沿っていることから、中央より左側壁側に偏って設置されている。

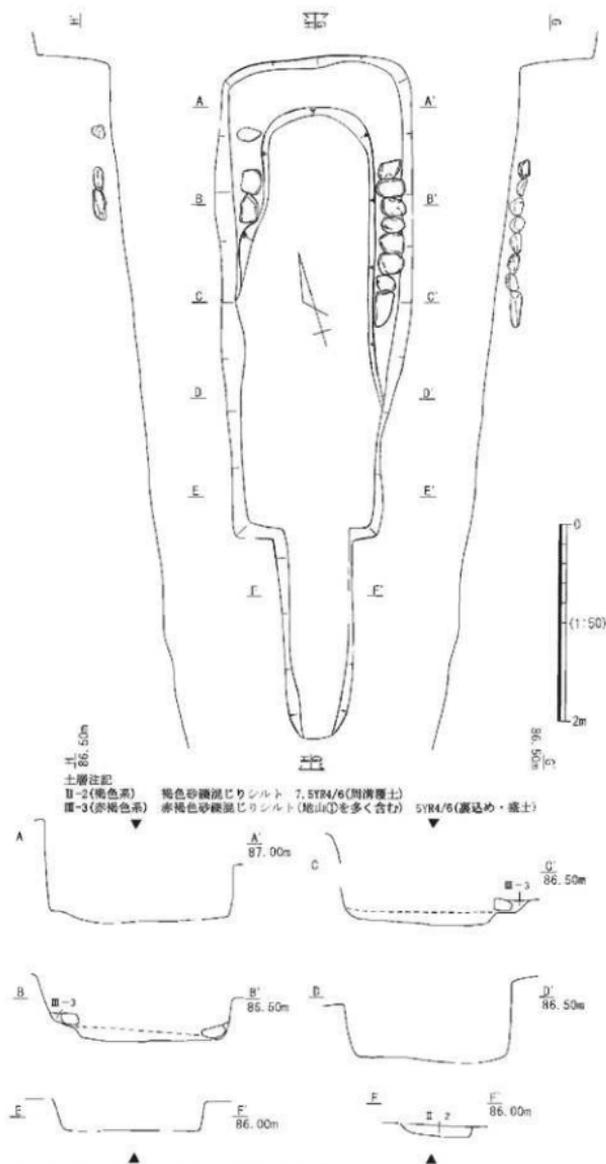
**使用石材** 基底石は河原石を用いており、攪乱された墓竈からは角礫も出土しているが、円礫が多く出土したことから、円礫を主に用いた石室であった可能性が高い。

第20表 大塚遺跡C28号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-16°58'-E
石室全長	1.50m以上
玄室長	1.50m以上
玄室最大幅	1.20m



第128図 大屋敷C28号墳埴丘および周溝出土土器実測図



第129図 大屋敷C28号墳横穴式石室および墓道実測図

墓壇・墓道 墓壇は奥壁側で地山を標高86.2m付近まで掘削しており、現地表面から0.8mほど掘り込んでいる。墓壇の形状は奥壁側が広い、やや不整形な長台形であり、墓道に連接する。墓壇の規模は墓壇長5.0m、墓壇幅1.9mをはかる。

墓道は南南西に向かって伸延しており、墓道長2.1m、墓道幅0.8m、深さ0.1mをはかる。

#### ④出土遺物(第128図, 図版134・135)

石室内で原位置を保持した状態で出土した遺物はない。石室攪乱土中(墳丘表土)から、杯蓋6点(229~234)、杯身6点(235~240)、返蓋2点(241・242)、無台杯3点(243・244・253)、摘蓋6点(247~251, 266)、有台杯4点以上(252, 254~258)、平瓶2点以上(259・260・265)、台付長頸壺2点以上(261~263)が出土した。

杯蓋は半球形であり、口縁端部を内傾させるもの(233・234)と沈線が施されるもの(230~232)がある。口径は約9.0~10.0cmをはかる。杯身は短く内傾するたちあがりを有するもの

で、口径8.0～9.5cmをはかる。返蓋(241・242)は天井部からハ字形に開いた後返りがつけられるもので、返りは受部よりも突出する。乳頭状摘みは出土していないことから大型の擬宝珠摘みであった可能性が高い。無台杯は水平の底部で、そこから外上方に立ち上がる口縁部を有するもので口縁端部は丸く仕上げられている。摘蓋は大型の擬宝珠摘みを有するもので、口縁端部を肥厚させるだけのもの(247・248)と、短く垂下させるもの(249～251)があり、口径約15.0～15.5cmをはかる。有台杯は高台よりも底部が突出するもの(258)と、ほぼ水平のもの(257)があり、口縁部は底部から外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。

平瓶口縁部(259・260)は二段口縁である。台付長頸壺は狭くハ字形に開く高台を有し、胴部は丸みを帯びる262と、垂直で逆台形の断面をもつ高台を有する263があり、261はどちらかの頸部破片と推測する。

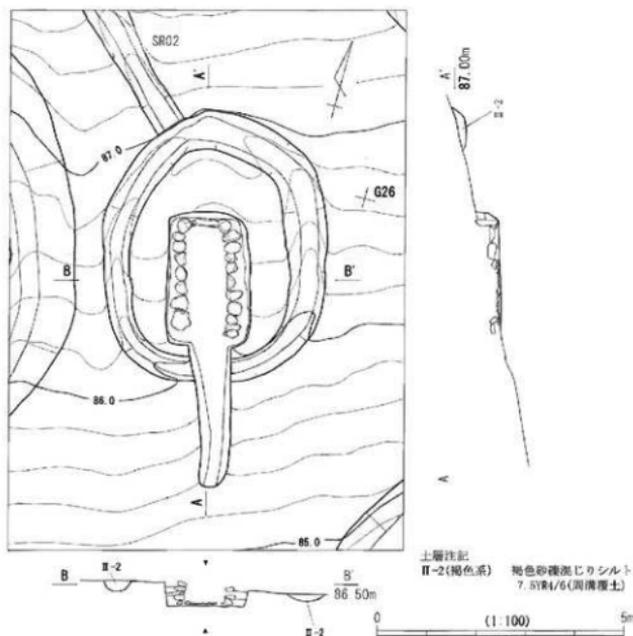
### ⑤小結

C28号墳の石室掘乱土中から出土した須恵器は遠江IV期後半、IV期末葉、V期前半の3型式に区分することができ、すべてがC28号墳に副葬されたとするならば、7世紀後半に築造され、7世紀末葉と8世紀前半の2回追葬が行われた可能性が高い。

## (16) C29号墳

### ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みを全く確認することはできず、古墳の存在は表土除去後、礫が集中すること



第130図 大塚敷C29号墳丘測量図

を確認した。

古墳はF25・G25グリッドに所在する。

### ②墳丘・周溝(第130図, 図版52)

墳丘遺土は流出しており確認することはできない。古墳は緩斜面に築造されている。

周溝は全周しており、やや南北に長い楕円形である。周溝規模は北側で幅0.8m、深さ0.2m、東側で幅0.9m、深さ0.15m、西側で幅0.5m、深さ0.2m、南側で幅0.5m、深さ0.1mをはかる。

古墳はやや南北に長い円(楕円形)墳で、古墳の規模は周溝の内側で南北4.3m、東西3.1mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高86.0m、北側で標高86.8mであることから、南側から見て現状で0.8mである。

なお、墳丘や周溝から遺物は出土していない。

### ③埋葬施設(第131～133図, 第21表, 図版53・54)

第21表 大屋敷C29号墳横式石室規模

埋葬施設は、古墳のほぼ中央に築造された、南南東に向かって開口する無袖式横穴式石室である。

主軸方位	N-14° 46' -E		
石室全長	2.25m以上		
玄室長	2.25m以上	玄室最大幅	0.80m
玄室奥壁幅	0.60m	玄室玄門側幅	0.75m

天井石 天井石は原位置を保持するものはない。

崩落した天井石を1点確認することができる。幅0.4m、長さ0.15mをはかる。

石室 平面形は奥壁側の幅が狭い、奥窄まり形である。奥壁はやや大型の板状の角礫を用いて鏡石としており、ほぼ直立する。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、最大で6段、高さ0.65m残存している。各段は目地が通るように積載されている。基底石は長手を内側に向けており、2段目以上は主に小口積みしている。側壁5段目と奥壁上段が対応している。側壁の持ち送りは、A-A'断面で約20度内傾するが、B-B'断面、C-C'断面では約5～10度の傾きである。

敷石 敷石は奥壁側に2石分角礫が用いられている。発掘当初は天井石が崩落したものと考え、図面を記載した後除去したが、その下位には敷石を確認することはできないため、石室南側の敷石と段差ができてしまうが、この大型の角礫も敷石と判断した。南側の敷石は、石室入口まで敷設されており、1面のみ確認することができる。使用された石材は10cm以下の円礫である。

閉塞石 閉塞石はやや小型の円礫を用いられており、玄門部分で閉塞している。

基底石 基底石は主に円礫が用いられており、長手を内側に向けて据えられている。墓壇と基底石の関係は、墓壇の右側壁側にやや偏って設置されている。

使用石材 奥壁と側壁の一部に角礫が確認できるものの大部分は円礫が用いられており、小口積みされている。

墓壇・墓道 墓壇は地山を標高86.1m付近まで掘削し、現地表面から0.45m程度掘り込んでいる。墓壇平面形は長方形であり、墓道に連結する。墓壇規模は墓壇長2.75m、幅1.65mをはかる。墓壇底面には奥壁などを設置するための土坑は確認することはできない。

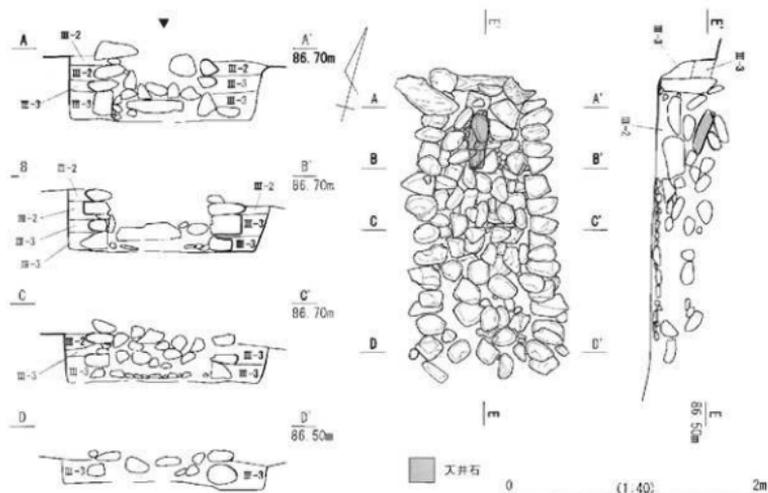
墓道は南南東方向に向かって延伸しており、墓道長2.9m、幅0.85m、深さ0.25mをはかる。

### ④出土遺物

石室内より遺物は出土していない。

### ⑤小結

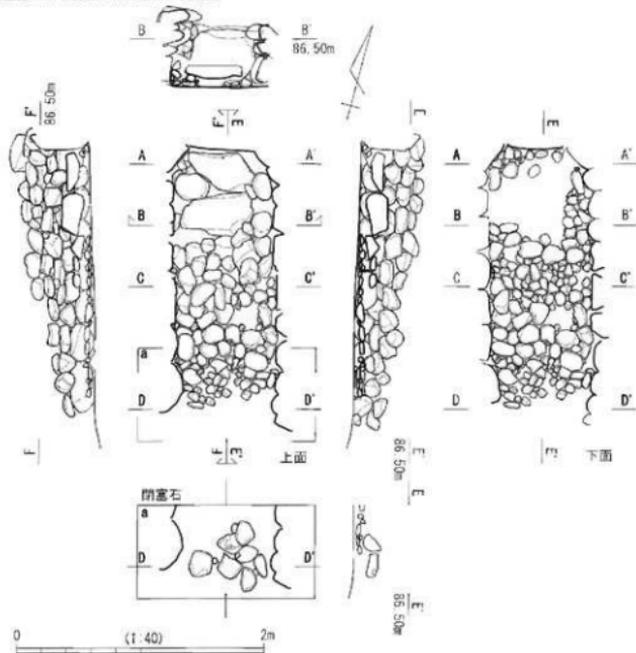
C29号墳は石室内から出土した遺物はなく、築造時期や追葬に関しては不明である。上述したようにC27号墳やC35号墳の石室とほぼ同様の無袖式であり、ほぼ同時期の築造と推測する。7世紀後半～8世紀前半に築造された可能性が高い。



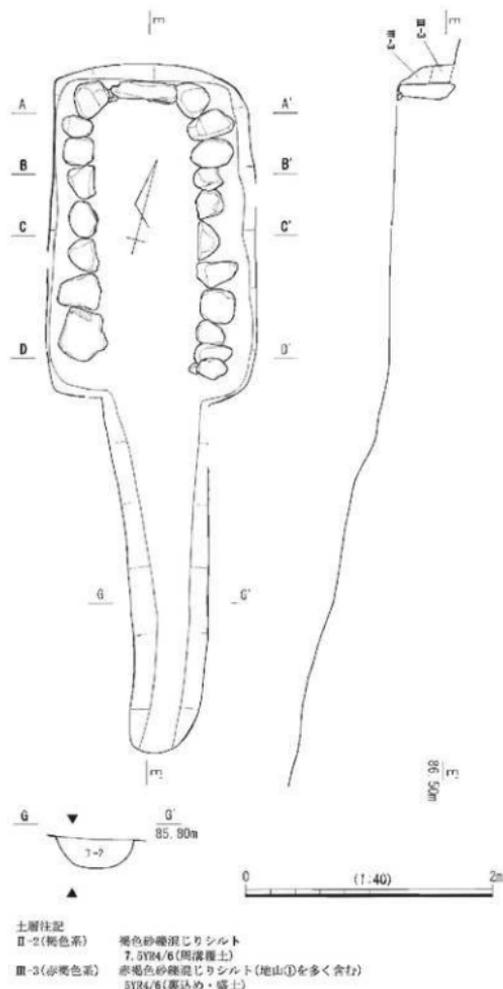
土層注記

III-2 (赤褐色系) 褐色砂礫混じリシルト (II表土を多く含む) 7.6YR5/6 (裏込め・盛土)  
 III-3 (赤褐色系) 赤褐色砂礫混じリシルト (地山土を多く含む) 5YR4/6 (裏込め・盛土)

第131図 大屋敷C29号墳横穴式石室検出状況図



第132図 大屋敷C29号墳横穴式石室および閉塞石実測図



第133図 大屋敷C29号墳横穴式石室基底石および墓室実測図

側から見て現状で1.6mをはかる。

なお、墳丘表土中より須恵器長頸壺片2点(275・276)、陶器甕(277)が出土し、277は調査区外に所在する大屋敷6号窯(山茶碗窯)で焼成された甕あるいは甕の破片と考える。

須恵器長頸壺(275)は肩部の破片であり、肩部は明瞭な屈曲を有することから、遠江V期前半に位置づけることができる。276は斜行刺突文が施された長頸壺の胴部破片である。

また、石室全長が約2.3mとやや短いことから、改葬骨や火葬骨が納められた可能性も考慮に入れる必要がある。

### (17) C30号墳

#### ①調査前の状況

調査前の状況は、調査区北側の改植時の土砂が古墳の上に堆積していたため、全体的に高まっていたがこの位置に古墳が存在するとは全く不明であった。確認調査時に石材が多く露出したために新たに確認した古墳のうちの1基である。

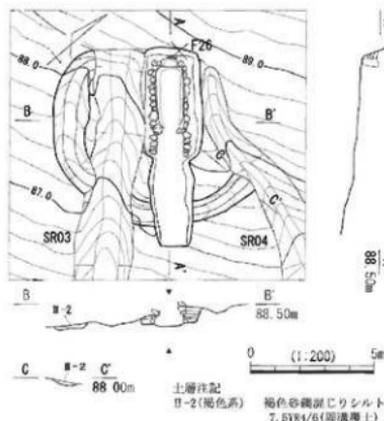
古墳はF25・26グリッドに所在する。

#### ②墳丘・周溝(第134・135図、図版55, 135)

周溝は北側が改植により完全に破壊され、周溝の南東側、西側の一部は自然流路で破壊されているが、西側から東朝まで確認でき、当初はほぼ全周していたと推断する。

周溝は南北にやや長い楕円形であり、周溝規模は南東側で幅1.0m、深さ0.15m、西側で幅1.4m、深さ0.2m、南側で幅1.0m、深さ0.15mをはかる。

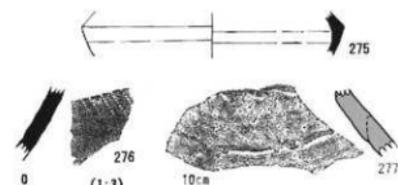
古墳はやや南北に長い円墳であり、規模は周溝内側で南北6.2m以上、東西6.1m以上をはかる。墳丘南側で標高87.0m前後、墳丘北側は88.6m前後であり、南



第134図 大屋敷C30号墳横穴式石室規模圖

第22表 大屋敷C30号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-49° 26' -W		
石室全長	3.65m	玄室最大幅	1.15m
玄室長	2.45m	玄室玄門側幅	1.10m
玄室奥壁幅	1.10m	羨道玄門側幅	1.05m
羨道長	1.20m		
羨道玄門側幅	1.30m		



第135図 大屋敷C30号墳横穴式石室規模圖

277は粘土紐を巻き上げて成形した大型の壺あるいは甕で、外面は自然軸が発泡している。内面にはタタキの当て具の痕跡が残る。277が山茶碗を焼成した大屋敷6号窯の生産品であるとするならば、宮口窯松井福年山茶碗Ⅱ期、12世紀後半に位置づけることができる(松井1989b)。

### ③埋葬施設(第136～139図, 図版55～57)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された、単室系擬似兩袖式横穴式石室である。

天井石 原状を維持する天井石は存在しない。崩落した天井石は奥壁から羨道入口までに4石確認することができる。幅0.65～1.0m、長さ0.4～0.5mをはかる。4石の長さを加算すると、長さ1.7mであり、玄室の半分程度しか覆うことはできないが、本来玄室は天井石で覆われていた可能性が高い。

玄室 玄室は奥壁から玄門部まで幅がほぼ同一の長方形である。

奥壁は大型の角礫を用いて鏡石としている。奥壁は約10度内傾して樹立されている。

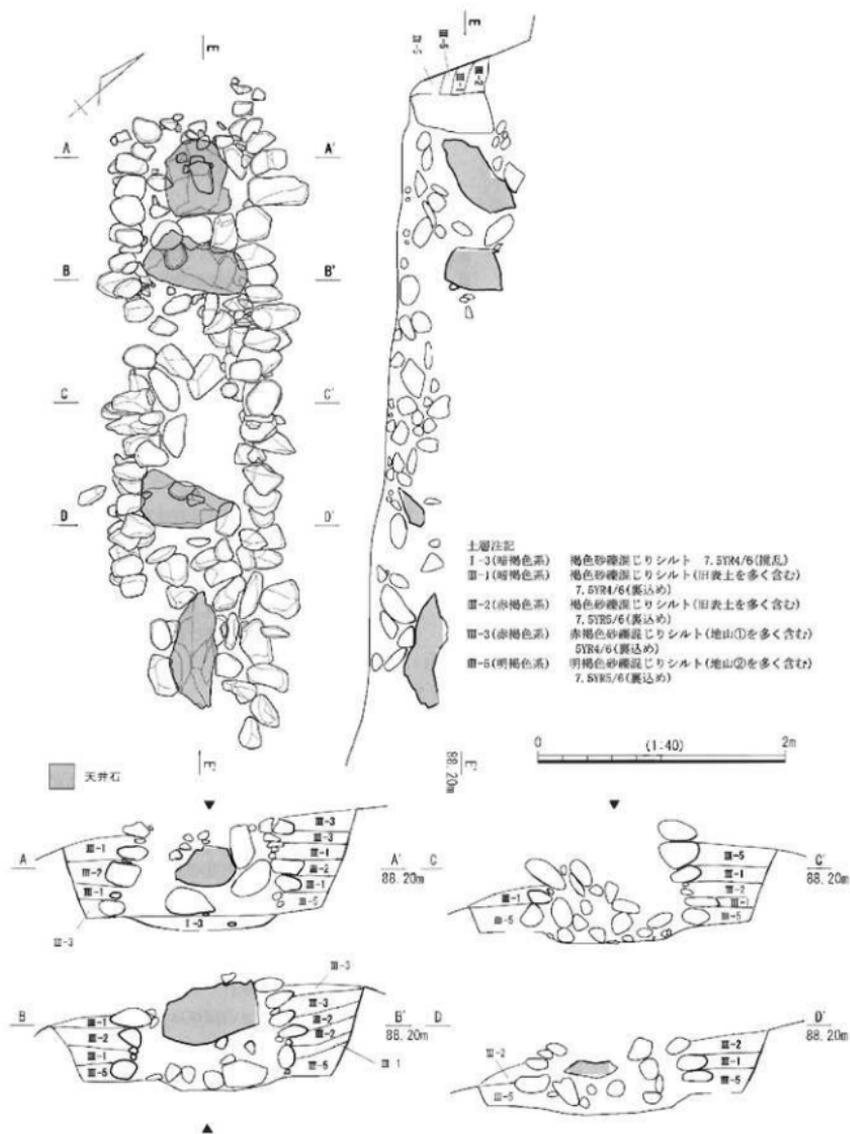
側壁は奥壁を狭み込むように積載されており、最大で7段、高さ0.9m残存する。一部に複数の段にわたるやや大きめの石材が用いられているが、各段はほぼ目地が通るように積載される。側壁5段目が奥壁の上部に対応する。

玄室の基底石には一部にやや大きめの河原石が用いられており、右側壁は小口を内側に向けるものが多く、左側壁は長手を内側に向けるものが多い。側壁の持ち送りは、約15～25度である。築造当初にはこのまま側壁が持ち送られていたと仮定し、崩落した天井石の幅を考慮すると、玄室の高さは1.0～1.2mほどであった可能性が高い。

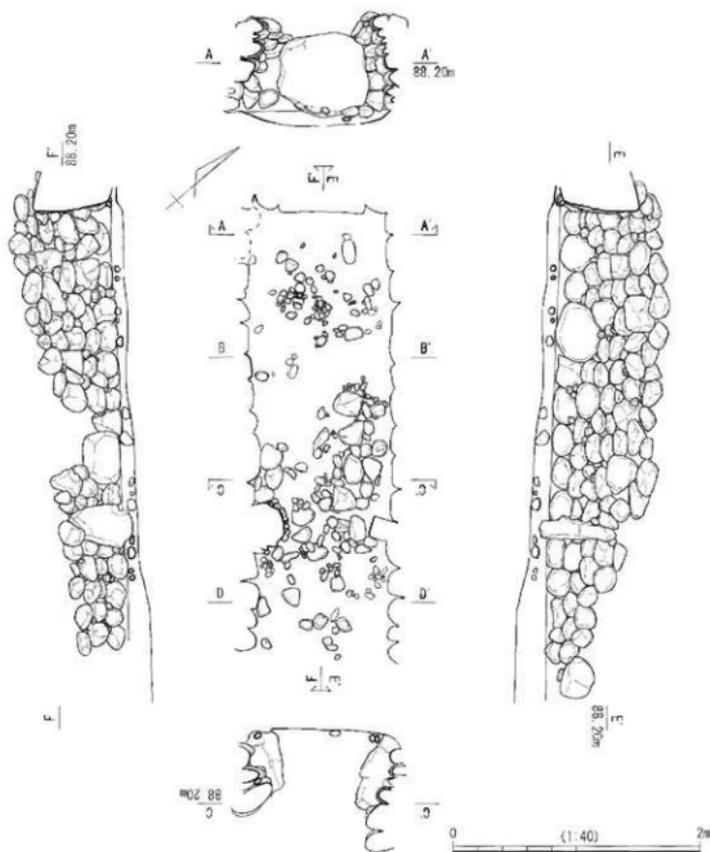
玄門は立柱石であり、右立柱石には柱状の大型の河原石が樹立され、左立柱石には板状の角礫が利用されている。立柱石は側壁より約0.15～0.2m突出する。右立柱石上には河原石が1石積載されており、天井石と立柱石の間には1石がまきされていたことが判明する。玄門と側壁との関係は、右立柱石が側壁の3段目、左立柱石が側壁の4段目に対応する。

羨道 羨道は羨道入口に向かってやや幅を広げる台形であり、右側壁で4石分、左側壁で5石分積載される。羨道の各段の目地が通るように積載されており、また玄室の各段ともほぼ水平であることから、立柱石を挟んでほぼ同時に積載された可能性が高い。側壁の持ち送りは約20度である。

敷石 玄室および羨道の床面は大部分が攪乱されており、原位置を保持する敷石は、玄門部分の敷石である。20cm以下の小礫を用いて敷設されていた可能性が高い。



第136図 大塚遺C30号墳横穴式石室検出状況図



第137図 大塚館C30号墳横穴式石室実測図

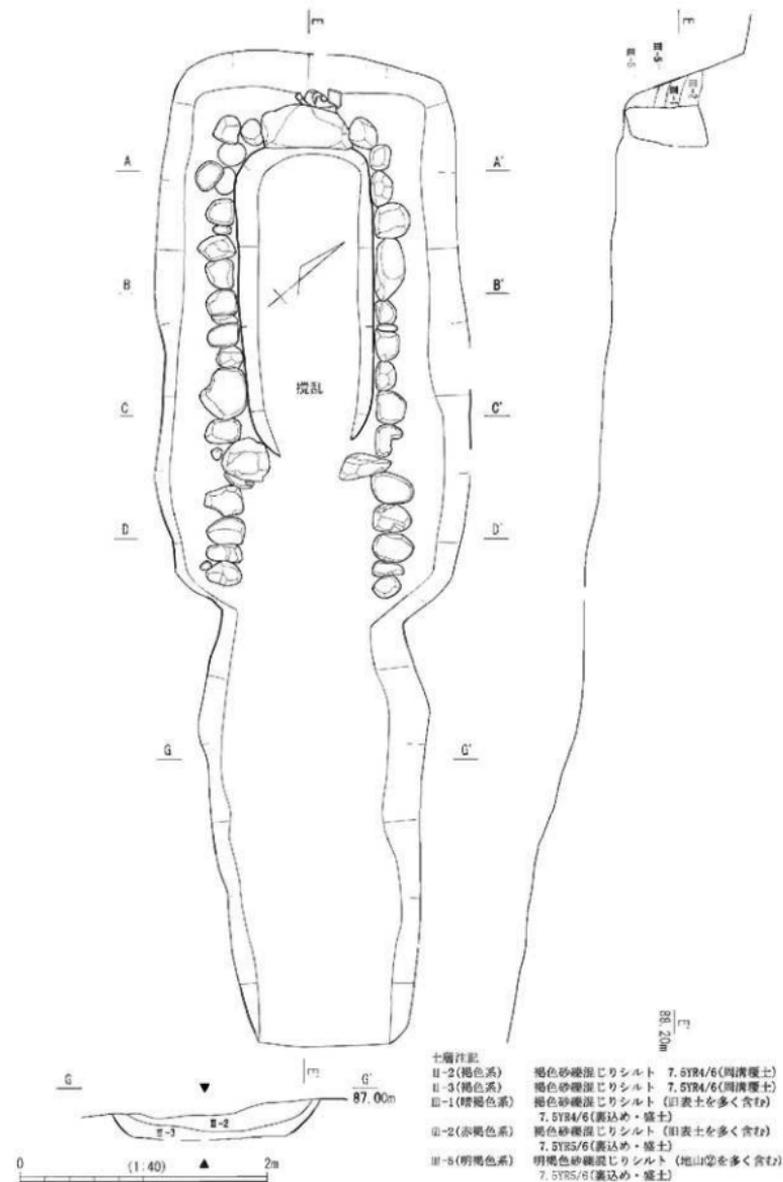
**基底石** 玄室の基底石は右側壁側に小口を内側に向けるものが多く、左側壁側に長手積みものが多い。羨道は左右両側壁ともに小口を内側に向ける。玄室の左側壁側中央付近に小型の石材が用いられており、この部分で石材の調整を行った可能性が高く、C30号墳は、まず奥壁と立柱石を立て、両側から中央に向かって基底石を設置した可能性が高い。基底石は墓室内に完全に収まり、ほぼ中央に設置されている。

**使用石材** C30号墳に使用された石材は一部に角礫が利用されるものの、大部分が河原石を用いており、小口積みするものが多い。

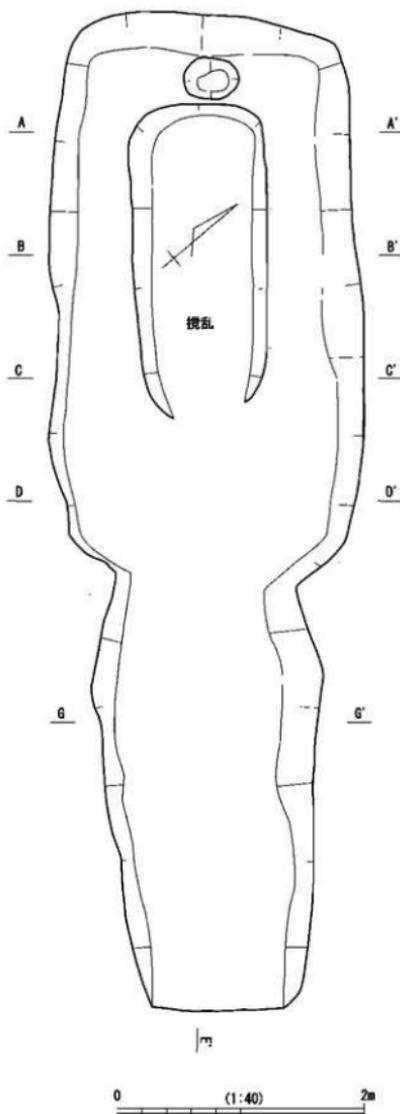
**墓壇・墓道** 墓壇は地山を標高87.8m付近まで掘削しており、現地表面から1.0m掘り込まれている。

墓壇の平面形は長方形であり、幅の広い墓道へと続く。墓壇規模は、墓壇長4.5m、墓壇幅2.5mをはかる。墓壇底面にまで攪乱が及んでいる。また、奥壁を据えるための小土坑が掘削されている。

墓道は南東方向に向かって伸延しており、墓道長3.5m、幅1.9m、深さ0.2mをはかる。墓道は2層確



第138図 大塚敷C30号墳横穴式石室基礎石実測図



第139図 大塚敷C30号墳墓竈実測図

認でき、追葬が行われた可能性が高い。

#### ④遺物の出土状況(第140・141図, 図版56)

支室左立柱石に持たれかけるように須恵器台付長頸壺(283)が敷石上で出土している。また、羨道の床面直上から須恵器摘蓋2点(279・281)、有台杯1点(282)が破砕した状態で出土した。さらに、羨道入口から1~2m南側に墓道床面直上より長頸壺(284)が破砕した状態で出土した。

また、石室裏込め上部より返蓋(278)が出土し、墓道覆土より須恵器摘蓋1点(280)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第142図, 図版135・136)

玄室より須恵器台付長頸壺1点(283)、羨道より、摘蓋2点(279・281)、有台杯1点(282)、墓道床面直上より長頸壺(284)が出土した。裏込めより返蓋1点(278)が出土した。

台付長頸壺(283)は、肩が張るもので、鋭角形である。頸部から口縁部は逆八字形に立ち上がるものである。胴部下半には、回転ヘラ削りが施されている。高台は短く八字形に垂下するものであり、胴部最大径15.5cm、高台径7.2cmをはかる。

長頸壺(284)は、球形の胴部で、最大径が中位よりやや上位にある。最大径17.1cmをはかり、胴部下半には回転ヘラ削りが施されている。

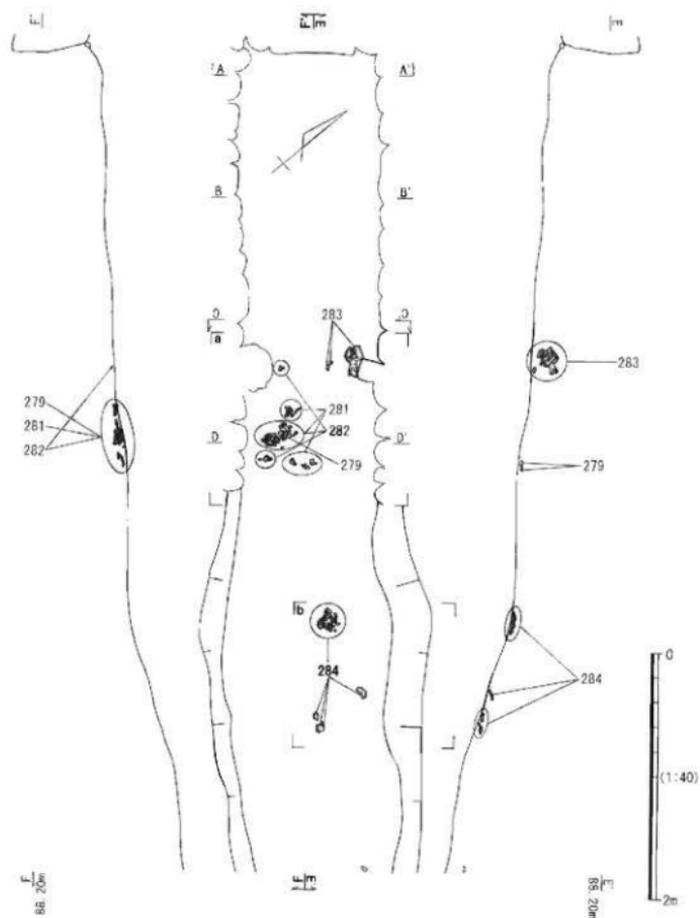
摘蓋(281)は、大型の振宝珠柄みを有し、口縁端部は短く外反しながら垂下するもので、口径15.7cm、器高4.2cmをはかる。279・280は口縁部を下に向かってつまみ出すもので、端部は尖らされている。口径約15cmをはかる。

有台杯(282)は底部が高台よりも突出するもので、口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径14.8cm、器高4.2cmをはかる。

返蓋(278)は返りが受け部よりも突出するものであり、返り径は9.6cmをはかる。

#### ⑥小結

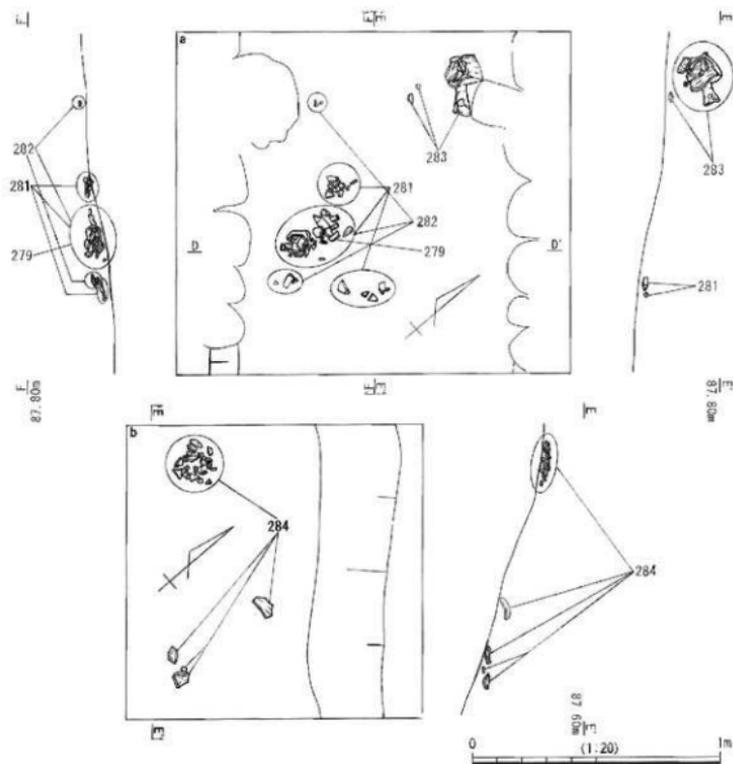
C30号墳は、石室や墓竈より出土した長頸壺283・284は遠江V期前半に位置づけることができる。摘蓋・有台杯・長頸壺は遠江V期前半に位置づけることができる。



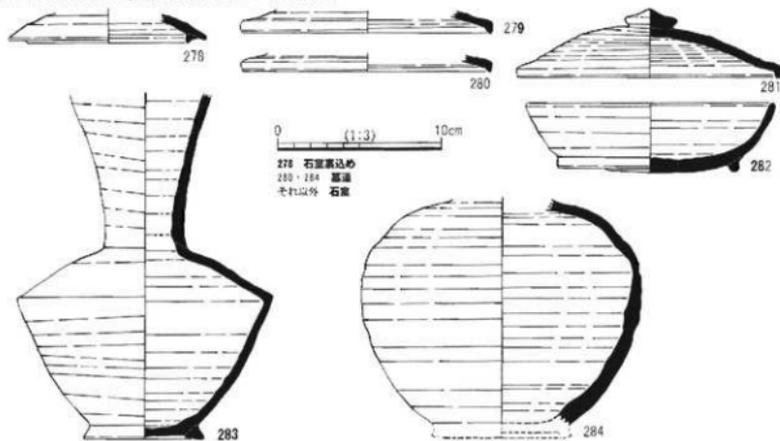
第140図 大塚遺C30号墳横穴式石室および墓道遺物出土状況図

一方で、石室裏込めから出土した返蓋は遠江Ⅳ期後半に位置づけることができる。

したがって、C30号墳は裏込めから出土した返蓋の時期である遠江Ⅳ期後半には遡らず、墓道から出土した須恵器の時期である、遠江Ⅴ期前半に築造された可能性が高い。



第141図 大塚敷C30号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図



第142図 大塚敷C30号墳横穴式石室出土土器実測図



道よりもやや浅く掘削されている。

墳丘規模は周溝の内側で、東西5.3m、南北6.5mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で86.2m、墳丘北側で87.8mをはかることから、現状で1.6mである。

なお、周溝西側で須恵器摘蓋(289~291)、杯蓋(285)、杯身?(286)、短頸壺(295)が周溝床面より0.2m以上浮いた状態で出土した。このほか墳丘表土中より、有台杯(292・293)、返蓋(287・288)、平瓶(294)が出土した。

摘蓋は大きな擬宝珠柄杓が取り付けられるもの(289)、天井部から八字形に開いた後、口縁部を垂直に垂下させるもの(290・291)がある。口径15.6~16.0cmをはかる。返蓋(287・288)は天井部が欠損しており、返りは受部とほぼ水平である。返り径は約9.0cmをはかる。有台杯(293)は底部が高台とほぼ同一の高さまで下がるが、高台よりは突出しない。292の口縁部は底部から斜め上に向かって立ち上がり、口縁端部は柄杓上げられている。杯蓋(285)は口径7.6cmをはかる。平瓶(294)は八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。短頸壺(295)の肩部は丸みを帯びており、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。

なお、杯身(286)には「一」が底部にヘラ描きされている。

周溝および墳丘より出土した須恵器は周溝底面より出土したものではないことから、C31号墳に直接伴うものではなく、上位に位置するC16号墳などからの流れ込みの可能性が高い。時期は、遠江IV期後半~V期前半までに及んでおり、複数の古墳からの流れ込みか、あるいは追葬が行われた古墳からの流れ込みの可能性が高い。

### ③埋葬施設(第146~148図, 第23表, 図版58・59)

埋葬施設は、古墳のほぼ中央に築造された単室系擬似兩袖式横穴式石室であり、南南東に向かって開口する。

天井石 天井石は原位置を保持するものはなく、また崩落した天井石も確認できない。

### (18) C31号墳

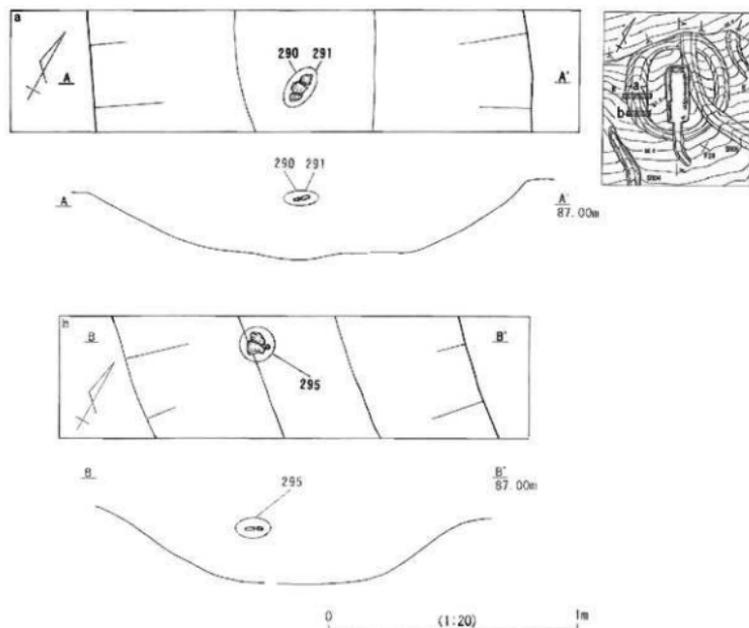
#### ①調査前の状況

C30号墳と同様、改植が及んでいる範囲に位置しており、また高まりや窪みなど一切確認できなかったことから、古墳が所在しても既に破壊されていると考えていた。しかし、表土除去の結果、周溝北側の一部と奥壁側が破壊されている以外は、古墳は残存しており、古墳の概要が判明した。

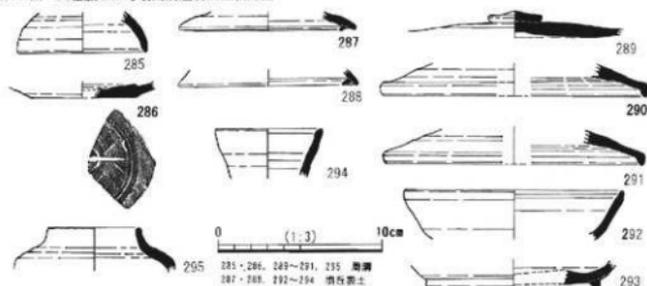
古墳はE27・28、F27・28グリッドに位置する。

#### ②墳丘・周溝(第143~145図, 図版58・59)

墳丘盛土は流出しており確認できない。周溝は全周し、ほぼ円形に巡らされている。周溝の規模は北側で幅1.3m、深さ0.2m、東側で1.15m、深さ0.2m、西側で幅1.75m、深さ0.35m、南側で幅0.8m、深さ0.1mをはかる。周溝南側は墓



第144図 大屋敷C31号墳周溝遺物出土状況図



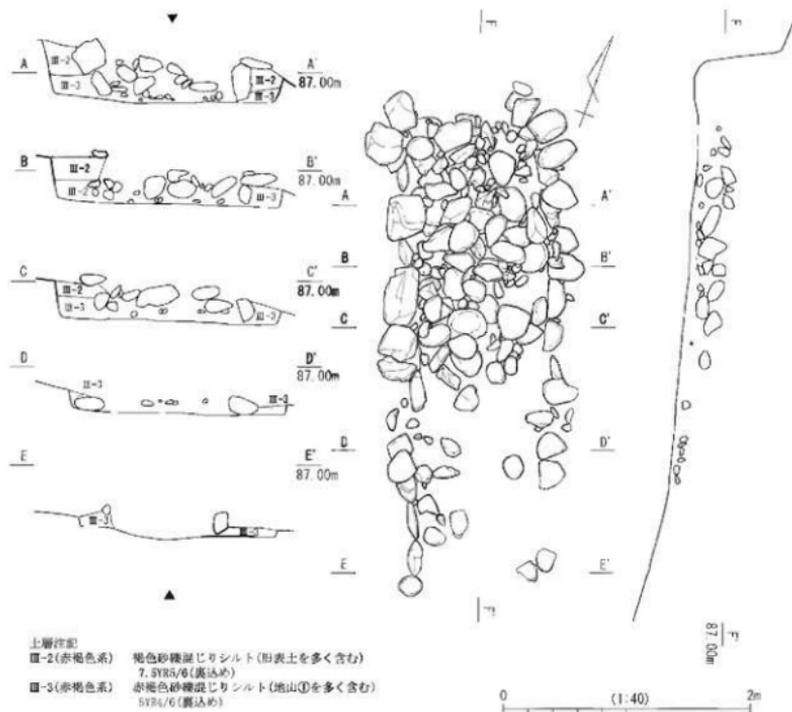
第145図 大屋敷C31号墳周溝および墳丘出土土器実測図

玄室 玄室平面形は中央部の幅がやや広く、玄室側と奥壁側の幅がほぼ等しく、側壁が弓なりの、扇張形である。側壁に関して、右側壁は基底石に河原石を用いて長手を内側に向けているのに対し、2段目以上は角礫を用いて平坦な面を内側に向けている。一方、左側壁は基底石の一部に角礫を用いており、それらは平坦面を内側に向けている。

立柱石は存在していないが、奥壁側より2.5mの位置に左右両側壁ともに石材が存在しない箇所があり、また玄室側壁の膨張りがこの位置で収束し、これより南側は直線的であることな

第23表 大屋敷C31号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-27°54'-W	
石室全長	4.00m	
玄室全長	2.50m	玄室最大幅 1.10m
玄室奥壁幅	0.85m	玄室支門側幅 1.90m
羨道長	1.50m	羨道支門側幅 1.15m
羨道支門側幅	1.00m前後	



第146図 大原敷C31号墳横穴式石室検出状況図

などを考慮すると、この位置に立柱石が樹立させられていた可能性が高い。立柱石は、側壁からやや内側に突出していたか、あるいはほぼ壁面に取り込まれていた可能性が想定できる。

奥壁は存在していないが、墓壇奥壁側の底面に抜き取られた痕跡があり、やや大きめの土坑が掘削されていることから大型の角礫を用いた鏡石であった可能性が高い。また、側壁は奥壁を挟み込むように据え置かれている。

羨道 羨道は左右両側壁ともに玄室の石材よりも0.1mほど西側にずらして据え置かれている。側壁は直線的であり、羨道の平面形は長方形を呈する。

基底石 玄室の基底石は角礫と円礫を用いており、奥壁側の敷石を除いて長手を内側に向けて据え置かれている。羨道の基底石は、円礫が用いられており、長手を内側に向ける。また、立柱石を据えたと推測した部分には小礫が確認でき、立柱石を固定するために設置された石材である可能性が高い。

敷石 敷石は10cm以下の小礫を玄室と羨道に敷設している。羨道部分の敷石には空白部分が目立つため、本来は敷設されていなかった可能性もある。

使用石材 玄室側には円礫(河原石)と角礫を用いており、羨道は円礫を主に用いている。積載方法は二段目以上の円礫に小口積みが確認できるものの、基底石および角礫は長手面を内側に向けて積載されている。

墓壇・墓道 墓壇は地山を86.7~86.8m付近まで掘削しており、奥壁側は現状で地表面から0.7mほど掘

り込んでいる。墓壇の平面形は長方形であり、幅の狭い墓道と連結する。墓壇の規模は墓壇長4.5m、墓壇幅1.9mをはかる。

墓道は墓壇から2m付近で東側の谷に向かって「く」字形に曲がっており、本来は東側の谷に向かってさらに延びていた可能性が高い。墓道長3.5m、墓道最大幅0.8m、深さ0.2m前後をはかる。

墓壇と基底石との関係は、墓壇のはば中央に基底石が据えられている。

墓壇床面には奥壁を掘るための土坑が掘削されているが、立柱石を掘るための小土坑は確認できない。

#### ④遺物の出土状況(第149図、図版59)

遺物は玄室中央の床面上から破砕した状態で須恵器平瓶(296)、無蓋高杯(297・298)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第150図、図版137)

須恵器平瓶1点(296)、無蓋高杯2点(297・298)が出土した。

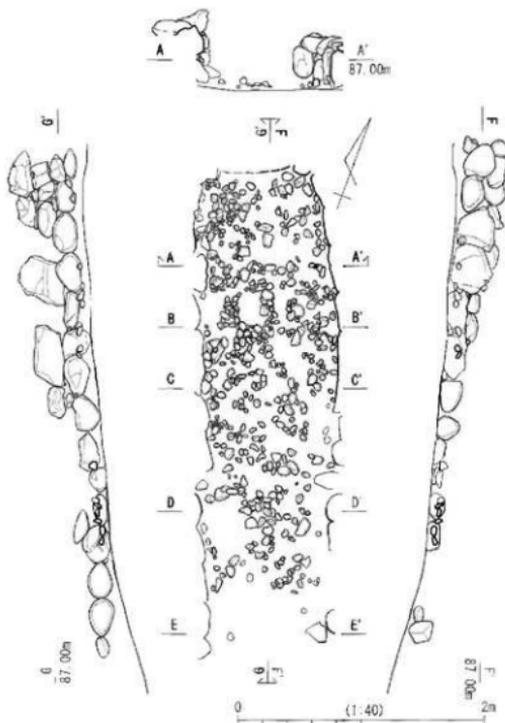
平瓶(296)は口縁部片であり、逆ハ字形に開いた後、口縁端部は丸く仕上げられている。頸部は短いものである。

無蓋高杯(298)は、器高11.1cm、口径15.2cm、底径9.8cm、脚基部径4.4cmをはかる。杯部は半球形の体部をもち、口縁部は口縁端部直下で屈曲し、外上方に向かってつまみ出され、段になっている。脚部はハ字形に垂下した後、底部端を肥厚させる。無蓋高杯(297)は、脚部片であり、298と同様の特徴を有する。

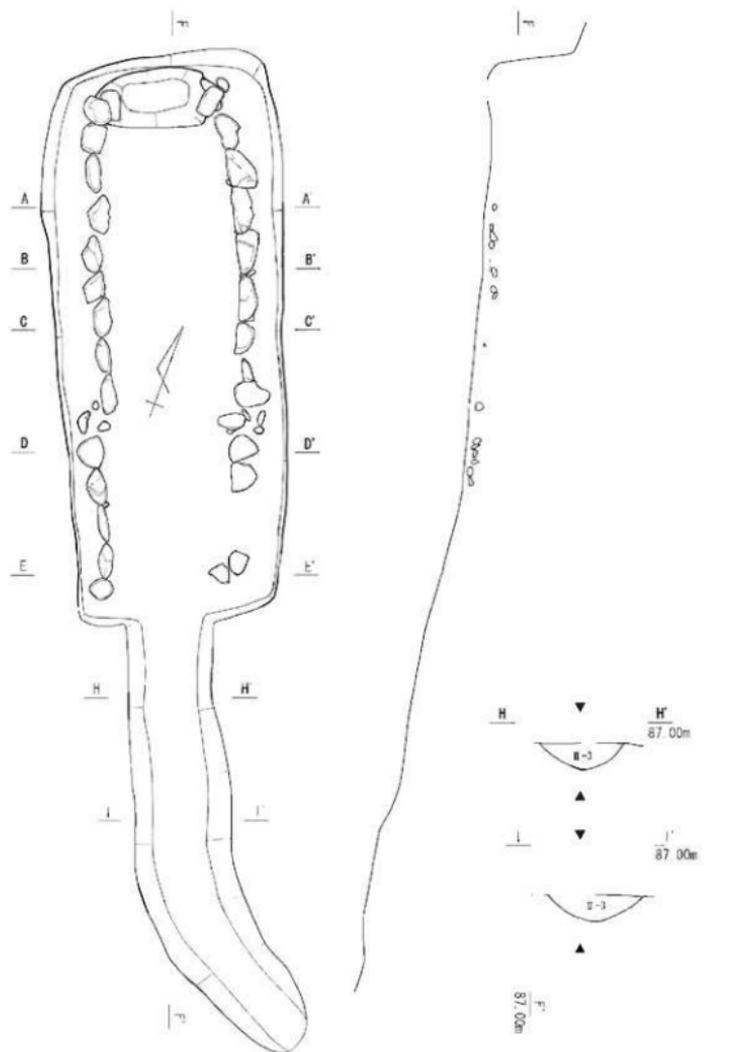
#### ⑥小結

大屋敷C31号墳は、玄室から出土した須恵器から、遼江IV期後半～末葉に位置づけられ、7世紀後半～末葉に築造された可能性が高い。出土遺物に時期差を見出すことはできないことから、追葬に関しては不明である。

また、大屋敷C31号墳の墓道は東側の谷に向かって延びており、墓道は東側の谷部分から上り、古墳に至った可能性が高い。

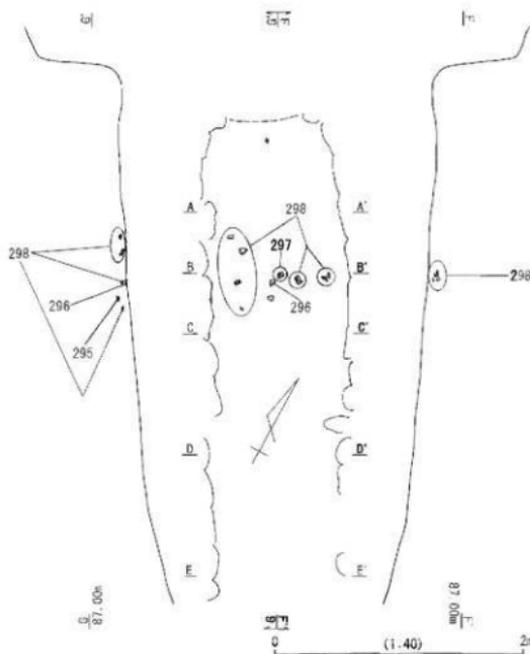


第147図 大屋敷C31号墳横穴式石室実測図

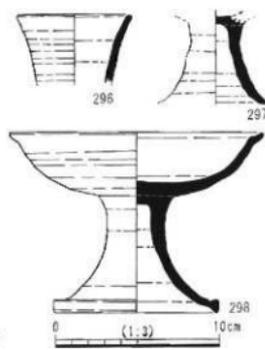


土層注記  
 II-3(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7 SVR4/6(周溝層土)

第148図 大屋敷C31号墳横穴式石室墓底石および墓積実測図



第149図 大屋敷C31号墳横穴式石室遺物出土状況図



第150図 大屋敷C31号墳横穴式石室出土土器実測図

## (19) C32号墳

## ①調査前の状況

調査前は全く確認できなかった古墳であり、重機による表土除去中に確認した古墳である。石材が崩落したような状況であったため調査を開始した。調査が進むにつれ、石材が積載された状況にはなく、現位置を失い崩落した状況であることが判明し、この部分にも檜の改竄が及んでいることが判明した。

古墳はE27・E28グリッドに位置する。大屋敷C古墳群の中で最も東側に築造された古墳であり、谷部に差し掛かる緩斜面に築造されている。

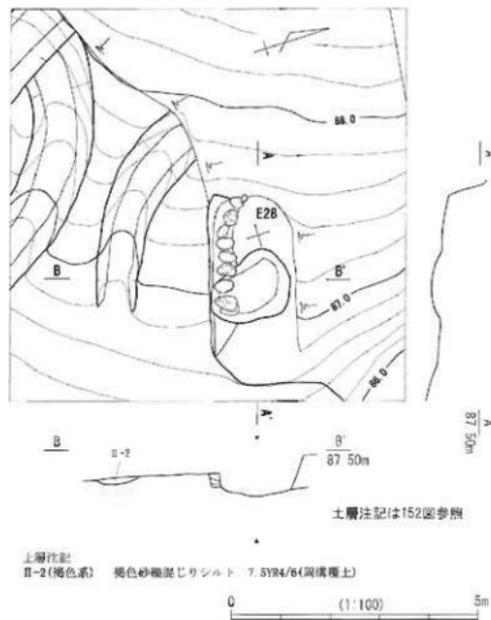
## ②墳丘・周溝(第151図, 図版60)

周溝は西側、北側、東側、南東側が改竄のため完全に破壊されていたが、南西側の一部が残存していた。周溝の規模は南西側で幅1.1m、深さ0.1mをはかる。残存する周溝は曲線を描くことから、古墳の形状は楕円形に近い円墳であったと推断できる。

古墳規模は周溝内側で、南北2.0m以上、東西3.0m以上をはかる。古墳の見かけの高さは、墳丘東側で標高86.8m、墳丘西側で87.8mをはかることから、東側からみて古墳の高さは現状で1.0m程度である。

なお、墳丘盛土は全く残存していない。

また、墳丘および周溝から遺物は出土していない。



第151図 大屋敷C32号墳増し測量図

第24表 大屋敷C32号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-72°-19' W
石室全長	2.40m以上
玄室全長	2.40m以上
玄室最大幅	0.50m以上

分が河原石であり、主に河原石を用いて築造された横穴式石室で、天井や奥壁に角礫が用いられていたものと推測する。

**墓壇** 墓壇は地山を標高86.7m付近まで掘削し、現地表面から約0.8m掘り込んでいる。墓壇の平面形は奥壁側が隅丸長方形であった可能性が高い。墓壇長3.4m以上、幅0.8m以上をはかる。立柱石や奥壁を据えるための土坑は確認できない。

墓壇と基底石との関係は墓壇方よりやや内側に設置されている。

#### ④出土遺物

遺物は一切出土していない。

#### ⑤小結

C32号墳は出土遺物がなく、築造時期や追葬の有無など不明である。また、石室の形状や規模も不明瞭であることから、それらからの推定も難しい。しかし、築造された場所が東側の谷部に落ち込む場所であり、立地的には良好ではないことから、西側に位置するC31号墳よりも後出する古墳である可能性が高い。したがって、C31号墳は7世紀後半に築造された可能性が高いことから、C32号墳は7世紀末

#### ③埋葬施設(第152・153図、第24表、図版60)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された横穴式石室であり、今回調査した大屋敷C古墳群の中で唯一東側(谷側)に向かって開口する。残存状況は良好ではなく、奥壁と左側壁のすべて、右側壁の2段目以上は改竄により完全に破壊されていた。

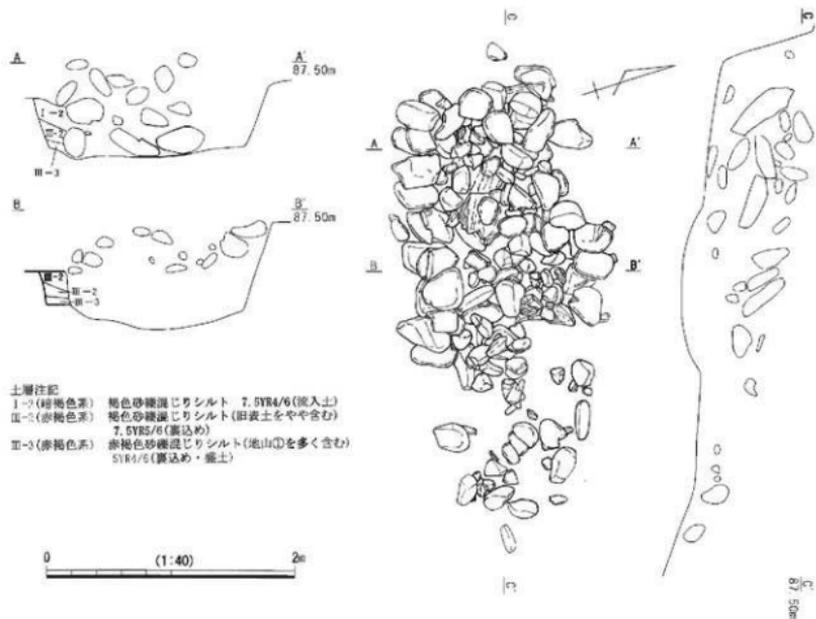
また、石室床面にまで掘削が及んでおり、敷石の状況は不明である。

石室規模は周溝との関係から見ると現状よりも長かったと考えることができ、無袖式あるいは単室系擬似両袖式石室の可能性が高い。

**石室** 石室は上述したとおり大部分が破壊されており、右側壁の基底石の一部のみ残存していた。玄室平面形は奥壁側から東側に向かって曲線を描くことから、胴張形あるいは奥室まり形であった可能性が高い。

側壁は奥壁を挟み込むように設置されていた可能性が高い。

**基底石** 基底石は河原石を用いており一部が長手面を内側に向けているが、その他は小口を内側に向けている。**使用石材** 崩落していた石材には一部に角礫が確認できるものの、大部

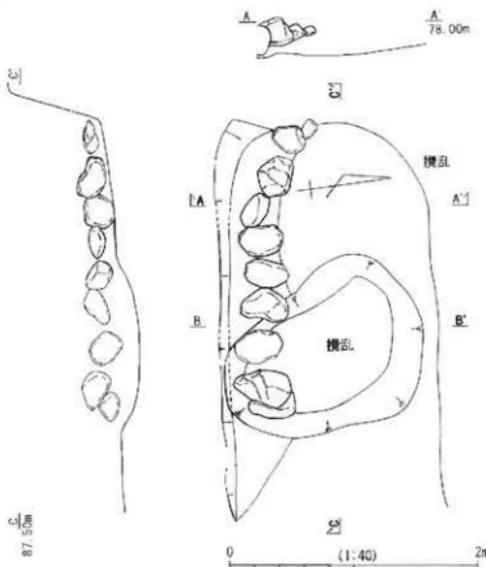


第152図 大屋敷C32号墳横穴式石室検出状況図

業以降の築造である可能性が高い。  
 C31号墳が7世紀末業以降の築造であれば、ほぼ同時期の7世紀末業かあるいは8世紀前半に築造された可能性が高い。

なお、出土遺物がないことから、追葬に関しては不明である。

また、大屋敷C古墳群の中で、唯一東側に向かって開口しており、大屋敷C古墳群と大屋敷A古墳群の谷部分を意識している可能性が高い。対面する大屋敷A古墳群中にこの谷に向かって開口する古墳(仮6号墳)が確認できることから(静岡県文研2003c)、この古墳と関係が深い可能性が高い。



第153図 大屋敷C32号墳横穴式石室実測図

## (20) C33号墳

## ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みなどは一切確認することができず、表土除去中に石材が集中することで、はじめて古墳であることが判明した。

古墳は、F28・29グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第154～156図, 図版61・63, 138)

墳丘は緩斜面に築造されている。

周溝が全周しており、古墳の形状は円形であることが判明する。周溝の規模は北側で幅1.0m、深さ0.15m、東側で幅1.0m、深さ0.1m、西側で幅1.2m、深さ0.2m、南側で幅1.0m、深さ0.1mをはかる。

古墳の規模は周溝の内側で南北6.0m、東西5.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側が83.4m前後、墳丘北側で標高84.7m前後をはかることから現状で南側から見て1.3mである。

盛土は残存していない。

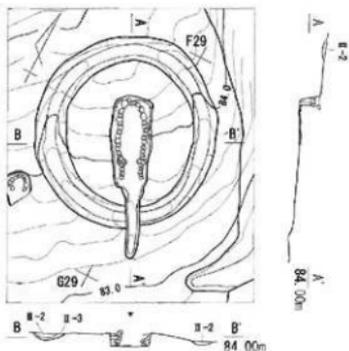
また、周溝西側で底面から約0.3m浮いた状態で土師器脚付盤(299)が出土した。これは皿状の盤で、脚部は八字形に垂下するものである。時期は遠江IV期後半～V期前半に位置づけることができる。

この遺物は底面よりも浮いた状態で出土していることから、C33号墳に直接伴うものではない可能性が高く、斜面上側に位置する、C31号墳などの遺物が流れ込んだ可能性が高い。

## ③埋葬施設(第157・158, 161図, 第25表, 図版61～63)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された単室系擬似向袖式横穴式石室であり、南南東に向かって開口する。

天井石 天井石は玄室内で3石確認することができ、幅



土層法記

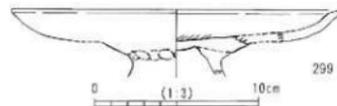
II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト

7.5784/6(周溝覆土)

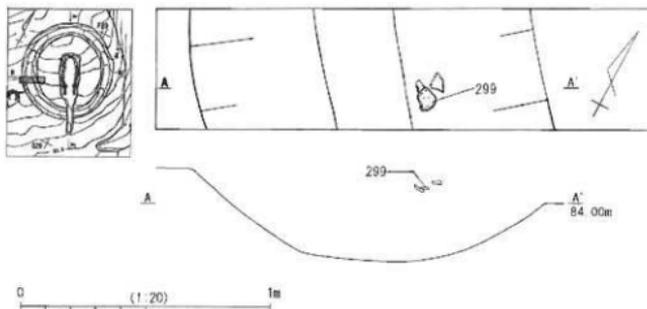
II-3(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト

7.5784/6(周溝覆土)

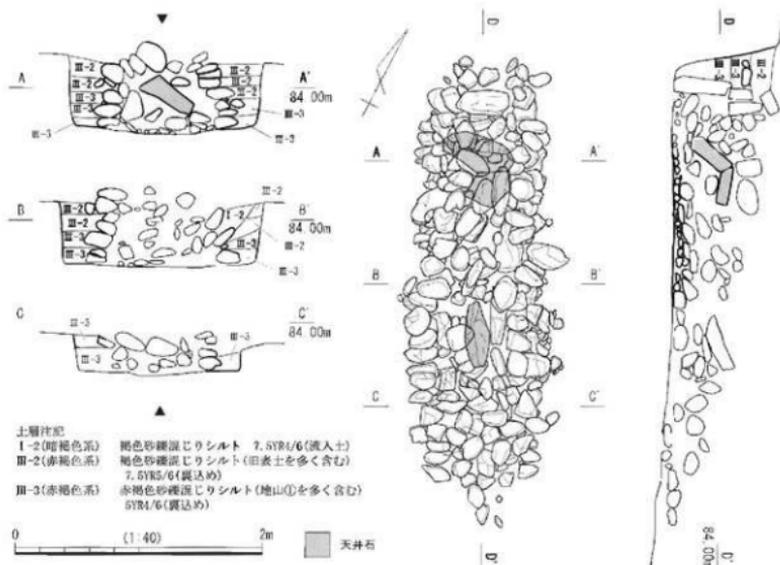
第154図 大屋敷C33号墳墳丘測量図



第155図 大屋敷C33号墳周溝出土土器実測図



第156図 大屋敷C33号墳周溝遺物出土状況図



第157図 大屋敷C33号墳横穴式石室横切状況図

0.5～0.6mの角礫を用いている。南側の一石落ち込んでいる場所がほぼ立柱石の部分であることから、天井石は少なくとも奥壁から立柱石上までは積載されていた可能性が高い。

**玄室** 玄室平面形は中央幅が広く奥壁側、玄門側の幅がほぼ同一の胴張形である。

奥壁は2段積みであり、1段目は板状の角礫を用いて鏡石としており、2段目はやや小型の板状の角礫を用いている。奥壁はほぼ垂直に樹立されており、約6度内傾する。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されている。側壁は約6度内傾する。側壁は最大で7段残存しており、奥壁1段目と4段目、奥壁2段目と6段目が対応する。側壁は各段ごとに目地を合わせるように小口積みされている。

立柱石は粒状の角礫を用いており、側壁からわずかに突出する。立柱石は側壁の4段目、奥壁1段目(鏡石)とほぼ同一の高さである。

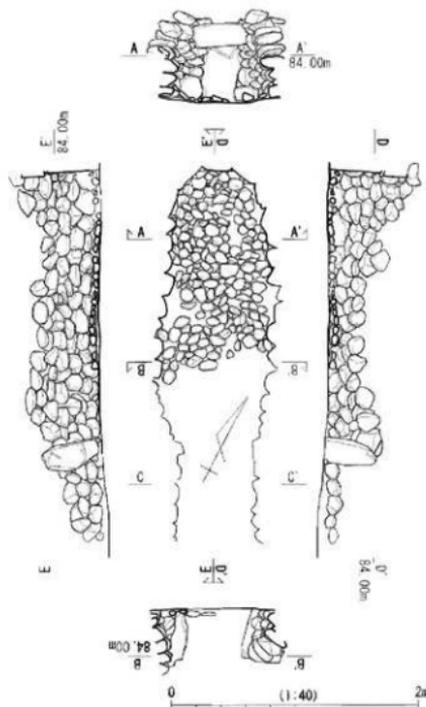
**羨道** 羨道は玄門側がやや狭く、古墳外に向かってわずかにハ字形に開放するもので、本来は天井石が架橋されていなかった可能性が高く、前庭と呼んだ方が妥当かもしれない。羨道は基礎石で右側壁4石分、左側壁で5石分設置されている。羨道幅と玄室玄門側幅はほぼ同一である。

**敷石** 敷石は玄室内の奥壁から1.7m南側まで敷設されている。玄室内でもこの部分までが実際に人体を埋葬する屍床として利用されていた可能性が高い。使用された石材は10cm以下の小礫であり、1面のみ確認することができる。

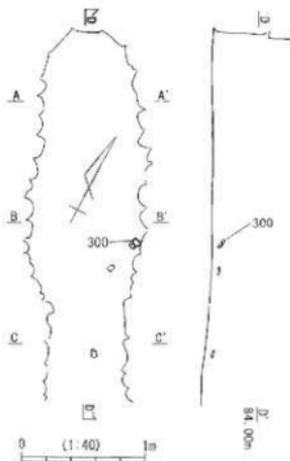
**基底石** 玄室の基底石は主に円礫が用いられており、左側壁の奥壁側の3石を除いて小門を内側に向けている。羨道の基底石は主に円礫が用いられ、すべて小口を内側に向けている。

第25表 大屋敷C33号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-27° 12' -W	
石室全長	3.05m	
玄室全長	2.20m	玄室最大幅 0.85m
玄室奥壁幅	0.30m	玄室玄門側幅0.65m
羨道長	0.85m	羨道玄門側幅0.55m
羨道羨門側幅	0.60m	



第158図 大屋敷C33号墳横穴式石室実測図



第159図 大屋敷C33号墳横穴式石室遺物出土状況図

**使用石材** 調整に使用された石材は一部に角礫が使用されるものの、大部分が円礫であり、小口積みされる。

**墓壁・墓道** 墓壁は地山を標高83.6m付近まで掘削しており、奥壁側で現地表面より約0.8m掘り込んでいる。墓壁の形状はやや不整形な長方形であり、墓道へ続く。墓道は両側に向かって直線的に伸びる。墓壁長3.7m、墓壁幅1.65m、墓道長2.9m、墓道最大幅0.85m、深さ0.2mをはかる。

墓壁底面には奥壁および側壁の一部を据えるための小土坑が掘削されている。また、立柱石は左側壁側のみ掘削される。

#### ④遺物の出土状況(第159図, 図版63)

須恵器平瓶あるいは長頸壺の肩部片が玄室左立柱石付近に破砕した状態で1点(300)出土した。

#### ⑤出土遺物(第160図, 図版138)

須恵器長頸壺あるいは平瓶の肩部片が出土している。

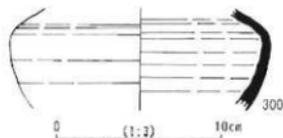
300の肩部は丸みを帯びており、肩部に最大径がある。

このほか須恵器小片が出土している。

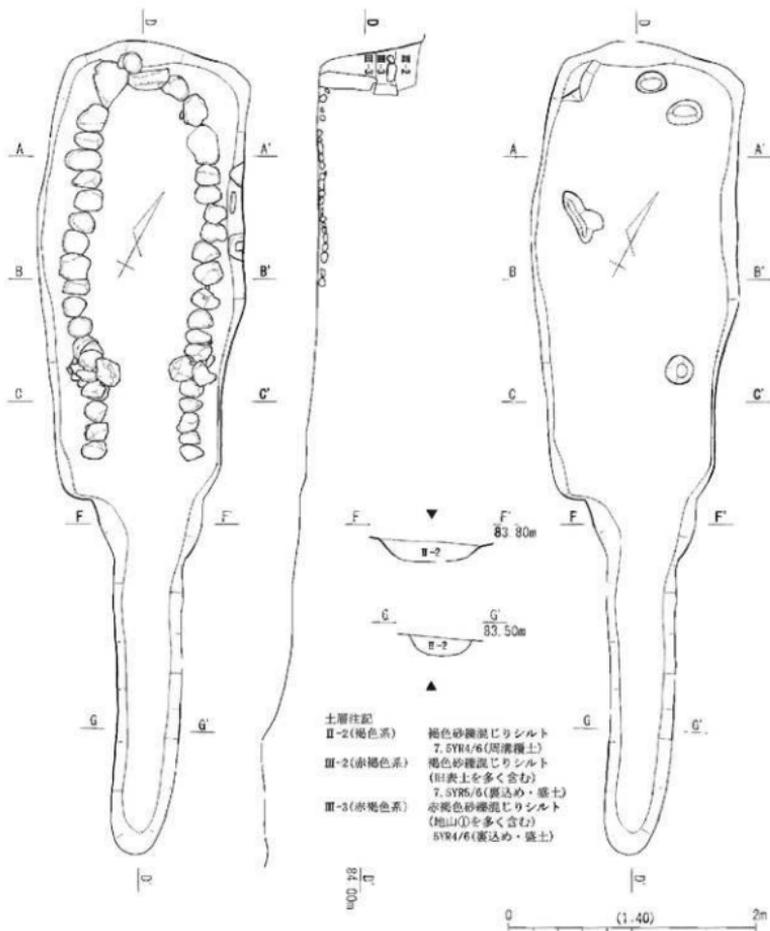
#### ⑥小結

C33号墳の築造時期は石室内から出土した須恵器片から特定することはできない。遠江IV期後半～V期前半の一時期に築造された可能性が高い。

墓道は東側に向かって伸びていた可能性が高いため、東側の谷から古墳に向かって上ってきたと考えることができる。



第160図 大屋敷C33号墳横穴式石室出土土器実測図

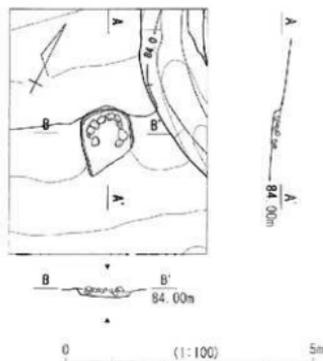


第161図 大塚敷C33号墳横穴式石室基礎石および墓室実測図

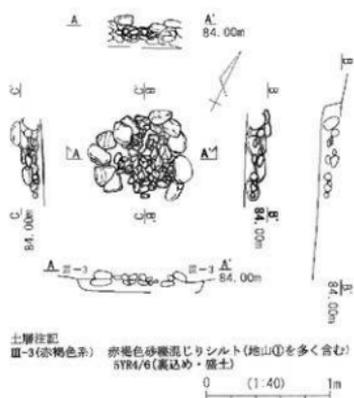
## (21) C34号墳

## ①調査前の状況

調査前は、全くこの位置に古墳があることは確認できず、重機による表土除去段階でも検出されず、人力掘削時に円礫が出土したことにより確認した。石材が円形であることから、当初は古墳ではなく中世の集石墓と想定したが、石組みの下部に試掘溝調査を実施しても骨壺や副葬遺物は全く確認できないだけでなく、石材の下部には掘削が及んでいないことから、円形を呈する小石室を有する古墳であると



第162図 大屋敷C34号墳地形測量図



第163図 大屋敷C34号墳横穴式石室実測図

判断した。古墳は、F28グリッドに所在する。

#### ②墳丘・周溝(第162図, 図版64)

墳丘・周溝ともに確認できない。築造当初より存在しなかった可能性が高く、本来石室を覆う程度の盛土だけが存在していた可能性が高い。

#### ③埋葬施設(第163・164図, 第26表, 図版64)

埋葬施設は、小型化した無袖式横穴式石室である。終末期の古墳としても稀有な円形の玄室であり、最終期の横穴式石室である可能性が高い。石室 天井石が架構されていたか不明である。平面形はやや不整形な円形である。側壁・奥壁の明瞭な境界はなく、小型の円礫を用いて長手を内側に向けて円形に設置している。南側部分には隙が確認できないことから、南側は開放していた可能性が高い。側壁・奥壁ともに2段分残存している。敷石 敷石は石室内全面に敷設されている。使用された石材は5cm程度の小礫であり、1面のみ確認することができる。

基底石 基底石には円礫が用いられており、長手を内側に向けて設置されている。

墓壇 墓壇は地山を標高83.8m付近まで約0.2m掘り込んでいる。平面形態は南側が開放する長方形であるが、本来は第164図に点線で示したように方形で墓道が連結するものであった可能性もある。墓壇長0.8m以上、幅1.0mをはかる。

#### ④出土遺物

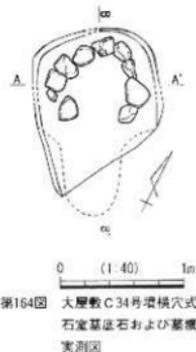
遺物は全く出土していない。

#### ⑤小結

石室は全長0.55m、幅0.5mと人体を伸展葬することは不可能であることから、改葬あるいは火葬骨を埋葬した蓋然性が高い。築造時期は遺物が全く出土していないことから不明と言わざるを得ないが、同様に小型化した横穴式石室を内包するC26号墳から遠江IV期後半に位置づけられる須恵器杯蓋が出土していることから推測して7世紀後半以降に築造された可能性が高い。さらに言えば、平面形が方形で

第26表 大屋敷C34号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-26° 34' W	
石室全長	0.55m	
玄室長	0.55m	玄室最大幅 0.50m
玄室奥壁幅	0.30m	玄室玄門側幅0.25m



第164図 大屋敷C34号墳横穴式石室基底石および墓壇実測図

はなく円形であることからC26号墳よりもさらに新しいことは明白であり、8世紀前半以降に築造された最終末の横穴式石室である可能性が高い。

## (22) C35号墳

### ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みは全く確認することができず、また分布調査による古墳分布範囲外に当たるため確認調査時にトレンチ調査を行ったが確認できなかった古墳である。表土除去の結果、石材が集中することから古墳と認定した。

古墳はG29・H29グリッドに所在する。

### ②墳丘・周溝(第165図、図版65)

墳丘登土は確認できない。周溝は東西が自然流路SR04とSR05により破壊されているが、本来は全周していたと推測する。周溝は北側で幅0.5m、深さ0.1m、南側で幅0.8m、深さ0.1mをはかる。

墳形はやや不整形な円墳で、規模は周溝の内側で南北3.2m、東西3.5m以上をはかる。墳丘南側で標高81.0m前後、墳丘北側で標高81.25m付近であることから、南側からみた現状での古墳の見かけ上の高さは、約0.3mである。

なお、周溝や墳丘表土から遺物は出土していない。

### ③埋葬施設(第166～168図、第27表、図版65・66)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された無袖式横穴式石室であり、南南東に向かって開口する。

**天井石** 天井石は確認することができない。

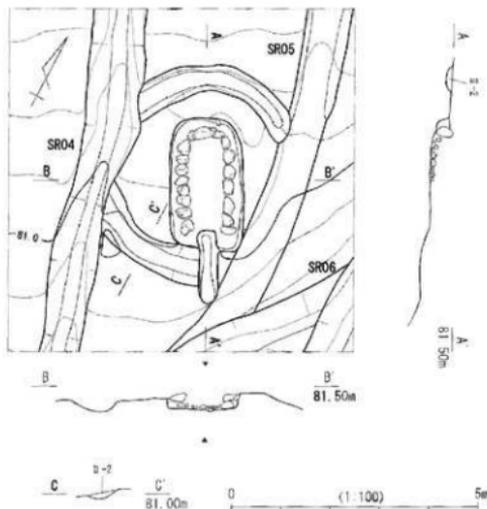
**石室** 石室平面形は玄室中央の幅がやや広い緩やかな胴張形である。奥壁は側壁に使用される河原石の2倍程度の円礫を用いて鏡石としており、その左側壁側に円礫が2段積載されている。

側壁は最大3段残存しており、奥壁を挟み込むように積載されている。側壁の3段目と奥壁鏡石の上部がほぼ同じ高さである。玄室の基底石は右側壁側が小口積み、左側壁側が長手積みであり、2段目以上は目地を揃えて小口積みしている。

**敷石** 敷石は奥壁から1.0mのところまで敷設されており、石室長の $1/2$ 以下の範囲だけに敷設している。この範囲を屍床として利用した可能性が高い。使用された石材は、10cm前後の円礫であり、1面のみ確認することができる。

**閉塞石** 閉塞石は玄室部分から約0.7m内側まで確認することができ、側壁よりもやや小型の円礫を用いて封鎖している。

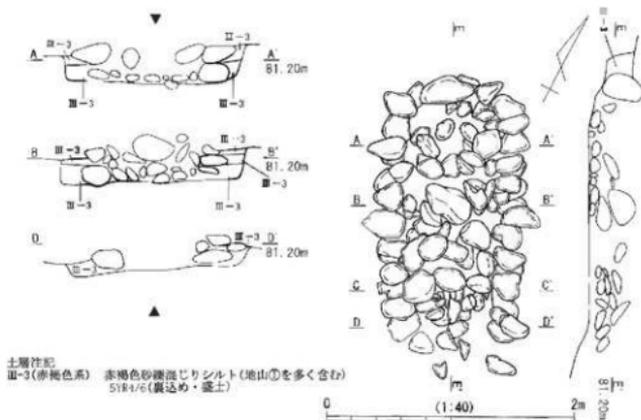
**基底石** 基底石は円礫が用いられており、左側



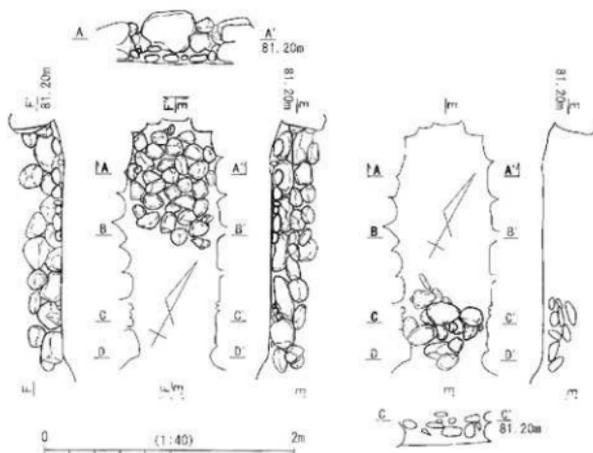
第165図 大塚敷C35号墳墳丘測量図

第27表 C35号墳横穴式石室規模

主軸方位	N・27° 31' -W		
石室全長	1.95m		
玄室長	1.95m	玄室最大幅	0.70m
玄室奥壁幅	0.60m	玄室玄門側幅	0.55m



第166図 大屋敷C35号墳横穴式石室検出状況図



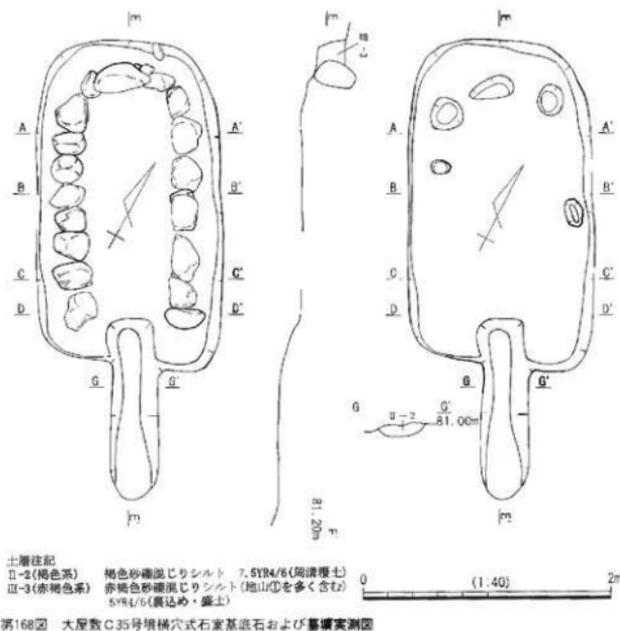
第167図 大屋敷C35号墳横穴式石室および閉塞石実測図

壁は長手側を内側にむけ、右側壁は小口積みするものが多い。奥壁鏡石の左側壁側に2石積載されていることから推測すると右側壁がまず設定され、それを基準に左側壁の位置を決定し、左側壁と奥壁の間を円礫で埋めた可能性が高い。

墓壇のほぼ中央に基底石が設置されている。

使用石材 使用された石材は、一部に角礫が確認できるものの、大部分に円礫が用いられている。奥壁にも、大型の円礫が用いられている。

墓壇・墓道 墓壇は標高81.1m付近まで、現地表面から0.25m掘削されている。墓壇平面形は隅丸長方形



であり、墓道に連結する。墓壙規模は、墓壙長2.7m、幅1.45mをはかる。墓道は南東に向かって伸びており、墓道長1.1m、幅0.35m、深さ0.1mをはかる。

#### ④出土遺物

石室内から出土した遺物はない。

#### ⑤小結

石室内から遺物が出土していないため築造時期や追葬に関しては不明である。他の同規模・同形態の石室であるC27・29号墳などからも遺物が出土しておらず、時期は明確ではないが、7世紀後半～8世紀前半に築造された可能性が高い。

また、墓道は南東側に向かって伸びていることから本来は東側の谷に向かっていたと考えることができ、C31・32・33号墳と同様、東側の谷から古墳に向かって上ってきたものと考えられる。

さらに、石室内に敷設された敷石の範囲は長さ1mと人体を伸展葬するのは困難であり、改葬骨あるいは火葬骨が埋葬された可能性が高い。

### (23) C36号墳

#### ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みは一切確認することができず、古墳の所在は重機による表土除去後に石材が集中することで、はじめて確認した。

古墳はG27・28、H27・28グリッドに所在する。

## ②墳丘・周溝(第169・170図, 図版67・138)

墳丘盛土は流出しており、全く確認することができない。

周溝は南側が流出しているが、ほぼ全周していたものと推測する。周溝は南北に長い楕円形であり、規模は北側で幅1.7m、深さ0.25m、東側で幅1.5m、深さ0.2m、西側で幅1.5m、深さ0.2m、南西側で幅1.3m、深さ0.1mをはかる。なお、墳丘の北側と南東側が自然流路で破壊されている。

墳形は南北に長い円(楕円形)墳で、周溝の内側で、南北7.0m以上、東西5.8mをはかる。

古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高81.2m前後、墳丘北側で82.8m前後であり、南から見て1.6mをはかる。

なお、周溝の底面より0.1m以上浮いた状態で須恵器杯蓋1点(301)、杯身1点以上(302・303)、長頸壺1点(304)が出土した。

杯蓋(301)は口径約9.8cmをはかる小型のもので、口縁端部は丸く仕上げられている。杯身(302)は、短く内傾する立ち上がり有するもので、口径約7.9cmをはかる。303は杯身底部である可能性が高い。3回転半のヘラ削りが施されている。304は長頸壺の胴部破片であり、肩部には明瞭な稜線を確認することができ、最大径も肩部に位置する。

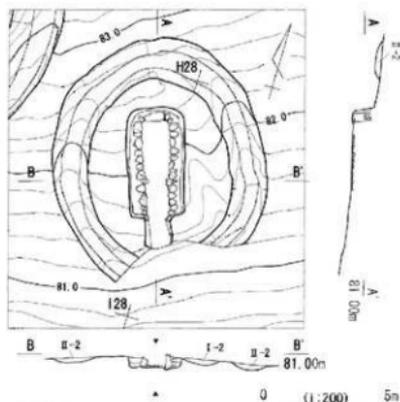
これらの須恵器は杯蓋・杯身(301~303)が遠江Ⅳ期後半、肩の張る長頸壺(304)が遠江Ⅴ期前半に比定できる。周溝底面から浮いた状態で、上部から流れ込んだ土砂の中から出土していることから、C36号墳に直接伴うものではなく斜面上部のC37号墳などに伴う遺物である可能性が高い。

## ③埋葬施設(第171~173図, 第28表, 図版67~69)

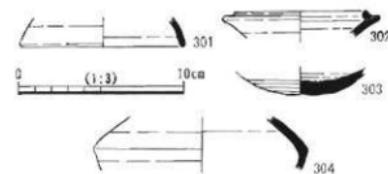
埋葬施設は古墳の中央に築造された単室系縦向両袖式横穴式石室であり、南南東に向かって開口する。**天井石** 天井石は奥壁から第171図C-C' (玄門)付近までに6石確認することができ、幅0.5~0.9mをはかり、長さ0.3~0.5mをはかる。崩落した天井石の長さを足すと1.9mであり、ほぼ玄室全体を覆うだけの長さを確保することができる。したがって、少なくとも天井石は玄室全体に架構されていた蓋然性が高い。

一方、羨道側では天井石を確認することはできず、本来架構されていたか不明である。

**玄室** 玄室平面形は中央の幅がやや広く、側壁は緩やかに彎曲する胴張形である。奥壁は大型の板状の角礫を用いた鏡石であり、2段目以上は崩落しており確認できない。鏡石上には門礫が不規則に積載されており、奥壁2段目以上を積載するための控え積みと考えることができる。鏡石はほぼ垂直に据えら



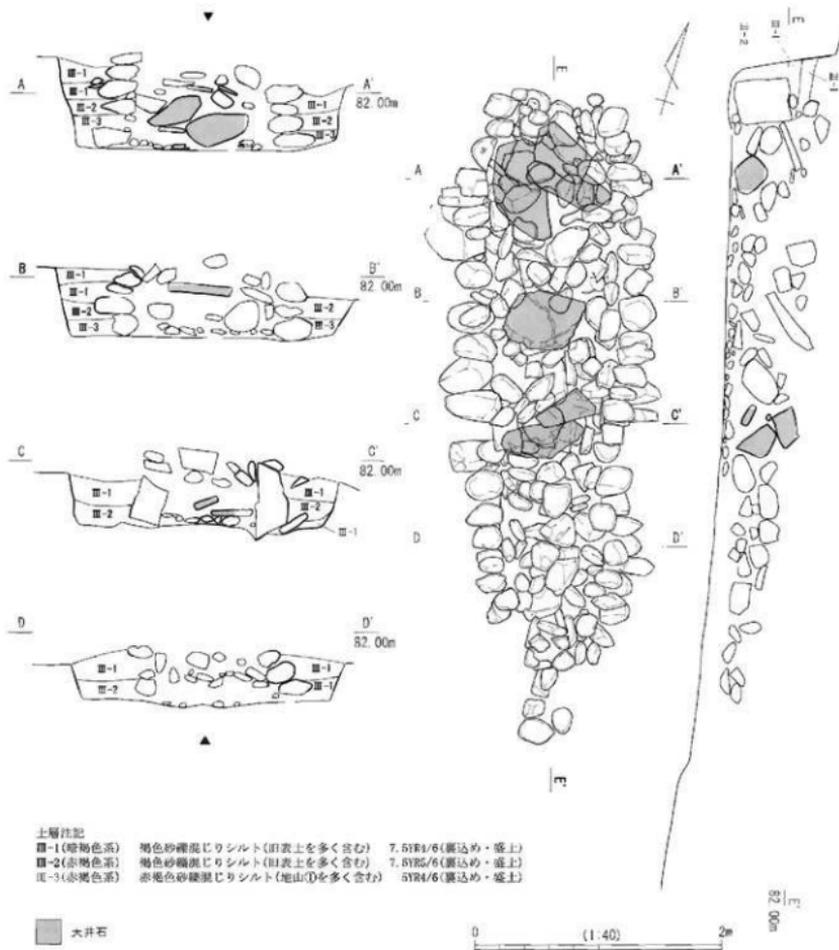
土器注記  
I-2(暗褐色系) 褐色砂澱流じりシルト 7.5YR4/6(汲入土)  
II-2(褐色系) 褐色砂澱流じりシルト 7.5YR4/6(周溝埋土)  
第169図 大塚遺跡C36号墳墳丘測量図



第170図 大塚遺跡C36号墳周溝出土土器実測図

第28表 大塚遺跡C36号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-16° 30' -W	
石室全長	4.10m	
玄室全長	2.40m	玄室最大幅 1.20m
玄室奥壁幅	1.00m	玄室玄門側幅0.90m
羨道全長	1.70m	羨道玄門側幅0.90m
羨道羨門側幅	0.65m	

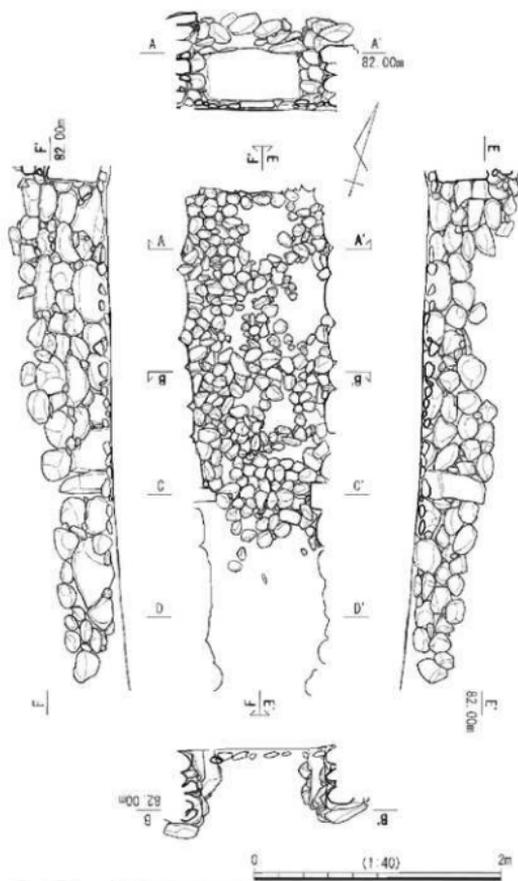


第171図 大屋敷C36号墳横穴式石室検出状況図

れており、控え積みは鏡石の上部まで及んでいることから、2段目はかなり内傾していたと推測する。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、基底石は大部分が長手を内側に付けており、2段目以上は一部に長手積みを確認できるが大部分が小口積みされている。側壁は最大5段分残存しており、各段が目地を揃えて積載されている。側壁3段目が奥壁鏡石の上部と一致する。

立柱石は側壁から約0.1m突出している。左右両立柱石ともに柱状の角礫を用いている。立柱石の上部が奥壁鏡石上部と一致する。



第172図 大屋敷C36号墳横穴式石室実測図

に小口積み、長手積みがあり、設置順序は明確ではない。

**墓壁・墓道** 墓壁は隅丸長方形であり、墓道に連結する。墓壁は、地山を標高81.6m付近まで掘り込んでおり、現地表面から0.8m掘削している。墓壁の規模は墓壁長4.45m、幅2.4mをはかる。墓壁床面には奥壁と立柱石と側壁の一部を据えるために土坑が掘削されている。

墓道は南南東方向に伸延している。墓道残存長1.2m、幅1.1m、深さ0.25mをはかる。墓壁の覆土は一端掘削された後進まり、再度掘削された状況を確認できることから、追葬が行われた可能性が高い。

#### ④遺物の出土状況(第174図, 図版68)

玄室内右側壁立柱石付近で、脚付長頸壺(306)が横になった状態で、その南東側に杯蓋(307)が破碎

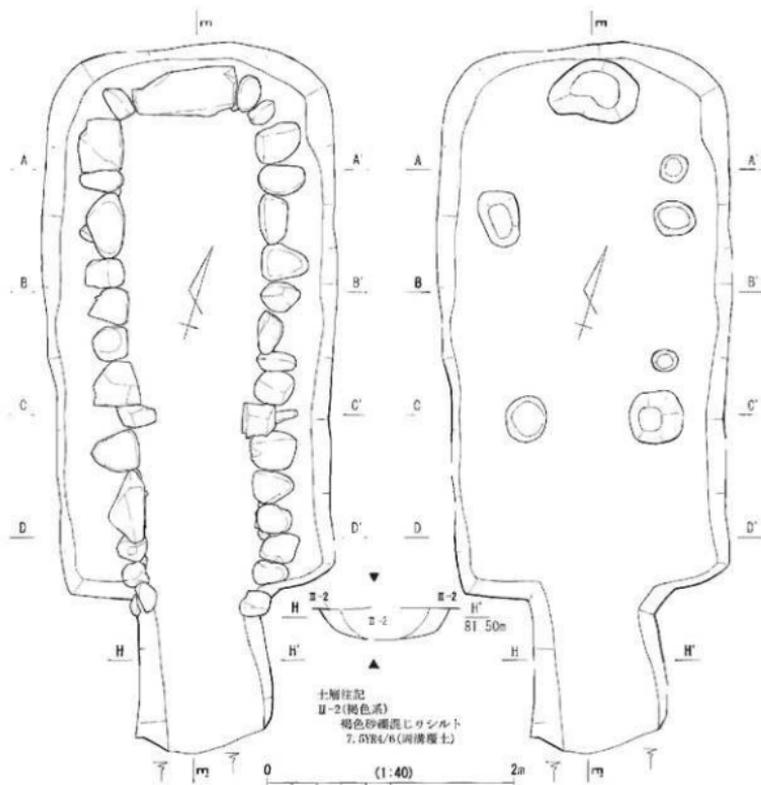
羨道 羨道は、右側壁で5石分、左側壁で6石分の長さまで設置されており、最南の1石のみが墓壁の肩に設置される。羨道の平面形はほぼ長方形であるが、羨道入口部分のみやや幅を狭める。

羨道側壁には一部に角碑が使用されるものの、大部分が円礫を用いた小口積みである。側壁と玄室の各段はほぼ水平である。

敷石 玄室内には一部空白部分があるものの、ほぼ全面に敷石が敷設されており、羨道の一部まで及んでいる。墓壁床面に直接敷設されており、1面のみ確認することができる。使用された石材は10cm前後の小礫である。

閉塞石 閉塞石と推測する石材が羨道入口付近で確認することができ(第174図)、床面上約0.1mの土砂の上に設置されている。利用された石材はほぼ側壁に用いられた石材と同大である。

基底石 基底石は羨道最南端の石材が墓壁上に設置される以外は墓壁内に設置されている。玄室・羨道とも



第173図 大屋敷C36号墳横穴式石室基底石および墓坑実測図

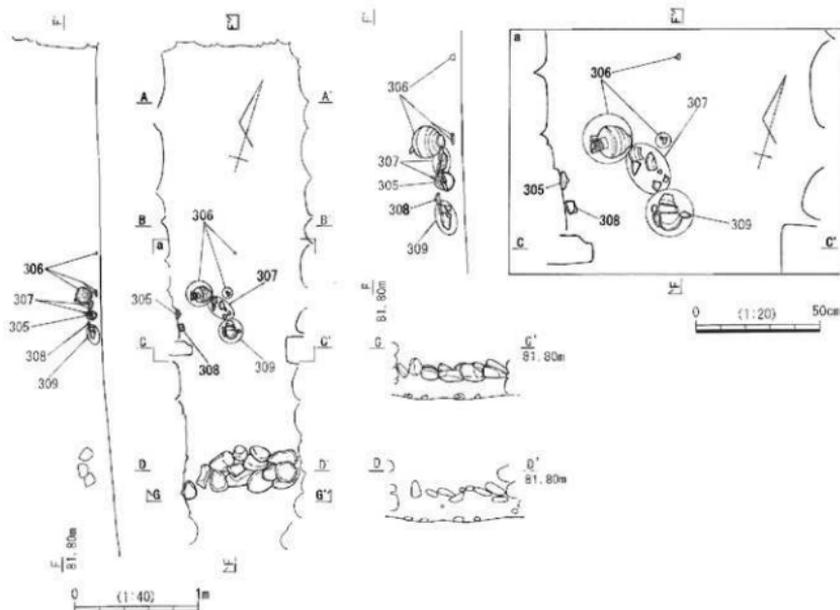
された状態で、その南側から無台杯(309)が口縁部を下に向けた状態で出土した。また、長頸壺蓋(305)が右側壁に立てかけられた状態で、その南側から杯蓋(308)が破片で出土した。

このほか石室覆土より無蓋高杯1点(310)と平瓶1点(311)が出土した。

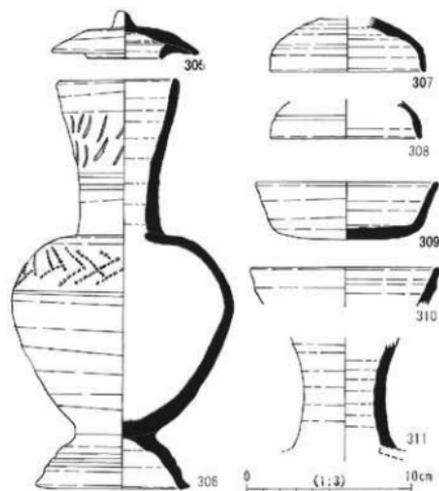
#### ⑤出土遺物(第175図、図版138・139)

須恵器長頸壺蓋1点、脚付長頸壺1点、杯蓋2点、無台杯1点が床面より、無蓋高杯1点、平瓶1点が石室覆土より出土した。

須恵器長頸壺蓋(305)は乳頭状摘みを有し、返りは大きな返りを有することから長頸壺蓋と判断した。脚付長頸壺(306)は、のたがめ目立ち、ハ字形に開く脚部を有し、脚部は外側に向かってつまみ出される。胴部は中位よりやや上に肩があり、丸みを帯びている。この部分に最大径を呈する。また、肩から頸部までの部分に刺突で羽状文を描いている。ヘラ先は9つである。頸部はほぼ直立した後、中間地点で内面に明瞭な稜線を有し、そこからやや外上方に向かって立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられている。頸部の中位には2段にわたってヘラ描きの「ノ」字形文様が描かれている。器高25.1cm、口径7.1cm、頸部径5.4cm、胴部最大径13.4cm、脚底部径9.3cmをはかる。



第174図 大屋敷C36号墳横穴式石室閉塞石室測図および遺物出土状況図



第175図 大屋敷C36号墳横穴式石室出土土器実測図

杯蓋(307・308)はともに破片であり、追葬時に既に破砕されており、外へ一部が抜き出された可能性もある。口径9.0~9.4cmをはかる。無台杯(309)の底部はほぼ水平で、口縁部は底部から斜め外上方に向かって立ち上がるもので、口縁端部には沈線が施されている。口径10.8cmをはかる。

無蓋高杯(310)は、口縁部片で、口縁直下には強いナデが施されている。平碗(311)は頸部片であり、逆ハ字形に開く。

#### ⑥小結

C36号墳の玄室より出土した須恵器は遠江IV期後半~IV期末葉に位置づけることが可能であり、墓道の土砂の堆積状況から追葬が確認できることから、遠江IV期後半に築造され、遠江IV期末葉に追葬が行われた可能性が高い。

## (24) C37号墳

## ①調査前の状況(第176図, 図版70)

調査前は周辺よりも0.4m程度高くなっており、その中央は大きく掘り窪められていたため、盗掘を受けた古墳であることは一目瞭然であった。分布調査時に確認された古墳のうちの1基である可能性が高い。当初は、東西8.0m、南北9.0m程度の墳丘を有する古墳と想定した。

古墳はG26・27、H26・27グリッドに位置している。

## ②墳丘・周溝(第177・178・180図, 図版70・139)

古墳の周囲には周溝が南北に長い楕円形に巡らされており、全周する。周溝の規模は北側で幅1.4m、深さ0.4m、東側で幅2.1m、深さ0.2m、西側で幅1.5m、深さ0.2m、南側で幅1.9m、深さ0.1mをはかる。

墳形はやや南北に長い円(楕円形)墳であり、墳丘規模は南北で10.8m、東西で9.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは墳丘南側で標高82.4m付近、北側で標高85.1m付近であり、南側から見て現状で2.7mである。

盛土は墳丘のほぼ全体に残存しており、今回調査した古墳の中では最も残存状況が良好である。盛土は石室裏込めから連続する第一次墳丘である可能性が高く、3層積み上げられる。この外側のⅢ-1層は第二次墳丘の可能性もある。盛土は墳丘の中心に向かって盛り上げられ、最も厚い部分で0.5mをはかる。盛土は地山①・②を混和させ、旧表土上に直接盛られる。

なお、37号墳の墳丘表土から、返蓋あるいは拵蓋の拵み2点(第177図313・314)、フラスコ形瓶1点(315)が出土している。

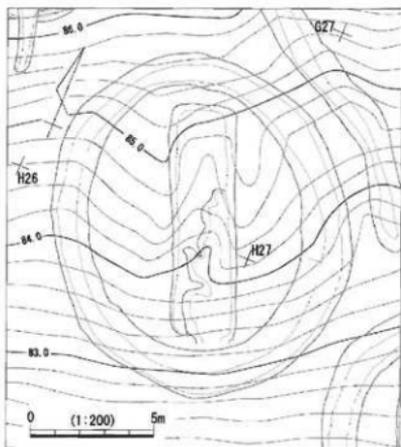
拵みは擬宝珠拵みである。フラスコ形瓶は胴部片であり、胴部は球形に近い。最大径18.0cmをはかる。これらの須恵器は、遠江Ⅳ期後半～Ⅴ期前半に位置づけることができる。

## ③埋葬施設(第179図, 第29表, 図版70)

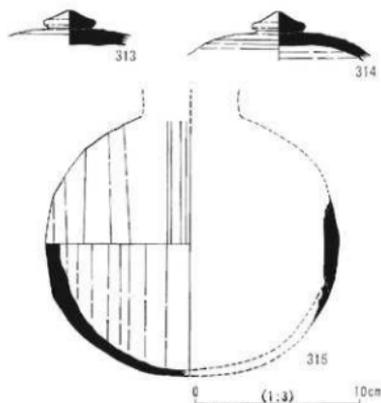
埋葬施設は墳丘の中央に構築された横穴式石

室であるが、石材はすべて抜き取られており石室の形状は不明であるが、墓塚の規模から考えると、大型の単室あるいは複室系擬似両袖式横穴式石室が構築されていた可能性が高い。

使用石材 使用された石材は、盗掘坑や墳丘表土から角礫が多数出土していることから、主に角礫が用



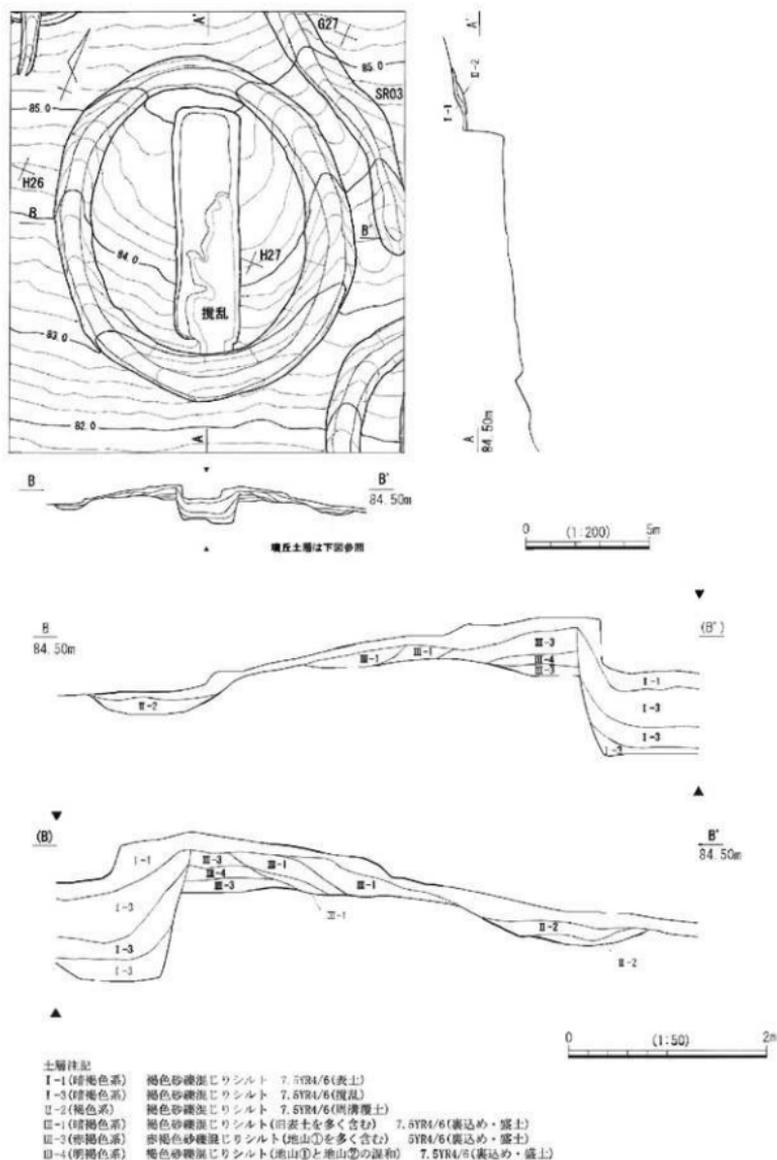
第176図 大塚敷C37号墳調査前測量図



第177図 大塚敷C37号墳墳丘出土土器実測図

第29表 大塚敷C37号墳横穴式石室規模

主軸方位 N-22°00'-W



第178図 大塚敷C37号墳墳丘測量図および墳丘盛土土層断面図

いられたことが判明する。

**墓塚・墓道** 墓塚は地山を標高83.5m付近まで掘削しており、現地表面から1.6mほど掘り込んでいる。

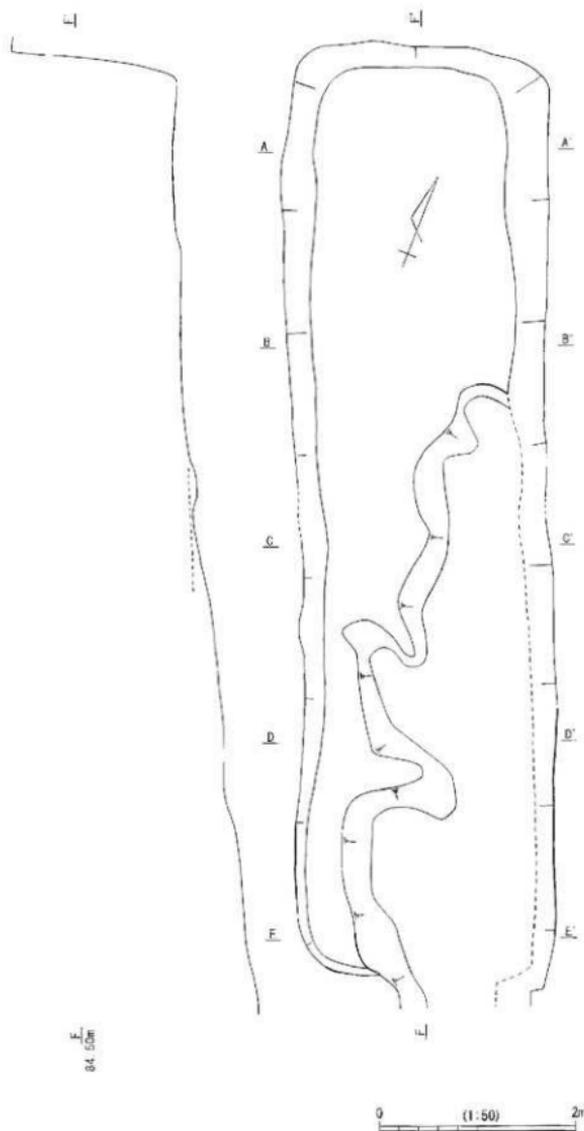
墓塚は東南側が破壊されているが、残存する部分から長方形であることが判明し、短い墓道に連結する。墓塚規模は墓塚長9.5m、墓塚幅2.7mをはかる。

墓道は短く、墓道長0.4m、幅1.3mである。

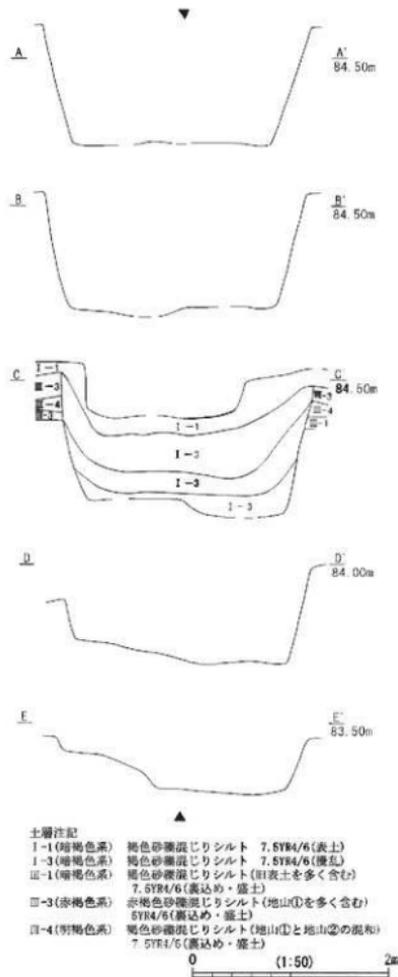
④出土遺物(第181図、図版140～142)

横穴式石室の攪乱土中より須恵器摘蓋2点(316・317)、有台杯3点(318～320)、フラスコ形瓶か甕1点、長頸壺片4点(321～325)、脚付長頸壺1点(326)、台付長頸壺3点(327～329)が出上した。

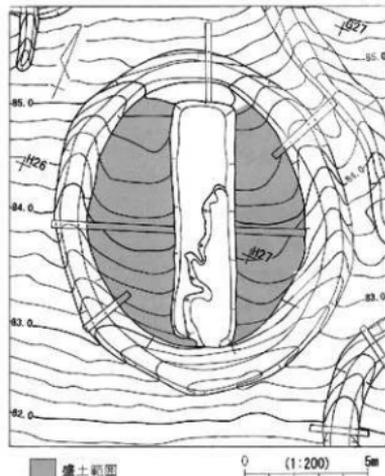
摘蓋(316・317)は口縁部を外反させながら垂下するものである。口径約14.5cmをはかる。有台杯(318・319)は底部が高台よりも突出し、口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径14.8～15.0cm、器高約4.5cmをはかる。319の底部にはヘラ記号「-」が描かれている。320



第179図1 大塚敷C37号墳墓塚実測図および土層断面図



第179図2 大塚遺C37号墳墓横実測面図および土層断面図



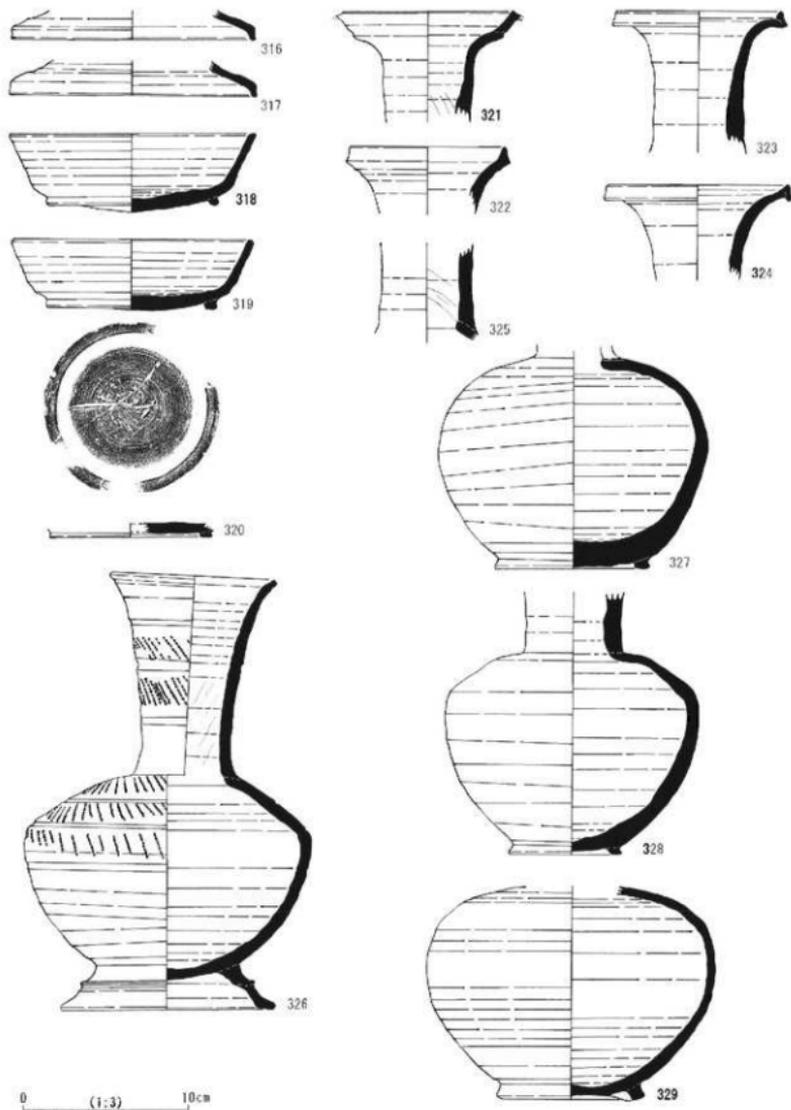
第180図 大塚遺C37号墳盛土除去後地形測量図

の底部は高台よりも突出しない。

脚付長頸壺(326)は、胴部は肩が張り、丸みを帯びる。頸部から逆ハ字形に開いた後、口縁端部は丸く仕上げられる。脚部はハ字形に開き段をつけた後さらに開くもので、端部は外側につまみ出される。胴部は頸部から肩にかけて沈線で区画し、斜行刺突文を施す。また、頸部中段も沈線で区画し、斜行刺突文を施す。器高26.7cm、口径9.7cm、胴部最大径17.4cm、脚径12.6cmをはかる。

台付長頸壺(327)は球形の胴部で、ほぼ中に最大径がある。最大径16.3cmをはかる。胴部下半には回転ヘラ削りが施される。328はやや扁平な球形の胴部を有し、最大径は中位よりやや上にある。胴部下半～中程にかけて回転ヘラ削りが施される。最大径15.3cmをはかる。329はやや扁平な球形であり、ほぼ中に最大径がある。胴部下半から中位にかけて回転ヘラ削りが施される。胴部最大径17.4cmをはかる。

長頸壺あるいはプラスチック瓶の口縁端片(321)はハ字形に開いた後、段をつけさらに外上方へ向かって立ち上がる二重口縁であり、口縁端部は外側につまみ出される。322は、逆ハ字形に開いた後、口縁端部を上方へつまみ上げたもので、323



第181图 大屋敷C37号埴轮穴式石室掘乱土出土土器实例图

は逆ハ字形に開いた後、一端水平にして口縁端部を上方へ積み上げる。324は、逆ハ字形に開いた後、口縁端部を外側に折り返して垂下させる。大塚敷C古墳群から出土した口縁部の形状からすると、321はフラスコ形瓶か埴の可能性が高く、322～324は長頸壺の可能性が高い。

### ⑤小結

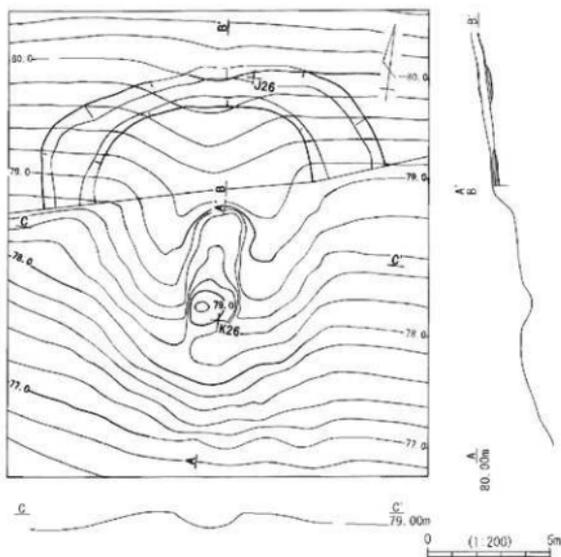
C37号墳は約11mの円墳で、墓壇の規模からすると大型の槨穴式石室であったことは明らかであり、大塚敷C古墳群の中では最有力な古墳の一つであったと考えることができる。

埋葬施設の攪乱上から出土した遺物には斜面上部から流れ込んだ遺物が含まれている可能性があるため断言はできないが、須恵器はその特徴から、326は遠江Ⅳ期前半まで遡る可能性があり、長頸壺やフラスコ形瓶は遠江Ⅳ期後半～末葉、摘蓋・有台杯はⅤ期前半に位置づけることが可能である。したがって、築造時期はⅣ期前半、7世紀前半まで遡る可能性があるが、他に7世紀前半に遡る遺物はないことから、遠江Ⅳ期後半、7世紀後半に築造され、遠江Ⅳ期末葉、7世紀末葉とⅤ期前半、8世紀前半の2回、追葬が行われた可能性が高い。

## (25) C38号墳

### ①調査前の状況(第182図、図版71)

周辺よりも0.6mほど小高くなっており、その中央は大きく掘削されていた。この穴の一番北側には大型の角礫が頭を覗かせており、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることは明白であり、分布調査時に確認された古墳のうちの1基であると推測する。



第182図 大塚敷C38号墳調査前測量図

古墳は石室より南側が調査区外に位置しており、現状のまま残存している。調査は調査区内にある墳丘北側に対してのみ実施した。

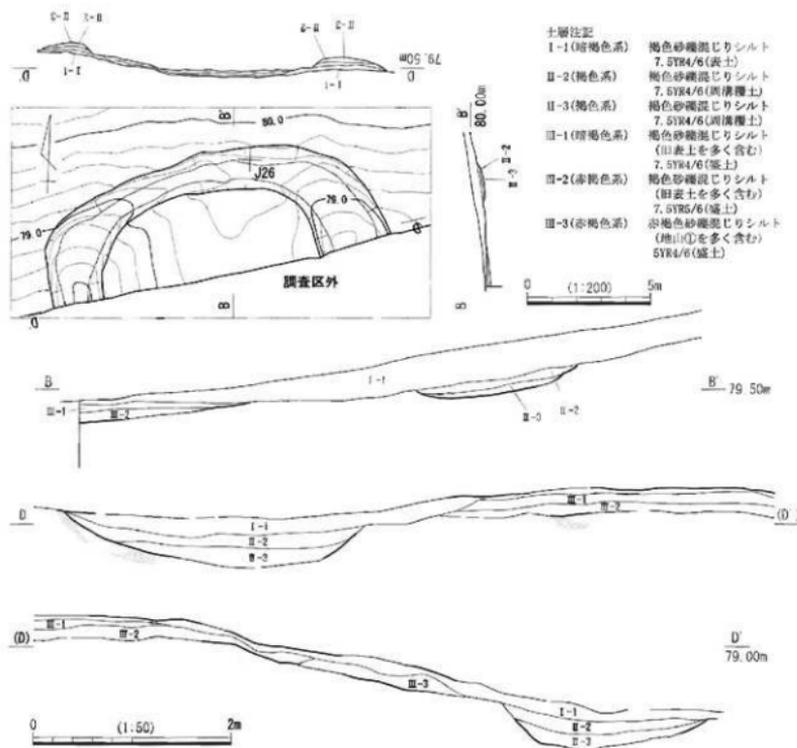
古墳はJ25・26、J25・26、K25・26グリッドに位置する。

### ②墳丘・周溝(第183～186図、図版71・72、142)

調査区内では周溝と墳丘の一部を確認した。

墳丘は測量調査の結果を考慮すると、南北14m前後と推測する。東西は、調査区内で8.8mをはかることから、少なくとも9.0m以上である。

周溝は円形に巡らされているものと推測でき、北側で幅1.7m、深さ0.2m、東側で幅3.0m、深



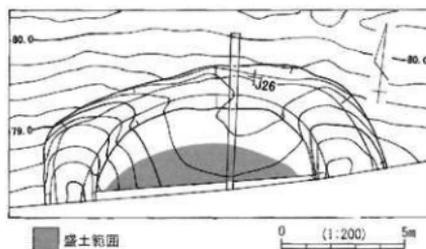
第183図 大塚教C38号墳丘陵測量図および墳丘盛土土層断面図

き0.5mを、西側で幅2.0m、深さ0.4mをはかる。

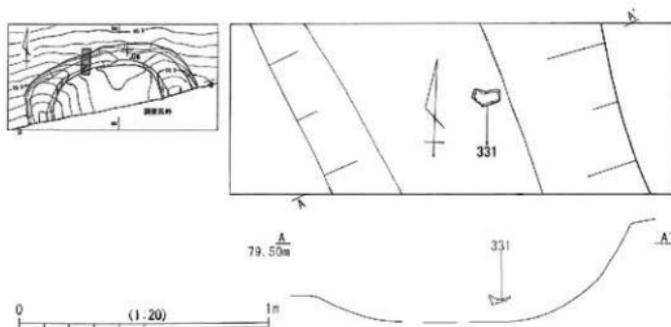
盛土は北側部分にまで残存しており、今回調査した古墳の中では最も残存状況が良好である。盛土は中心に向かって盛り上げられ、2層確認することができる。一番厚い墳丘中央部で約0.3mをはかる。石室裏込めのような状況(第一次墳丘)を示している。盛土は地山①と旧表土の混和土が盛られる。

なお、周溝からは底面からやや浮いた状態

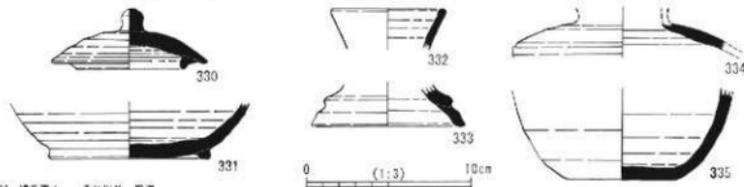
で台付長頸壺1点(331)が、また床面より0.2m程度浮いた状態で返壺1点(330)、平瓶口縁部1点(332)、長頸壺1点(334)、埴1点(335)が出土した。出土した高さから考えると、丘陵斜面上部の古墳から流れ込んだ可能性が高い。また、墳丘より須恵器脚付長頸壺脚部1点(333)が出土した。



第184図 大塚教C38号墳盛土除去後地形測量図



第185図 大屋敷C38号墳周溝遺物出土状況図



第186図 大屋敷C38号墳周溝および墳丘出土土器実測図

返蓋(330)は、乳頭状柄みを有し、丸みを帯びた天井部で、返りは受部よりも外へ突出する。返り径6.4cm、受部径9.4cm、器高3.7cmをはかる。台付長頸壺(331)は、球形の胴部を呈すると考えられ、高台はやや八字形に開く。平瓶口縁部(332)は逆八字形に開き、口縁端部は内側にやや肥厚し丸く仕上げられている。脚部(333)は八字形に開いた後鈍い稜線をつけ、さらに開くものである。長頸壺(334)は胴上部片であり、肩が張るものである。埴(335)の底部は平坦であり、胴部はやや外上方に向かって立ち上がるものである。胴部下半には回転ヘラ削りが施されている。

これらの須恵器は、遠江IV期後半～V期前半に位置づけることが可能である。

### ③埋葬施設

埋葬施設は前述したように、横穴式石室である。石室は調査対象範囲外に位置するため調査を実施していない。奥壁の一部(大型の角礫)が露出することから、奥壁に鏡石を有する石室である可能性が高く、石室規模も大型であると想定できることから、無袖式ではなく擬似両袖式石室である蓋然性が高い。

### ④小結

埋葬施設を調査していないため、築造時期は不明であり、今後調査が実施された段階で詳細な時期が判明するだろう。しかし、調査した古墳の中では、調査前の古墳の高まりから推測する規模は大屋敷C古墳群の中では最も大きいものの一つであることから、C19号墳やC37号墳程度の規模があるものと推測でき、大屋敷C古墳群の中では最も有力な古墳の一つといえる。

周溝から出土した遺物は周溝底面より浮いた状態で出土していることから、築造時期を特定することはできない。

## (26) C 39号墳

## ①調査前の状況(第187図, 図版73)

調査前は周溝より0.2m程度の高まりが確認でき、その中央は窪んでいた。また窪みの底からは角礫が露頭しており、窪みの周囲には角礫が多数散乱していたことから盗掘を受けた古墳であることは明白であり、分布調査時に確認された古墳のうちの一つであった可能性が高い。古墳はH24・25、I24・25グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第188～191・196図, 図版73・74, 143・144)

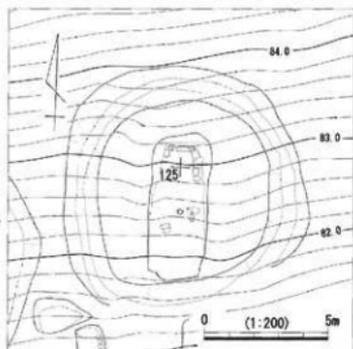
周溝は、南側が流出しておりどこまで及んでいたか不明であるが、北側からC字形に残存しており、築造当初

は全周巡らされていた可能性が高い。周溝はやや南北に長い楕円形であり、周溝規模は北側で幅1.4m、深さ0.4m、東側で幅1.6m、深さ0.4m、西側で幅1.4m、深さ0.4mをはかる。

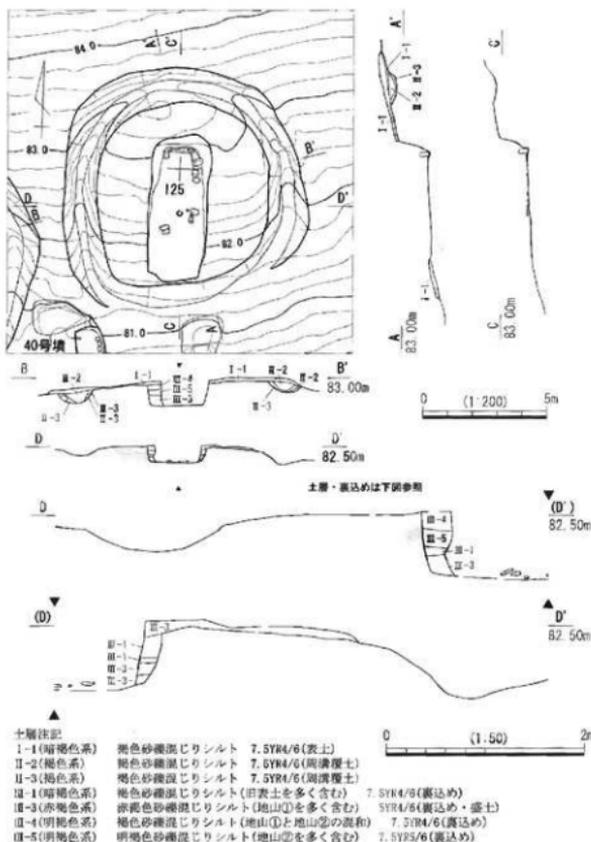
古墳はやや南北に長い円(楕円形)墳であり、墳丘規模は周溝の内側で南北7.4m以上、東西7.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高81.3m前後、北側で標高83.4m前後であり、南側から見て現状で2.1mである。

墳丘盛土は、墳丘東側のみ残存しており、石室の裏込めから連続する第一次墳丘である。盛土は墳丘の中央に向かってやや盛り上げられており、最も厚い部分で約0.1mをはかる。

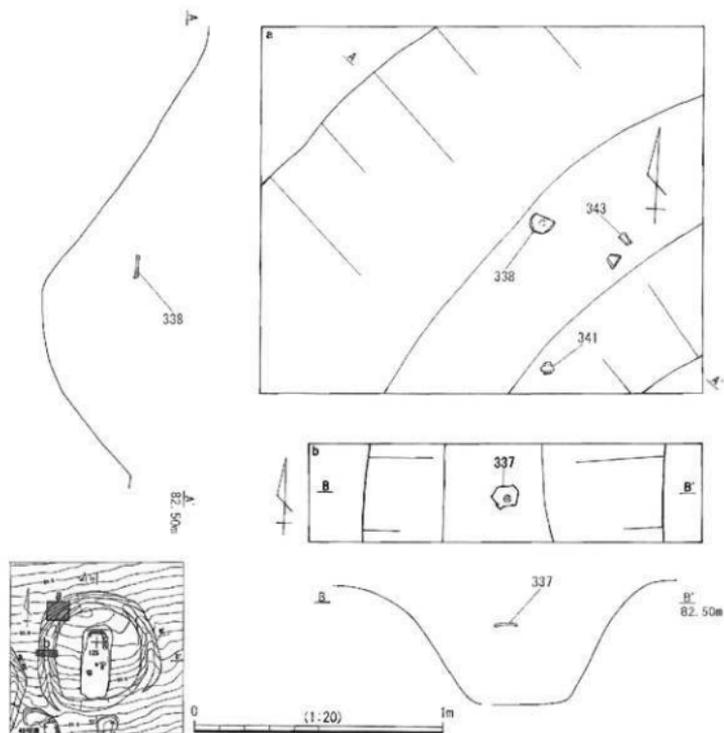
なお、周溝北側側～



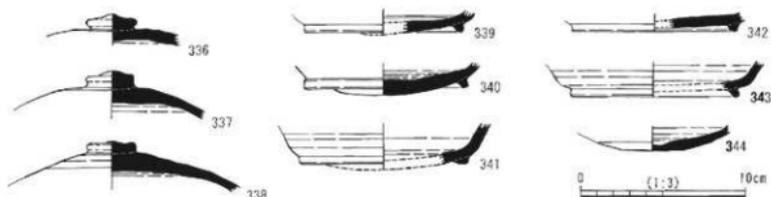
第187図 大塚敷C39号墳調査前測量図



第188図 大塚敷C39号墳墳丘測量図および墳丘盛土土層断面図



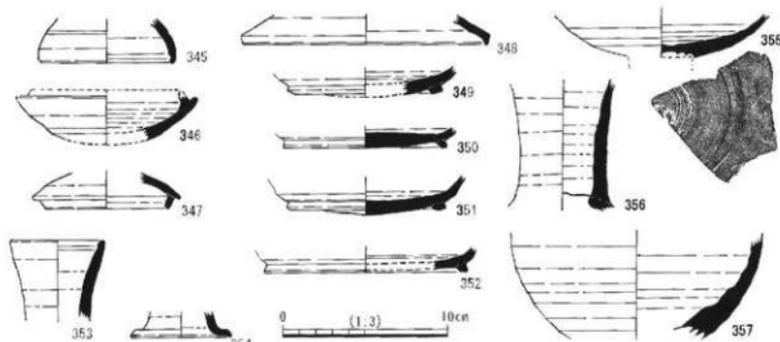
第189図 大塚敷C39号墳周溝遺物出土状況図



第190図 大塚敷C39号墳周溝出土土器実測図

西側で0.3m以上浮いた状態で須恵器摘蓋3点(336~338)、有台杯5点(339~343)、杯身1点(344)が出土した。これらの須恵器は、周溝底面より0.3m以上浮いた状態で出土していることから、斜面上部の古墳から流れ込んだ遺物である可能性が高い。

摘蓋(336~338)は大型の擬宝珠摘みを有する。有台杯は底部が高台よりも突出するもの(339~341)と、突出しないもの(342・343)がある。これらの須恵器は遠江V期前半に位置づけることができる。



第191図 大屋敷C39号墳墳丘出土土器実測図

また、墳丘表土中より、杯蓋1点(345)、杯身(346)、蓋蓋1点(347)、平甌1点(353)、摘蓋1点(348)、有台杯4点(349~352)、高杯2点(354・355)、長頸甕1点以上(356・357)が出土した。

これらは、古墳発掘の際に埋葬施設から巻き上げられたものと、斜面上部の古墳から流れ込んだ遺物の両者があると考えられる。

杯蓋(345)は半球形であり、口縁部内面には沈線が巡る。口径8.0cmをはかる。杯身(346)は短く内傾する立ち上がりである。蓋蓋(347)は返りが受部よりも突出するものであり、口径7.4cmをはかる。摘蓋(348)は、口縁端部を下方に垂下させ、尖らせる。口径14.6cmをはかる。有台杯は底部が高台よりも突出するもの(349・351)と、ほぼ同一の高さまで下がるもの(350・352)がある。高杯脚部(354)は、八字形に開いた後、端部直上で水平になり、端部は下方につまみ出されるもので、小型の脚部である。355は高杯杯部の破片であり、杯部は糸切り後未調整で、脚部が接合されている。長頸甕(356・357)の頸部は逆八字形に開くもので、胴部は丸みを帯びる。

これらの須恵器は、逸江Ⅳ期後半~Ⅴ期前半に位置づけることができる。

### ③埋葬施設(第192・193図、第30表、図版73・74)

埋葬施設は古墳の中央に築造された、南南西に向かって開口する単室系擬似兩袖式横穴式石室である。

**天井石** 天井石は全く確認できない。

**玄室** 玄室平面形は、残存する左側壁が曲線を描くことから、胴張形であった可能性が高い。

奥壁はやや大形の角礫を用いて鏡石としており、ほぼ直立する。奥壁の下位には、奥壁を安定させるため小礫が据えられる。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、最大で2段残存している。基底石は、長手を内側に向けるものと、小口に向けるものがある。2段目は小口積みしている。側壁の持ち送りはなく、2段目まではほぼ直立する。

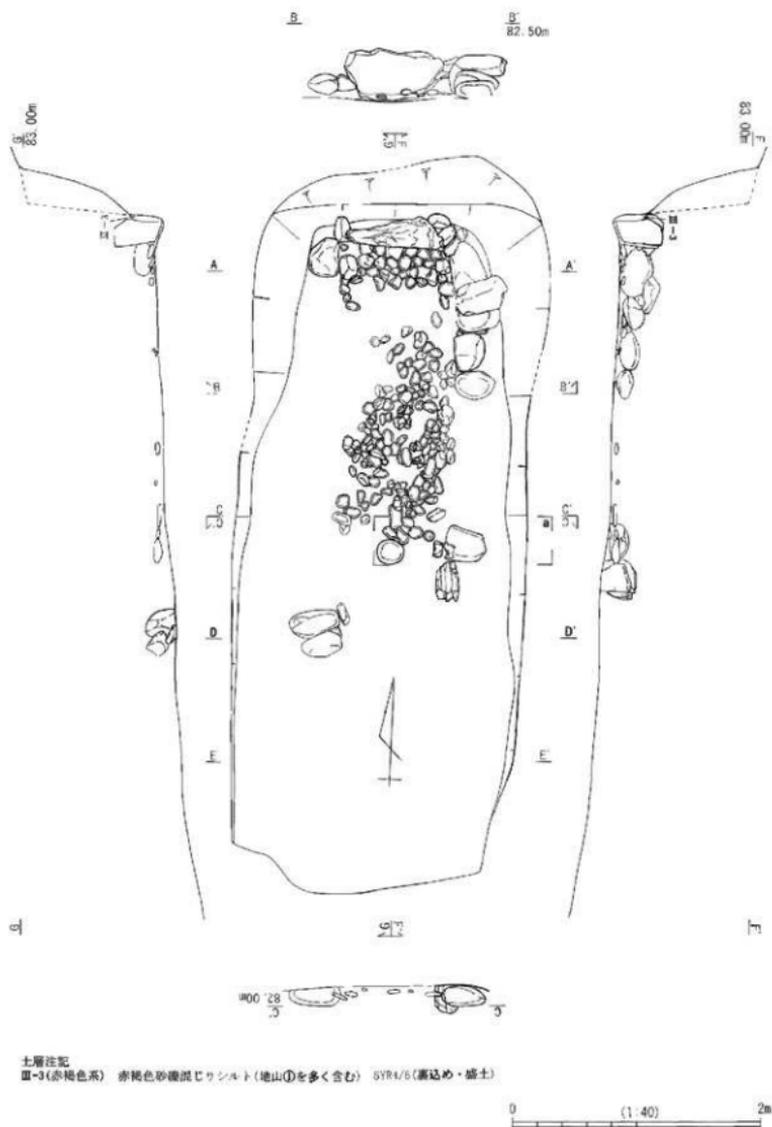
玄門は立柱石を樹立する。立柱石は左側壁のみ残存しており、柱状の角礫が用いられている。

**羨道** 羨道は2石分残存し、小口積みされる。側壁は玄室とはほぼ水平になるように積載される。

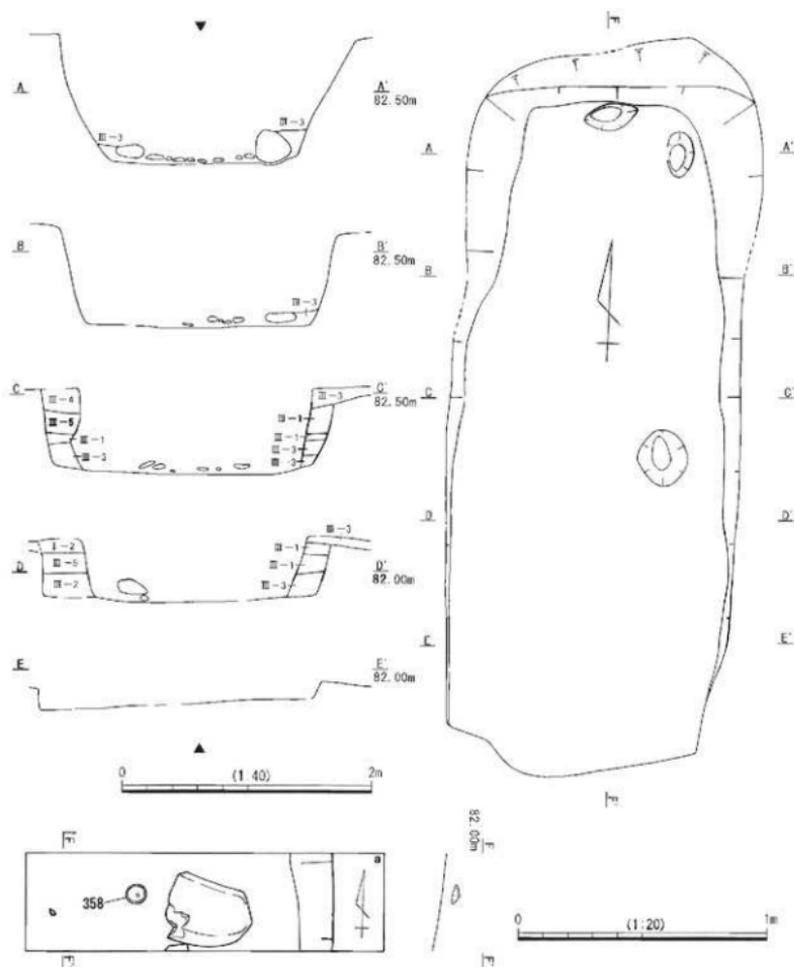
**敷石** 床面は擾乱によりかなり破壊されているが、玄室のみに敷設された敷石である。利用された石材は10cm以下の小礫であり、1面のみ確認できる。

第30表 大屋敷C39号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-2°06'-W	
石室全長	3.40m以上	
玄室長	2.50m	玄室最大幅 0.90m以上
玄室奥壁幅	0.80m	玄室支門側幅 0.80m



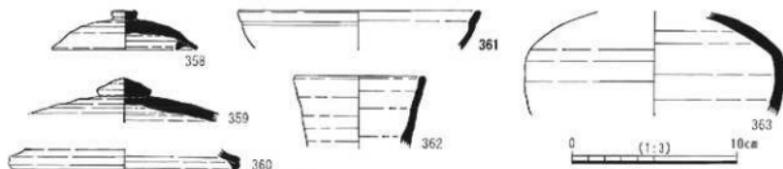
第192図 大塚敷C39号墳横穴式石室実測図



## 土層注記

- I-2(暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト ? 5YR4/6(混入土)  
 II-1(暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(田表土を多く含む) ? 5YR4/6(裏込め)  
 II-2(暗褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(田表土をやや含む) ? 5YR5/6(裏込め)  
 II-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む) 5YR4/6(裏込め・壘土)  
 III-1(明褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(地山①と地山②の混和) ? 5YR4/6(裏込め)  
 III-5(明褐色系) 明褐色砂礫混じりシルト(地山②を多く含む) ? 5YR5/6(裏込め)

第193図 大塚敷C39号墳横穴式石室遺物出土状況および基礎実測図



第194図 大屋敷C39号墳横穴式石室出土土器実測図

**使用石材** 使用された石材は奥壁・立柱石は角礫で、側壁の一部は角礫が利用されるものの、側壁は河原石が主に用いられる。また、攪乱坑から出土する際も河原石が多いことから、主に河原石を用いて構築した横穴式石室であった可能性が高い。

**墓竈** 墓竈は地山を標高81.9m付近まで掘削し、現地表面から約1.2m掘り込まれる。墓竈の形状はやや不整形な長方形である。墓竈規模は、墓竈長6.0m、墓竈幅2.4mをはかる。墓竈底面には奥壁と側壁の一部、立柱石を据えるための小土坑が掘削される。

石室は、墓竈内ほぼ中央に積載されているが、やや左側壁側に偏る。

#### ④遺物の出土状況(第193図, 図版74)

左玄門よりやや奥壁側で、須恵器返蓋1点(358)が床面直上より出土した。また、床面よりやや浮いた状態で、摘蓋1点以上(359・360)、無蓋高杯1点(361)、平甗あるいは長頸甗口縁部1点(362)、長頸甗1点(363)が出土した。さらに、攪乱土を水洗したところ、ガラス小玉1点(364)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第194・195図, 図版144)

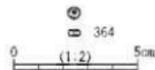
須恵器返蓋1点、摘蓋1点以上、無蓋高杯1点、甗瓶類口縁部1点、長頸甗1点、ガラス小玉1点が出土した。

**須恵器** 返蓋(358)は小型の擬宝珠摘み、丸みのある天井部で、返りは受部よりも内側に入る。返り径6.3cm、受部径8.8cm、器高2.4cmをはかる。摘蓋(359)は大型の柄蓋であり、360は口縁端部を外反しながら垂下している。無蓋高杯(361)は、碗形の体部で、口縁直下で段をつけ、さらに外反する。平甗あるいは長頸甗の口縁部(362)は、逆ハ字形に開いた後、口縁端部を丸く仕上げるものである。長頸甗(363)は、肩が張るもので丸みを帯びる。

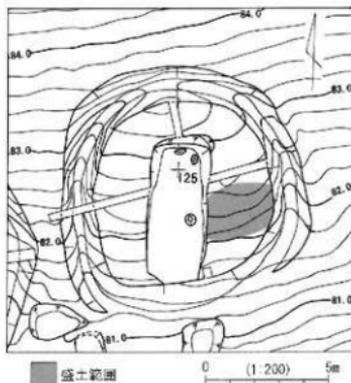
**玉類** ガラス小玉は、直径5mm、厚さ3mm、孔径1.5mmをはかり、色調は紺色である。C19号墳から出土したガラス小玉と法量・特徴とも一致する。

#### ⑥小結

横穴式石室から出土した須恵器は、遠江Ⅳ期後半とⅤ期前半に位置づけることが可能であり、C39号墳は7世紀後半に築造され、少なくとも1回、8世紀前半に追葬が行われた可能性が高い。



第195図 大屋敷C39号墳横穴式石室出土玉類実測図



第196図 大屋敷C39号墳盛土除去後地形測量図

## (27) C40号墳

## ①調査前の状況

墳丘の高まりや盗掘坑などは全く確認することができず、39、42号墳の人力による表土除去の段階で確認した古墳である。検出当初は横穴式石室の主軸がほぼ一致することから後述するC41号墳と同一の横穴式石室と想定したが、近接するものの別古墳であることが判明した。

古墳は、124グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第197図, 図版75)

平面精査および試掘溝調査を実施したが、盛土及び周溝は確認できなかった。築造当初より石室を覆う程度の盛土だけであった可能性が高い。

## ③埋葬施設(第198・199図, 第31表, 図版75・76)

埋葬施設は、ほぼ南に向かって開口する無袖式横穴式石室である。右側壁と奥壁はほぼ完全に破壊されており、その様相は明確ではない。

天井石 原位置を保持する天井石は存在しない。崩落した天井石と推測する石材は1点確認することができ、河原石で長辺35cm、短辺25cmをはかる。1石しか確認できないが、玄室全体に架構されていた可能性が高い。

石室 石室の平面形は玄室中央がやや広い緩やかな膨張形である。奥壁は抜き取られており、不明である。側壁は最大で4段、高さ0.35m残存する。側壁は一部に長手積みがあるが大部分が小口積みである。各段は、日地が通るように積載されている。

敷石 床面には、直径10cm以下の小礫を用いて敷石を敷設しており、1面確認することができる。一部攪乱で失われているが、石室全体に敷設されていた可能性が高い。

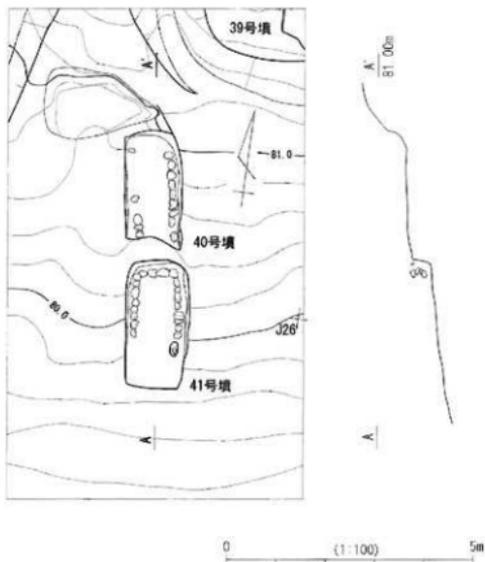
基底石 基底石は河原石が用いられており、長手を内側に向けたものが多い。また、基底石は墓壇のほぼ中央に設置されている。

使用石材 使用石材は崩落した石材を含めてすべて河原石であった。

墓壇 墓壇は地山を標高80.5m付近まで掘削し、現地表面から約0.5m掘り込んでいる。墓壇の平面形は、南側部分が開放する長方形であり、規模は墓壇長24m、墓壇幅1.15mをはかる。底面に石材を設置するための土坑は確認できない。

## ④遺物の出土状況

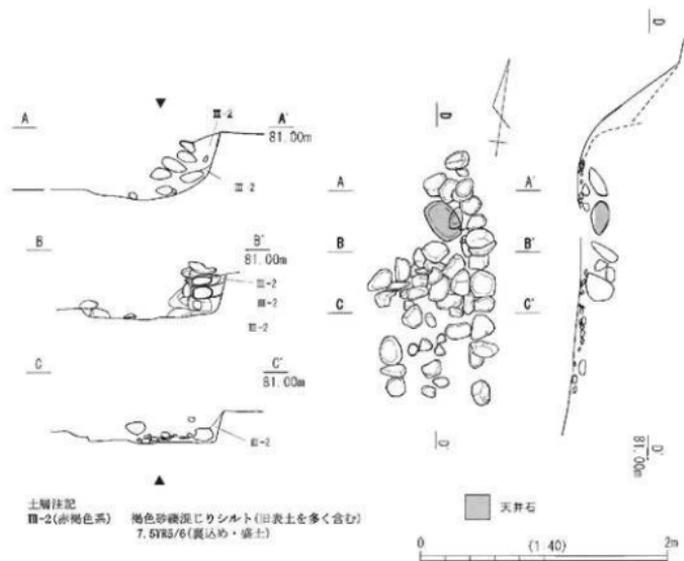
前庭より須恵器台付長頸壺1点(365)が出土した。当初C40号墳とC41号墳は同一の横穴式石室と考えていたため、斜面の上位に位置するC39号墳などからの流れ込みと判断し図示せずに取り上げた。



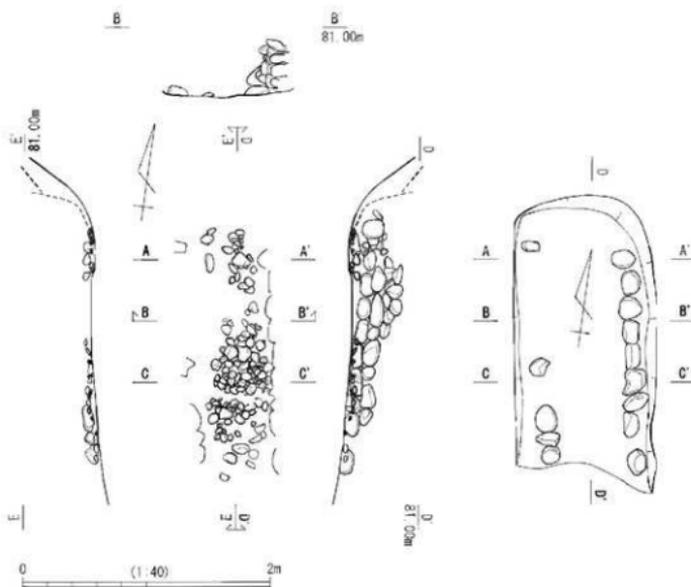
第197図 大塚敷C40・41号墳地形測量図

第31表 大塚敷C40号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-7°41'-W	
石室全長	210m	
玄室長	210m	玄室最大幅 0.60m
玄室奥壁幅	不明	玄室玄門側幅0.55m



第198図 大屋敷C40号墳横穴式石室検出状況図



第199図 大屋敷C40号墳横穴式石室実測図および基礎石実測図

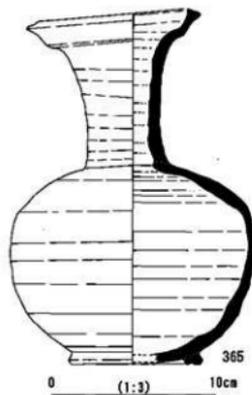
## ⑤出土遺物(第200図, 図版145)

須恵器台付長頸壺1点(365)が出土した。口縁部は頸部から逆ハ字形に開いた後、段をつけさらに外反するもので二重口縁状を呈し、口縁端部は斜め外方に傾斜する平面である。胴部は球形であり、最大径は中位よりやや上に位置する。胴部下半には回転へ削りが施される。高台はわずかにハ字形に垂下し、高台端部には段がつけられている。器高21.6cm、口径9.0cm、胴部最大径14.7cmをはかる。

## ⑥小結

C40号墳は、前庭より出土した須恵器が遠江V期前半に比定でき、8世紀前半に築造された蓋然性が高い。また、後述するC41号墳との関係は、C41号墳の墳丘が盛られた場合、C40号墳の羨道入口は塞がれるかあるいは墳丘が全く見えなくなることから、C40号墳がまず先に築造され、その後C41号墳がC40号墳を隠すように築造された可能性が高い。これはC40号墳前庭部出土の須恵器台付長頸壺と、C41号墳出土の須恵器広口壺に1段階以上の時期差が確認できることも証左となる。

さらに、C40号墳は石室長2m弱であり、大人の伸展葬はほぼ不可能であり、改葬骨あるいは火葬骨を納めた可能性を考慮しなければならない。



第200図 大屋敷C40号墳前庭出土土器実測図

## (28) C41号墳

## ①調査前の状況

墳丘の高まりや盗掘坑などは全く確認することができず、C39、C42号墳の人力による表土除去の段階で確認した古墳である。

古墳は、I 24・J 24グリッドに位置する。

## ②墳丘(第197図, 図版75)

墳丘は埋葬施設の主軸を基準に十字に試掘溝を掘削したが、盛土、周溝ともに確認できなかった。築造当初より掘削されていなかったか、浅かったため既に消滅したか判断できない。

## ③埋葬施設(第201・202図, 第32表, 図版76・77)

埋葬施設は、ほぼ南に向かって開口する横穴式石室であり、無袖式の可能性が高い。

天井石 原位置を保持する天井石はない。奥壁から玄門までの間に3石確認することができ、すべて柱状の河原石が用いられている。天井石の幅は55~60cmで、長さ20~30cmであり、3石の長さを加算すると0.8mであり、ほぼ石室全体を覆うことができる。

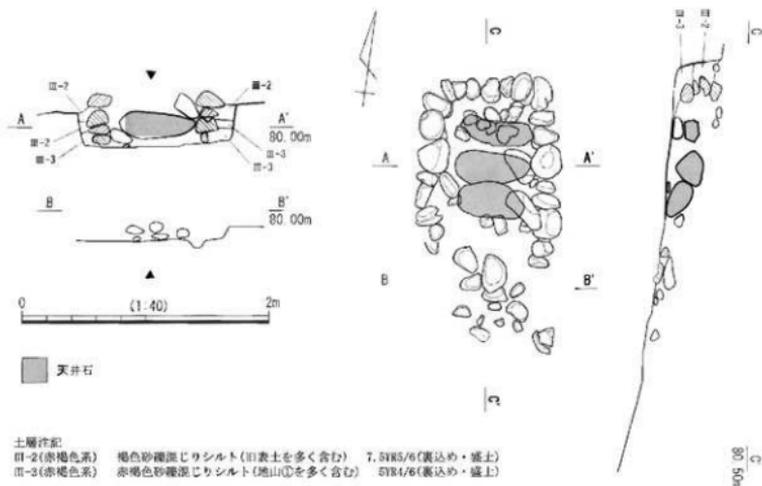
石室 石室平面形は玄門から奥壁まで幅がほぼ等しい長方形である。

奥壁は河原石を積載するもので、5段、高さ0.45m残存する。積載された河原石は、基底石で4石、2段目以上は5石である。基底石は長手を内側に向け、2段目以上は小口積みされている。奥壁はほぼ直立して積載される。

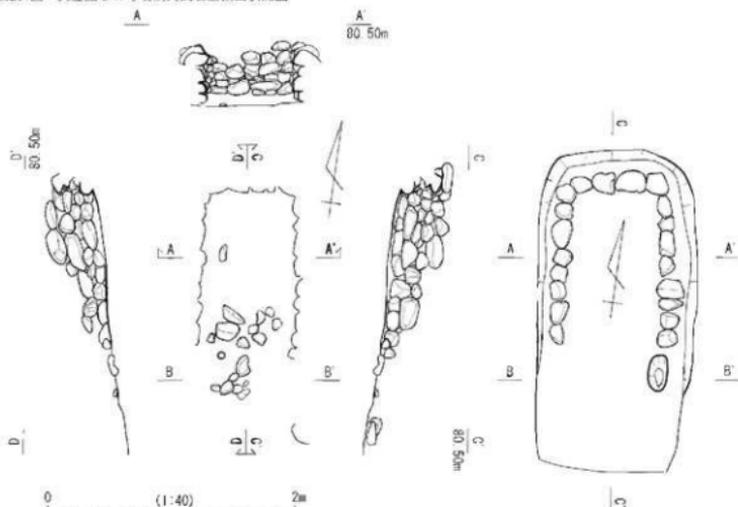
側壁は奥壁に接するように積載され、最大で5段、高さ0.45m残存する。各段はほぼ目地が通るように積載されるが、南側に向かってやや傾斜して積載される。小口積みされるものと長手積みされるもの

第32表 大屋敷C41号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-7°41'-W	
石室全長	1.30m	
玄室長	1.30m	玄室最大幅 0.75m
玄室奥壁幅	0.70m	玄室玄門幅0.75m



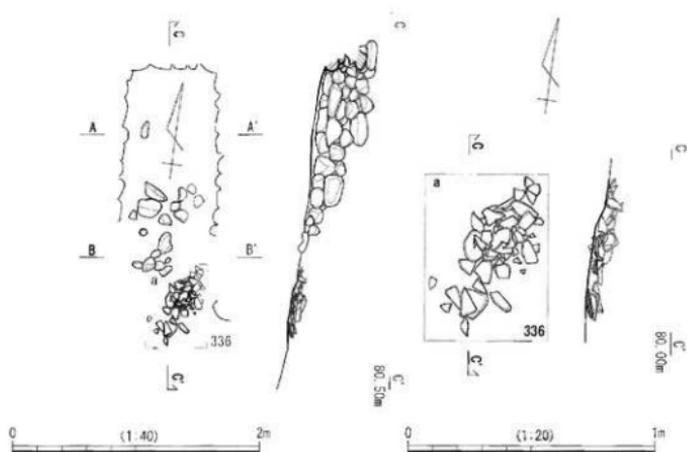
第201図 大屋敷C41号墳横穴式石室検出状況図



第202図 大屋敷C41号墳横穴式石室実測図および基底石・墓壇実測図

が半々程度である。側壁の持ち送りはほとんど確認できず直立する。このまま直立した状態であれば天井石を架構できないことから、崩落した5日以上が急激に持ち送りされていた可能性が高い。

**基底石** 基底石は河原石と円礫を用いて長手を内側に向けるものが多い。基底石は墓壇のほぼ中央に設置されている。



第203図 大塚敷C41号墳前庭遺物出土状況図

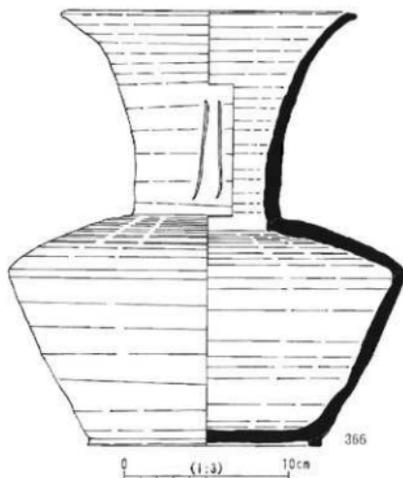
**墓塚** 墓塚は地山を標高79.9m付近まで掘削し、現地表面から約0.4m掘り込んでいる。墓塚の平面形は南側が開放する隅丸長方形であり、墓塚長1.9m以上、墓塚幅1.3mをはかる。墓塚底面には玄室より前に小土坑があり、この小土坑と須恵器の出土位置を考慮すると立柱石が設置され、擬似両袖式石室であった可能性が残る。

#### ④遺物の出土状況(第203図, 図版78)

前庭より須恵器大口壺(366)が破砕して折り重なる状況で出土したが、副葬時に壊されたものか、副葬後に壊れたのか判別できない。

#### ⑤出土遺物(第204図, 図版145)

須恵器大口壺(366)が出土している。口縁部は頸部から逆ハ字形に開き、口縁端部は外側につまみ出されている。胴部は肩が張り、鋭角的である。高台は短く、断面方形であり、高台径は広い。胴部下半から肩部まで回転ヘラ削りが施される。また、頸部には縦に2条



第204図 大塚敷C41号墳前庭出土土器実測図

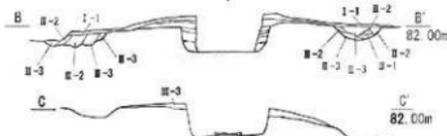
の直線がヘラ描きされている。器高26.7cm、口径16.9cm、胴部最大径24.0cm、高台径14.2cmをはかる。

#### ⑥小結

前庭より出土した須恵器大口壺は遠江V期前半～中葉に比定でき、C41号墳は8世紀前半以降に築造された可能性が高い。また、C40号墳を破壊せず、C40号墳→C41号墳の順で築造されている。C40号



第205図 大屋敷C42号墳調査前測量図



盛土等の土層は第207図参照・土層作記

1-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR4/6(表土)
II-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR5/6(周溝覆土)
II-2(褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR4/6(周溝覆土)
II-3(褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR4/6(周溝覆土)
III-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	(旧表土を多く含む) 7.5YR4/6(裏込め・盛土)
III-2(赤褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	(旧表土を多く含む) 7.5YR5/6(裏込め・盛土)
III-3(赤褐色系)	赤褐色砂礫混じりシルト	(地山①を多く含む) 5YR4/6(裏込め・盛土)
III-4(明褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	(地山①と地山②の混和) 7.5YR4/6(裏込め)
III-5(明褐色系)	明褐色砂礫混じりシルト	(地山②を多く含む) 7.5YR5/6(裏込め)

第206図 大屋敷C42号墳墳丘測量図

墳と何らかの関係があると考える。

さらに、C41号墳は石室長が1.3mと短く、大人を伸展葬するのはほぼ不可能であり、改葬骨あるいは火葬骨を納めた可能性が高い。

### (29) C42号墳

#### ①調査前の状況(第205図, 図版78)

調査前には0.3m程度の高まりが確認できるとともに、その中央に大きな窪みがあり、分布調査時に確認されていた古墳のうちの一つである可能性が高い。

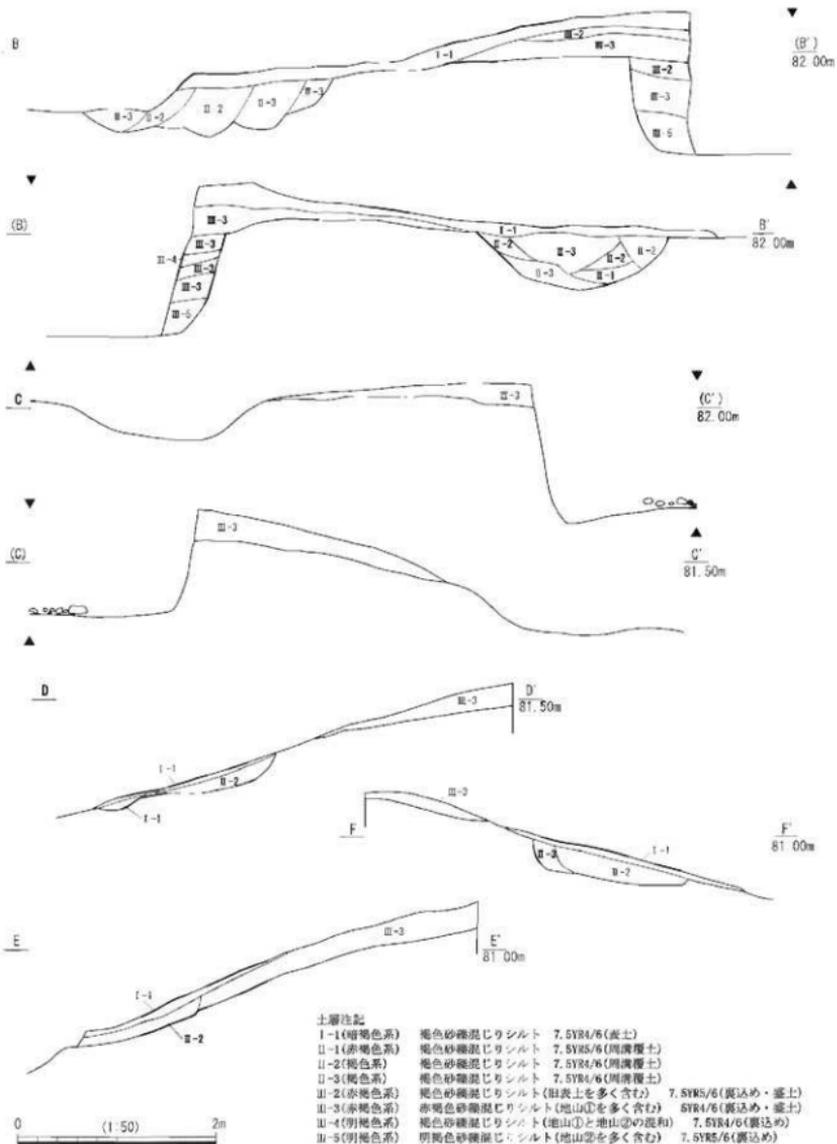
古墳は、H23・24、I23・24、J23・24グリッドに位置する。

#### ②墳丘・周溝(第206～210図, 図版79～81, 146)

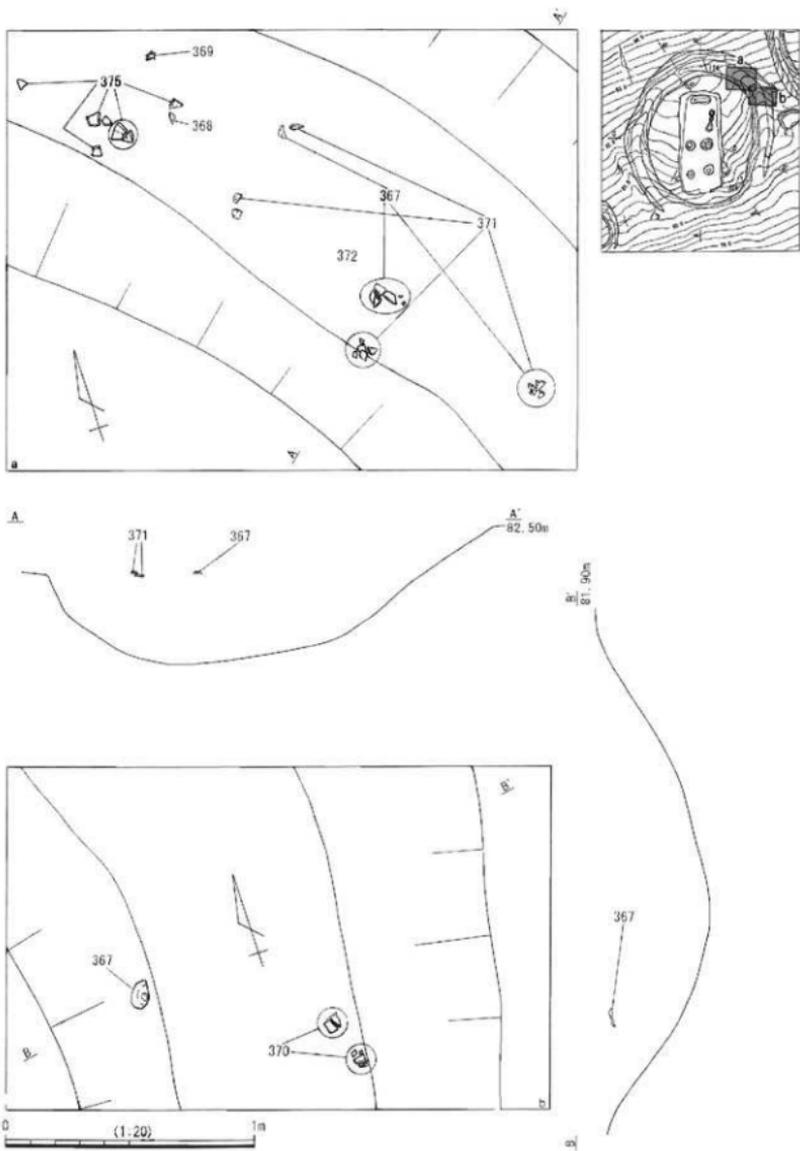
周溝はC字形に残存しているが、南側部分は流出しており、本来は全周していた可能性が高い。周溝の規模は、北側で幅2.2m、深さ0.5m、東側で幅1.7m、深さ0.5m、西側で幅1.9m、深さ0.5mをはかる。

墳形は南北に長い、やや不整形な円(楕円形)墳であり、規模は周溝の内側で南北10.8m、東西8.5mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高80.2m、北側は標高82.8mであることから、南側から見て現状で約2.6mである。

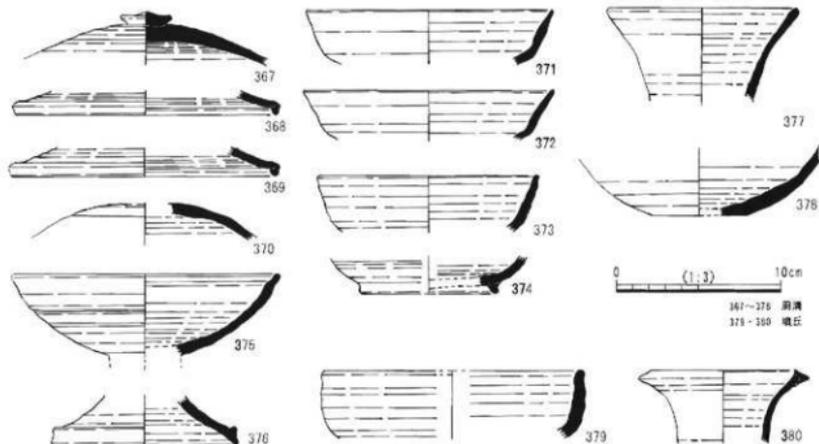
盛土は古墳の北側を除いて残存する。石室の裏込めから続く第一次墳丘である。盛土は旧表土と地山①・②の混和土を用いて旧表土上に墳丘の中央に向かって盛り上げられる。最も残りの良好な部分で厚さ0.5mをはかる。



第207図 大塚敷C42号墳盛土土層断面図



第208図 大塚敷C 42号墳高満遺物出土状況図

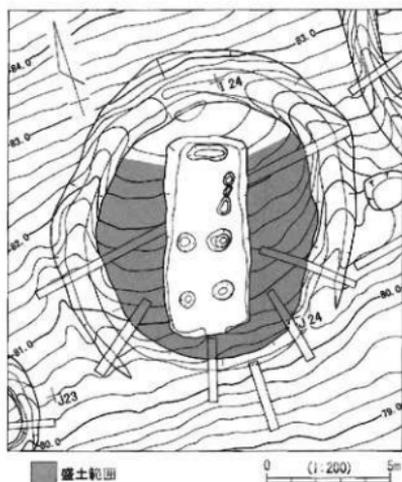


第209図 大塚敷C42号墳周溝および墳丘出土土器実測図

なお、周溝の底面から0.3m以上浮いた状態で須恵器摘蓋4点(367～370)、有台杯4点(371～374)、無蓋高杯1点以上(375・376)、平瓶口縁部1点(377)、壺瓶類底部1点(378)が出土した。これらの須恵器は、底面より浮いた状態であり、斜面上部の古墳から流れ込んだ可能性が高い。

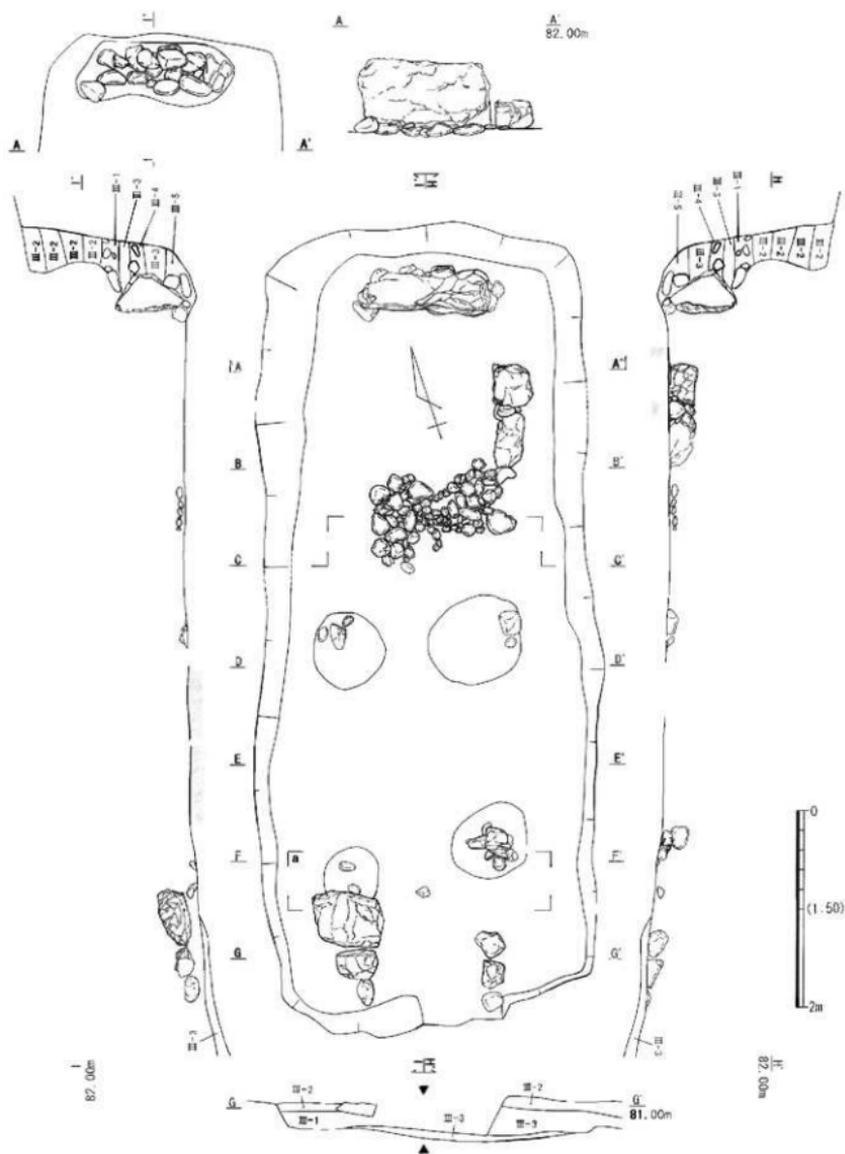
また、墳丘表土中より無蓋高杯あるいは有台杯の口縁部1点(379)、壺瓶類口縁部1点(380)が出土した。

摘蓋(367)は、大型の擬宝珠摘みで、口縁部(368・369)は垂直に短く垂下させ、端部は丸く仕上げられる。口径約16.0cmをはかる。有台杯(374)は高台よりも底部が突出せず、口縁部(371～373)は底部から外上方へ立ち上がる。口径は13.0～15.0cmをはかる。無蓋高杯(375)は椀形の杯部で、口縁部直下で段をつける。高杯脚部(376)は、ハ字形に開いた後端部を肥厚させる。平瓶口縁部(377)は大型の口縁部であり、胴部も大型であった可能性が高い。378は平瓶あるいは壺の底部で、回転ヘラ削りが施される。379は椀形の杯部であり、有台杯の可能性もあるが器厚が厚いことから無蓋高杯の口縁部の可能性が高い。口縁部は底部からほぼ直立し、端部を丸く仕上げる。380は平瓶の口縁部の可能性が高く、逆ハ字形に開いた後、端部を内側につまみ出す。

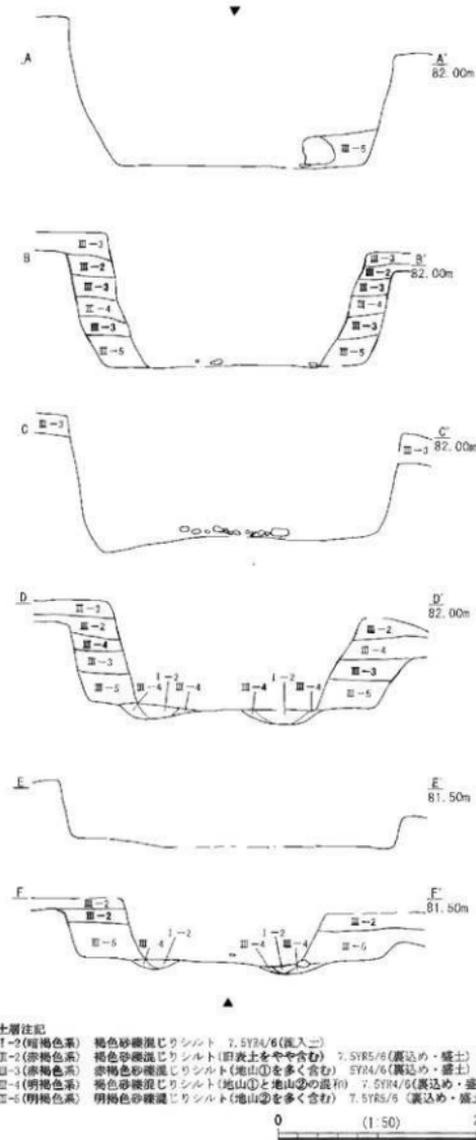


第210図 大塚敷C42号墳盛土除去後地形測量図

これらの須恵器は、遠江IV期後半～V期前半に比定できる。



第211図 大塚C 42号墳横穴式石室実測図および土層図



### ③埋葬施設(第211・212区, 第33表, 図版79・81)

埋葬施設は古墳の中央に築造された、南南西に向かって開口する横穴式石室である。奥壁と側壁の一部が残存するのみであるが、立柱石を据えるための小土坑が4箇所確認でき、複室系擬似円柱式石室であることが判明した。

立柱石が据えられた土坑の位置から判断して、玄室長約3.2m前後、羨道長2.0m前後、前庭長2.1m前後であると推測する。

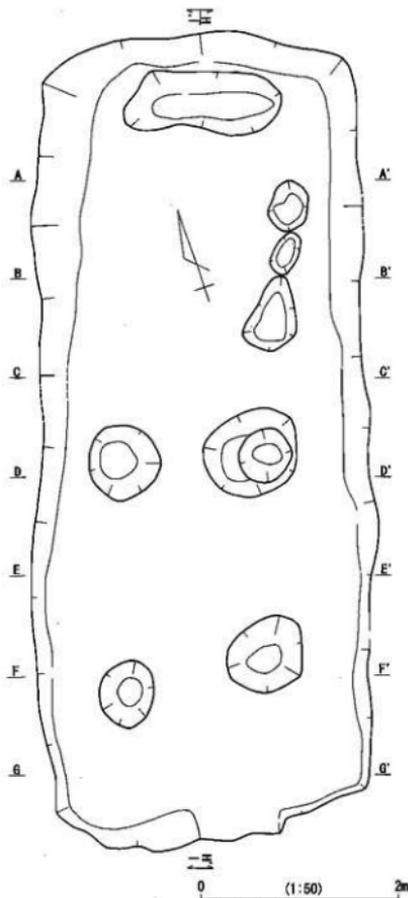
**天井石** 天井石は崩落したものを含めて確認することはできない。

**玄室** 奥壁は大型の角礫を用いて鏡石とし、直立する。また、鏡石は土坑を掘削し、その中に20~30cmの河原石を充填し、その上に設置されている。また、奥壁上部の裏込めには河原石が入れられており、奥壁2段目を積載するための控え積みである可能性が高い。

**側壁**は大型の角礫が用いられ、その隙間に小型の河原石を充填する。残存する2石の内側に曲線を描くことから、玄室平面形は扇形であった可能性が高い。

**羨道** 羨道は石材が残存しておらず、不明である。羨門立柱石は残存しないが、小土坑内には立柱石の固定に用いられた小型の河原石がある。前庭 前庭は古墳の外壁に向かって開放する台形であり、角礫が用いられる。小口を内側に向ける。

**敷石** 玄室床面には一部敷石が残存する。玄室内には奥壁から2.6m付近までは敷石が敷設されていた可能性が高い。敷石は1面のみ確認でき、20cm以下の小礫が用いられる。



第212図 大屋敷C42号墳墓横穴式石室規模

口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部は内傾する斜面である。口径15.0cm、器高4.6cmをはかる。無蓋高杯(383)は碗形の杯部で、口縁端部は丸く仕上げられる。高杯脚部(386・387)は、八字形に開いた後端部を肥厚させ、外面は段となる。壺瓶類口縁部(384)は二重口縁状であり、口縁端部は外下方に引き出される。フラスコ形瓶(389)は球形の胴部であり、胴部最大径19.5cmをはかる。台付長頸壺(388)は、扁平な球形であり、最大径は中位よりやや上にある。口縁部は頸部から逆八字形に開いた後、口縁端部が上方へつまみ出される。高台は八字形に開き、端部は外側に向かって引き出される。土師器 甕(390)は口縁部が外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径16.2cmをはかる。玉類 ガラス小玉13点(391~403)は、直径4.5~6.0mm、高さ2.5~4.5mm、孔径1~2mmをはかり、重量は1g以下である。色調はすべて紺色透明である。

第213表 大屋敷C42号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-17° 53' - E	
石室全長	7.10m	
玄室長	2.80m前後	玄室最大幅 1.20m以上
玄室奥壁幅	1.20m前後	
羨道長	2.90m前後	
前庭長	1.40m前後	
前庭入口間幅	1.10m	

**使用石材** 原位置を留める石材は角礫である。また、攪乱坑より出土した礫も大部分が角礫であり、角礫を主体に構築されていたことが判明する。

**墓室・墓道** 墓室は地山を標高80.9m付近まで掘削しており、現地表面から約1.3m掘り込む。墓室の形状はやや不整形な長方形で、短い墓道へと繋がる。墓室規模は墓室長8.2m、墓室幅3.3mをはかる。墓室底面には立柱石と奥壁および左側壁の一部を固定するための小土坑が掘削される。石室は墓室のほぼ中心に設置される。

墓道はわずかに残存し、墳丘外部へは続いていない。墓道長0.2m以上、墓道幅0.8mをはかる。

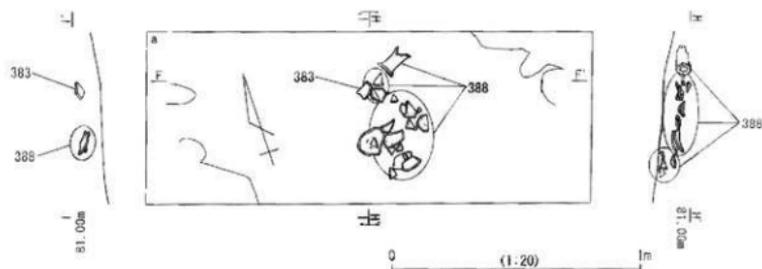
#### ④遺物の出土状況(第213図、図版81)

前庭中央で床面よりやや浮いた状態で須恵器台付長頸壺(388)、無蓋高杯(383)が出土した。また、石室攪乱土内から須恵器有台杯1点(381)、無台杯?1点(382)、壺瓶類2点(384・385)、高杯脚部2点(386・387)、フラスコ形瓶1点(389)、土師器甕1点(390)、鉄鏃2点以上(405~407)、刀子3点(408~410)、鉄釘4点(411~414)、ガラス小玉13点(391~403)、耳環1点(404)が出土した。

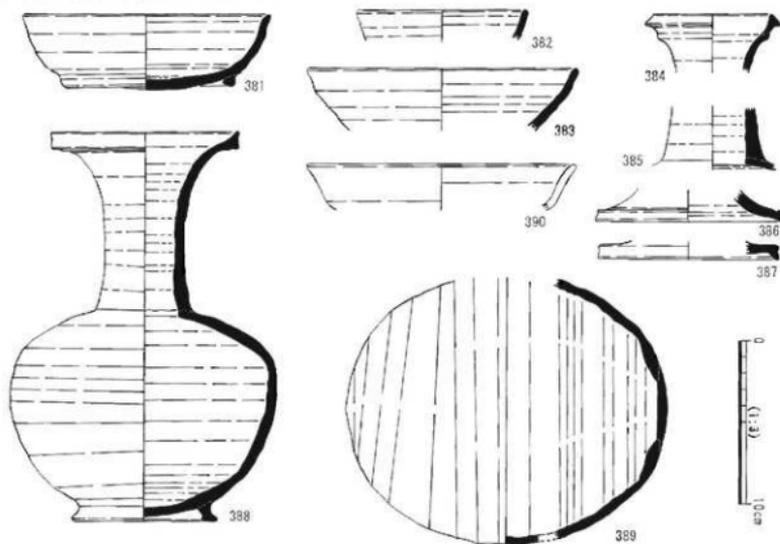
#### ⑤出土遺物(第214・215図、図版147・148)

須恵器有台杯1点、無台杯1点、高杯3点、壺瓶類2点、台付長頸壺1点、フラスコ形瓶1点、土師器甕1点、小玉13点、耳環1点、鉄鏃2点以上、鉄製刀子3点、鉄釘4点が出土した。

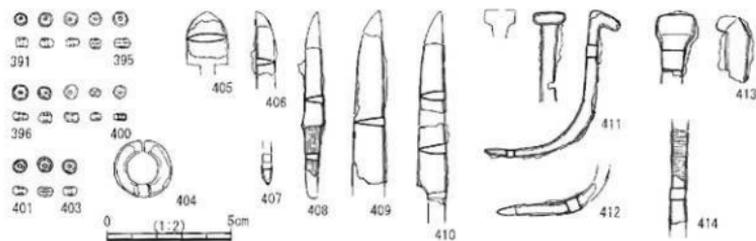
**須恵器** 有台杯(381)は底部が高台よりも突出す



第213図 大塚敷C42号墳横穴式石室遺物出土状況図



第214図 大塚敷C42号墳横穴式石室出土土器実測図



第215図 大塚敷C42号墳出土玉類・金属製品実測図

**耳環** 銅芯に薄い金銅板を巻きつけた金環(404)である。断面は円形と推測する。残存長2.0cm、残存幅2.2cm、厚さ5mmをはかる。

**鉄製品** 鉄鏃(405)は平根式鉄鏃であり、三角形の可能性がある。断面は平造りである。406は尖根片刃筒式鉄鏃と推測する。刃部幅7mmである。407は茎尻の破片であり、断面方形である。

刀子は3点(408~410)出土しており、鏃はなく、すべて平造りである。409は刃部片で、残存長6.0cm、幅1.2cmをはかる。408は小型の刀子であり、残存長5.1cmをはかる。茎は両面で、刃部側が撫間、棟側が角間である。刃部残存長3.1cm、幅9mm、棟厚3mmをはかる。茎は茎尻に向かって先細り、断面は棟側がやや広い長台形であり、厚さ3mm、残存長2.0cmをはかる。茎には柄(木質)が残存している。410は残存長6.1cmをはかり、刃部残存長5.4cm、幅1.1cm、棟厚4mmをはかる。間は撫間であり、茎の断面は棟側が刃部側よりやや厚い長台形である。

鉄釘の釘頭は411・413ともにT字形で、L字形に折り曲げられている。釘身はL字形に曲がっている(411・412)。釘身は断面方形であり、411・412は一辺5mm、413は9mm、414は6mmをはかる。断面の厚さからみると、411・412・414と413に分類でき、釘で固定された木棺が2棺納められた可能性が高い。なお、414には釘身に直交して木質が残る。

#### ⑥小結

C42号墳の横穴式石室から出土した須恵器は遠江IV期後半~V期前半に位置づけることができる。一方、鉄釘(413)は第5節で記述するように遠江IV期前半まで遡る可能性が高い。したがって、C42号墳は7世紀前半に築造され、7世紀後半、8世紀前半に追葬された可能性が高い。

また、C42号墳は、古墳規模が10.8m、横穴式石室全長が7.1mと大屋敷C古墳群の中では大型であり、出土遺物も大屋敷C古墳群の中では玉類、耳環、鉄鏃などが出土するなど豊富であることから、大屋敷C古墳群の中で最有力な古墳の一つであるといえる。

さらに、遠江ではあまり出土しない、釘で固定された移動可能な木棺が納められており、大屋敷C19号墳同様特異な存在といえる。

### (30) C43号墳

#### ①調査前の状況

調査前には、高まりや窪みなどは全く確認することはできず、表土除去後石材が集中することにより確認した古墳である。

古墳はH22、I22グリッドに位置する。

#### ②墳丘・周溝(第216~218図、図版82・85・87・150)

周溝はC字形に巡らされているが、西側は途中で外側(西)に向かって屈曲し、C44号墳の周溝と繋がる。本来、東側は墓道まで巡らされ、全周していた可能性が高い。周溝の規模は北側で幅1.6m、深さ0.5m、東側で幅0.8m、深さ0.1m、北西側で幅1.4m、深さ0.3mをはかる。

古墳は円墳であり、墳丘規模は南北7.2m以上、東西6.6m以上をはかる。古墳の見かけ上の高さは、古墳の南側が標高81.4m前後、北側が標高83.1m前後であることから現状で南側から見て1.7mである。

盛土は第216図に図示したように東側でわずかに確認することができ、石室の裏込めから続く第一次墳丘である。盛土は地山の混和土を旧表土上に盛り上げている。また、盛土はC44号墳の周溝が埋まった、あるいはC43号墳を築造するにあたって埋めた後で盛られており、C44号墳→C43号墳の順に築造されたことが判明した。

なお、周溝北側で、底面から0.2m以上浮いた状態で須恵器摘垂1点(415)、有台杯4点(416~419)、広口壺底部1点(420)が出土した。

摘蓋(415)は、大型の摘蓋で、口縁部は肥厚させ、端部は尖らせる。有台杯(416)は底部が高台よりも突出する。

有台杯(417)の口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径13.6cm、器高4.2cmをはかる。418の底部は高台よりも突出せず、口縁部は外上方へ向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径14.4cm、器高4.1cmをはかる。419は外上方へ向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径14.2cmをはかる。広口壺(420)は、広い高台を有し、高台の断面は方形である。底部から胴部にかけて回転ヘラ削りが施される。高台径14.2cmをはかる。

これらの須恵器は、その特徴から遠江Ⅳ期

末葉に遡る可能性があるもの(417)と、Ⅴ期前半に位置づけられるもの(415・416, 418~420)がある。

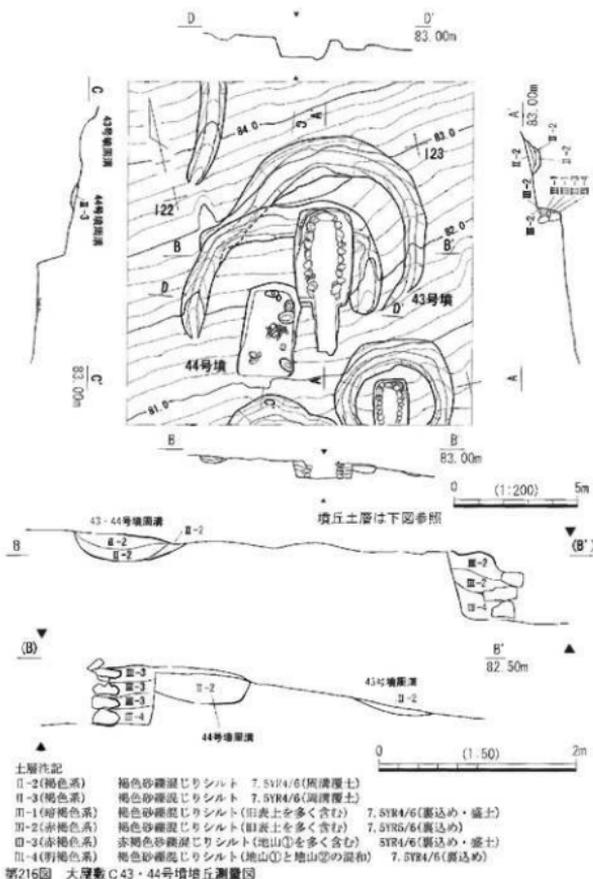
また、これらの須恵器は、周溝底面より浮いており、流れ込んだような状況を示していることから、C43号墳に伴うものではなく、斜面上部の古墳から流れ込んだ遺物である可能性が高い。

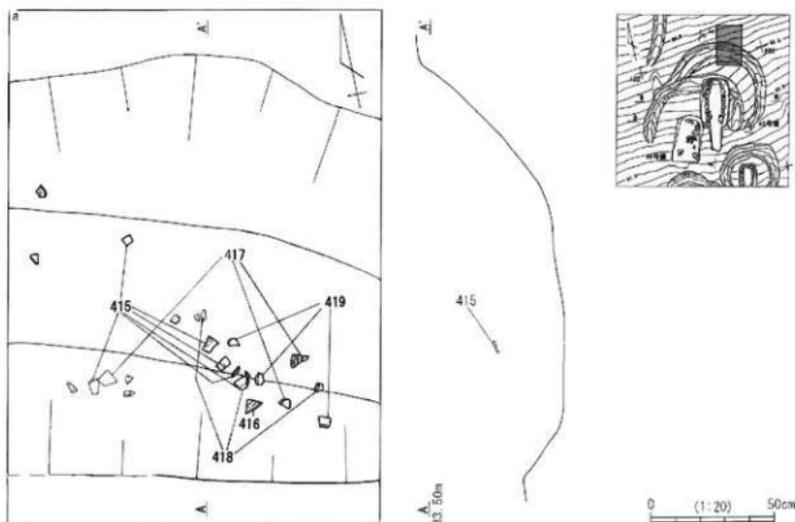
### ③埋葬施設(第219~222図, 第34表, 図版83・84, 86)

埋葬施設は、古墳のはば中央に築造された、真南に向かって開口する単室系擬似両袖式石室である。

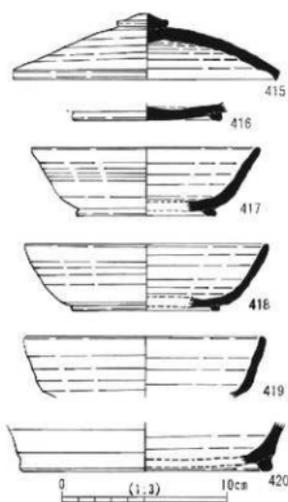
**天井石** 原位置を保持する天井石はない。崩落した石材も図中B-B'断面で1石だけしか確認できない。これは長辺約60cm、短辺30cmをはかる角礫である。

**玄室** 平面形は玄室中央の幅が玄門側、奥壁側より広く、側壁が緩やかに彎曲する喇叭形である。





第217図 大塚敷C43号墳周溝遺物出土状況図



第218図 大塚敷C43号墳周溝遺物出土土器実測図

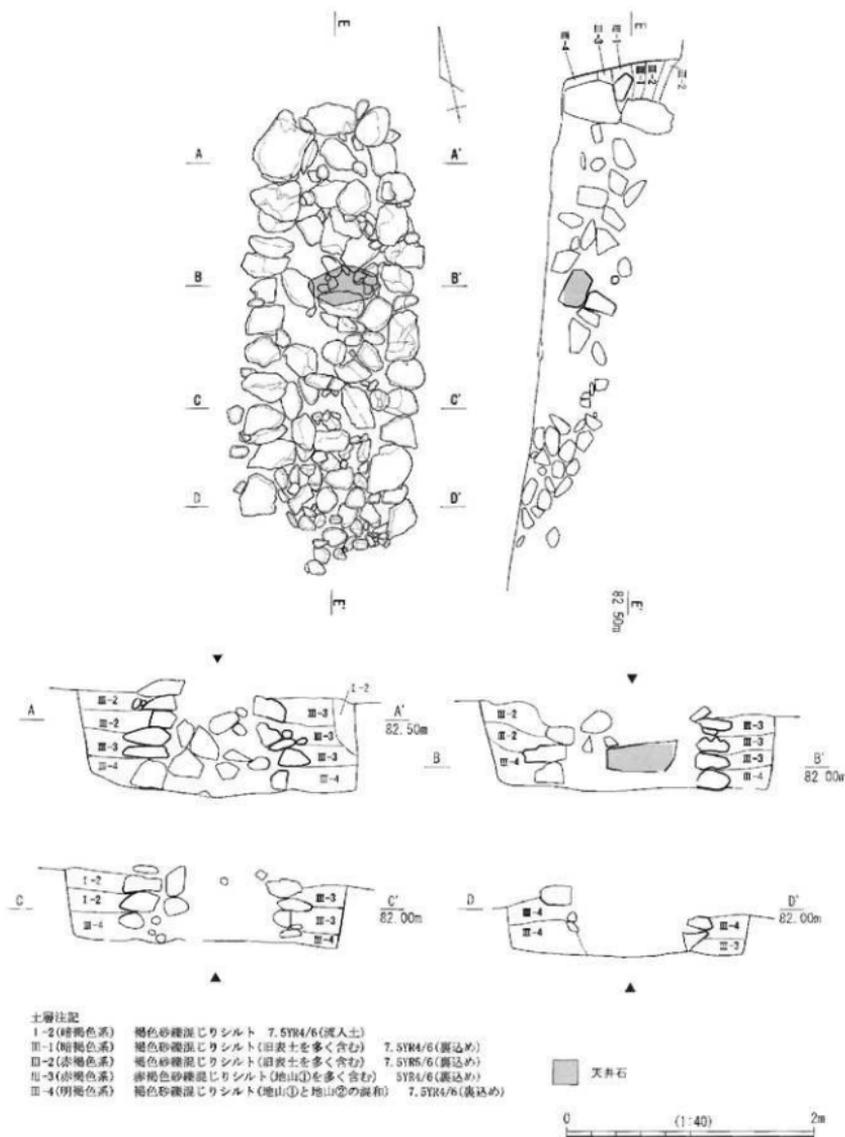
奥壁は、1段目は大型の角礫を用いて鏡石としており、2段目はやや大型の角礫を用いている。奥壁の持ち送りは、約15度内傾する。1段目の鏡石上には裏込めに小型の角礫が据えられており、これは2段目を積載するための控え積みである。

側壁は、奥壁1段目を挟み込むように積載され、2段目は奥壁の南側に接するように積載されている。側壁は最大で5段、約0.8m残存する。側壁は基底石の奥壁側にやや大型の角礫が用いられている。壁面は角礫を用いて長手積みしており、各段は目地が通るように積載されている。側壁の3段目が奥壁の1段目、5段目が2段目に対応する。

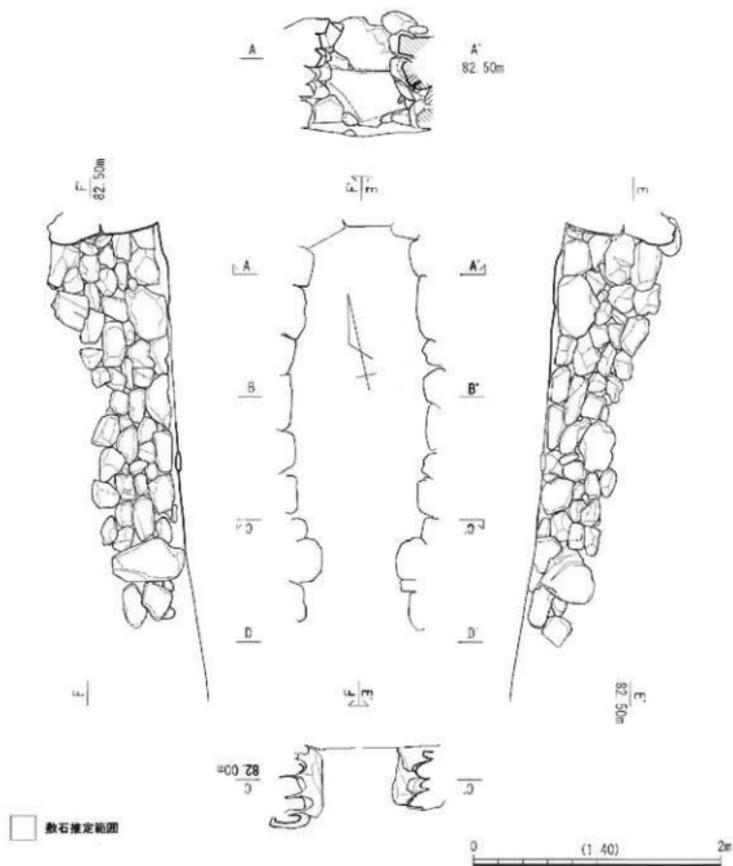
側壁の持ち送りの角度は約10～15度である。この持ち送りが築造当初の角度を維持すると仮定し、崩落している天井石の長辺幅約60cmを考慮すると、横穴式石室の高さは1.3～1.5m前後であった可能性が高い。

玄門は立柱石を用いている。立柱石は、柱状の角礫を用いて、内側に約0.15m突出させている。立柱石の上部は、側壁の3段目に対応する。

羨道 羨道は右側壁で1分、左側壁で2石分積載されており、最大で2段残存している。羨道の各段は玄室とはほぼ水平に積載されている。羨道幅は玄室幅とほぼ同幅である。羨道は短小であり、天井が架橋されていたか不明であり、羨道として機能していたか明確ではない。



第219図 大量敷C43号墳横穴式石室横出状図



第220図 大屋敷C43号墳横穴式石室実測図

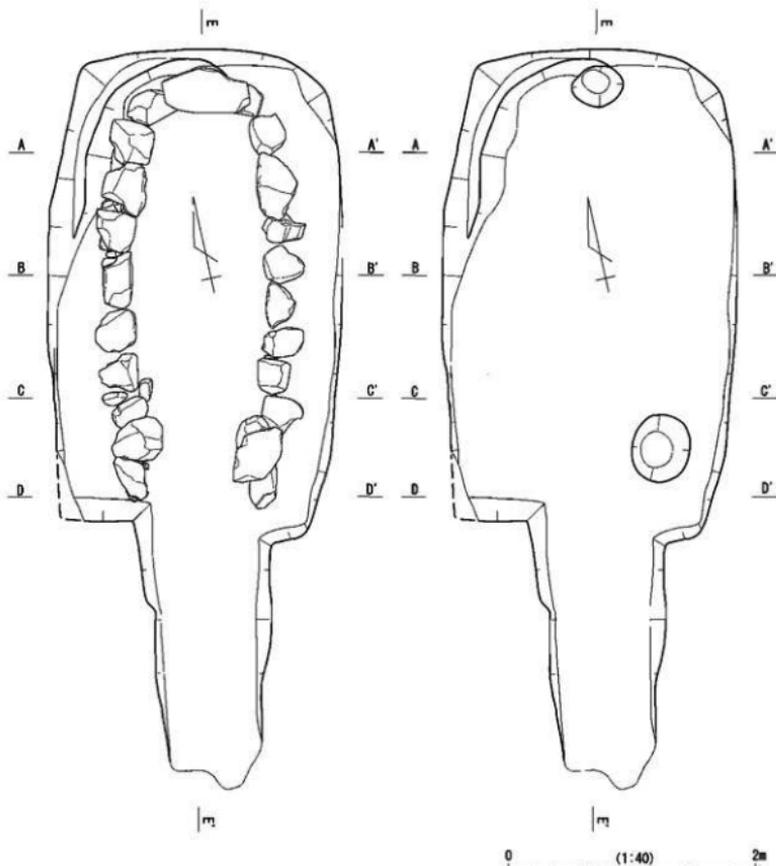
第34表 大屋敷C43号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-12° 37' -E	
石室全長	3.50m	
玄室長	2.55m	玄室最大幅 1.15m
玄室奥幅	0.80m	玄室玄門間幅 0.94m
羨道長	0.75m	羨道玄門間幅 0.84m
羨道羨門間幅	1.00m前後	

閉塞石 閉塞石は羨道部分に設置されており、側壁よりも小型の円礫を用いて封鎖している。  
敷石 玄室南側で遺物が出土したことから、それよりも標高が高い位置にある石材は崩落したものと取り除いたが、調査が進行すると、これらの石材の下部は墓床床面であったことが

判明した。したがって、図中には網掛けで敷石が敷設されていたおおよその範囲を図示した。使用された石材は10cm前後の小礫であった。

基底石 基底石は角礫を用いて、長手を内側に向けるものが多い。立柱石下部に潜り込むように玄室と



第221図 大塚敷C43号墳横穴式石室基礎石および墓室実測図

羨道の石材が設置されており、立柱石を据える前にこれらの石材が据えられた可能性が高い。

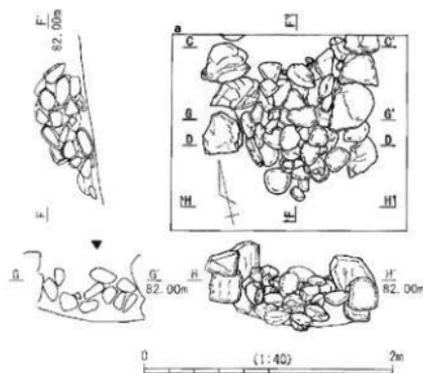
**使用石材** 側壁に使用された石材は、板状の角礫が多く、平積みされている。

**墓室・墓道** 墓室は地山を標高82.0m付近まで掘削しており、現地表面から約1.0m掘り込んでいる。墓室の右肩部分(南西隅部)はC44号墳の擾乱と同時に破壊されている。墓室の形状は、長方形であり、墓道へと続く。墓室規模は墓室長3.9m、墓室幅2.4mをはかる。墓室底面には奥壁と立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。墓室の中心に基底石が設置されている。

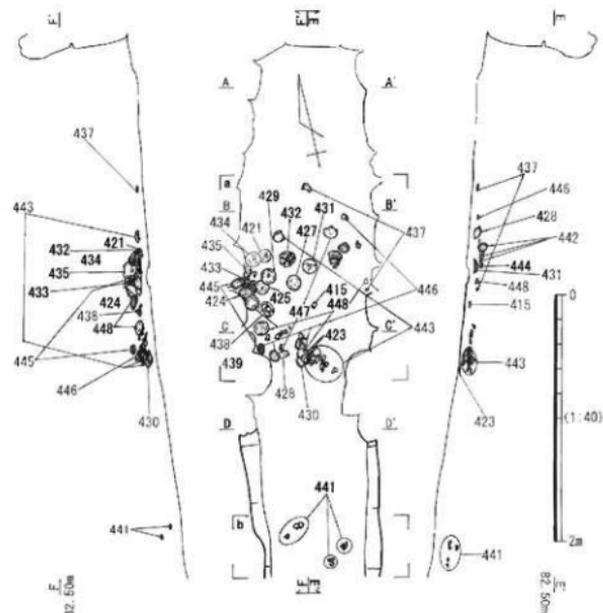
墓道は、ほぼ真南方向に向かって伸びている。墓道長2.2m、最大幅1.05m、深さ0.2mをはかる。

④遺物の出土状況(第223・224図、図版85)

玄室中央から玄門にかけて墓室床面直上から片付けられたような状態で、右側壁周辺に集中して須恵



第222図 大屋敷C43号墳横穴式石室開基石室測図



第223図 大屋敷C43号墳横穴式石室遺物出土状況図

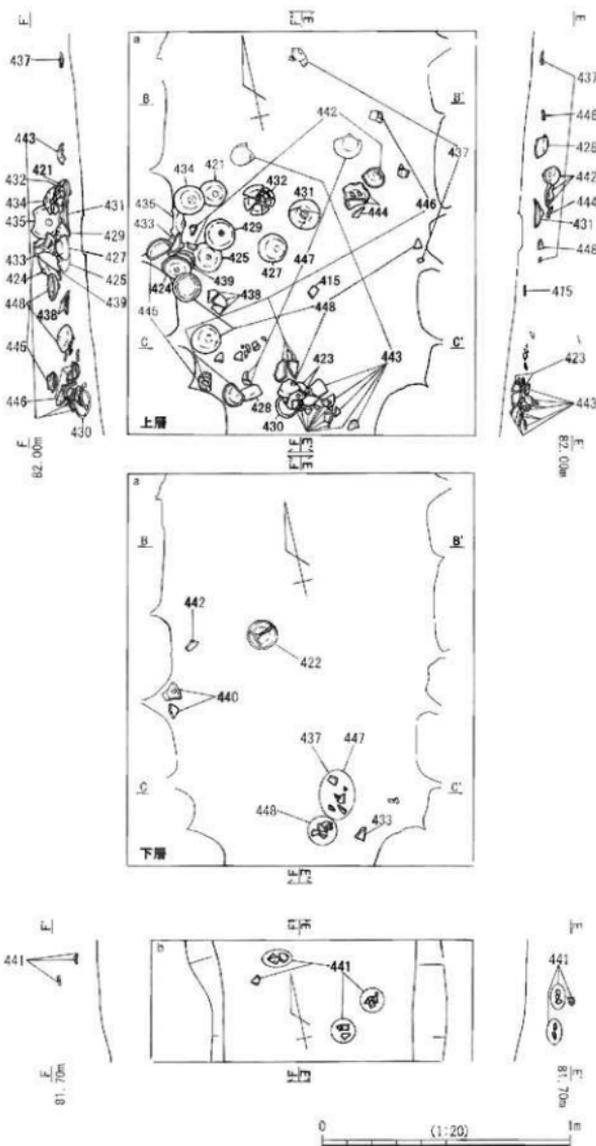
上図のように、返蓋と無台杯が組み合わされた状態で出土したものはないが、調整や胎土に特徴が観察でき、幾つかの組み合わせ関係であったことが判明した。その結果、返蓋422～430と無台杯441～445が摘みの形状、胎土と底部(天井部)の調整の特徴から対応する。また、胎土と摘みの特徴から返蓋

器返蓋2種15点(421～435)、無台杯13点(436～448)が出土した。返蓋と無台杯が組み合わされて出土したものはない。また、漢道覆土より返蓋か摘蓋1点(449)・無台杯1点(451)・返蓋(450)が出土した。

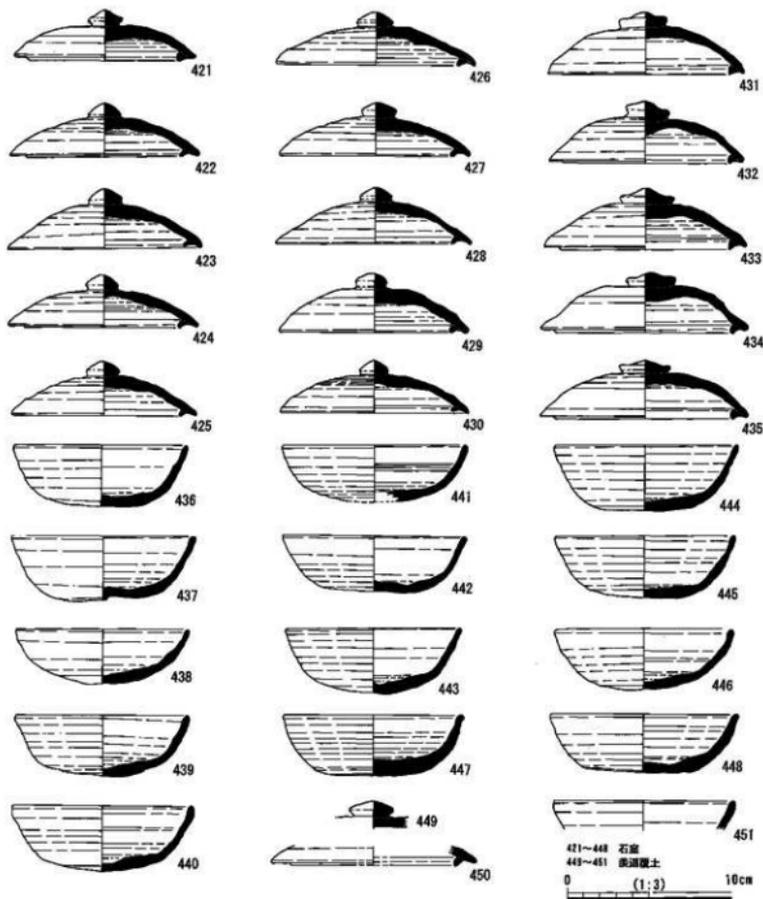
⑤出土遺物(第225図、図版149～152)

玄室内より返蓋15点、無台杯13点、覆土中より返蓋2点、無台杯1点が出土した。

返蓋のうち10点(421～430)は、やや小さい擬宝珠摘みを有し、返りは受部からやや突出するか、内側に入るものである。一方、残りの返蓋5点(431～435)も特徴が一致し、大型の擬宝珠摘みを有し、返りは受部よりもやや突出する。前者は返り径9.0～10.0cm、受部径約11.0～12.0cm、器高約3.0～3.6cmをはかる。後者は、返り径約10.0～11.0cm、受け部径11.5～13.0cm、器高約3.5～4.0cmをはかり、後者の方が前者に比べやや大型である。無台杯は碗形の体部をもち、口縁端部は丸く仕上げられる。口径は約10.0～11.0cm、器高約3.5～4.0cmをはかる。



第224图 大原数C43号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図



第225図 大屋敷C43号墳横穴式石室出土土器実測図

431～435と無台杯436～440が対応する。無台杯447・448は胎土や形状が類似しているが、これに対応する返蓋はない。また、多くの須恵器が湖西産の特徴を有するが、返蓋421は他の返蓋と異なった胎土を呈しており、湖西産以外である可能性が高い(本章第5節参照)。なお、これらの返蓋・無台杯には一切ヘラ記号は描かれていない。

羨道の覆土から出土した須恵器のうち返蓋か摘蓋(449)は大型の擬宝珠摘みを有するもので、返蓋(450)は返りが受部よりも突出するものである。無台杯(451)は、口縁端部が丸く仕上げられる。

#### ⑥小結

C43号墳は、玄室内から出土した須恵器が遠江IV期後半に位置づけることができ、7世紀後半に築造された可能性が高い。返蓋は摘みの形状から2種に区分することができるが、副葬状況からみると、片

付けられたような状態で出土していることから、追葬時の遺物として副葬されたような状況は看取できない。したがって、同一の埋葬に伴うものであった可能性が高いことから追葬が行われたか不明である。

なお、上述したようにC43号墳はC44号墳の周溝上に盛土を積んでおり、C44号墳→C43号墳の順に築造されたことが判明した。

### (31) C44号墳

#### ①調査前の状況

C43号墳の精査時に石室南西側に土坑状の土色の相違を確認したため、当初は陥し穴と考えていたが、43号墳の西側の周溝が円弧を描かず、この土坑部分を避けるように屈曲していること、調査が進むにつれ、円形ではなく方形で南側が開放することから古墳であると判明した。

古墳はI21・22グリッドに所在する。

#### ②墳丘・周溝(第216図, 図版82・87)

盛土は残存していない。

周溝は、墓塚を取り巻くように円弧を描く。北東側は43号墳の墓塚により破壊され、東側はC43号墳の墳丘内に残存している。

周溝の規模は、北側で幅1.2m、深さ0.2m、東側で幅1.2m以上、深さ0.25m、西側で幅1.1m、深さ0.3mをはかる。

古墳は円墳で、規模は周溝の内側で南北5.8m以上、東西5.5mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側が標高81.2m前後、北側が82.8m前後であることから、南側から見て現状で1.6m前後である。

なお、周溝・墳丘からは遺物は出土しなかった。

#### ③埋葬施設(第226図, 第35表, 図版87)

埋葬施設は古墳のほぼ中央に掘削された、南西西に向かって開口する横穴式石室で、石材はほとんど抜き取られている。

石室 残存状況が良好ではなく、石室の形状等は不明である。

第35表 大塚敷C44号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-18°46'-E	
石室全長	2.80m以上	
石室幅	不明	石室最大幅 0.90m以上
石室奥壁幅	不明	

使用石材 使用された石材は、円礫と角礫が確認でき、墓塚から出土した礫は河原石が多く、主に河原石を用いた石室であった可能性が高い。

敷石 敷石は一部残存しており、20cm以下の河原石が用いられている。

墓塚 墓塚は地山を標高81.2m付近まで掘削し、現地表面から1.2m掘り込んでいる。墓塚は南側が流出している。形状は現状で南側が開放するやや不整形な長方形であり、規模は墓塚残存長3.9m、幅2.15mをはかる。

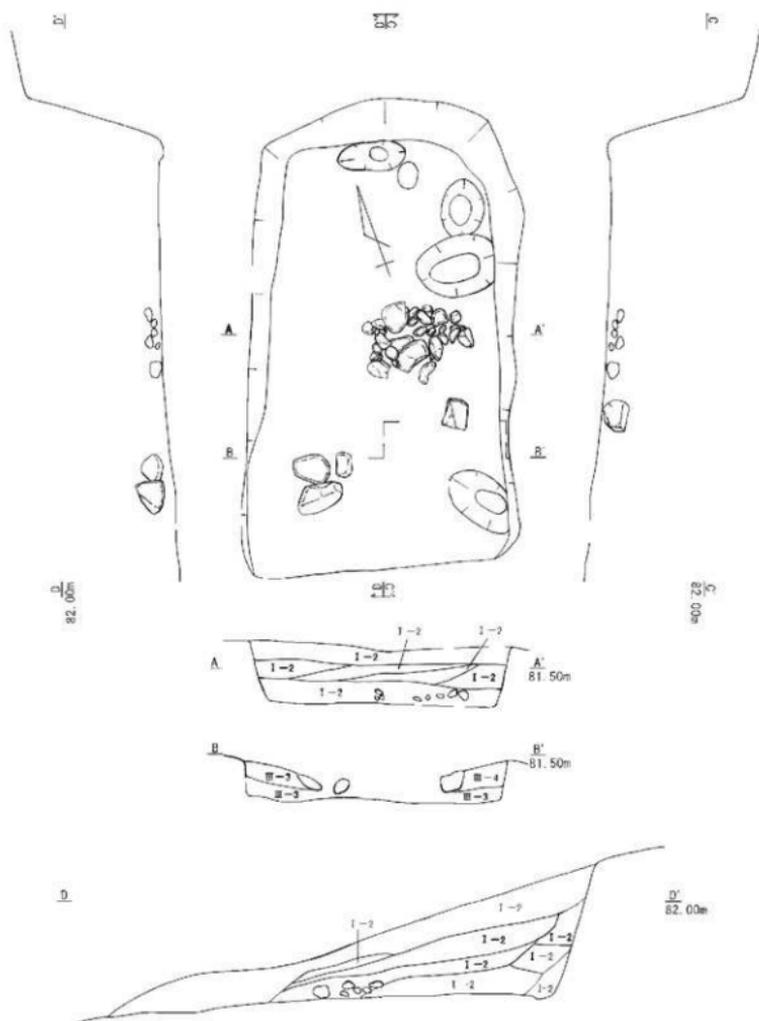
#### ④出土遺物

横穴式石室内からは遺物は出土していない。

#### ⑤小結

周溝が全周した場合、南側はC46号墳の周溝に接する。現状では断言できないが、C46号墳の周溝上部を破壊していた可能性が高く、C46号墳→C44号墳→C43号墳の順に築造された可能性が高い。

この想定が正しければ、C44号墳は遠江IV期後半に築造された可能性が高い。



土層注記

- I-2(暗褐色系) 褐色砂礫混じリシルト 7.5Y7.4/6(泥入土)
- II-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じリシルト(地山①を多く含む) 5YR4/6(黒込め・凝土)
- III-4(明褐色系) 褐色砂礫混じリシルト(地山①と地山②の混在) 7.5YR4/6(黒込め)

第226図 大屋敷C44号墳横穴式石室実測図および土層断面図

## (32) C45号墳

## ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みは一切確認することはできず、表土除去後石材が集中することで確認した古墳である。

古墳はI 22・J 22グリッドに所在する。

## ②墳丘・周溝(第227・228図, 図版88, 154)

壘土は残存していない。

周溝はC字形に巡らされており、南側は削り出して周溝に代えている。周溝規模は北側で幅1.1m、深さ0.3m、東側で幅0.8m、深さ0.25m、西側で幅0.9m、深さ0.2mをはかる。南側は、高さ0.1m程削りだしている。

古墳は東西に長い円(楕円形)墳で、規模は南北2.9m、東西3.2mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高80.2m前後、北側で標高80.8m前後であることから、現状で南側から見て0.6mである。

なお、周溝より須恵器無台杯(第228図452)が出土した。無台杯は箱形杯に近く、ほぼ水平な底部

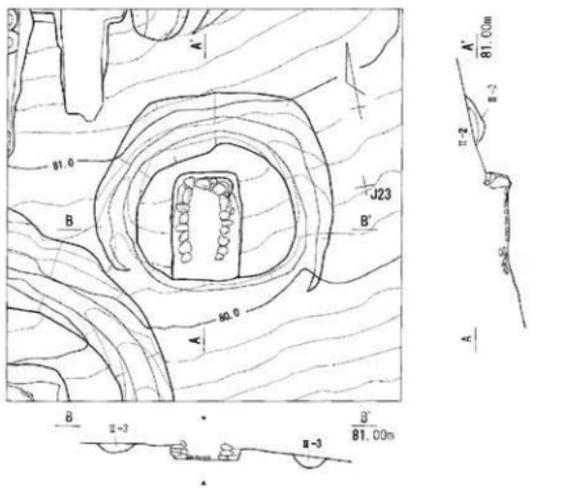
から一旦ハ字形に低く開いた後、口縁部はそこからやや外上方に向かって立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられている。高台は接合されていたものが剥離したような痕跡がなく、高台はつかない可能性が高い。

452はその特徴から遠江V期前半以降に位置づけることができる。

## ③埋葬施設(第229～231図, 第36表, 図版88～90)

埋葬施設は、墳丘の中央部に築造された、ほぼ真南に向かって開口する無袖式横穴式石室である。

天井石 原位置を保持する天井石はなく、崩落した石材の中に天井石と推測できるような石材は出土しなかった。したがって、側壁とはほぼ同大の河原石を用いた天井であった可能性が高いと推測する。



土層注記

II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝埋土)

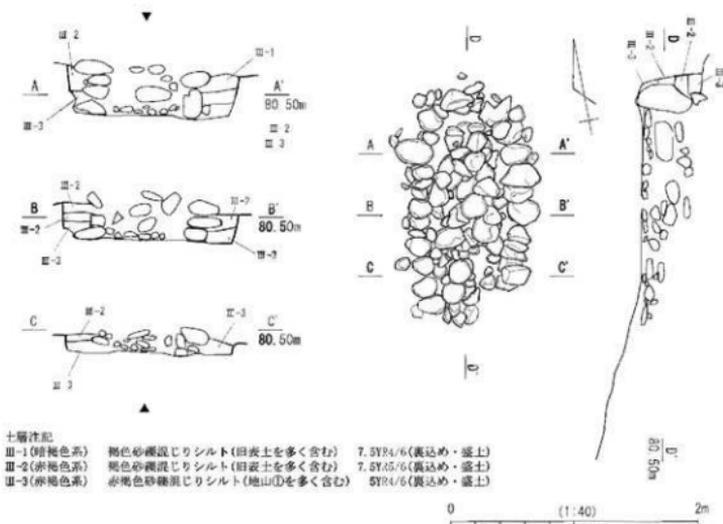
II-3(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝埋土)

第227図 大屋敷C45号墳墳丘測量図

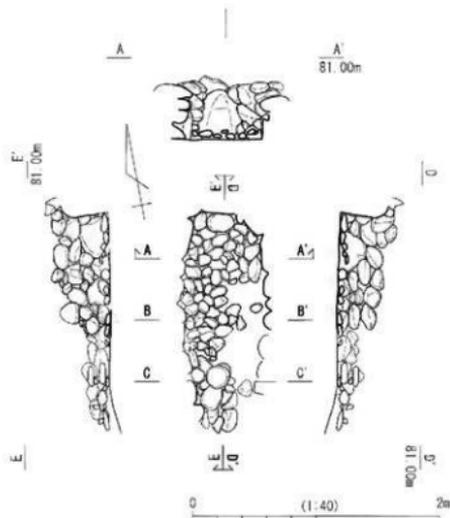
0 (1:100) 5m



第228図 大屋敷C45号墳周溝出土土器実測図



第229図 大屋敷C45号墳横穴式石室検出状況図



第230図 大屋敷C45号墳横穴式石室実測図

石室 石室の平面形態は石室中央の幅がやや広い胴張形である。

奥壁はやや大きめの河原石を用いて鏡石としている。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、最大で5段、0.5m残存している。側壁は目地が通るように積載されているが、一部乱れた箇所が存在する。左右両側壁ともに奥壁側基底石にやや大型の河原石を用いている。

敷石 床面には敷石が1面敷設されている。利用された石材は10cm以下の小礫である。

閉塞石 閉塞石は入口部分で20cm前後の河原石を用いている。

基底石 基底石は小口を内側に向けてのものが多く、墓壇の右側壁側に偏って設置されている。

墓壇 墓壇は地山を標高80.3m付近まで掘削し、現地表面から0.5m掘り込んでいる。墓壇の形状は南側

が開放する長方形であり、墓壇規模は墓壇長2.2m、墓壇幅1.4mをはかる。墓壇底面は左側壁側が全体的に掘削されており、それを埋めて側壁を敷設している。また、奥壁と左側壁奥壁側の2石を据えるために小土坑が掘削されている。

#### ④出土遺物

横穴式石室から遺物は出土していない。

#### ⑤小結

C45号墳は横穴式石室内から出土した遺物はないため、築造時期は不明である。おそらく7世紀末葉～8世紀前半に築造された可能性が高い。

また、C45号墳は、石室長が1.7mと短いことから、大人の伸展葬はほぼ不可能であり、改葬骨あるいは火葬骨が納められた可能性も想定すべきであろう。

### (33) C46号墳

#### ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みなどは全く確認することはできず、表土除去後石材が集中することで確認した古墳である。

古墳は、I21・22、J21・22グリッドに所在する。

#### ②墳丘・周溝(第232・233図、図版90、154)

墳丘盛上は残存しておらず、確認できない。

周溝はC字形に残存する。南側は流出しているが、本来は全周していた可能性が高い。

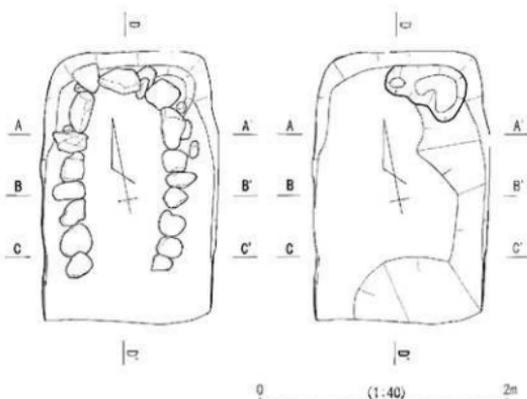
周溝の規模は北側で幅1.5m、深さ0.4m、東側で幅1.0m、深さ0.1m、西側で幅1.35m、深さ0.25mをはかる。周溝東側～南東側はC

47号墳の周溝により破壊されており、C46号墳→C47号墳の順に築造されたことが判明した。

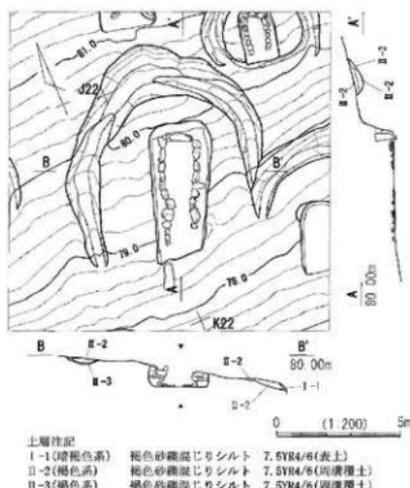
古墳の形状は、やや南北に長い円(楕円形)墳であり、規模は周溝の内側で南北7.0m以上、東西6.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは墳丘南側で標高78.6m前後、墳丘北側で80.2m前後であり、現状で

第36表 大屋敷C45号墳横穴式石室規模

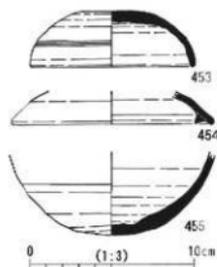
主軸方位	N-10° 52' - E	玄室最大幅	0.65m
石室全長	1.45m	玄室支門傾斜	40.45m
玄室長	1.45m		
玄室奥壁幅	0.40m		



第231図 大屋敷C45号墳横穴式石室基底石および墓壇実測図



第232図 大屋敷C46号墳墳丘測量図

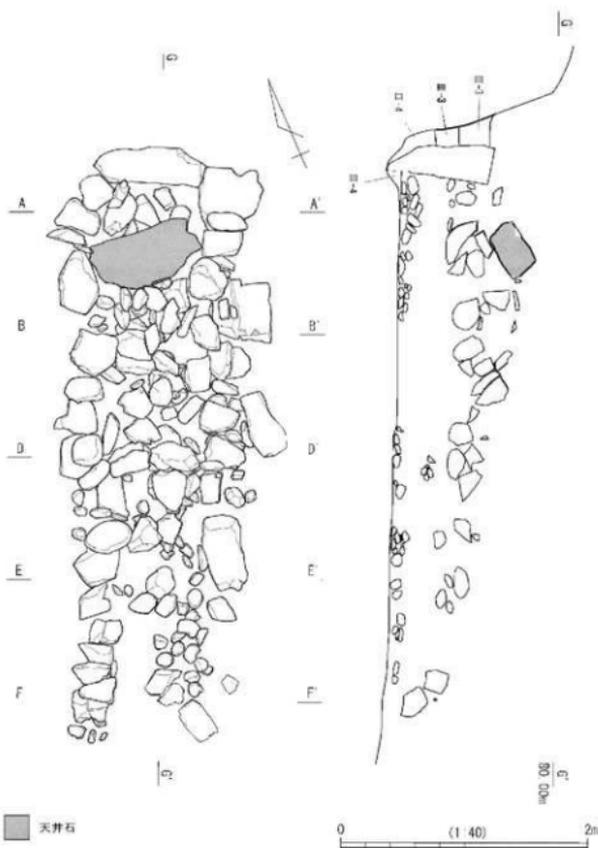


第233図 大屋敷C46号墳周溝出土  
土器実測図

南側から見て1.6mをはかる。

なお、周溝底面から0.3m以上浮いた状態で、須恵器杯蓋1点、返蓋1点、壺瓶類底部1点が出土した(第233図)。杯蓋(453)は、半球形の杯蓋である。口径9.7cm、器高3.5cmをはかる。返蓋(454)は返りが受部の内側に隠れるもので、返り径10.2cmをはかる。455は平瓶あるいは埴の底部であり、球形の胴部で下半には回転ヘラ削りを施す。

これらの須恵器は、遠江Ⅳ期後半に位置づけることができるが、周溝から土砂とともに流れ込んだような状態で出土したことから、C46号墳に直接伴う遺物ではない可能性が高い。



第234図 大屋敷C46号墳横穴式石室検出状況図

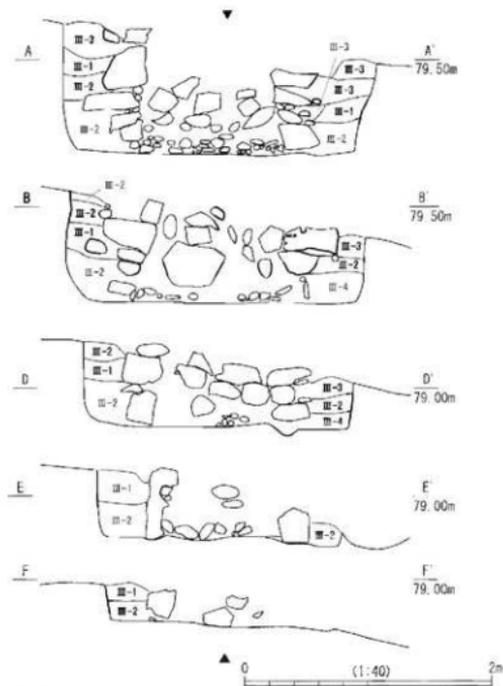
## ③埋葬施設(第234～236図, 第37表, 図版91～93)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された、南南西方向に開口する単室系擬似両袖式横穴式石室である。石室南側が一部破壊されていること、また、墓壙が南側に続いていること、羨道の平面径が扇張形と推測できることから、複室系擬似両袖式石室であった可能性も残る。

天井石 原位置を保持する天井石はない。崩落した天井石は奥壁よりやや南側で1石確認することが

第37表 大塚敷C46号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-23° 20' -E		
石室全長	4.30m以上	玄室最大幅	1.15m
玄室長	2.40m	玄室玄門側幅	0.90m
玄室奥壁幅	1.00m	羨道玄門側幅	0.70m
羨道長	1.50m	羨道最大幅	0.80m以上



## 土層記号

Ⅱ-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト(田表土を多く含む)	7.5YR4/6(裏込め・盛土)
Ⅱ-2(赤褐色系)	褐色砂礫混じりシルト(白表土を多く含む)	7.5YR5/6(裏込め・盛土)
Ⅱ-3(赤褐色系)	赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む)	5YR4/6(裏込め・盛土)
Ⅱ-4(明褐色系)	褐色砂礫混じりシルト(地山①と地山②の混和)	7.5YR4/6(裏込め・盛土)

きる。幅0.9m、長さ0.45mをはかる。このほかに天井石と推測する石材は確認できないため、天井がどこまで架溝されていたか明確ではない。

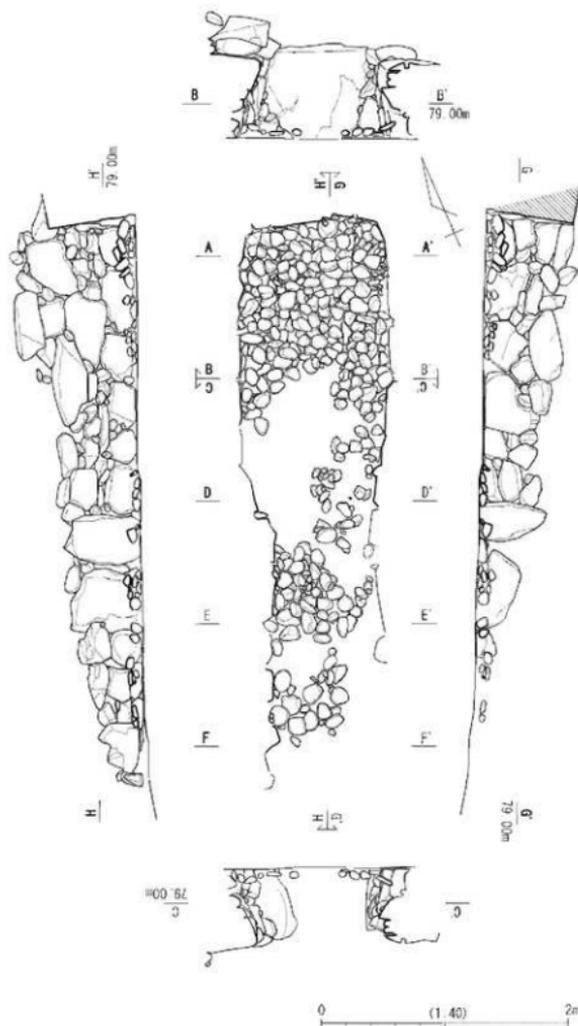
玄室 玄室平面形は玄室中央が若干広い緩やかな扇張形を呈する。

奥壁は大型の角礫を用いて鏡石としている。奥壁は約10度内傾して立てられている。

側壁は奥壁を積み込むように積載されており、最大で4段、約1.0m残存する。側壁の基底石にはやや大型の角礫が用いられているが、2段目以上の石材と比べて板礫に大きいわけではない。また、各段の目地が通るように積載されるが、2段にわたる大型石材も確認できる。側壁4段目が奥壁1段目に対応する。側壁は、約10～20度内傾している。

玄門は柱状の角礫を用いた立柱石であり、側壁の3段目に対応する。立柱石は側壁より0.05～0.1m突出する。

羨道 羨道は右側壁基底石で4石分残存しており、平面形は右側壁側に彎曲が看取できるため、本来は扇張形であった可能性が高い。玄門立柱石に近い部分のみ大型の角礫を設置している。各段の目地が揃うように積載され、玄室の



第235図 大塚敷C46号墳横穴式石室実測図

し、現地表面から約1.5m掘り込んでいる。

墓壇の平面形は入口側が流出しており明確ではないが、奥壁側の幅が広い長台形で、規模は墓壇長5.7m以上、奥壁側幅2.5m、入口側幅1.8mをはかる。墓壇底面には奥壁および立柱石、側壁を据える小土坑を確認することができる。基底石は、墓壇のほぼ中央に設置されている。

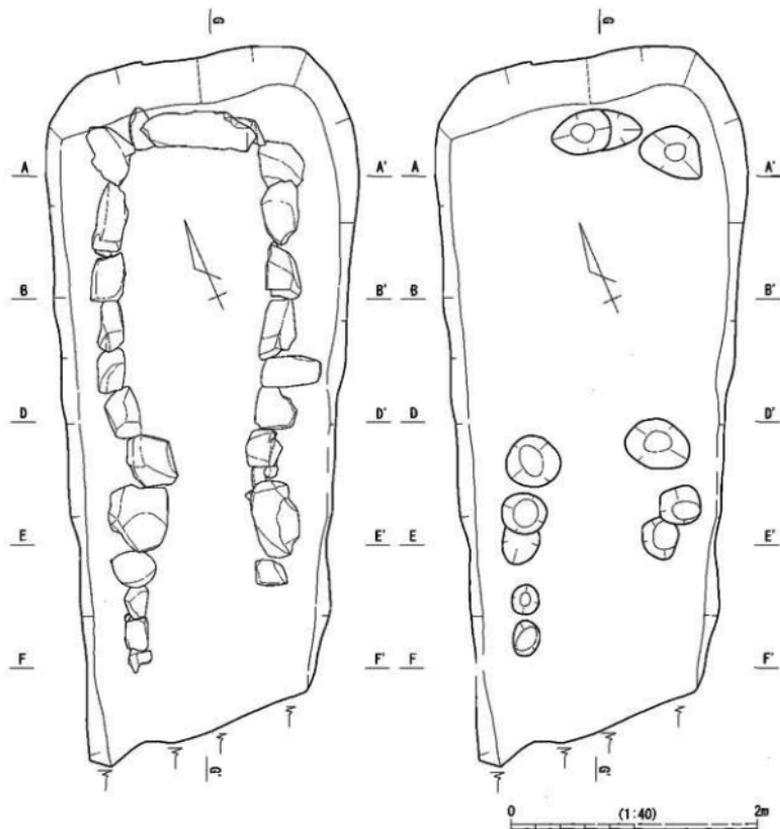
各段とはほぼ水平である。羨道3段目が玄門立柱石の高さに対応する。

羨道は約5～10度内傾している。

敷石 敷石は部分的に攪乱されているが、羨道と玄室で確認できることから玄室は全面、羨道は少なくとも玄門から1m南までは敷石が敷設されていたことが判明する。部分的に2段確認することができる。使用された石材は玄室・羨道ともに10cm程度の小礫である。

基底石 玄室の基底石は角礫を用いて長手面を内側に向けているものが多い。左側壁玄門側より2石目の石材は小口を内側に向けており、この部分で石材の長さを調整した可能性がある。この場合には、奥壁と立柱石を据え、その後奥壁側から石材を並べ、玄門付近で調整した可能性が高い。使用石材 C46号墳に使用された石材は角礫が主体であり、長手積みするものが多い。

墓壇 墓壇は地山を標高78.6m付近まで掘削



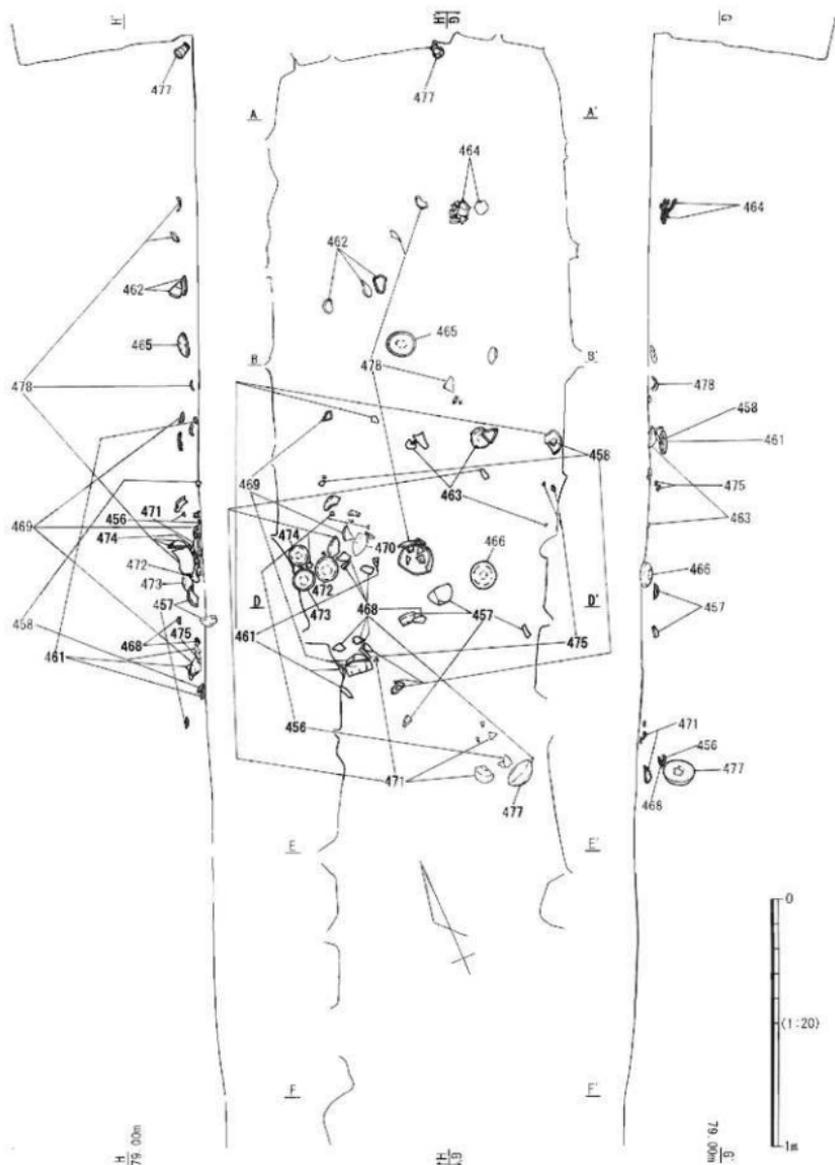
第236図 大屋敷C46号墳横穴式石室基部石および基礎実測図

#### ④遺物の出土状況(第237図, 図版92)

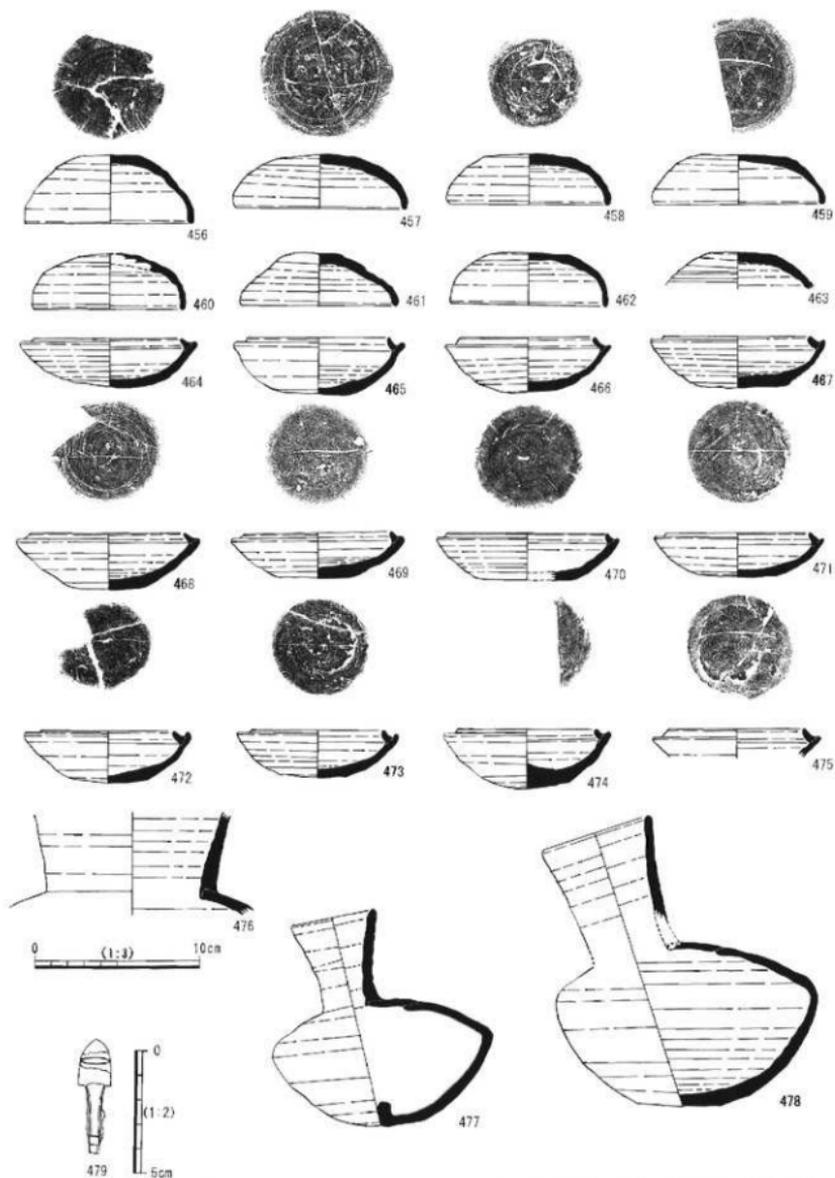
玄室玄門付近で杯蓋(456・461)、杯身(466・468~475)が出土した。これらは倒置されたり、破砕されたりしているものが多く、片付けにより置かれた可能性が高い。また、玄室中央部より、杯蓋(462・463)、杯身(464・465)が出土した。平瓶(478)は玄室内に散乱して出土した。平瓶(477)は胴部が羨道左側壁付近から、口縁部が奥壁で出土したことから、石室の崩落により移動するとした場合でも、これほどまでに離れるとは考えにくいことから、人為的に移動させられた可能性が高い。

したがって、石室内から出土した遺物は片付け行為により二次的に移動させられた遺物である可能性が高い。

また、玄室床面の土砂を洗浄したところ鉄鏝と推測する鉄製品2点(1個体分, 479)が出土し、さらに石室崩落土から須恵器広口壺1点(476)が出土した。



第237図 大屋敷C 46号墳横穴式石室遺物出土状況図



第239图 大塚敦C46号墳横穴式石室  
出土鉄製品実測図

第238图 大塚敦C46号墳横穴式石室出土土器実測図

## ⑤出土遺物(第238・239図, 図版153~158)

玄室・羨道より杯蓋8点、杯身12点、平瓶2点、鉄鏡1点が出土した。また石室崩落土中より広口壺1点が出土した。

須恵器 杯蓋は半球形であり、口縁部は内彎しており、口縁端部は丸く仕上げられている。口径9.0~10.3cm、器高3.1~4.2cmをはかる。なお、456にはヘラ記号「×」が、457~459には「-」が描かれている。杯身は短く内傾するたちあがりであり、受け部よりもわずかに上に出るものである。口径7.9~9.6cm、器高2.7~3.7cmをはかる。なお、464・465、467~471はヘラ記号「-」が、466はヘラ記号「×」が描かれている。

杯蓋と杯身が合わせられた状態で出土したものがないが、ヘラ記号が描かれたものと描かれないものという区分ができるならば、「×」印の杯蓋456と杯身466が組み合わせり、「-」印の杯蓋457~459と杯身464・465、467~471、ヘラ記号のない杯蓋460~463と杯身472~475が組み合わせる可能性が高い。

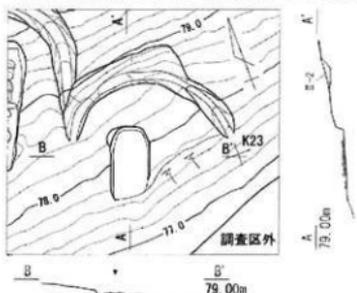
平瓶(477・478)は、口縁部は逆八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。胴部は肩が張るものであり、胴部下半は回転ヘラ削りが施されている。

広口壺(476)は、大きく開く頸部で、肩は張り、鋭角であると推測する。

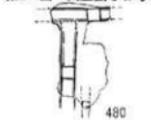
鉄製品 鉄製品は平根三角形鉄鏡と推測する。鏡身断面は平造りであり、頸部断面は方形である。

## ⑥小結

玄室内より出土した須恵器は、杯身・杯蓋が遠江Ⅳ期前半に遡る可能性が高い。一方、広口壺(476)は遠江Ⅴ期前半以降に位置づけることができる。したがって、C46号墳は遠江Ⅳ期前半、7世紀前半に築造された可能性が高い。追葬に関しては、石室内の遺物の出土状況が片付けられたような状況であることから、追葬が少なくとも1回行われた可能性が高い。



土層注記  
B-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.5YR4/6(周溝覆土)  
第240図 大塚遺跡C47号墳墳丘測量図



第241図  
大塚遺跡C47号墳周溝  
出土鉄製品実測図

また、C47号墳の周溝により、周溝南東側が破壊されており、C46号墳→C47号墳の順で築造されたことは明らかであり、埋葬施設から出土した須恵器の時期差とも一致している。

## 〔34〕C47号墳

## ①調査前の状況

調査前は高まりや窪みなどは一切確認することができず、表土除去後周溝を検出したことで確認した古墳である。

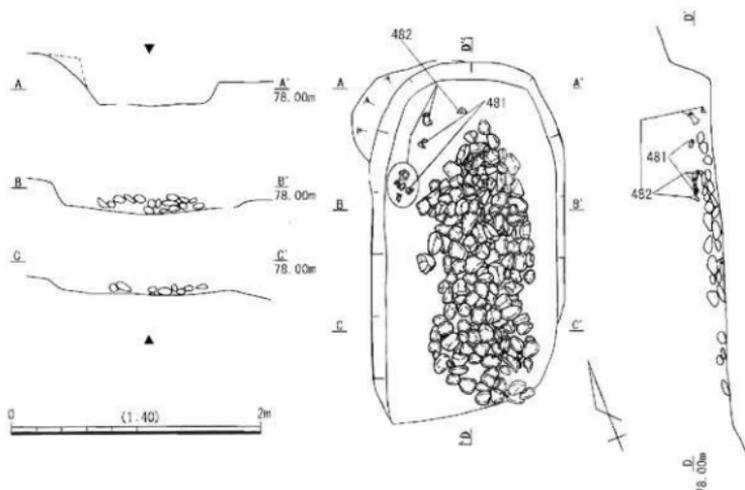
古墳はJ22・23、K22グリッドに位置する。

## ②墳丘・周溝(第240・241図, 図版94, 158)

墳丘盛土は残存していない。周溝は北側にC字形に掘削され、それ以外は流出しており確認することが

できない。周溝の規模は周溝北側で幅1.5m、深さ0.3m、北東側で幅0.9m、深さ0.05m、北西側で幅1.0m、深さ0.1mをはかる。

古墳は南北にやや長い円(楕円形)墳と推測でき、規模は周溝内側で南北4.5m以上、東西5.7m以上をはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側が標高77.7m前後、墳丘北側で標高78.5m前後であることから現状で南側から見て0.8mである。



第242図 大塚敷C47号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

なお、周溝北側より、底面から0.2m浮いた状態で用途不明鉄製品が出土した。この鉄製品(480)はT字形に2本の鉄棒が交わっているが、本来T字形であるのか、別の躯体であるのかX線写真でも判別できない。右端にもう1点別の鉄製品が錆着している。古墳時代の遺物であるとすれば鉄釘の可能性が高いが、周溝覆土上部より出土していることから断定できない。

### ③埋葬施設(第242図, 第38表, 図版94)

埋葬施設は、古墳の中央に築造された、南南西に向かって開口する横穴式石室である。墓壇と敷石のみを確認した。敷石は墓壇の中央部にみに敷設されており、敷石と墓壇の間には空白地帯があり石材が抜かれたものと判断した。

**敷石** 敷石は長さ2.2m、幅0.85mの範囲に10cm以下の小礫が二段しかれている。敷石が本来の形状を保つとすれば、中央付近の幅がやや広いことから、玄室平面形は扇形であった可能性が高い。

**墓壇** 墓壇は地山を標高77.8m付近まで掘削しており、現地表面から0.4m掘り込んでいる。墓壇の平面形は、南側部分が流出しているため不明であるが、隅丸長方形である可能性が高く、規模は墓壇長3.05m、幅1.55mをはかる。

墓壇底面には、土坑は掘削されていない。石室は墓壇内に設置されていた可能性が高い。

### ④遺物の出土状況(第242図, 図版94)

墓壇の攪乱土の中から、須恵器台付長頸壺1点(482)、甕瓶類口縁部1点(481)が出土した。石材を抜き取る時に移動させられたものである。

### ⑤出土遺物(第243図, 図版158)

須恵器台付長頸壺1点、甕瓶類口縁部1点が出土した。

台付長頸壺(482)は、口縁部が逆ハ字形に開き、口縁端部は九く仕上げられている。胴部は肩が張り

第38表 大塚敷C47号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-20°45'-E	
石室全長	2.35m以上	
玄室長	2.35m以上	玄室最大幅 0.70m以上
玄室奥幅	0.70m以上	玄室玄門幅0.80m以上

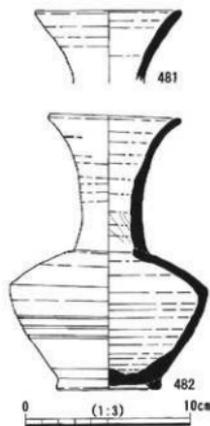
鋭角的である。胴部下半には回転ヘラ削りが施されている。高台は断面方形である。器高16.8cm、口径7.7cm、胴部最大径11.9cm、高台径6.4cmをはかる。壺瓶頸口縁部(481)は逆ハ字形に開くもので、口縁端部は丸く仕上げられている。

#### ⑥小結

石室は敷石の範囲からみると、無袖式石室で、規模はC29号墳程度であった可能性が高い。

また、築造時期は、石室攪乱土より出土した須恵器が遠江V期前半に比定できることから、8世紀前半に築造された可能性が高い。

なお、遺物に時期差が確認できず、追葬に関しては不明である。



第243図 大屋敷C47号墳横式石室出土土器実測図

#### (35) C48号墳

##### ①調査前の状況(第244図, 図版95)

調査前は、周囲よりわずかに小高くなっており、その中心がやや窪んでいたことから、古墳の存在が想定できた。

古墳は120・21、J20・21グリッドに所在する。

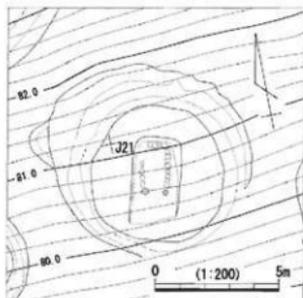
##### ②墳丘・周溝(第245～247図, 図版95, 97, 158・159)

墳丘盛土は確認することができない。

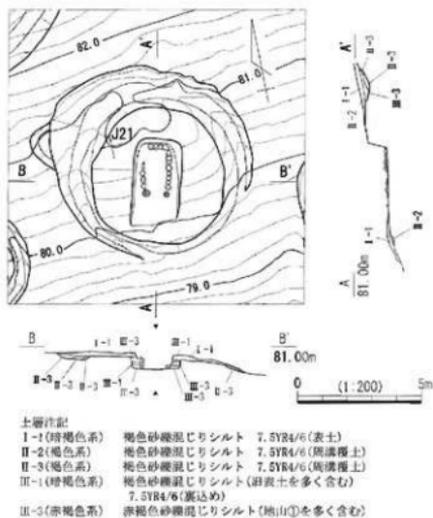
周溝は南東側部分が流出しているがほぼ全周しており、規模は北側で幅1.4m、深さ0.4m、東側で幅1.2m、深さ0.1m、西側で幅1.5m、深さ0.2m、南側で幅0.6m、深さ0.1mをはかる。

古墳は、円墳であり、規模は周溝内側で、南北5.5m、東西5.5mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高79.6m前後、墳丘北側で81.1m前後であり、現状で南側から見て1.5mである。

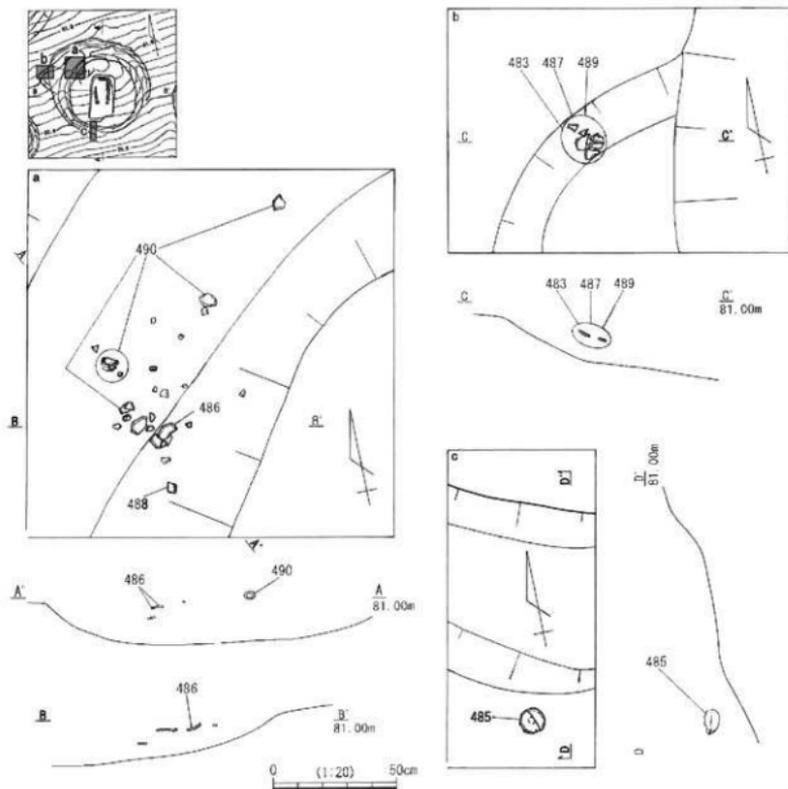
また、周溝北西側、西側、南側より須恵器が底面よりやや浮いた状態で出土した。出土した須恵器は、杯蓋1点(485)、返蓋1点(483)、無台杯2点(486・487)、壺瓶頸口縁部1点(489)、無蓋高杯1点(490)、土師器鉢1



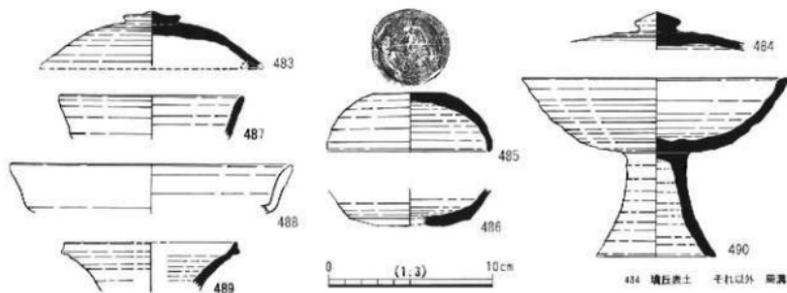
第244図 大屋敷C48号墳調査前測量図



第245図 大屋敷C48号墳墳丘測量図



第246図 大塚敷C48号墳内溝遺物出土状況図



第247図 大塚敷C48号墳周溝および墳丘出土土器実測図

点(488)が出土した。

杯蓋(485)は半球形で、口縁部はやや内彎し、口縁端部は丸く仕上げられる。口径9.7cm、器高3.6cmをはかる。天井部にはヘラ記号「-」が描かれる。返蓋(483)は、大型の擬宝珠摘みを有するもので、返りはわずかに残存するのみであるが、受部に隠れる可能性が高い。返り径は12cm前後である。無台杯(486)は底部片で底部はほぼ水平で、外上方へ向かって立ち上がる口縁部である。487は口縁部片である。壺瓶類口縁部は逆八字形に開いた後、口縁直下に稜線をつけ、口縁端部を外側に折り返す。無蓋高杯は碗形の体部を有し、口縁端部は内傾する面をもつ。脚部は八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられる。

土師器壺(488)は、底部から外上方へ向かって立ち上がるもので、口縁端部は丸く仕上げられる。周溝出土遺物は遠江IV期後半に位置づけることができる。

また、墳丘上から須恵器返蓋あるいは摘蓋1点(484)が出土した。大型の擬宝珠摘みを有する。

なお、須恵器台付長頸壺(528)はC48号墳墳丘とC50号墳周溝北側から出土したものが接合している。さらにC50号墳で説明するようにC21号墳の石室、22号墳墳丘から出土した須恵器とC50号墳周溝出土須恵器が接合することからC50号墳周溝出土遺物はC21号墳・C22号墳から落ち込んだものである可能性が極めて高い。したがって、C50号墳周溝出土遺物と接合したC48号墳の墳丘および周溝出土遺物も斜面上位のC21号墳に伴う遺物である可能性が高い。

### ③埋葬施設(第248・249図, 第39表, 図版96)

埋葬施設は、古墳の中央に築かれた、ほぼ真南に向かって開口する横穴式石室である。石室は南側部分が攪乱され大部分が失われているが、立柱石を立てた可能性が高い土坑を確認できることから単室承擬似両袖式石室であったと推測する。

第39表 大塚遺跡C48号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-11°26'・E	
石室全長	1.6m以上	
玄室長	1.6m以上	玄室最大幅 0.85m以上
玄室奥壁幅	0.70m以上	玄室玄門幅0.80m

天井石 天井石は図中B-B'断面付近で1石確認することができる。長辺約60cm、短辺35cmをはかる。少なくとも玄室は天井石が架構されていた可能性が高い。

玄室 玄室平面形は、玄門から奥壁までがほぼ同幅の長方形である。

奥壁はC41号墳と同様、円礫を並べている。1段しか残存していないが、上段まで円礫積みであった可能性が高い。現状で1段4石確認することができ、本来は6石で構成されていた可能性が高い。

側壁は奥壁に接するように積載されており、各段目地が揃うように積載されている。側壁2段目以上は小口積みで、基底石は長手積みである。側壁の持ち送りはほとんど確認できず、ほぼ垂直に積載されている。

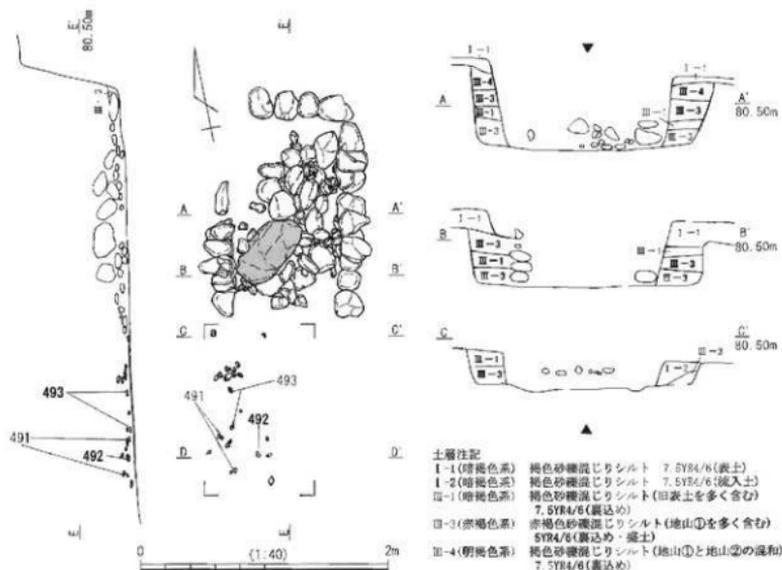
玄門部分は失われているが、立柱石を設置していた可能性が高い。土坑の位置からみると、立柱石は側壁から突出していた可能性が高い。

敷石 床面には敷石が敷設されている。少なくとも玄室内全面に敷設されていた可能性が高い。敷石に用いられた石材は10cm前後の小礫である。

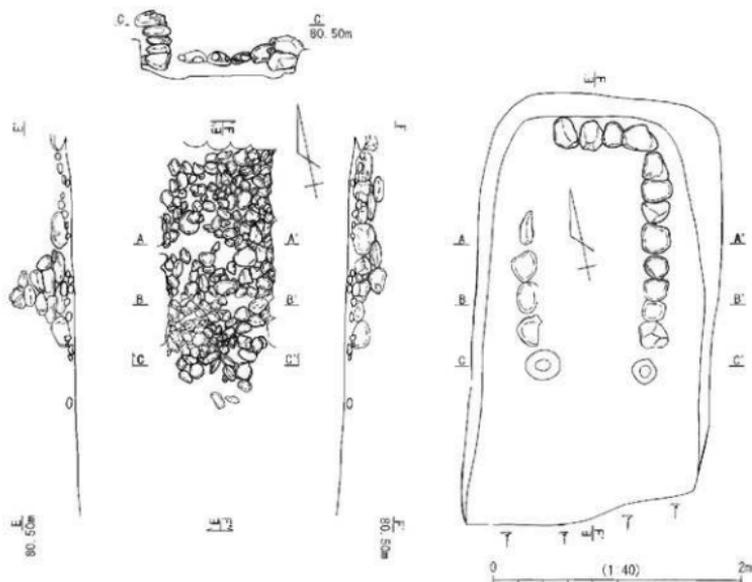
基底石 基底石は河原石を用いており、長手を内側に向けている。奥壁は左側壁側に近い石材だけが長手積みで、それ以外は小口積みである。

使用石材 使用された石材はほぼすべて河原石である。攪乱土から出土した石材もほとんどが河原石であり、C48号墳は河原石積みの石室であった可能性が高い。

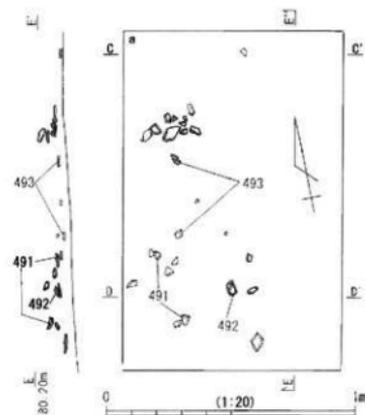
墓壇 墓壇は地山を標高80.2m付近まで掘削しており、現地表面から0.8m掘り込んである。墓壇の平面形は南側が流出しているため明確ではないが、隅丸長方形である。墓壇規模は墓壇長3.5m以上、墓壇幅1.95mをはかる。石室は墓壇の中心に設置されている。



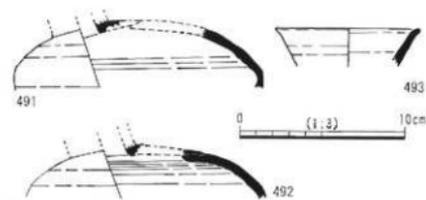
第248図 大塚敷C48号墳横穴式石室検出状況および遺物出土状況図



第249図 大塚敷C48号墳横穴式石室および基礎石・基壇実測図



第250図 大屋敷C48号墳横穴式石室遺物出土状況詳細図



第251図 大屋敷C48号墳横穴式石室出土土器実測図

## ④遺物の出土状況(第248・250図, 図版97)

女室内から原位置を保持した状態で出土した遺物はない。墓壇南側より攪乱された状態で須恵器が出土した。本来は羨道であったと考えられる部分からの出土である。出土した須恵器は平瓶2点(491・492)、平瓶口縁部?1点(493)のほか須恵器小片が出土したが、接合できなかった。

## ⑤出土遺物(第251図, 図版159)

須恵器平瓶2点、平瓶口縁部?1点が出土した。

平瓶(491・492)はともに胴部破片であり、肩がはる。口縁部片(493)は逆ハ字形に開いた後、口縁端部は丸く仕上げられる。

## ⑥小結

C48号墳の出土須恵器は細片であり、時期を特定することはできないが、遠江IV期後半～末葉に位置づけることができ、7世紀後半～末葉に築造された可能性が高い。

また、C48号墳は奥壁を円礫積みしており、遠江の一般的な構造ではない(鈴木-2000b)ことから、この時期に地域内部で産み出された(鈴木-2001b)、あるいは新たに近接地域から伝播した石室構造を取り入れた可能性が高い。

## (36) C49号墳

## ①調査前の状況

調査前は高まりや窪みなど是一切確認することができず、表土除去後石材が集中することで確認した古墳である。

古墳は、J20グリッドに所在する。

## ②墳丘・周溝(第252図, 図版97)

墳丘盛土は確認することはできない。

周溝は全周しており、周溝規模は北側で幅0.65m、深さ0.15m、東側で幅0.6m、深さ0.1m、西側で幅0.65m、深さ0.15m、南側で幅0.4m、深さ0.05mをはかる。

古墳はやや不整形な円墳で、規模は周溝内側で、南北3.7m、東西4.3mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高79.4m前後、北側で標高80.4m前後であることから、現状で南側から見て1.0mである。



上層注記  
II-3(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト  
7.51X1/6(周溝盛土)

第252図 大屋敷C49号墳墳丘測量図

なお、墳丘・周溝ともに遺物は出土していない。

### ③ 埋葬施設(第253～255図, 第40表, 図版98・99)

埋葬施設は、古墳のほぼ中央に築造された擬似兩袖式横穴式石室である。

**天井石** 天井石は原位を保持するもの、崩落したものとも確認できない。

**玄室** 玄室平面形は、玄門端から奥壁までほぼ同幅の、長方形である。奥壁は、基底石にやや大型の河原石を2列縦位に設置し、その上位(2段目以上)に円礫を積載し3段残存している。奥壁の持ち送りは約10度である。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、3・4段目は奥壁2・3段目に対応し、側壁と奥壁の両方に架け、力石としている。側壁は目地が通るように積載されるが、奥壁に近い基底石に2段にわたるものが確認できる。側壁の持ち送りは、約10～15度である。

玄門は現状では倒れ込んでいるが、本来は側壁に積載された石材よりも大型の河原石を立て立柱石としている。立柱石は側壁2段目に対応し、奥壁の基底石よりは1段低い。立柱石は側壁よりもわずかに突出している。

**羨道** 羨道は左右両側壁ともに1石ずつ積載されるのみであり、羨道の機能を果たしておらず、天井が架構されない短い前庭であった可能性が高い。羨道(前庭)は、玄室1段目とほぼ水平になるように設置されている。

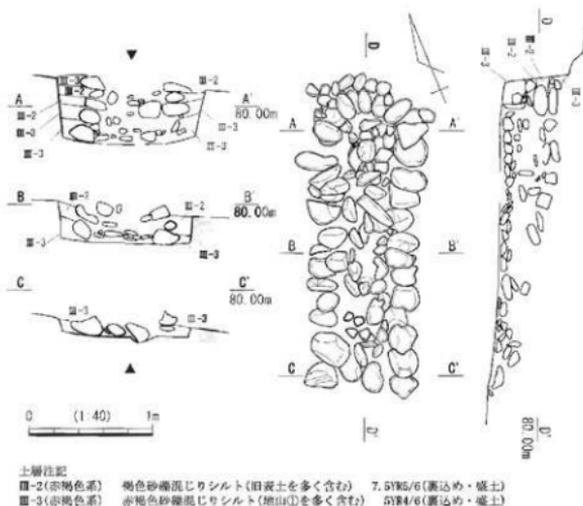
**閉塞石** 閉塞石は羨道部分に置かれており、現状で2石確認することができる。2石は楕円形の石材で、小口を石室内側に向けて設置している。

**敷石** 敷石は玄門部分まで玄室全体に敷設されており、1面ののみ確認することができる。敷石に使用された石材は、10cm前後の小礫である。

**基底石** 基底石は河原石の長手を内側に向けている。石材の大きさは奥壁側がやや大きい。その他のものにはほぼ差がなく、石材の幅を調整したような痕跡もないことから、設置順序は不明である。

基底石は墓室内に設置されている。

**使用石材** 使用された石材はほぼすべて河原石であり、長手積み、小口積みがともに確認できる。

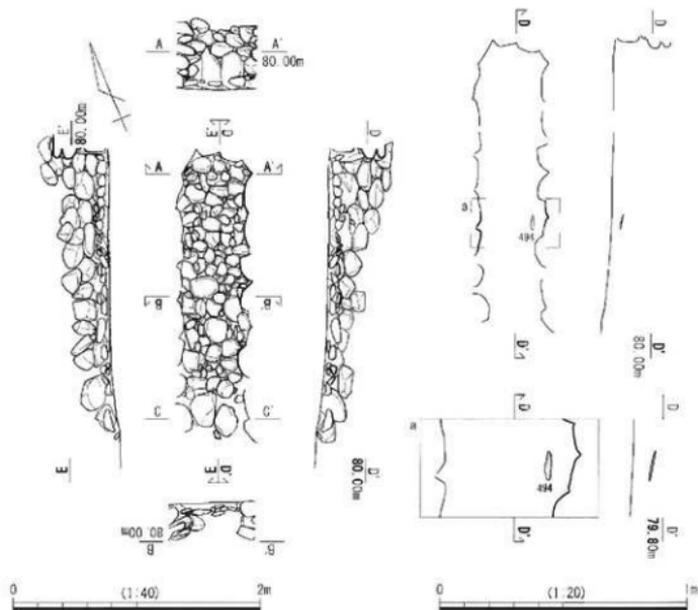


上層注記  
 III-2(赤褐色系) 褐色砂礫混じりシルト(旧積土を多く含む) 7.5%G/6(裏込め・盛土)  
 III-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(堆山土を多く含む) 5%R/6(裏込め・盛土)

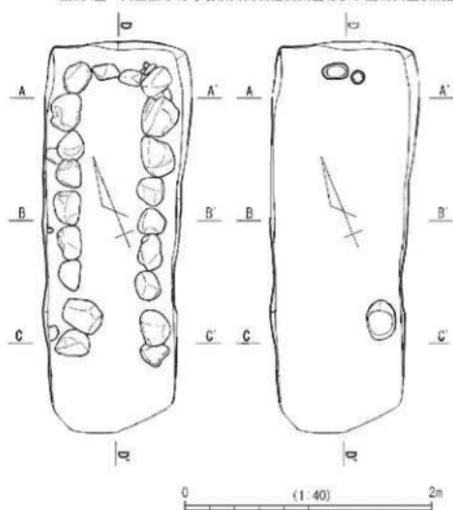
第253図 大塚敷C49号墳横穴式石室検出状況図

第40表 大塚敷C49号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-22°30'-E	
石室全長	2.50m	玄室最大幅 0.50m
玄室全長	1.80m	玄室玄門幅 0.45m
玄室奥壁幅	0.45m	羨道玄門幅 0.45m
羨道全長	0.50m	
羨道玄門開幅	0.60m前後	



第254図 大屋敷C49号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況



第255図 大屋敷C49号墳横穴式石室基基石および墓墳実測図

かってやや先細るもので、莖長6.6cm、幅は関側で1.0cm、莖尻で6mmをはかる。断面形は椀側がやや

墓墳 墓墳は地山を標高79.7m付近まで掘削し、現地表面から約0.65m掘り込んでいる。墓墳の形状は南側が開放する長方形で、規模は墓墳長3.15m、幅1.2mをはかる。墓墳底面には奥壁と左立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。

#### ④遺物の出土状況(第254図, 図版99)

玄室内の左立柱石から約0.4m北側で、左側壁に沿うように敷石直上から、切先を奥壁側に向けた状態で刀子(494)が出土した。

#### ⑤出土遺物(第256図, 図版159)

鉄製刀子が1点出土した。

鉄製刀子(494)は完形である。全長16.6cmをはかる。刀身に錆はなく、平造りであり、刃部長10.0cm、幅1.5cm、標厚4mmをはかる。関は直角均等両関であり、約3mm内側に入る。莖は莖尻に向

厚い長台形で、横側3mm、刃部側2mmをはかる。

刃部には布が付着しており、茎には木質および樹皮巻きが一部残存している。

#### ⑥ 小結

C49号墳は時期を決定できるような出土遺物はないため築造時期は明確ではないが、石室が小型であること、奥壁に鏡石を用いないことから、7世紀後半以降の築造である可能性が高い。

また、石室全長は2.3mと大人を伸展葬することは可能であるが、小型であることから改葬骨や火葬骨を納めた可能性を考慮する必要がある。

### (37) C50号墳

#### ① 調査前の状況(第257図, 図版99)

C19号墳の南東において、8m程度の墳丘の高まりが確認でき、その中央部には大きな盗掘坑が空けられており、盗掘を受けた古墳であることが明白であった。また、その周囲には大型の角礫が頭を覗かせており、埋葬施設は横穴式石室であることが予想できた。

古墳はJ18~20、K18~20グリッドに位置している。

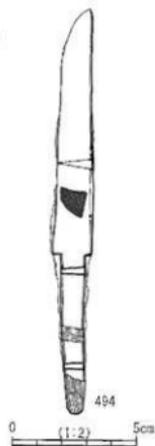
#### ② 墳丘・周溝(第258~263, 267図, 図版100・101, 104, 160~164)

周溝はC字形に残存している。西側は自然流路となり消失しているが、本来は巡らされていた可能性が高い。墳丘南側は、削り出すことにより周溝に代えている。周溝は北側が2段になっており、一部雨水により拡張されたと考えられるが北側のみ幅を広げており、墳丘盛土の不足から北側部分を広げた可能性を想定したい。周溝規模は北側で幅3.5m、深さ0.7m、東側で幅3.5m、深さ0.3m、西側で幅1.5m、深さ0.4mをはかる。南側は約0.4m削り出して段差をつけている。

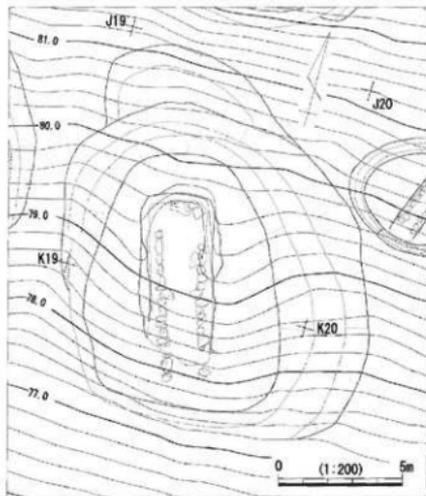
古墳は、やや南北に長い不整形な円(楕円形)墳で、周溝内側で南北10.3m、東西8.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高76.8m前後、墳丘北側で標高79.9m前後をはかることから、南側から見て現状で3.1mをはかる。

墳丘南側には墳丘内石列あるいは外護列石が設置されている。石室前庭入口部分に取り付くことから外護列石であった可能性が高い。東西ともに石室前面にだけ積載されており、西側で3段残存している。西側は2.0m、東側は1.5m設置され、南側の土留めの役割も果たしている。使用された石材は角礫と河原石が確認できる。

盛土は北側を除いてほぼ全体に残存している。盛土は石室裏込めから続く第一次墳丘で、第二次墳丘は確認できない。盛土はまず、墳



第256図 大塚敷C49号墳出土  
鉄製品実測図



第257図 大塚敷C50号墳調査前測量図

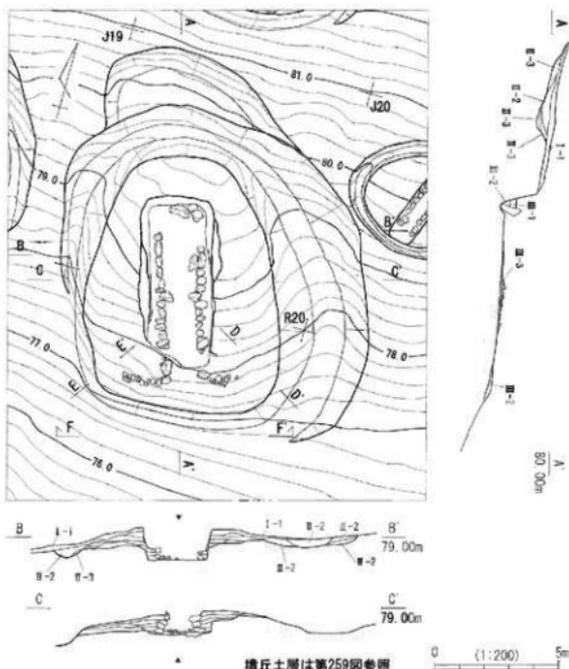
丘南側の石室床面より低い箇所を盛ることで石室構築面とはほぼ同じ高さまで盛り上げる。つづいて、石室を構築しながら墓域内に石材の裏込めを行い、その土砂をそのまま墳丘上まで盛り上げている。盛土は墳丘の中心に向かって石室を覆うように盛り上げられている。

なお、周溝北側から周溝東側にかけて須恵器が土砂とともに流れ込み、周溝底面から約0.2m以上浮き、散乱した状態で出土した。

周溝から出土した須恵器は杯身3点(495～497)、返蓋1点(499)、無台杯1点(500)、摘蓋5点(503～507)、高杯1点(508～514)、高杯4点以上(515～521)、長頸壺3点以上(527・528・530・

531・533・534)、埴2点(529・532)、平瓶4点(522～525)、甕破片(526)がある。

杯身(495・496)は短く内傾する立ち上がりをもつもので、口径8.0～9.0cmをはかる。返蓋(499)は返りが受部よりもわずかに突出する。返り径10.5cm、受け部径13.0cmをはかる。返蓋あるいは摘蓋の摘み片(498・501)は、大型の摘みであり、時期の新しい口径の大きな返蓋かあるいは摘蓋の可能性が高い。摘蓋(503～507)は、大型の握定珠組みを持ち、口縁端部は端部を明瞭に折り曲げ、垂直に垂下させるもので、器高が高いもの(503・506)と低いもの(504・507)がある。口径は約15.0～16.5cmをはかる。無台杯(500)は幅の狭い底部で、口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径14.2cmをはかる。有台杯(508～514)は、底部が高台よりも突出するもの(508・511)、ほぼ同じ高さまで下がるもの(510・514)、高台よりも上にあるもの(509・512)がある。口径は、約14.0～15.0cm、器高3.7～4.5cmをはかる。無蓋高杯(515～518)は、碗形の杯部で、口縁部直下に強いナデを施し、口縁端部は丸く仕上げられている。口径は約15.0～18.0cmをはかる。高杯脚部(521)は、大屋敷C古墳群で唯一出土した透かし入り高杯脚部であり、八字形に開き、端部を横ナデにより垂直に引き出すものである。脚径12.8cmをはかる大型の高杯である。519・520は無蓋の脚部で、八字形に開き、端部を明瞭に屈曲さ

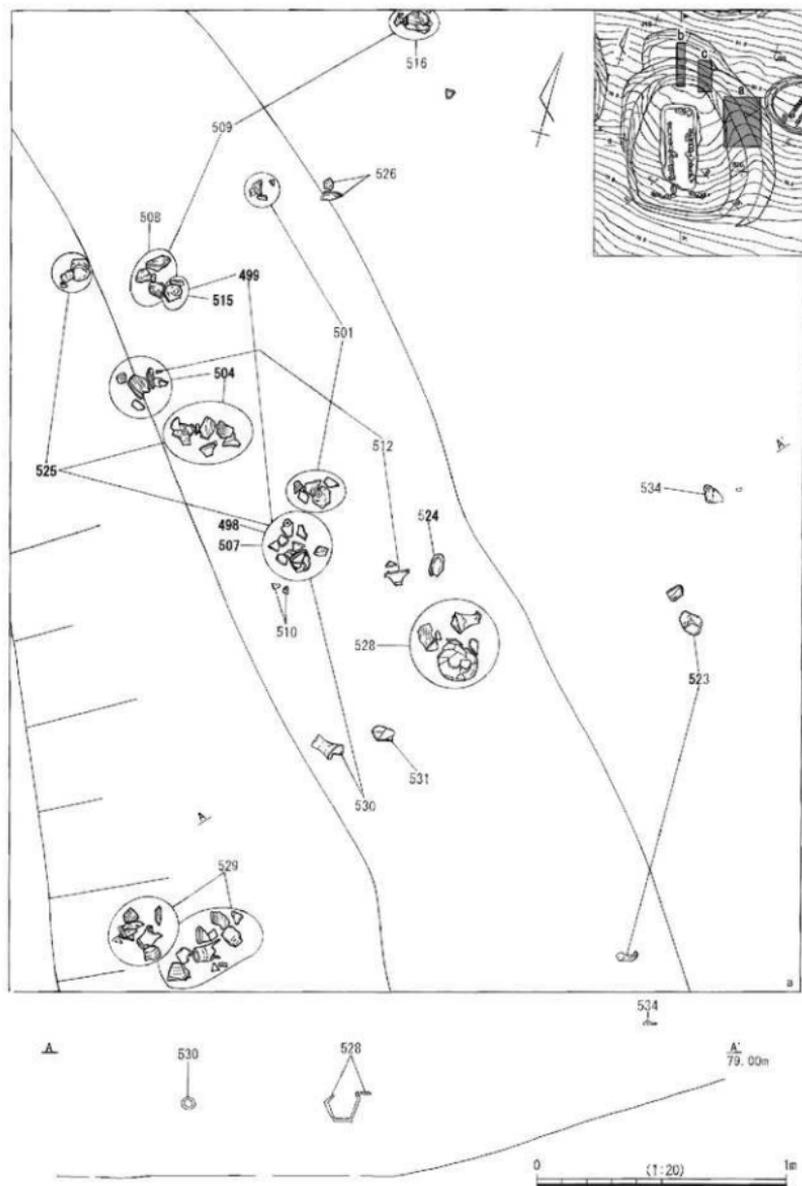


墳丘土層は第259図参照

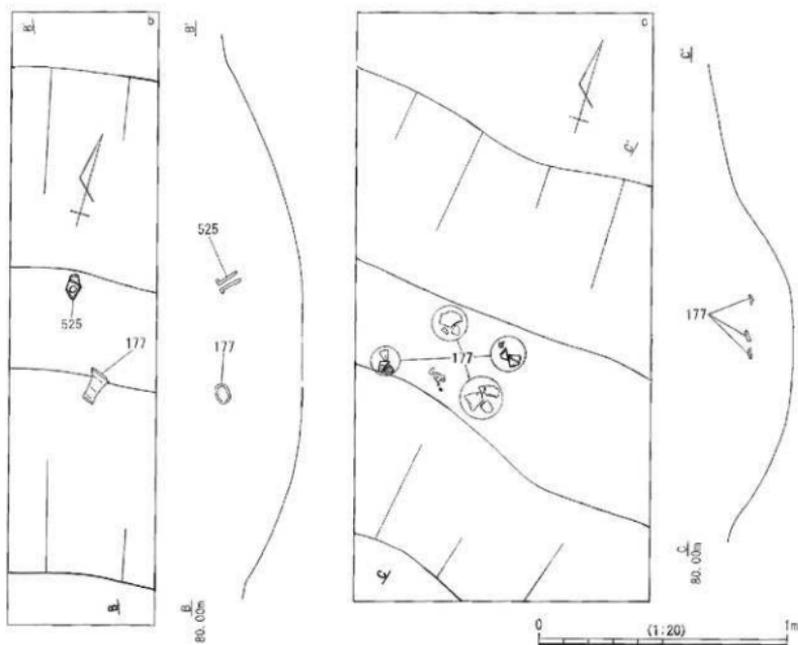
土層注記	地質	7.5YR4/6(黄土)	7.5YR4/6(周溝覆土)	7.5YR4/6(周溝覆土)	7.5YR4/6(裏込め・盛土)	7.5YR5/6(裏込め・盛土)	5YR4/6(裏込め・盛土)
I-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト						
II-2(褐色系)	褐色砂礫混じりシルト						
III-1(暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト(里込土を多く含む)						
III-2(赤褐色系)	褐色砂礫混じりシルト(里込土を多く含む)						
III-3(赤褐色系)	赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む)						

第258図 大屋敷C50号墳墳丘測量図





第260図 大屋敷C50号墳周溝遺物出土状況図①



第261図 大塚墓C50号墳周溝遺物出土状況図②

可能性が高く、胴部はやや扁平な球形で、口縁部は逆八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。口径7.3cm、胴部最大径13.1cmをはかる。長頸壺531は肩が張り鋭く屈曲する。胴部最大径15.8cmをはかる。533・534は付台長頸壺の底部で、高台は断面方形で、八字形に開く。534にはヘラ記号「-」が記されている。

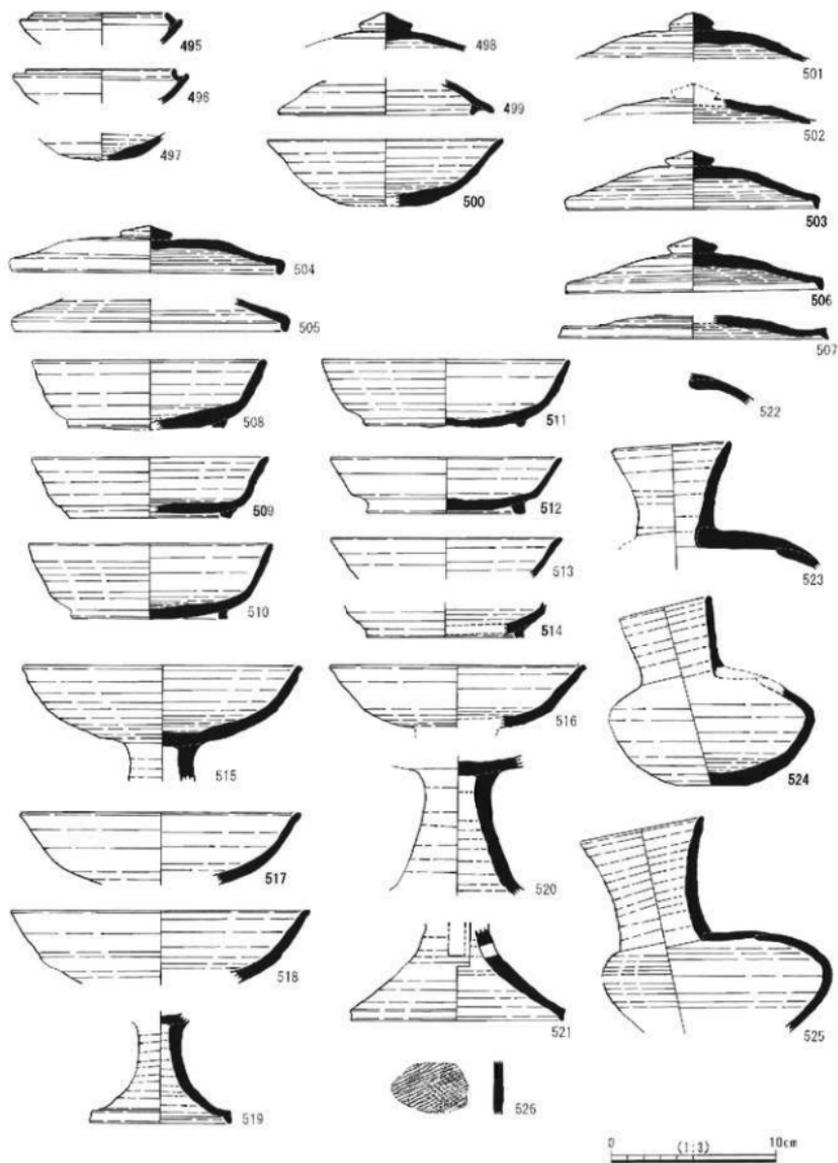
これらの須恵器は、有窓(透かし)高杯脚部が遠江Ⅳ期前半に位置づけることができ、杯身・返蓋・無台杯が遠江Ⅳ期後半、摘蓋・有台杯・長頸壺(528・531・533・534)が遠江Ⅴ期前半に位置づけることができ、平瓶・塔は遠江Ⅳ期後半～Ⅴ期前半に位置づけることができる。

なお、出土した須恵器のうち幾つかがC21号墳石室から出土した須恵器と接合しており、C50号墳の周溝から出土した須恵器の大部分はC21号墳あるいはC22号墳から流れ込んだもので、C21・C22号墳に伴う遺物である可能性が高い。これは、C21・C22号墳の石室内から出土した土器の時期幅とC50号墳の周溝から出土した須恵器の時期幅が一致することも、その証となる。

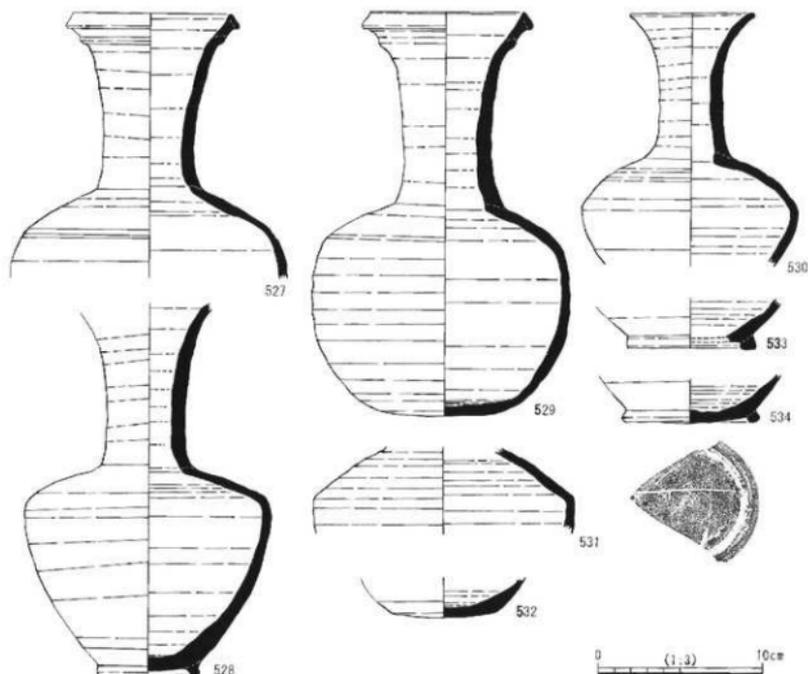
### ③埋葬施設(第264～266図, 第41表, 図版101～104)

埋葬施設は、南南東に向けて開口する横穴式石室である。横穴式石室は玄室側と前庭が盗掘等により破壊されており、奥壁の一部と玄門部分周辺が残存するに過ぎない。

天井石 原位置を保持している天井石はない。崩落した天井石は第264図中B-B'断面からD-D'断面にかけて、3石確認することができ、それらが出土した位置から天井石は玄室全体に架構されていた可能性が高い。一方、羨道および前庭では天井石と想定できる大型の石材が出土していないため不明である。天井石は板状に近い角礫を用いており、長辺80～90cm、短辺40～50cmをはかる。



第262図 大塚敷C50号埴岡清出土土器実測図①



第263図 大塚敦C50号墳周溝出土土器実測図②

玄室 玄室平面形は玄室中央の幅がやや広い、ゆるやかな胴張形を呈する。

奥壁は大型の角礫を用いて鏡石としている。

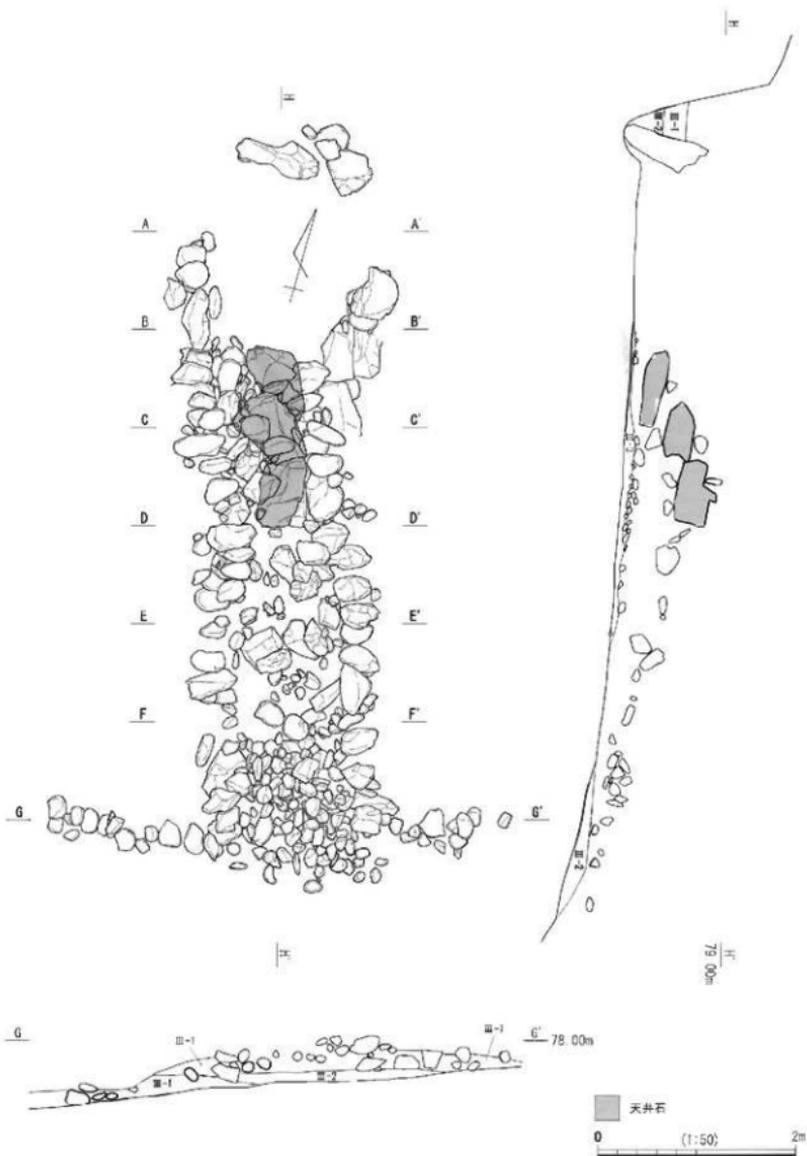
奥壁は現状では約30度内傾しているが、これは盗掘の際に押し出された結果である可能性が高く、当初は直立に近かった可能性が高い。

側壁は奥壁を扶み込むように積載しており、最大で5段、高さ約1.0m残存している。基底石に河原石を用いて長手積みし、2段目に角礫を用いている。3段目以上は円隙を用いて、小口積みしている。現状で側壁の5段目が奥壁の上部に対応しているが、本来は6段目に対応していた可能性が高い。側壁はやや乱れがあるものの各段の日地がおおよそ揃るように積載されている。

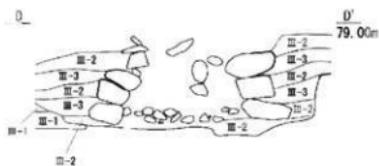
玄門は柱状の角礫を立て立柱石としており、玄室と羨道を区分する。立柱石の上部は奥壁の3段目と対応する。立柱石は側壁から0.1～0.15m突出している。立柱石の上には右側壁で1石、左側壁で2石の板状の角礫が平積みされており、天井石と立柱石の間には2石以上挟み込まれていた可能性が高い。立柱石上位の石材は1石目が側壁4段目、2石目が側壁5段目と対応する。立柱石の上位に平積みされた

第41表 大塚敦C50号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-15° 15' -W	
石室全長	7.00m	
玄室全長	3.25m	玄室最大幅 1.45m
玄室奥壁幅	0.90m以上	玄室玄門傾幅 1.25m
羨道長	2.30m	羨道玄門傾幅 1.50m
羨道玄門傾幅	1.20m	
羨道長	1.45m	
前庭入口傾幅	1.20m	

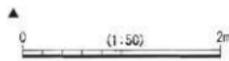


第264図 大屋敷C50号墳横穴式石室検出状況図



## 土層詳記

I-1 (暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR4/6(表土)
I-2 (暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR4/6(流入土)
II-1 (赤褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	7.5YR5/6(崩壊覆土)
III-1 (暗褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	(旧表土を多く含む)
	7.5YR4/6(崩込め・盛土)	
III-2 (赤褐色系)	褐色砂礫混じりシルト	(旧表土を多く含む)
	7.5YR5/8(崩込め・盛土)	
III-3 (赤褐色系)	赤褐色砂礫混じりシルト	(崩山土を多く含む)
	5YR4/6(崩込め・盛土)	



石材は左右両側壁とも玄室から羨道にわたされておられ、少なくとも4段目以上は玄室と羨道が同時に積載されたことがわかる。

側壁の持ち送りの角度は、C-C'断面で約10～15度内傾する。この角度が天井付近まで維持されていたとした場合、崩落した天井石の幅を考慮すると、天井の高さは床面から2m前後であった可能性が高い。羨道 羨道の平面形は玄門側、羨門側の幅がほぼ同一の長方形である。側壁は玄門と羨門側に角継が用いられ、平積みされているが、その間には主に円礫を用いて小口積みされている。側壁は最大で4段残存しており、各段の目地が通るように積載され、各段はおおよそ玄室の各段と対応している。

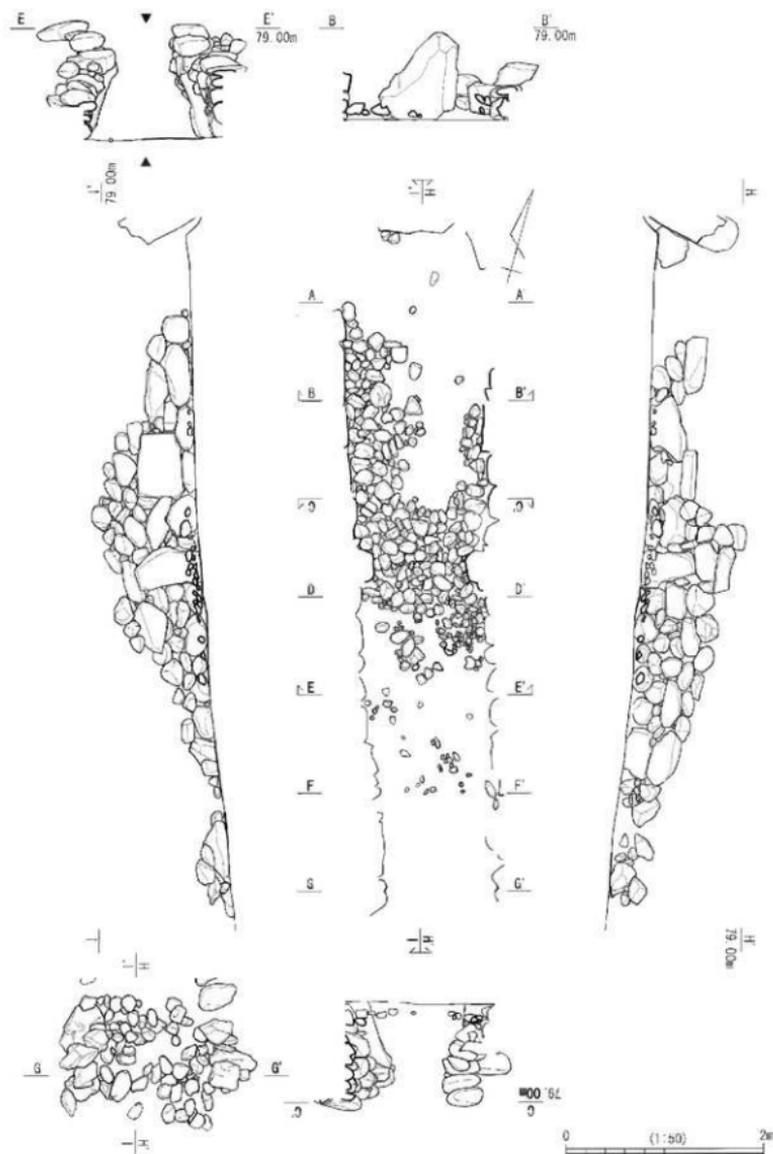
羨道の側壁の持ち送り角度は、約15～25度であり、ほぼ玄室と同じ幅の石材が天井石として架構されていたと仮定するならば、天井の高さは1.5mほどと想定でき、玄室と比較すると、低かったと推測する。

羨門は抜き取られて残存しないが、墓壇調査の結果、玄門から約2.5mの位置に立柱石が据えられていた可能性が高い。

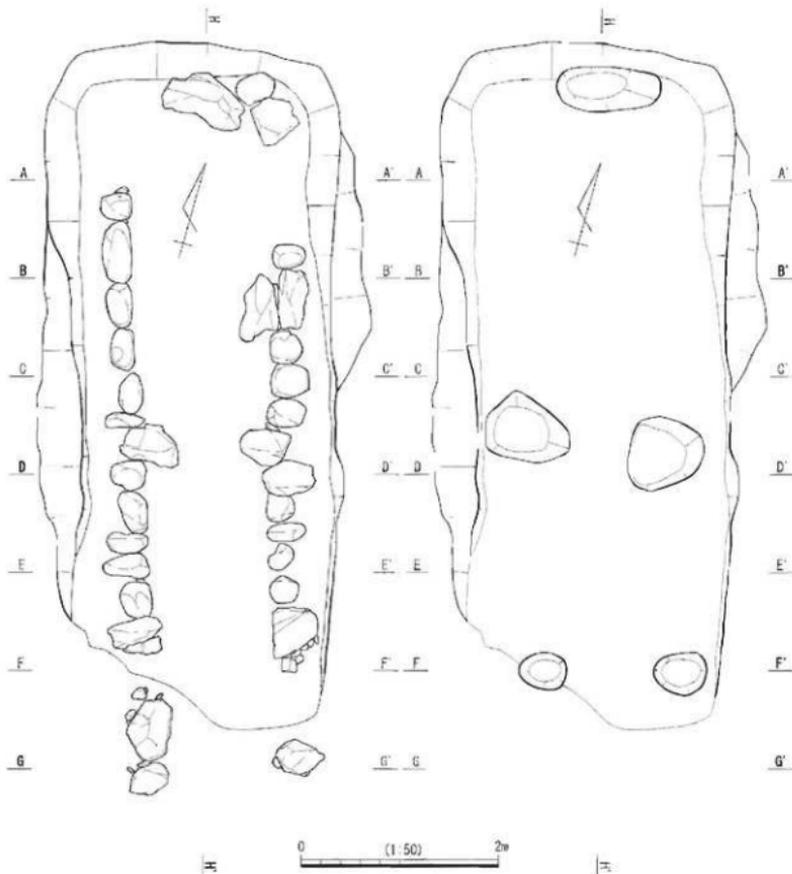
前庭 前庭は破壊が著しく行われており、残存状況は良好ではない。前庭の平面形はわずかに古墳の外側に向かって八字形に開放する台形である。角継を用いており、小口積み、長手積みともに確認できる。側壁の各段におおよそ対応している。

前庭の一番南側部分の石材に接して外護列石が積載されており、石室の構築とともに積載されたことが判明する。石室開口部に積載された外護列石(開口部石列)の蓋然性が高い。

数石 数石は玄室部分の攪乱が著しいが、玄門南側まで敷設されている。羨道の中央付近まで敷設されていた可能性が高い。使用された石材は10cm前後の小際であり、1面のみ確認することができる。数石は、墓壇床面上に5cm程度土砂を入れた上に敷かれている。



第265図 大塚数C50号墳横穴式石室および附塞石実測図

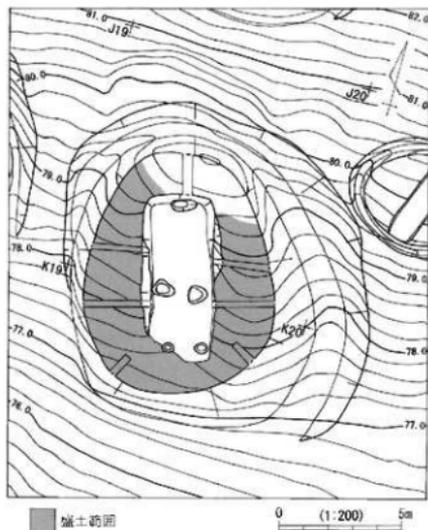


第266図 大塚敷C50号墳横穴式石室基底石および基礎実測図

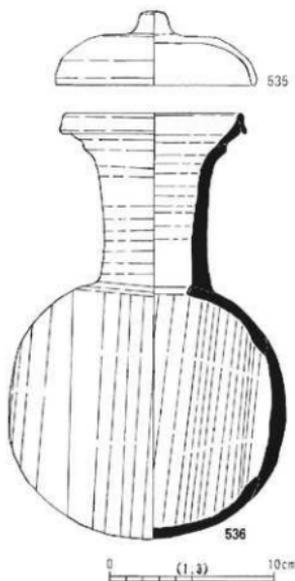
**閉塞石** 閉塞石と推測する石材(第265図左下)が前庭で確認できる。非常に乱れているが、側壁に用いられた石材よりも小型の河原石が用いられている。

**基底石** 基底石に関して玄室部分は円礫が主に用いられ、長手積みされている。玄室中央や北側で円礫が小口積みされており、この部分で石材の調整が行われたとするならば、玄室の基底石は奥壁と立柱石を設置した後、奥壁と立柱石側から中央に向かって据えられた可能性が高い。羨道の基底石は玄門、羨門に角礫を用いて、その間を円礫で埋めており、羨道中央で小口積みが確認できる。したがって、玄室同様、玄門、羨門側から並べ始め、中央で石材の長さを調整したと考えることができる。前庭は主に角礫が用いられている。

**使用石材** 基底石は、角礫が一部に用いられているが主に円礫が用いられており、長手を内側に向けて



第267図 大屋敷C50号墳盛土除去後地形測量図



第268図1 大屋敷C50号墳横穴式石室出土土器実測図

掘られている。2段目には左右両側壁ともに大型の角礫が用いられており、3段目以上は主に河原石が用いられている。

**墓壇** 墓壇は地山を標高78.1m付近まで掘削しており、現地表面から1.7m程度掘り込んでいる。墓壇の平面形はやや不整形な長方形で、南側は開放する。墓壇長7.0m、幅3.0mをはかる。墓壇床面には奥壁と、玄門、後門の立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。

基底石と墓壇の関係は、掘削した墓壇部分には羨道(羨門)まで収まっているが、前庭は、旧表土上に盛土をして墓壇床面とほぼ同じ高さにした後で、その盛土の上に設置されている。

④遺物の出土状況(第269図、図版103)

玄室の右玄門よりやや北側で須恵器フラスコ形瓶(536)が、口縁部を斜め上に向けた状態で倒置にもたれ掛けられた状態で出土した。また、右側壁側の羨道と前庭の間

の部分で土師器蓋(535)が破砕した状態で出土した。さらに、羨道の攪乱土から鉄製品(鉄鏃?, 537)が出土した。

⑤出土遺物(第268図1・2、図版165)

須恵器フラスコ形瓶1点、土師器蓋1点、鉄製品1点が出土した。

**須恵器** フラスコ形瓶(536)は胴部が球形であり、頸部はほぼ直立した後、上部で急激に外反し、段をつけさらに外反するもので、口縁端部は外側に向かって折り返され、斜めに下がる凹面となっている。口径10.5cm、胴部最大径16.7cm、器高26.0cmをはかる。

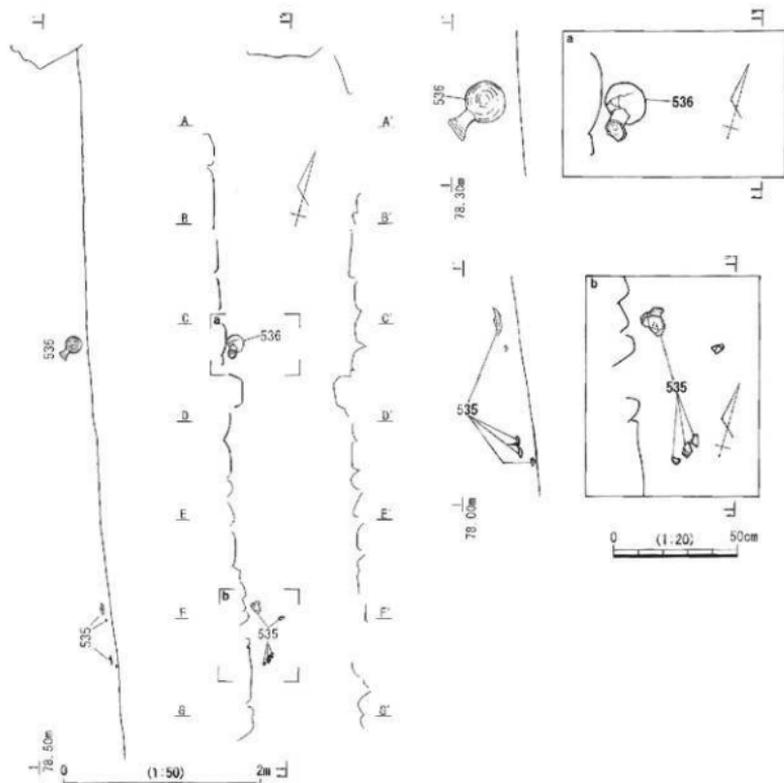
**土師器** 蓋(535)は乳頭状構みで、半球形の体部であり、口縁端部は丸く仕上げられている。外面は赤彩されている。口径11.9cm、器高4.5cmをはかる。

**鉄製品** 鉄製品(537)は、鉄鏃の頸部と推測する。残存長1.6cm、幅7mm、厚さ4mmをはかる。

⑥小結

C50号墳は、玄室より出土した須恵器は、遼江IV期後半に位置づけることができ、少なくとも7世紀後半には築造されていた可能性が高い。追葬に関しては不明である。

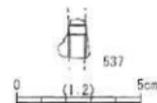
C50号墳は、古墳規模が10.3m、石室長が約7mと大屋敷C古墳群の中では大規模であり、有力な古墳のひとつで



第269図 大屋敷C50号墳横穴式石室遺物出土状況図

ある。

また、遠江では珍しく外護列石を有しており、北麓古墳群では外護列石を有する古墳は確認することができず、第5節で後述するように近隣地域では都田川流域の見徳2号墳があり、大屋敷C古墳群からやや離れた三河地域から浜名湖北岸、都田川流域を経て間接的に外護列石の情報を得ている可能性が高い。



第268図 2

大屋敷C50号墳横穴式石室出土鉄製品実測図

### (38) C51号墳

#### ①調査前の状況

周辺よりも小高くなっており、その中央には窪みが確認できた。その高まりの中央には大きな穴が掘削されており、盗掘を受けていることも明白であった。

古墳はJ21、K20・21・22グリッドに位置する。古墳の一部は調査区外に位置するが、今回の調査で

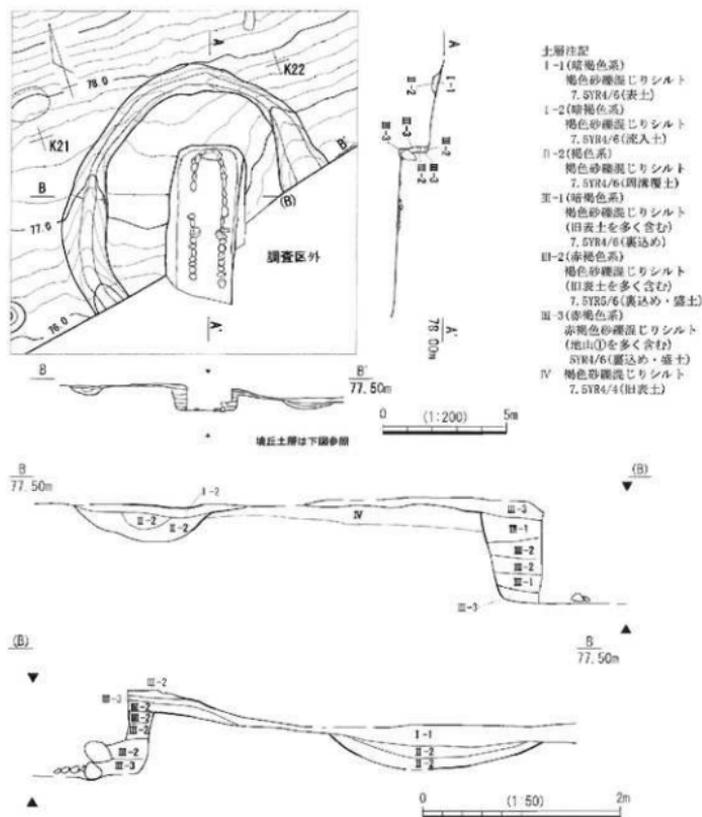
は土地所有者の許可を得て石室部分のみ調査区外まで調査した。

## ②墳丘・周溝(第270～272, 279図, 図版105・165)

周溝は調査区内にはC字形に残存しており調査区外に続く。本来は全周巡らされていた可能性が高い。周溝の規模は北側で幅1.2m、深さ0.2m、東側で幅2.0m、深さ0.4m、西側で幅1.8m、深さ0.35mをはかる。

古墳は、やや不整形な円(楕円形)墳であり、規模は周溝の内側で、南北8.7m以上、東西7.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは墳丘南側で標高76.2m前後、墳丘北側で77.6m前後であり、南側から見て現状で1.4mである。

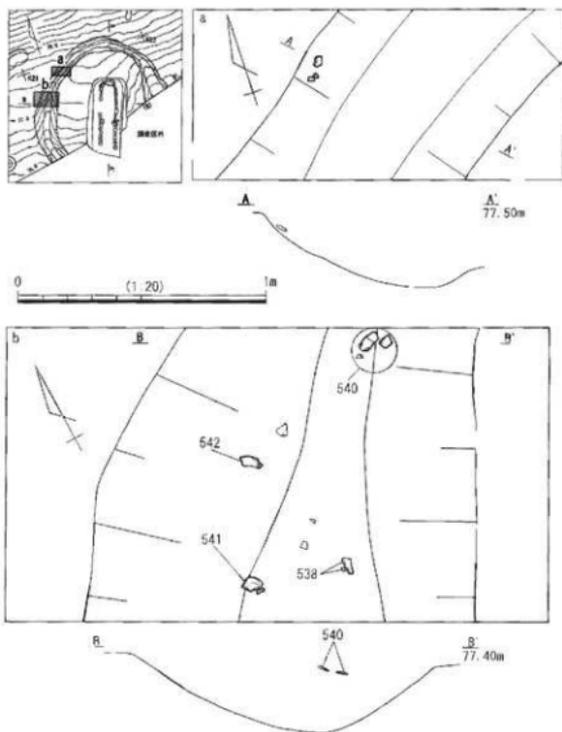
墳丘盛土は墳丘の東側と西側のみ残存しており、横穴式石室の表込めから続いて盛られている第一次墳丘である。第二次墳丘は確認できない。盛土は旧表土上に地山①・②層の混和土が盛られており、墳丘中心に向かって盛り上げられている。最大で3層、高さ約0.2m残存している。



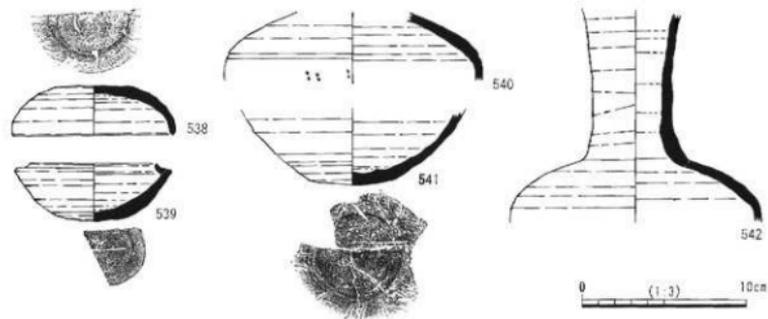
第270図 大塚遺跡C51号墳丘測量図

なお、周溝北西側から西側にかけて底面から浮いた状態で須恵器杯蓋1点(538)、杯身1点(539)、長頸壺2点(540・542)、埴1点(541)が出土した。

須恵器杯蓋(538)は半球形であり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径9.5cm、器高3.0cmをはかる。なお、天井部にはヘラ記号「-」が描かれている。杯身(539)は半球形の体部に、内傾する短いちあがりをもつ。口径7.6cm、器高3.5cmをはかる。底部にはヘラ記号「-」が描かれている。ヘラ記号は杯蓋(538)と同一であることから、本来538と539は組み合わせ関係にあった可能性が高い。長頸壺(540・542)は肩～頸部片で、540は肩が張るもので、



第271図 大塚敷C51号墳周溝遺物出土状況図



第272図 大塚敷C51号墳周溝出土土器実測図

胴部最大径は肩部にある。肩部には凹線を巡らせ、その下位に刺突文を施している。542も肩が張るもので、胴部最大径は肩部に位置する。頸部はわずかに開きながらたちあがる。ともに胴部最大径約15.5cmをはかる。埴(S41)は底部が小さいもので、やや扁平な球胴であると考えられる。底部付近には回転ヘラ削りが施されている。なお、底部には、ヘラ記号「-」が記されている。

周溝から出土した須恵器は底部より浮いた状態で出土していることからC51号墳に伴うものではなく、斜面の上位の古墳からの流れ込みと考えることができる。杯類に描かれたヘラ記号が「-」であることを考慮すると、C46号墳から出土した須恵器杯類に「-」が多いことから、C46号墳に伴う遺物である可能性が有力である。

なお、これらの須恵器は遠江Ⅳ期前半に遡る可能性があるものの、遠江Ⅳ期前半～後半に位置づけることができる。C46号墳の石室内から出土した須恵器と同時期であり、上記の想定を裏付けることができる。

### ③埋葬施設(第273～276回, 第42表, 図版105～108)

埋葬施設は古墳のほぼ中央に築造された、単室系擬似両袖式横穴式石室であり、南南西に向かって開口する。玄室北側半分は盗掘が行われており、大部分が破壊されている。

天井石 原位置を保持する天井石はない。崩落した天井石は、図中C-C'断面付近で確認することができる。一方で羨道部分には確認することができないことから、少なくとも玄室部分には天井石が架構されていたことが判明する。

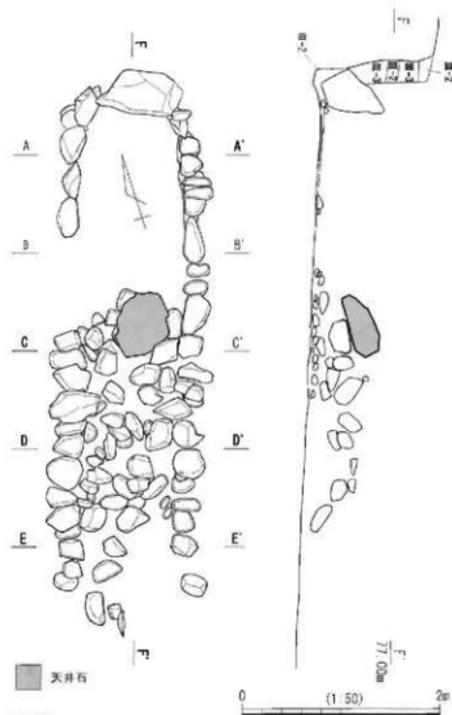
天井石は板状の角礫が用いられており、幅0.7m、長さ0.6mをはかる。

玄室 玄室平面形は玄室中央の幅がやや広い胴張形である。

奥壁は大型の角礫を用いて築石としている。奥壁は約5度内傾して樹立されている。

側壁は奥壁を挟み込むように積載され、最大4段、高さ0.8m残存する。基底石は長手を内側に向け据えられており、2段目以上は長手積みと小口積みとがともに確認できる。各段はほぼ目地が通るように積載されている。側壁5段目は残存していないが、5段目が奥壁の上部と対応する。

玄門は角礫を用いて立柱石としてお



土層注記  
 Ⅱ-2(赤褐色系) 褐色砂礫層じりシルト(田表土を多く含む)  
 7.5YR5/6(裏込め)  
 Ⅲ-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫層じりシルト(地山①を多く含む)  
 5Y04/6(裏込め)

第273回 大塚遺C51号墳横穴式石室検出状況図

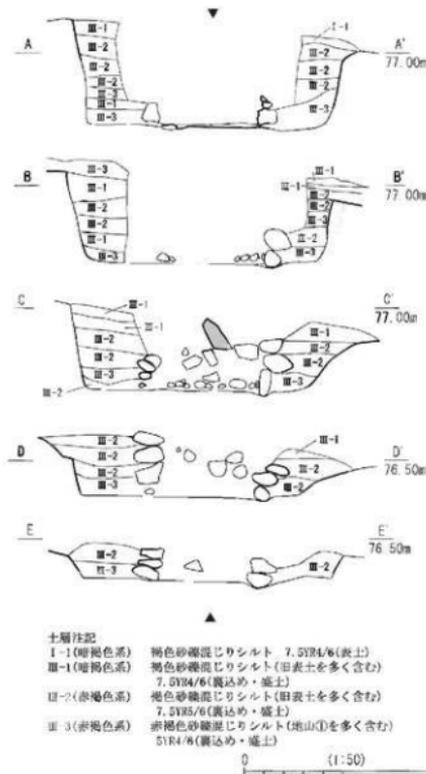
り、立柱石は側壁から0.2m突出する。立柱石の上位には角礫が平積みされており、天井石との間に少なくとも1石は挟み込まれていたことが判明する。立柱石は側壁4段目と対応し、立柱石の上に平積みされた石材は側壁5段目、奥壁と対応する。立柱石上に平積みされた石材は玄室から羨道に亘って架けられており、少なくとも5段目以上は羨道と玄室が同時に積載されたことが判明する。

側壁の持ち送りは、C-C'断面で約10度内傾する。

羨道 羨道の平面形は羨門側、玄門側ともにほぼ幅が等しい長方形である。羨道幅は玄室幅とほぼ等しい。

第42表 大塚数C51号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-17° 57' -W	
石室全長	5.20m以上	
玄室長	2.80m	玄室最大幅 1.10m
玄室奥幅	0.65m	玄室玄門幅 1.10m
羨道長	2.40m以上	羨道玄門幅 0.85m
羨道羨門側幅	1.10m前後	



基礎石は主に長手を内側にに向けており、2段目以上は小口積みするものが多く、各段の日地が通るように積載されている。各段の日地は玄室の日地とほぼ水平である。羨道側壁4段目と立柱石が対応する。また、羨道の持ち送りの角度は約10度である。

敷石 床面に敷石が玄門部分まで敷設されている。1面のみ確認することができる。羨道にはまったく確認できない。使用された石材は10cm以下の小礫である。

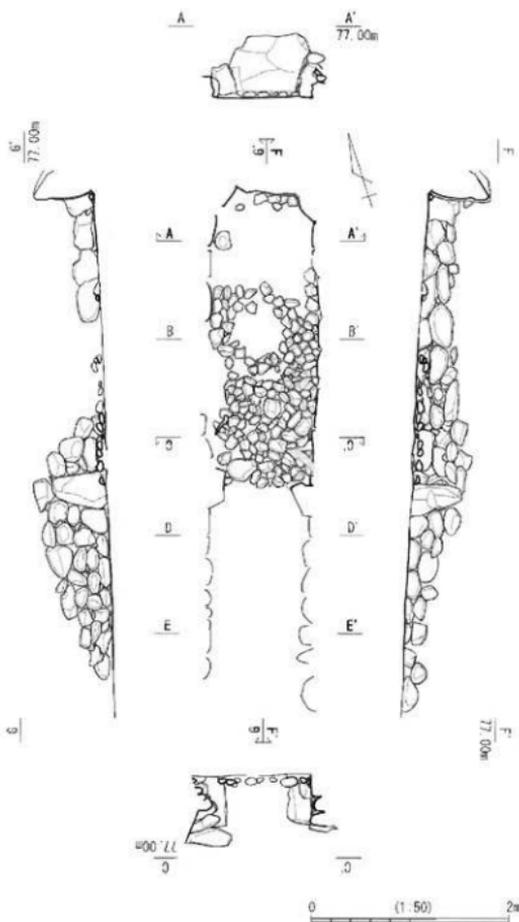
閉塞石 閉塞は玄門部分で河原石を積み上げることにより行われている(第276図)。積載方法は、河原石の長軸を石室の主軸に平行させ、3段積み上げている。使用された河原石は30cm前後の大きさである。

基礎石 基礎石に関して玄室の左側壁は角礫を上を用いて長手を内側に向けており、右側壁は河原石を主に用いて長手を内側に向けている。羨道は主に河原石を用いており、小口を内側に向けているものと長手を内側に向けているものを確認することができる。使用石材 側壁に使用された石材に関して玄室・羨道ともに河原石を主に用いており、角礫は長手積み、河原石は小口積みが多い。

**墓壇** 墓壇は地山を標高76.2m付近まで掘削し、現地表面から1.2m掘り込んでいる。墓壇の平面形は南側が流出しており明瞭ではないが、長方形である。規模は墓壇長65m以上、幅2.75mをはかる。墓壇肩部分は緩やかな斜面となっており、裏込めの土砂をつめる時に削られたかあるいは石材を石室内に引き入れる際に削られた可能性が高い。

墓壇の底面には奥壁および立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。また、左側壁を据えるための小土坑が幾つか掘削されている。

基底石は墓壇のやや東側に偏っている。



第274図 大塚敷C51号墳横穴式石室夫測図

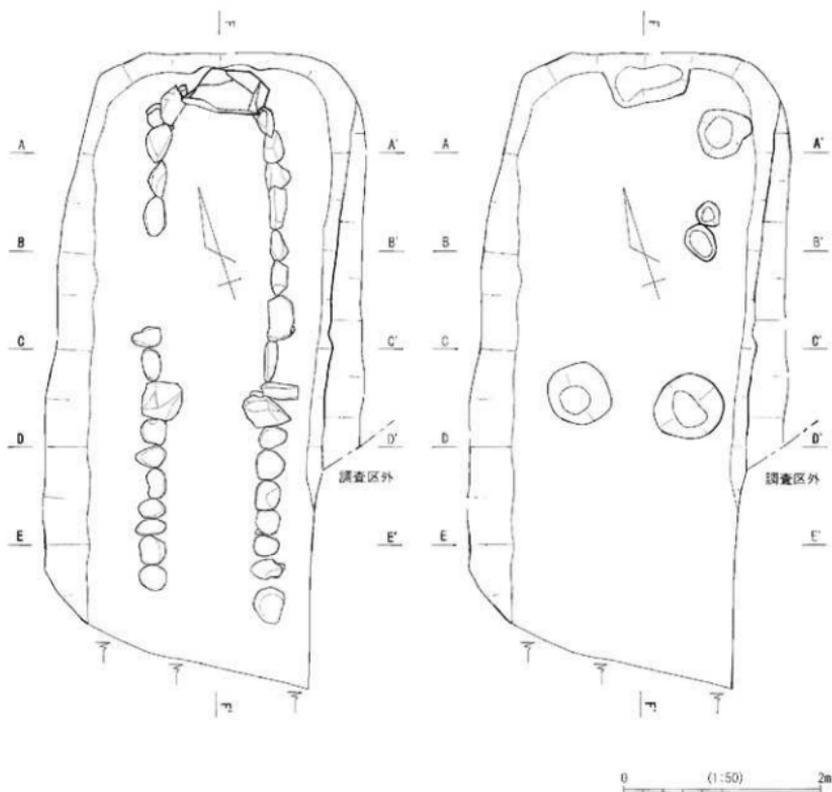
④遺物の出土状況(第276図、図版107)

玄室右立柱石の部分から須恵器平瓶1点(543)が横置された状態で出土した。また、玄室中央付近から須恵器高杯1点(544)が杯部を下に向けた状態で出土した。さらに、羨道の閉塞石の南側で鉄鏝1点(547)が切先を東側に向けた状態で出土した。このほか覆土中より須恵器長頸壺片(545)と、玄室の掘乱土を水洗したところガラス小玉1点(546)が出土した。

⑤出土遺物(第277・278図、図版165・166)

須恵器平瓶1点、高杯1点、長頸壺1点、ガラス小玉1点、鉄鏝1点が出土した。

須恵器 須恵器平瓶(543)は、口縁部は逆八字形に開き、口縁端部は丸く仕上げられている。胴部は肩が張り、底部に向かって窄まり、底部は平底である。胴部下半には、回転ヘラ削りが施されている。口径7.3cm、胴部最大径14.3cm、器高16.5cmをはかる。高杯(544)は無蓋高杯と推測する。杯底部～脚部の破片である。長頸壺(545)は、肩部破片で、肩は張り鋭角である。胴部最大径16.2cmをはかる。



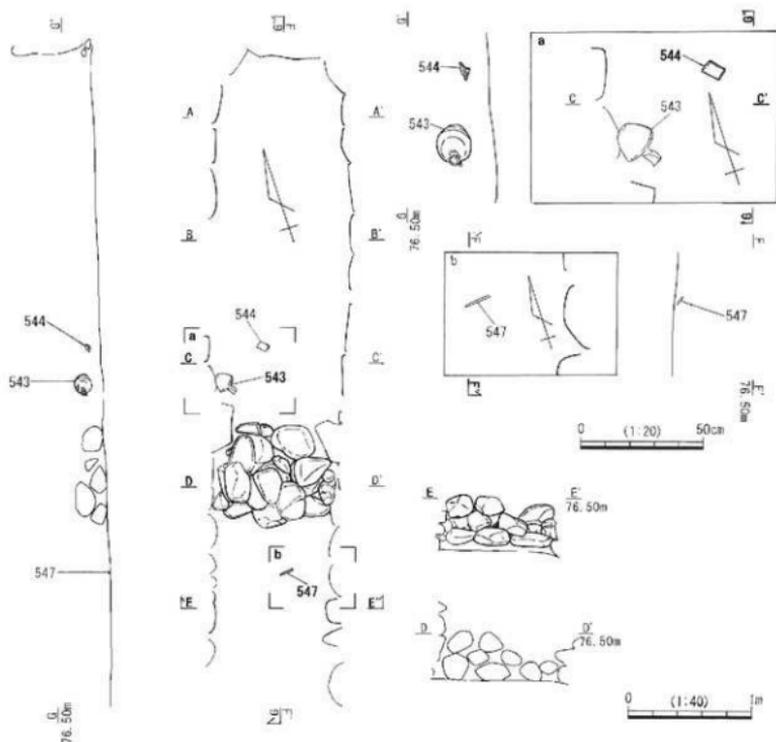
第275図 大屋敷C51号墳横穴式石室基礎石および基礎実測図

玉類 ガラス小玉(546)は、紺色透明で、直径5.5mm、高さ3mm、孔径1.5mmをはかり、重量は1g以下である。C19号墳、C42号墳から出土したガラス小玉と同様の法量・特徴である。

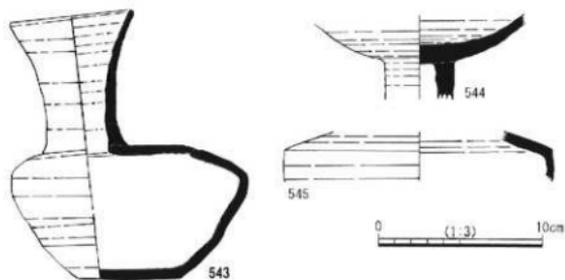
鉄製品 鉄鏃は鏃身無間の尖根撃箭式鉄鏃であり、茎間は棘間(方形突起間)である可能性が高い。残存長12.3cmをはかる。鏃身は片丸造りで、鏃身長7mm、幅6mm、厚さ2mmをはかる。頸部は断面長方形で、残存長9.2cm、幅5mm、厚さ3mmをはかる。茎断面は方形で、残存長1.4cm、幅・厚さ3mmをはかる。

#### ⑥小結

C51号墳は、出土した須恵器は遠江Ⅳ期後半～Ⅴ期前半に位置づけることができ、平瓶(543)がⅣ期後半に位置づけることができるならば、7世紀後半に築造された可能性が高い。545が遠江Ⅴ期前半に位置づけることができ、8世紀前半に追葬された可能性がある。したがって、遠江Ⅳ期後半に築造され、8世紀前半に追葬が行われた可能性がある。



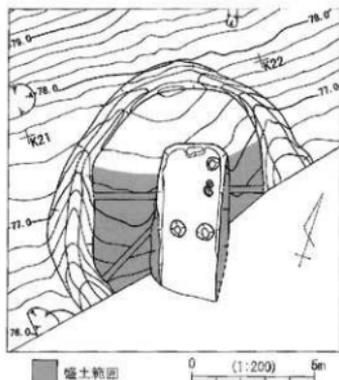
第276図 大屋敷C51号墳横穴式石室閉塞石および遺物出土状況図



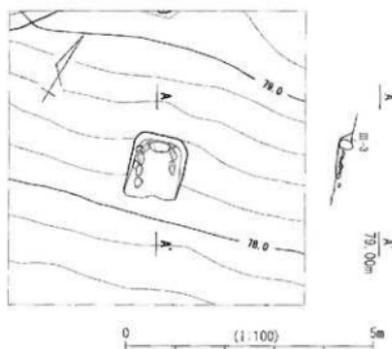
第277図 大屋敷C51号墳横穴式石室出土土器実測図



第278図 大屋敷C51号墳横穴式石室出土玉類・金属製品実測図



第279図 大塚敷C51号墳掘土除去後地形測量図

土層注記  
III-3(赤褐色系) 赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む)  
SYR4/6(掘込め・盛土)

第280図 大塚敷C52号墳地形測量図

## (39) C52号墳

## ①調査前の状況

調査前には古墳の存在は全く確認できず、表土除去後石材が集中することで確認した。

古墳はK17グリッドに位置している。

## ②墳丘(第280図, 図版108)

盛土・周溝とも確認できない。石室の規模を考慮すると、元米周溝は巡らされず、石室を覆う程度の墳丘のみであった可能性が高い。

## ③埋葬施設(第281図, 第43表, 図版108)

埋葬施設は、南南東方向に開口する小型の横穴式石室であり、無袖式であった蓋然性が高い。

奥壁、側壁の基底石のみの検出であり、石室の南側部分は流出しているか、あるいはC34号墳のように短小である可能性がある。

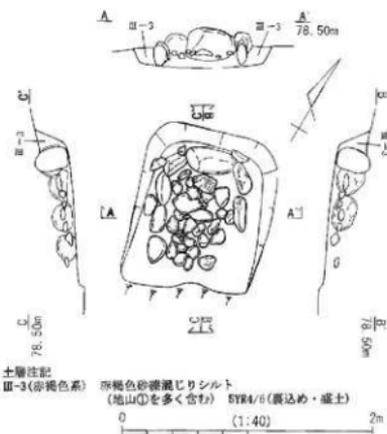
石室 玄室平面形は入口側よりも奥壁側が窄まる奥窄まり形である。

奥壁はやや大型の河原石を用いて鏡石としており。奥壁は約15度内傾している。

側壁は奥壁を挟み込むように積載されており、1段のみ残存している。すべて河原石が用いられており、長手を内側に向けて据えられている。奥壁と高さはほぼ揃えられている。

敷石 石室内全体に敷石が敷設されており、1面のみ確認することができる。使用された石材は10cm以下の小礫である。

使用石材 奥壁・側壁に使用された石材はすべて河原石である。



第281図 大塚敷C52号墳横穴式石室実測図

第43表 大塚敷C52号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-31°26'-W	
石室全長	0.75m以上	
玄室長	0.75m以上	玄室最大幅 0.60m
玄室奥壁幅	0.40m	

墓壇 墓壇は地山を標高78.2m付近まで掘削しており、現地表面から0.3mほど掘り込んでいる。墓壇平面形は南面が流出しており南側の状況が不明であるが、残存する部分は隅丸長方形である。墓壇規模は残存長1.3m、幅1.1mをはかる。墓壇床面には、石材を据えるための土坑は掘削されていない。また、石室は墓壇の主軸からややずらして設置されているが、墓壇のほぼ中央に納められている。

#### ④出土遺物

石室内から出土した遺物はない。

#### ⑤小結

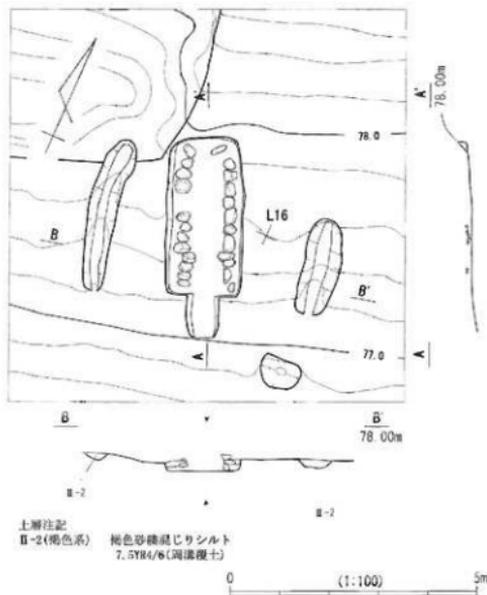
C52号墳は、出土遺物がなく築造時期は特定できないが、大屋敷C古墳群内の小型の横穴式石室は遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期前半に位置づけることができることからC52号墳も遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期前半に築造された可能性が高く、Ⅴ期前半の方が蓋然性が高い。

また、C52号墳は南側部分が残存していたとしても横穴式石室は小型であったと想定でき、大人の伸展葬はほぼ不可能に近いと想定できることから、改葬骨や火葬骨が納められた可能性を想定しておく必要がある。

### (40) C53号墳

#### ①調査前の状況

調査前には、古墳の存在を推測させるような高まりは確認することができず、表土除去後に石材が集中することで確認した古墳である。



第282図 大屋敷C53号墳増丘測量図

古墳はK15・16、L15・16グリッドに位置する。

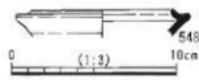
#### ②増丘・周溝(第282・283図、図版109、166)

盛土は流出しており、確認することができなかった。

周溝はC字形に巡らされていたと推測するが、北側部分が掘削のため破壊され、西側と東側のみ検出した。周溝は東側で幅0.7m、深さ0.2m、西側で幅0.6m、深さ0.2mをはかる。

古墳は円墳であり、古墳規模は周溝の内側で南北3.5m以上、東西4.0mをはかる。古墳の見かけ上の高さは増丘南側で標高77.0m前後、増丘北側で78.0m前後をはかり、現状で南側から見て1.0mである。

なお、増丘の表土より須恵器杯身



第283図 大屋敷C53号墳増丘出土土器実測図

片(第283図548)が出土した。斜面上部のC17号墳やC18号墳から流れ込んだ可能性が高い。

杯身(548)は、内傾する短い立ち上がりで、口径8.5cmをはかる。この杯身は遠江IV期前半～後半に位置づけることができる。

③埋葬施設(第284～286図, 第44表, 図版109～111)

埋葬施設は、古墳のほぼ中央に築造された、南南東に開口する単室系擬似兩袖式横穴式石室である。玄室の奥壁側部分が攪乱により破壊されている。

天井石 天井石は原位置を保持するものはない。崩落した天井石はB-B'断面付近で1石確認することができる。幅0.5m、長さ0.3mをはかる角礫である。天井石は玄室部分には架構されていた可能性が高い。

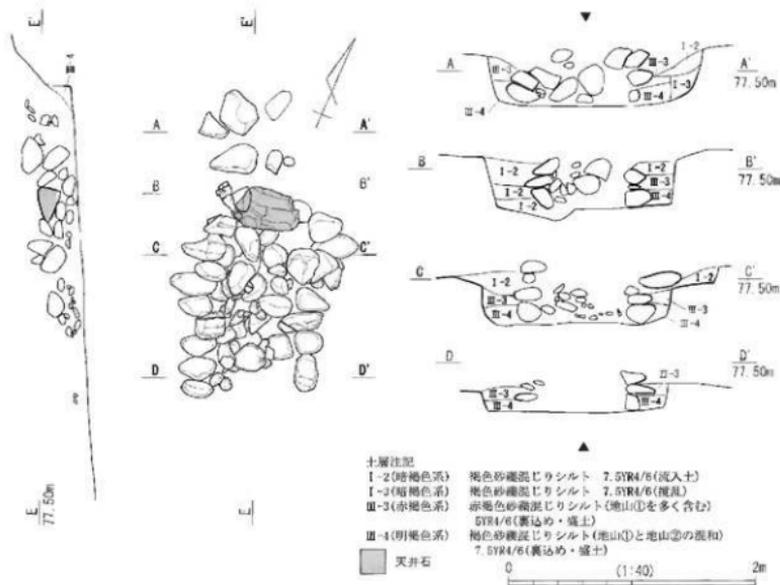
玄室 玄室平面は玄門側から石室中央部まではほぼ同幅で、奥壁側が窄まる奥室まり形を呈している。

奥壁は攪乱のため既に失われており、側壁との関係は不明であるが、側壁が奥壁を挟み込むように積載されていた可能性が高い。

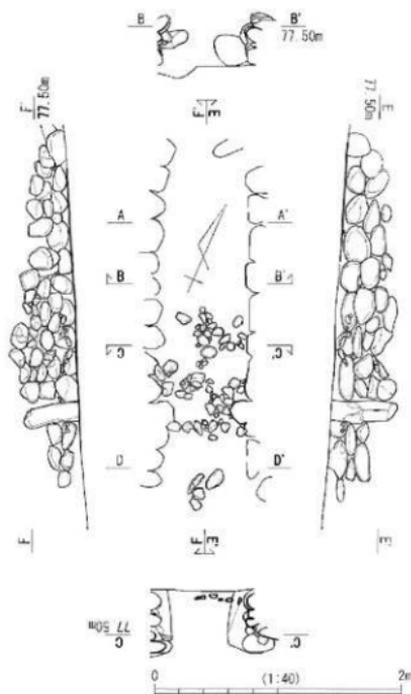
側壁は最大4段、高さ0.5m残存している。側壁は各段の目地が通るように積載されている。玄室の基底石は左側壁に長手を内側に向けるものが多く、右側壁に小口を向けるものが多い。2段目以上は小口積みが多い。側壁の持ち送りの角度は約5～10度内傾しており、5段目以上もこの角度で持ち送られ

第44表 大塚敷C53号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-23° 24'-W		
石室全長	2.80m前後	玄室最大幅	6.80m
玄室長	2.00m前後	玄室玄門間幅	0.73m
玄室奥壁幅	0.60m以下	羨道長	0.80m
羨道長	0.80m	羨道玄門間幅	0.80m



第284図 大塚敷C53号墳横穴式石室検出状況図



第285図 大層敷C53号墳横穴式石室実測図

ていたと仮定すれば、天井までの高さは約1m程度であった可能性が高い。

玄門は柱状の角礎を立てて立柱石とし、側壁より0.1~0.15m内側に突出させている。立柱石は側壁4段目と対応している。

羨道 羨道は左右ともに3石分積載されている。平面形は古墳外に向かってハ字形に開く台形であり、羨道というよりは前庭側壁として機能していたと推測できる。羨道の幅は玄室の幅とほぼ同幅である。各段の目地は通るように積載されている。羨道と玄室の側壁各段はほぼ水平であり、ほぼ同時に積載された可能性が高い。羨道の積載方法は基底石に小口積みが多く、2段目以上は長手積みが多い。

敷石 攪乱のため奥壁側は確認できないが、敷石は玄室中央から玄門まで確認することができる。本来は玄室内全体に敷設されていた可能性が高い。羨道部分には敷設されていない。敷石に使用された石材は10cm以下の小礫であり、1面のみ確認することができる。

基底石 基底石は内礎が用いられて

おり、左側壁側に長手積みが多く、右側壁側に小口積みが多い。羨道は小口を向けるものが多い。

使用石材 石室は立柱石を除いて河原石を用いて構築されている。

墓域 墓道 墓域は地山を標高77.3m付近まで掘削しており、現地表面から0.6m程度掘り込んでいる。墓域北側の上部は攪乱のため破壊されているが、墓域の平面形は長方形であり、細い墓道へ続く。墓域規模は、墓域長3.2m、墓域幅1.5mをはかる。墓域底面には立柱石を据えるための小土坑が掘削されている。基底石は墓域の中央に設置されている。

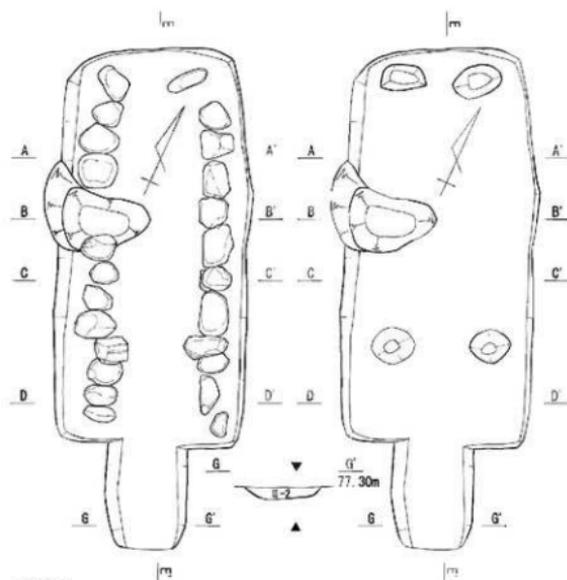
墓道は南南東に向かって伸延する。墓道長0.85m、幅0.65m、深さ0.1mをはかる。

#### ④遺物の出土状況(第289図, 図版111)

玄室内より床面上で土師器甕1個体分(550・551)が細片に破砕した状態で玄室内に散乱して出土した。土師器甕片は玄室中央部と玄門付近から多く出土している。また、右側壁の玄門付近より台付長頸壺(549)が口を南側に向け横伏で出土した。さらに、鉄製品(552)が羨道の覆土から出土した。

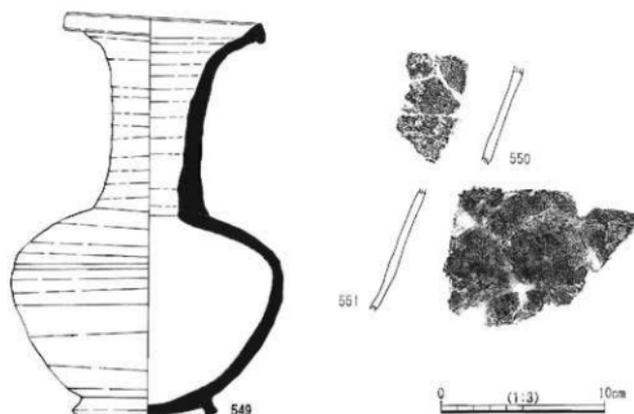
#### ⑤出土遺物(第287・288図, 図版166・167)

土師器甕1点分、須恵器台付長頸壺1点、羨道覆土上部より鉄製品1点が出土している。



土層注記  
II-2(褐色系) 褐色砂礫質ヒリシント  
7.5YR4/6(測深機土)

第286図 大屋敷C53号墳横穴式石室基礎石および基礎実測図

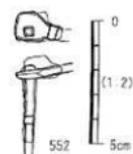


第287図 大屋敷C53号墳横穴式石室出土土器実測図

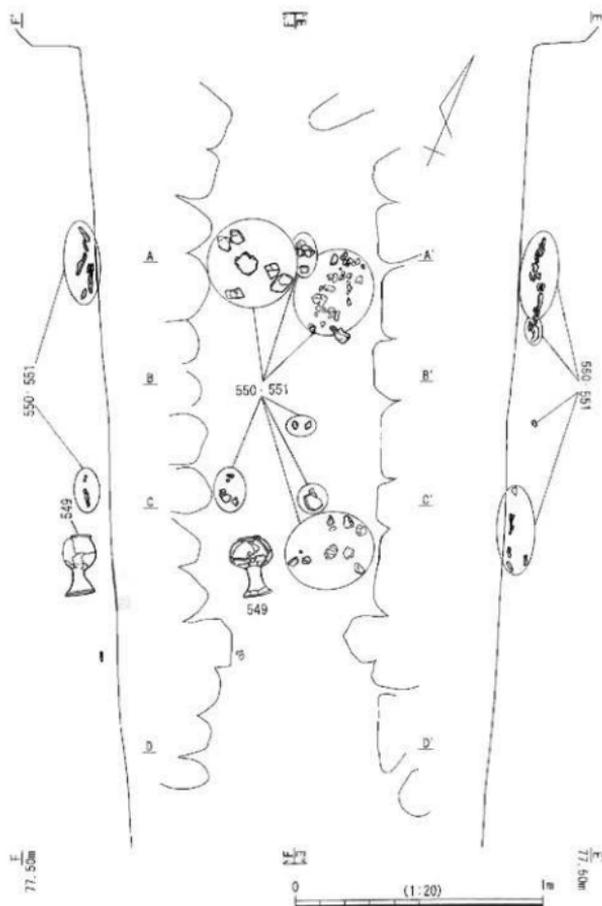
須恵器 台付長頸壺 (549)は、やや扁平な球形の胴部で、胴部最大径は中位よりやや上にある。胴部最大径部分に凹線が巡らされている。口縁部は頸部から直立し、上部で急激に逆ハ字形に開き、口縁端部は外側に折り返され、外傾する斜面に仕上げられている。高台はハ字形に開き、端部は横ナデし肥厚させられている。胴部下半には回転ヘラ削りが施されている。口径11.5 cm、胴部最大径16.4 cm、高台径8.1 cm、器高24.3 cmをはかる。

土師器 甕は同一個体であり、石室内から小片となって出土している。丹念に接合したが、破断面が摩滅しており接合は困難であり、破片のうち残りのよいもの2点(550・551)を図示した。出土した破片の中には口縁部や底部はなく、それらの形状は不明である。

550・551は外面には



第288図 大屋敷C53号墳横穴式石室出土土器製品実測図



第289図 大塚遺C53号墳横穴式石室遺物出土状況図

ハケ調整が施され、内面にもハケ調整が施されている。

**鉄製品** 鉄製品(552)は用途不明である。X線写真を観察すると、L字形に交差しており、箇中縦位の棒状のものが横位の鉄製品の頭部分に嵌め込まれているようにみえる。縦位の鉄製品の長さ3.0cm、断面は方形で幅5mm、厚さ3mmをはかる。横位の鉄製品は長さ1.8cm、頭部幅1.1cm、棒状部幅5mm、厚さ3mmをはかる。552は、古墳時代の遺物である可能性は低い。したがって、C53号墳に伴う遺物ではなく、後世に何らかの形で入れ込んだ遺物である可能性が高い。

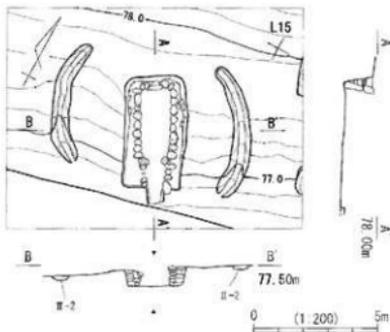
#### ⑥小結

C53号墳から出土した須恵器から遼江V期前半に位置づけることができ、8世紀前半に築造された可

能性が高い。

また、C53号墳は、玄室長が2.0mと短小であり、大人の仲俣葬は難しく、改葬骨や火葬骨を納めた可能性も想定すべきである。その場合には、玄室に納められた土師器甕が骨蔵器として用いられた可能性が高いといえる(第5節参照)。

さらに、羨道は短いながらも立柱石を立てることにより玄室と羨道を区画しており、C53号墳の築造者もC26号墳の築造者同様、立柱石を立て玄室と羨道を区画することに固執しているといえる。



土層注記  
II-2(褐色系) 褐色砂礫混じりシルト 7.8YR/6(周溝埋土)  
第290図 大塚敷C54号墳墳丘測量図

#### (41) C54号墳

##### ①調査前の状況

調査前には高まりや窪みは確認することはできず、表土除去後石材が集中することで確認した古墳である。墓道の南側は崖面に向かって伸びているため危険であることから、調査していない。

古墳はL14・15グリッドに位置しており、3区古墳の中では最も西側に位置する。この西側にはC6～C54号墳が築造されたような緩い斜面があるものの、一切古墳は築造されていない。

##### ②墳丘・周溝(第290図、図版112)

墳丘盛土は流出しており、確認できない。

周溝は北側と南側は失われており、東西のみ残存する。本来は円形に巡らされていた可能性が高い。周溝規模は東側で幅0.8m、深さ0.2m、南東側で幅0.8m、深さ0.1m、北西側で幅0.6m、深さ0.1m、西側で幅0.7m、深さ0.2mをはかる。

古墳は円(楕円形)墳であり、周溝の内側で南北6.4m以上、東西6.4mをはかる。古墳の見かけ上の高さは、墳丘南側で標高76.6m前後、墳丘北側で標高77.8m前後であることから、現状で南側から見て1.2mである。

なお、周溝や墳丘から遺物は出土していない。

##### ③埋葬施設(第291～293図、第45表、図版112～114)

埋葬施設は、南南東に向かって開口する、単室系擬似両袖式石室である。

天井石 原位置を保持する天井石はない。崩落した天井石は奥壁側から玄門付近までに5石確認できる。

架構されていたおおよその位置が判明する。天井石には角礫が用いられており、奥壁側から1石目は長辺0.7m、短辺0.45m、2石目は長辺0.9m、短辺0.5m、3石目は長辺1.0m、短辺0.45m、4石目は長辺0.8m、短辺0.45m、5石目は長辺0.7m、短辺0.3mをはかる。天井石は玄室中央に向かって幅(長辺)の広い石材が用いられていたことが判明する。5石の長さを足すと、約2.15mであり、奥壁が内傾していることを考慮しても玄室の2/3程度しか覆うことはできない。したがって、玄室全体を覆っていた石材は少なくとももう1～2石存在しており、天井石は6～7石であった可能性が高い。

玄室 玄室平面形は奥壁側の幅が広く、玄門側の幅がやや狭く、側壁が緩やかに彎曲する長台形あるい

第45表 大塚敷C54号墳横穴式石室規模

主軸方位	N-28° 12' -E	玄室最大幅	1.35m
石室全長	4.30m	玄室玄門間幅	0.95m
玄室長	2.60m	羨道長	0.80m
玄室奥壁幅	1.15m		
羨道長	1.50m		
羨道玄門間幅	0.70m前後		

は副張形である。

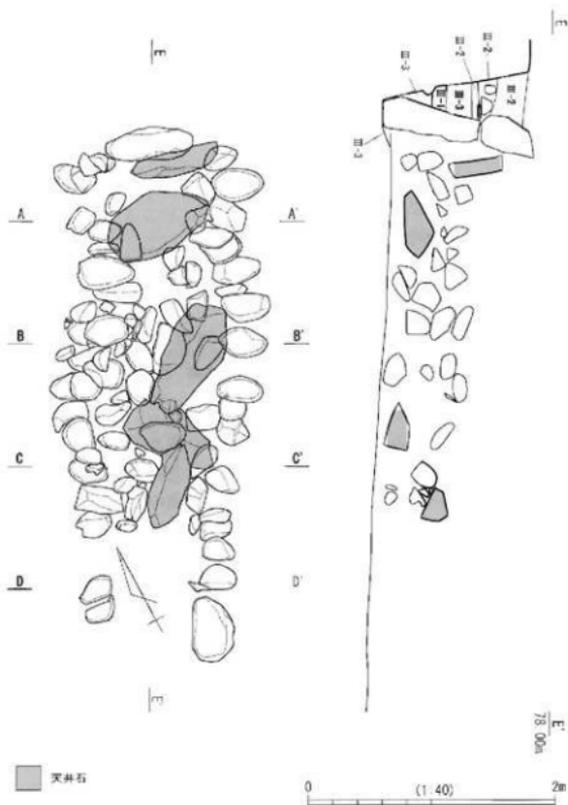
奥壁は2段、1.25m残存している。2段ともに板状の石材を用いて積載されるが、1段目の鏡石の左右には円礫が2列5段ずつ積載されている。1段目の角礫は上側が広い逆台形であり、2段目の角礫は横長に積載されている。奥壁は約10度内傾する。

側壁は奥壁に接するように積載され、7段、高さ約1.2m残存する。基底石は長手を内側に向けて設置され、2段目以上は小口積みされている。また、1・2段に大きい石材が使用され、3段目以上に小型の石材が用いられる傾向にある。側壁4段目が奥壁1段目に、側壁7～8段目が奥壁2段目に対応する。側壁は2段目まではほぼ水平に積載される。3段目以上に関して目地が通るように積載されるが、玄門に向かって下方へ傾斜する。

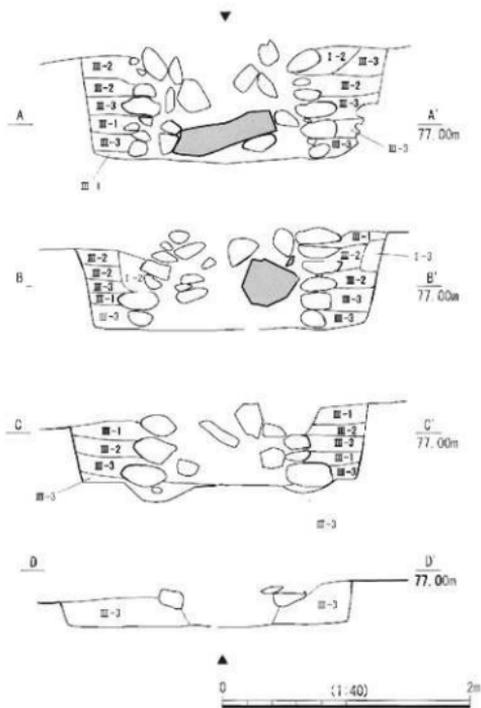
側壁の持ち返りは、A-A'断面で約15度、B-B'断面で約5～15度、C-C'断面は約5～10度である。この持ち返りが上段まで続いており、天井石を側壁の上に架構するための「代」の部分が両側0.1m程度と仮定するならば、天井の高さは奥壁側で1.7m程度、中央で1.9m程度、玄門側で1.7m程度であった可能性が高い。また、天井は水平ではなく、ドーム形であった可能性が高い。

玄門には柱状の角礫を用いて立柱石としており、側壁より0.1～0.25m突出させている。右立柱石は側壁5段目、左立柱石は4段目と対応している。

羨道 羨道は4石分残存しており2段残存している。羨道の平面形は羨門側に向かって幅を狭める逆台形である。羨道幅は支室幅よりもやや狭くなっている。側壁は水平に積載されるが、羨道1段目が支室



第294図 大塚遺跡C54号墳横穴式石室検出状況図



## 土層注記

- |            |                       |               |
|------------|-----------------------|---------------|
| 1-2(暗褐色土)  | 褐色砂礫混じりシルト            | 7.5YR4/6(流入土) |
| 1-3(暗褐色土)  | 褐色砂礫混じりシルト            | 7.5YR4/6(混乱)  |
| II 1(暗褐色土) | 褐色砂礫混じりシルト(田表土を多く含む)  | 7.5YR4/6(混込め) |
| II-2(赤褐色土) | 褐色砂礫混じりシルト(田表土を多く含む)  | 7.5Y2S/6(混込め) |
| II-3(赤褐色土) | 赤褐色砂礫混じりシルト(地山①を多く含む) | 5YR4/6(混込め)   |

## ④遺物(第294・295図, 図版167)

玄室内部は天井石が崩落する前に攪乱されており、遺物は攪乱土内から出土した。

出土遺物は、鉄製釘5点(554~558)である。また、石室崩落より須恵器高杯(553)が出土した。

**須恵器** 高杯(553)は半球形の杯部であると推測でき、脚部に透かしは施されないものである。

**鉄製品** 鉄釘5点(554~558)のうち、頭部が残存するのは2点(554・555)である。554はT字形の頭部で、L字形に折り曲げられている。頭部長5mm以上、幅9mm以上、厚さ3mmをはかる。釘身の断面は方形であり、ほぼ同じ太さである。幅4mm、厚さ3mmをはかる。554の釘身は釘身に直交して木質が残存している。555もT字形の頭部であり、L字形に折り曲げられている。頭部長4mm、幅1.0cm前後、厚さ2mmをはかる。釘身の断面は方形であり、釘先に向かって先細る。幅5mm、厚さ5mmをはかる。556~558は釘身破片であり、556・558は上記の554・555と同じ太さであるが、557は一辺6mmとやや太く、C42号

2段目に対応する。

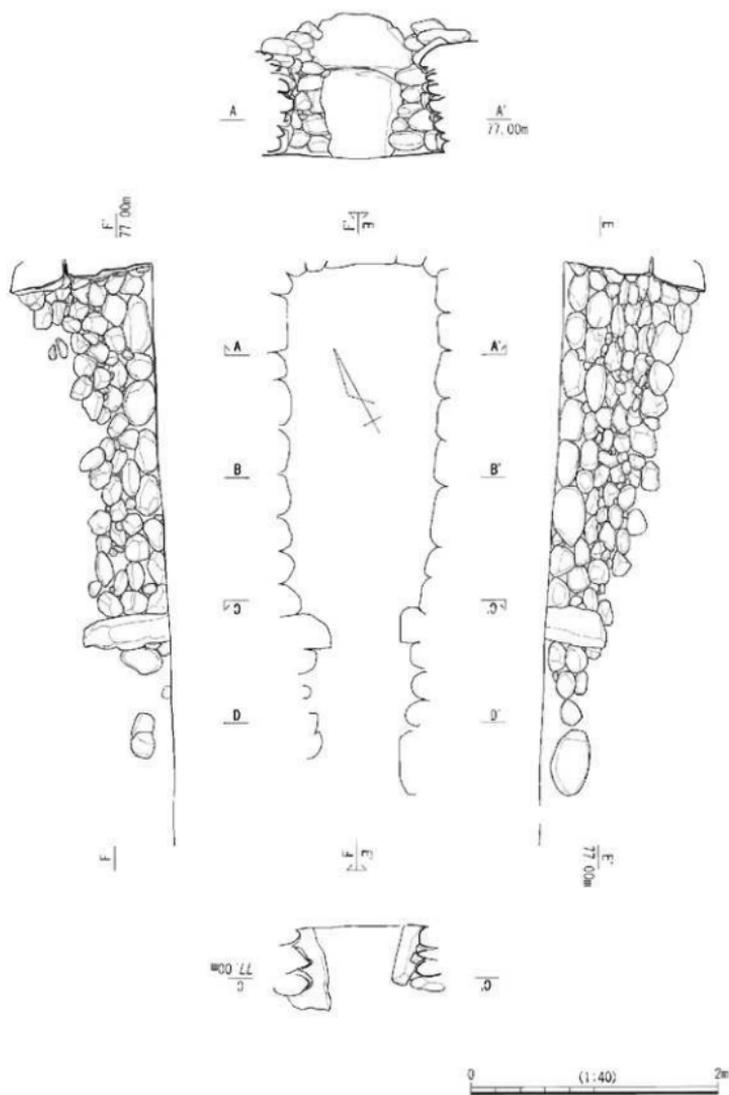
**敷石** 敷石は床面が攪乱されているため確認できない。

**基底石** 基底石は墓壇の中央に設置されているが、羨道左側壁の一番南の石材のみ墓道の肩に積載されている。また、河原石が用いられ、玄室は主に長手を内側に向けて据えられており、羨道は小口を内側に向けている。**使用石材** 使用された石材は奥壁に使用された板状の角礫と立柱石以外、側壁は河原石が主に用いられており、やや大型の石材は上段よりも下段に多く積載される傾向にある。

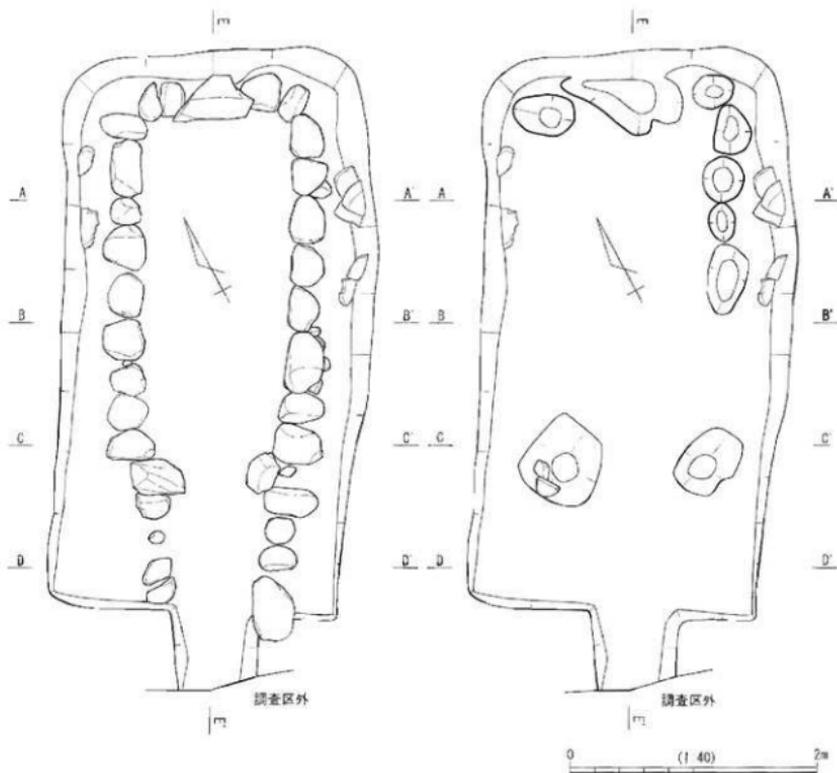
**墓壇・墓道** 墓壇は地山を標高76.7m付近まで掘削し、現地表面から約1.1m掘り込んでいる。墓壇の平面形はやや不整形な長方形であり、墓壇規模は墓壇長4.5m、墓壇幅2.5mをはかる。

墓壇底面には奥壁と立柱石を固定するための小土坑が掘削されている。また、左側壁を掘えるための小土坑を4石分確認することができる。

墓道は南西方向に向かって伸延しており、現状で墓道長0.65m以上、墓道幅0.7m、深さ0.3mをはかる。



第292図 大屋敷C54号墳横穴式石室実測図



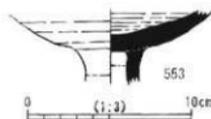
第293図 大屋敷C54号墳横穴式石室基成石および墓室実測図

墳で出土した鉄釘に近い太さである。

#### ⑤ 小 結

C54号墳は、原位置を保って石室から出土した遺物がなく、時期を特定することはできない。石室の特徴からすると、逸江IV期後半以降、7世紀後半以降に築造された可能性が高い。追葬等に関しては不明である。

C54号墳は崩落した天井石の分析から、天井がドーム形であった可能性が高く、大屋敷C古墳群の天井形態を解明する上で重要な資料を提供している。



第294図 大屋敷C54号墳横穴式石室出土土器実測図



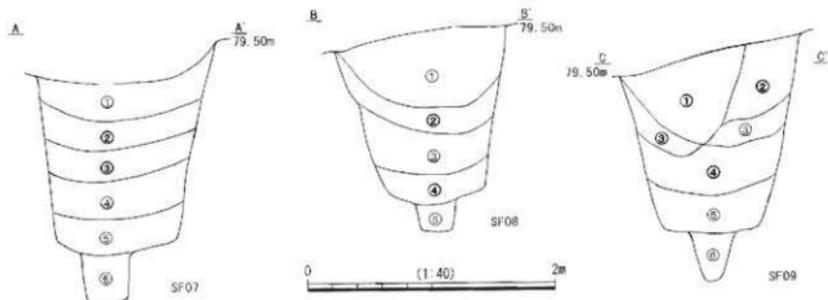
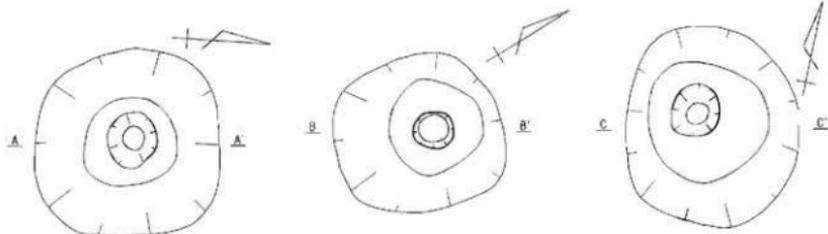
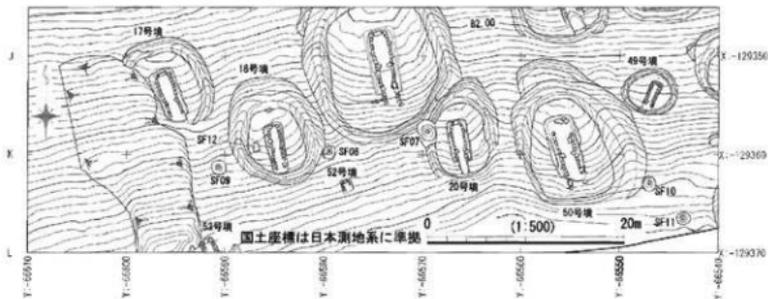
第295図 大屋敷C54号墳横穴式石室出土鉄製品実測図

## 3 古墳以外の遺構と遺物

古墳以外の遺構として、土坑6基(うち陥し穴5基)、自然流路5基を確認した。

## (1) 陥し穴(第29・30, 296・297図, 第46表, 図版114・115)

標高76~80mの、周囲よりもやや低くなった位置に掘削された陥し穴5基を検出した。西からSF09、

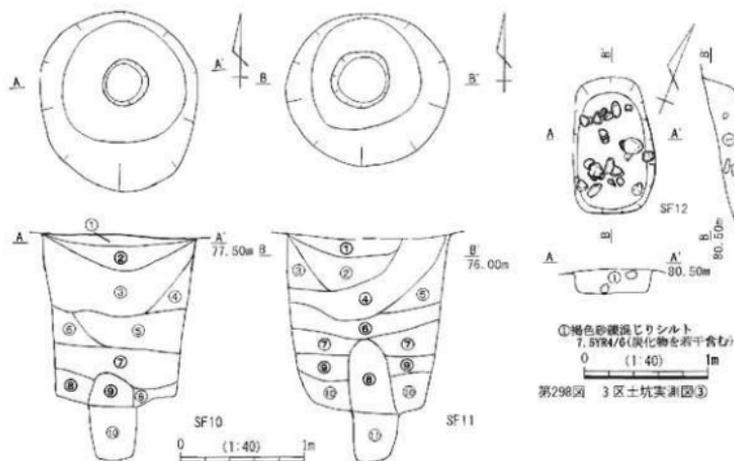


- ①褐色シルト 7.5YR4/6  
(単大~人頭大の礫を多く含む)  
②褐色シルト 7.5YR4/4  
(単大の礫をやや多く含む)  
③褐色シルト 7.5YR4/5  
(単大の礫をやや多く含む)  
④褐色シルト 7.5YR4/4  
(単大の礫をやや多く含む)  
⑤褐色シルト 7.5YR4/5  
(灰色粘土(還元)を含む)  
⑥褐色シルト 7.5YR4/6  
(灰色粘土(還元)含む)

- ①褐色シルト 7.5YR4/6  
(単大~人頭大の礫を多く含む)  
②褐色シルト 7.5YR4/4  
(単大の礫をやや多く含む)  
③明褐色シルト 7.5YR5/8  
(単大の礫をやや多く含む)  
④褐色シルト 7.5YR4/4  
(単大の礫をやや多く含む)  
⑤褐色シルト 10YR4/5  
(灰色粘土(還元)を含む)

- ①褐色シルト 7.5YR4/5  
(単大~人頭大の礫を多く含む)  
②明褐色シルト 7.5YR5/6  
(単大以下の礫をやや多く含む)  
③褐色シルト 10YR4/5  
(単大の礫をやや多く含む)  
④褐色シルト 10YR4/5  
(単大~人頭大の礫をやや多く含む)  
⑤褐色シルト 10YR4/5  
(単大の礫を多く含む)  
⑥褐色シルト 10YR4/5  
(灰色粘土(還元)をやや多く含む)

第296図 3区土坑実測区①(陥し穴)



- ①褐色シルト 7.5YR4/4  
(準大の礫を若干含む)  
②暗褐色シルト 7.5YR3/3  
(準大の礫を多く含む)  
③褐色シルト 7.5YR4/4  
(準大～人頭大の礫を多く含む)  
④褐色シルト 7.5YR4/6  
(腐植土層を含む)  
⑤明褐色シルト 7.5YR5/6  
(準大の礫を若干含む)  
⑥暗褐色シルト 7.5YR3/4  
(準大の礫を若干含む)  
⑦褐色シルト 7.5YR4/3  
(準大～人頭大の礫を多く含む)  
⑧暗褐色シルト 10YR3/3  
(準大～人頭大の礫を若干含む)  
⑨暗褐色シルト 7.5YR3/4  
(炭化物・腐植土を多く含む)  
⑩褐色シルト 10YR4/4  
(炭化物・腐植土を多く含む)
- ①明褐色シルト 7.5YR5/6  
(準大以下の小石を若干含む)  
②褐色シルト 7.5YR4/6  
(準大の礫を若干含む)  
③褐色シルト 7.5YR4/6  
(準大～人頭大の礫を若干含む)  
④褐色シルト 7.5YR4/6  
(準大の礫を多く含む)  
⑤明褐色シルト 7.5YR5/6  
(準大以下の礫を若干含む)  
⑥褐色シルト 10YR4/5  
(炭化物を若干含む)  
⑦褐色シルト 10YR4/6  
(腐植土・炭化物をやや多く含む)  
⑧褐色シルト 10YR4/6  
(準大の礫を若干含む)  
⑨褐色シルト 10YR4/4  
(準大以下の礫・腐植土を若干含む)  
⑩黄褐色粘土 10YR6/4  
(⑩に黄褐色粘土)

第297図 3区土坑実測図②(陥し穴)

SF08、SF07、SF10、SF11である。SF09～SF07は約10m間隔で標高79～80mに並んでおり、一方、SF10・11はSF07～09から20m離れ、標高も76～77mとやや低い位置に、5m離れて並んでいることから、SF07～09とSF10・11は3基と2基で別々に機能していたと考えられる。

各土坑の数値は第46表に示した。陥し穴は隅丸方形に近い円形を呈し、直径約1.3～1.6m、深さ1.4～1.7mをはかる。底部は平坦に掘削されており、そのほぼ中央に逆茂木を設置するための小土坑が掘削されている。その小土坑は直径0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mをはかる。小土坑の底部は平坦に掘削されているもの(SF07・08・10・11)と先細るもの(SF09)がある。

陥し穴内からは全く遺物が出土していないことから、掘削時期に関しては明確ではないが、調査区内で打製石鏃や磨製石鏃が検出されていること、SF07の上部が大層敷C20号墳に破壊されている

第46表 陥し穴の規模

番号	形	直径	深さ	小土坑直径	小土坑深さ
SF07	隅丸方形	1.5～1.6	1.7	0.40～0.46	0.38
SF08	隅丸方形	1.3～1.4	1.4	0.30～0.32	0.22
SF09	不整楕円形	1.4～1.65	1.6	0.40～0.45	0.4
SF10	楕円形	1.3～1.5	1.4	0.35～0.38	0.44
SF11	円形	1.25～1.35	1.5	0.45～0.50	0.4

(単位:m)

ことなどを考慮すると縄文時代から弥生時代の一時期に属することは明らかであり、このような形状の陥穴が多数確認される縄文時代に位置づけるのが最も妥当であろう。

## (2) 土坑(第298図, 図版115)

**SF12** SF12は大屋敷C18号墳の墳丘の北西部分を掘削した長方形の土坑であり、長辺(南北)1.12m、短辺0.65m、深さ0.2mをはかり、内部より拳大の礫が数点出土した。その他に遺物がなく、用途は不明である。

## (3) 自然流路(SR06, 第28, 31, 299図, 図版169・171・207)

一番東側を流れる自然流路であり(第28・31図)、底面近くより須恵器、山茶碗・常滑片が出土した。山茶碗は調査区外に位置する大屋敷6号窯と関連する遺物である可能性が高い。

SR06は斜面上に位置している。大屋敷6号窯の想定位置が谷底にある可能性が高いことから考えると、山茶碗を斜面上部に上げなければSR06から出土することはないと想定する。したがって、大屋敷6号窯作業時には、SR06は機能しており、窯内に水が流れ込まないようにするための流路などの役割を果たしていた可能性がある。

出土した須恵器・山茶碗・瓦のうち須恵器3点、山茶碗34点、常滑1点を図示した。

**須恵器** 返蓋1点(560)、フラスコ形瓶?1点(561)、長頸壺1点(562)が出土した。返蓋(560)は、返りが受部よりも内側に入るものである。561は壺瓶類の底部であり、フラスコ形瓶の可能性が高い。長頸壺(562)は、肩が張るものである。

これらの須恵器は560が遠江Ⅳ期後半、562が遠江Ⅴ期前半に位置づけることができる。SR06の位置から考えると、31~33号墳のどれかに伴う遺物である可能性が高い。

**山茶碗** 山茶碗口縁部片1点(568)、底部片27点(566, 569~594)、山皿3点(563~565)、片口鉢1点(567)、大型鉢の底部片2点(595・596)が出土している。

山茶碗は、口縁部(568)が底部から逆ハ字形に直線的に立ち上がるものであり、高台(569~594)は低い、潰れた三角形が多い。口径約18.0cm、高台径約6.0~9.0cmをはかる。高台には、粉痕が確認できるものが多く、底部は糸切り後未調整のものと糸切り後ナデ調整が施されるものがある。

山皿(563~565)は、底部から逆ハ字形に直線的に開くもので、口径8.0cm前後、底部径約4.0cmをはかる。底部は糸切り離し後未調整である。

大型鉢(595・596)は、底部破片である。高台は高く、ハ字形に開くもので、断面は二等辺三角形に近い。596は整形終了後、見込み(内面)部分に底部から口縁部に向かって放射状に静止ナデが施されており、底部は糸切り離し後ナデ調整が施されている。高台径は595が15.4cm、596が12.8cmである。

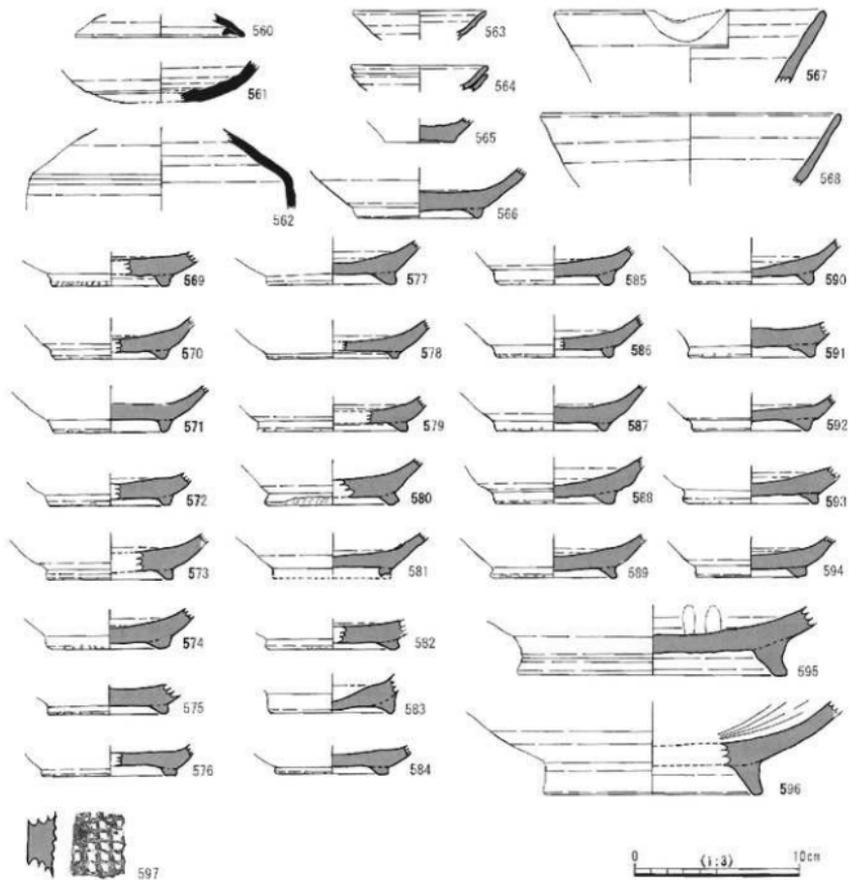
片口鉢(567)は、底部から逆ハ字形に開き、口縁端部は丸く納められるものである。口縁端部を内側から外側に向かって押し出し、片口を形成している。口径16.5cm、片口部幅5.3cmをはかる。

これらの山茶碗は、宮口窯松井編年山茶碗Ⅱ期に比定でき、12世紀後半に位置づけることができる(松井1989b)。

**常滑焼** 常滑産の壺頸部片(597)が出土した。厚さ1.3mmをはかることからかなりの大型品であった可能性が高い。外面には格子目タタキが施されている。常滑中野編年Ⅰ~Ⅲ期の中で位置づけることができる(中野1994)。

## (4) 遺構以外の出土遺物(第300~303図, 図版167・168, 170~174, 207)

大屋敷C古墳群の古墳と古墳の間からは須恵器が主に出土し、3区東側から4区(谷部)にかけては山



第299図 3区自然流路(SA06)出土土器実測図

茶碗が主に出土した。このほか古墳の周辺より打製・磨製石鏃、打製石鏃剥片、銅銭、キセルなどが出土したほか、3区東側から4区にかけて平瓦・丸瓦が出土した。各遺物の出土位置は第47表観察表を参照いただきたい。

#### ①須恵器(第300図, 図版167・168, 170)

古墳外から杯蓋、杯身、返蓋、摘蓋、有台杯、壺瓶類口縁部・頸部、平瓶、無蓋高杯が出土した。

杯蓋類に関して、杯蓋(625)は半球形の杯蓋で、口縁部は丸く納められている。杯身(598・602・621)は底部の破片であり、598の底部にはヘラ記号「×」が描かれている。返蓋(605・606・626)は返りが受部よりも突出するものである。摘蓋(599・600・616・628)は、天井部から八字形に開いた後、口縁部を肥厚させるもの(628)と、口縁部をL字形に折り曲げ、先端を丸く納めるもの(616)と、先端を短く方形に納めるもの(599・600)がある。摘み(615)は、大型の擬宝珠摘みであり、摘蓋に伴う可能性が高い。有台杯(612~614, 620・624・629)は、底部が高台よりも突出するものである。有台杯(611・623・633)は、底部は下がるもの高台よりは突出しないものである。有台杯(610)は、底部はほぼ水平であり、高台は方形に作られている。有台杯(601)の底部は高台よりも高い位置にあり、体部は底部からL字形に屈曲し明瞭な稜線が観察でき、そこから直線的に立ち上がるものである。有台杯(608)は高台が付かないいわゆる「箱形杯」の可能性もある。高台がつく場合には底部は601と同様の特徴を有するものである。口縁部はやや外上方に向かって立ち上がり、端部は内傾する平坦面となる。

無蓋高杯(627)は、碗形の杯部で、口縁部は屈曲し、さらに外上方へ開くもので、口縁部直下の外面には凹線が施されている。630は碗形の杯部で、口縁部は内傾する段になっている。脚部は八字形に開いた後、口縁部を肥厚させるものである。

壺瓶類では、台付長頸壺底部(622)は、八字形に開く高台で断面方形に成形されている。618は平瓶の口縁部で、逆八字形に開く。604はフラスコ瓶あるいは長頸壺の口縁部であり、逆八字形に開いた後、口縁部を折り曲げ、外傾する斜面となっている。このほか603・619・631は頸部の破片である。

#### ②土師器(第300図)

古墳外から壺(634)が出土した。形状は須恵器有台杯と類似している。口縁部はほぼ直立し、口縁部はやや細められている。小片のため口径は不明である。

#### ③灰釉陶器(第300図, 図版170)

3区遺構外より灰釉陶器碗・壺が出土した(635~641)。635は口縁部片であり、外上方に開いた後、口縁部直下を強くナデ、緩やかに折り曲げるものである。底部(636~640)は高台が三角形、爪形である。底部は糸切り離し後未調整、ナデ調整があり、底部内面は一条のナデが施されるものがある。長頸壺(641)は、逆八字形に開いた後、口縁部を折り返し、下方に引き出すものである。

これらの灰釉陶器は、第V章で報告する大屋敷1号窯の出土品と類似しており、大屋敷1号窯の生産品に比定できる。

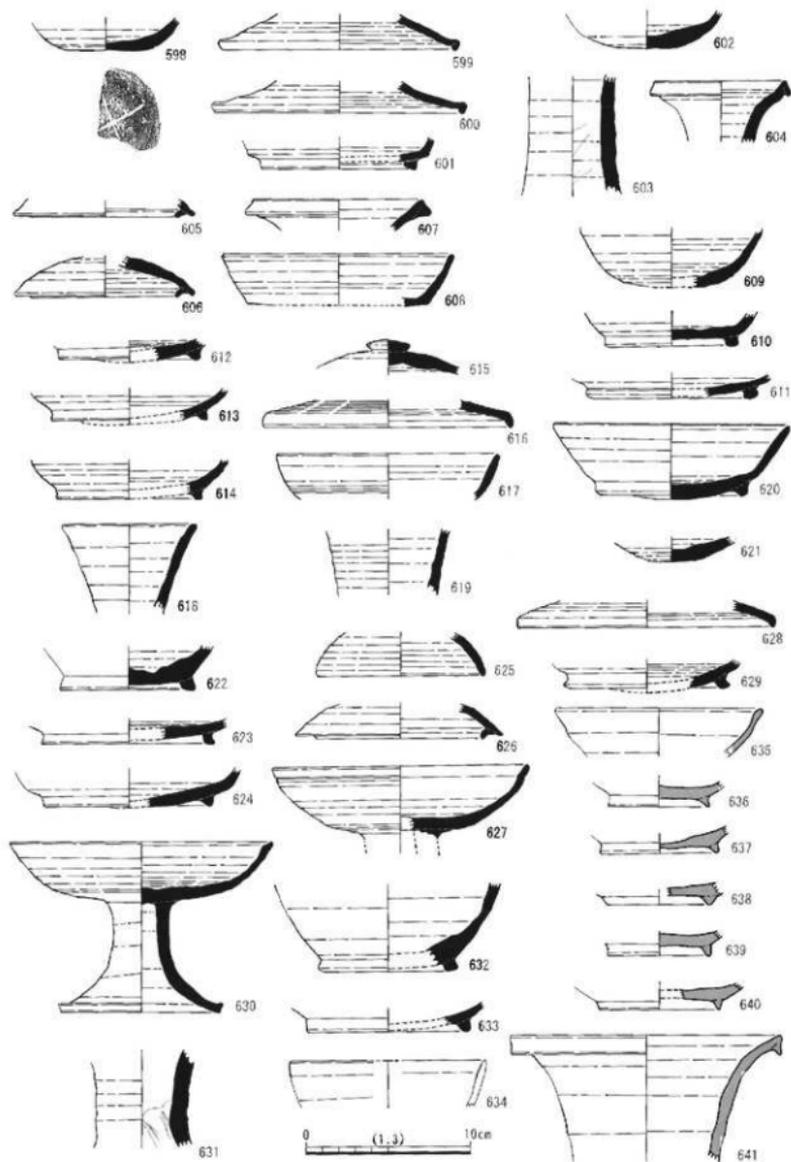
#### ④山茶碗(第301・302図642~701, 図版170・171・173, 207)

3区東側と4区(東側谷)より山茶碗片が多量に出土しており、そのうち高台や口縁部が残存する60点を図示した。出土した山茶碗には山茶碗、小碗、山皿がある。

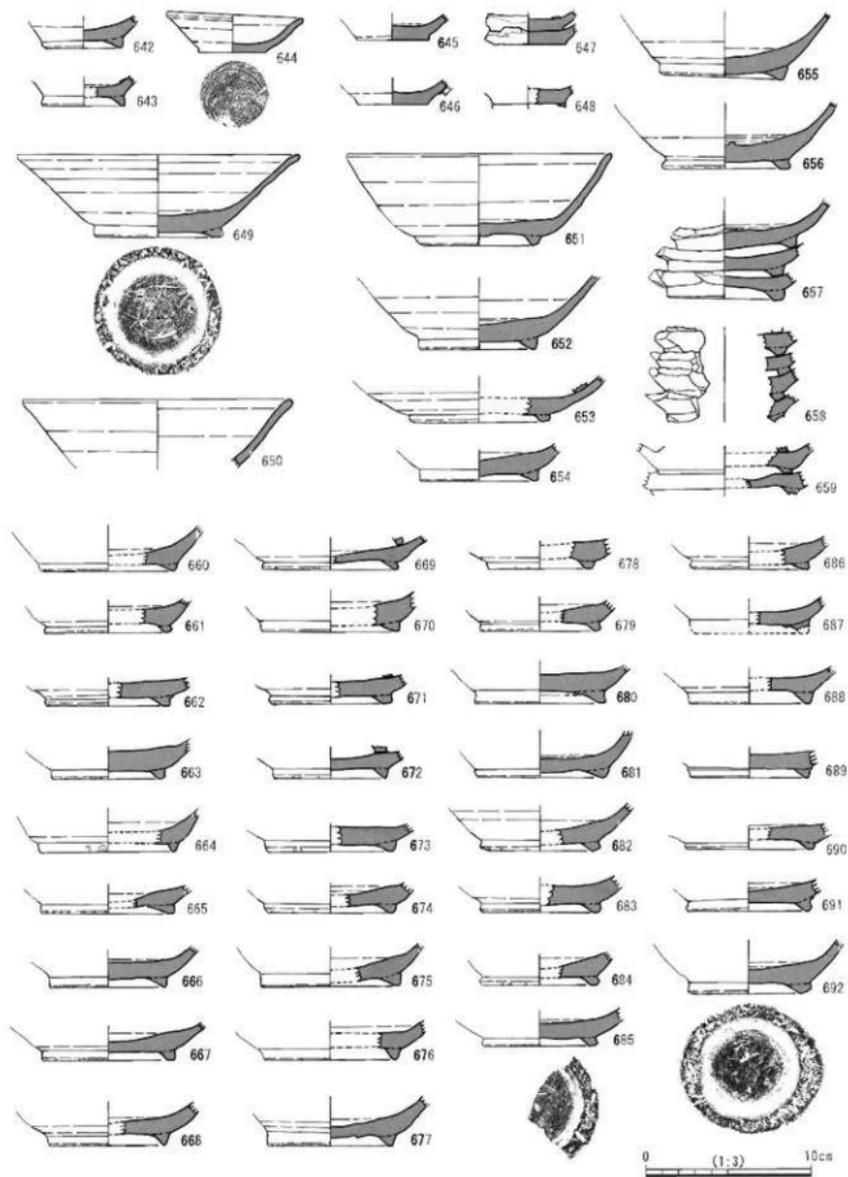
小碗は低く潰れた三角形の高台を有するもので(642・643)ある。小碗に関して、高台径は4.8~5.1cm、ともに高台高さは5mmをはかる。口縁部まで残存する個体がないため口径や器高は不明である。

山皿(644)は、底部から逆八字形に直線的に開くものである。底部は糸切り離し後未調整である。なお、646・647は軸着陶器であり、大屋敷6号窯の山皿の焼成方法が直接の重ね焼きであったことが判明する。山皿は底径40~45mmの範囲に納まり、口径も80~85mmの範囲に納まり、非常に規格性が高い。

山茶碗は底部から外上方に向かって直線的に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられているもの



第300図 3・4区遺構外出土土器実測図①  
 (須恵器・土師器・灰釉陶器)



第301図 3・4区遺構外出土土器実測図②(山茶碗)

(649・650)と、一端水平に外に向かい、急激に外上方に向かって直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられるもの(651)がある。高台のみのものは断面が低い三角形あるいは潰れた三角形で、設置面に粉殻痕が残るものが大部分である。底部は糸切り未調整のものは2点と少なく、糸切り痕をナデ消すものあるいは一部に糸切り痕が残るもののナデ調整を行ったものが多い。また、碗のうち657～659は粘着しており、直接重ね焼きされたものであることが判明する。

法量は、口径は16.0～18.0cmの範囲であり、16.0cmが多い。高台径は6.0～9.5cmの範囲があり、7.5cm前後が最も多い。高台高は4～10mmの範囲であり、4～8mmの範囲に集中する。したがって、6号窯の山茶碗は、口径17cm前後、底部径7.0～8.0cm、高台高4～8mmが最も多いといえる。

山茶碗は1号窯出土灰陶器と比べると、のためが目立ち、胎土に含まれる砂の量が多く、器壁も厚くなる。

このほか山茶碗に伴って焼成されたと推測する陶質の壺あるいは壺の破片が3点(702～704)出土している。外面には平行叩きを施している(702・703)。

#### ⑤瓦(第302図, 図版172, 207)

丸瓦片1点(707)、平瓦片5点(708～712)が出土した。

丸瓦(707)は玉縁式(有段式)であり、瓦尻部分のみの小片である。内面には刺突痕を取でき玉縁の整形の痕跡と考えることができる。

平瓦(708～712)は、すべて小片であり、全体の様相は不明である。製作はすべて一枚作りである。側面はすべてヘラ状工具で切断・調整されヘラ状工具で面取りされる。凹面は、コピキを実施した痕跡と布目を確認できる。凸面は縄目叩きが施されており、縄目は4.5mm程度である。

したがって、大屋敷6号窯では、山茶碗、山皿、小碗輪花碗、片口鉢、大型鉢とともに平瓦・丸瓦、壺を焼成していたことが判明する。また、大屋敷6号窯の操業時期は山茶碗と山皿の諸特徴から、宮口窯松井編年Ⅱ期に比定でき、12世紀後半に位置づけることができる(松井1989b)。

#### ⑥土師質土器(第302図, 図版167)

同一個体と推測する土師質土器の破片が数点出土しており、そのうち口縁部と頸部片を図示した(705・706)。色調や胎土は類似する。全体的な形状は不明であるが大型壺の頸部～口縁部の破片である。口縁部(705)は内彎しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚させられ、上面はほぼ水平に仕上げられている。頸部(706)はほぼ直立する頸部である。山茶碗に伴う時期の土師質土器である可能性が高い。

#### ⑦石罫(第303図, 図版174)

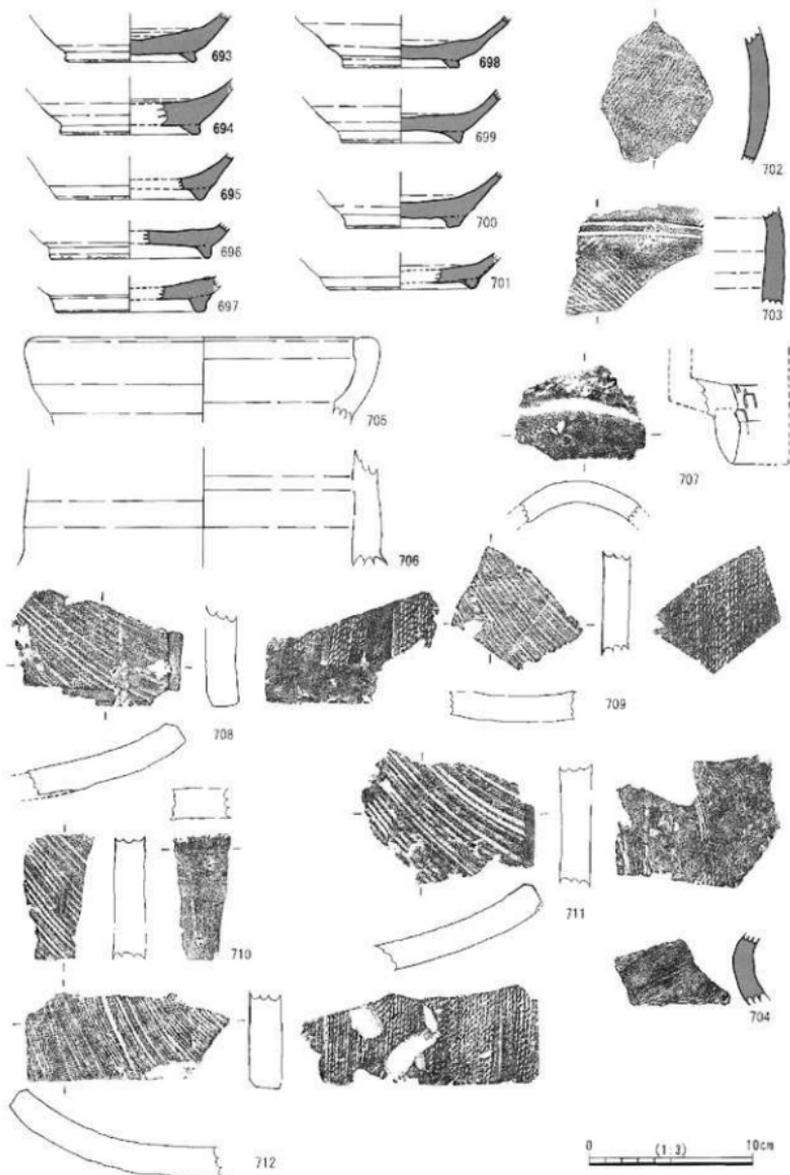
石罫は打製石罫5点(713～717)、剥片2点(718・719)と磨製石罫1点(720)が出土している。

打製石罫(713～717)は黒曜石製3点(715～717)、ホルンフェルス製2点(713・714, 註1, 註は293頁)が出土している。平面形は二等辺三角形であり、714はやや挟りの深い凹基式であり、713は緩やかな凹基式あるいは平基式である。713は全長2.7cm、幅1.6cmをはかり、重量1gである。714は全長3.0cm、幅1.9cmをはかる。重量は約1gをはかる。715は、凹基式であり、長い脇扶をもつ。残存長1.3cm、残存幅1.5cmをはかる。716は緩やかな凹基式である。残存長1.1cm、幅1.1cmをはかる。717は残存長1.2cm、幅1.1cmをはかる。716・717ともに重量は1gである。

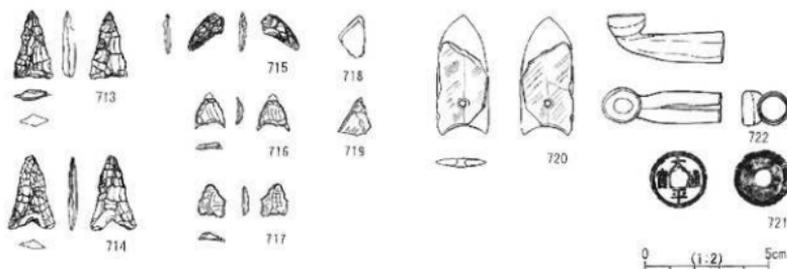
剥片2点(718・719)はともに黒曜石製であり、718は全長1.7cm、幅1.0cm、719は全長1.6cm、幅1.0cmをはかる。

磨製石罫(720)は凝灰岩質砂岩であり、淡い黄緑色を呈する。無基式で、基部から8mmのところには矢柄を固定するための孔が穿孔されている。穿孔は直径2.5mmをはかる。平面形は縦線を有する柳葉形であり、基部(間)は凹基式である。残存長3.8cm、残存幅2.1cm、厚さ3.5mm、重量4gをはかる。

打製石罫は縄文時代に、磨製石罫は弥生時代に位置づけることができる。



第302図 3・4区遺構外出土遺物実測図③(山茶碗・瓦鉢か)



第303図 3・4区墳外出土遺物実測図(石鏃・煙管・銅銭)

⑧銅銭(第303図, 図版174)

3区東側、C39号墳の東側で銅銭「太平通寶」1点が出土した(721)。直径2.3cm、厚さ1mm、孔はほぼ正方形であり、一辺約7mmをはかる。重量は2gをはかる。表面に「太平通寶」の文字が鋳出され、裏面は無文字である。各部位の特徴や文字の鋳出が鮮明であることから判断して本鑄銭(輸入銭)である蓋然性が高い。なお、「太平」は北宋の年号であり、北宋二代皇帝、太宗趙光義の太平興国(西暦980年頃)年間、10世紀後半に鑄造されたものである。

なお、銅銭が出土したことから、大屋敷墳墓と同時期の中世墓が大屋敷C古墳群内に営まれていた可能性がある。

⑨煙管(第303図, 図版174)

3区東側、C39号墳の東側で真鍮製煙管(キセル)の雁首1点(722)が出土した。吸口は出土していない。雁首は、厚さ1mmの板状の真鍮を、筒状に折り曲げた後、半球形に折り曲げた鉢を溶接するものである。全長4.8cmをはかる。火皿直径1.5~1.6cm、火皿高9mm、雁首長4.4cm、雁首直径1.2cm、重量8gをはかる。雁首内部には羅字片(木材)が残存している。

なお、煙管の出土から、大屋敷C古墳群内に近世墓が営まれていた可能性がある。

# 第4節 観察表

第74表 大屋敷C古墳群出土土器観察表

遺物番号	押印番号	図録番号	古墳名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	受胎径	底脚径	底脚高	加土	施成	色調	輪縁方向	外面装飾	内面装飾	残存部位	残存(%)	備考	
1	17	116/117	2号	墓道	須恵器	甕	13.6	3.9						密	良好	灰白	右	回転ヘラ		26		
2	17	116/117	2号	墓道	須恵器	甕	14.2	4.1						密	良好	灰白	右	回転ヘラ		85		
3	17	116/117	2号	墓道	須恵器	甕	13.0	4.3						密	不良	灰白	右	回転ヘラ		90		
4	17	116/117	2号	墓道	須恵器	甕	13.0	4.2						密	不良	灰白	右	回転ヘラ		83		
5	25	117	3号	周溝	須恵器	甕	16.6	(1.6)						密	良好	灰白	右			口縁部	13	
6	22	117	3号	周溝	須恵器	甕		(2.9)			9.8	0.4		密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		蓋部	28	
7	25		3号	墓道	須恵器	甕	16.4	(1.4)						密	良好	灰白	右			口縁部	7	
8	25		3号	墓道	須恵器	甕	16.4	(1.6)						密	良好	灰白	右			口縁部	6	
9	25	116/118	3号	石室構体	須恵器	甕	14.7	5.3				9.6	0.4	密	良好	灰	右	回転ヘラ		17		
10	25	116/118	3号	墓道	須恵器	甕	14.5	(2.8)						密	良好	灰白	右			口縁部	11	
11	28	116/118	3号	納棺室	須恵器	甕	16.6	(2.8)						密	良好	灰白	右			口縁部	6	
12	25	116/118	3号	石室構体	須恵器	甕	8.5	(7.2)						密	良好	灰	右			胴部	25	
13	25	116/117	3号	石室構体	須恵器	甕	9.8	23.3	15.6				7.0	0.5	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		88	
14	25	116/117	3号	石室構体	須恵器	甕	8.6	9.8	9.2					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			85	
15	25	116/117	3号	石室構体	須恵器	甕		(8.6)	13.6					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			40	
16	27	117	1区	墓土	須恵器	甕		(2.4)						密	良好	灰白	右	回転ヘラ		底部	13	
17	27	117	1区	墓土	須恵器	甕		(2.1)						密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		蓋部	17	
18	27	117	1区	墓土	須恵器	甕		(2.0)						密	良好	黄灰	右	ナブ	ナブ	蓋部	26	
19	32	118	6号	埴土	須恵器	甕	8.6	(1.2)			10.4			密	良好	灰黄	不明			蓋部	8	
20	32	118	6号	埴土	須恵器	甕		(1.3)						密	良好	灰	左	静止ヘラ		底部	23	
21	32	118	6号	埴土	須恵器	甕		(2.1)				5.1		密	良好	灰	左	静止ヘラ	ナブ	底部	90	
22	32	118	6号	埴土	須恵器	甕	14.8	(3.5)						密	良好	灰	右			口縁部	10	
23	32	118	6号	埴土	須恵器	甕		(1.7)				9.3	0.7	密	良好	灰	右	回転ヘラ		底部	60	
24	32	118	6号	埴土	須恵器	甕		(4.8)						密	良好	灰白	右	回転ヘラ		胴部	13	
25	32	118	6号	埴土	須恵器	甕	11.0	(13.2)						密	良好	灰黄	右			口縁部	50	
26	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	10.8	(2.0)			12.8			密	良好	灰黄	右			口縁部	13	
27	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	12.8	(2.3)						密	良好	黄灰	左			口縁部	6	
28	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	10.0	(2.9)						密	不良	灰白	右			口縁部	13	
29	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	9.4	(1.8)						密	良好	灰白	右			口縁部	13	
30	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	6.8	(6.8)	15.6					密	良好	灰	右			胴部	13	
31	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	7.1							密	良好	灰黄	右			胴部	20	
32	32	118	7号	埴土	須恵器	甕	7.3							密	良好	灰黄	右			胴部	14	
33	32	118	8号	埴土	須恵器	甕	8.4	(2.1)			10.0			密	良好	灰	右			胴部	13	
34	32	118	8号	埴土	須恵器	甕	8.4	(3.0)			10.2			密	良好	灰白	右	回転ヘラ		胴部	25	
35	32	119	9号	埴土	須恵器	甕		(1.9)						密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		天沖部	10	
36	32	119	9号	埴土	須恵器	甕		(1.7)				10.0	0.9	密	良好	灰白	右	回転ヘラ		胴部	25	
37	32	119	11号	埴土	須恵器	甕	16.3	(17.4)				9.4	1.0	密	良好	灰白	右	回転ヘラ		胴部	76	
38	32	119	12号	埴土	須恵器	甕	15.6	(1.6)						密	良好	灰	右			口縁部	5	
39	32	119	12号	埴土	須恵器	甕		(2.7)					10.4	0.5	密	良好	灰白	右	回転ヘラ		底部	13
40	32	119	12号	埴土	須恵器	甕	8.9	(4.0)						密	良好	黄灰	右			口縁部	8	
41	32	119	12号	埴土	須恵器	甕		(2.3)	20.4				11.0	0.7	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		胴部	25
42	32	119	13号	埴土	須恵器	甕	15.0	(3.0)						密	良好	灰	右			口縁部	5	
43	32	119	13号	埴土	須恵器	甕		(2.1)					8.4		密	良好	灰黄	右			口縁部	13
44	34	119	10号	埴土	須恵器	甕	14.0	(2.1)						密	良好	灰	右			口縁部	13	
45	34	119	10号	埴土	須恵器	甕	14.0	(1.9)						密	良好	灰	右			口縁部	6	
46	34	119	10号	埴土	須恵器	甕	15.2	(2.1)						密	良好	灰白	右			口縁部	5	
47	41	119	14号	墓階土	土師器	甕	11.8	(3.0)						密	良好	黄灰	不明			口縁部	25	
48	43	119	17号	墓道	須恵器	甕	15.6	(1.9)						密	良好	灰	右			口縁部	31	
49	49	120	17号	墓道	須恵器	甕	9.7	3.3						密	良好	灰	右	静止ヘラ			100	
50	49	120	17号	墓道	須恵器	甕	9.5	3.8						密	良好	灰	左	静止ヘラ			100	ヘラ記号[A]
51	49	120	17号	墓道	須恵器	甕	8.2	3.0			10.4			密	良好	灰	左	静止ヘラ			100	
52	49	119	17号	墓道	土師器	甕	9.6	(2.2)						密	良好	黄	不明			口縁部	33	
56	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	15.7	(1.9)						密	良好	灰白	右			口縁部	25	
56	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.4	(1.3)						密	良好	灰黄	右			口縁部	8	
57	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	15.6	(2.5)						密	良好	灰黄	右			口縁部	13	
58	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.8	(2.1)						密	良好	灰黄	右			口縁部	8	
59	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	15.7	(1.7)						密	良好	灰黄	右			口縁部	20	
60	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.5	(1.6)						密	良好	灰黄	右			口縁部	8	
61	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.7	3.7					10.8	0.5	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ		胴部	50
62	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.2	(3.1)						密	良好	灰黄	右			口縁部	33	
63	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	14.4	(2.0)						密	良好	灰白	左			口縁部	7	
64	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	13.7	(3.7)					9.8		密	良好	灰白	右			胴部	25
65	53	120	18号	周溝	須恵器	甕	17.8	(5.3)						密	良好	灰黄	右			口縁部	20	
66	53	120	18号	周溝	須恵器	甕		(10.1)						密	良好	灰白	右			胴部	33	

建物番号	陣出番号	国領番号	古戦名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	受胎径	底径	底脚径	底脚高	粘土	色調	輪切方向	外周調整	内周調整	存在部位	残存率(%)	備考	
65	62	121	19号	周溝	須恵系	瓦葺	9.8	(1.8)		12.4				密	良好	灰白	左		口縁部	8		
66	62	121	19号	周溝	須恵系	瓦葺	12.6	(2.2)		14.7				密	良好	灰白	右		口縁部	11		
70	62	121	19号	周溝	須恵系	瓦葺	12.0	(2.0)		14.4				密	良好	灰白	右		口縁部	14		
71	62	121	19号	周溝	須恵系	瓦葺	13.0	(2.5)		15.0				密	良好	灰白	左		口縁部	53		
72	62	121	19号	周溝	須恵系	瓦葺	14.9	(1.4)						密	良好	灰	右		口縁部	6		
73	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?	12.7	(3.6)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ	口縁部	9		
74	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?	14.0	(3.9)						密	良好	灰白	左	回転ヘツ	口縁部	14		
75	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?	13.7	(3.0)						密	良好	灰白	左		口縁部	7		
76	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?	14.5	(2.7)						密	良好	黄灰	右		口縁部	17		
77	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?	15.4	(3.3)						密	良好	灰白	右		底部	7		
78	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?		(1.7)						密	良好	灰	右	回転ヘツ	底面	78		
79	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?		(2.7)						密	良好	黄灰	右	回転ヘツ	底面	50		
80	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?		(2.0)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ	底面	20		
81	62	121	19号	周溝	須恵系	有台杯?		(3.3)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ	口縁部	10		
82	62	121	19号	周溝	須恵系	無蓋高杯	13.3	(3.1)						密	良好	灰白	右		口縁部	10		
83	62	121	19号	周溝	須恵系	無蓋高杯	13.2	(3.2)						密	良好	灰白	右		口縁部	5		
84	62	121	19号	周溝	須恵系	平皿	6.1	(12.0)	13.1					密	良好	灰白	左		底面	50		
85	62	121	19号	周溝	須恵系	平皿	12.2	(3.6)						密	良好	灰白	左		口縁部	25		
86	62	121	19号	周溝	須恵系	平皿小増		(4.9)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ	底面	25		
87	62	121	19号	周溝	須恵系	定蓋小増蓋		(2.8)						密	良好	灰白	左	回転ヘツ	天井部	5		
88	62	121	19号	周溝	須恵系	定蓋小増蓋		(2.4)						密	良好	灰白	左	回転ヘツ	天井部	20		
89	62	121	19号	周溝	須恵系	長嘴蓋?		(6.4)						密	良好	灰黄	右		底面	33		
90	62	122	19号	墳丘	須恵系	椀?		(2.7)						密	良好	黄灰	右	回転ヘツ	底面	50	ヘア記号 [-]	
91	62	121	19号	周溝	須恵系	高杯		(2.8)						密	良好	灰黄	右		底面	5		
92	62	121	19号	墳丘	須恵系	フラスコ		(9.5)						密	良好	黄灰	右	回転ヘツ	底部	5		
93	62	121	19号	墳丘	山吹焼	壺		(2.6)						密	良好	灰黄	左	表面磨	ナデ	底部	60	高台残存
94	70	122	124	19号	附墓石上	須恵系	筒蓋	14.8	3.3					密	良好	灰黄	左	表面磨	ナデ	底部	80	高台残存
95	70	122	124	19号	附墓石上	須恵系	筒蓋	14.4	3.4					密	良好	灰	左	回転ヘツ			76	
96	70	122	124	19号	附墓石上	須恵系	筒蓋	16.0	(2.7)					密	良好	灰	右	回転ヘツ			33	
97	70	122	124	19号	附墓石下	須恵系	筒蓋	14.5	(3.6)					密	良好	灰	左	回転ヘツ			13	
98	70	122	124	19号	附墓石上	須恵系	有台杯	14.8	3.9					密	良好	灰白	右	回転ヘツ			25	
99	70	122	124	19号	石室遺物	須恵系	無蓋高杯	13.7	(4.1)					密	良好	黄灰	右		口縁部	13		
100	70	122	124	19号	附墓石上	須恵系	高杯		(1.4)					密	良好	灰白	右		口縁部	53		
137	74	126	20号	周溝	須恵系	筒蓋	14.9	3.8						密	不良	灰白	左	回転ヘツ			23	
138	74	126	20号	周溝	須恵系	有台杯		(2.2)						密	不良	灰	左	回転ヘツ			89	
139	74	126	20号	周溝	須恵系	有台杯		(1.5)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ			83	
140	74	126	20号	周溝	須恵系	椀?		(2.6)						密	良好	灰	右	回転ヘツ			58	
141	79	124	20号	石室	須恵系	台付長頸壺	9.3	21.6	15.1					密	良好	灰白	左	回転ヘツ			90	
156	83	126	21号	墳丘	須恵系	筒蓋		(2.0)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ			20	天井部
157	83	126	21号	墳丘	須恵系	有台杯?	11.1	(2.8)						密	良好	黄灰	左				8	
158	83	126	21号	墳丘	須恵系	台付長頸壺		(2.2)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ			33	
169	89	126	21号	石室	須恵系	筒蓋	16.4	3.5						密	良好	灰白	右	回転ヘツ			67	
170	89	126	21号	石室	須恵系	無蓋高杯	10.5	(2.8)						密	良好	黄灰	左		縦り	口縁部	21	
171	89	126	21号	石室	須恵系	無蓋高杯	13.8	(3.2)						密	良好	灰白	左		口縁部	7		
172	89	126	21号	石室	須恵系	無蓋高杯	14.9	(2.2)						密	良好	灰白	左		口縁部	8		
173	89	126	21号	石室遺物	須恵系	無蓋高杯	14.6	(2.8)						密	良好	黄灰	右		口縁部	13		
174	89	127	21号	石室	須恵系	長頸壺		(3.3)						密	良好	黄灰	右		底部	60		
175	89	126	21号	石室	土師焼	壺		(3.6)						密	良好	黄灰	右		柵部	14	内周面 赤彩	
176	89	126	21号	石室	須恵系	台付長頸壺	9.0	23.2	14.7					密	良好	灰白	左	回転ヘツ			90	
177	89	126	21号	石室	須恵系	フラスコ	10.5	26.8	19.8					密	良好	灰白	右	回転ヘツ			80	
178	89	127	21号	石室	須恵系	フラスコ	10.5	(26.7)	19.6					密	良好	灰白	右	回転ヘツ			67	
180	94	131	22号	墳丘	須恵系	瓦葺	11.0	(2.4)						密	良好	灰黄	左	回転ヘツ			33	
181	94	131	22号	墳丘	須恵系	杯蓋	8.6	(3.0)						密	良好	灰黄	右	回転ヘツ			15	
182	94	131	22号	墳丘	須恵系	杯蓋	7.6	(1.6)						密	良好	灰	左		口縁部	23		
183	94	131	22号	墳丘	須恵系	定蓋小増蓋		(1.3)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ			35	天井部
184	94	131	22号	周溝	須恵系	有台杯		(1.8)						密	不良	灰白	不明	回転ヘツ			26	底部
185	94	131	22号	墳丘	須恵系	高杯		(3.6)						密	良好	灰黄	右		底部	13		
186	101	129	131	22号	石室	須恵系	瓦葺	6.4	3.5	8.8				密	良好	灰	右	回転ヘツ			100	
187	101	129	131	22号	石室	須恵系	瓦葺	6.4	3.5	9.0				密	良好	灰	右	回転ヘツ			100	
188	101	129	131	22号	石室	須恵系	瓦葺	6.6	3.4	9.1				密	良好	灰白	右	回転ヘツ			90	
189	101	129	131	22号	石室	須恵系	瓦葺	6.7	3.6	9.3				密	良好	灰	右	回転ヘツ			100	

遺物 番号	埋蔵 番号	図面 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大 径	受輪 径	底厚 径	底厚 高	胎土	灰皮	色調	轉埴 方向	外周 調整	内周 調整	残存 部位	残存 (%)	備考	
190	101	129 131	22号	石室	須磨跡	返蓋	6.4	3.9		9.3			密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
191	101	129 131	22号	石室	須磨跡	返蓋	6.5	3.7		8.8			密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
192	101	129 131	22号	石室	須磨跡	返蓋		(2.4)					密	良好	黄灰	右	回転ヘラ		天井部	20	ヘラ記号 [-]	
193	101	129 131	22号	石室	須磨跡	返蓋	8.0	3.7		10.8			密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100		
194	101	129 131	22号	石室	須磨跡	返蓋	8.3	3.1		11.3			密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
196	101	129 131	22号	石室	須磨跡	甌台杯	7.8	3.9					密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
196	101	129 131	22号	石室	須磨跡	甌台杯	8.7	3.9					密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
197	101	130 131	22号	石室	須磨跡	甌台杯	8.2	4.1					密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
198	101	130 131	22号	石室	須磨跡	甌台杯	8.0	4.0					密	良好	灰	右	回転ヘラ			100		
199	101	130 131	22号	石室	須磨跡	甌台杯	8.1	3.9					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			100		
200	101	131	22号	石室	須磨跡	杯蓋	11.8	(3.6)					密	良好	灰白	右					11	
201	101	130 131	22号	石室	須磨跡	有台杯	14.0	4.5			9.8	0.5	密	良好	灰白	右	回転ヘラ			88	ヘラ記号 [-]	
202	101	128 130	22号	墳丘 石室層土	須磨跡	舞臺高杯	18.4	(4.7)					密	良好	灰白	右			杯部	67		
203	101	130	22号	石室層土	須磨跡	舞臺高杯	18.4	(4.6)					密	良好	黄灰	左			口縁部	78		
204	101	131	22号	甌路 層土	須磨跡	高杯		(1.9)			8.6		密	良好	灰	右			口縁部	11		
206	101	128 131	22号	石室	須磨跡	高杯		(1.8)			10.2		密	良好	灰白	右			口縁部	28		
206	101	128 131	22号	石室	須磨跡	高杯		(1.2)			10.0		密	良好	灰白	左			口縁部	33		
207	101	131	22号	石室	須磨跡	蓋板部	9.0	(1.7)					密	良好	灰白	左			口縁部	13		
208	103	131	22号	石室	須磨跡	蓋板部	10.4	(1.7)					密	良好	灰白	左			口縁部	20		
209	101	131	22号	甌路 層土	須磨跡	長頸蓋		(8.0)	17.0				密	良好	灰黄	右			胴部	17		
210	101	128 130	22号	支室	須磨跡	甌付長頸蓋	9.0	28.0	14.8		10.8	3.3	密	良好	灰	左	回転ヘラ			90		
211	104	130	22号	支室	須磨跡	甌付長頸蓋	9.1	23.8	16.9		9.7	0.8	密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100		
215	111	132	24号	支室	須磨跡	甌蓋	16.0	4.0					密	良好	灰白	左	回転ヘラ			90		
216	111	132	24号	支室	須磨跡	甌蓋	16.1	3.3					密	良好	灰黄	左	回転ヘラ			80		
217	111	132	24号	墓室	須磨跡	甌台杯	11.4	4.6			6.5		密	良好	灰黄	右	静止ヘラ			90		
218	111	132	24号	墓室	須磨跡	甌台杯	11.1	3.7			7.0		密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100		
219	111	132	24号	墓室	須磨跡	甌台杯	11.2	4.0			6.3		密	良好	灰白	右	静止ヘラ			90		
220	111	132	24号	墓室	須磨跡	有台杯	14.6	3.7			10.3	0.7	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			90		
221	111	132	24号	墓室	須磨跡	有台杯	15.0	(4.0)			11.2	0.6	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			67		
222	111	132	24号	墓室	須磨跡	有台杯	13.8	(2.8)					密	良好	灰白	左			口縁部	8		
223	111	132	24号	支室	須磨跡	甌付長頸蓋	10.2	24.6	16.2		7.6	0.4	密	良好	灰	右	回転ヘラ			90	ヘラ痕	
224	111	132	24号	墓室	須磨跡	フラスコ		(14.0)					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			10		
225	111	132	24号	墓室	須磨跡	長頸蓋		(8.0)	14.0				密	良好	灰白	右	回転ヘラ			胴部	25	
226	118	123	25号	甌蓋 跡込め	須磨跡	有台杯		(1.4)			9.0	0.7	密	良好	灰	左	回転ヘラ			底部	13	
227	120	133	26号	須磨跡	外蓋	甌蓋	10.5	3.8					密	良好	灰白	右	静止ヘラ			90		
228	124	133	27号	石室層土	須磨跡	甌台杯?	12.4	(1.8)					密	良好	灰	左			口縁部	10		
229	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.6	(1.9)					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			天井部	78	
230	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.6	(1.9)					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			天井部	8	
231	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.7	(2.2)					密	良好	灰	右			口縁部	5		
232	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.6	(2.4)					密	良好	灰白	右			口縁部	6		
233	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.8	3.2					密	良好	灰	右	回転ヘラ			13		
234	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.4	3.3					密	良好	灰黄	右	静止ヘラ			13		
235	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.0	(2.6)		11.9			密	良好	灰黄	右			口縁部	13		
236	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	8.0	(3.2)		10.9			密	良好	灰黄	右			口縁部	13		
237	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	8.2	3.7		10.5			密	良好	灰	右	回転ヘラ			25		
238	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	8.3	(2.5)		10.0			密	良好	灰白	左			口縁部	10		
239	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋	9.5	(2.3)		11.6			密	良好	灰黄	右			口縁部	13		
240	128	134	28号	墳丘	須磨跡	杯蓋		(2.3)					密	良好	灰	右	回転ヘラ			杯部	25	
241	128	134	28号	墳丘	須磨跡	返蓋	9.0	(1.8)		11.6			密	良好	灰黄	右			口縁部	10		
242	128	134	28号	墳丘	須磨跡	返蓋	9.0	(2.2)		11.6			密	良好	灰黄	左			口縁部	13		
243	128	134	28号	墳丘	須磨跡	甌台杯	10.0	(3.0)					密	良好	灰黄	右			口縁部	13		
244	128	134	135	28号	墳丘	須磨跡	甌台杯	11.4	3.1				6.6	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			33	
245	128	134	28号	墳丘	須磨跡	蓋部(小甌蓋)		(1.6)					密	良好	灰	不明	回転ヘラ			天井部	6	
246	128	134	28号	墳丘	須磨跡	返蓋(小甌蓋)		(2.3)					密	良好	黄灰	右	回転ヘラ			天井部	23	

建物番号	所在地	国名	名称	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	受胎後	胎距	胎高	胎土	焼成	色調	輪軸方向	外周調整	内面調整	持ち手形状	残存率 (%)	備考	
247	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	15.2	(2.2)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ		40		
248	128	134	28号	墳丘	須恵系	横置	15.4	(2.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	13	
249	128	134	28号	墳丘	須恵系	横置	15.2	(1.9)						密	良好	灰黄	左			口縁部	17	
250	128	134	28号	墳丘	須恵系	横置	15.6	(1.6)						密	良好	灰白	右			口縁部	2	
251	128	134	28号	墳丘	須恵系	横置	14.9	(2.2)						密	良好	灰黄	右			口縁部	6	
252	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	13.4	(3.8)						密	良好	灰	左			口縁部	25	
253	128	134	28号	墳丘	須恵系	聯合杯	11.4	(2.9)						密	良好	灰黄	右			口縁部	25	
254	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	13.5	(4.0)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ		口縁部	14	
255	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	13.1	(3.2)			0.7	0.5		密	良好	灰白	右			口縁部	11	
256	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	(3.1)				10.4	0.4		密	良好	灰黄	左	回転ヘツ		口縁部	13	
257	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	(1.1)				10.2	0.5		密	良好	灰黄	左?	加輪ヘツ	ナブ	底部	29	
258	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	(2.2)				9.9	0.5		密	良好	灰	左	加輪ヘツ		底部	33	
259	128	134	28号	墳丘	須恵系	平瓶	9.7	(3.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	28	
260	128	134	28号	墳丘	須恵系	平瓶	10.6	(2.0)						密	良好	灰黄	不明			口縁部	5	
261	128	134	28号	墳丘	須恵系	長頸蓋	(9.2)							密	良好	灰白	右			口縁部	10	
262	128	134	28号	墳丘	須恵系	台付長頸蓋	(5.1)				10.2	0.3		密	良好	灰白	右	回転ヘツ		底部	13	
263	128	134	28号	墳丘	須恵系	台付長頸蓋	(2.4)				8.1	0.3		密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		底部	13	
264	128	134	28号	墳丘	須恵系	高杯	(3.2)				10.0			密	良好	灰黄	右			胴部	13	
265	128	134	28号	墳丘	須恵系	平瓶	(1.7)							密	良好	灰黄	右			胴部	5	
266	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	16.9	3.8						密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		口縁部	56	
267	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	14.8	(1.4)						密	良好	灰白	左			口縁部	5	
268	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	14.9	(2.3)						密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		口縁部	5	
269	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	(3.8)							密	良好	灰白	右	回転ヘツ		口縁部	26	
270	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	15.0	(2.2)						密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		口縁部	10	
271	128	133	28号	墳丘	須恵系	横置	14.5	(2.5)						密	良好	灰白	右	回転ヘツ		口縁部	8	
272	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	(2.3)					9.8	0.4		密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		底部	20
273	128	134	28号	墳丘	須恵系	有台杯	12.2	(2.0)						密	良好	灰黄	左			口縁部	8	
274	128	134	28号	墳丘	須恵系	無台杯	(3.4)							密	良好	灰白	右	静止ヘツ		底部	100	
275	135	135	30号	墳丘	須恵系	長頸蓋	(2.8)	16.0						密	良好	灰黄	右			胴部	5	
276	135	135	30号	墳丘	須恵系	長頸蓋	(4.5)							密	良好	灰黄	不明			胴部	5	
277	135	135	30号	墳丘	須恵系	横置	(4.1)							密	良好	灰黄	不明			胴部	5	
278	142	136	30号	石室	須恵系	横置	9.6	(1.8)		11.9				密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		口縁部	13	
279	142	136	30号	石室	須恵系	横置	15.0	(1.3)						密	良好	灰黄	右			口縁部	7	
280	142	136	30号	石室	須恵系	横置	16.0	(1.1)						密	良好	灰黄	右			口縁部	7	
281	142	136	30号	石室	須恵系	横置	15.7	4.2						密	良好	灰白	右	回転ヘツ		口縁部	90	
282	142	136	30号	石室	須恵系	有台杯	14.8	4.2			11.0	0.4		密	良好	灰白	右	回転ヘツ		口縁部	90	
283	142	136	30号	石室	須恵系	台付長頸蓋	(21.2)	16.9			7.2	0.8		密	良好	灰白	左	回転ヘツ		口縁部	89	
284	142	136	30号	石室	須恵系	長頸蓋	(13.9)	17.1						密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		胴部	50	
285	145	137	31号	周溝	須恵系	杯蓋	7.6	(2.5)						密	良好	灰黄	右			口縁部	17	
286	145	137	31号	周溝	須恵系	杯蓋?	(1.0)				6.2			密	良好	灰白	左	回転ヘツ		底部	25	
287	145	137	31号	墳丘	須恵系	高蓋	8.8	(1.1)		10.8	1			密	良好	灰白	右			口縁部	7	
288	145	137	31号	墳丘	須恵系	高蓋	9.0	(1.0)		10.9				密	良好	灰黄	右			口縁部	8	
289	145	137	31号	周溝	須恵系	横置	(1.7)							密	良好	灰黄	右	回転ヘツ		天井部	5	
290	145	137	31号	周溝	須恵系	横置	16.0	(2.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	50	
291	145	137	31号	周溝	須恵系	横置	15.6	(2.2)						密	良好	灰黄	右			口縁部	4	
292	145	137	31号	墳丘	須恵系	有台杯	13.1	(3.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	6	
293	145	137	31号	墳丘	須恵系	有台杯	(1.8)				10.5	0.5		密	良好	灰黄	右			底部	17	
294	145	137	31号	墳丘	須恵系	平瓶	6.4	(2.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	13	
295	145	137	31号	周溝	須恵系	短頸蓋	5.5	(2.7)						密	良好	灰黄	右			口縁部	50	
296	150	137	31号	石室	須恵系	平瓶	6.7	(4.4)						密	良好	灰白	右			口縁部	25	
297	150	137	31号	石室	須恵系	高杯	(5.5)							密	良好	灰白	右			胴部	5	
298	150	137	31号	石室	須恵系	無蓋高杯	15.2	11.1				9.8		密	良好	灰白	右	ナブ		口縁部	50	
299	155	138	30号	周溝	土師系	胴付蓋	19.8	(4.1)						密	良好	灰	不明			口縁部	8	
300	160	138	30号	石室	須恵系	長頸蓋	(5.3)	15.8						密	良好	灰黄	右			胴部	20	
301	170	138	36号	周溝	須恵系	平瓶	9.8	(1.8)						密	良好	灰	左			口縁部	8	
302	170	138	36号	周溝	須恵系	杯蓋	7.9	(1.5)			8.6			密	良好	灰	左			口縁部	9	
303	170	138	36号	周溝	須恵系	杯蓋	(1.7)							密	良好	灰	左	静止ヘツ		底部	100	
304	170	138	36号	周溝	須恵系	長頸蓋	(3.3)	13.0						密	良好	灰黄	右			胴部	25	
305	175	138	36号	石室	須恵系	長頸蓋	4.6	2.9		8.9				密	良好	灰白	左	回転ヘツ		口縁部	25	
306	175	138	36号	石室	須恵系	胴付長頸蓋	7.1	25.1	13.4		8.3	3.2		密	良好	灰	右	回転ヘツ		口縁部	90	
307	175	138	36号	石室	須恵系	杯蓋	9.4	(3.3)						密	良好	灰	右	回転ヘツ		口縁部	25	
308	175	138	36号	石室	須恵系	杯蓋	9.0	(2.3)						密	良好	灰	右			口縁部	20	
309	175	138	36号	石室	須恵系	無台杯	10.8	3.5				6.2		密	良好	灰	左	回転ヘツ		口縁部	100	
310	175	138	36号	石室	須恵系	無蓋高杯	11.3	(2.4)						密	良好	灰	右			口縁部	5	
311	175	138	36号	石室	須恵系	平瓶	(6.8)							密	良好	灰白	右			胴部	33	

遺物 番号	押部 番号	図面 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大 径	交差 径	底厚 径	器厚 高	胎土	焼成	色調	釉薬	外周 調整	内面 調整	洗存 部位	洗存 (%)	備考
313	177	139	37号	埴江	須恵部	横蓋?		(2.2)					密	良好	灰白	左	回転ヘラ			20	
314	177	139	37号	埴江	須恵部	横蓋?		(3.0)					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			40	
315	177	139	37号	埴江	須恵部	フラスコ		(18.8)	18.0				密	良好	緑灰黄	右	回転ヘラ			40	
316	181	140	37号	石室横乱	須恵部	横蓋	14.4	(1.8)					密	良好	灰	右				7	
317	181	140	37号	石室横乱	須恵部	横蓋	14.7	(2.1)					密	良好	灰	右				6	
318	181	140	37号	石室横乱	須恵部	有台杯	14.8	4.8			10.4	0.5	密	良好	灰	右	回転ヘラ			6	
319	181	140	37号	石室横乱	須恵部	有台杯	14.5	4.4			10.4	0.8	密	良好	灰	右	回転ヘラ			75	ヘラ番号 [一]
320	181	140	37号	石室横乱	須恵部	有台杯		(0.9)			9.8	0.3	密	良好	灰黄	左	回転ヘラ			26	
321	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	フラスコか 長柄		10.2	(8.7)				密	良好	灰黄	右				33	
322	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	長柄	9.4	(4.0)					密	良好	灰	右				25	
323	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	長柄	9.8	(8.6)					密	良好	灰白	右				40	
324	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	長柄	10.7	(5.8)					密	良好	灰白	右				50	
325	181	141	37号	石室横乱	須恵部	長柄		(5.8)					密	良好	灰白	左				10	
326	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	有付長縁蓋	9.7	26.7	17.4		12.6	2.8	密	良好	灰白	左	回転ヘラ			80	
327	181	140 142	37号	石室横乱	須恵部	有付長縁蓋		(13.3)	16.3		9.4	0.4	密	良好	灰白	左	回転ヘラ			80	高台 ソダ
328	181	140 142	37号	石室横乱	須恵部	有付長縁蓋		(16.1)	16.3		6.8	0.5	密	良好	灰白	右	回転ヘラ			75	
329	181	140 141	37号	石室横乱	須恵部	有付長縁蓋		(13.0)	17.4		8.9	1.0	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			50	
330	186	142	38号	周津	須恵部	返蓋	6.4	3.7	9.4				密	良好	灰白	右	回転ヘラ			50	
331	186	142	38号	周津	須恵部	有付長縁蓋		(3.4)			9.7	0.6	密	良好	灰黄	左	回転ヘラ			40	
332	186	142	38号	周津	須恵部	平皿	6.6	(2.6)					密	良好	灰黄	左				17	
333	186	142	38号	埴江	須恵部	有付長縁蓋				9.3			密	良好	灰	左				6	
334	186	142	38号	周津	須恵部	長縁蓋		(2.3)					密	良好	灰	右				50	
335	186	142	38号	周津	須恵部	埴		(8.6)			6.8		密	良好	灰	右	静止ヘラ			20	
336	190	143	39号	周津	須恵部	横蓋		(2.0)					密	不良	灰白	左	回転ヘラ				
337	190	143	39号	周津	須恵部	横蓋		(3.0)					密	良好	灰白	左	回転ヘラ				
338	190	143	39号	周津	須恵部	横蓋		(3.1)					密	良好	灰白	左	回転ヘラ				
339	190	143	39号	周津	須恵部	有台杯		(1.3)			9.7	0.4	密	良好	灰白	左	回転ヘラ			13	
340	190	143	39号	周津	須恵部	有台杯		(2.0)			10.9	0.6	密	良好	黄灰	左	回転ヘラ			75	
341	190	143	39号	周津	須恵部	有台杯		(2.6)			10.2	0.4	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			底部	
342	190	143	39号	周津	須恵部	有台杯		(1.1)			10.0	0.6	密	良好	灰白	右	回転ヘラ			20	
343	190	143	39号	周津	須恵部	有台杯		(2.2)			10.2	0.5	密	良好	灰白	左	回転ヘラ			底部	
344	190	143	39号	周津	須恵部	杯蓋		(1.7)			3.7		密	良好	灰	右	回転ヘラ			底部	
345	191	143	39号	埴江	須恵部	杯蓋	8.0	(2.7)					密	良好	灰	左	回転ヘラ			13	
346	191	143	39号	埴江	須恵部	杯蓋		(1.8)		10.8			密	良好	灰	右	回転ヘラ			8	
347	191	143	39号	埴江	須恵部	返蓋	7.4	(2.2)		9.0			密	良好	灰	左	回転ヘラ			6	
348	191	143	39号	埴江	須恵部	輪縁	14.6	(1.8)					密	良好	黄灰	右				6	
349	191	143	39号	埴江	須恵部	有台杯		(1.7)			9.4	0.5	密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			13	
350	191	143	39号	埴江	須恵部	有台杯		(1.2)			9.9	0.4	密	良好	灰黄	左	回転ヘラ			26	
351	191	143	39号	埴江	須恵部	有台杯		(2.3)			9.6	0.8	密	良好	灰	左	回転ヘラ			76	
352	191	143	39号	埴江	須恵部	有台杯		(1.6)			12.3	0.5	密	良好	灰白	右	回転ヘラ			底部	
353	191	143	39号	埴江	須恵部	平皿	8.6	(4.9)					密	良好	灰	左				17	
354	191	143	39号	埴江	須恵部	高杯?		(1.5)			6.0		密	良好	灰	右				25	
355	191	143	39号	埴江	須恵部	高杯?		(2.8)					密	良好	灰白	右				23	
356	191	144	39号	埴江	須恵部	長縁蓋		(8.1)					密	良好	灰白	右				67	
357	191	143	39号	埴江	須恵部	長縁蓋		(6.6)					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			25	
358	194	144	39号	石室	須恵部	返蓋	6.3	2.4	8.8				密	良好	灰白	左	回転ヘラ			97	
359	194	144	39号	石室横乱	須恵部	横蓋		(2.6)					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			25	
360	194	144	39号	石室横乱	須恵部	横蓋	13.4	(1.3)					密	良好	灰白	右				8	
361	194	144	39号	石室横乱	須恵部	無蓋高杯	14.6	(2.3)					密	良好	灰	右				9	
362	194	144	39号	石室横乱	須恵部	平皿か 長縁蓋	7.7	(4.4)					密	良好	灰白	右				25	
363	194	144	39号	石室横乱	須恵部	長縁蓋		(6.4)	15.6				密	良好	灰白	右				25	
364	200	146	40号	周津	須恵部	有付長縁蓋	9.0	21.6	14.7		8.1	0.8	密	良好	灰	左	回転ヘラ			76	
365	204	146	41号	周津	須恵部	灰白蓋	16.9	36.7	24.0		14.2	0.5	密	良好	灰白	左	回転ヘラ			89	ヘラ番号 [11]
367	209	146	42号	周津	須恵部	横蓋		(3.3)					密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			67	
368	209	146	42号	周津	須恵部	横蓋	16.7	(1.6)					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			8	
369	209	146	42号	周津	須恵部	横蓋	15.5	(1.8)					密	良好	灰黄	右				9	
370	209	146	42号	周津	須恵部	横蓋		(2.2)					密	不良	灰	右	回転ヘラ			33	
371	209	146	42号	周津	須恵部	有台杯	15.0	(3.4)					密	不良	灰	右	回転ヘラ			14	
372	209	146	42号	周津	須恵部	有台杯	15.0	(3.0)					密	良好	灰白	右				14	
373	209	146	42号	周津	須恵部	有台杯	13.0	(3.4)					密	良好	灰	右				10	
374	209	146	42号	周津	須恵部	有台杯		(2.2)			8.0	0.4	密	良好	灰	右				13	
375	209	146	42号	周津	須恵部	無蓋高杯	15.8	(6.0)					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			33	
376	209	146	42号	周津	須恵部	無蓋高杯		(3.0)			11.9		密	良好	灰白	右				14	
377	209	146	42号	周津	須恵部	平皿	11.2	(5.8)					密	良好	灰白	右				33	
378	209	146	42号	周津	須恵部	平皿		(4.2)			5.8		密	良好	灰黄	右	回転ヘラ			17	
379	209	146	42号	埴江	須恵部	有台杯か 無蓋高杯	15.4	(4.1)					密	良好	灰白	右				6	
380	209	146	42号	埴江	須恵部	蓋縁	8.7	(4.6)					密	良好	灰黄	不明				25	

建物番号	棟別番号	図面番号	古橋名	出土位置	種類	部種	口径	高さ	最大径	受胎径	底面径	底面高	胎土	焼成	色調	輪軸方向	外耳調整	内耳調整	残存部位	残存率(%)	備考	
381	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	甗台杯	15.0	4.6			10.3	0.6		密	良好	灰白	右	回転ヘラ		67		
382	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	甗台杯	10.2	(1.8)						密	良好	灰黄	不明			口縁部	10	
383	214	147 148	42号	石室	須磨器	甗高杯	16.2	(3.8)						密	良好	灰	右			口縁部	25	
384	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	甗高杯	7.0	(3.6)						密	良好	灰白	右			口縁部	25	
385	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	甗高杯		(3.9)						密	良好	灰黄	右			胴部	20	
386	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	高杯		(1.9)			11.3			密	良好	灰白	左			胴部	17	
387	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	高杯		(1.3)			11.0			密	良好	灰白	右			胴部	6	
388	214	147 148	42号	石室	須磨器	台付長頸壺	10.2	23.9	16.0		8.7	0.8		密	良好	灰白	右	回転ヘラ			60	
389	214	147 148	42号	石室横土	須磨器	フラスコ		(16.3)	19.5					密	良好	灰白	右	回転ヘラ		胴部	50	
390	214	147 148	42号	石室横土	土師器	壺	16.2	(2.8)						密	良好	黄沢	不明			口縁部	8	内外面赤色
415	218	150	43号	岡渡	須磨器	横壺	15.9	4.0						密	良好	灰白	右	回転ヘラ			60	
416	218	150	43号	岡渡	須磨器	甗台杯		(1.0)			8.9	0.5		密	良好	灰白	右	回転ヘラ		底部	25	
417	218	150	43号	岡渡	須磨器	甗台杯	13.6	4.2						密	良好	灰白	右	回転ヘラ			17	
418	218	150	43号	岡渡	須磨器	甗台杯	14.4	4.1						密	良好	灰白	左	回転ヘラ		杯部	6	
419	218	150	43号	岡渡	須磨器	甗台杯	14.2	(3.7)						密	良好	灰白	右	回転ヘラ		口縁部	13	
420	218	150	43号	岡渡	須磨器	広口壺		(5.0)			14.2	0.5		密	良好	灰白	右	回転ヘラ		底部	17	
421	225	149 150	43号	石室	須磨器	甗壺	9.1	3.1	11.0					密	良好	灰	右	回転ヘラ			90	
422	225	149 150	43号	石室	須磨器	甗壺	9.4	3.3	11.6					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
423	225	149 150	43号	石室	須磨器	甗壺	9.8	3.7	11.9					密	良好	灰白	左	回転ヘラ			90	
424	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.3	3.2	11.5					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100	
425	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.2	3.4	11.2					密	良好	黄沢	右	回転ヘラ			100	
426	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	10.0	3.3	12.1					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100	
427	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.5	3.3	11.6					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			100	
428	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.5	3.5	11.9					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
429	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.6	3.6	11.4					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
430	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	9.4	3.2	11.5					密	良好	灰白	右	回転ヘラ	ナゲ		90	
431	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	10.2	3.8	11.9					密	良好	灰黄	不明	回転ヘラ	ナゲ		90	
432	225	149 151	42号	石室	須磨器	甗壺	10.0	3.8	11.7					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
433	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	10.3	3.6	12.3					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
434	225	149 151	43号	石室	須磨器	甗壺	10.6	3.7	12.6					密	良好	灰白	左	回転ヘラ			90	
435	225	149 151	42号	石室	須磨器	甗壺	10.8	3.6	12.7					密	良好	灰白	右	回転ヘラ			90	
436	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.4	3.8						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			100	
437	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	11.0	4.0						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			60	
438	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.3	3.4						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			100	
439	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.4	3.7						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			60	
440	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.8	4.0						密	良好	灰黄	右	静止ヘラ			100	
441	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	11.0	(3.4)						密	良好	灰黄	右	回転ヘラ?			33	
442	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	11.0	3.4						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			100	
443	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.5	4.0						密	良好	黄沢	右	静止ヘラ			67	
444	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.9	4.1						密	良好	黄沢	右	静止ヘラ			67	
445	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.5	3.8						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			90	
446	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.6	3.8						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			100	
447	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	10.7	3.7						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			90	
448	225	149 152	43号	石室	須磨器	甗台杯	11.3	3.6						密	良好	灰白	右	静止ヘラ			88	
449	225	150	42号	横渡岡土	須磨器	甗高杯		(1.6)						密	良好	黄沢	右	回転ヘラ		天井部	10	
450	225	150	42号	横渡岡土	須磨器	甗壺	10.0	(1.2)	12.5					密	良好	黄沢	不明			口縁部	7	
451	225	150	42号	横渡岡土	須磨器	甗台杯	11.0	(1.6)						密	良好	灰白	右			口縁部	20	

大規模C古墳群の調査

遺物番号	探検番号	図版番号	古墳名	出土位置	種類	副葬	口径	器高	最大径	受部径	底径	底高	胎土	地味	色調	輪城方向	外面調整	内面調整	残存部位	残存(%)	備考
482	228	154	45号	周溝	須恵器	飯倉杯?	13.2	3.5						赤	良好	灰	右	回転ヘラ		20	ヘラ記号 [-]
483	223	154	46号	周溝	須恵器	杯蓋	9.7	3.5						赤	良好	灰白	右	回転ヘラ		25	
484	233	154	46号	周溝	須恵器	杯蓋	16.2	(2.4)		12.2				赤	良好	灰	右	回転ヘラ		17	口縁部
485	233	154	46号	周溝	須恵器	平瓶分母		(1.5)						赤	良好	灰	右	回転ヘラ		25	胴部
486	238	154	46号	石室	須恵器	杯蓋	10.0	4.2						赤	良好	灰白	右	回転ヘラ		60	ヘラ記号 [-]
487	238	154	46号	石室	須恵器	杯蓋	10.1	2.3						赤	良好	灰	右	静止ヘラ	ナゲ	100	ヘラ記号 [-]
488	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯蓋	9.5	2.1					赤	良好	灰白	左	回転ヘラ		80	ヘラ記号 [-]
489	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯蓋	10.3	2.1					赤	良好	青灰	左	静止ヘラ	ナゲ	50	ヘラ記号 [-]
490	238	154	46号	石室	須恵器	杯蓋	9.0	2.4						赤	良好	灰	右	回転ヘラ	ナゲ	40	
461	238	153	154	46号	石室	須恵器	杯蓋	9.2	3.3					赤	良好	灰	右	静止ヘラ		67	
482	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯蓋	9.3	3.2					赤	良好	灰	右	回転ヘラ		67	
483	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯蓋		(2.2)					赤	良好	灰白	右	回転ヘラ	天井部	40	
484	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	8.8	3.0	10.7				赤	良好	灰白	左	回転ヘラ		75	ヘラ記号 [-]
486	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	8.5	3.5		10.1			赤	良好	灰白	右	静止ヘラ		90	ヘラ記号 [-]
488	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	8.1	3.4		10.0			赤	良好	灰白	右	回転ヘラ		90	ヘラ記号 [-]
487	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	8.9	3.2	10.6				赤	良好	灰	右	静止ヘラ		88	ヘラ記号 [-]
488	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	8.3	3.5	11.0				赤	良好	灰白	右	静止ヘラ		50	ヘラ記号 [-]
489	238	153	157	46号	石室	須恵器	杯身	9.0	2.8	10.5				赤	良好	灰	右	静止ヘラ		88	ヘラ記号 [-]
470	238	153	157	46号	石室	須恵器	杯身	9.6	2.9	11.0				赤	良好	灰	右	静止ヘラ		33	ヘラ記号 [-]
471	238	153	157	46号	石室	須恵器	杯身	8.8	2.7	10.3				赤	良好	青灰	左	静止ヘラ	ナゲ	90	ヘラ記号 [-]
472	238	153	155	46号	石室	須恵器	杯身	7.9	3.2	10.0				赤	良好?	灰	右	回転ヘラ	ナゲ	90	
473	238	153	157	46号	石室	須恵器	杯身	8.0	2.9	9.8				赤	良好	灰	右	回転ヘラ	ナゲ	90	
474	238	153	157	46号	石室	須恵器	杯身	8.4	3.7	10.2				赤	良好	灰	右	回転ヘラ	ナゲ	100	
475	238	157	46号	石室	須恵器	杯身	8.2	(1.7)		16.1				赤	良好	灰白	右		口縁部	25	
476	238	153	157	46号	石室階上	須恵器	広口蓋	(6.3)						赤	良好	灰黄	右		胴部	80	
477	238	153	158	46号	石室	須恵器	平瓶	4.9	13.2	13.2				赤	良好	灰白	右	回転ヘラ		90	
478	238	153	158	46号	石室	須恵器	平瓶	6.6	(17.7)	15.8				赤	良好	灰黄	左	回転ヘラ		40	
481	243	158	47号	石室障子	須恵器	飯倉杯	8.8	(4.4)						赤	良好	青灰	右		口縁部	67	
482	243	158	47号	石室障子	須恵器	台付長頸瓶	7.7	16.8	11.9		6.4	0.6		赤	良好	灰黄	右	回転ヘラ		60	
483	247	159	48号	周溝	須恵器	飯蓋	(3.4)							赤	良好	灰黄	右	回転ヘラ		20	
484	247	159	48号	周溝	須恵器	飯蓋分母	(2.3)							赤	良好	灰	右	回転ヘラ		30	
485	247	159	48号	周溝	須恵器	杯蓋	9.7	3.6						赤	良好	灰	右	回転ヘラ		75	ヘラ記号 [-]
485	247	158	48号	周溝	須恵器	飯倉杯	(2.2)							赤	良好	青灰	右	静止ヘラ		28	直部
487	247	158	48号	周溝	須恵器	飯倉杯	11.0	(2.7)						赤	良好	灰白	右		口縁部	13	
488	247	158	48号	周溝	須恵器	飯	17.0	(2.8)						赤	良好	黄灰	不明		口縁部	40	
489	247	158	48号	周溝	須恵器	飯蓋	10.2	(2.8)						赤	良好	灰白	右		口縁部	20	
490	247	159	48号	周溝	須恵器	飯蓋分母	16.0	10.9						赤	良好	黄灰	右		口縁部	35	
491	251	159	48号	墳丘・掘溝	須恵器	平瓶	(4.6)	16.1						赤	良好	黄灰	左		胴部	20	
492	251	159	48号	掘溝内 石室	須恵器	平瓶	(3.0)							赤	良好	灰白	右		胴部	33	
493	251	159	48号	墓室内	須恵器	平瓶	(2.3)				8.5			赤	良好	灰白	左		口縁部	25	
495	262	161	50号	周溝	須恵器	杯身	8.0	(1.6)		9.8				赤	良好	灰白	右		口縁部	20	
496	262	161	50号	周溝	須恵器	杯身	8.9	(2.1)		10.4				赤	良好	灰	右		口縁部	80	
497	262	161	50号	周溝	須恵器	杯身	(1.7)							赤	良好	灰白	右	回転ヘラ		10	ヘラ記号 [-]
499	262	160	50号	周溝	須恵器	杯蓋	(2.3)							赤	良好	灰黄	右	回転ヘラ		20	天井部
499	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	10.5	(2.1)		13.0				赤	良好	灰黄	右	回転ヘラ		13	口縁部
500	262	160	50号	周溝	須恵器	台付杯	14.2	(2.0)			3.6			赤	良好	黄灰	右	静止ヘラ		29	口縁部
501	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	(2.0)							赤	良好	灰	右	回転ヘラ		75	天井部
502	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	(1.4)							赤	良好	黄灰	右	回転ヘラ		40	天井部
500	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	15.2	3.6						赤	良好	灰白	左	回転ヘラ		40	
504	262	150	104	21号	周溝	須恵器	飯蓋	16.1	2.9					赤	良好	灰	右	回転ヘラ		75	
505	262	160	50号	墳丘 周溝	須恵器	飯蓋	16.4	(2.0)						赤	良好	灰黄	左		口縁部	35	
506	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	16.6	3.3						赤	良好	灰黄	右	回転ヘラ	ナゲ	20	
507	262	160	50号	周溝	須恵器	飯蓋	16.2	(1.4)						赤	良好	灰	左	回転ヘラ		33	

観音番号	地区番号	地区名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	受胎径	胎体径	胎口径	胎口高	胎口色	胎口方角	胎口内径	胎口調整	胎口部位	胎口 (%)	備考			
608	262	160 164	50号	周濠	須恵器	有台杯	14.1	(4.1)					9.4	0.6	赤	良好	灰白	左	回転ヘラ	78		
609	262	161	50号	周濠	須恵器	有台杯	14.2	3.7					9.6	0.6	赤	良好	灰白	右	回転ヘラ	33		
610	262	160 164	50号	周濠	須恵器	有台杯	14.6	4.5					9.4	0.5	赤	良好	灰白	右	静止ヘラ	67		
611	262	160 164	50号	周濠	須恵器	有台杯	15.0	4.0					9.6	0.4	赤	良好	灰白	右	回転ヘラ	61		
612	262	160 164	50号	周濠	須恵器	有台杯	14.0	3.4					9.7	0.6	赤	良好	灰白	右	回転ヘラ	75		
613	262	161	50号	周濠	須恵器	有台杯	13.9	(2.4)												口縁部	49	
614	262	161	50号	周濠	須恵器	有台杯		(2.1)					9.6	0.5	赤	良好	灰白	右	回転ヘラ	底面	20	
615	262	161 164	50号	周濠	須恵器	無蓋高杯	16.6	(7.0)												杯部	20	
616	262	161	50号	周濠	須恵器	無蓋高杯	15.4	(3.7)												杯部	14	
617	262	161	60号	周濠	須恵器	無蓋高杯	16.7	(4.3)												杯部	20	
618	262	161	50号	周濠	須恵器	無蓋高杯	16.1	(4.4)												口縁部	13	
619	262	162	49号 60号	周濠	須恵器	高杯		(6.7)					8.3							脚部	60	
620	262	161 164	60号	周濠	須恵器	高杯		(8.4)												脚部	80	
621	262	161	50号	周濠	須恵器	高杯		(6.0)					12.8							脚部	14	2割2方
622	262	161	60号	周濠	須恵器	平瓶		(1.9)												脚部	5	
623	262	162	50号	周濠	須恵器	平瓶	8.9	(7.8)												脚部	20	
624	262	162 164	50号	周濠	須恵器	平瓶	8.8	11.5	12.4				4.2							底面	33	
625	262	162 164	50号	周濠	須恵器	平瓶	7.6	(13.2)	13.9											脚部	60	
626	262	162	50号	周濠	須恵器	壺		(3.2)												脚部	5	
627	263	163 164	50号	周濠	須恵器	長頸壺	9.6	(16.1)												脚部	40	
628	263	163 164	48号 50号	周濠	須恵器	台付長頸壺		(22.6)	14.8				6.0	0.5						脚部	60	
629	263	163 164	50号	周濠	須恵器	壺	9.3	24.6	15.6				7.2							脚部	90	
630	263	163 164	50号	周濠	須恵器	長頸壺	7.3	(18.4)	13.1											脚部	67	
631	262	162	50号	周濠	須恵器	長頸壺		(2.3)	15.8											脚部	40	
632	262	162	50号	周濠	須恵器	壺		(2.4)					6.3							底面	10	
633	262	163	50号	周濠	須恵器	台付長頸壺		(3.1)					7.9	0.9						底面	40	
634	263	162	50号	周濠	須恵器	台付長頸壺		(2.7)					8.4	0.7						底面	28	ヘラ記号 [-]
635	268	165	50号	石室	土師器	壺	11.9	4.5												内外底面	80	内外底面 赤銅
636	268	164 166	50号	石室	須恵器	フラスコ	10.5	26.0	16.7											脚部	100	
638	272	165	51号	周濠	須恵器	杯	9.5	3.0					4.6							口縁部	17	ヘラ記号 [-]
639	272	165	51号	周濠	須恵器	杯	7.6	2.5					9.4	3.0						口縁部	11	ヘラ記号 [-]
640	272	165	51号	周濠	須恵器	長頸壺		(4.3)	15.6											脚部	33	
641	272	165	51号	周濠	須恵器	平瓶小 埋込部		(4.4)					8.2							底面	10	ヘラ記号 [-]
642	272	165	51号	周濠	須恵器	長頸壺		(13.0)	15.7											脚部	20	
643	277	166	51号	石室	須恵器	平瓶	7.3	16.5	14.3				6.2							脚部	90	
644	277	166	51号	石室	須恵器	高杯		(6.1)												杯部 ~ 脚部	20	
645	277	166	51号	石室	須恵器	長頸壺		(3.0)	16.2											杯部	10	
646	282	166	53号	横穴	須恵器	壺	8.5	(1.6)	10.6											口縁部	20	
649	287	166	53号	横穴	須恵器	台付長頸壺	11.8	24.3	16.4				8.1	1.1						口縁部	90	
650	287	166	53号	横穴	土師器	壺		(6.0)												杯部	5	
651	287	166	53号	横穴	土師器	壺		(7.5)												杯部	5	
653	284	167	54号	石室崩落土	須恵器	高杯		(4.4)												杯部 ~ 脚部	20	
660	299	S206	礮土	須恵器	フラスコ	7.6	(1.4)		10.2											口縁部	16	
661	299	S206	礮土	須恵器	フラスコ?		(1.2)													脚部	10	
662	299	S206	礮土	須恵器	長頸壺		(4.9)													口縁部	17	
663	299	S206	礮土	山形礮	壺	8.0	(1.8)													口縁部	10	
664	299	169	S206	礮土	山形礮	壺	8.2	(1.9)												口縁部	17	
665	299	S206	礮土	山形礮	壺		(1.5)						4.1							底面	33	坩合台用
666	299	169	S206	礮土	山形礮	壺		(3.1)					7.6	0.6						底面	20	高台付
667	299	169	S206	礮土	山形礮	片口鉢	16.8	(4.4)												口縁部	16	
668	299	S206	礮土	山形礮	壺	18.0	(4.4)													口縁部	20	
669	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.4)						7.0	0.8						杯部	40	
670	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.4)						7.1	0.6						底面	20	高台付
671	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.9)						8.6	0.7						底面	16	高台付
672	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.0)						7.2	0.7						底面	20	高台付
673	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.8)						7.7	0.8						底面	33	高台付
674	299	S206	礮土	山形礮	壺		(2.5)						7.5	0.8						底面	20	高台付
675	299	169	S206	礮土	山形礮	壺		(1.9)					7.3	0.6						底面	20	高台付
676	299	S206	礮土	山形礮	壺		(1.9)						8.2	0.4						底面	25	高台付

大感軌C占領群の調査

乗組番号	押出番号	区画番号	古蹟名	出土位置	種類	副産	口径	重量	最大径	受部径	底脚径	底脚径	脚土	地色	色調	輪軸方向	外周調整	内周調整	残存割合	残存(%)	備考	
577	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.7)			7.9	0.7	密	良好	灰黄	右	未調整		底部	60	高台特産	
578	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			8.0	0.3	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	26	高台特産	
579	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.2)			9.2	0.6	密	良好	灰黄	右	不明		底部	33	高台特産	
580	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			8.1	0.7	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	50	高台特産	
581	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.7)			7.1	0.7	密	良好	黄灰	左	未調整		底部	35	高台特産	
582	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(1.8)			8.1	0.6	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	25	高台特産	
583	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			7.7	1.2	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	33	高台特産	
584	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(1.8)			6.9	0.4	密	良好	黄灰	右	縁ナブ		底部	22	高台特産	
585	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			7.1	0.8	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	50		
586	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.6)			7.2	0.7	密	良好	黄灰	左	ナブ		底部	30	高台特産	
587	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.8)			6.8	0.5	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	20	高台特産	
588	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.8)			7.4	0.7	密	不良	黄灰	右	ナブ		底部	26	高台特産	
589	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.7)			7.7	0.6	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	60		
590	299		S806	覆土	山茶碗	碗		(2.7)			7.5	0.7	密	良好	灰黄	左	ナブ		底部	70	高台特産	
591	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.1)			7.7	0.6	密	良好	黄灰	右	未調整		底部	33	高台特産 盛台特産 盛台特産	
592	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			7.2	0.7	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	33		
593	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.3)			8.3	0.6	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	75	高台特産	
594	299	169	S806	覆土	山茶碗	碗		(2.5)			6.7	0.6	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	88	高台特産	
595	299	169	S806	覆土	山茶碗	大茶鉢		(4.3)			15.4	2.2	密	良好	黄灰	右	縁ナブ	ナブ	底部	33		
596	299	169	S806	覆土	山茶碗	大茶鉢		(5.7)			12.8	1.9	密	良好	黄灰	右	縁ナブ	ナブ	底部	8		
597	299	171	S806	覆土	香爐	盤		(3.9)						密	良好	黄灰	不明		底部	5	外周縁子 タタキ	
598	300	167	3区	表土	須恵器	杯蓋		(2.0)						密	良好	灰	左	縁ナブ	ナブ?	底部	50	へウ型子 (タ)
599	300	17号	周辺	須恵器	杯蓋	杯蓋	14.0	(2.1)						密	良好	灰黄	左			口縁部	13	
600	300	17号	周辺	須恵器	杯蓋	杯蓋	14.8	(2.0)						密	良好	灰黄	右			口縁部	9	
601	300	17号	周辺	須恵器	有台杯	有台杯		(2.0)				9.3	0.6	密	良好	灰黄	右			底部	13	
602	300	168	19号	周辺	須恵器	杯蓋		(2.3)				3.4		密	良好	灰黄	左	縁ナブ		底部	33	
603	300	167	21号	周辺	須恵器	杯蓋		(7.4)						密	良好	灰	左			底部	17	
604	300		21号	周辺	須恵器	蓋形碗		8.0	(3.7)					密	良好	灰黄	右			口縁部	10	
605	300		22号	周辺	須恵器	杯蓋		8.8	(1.1)	10.8				密	良好	灰黄	右			口縁部	9	
606	300	168	22号	周辺	須恵器	杯蓋		8.9	(2.4)	10.8				密	良好	灰黄	右	縁ナブ		口縁部	11	
607	300	168	22号	周辺	須恵器	蓋形碗		10.2	(1.9)					密	良好	灰黄	左			口縁部	20	
608	300	167	22号	周辺	須恵器	有台杯?		14.0	(3.2)			10.8		密	良好	灰白	左	縁ナブ		底部	25	
609	300		22号	周辺	須恵器	杯蓋?		(3.6)						密	良好	灰黄	左			底部	20	
610	300	168	22号	周辺	須恵器	有台杯		(2.1)				8.0	0.5	密	良好	灰白	左	縁ナブ		底部	80	
611	300		22号	周辺	須恵器	有台杯		(1.9)				10.3	0.5	密	良好	灰黄	右	縁ナブ		底部	20	
612	300		25号	周辺	須恵器	有台杯		(1.3)				8.5	0.6	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	5	
613	300		25号	周辺	須恵器	有台杯		(1.9)				9.4	0.7	密	良好	灰	右			底部	5	
614	300		25号	周辺	須恵器	有台杯		(2.4)				8.8	0.4	密	良好	灰	右			底部	10	
615	300	167	25号	周辺	須恵器	杯蓋		(2.2)						密	良好	灰黄	右	縁ナブ		口縁部	20	
616	300		25号	周辺	須恵器	蓋形碗		15.0	(1.7)					密	良好	灰黄	右			口縁部	8	
617	300	168	25号	周辺	須恵器	無蓋茶杯		13.4	(2.8)					密	良好	灰	右			口縁部	13	
618	300	168	25号	周辺	須恵器	平皿		7.8	(4.4)					密	良好	灰黄	右			口縁部	13	
619	300		25号	周辺	須恵器	長頸瓶?		(4.1)						密	良好	灰黄	左			底部	5	
620	300	168	27号	周辺	須恵器	有台杯		14.2	4.6			9.2	0.7	密	良好	灰白	左	縁ナブ	ナブ	底部	17	
621	300		27号	周辺	須恵器	杯蓋		(1.4)						密	良好	灰白	右	縁ナブ		底部	10	
622	300	168	27号	周辺	須恵器	有台杯		15.8	(2.7)			8.2	0.8	密	良好	黄灰	右	縁ナブ		底部	100	
623	300	168	3区	表土	須恵器	有台杯		(1.8)				10.1	0.6	密	良好	灰	右	縁ナブ		底部	25	
624	300	168	3区	表土	須恵器	有台杯		(2.3)				10.2	0.6	密	不良	灰白	右	縁ナブ		底部	20	
625	300	168	37号	周辺	須恵器	杯蓋		10.0	(2.7)					密	良好	灰	右			口縁部	17	
626	300		37号	周辺	須恵器	蓋形碗		10.0	(2.1)					密	良好	灰白	左			口縁部	5	
627	300	167	37号	周辺	須恵器	無蓋茶杯		15.4	(4.6)	12.6				密	良好	灰白	左			底部	17	
628	300		37号	周辺	須恵器	杯蓋		15.3	(3.6)					密	良好	灰黄	右			口縁部	7	
629	300	168	38号	周辺	須恵器	有台杯		(1.8)				10.0	0.7	密	良好	灰白	右	縁ナブ		底部	13	
630	300	167	40号	周辺	須恵器	平皿		15.8	10.5			9.6		密	不良	灰白	右			底部	60	
631	300	168	4区	東側	須恵器	有台杯		(6.6)						密	良好	灰白	右			底部	50	
632	300	168	4区	東側	須恵器	有台杯		(6.3)				8.4	0.7	密	良好	黄灰	右	縁ナブ		底部	11	
633	300	170	Tr. 19	覆土	須恵器	有台杯		(1.8)				10.0	0.8	密	良好	灰白	不明	不明	不明	口縁部	30	
634	300		3区	表土	土師器	盤		(2.8)						密	良好	黄	不明			口縁部	30	
635	300	170	3区	表土	灰輪	碗		12.3	(2.9)					密	良好	灰白	右			口縁部	30	
636	300	170	3区	表土	灰輪	碗		(1.3)				6.1	0.6	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	50	盛台特産
637	300	170	3区	表土	灰輪	碗		(1.6)				7.3	0.7	密	良好	黄灰	右	縁ナブ		底部	80	高台特産 盛台特産
638	300	170	4区	東側	須恵器	碗		(1.3)				6.3	0.5	密	良好	灰黄	左	ナブ		底部	17	
639	300	170	Tr. 24	表土	灰輪	碗		(1.3)				6.2	0.6	密	良好	黄灰	右	ナブ	ナブ	底部	88	盛台特産
640	300	170	4区	表土	灰輪	碗		(1.7)				7.2	0.5	密	良好	灰	右	ナブ	ナブ	底部	25	
641	300	170	4区	東側	須恵器	長頸瓶		16.3	(7.7)					密	良好	灰黄	右			口縁部	25	
642	301	170	22号	周辺	山茶碗	小碗		(2.6)				4.8	0.5	密	良好	黄灰	右	未調整		底部	30	
643	301	170	Tr. 46	表土	山茶碗	小碗		(1.8)				5.1	0.5	密	良好	黄灰	右	ナブ		底部	33	
644	301	170	Tr. 37	表土	山茶碗	山皿		8.3	2.3			4.1		密	良好	黄灰	左	未調整		底部	90	
645	301	Tr. 48	表土	山茶碗	山皿			(1.6)				4.3		密	良好	黄灰	右	未調整		底部	100	
646	301	Tr. 41	表土	山茶碗	山皿			(1.6)				4.3		密	良好	灰白	右	縁ナブ		底部	66	
647	301	170	Tr. 41	表土	山茶碗	山皿		(2.1)				4.3		密	良好	黄灰	右	縁ナブ		底部	60	
648	301	Tr. 41	表土	山茶碗	山皿			(1.4)						密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	26	
649	301	171	33号	周辺	山茶碗	碗		17.0	(5.1)			7.8	0.6	密	良好	灰白	右	ナブ		口縁部	30	高台特産
650	301	173	33号	周辺	山茶碗	碗		16.0	(4.2)					密	良好	灰黄	右	ナブ		口縁部	30	
651	301	171	Tr. 38	表土	山茶碗	碗		18.1	5.6			7.2	0.6	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	40	高台特産
652	301	173	33号	周辺	山茶碗	碗		(4.6)				7.1	0.7	密	良好	灰黄	右	ナブ		底部	100	高台特産

演劇番号	何回	回数	古演名	出立位置	種別	種目	口役	脚高	最大	受給	定座	座席	抽	抽	色調	種別	方向	内面	内面	演出	保存	備考		
	番号								後	係	席	席	士	続	調			観	観	者	年			
663	301		33号	周辺	山系演	演		(2.9)			8.4	0.4	善	良好	灰黄	右	ナゾ			口縁部	25	高台特演 舞台転用		
664	301		33号	周辺	山系演	演		(2.2)			7.2	0.7	善	良好	灰黄	左	ナゾ			底部	25	高台特演		
665	301	173	33号	周辺	山系演	演		(4.0)			7.4	0.9	善	良好	灰黄	右	ナゾ			底部	100	高台特演		
666	301	173	33号	周辺	山系演	演		(4.1)			7.8	0.5	善	良好	黄沢	右	ナゾ			底部	100	高台特演		
667	301	171	Tr.43	表土	山系演	演		(6.1)			7.0	0.6	善	良好	灰白	右				底部		舞台転用		
668	301	171	Tr.41	表土	山系演	演		(5.8)												底部		舞台転用		
669	301	172	4区	東割谷	山系演	演		(3.0)												不明	不明	不明	20	舞台転用
660	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.9)			8.2	0.5	善	良好	黄沢	不明				不明		不明	25	高台特演
661	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.0)			7.7	0.4	善	良好	灰黄	右	ナゾ						50	高台特演
662	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.7)			7.4	0.4	善	良好	灰	右	ナゾ						25	高台特演 舞台転用
663	301		3区	表土	山系演	演		(2.4)			6.8	0.6	善	良好	灰黄	右	ナゾ						80	高台特演
664	301		Tr.48	表土	山系演	演		(2.6)			8.2	0.6	善	良好	黄沢	右	不明						11	高台特演 舞台転用
665	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.8)			8.1	0.5	善	良好	灰黄	右	ナゾ			ナゾ			33	高台特演
666	301	173	Tr.50	表土	山系演	演		(2.6)			7.0	0.8	善	良好	灰黄	右							30	高台特演 舞台転用
667	301		Tr.46	表土	山系演	演		(2.3)			8.0	0.5	善	良好	灰黄	右	ナゾ						80	高台特演 舞台転用
668	301		3区	30号周辺	山系演	演		(2.6)			7.2	0.8	善	良好	黄沢	左	ナゾ						38	高台特演 舞台転用
669	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.0)			8.2	0.4	善	良好	黄沢	右	ナゾ						23	高台特演
670	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.4)			8.4	0.7	善	良好	黄沢	右	不明						6	高台特演
671	301		Tr.42	表土	山系演	演		(1.8)			7.4	0.5	善	良好	黄沢	右	ナゾ						50	高台特演
672	301		Tr.41	表土	山系演	演		(2.0)			8.8	0.5	善	良好	灰黄	右	ナゾ						75	高台特演
673	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.0)			7.8	0.7	善	良好	黄沢	右	ナゾ						40	高台特演
674	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.8)			7.5	0.6	善	良好	灰黄	左	ナゾ						33	高台特演
675	301		Tr.33	表土	山系演	演		(2.6)			8.4	0.8	善	良好	灰白	右	ナゾ						20	高台特演
676	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.4)			8.2	0.6	善	良好	黄沢	右	不明			不明			5	高台特演
677	301		Tr.36	表土	山系演	演		(3.0)			7.7	0.7	善	良好	灰黄	右	膝ナゾ						80	高台特演
678	301		4区	東割谷	山系演	演		(1.8)			6.2	0.5	善	良好	黄沢	右	不明			不明			17	高台特演
679	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.9)			7.4	0.4	善	良好	灰黄	右	ナゾ						17	高台特演
680	301		Tr.38	表土	山系演	演		(2.4)			7.9	0.7	善	良好	灰黄	右	ナゾ						50	高台特演
681	301	173	3区	表土	山系演	演		(2.8)			7.8	0.7	善	良好	灰	右	不明						75	舞台転用
682	301		Tr.40	表土	山系演	演		(2.9)			7.3	0.8	善	良好	灰黄	右	ナゾ						40	高台特演
683	301		Tr.42	表土	山系演	演		(2.2)			7.4	0.5	善	良好	灰黄	右	ナゾ						50	高台特演
684	301		Tr.41	表土	山系演	演		(2.0)			7.3	0.5	善	良好	黄沢	右	ナゾ						13	高台特演
685	301		Tr.40	表土	山系演	演		(2.3)			7.0	0.5	善	良好	灰黄	右	ナゾ						25	高台特演
686	301		33号	周辺	山系演	演		(2.1)			7.2	0.5	善	良好	黄沢	右							20	高台特演
687	301		Tr.45	表土	山系演	演		(2.0)															50	高台特演
688	301		33号	周辺	山系演	演		(2.3)			7.4	0.7	善	良好	灰白	右	ナゾ						30	高台特演 舞台転用
689	301		3区	表土	山系演	演		(1.6)			7.2	0.6	善	良好	黄沢	右	未調整			ナゾ			5	高台特演
690	301		Tr.41	表土	山系演	演		(1.5)			7.9	0.4	善	良好	灰黄	右	未調整						17	高台特演
691	301		Tr.38	表土	山系演	演		(1.9)			7.6	0.9	善	良好	黄沢	右	ナゾ						50	高台特演
692	301	171	172	33号	周辺	山系演		(3.3)			7.4	0.6	善	良好	灰白	右	ナゾ						100	高台特演
693	302		Tr.34	表土	山系演	演		(2.8)			8.0	0.5	善	良好	灰黄	左	ナゾ						50	高台特演
694	302		Tr.38	表土	山系演	演		(3.5)			8.5	0.6	善	良好	黄沢	右	ナゾ						25	高台特演
695	302		東割谷	表土	山系演	演		(2.9)			8.7	0.8	善	良好	黄沢	右	不明			不明			20	高台特演
696	302		Tr.41	表土	山系演	演		(2.2)			8.5	0.7	善	良好	灰黄	右	ナゾ						20	高台特演
697	302		Tr.42	表土	山系演	演		(2.2)			9.2	1.0	善	良好	黄沢	右	ナゾ						33	高台特演
698	302	173	Tr.42	表土	山系演	演		(3.2)			7.1	0.4	善	良好	灰黄	右	ナゾ						100	高台特演
699	302		33号	周辺	山系演	演		(3.2)			7.2	0.6	善	良好	灰黄	右	ナゾ						50	高台特演
700	302	173	Tr.37	表土	山系演	演		(5.4)			7.0	0.7	善	良好	灰黄	右	ナゾ						100	高台特演
701	302		東割谷	表土	山系演	演		(2.2)			9.0	0.8	善	良好	黄沢	右	不明						15	高台特演
702	302		Tr.35	表土	山系演	演		(8.4)															10	高台特演
703	302		Tr.36	表土	山系演	演		(6.8)															5	高台特演
704	302	173	Tr.41	表土	山系演	演		(4.4)															5	高台特演
705	302	167	Tr.41	表土	土師演	演	20.0	(6.3)															25	高台特演
706	302	167	Tr.40	表土	土師演	演		(7.3)															20	高台特演
707	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	4	高台特演
708	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	5	高台特演
709	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	5	高台特演
710	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	5	高台特演
711	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	5	高台特演
712	302	172	4区	東割谷	瓦	平瓦																	5	高台特演

第48表 大屋敷C古墳群出土土器類数表

遺物 番号	発掘 番号	図版 番号	古墳名	出土位置	色調	底径 (cm)	高さ (cm)	乳輪 (cm)	重量 (g)	備考
53	50		17号墳	石室	緑	6	3.5	2	1g以下	
54	50		17号墳	石室	緑	6	3	1.5	1g以下	
101	71	123・124	19号墳	石室	黄緑	8	3.5	1	1g以下	
102	71	123・124	19号墳	石室	黄	6	3	1.8	1g以下	
103	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	4	1.5	1g以下	
104	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3	1.5	1g以下	
106	71	123・124	19号墳	石室	緑	4	3	1	1g以下	
106	71	123・124	19号墳	石室	緑	5	2.5	1	1g以下	
107	71	123・124	19号墳	石室	緑	5	3.5	1.5	1g以下	
108	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3	1.5	1g以下	
109	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3.5	1	1g以下	
110	71	123・124	19号墳	石室	緑	6.5	3	1.5	1g以下	
111	71	123・124	19号墳	石室	緑	5.5	3	1.5	1g以下	
112	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
113	71	123・124	19号墳	石室	緑	6.5	3	1	1g以下	
114	71	123・124	19号墳	石室	緑	5	3	1.5	1g以下	
115	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	2.5	1.5	1g以下	
116	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
117	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	2.5	1.5	1g以下	
118	71	123・124	19号墳	石室	緑	5.5	3	1.5	1g以下	
119	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3	1.5	1g以下	
120	71	123・124	19号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
121	71	123・124	19号墳	石室	緑	6.5	3	1	1g以下	
122	71	123・124	19号墳	石室	緑	6.5	4	1.5	1g以下	
123	71	123・124	19号墳	石室	緑	3.5	1.5	2	1g以下	
124	71	123・124	19号墳	石室	緑	3.5	2	1	1g以下	
125	71	123・124	19号墳	石室	緑	3.5	2	1	1g以下	
125	71	123・124	19号墳	石室	緑	4	2	1.5	1g以下	
142	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	9.5	3	2	
143	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	9.5	2	2	
144	80	124・125	20号墳	石室	緑	14	9	2.5	2	
145	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	9	3	2	
146	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	11	2.5	2	
147	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	10	3	2	
148	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	10	3	2	
149	80	124・125	20号墳	石室	緑	12	9.5	2	2	
150	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	11	2.5	2	
151	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	9	2.5	2	
152	80	124・125	20号墳	石室	緑	13.5	10	2.5	2	
153	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	10	2.5	2	
154	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	10	3	2	
156	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	9.5	3	2	
156	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	9.5	3	2	
157	80	124・125	20号墳	石室	緑	14	9.5	3.5	2	
158	80	124・125	20号墳	石室	緑	13.5	11	3.5	2	
159	80	124・125	20号墳	石室	緑	14	11	3.5	2	
160	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	10	2.5	2	
161	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	10	3.5	2	
162	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	10	3	2	
163	80	124・125	20号墳	石室	緑	13	9	3	2	
164	80	124・125	20号墳	石室	緑	12	9	2	2	
165	80	124・125	20号墳	石室	緑	12.5	10	2.5	2	
212	102	128・131	22号墳	石室	緑	13	10	3	2	
213	102	128・131	22号墳	石室	緑	12	9	2	2	
214	102	128・131	22号墳	石室	緑	13	9	3.5	2	
264	196		39号墳	石室	緑	5	3	1.5	1g以下	
391	215	147・148	42号墳	石室	緑	5	4	1.5	1g以下	
392	215	147・148	42号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
393	215	147・148	42号墳	石室	緑	5.5	3.5	1.5	1g以下	
394	215	147・148	42号墳	石室	緑	5	4	1	1g以下	
395	215	147・148	42号墳	石室	緑	6	4	1.5	1g以下	
396	215	147・148	42号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
397	215	147・148	42号墳	石室	緑	5.5	4.5	1.5	1g以下	
398	215	147・148	42号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
399	215	147・148	42号墳	石室	緑	4.5	3.5	1	1g以下	
400	215	147・148	42号墳	石室	緑	5	2.5	1.5	1g以下	
401	215	147・148	42号墳	石室	緑	5.5	3.5	1.5	1g以下	
402	215	147・148	42号墳	石室	緑	6	3.5	1.5	1g以下	
403	215	147・148	42号墳	石室	緑	5.5	3.5	1.5	1g以下	
646	278	166	51号墳	石室	緑	5.5	3	1.5	1g以下	

第49表 大屋敷C古墳群出土金属製品観察表

遺物番号	埋出	図版	古墳名	出土位置	種類	材質	内	器	備考
67	56		C19号墳	石室襖瓦	鉄	不明	残存長2.0cm、断面方形、一辺1.1cm、重量0.5g。		古墳に伴わない?
127	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	刀装具 (切刃?)	残存長4.0cm、幅1.1cm、厚さ3.5mm、断面二日月形、重量6g、内面に木質残存。		開後大刀の切刃?
128	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	刀装具 (鞘?)	銅製小?外装部曲、断面細長1-長方形、残存長3.0cm、残存幅2.0cm、残存厚さ1mm、重量3g。		
129	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	刀子	残存長10.6cm、刀部残存長7.5cm、刀幅1.4cm、棟厚さ5mm、直角平均等厚削、基は基沢に向かって先細る。基沢残存3.1cm、幅1.0cm、厚さ3mm、重量16g。		
130	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	尖狭片刃方式。鏃身無頭、残存長2.0cm、鏃身幅3mm、鏃身厚さ3mm、重量1g。		
131	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	尖狭片刃方式。鏃身無頭、残存長1.5cm、鏃身残存長9mm、幅0.8mm、厚さ3mm、鏃部断面長方形、鏃部残存長6mm、幅7mm、厚さ3mm、重量1g。		
132	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	尖狭片刃方式。鏃身無頭、残存長3.1cm、鏃身残存長2.5cm、鏃身幅7mm、鏃身厚さ3mm、鏃部断面長方形、鏃部残存長6.5cm、幅4mm、厚さ3mm、重量3g。		
133	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	薄片、断面方形、残存長1.7mm、幅4mm、厚さ3mm、重量0.3g。		
134	71	123・124	C19号墳	石室襖瓦	鉄	釘	釘身がL字形に折れ曲がる。残存長7.5cm、復元残存長11.0cm、頭部丁字形、頭部残存長1.2cm、頭部残存幅1.5cm、頭部厚さ6mm、頭部断面方形、一辺7~9mm、重量18g。		
136	71	123・124	C19号墳	石室	鉄	釘	釘身がL字形に折れ曲がる。残存長さ5.5cm、復元残存長10.0cm、頭部丁字形、頭部長8mm、頭部幅1.4cm、頭部厚さ1.1cm、釘身断面方形、一辺8mm、重量11g、釘身に木質残存。		
136	71	123・124	C19号墳	石室	鉄	釘	釘身がL字形に折れ曲がる。残存長さ5.0cm、復元残存長9.0cm、頭部丁字形、頭部残存長さ5mm、頭部幅1.2cm、頭部厚さ9mm、鏃身断面長方形、一辺8~9mm、重量18g。		
179	90	127	C21号墳	石室襖瓦	鉄	鏃?	薄片、断面方形、残存長さ2.6cm、幅4mm、厚さ4mm、重量1g。		
404	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	鏃身に金箔装を著すけている。残存長さ2.0cm、残存幅2.2cm、厚さ5mm、重量4g。		
406	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	平狭三角形式。鏃身断面平直、残存長さ1.5cm、幅1.5cm、厚さ3mm、重量1g。		
406	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	尖狭片刃方式。刀部片、残存長さ2.0cm、刀部幅7mm、刀部厚さ3mm、重量1g。		
407	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	鏃	薄片、残存長さ1.3cm、断面長方形、一辺3mm、重量0.5g。		
408	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	刀子	残存長さ6.1cm、刀部残存長さ3.1cm、幅9mm、棟厚さ3mm、両側、刀部側無頭、棟側直角削、基は基沢に向かって先細る。基沢残存2.0cm、頭部7mm、基部断面長方形、棟厚さ3mm、重量3g、基に木質残存。		
409	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	刀子	残存長さ6.0cm、刀部幅1.2cm、棟厚さ3mm、重量2g。		
410	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	刀子	残存長さ6.1cm、刀部残存長さ5.4cm、幅1.1cm、棟厚さ4mm、無頭、基部断面長方形、重量7g。		
411	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	釘	頭部丁字形で、L字形に折り曲げられている。釘身はL字形に折れ曲がっている。残存長さ5.5cm、復元長さ5.5cm、頭部幅1.3cm、頭部長さ5mm、釘身断面方形、一辺6mm、重量6g。		
412	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	釘	釘身はL字形に折れ曲がっている。残存長さ3.2cm、鏃身断面方形、一辺5mm、重量1g。		
413	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	釘	頭部丁字形で、L字形に折り曲げられている可能性あり。残存長さ2.5cm、頭部長さ9mm、頭部幅1.5cm、頭部厚さ8mm、釘身断面方形、一辺9mm、重量5g。		
414	215	148	C42号墳	石室襖瓦	鉄	釘	残存長さ3.9cm、釘身断面方形、一辺6cm、重量3g、釘身に木質が残存する。		
479	239	158	C48号墳	石室	鉄	鏃	平狭三角形式の可能性大。鏃身断面平直、幅1.5cm、厚さ3mm、重量2g。		
480	241	158	C47号墳	周溝	鉄	不明	3本の棒状品及び短棒、幅2.5cm、長さ4.0cm、重量11g。		古墳に伴わない?
494	256	159	C49号墳	石室	鉄	刀子	全長16.6cm、刀部幅16.0cm、幅1.5cm、棟厚さ4mm、平直削、両側平均削、基部断面長方形、基は基沢に向かって先細る。基沢長さ6.0cm、頭部幅1.0cm、基沢残存長さ6mm、基沢棟厚さ3mm、基刀部棟厚さ2mm、重量18g。刀身に布が残存。基に木質が著す可能性が残存。		
537	260	160	C50号墳	石室襖瓦	鉄	鏃?	頭部丁?残存長さ1.6cm、断面長方形、幅7mm、厚さ4mm、重量1g。		
547	270	160	C51号墳	石室	鉄	鏃	尖狭楔形式。残存長さ12.3cm、鏃身断面長方形、鏃身長7cm、鏃身幅6mm、鏃身厚さ2mm、鏃身無頭、頭部断面長方形。頭部残存長さ9.2cm、頭部幅5mm、頭部厚さ3mm、重量18g。基部断面方形、基沢残存長さ1.4cm、幅?、厚さ3mm、重量3g。		
552	288	167	C53号墳	横溝埋土	鉄	不明	棒状品と上面方形品及び短棒、長さ3.0cm、幅1.5cm、重量3g。		古墳に伴わない?
554	296	167	C54号墳	石室襖瓦	鉄	釘	頭部丁字形で、L字形に折り曲げられている。頭部長さ5mm以上、頭部残存長さ9mm以上、厚さ3mm、鏃身断面方形、幅4mm、厚さ3mm、釘身に木質残存、釘残存長さ2.1cm、重量1g。		
556	296	167	C54号墳	石室襖瓦	鉄	釘	頭部丁字形で、L字形に折り曲げられている。頭部長4mm、幅1.0cm前後、厚さ3mm、釘身断面方形、釘身・厚さ5mm、釘残存長さ2.6cm、重量1g。		
556	296	167	C54号墳	石室襖瓦	鉄	釘?	断面方形、幅・厚さ4mm、残存長さ3.9cm、重量2g。		
557	296	167	C54号墳	石室襖瓦	鉄	釘	断面方形か、幅6mm以上、厚さ5mm以上、残存長さ1.4cm、重量0.5g。		
558	296	167	C54号墳	石室襖瓦	鉄	釘	断面方形、幅・厚さ4mm、残存長さ2.5cm、重量1g。		
721	303	174	3区東土		銅	鏃	「大平遺跡」鏃、重量2.3cm、厚さ1mm、鏃孔方形、一辺7mm、縁幅2~3mm、重量2g。		本群統
722	303	174	3区東土		真鍮?	短管	長さ4.9cm、大径部1.9~1.6cm、大径長8.9mm、頭部長4.4cm、頭部直径1.2cm、厚さ1mm、重量8g。頭室内部に木製断面片が残存。		

第50表 大屋敷C古墳群石製品観察表

遺物番号	埋出	図版	出土位置	種類	材質	全長	幅	厚さ	重量	備考
713	303	174	3区東土	打製石鏃	ホルンフェルス	2.7	1.6	0.0	1.0	平直式
714	303	174	3区東土	打製石鏃	ホルンフェルス	3.0	1.9	3.5	1.0	凹底式
715	303	174	3区東土	打製石鏃	黒曜石	(1.3)	(1.6)	2.6	0.6	凹底式
716	303	174	3区東土	打製石鏃	黒曜石	(1.1)	(1.1)	2.0	1.0	凹底式
717	303	174	3区東土	打製石鏃	黒曜石	(1.2)	(1.1)	2.5	1.0	平直式
718	303	174	3区東土	削片	黒曜石	1.7	1.0	2.0	1.0	
719	303	174	3区東土	削片	黒曜石	1.6	1.0	2.0	1.0	
720	303	174	3区東土	磨製石鏃	矽化質砂岩	(3.8)	(2.1)	3.6	4.0	凹底式

※削片は残存部分の破片。

## 第5節 大屋敷C古墳群の評価

### 1 墳丘に関して

#### (1) 外護列石・墳丘内石列(第304・305図)

事例 大屋敷C古墳群のうち外護列石や墳丘内石列を有する古墳が3基存在しており、C19・C21号墳が墳丘内石列、C50号墳が開口部に外護列石(いわゆる「開口部石列」)を有する。このうちC19号墳は、積穴式石室前庭部が外側に向かって開きかけており、石室開口部に外護列石(開口部石列)を有した可能性もある。

なお、C50号墳は菊池吉修氏分類

BⅡ類に当たる(菊池2004, 引用・参考文献は294~296頁参照)。

遠江における類別 遠江において、現在確認されている外護列石や墳丘内石列を有する古墳は、浜松市見徳2号墳、磐田市岩井原1号墳、豊岡村新平山B5・B17号墳、島田市水掛渡A1・A3・A5・A14号墳の8基がある(菊池2004, 註2, 註は293頁参照)。このほか、浜松市見徳3号墳、三ヶ日町釣西山1号墳が外護列石を有する可能性がある(補記1参照, 293頁)。

類別との比較 見徳2号墳(第305図1, 浜松市教委1989)は、周溝より内側、墳丘の東側と西側に墓塚を取り囲むように設置されており、墳丘南側にまで設置されていたとすれば、溝道あるいは前庭の石材に組み込まれるような状況であったと推測する。したがって、南側が残存していたとした場合でも、すべてが墳丘内に取り込まれる墳丘内石列であった可能性が高い。この設置場所と積載方法は、大屋敷C19号墳と同様であり、強い関連性を推測できる。また、西側の墳丘内石列は大屋敷C21号墳の墳丘内石列と類似しており、大屋敷C21号墳も本来は墳丘南側まで巡らされていた可能性が高い。したがって、大屋敷C古墳群の墳丘内石列は見徳2号墳と関連性が強いといえる。さらに同一古墳群中にある見徳3号墳(第315図, 浜松市教委1995)は石室入口付近が削平されており詳細は不明であるが、前庭はハ字形に開放しており、そのまま前庭側壁が積載されていたとすれば開口部に石列(開口部石列)を伴っていた可能性が高い。この仮定が正しければ、大屋敷C50号墳と関連性が強いといえる。

岩井原1号墳(第305図2, 中嶋1992)は、前庭側壁から続く外護列石(開口部石列)である。開口部石列は大屋敷C50号墳と類似する可能性が高いが、岩井原1号墳が円環であるのに対し、大屋敷C50号墳は角環という差違が看取できる。ただし、岩井原1号墳の詳細が不明であるため参考程度に留めておきたい。

新平山B5・B17号墳(豊岡村教委1993)は外護列石のうち開口部に列石をもつもので、菊池吉修氏分類BⅡ類に当たる(菊池2004)。大屋敷C50号墳に類似しているが、詳細な図面がなく、参考に留めたい。

また、三ヶ日町釣西山1号墳(井口・石橋ほか2003)は、外護列石を伴う可能性がある。

時期的位置づけ 見徳2号墳は石室内より須恵器杯身などが出土しており、遠江Ⅳ期前半に位置づけることができる。岩井原1号墳は須恵器や鈿などが出土しており、遠江Ⅳ期後半に比定できる。新平山B5号墳は須恵器短頸壺が出土しており、新平山B17号墳は須恵器摘蓋や右台杯、御付長頸壺などが出土しており、ともに遠江Ⅳ期後半に位置づけることができる。大屋敷C19・C21・C50号墳はC19号墳が



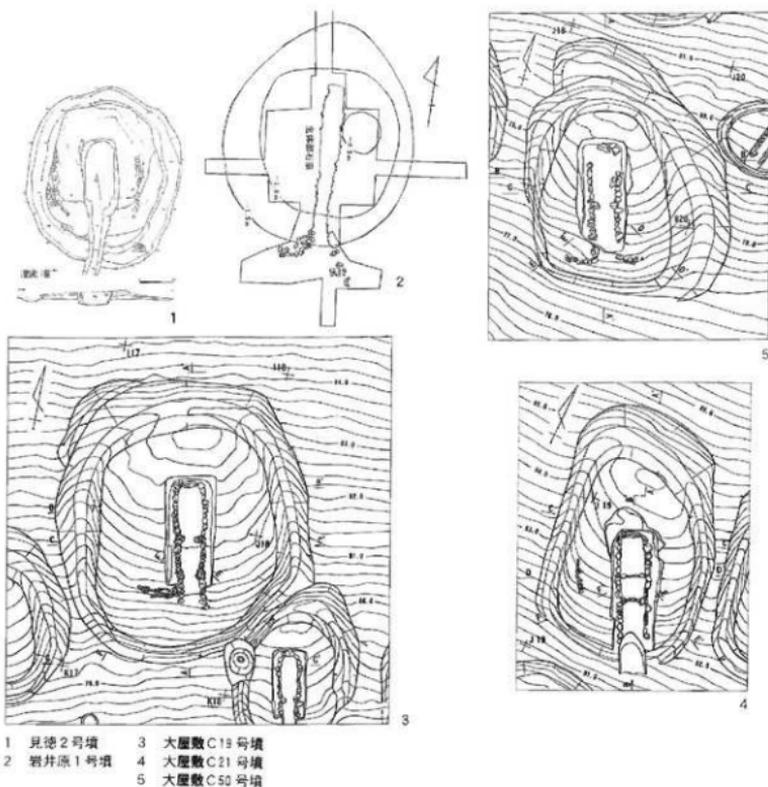
第304図 静岡県における外護列石・墳丘内石列を有する古墳分布図

遠江Ⅳ期前半まで遡る可能性が高く、C21・C50号墳は遠江Ⅳ期後半に比定できる。したがって、見徳2号墳・大屋敷C19号墳は遠江Ⅳ期前半の築造で、他の4基は遠江Ⅳ期後半に築造されたといえる。

なお、釣西山1号墳に外護列石が伴うとすれば、遠江Ⅲ期中業～後業に位置づけることができ、浜名湖北岸で最初に導入された可能性が高い。

系譜 遠江において外護列石・墳丘内石列を採用した古墳をみると、畿内系両袖式・片袖式石室を採用する古墳には確認することができず、擬似両袖式石室を採用する古墳のみに採用される。擬似両袖式石室は、三河地方に起源をもつとされている(鈴木敏1988、鈴木一2000a・b・2003)。墳丘内石列や外護列石は、やはり三河地域に多く確認でき、まずはこの地域からの伝播が想定できる(柴池2004)。また、遠江では、都田川流域の見徳2号墳や浜名湖北岸の釣西山1号墳で採用されている。

したがって、菊池氏が指摘するように残存状況が良好ではない浜松市半田山古墳群や浜松市地蔵平古墳群などの三方原古墳群において採用されていた可能性があるが、浜名湖北岸や都田川流域に大屋敷C古墳群よりやや先行して採用されていることから、大屋敷C古墳群の外護列石・墳丘内石列の系譜は、



1 見徳2号墳 3 大屋敷C19号墳  
2 岩井原1号墳 4 大屋敷C21号墳  
5 大屋敷C50号墳

大屋敷C古墳群には三河地方から浜名湖北岸、都田川流域を經由し、石室情報とともに漸移的に伝播してきた可能性が高い。これは、石室の形状や石材の使用方法などが、大屋敷C19号墳やC50号墳と、見徳2号墳と同一古墳群中の見徳3号墳と類似していることも証となる。そして、大屋敷C古墳群よりもさらに東に位置する新平山B5・B17号墳には、浜北北麓古墳群を經由し、天竜川を越えて漸移的に伝播した可能性が高い。

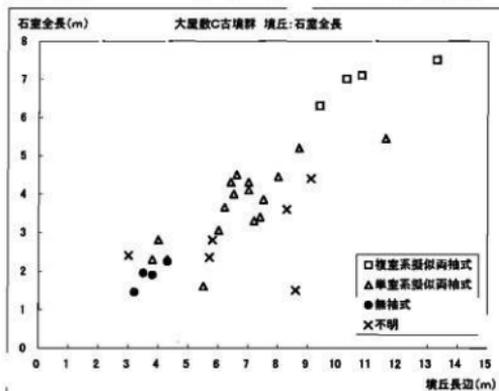
**外護列石を有する古墳の位置づけ** 大屋敷C古墳群中において外護列石・墳丘内石列を採用したC19・C21・C50号墳のうち、C19・C50号墳は大屋敷C古墳群の中で最大規模を誇り、かつC19号墳は遺物も豊富である。C21号墳はC19・C50号墳などに次ぐ規模であり、C古墳群の中では大型の部類に入る。また、見徳2号墳は墳丘規模が8.5mとやや小型であるが、新平山B5・B17号墳は石室規模が8m前後と、新平山B古墳群中では大型である。

したがって、開口部石列や墳丘内石列を有する古墳、特に外護列石を有する古墳は、群集墳中の大型古墳に採用されることが多く、土留めだけではなく、権力誇示としての視覚効果を狙ったものとする菊池吉修氏の指摘(菊池2004)は大屋敷C古墳群においても認めることができる。

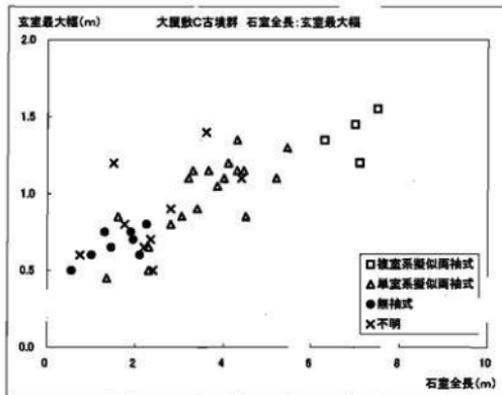
(2)墳丘規模と石室形態(第306・307図 図1・2)

第306・307図1・2に墳丘と横穴式石室の規模との相関関係を石室形態ごとに図示した。

大屋敷C古墳群の中では、複室系擬似両袖式石室、単室系擬似両袖式石室、無袖式石室が築造されているが、複室系擬似両袖式石室を有する古墳(C19・C22・C42・C50号墳)が、他の二形式と比較して石室規模が格段に大型であり、それに伴って墳丘規模も大型であるといえる。また、副葬品は少ないながらも他の古墳と比較すると、C19・C22・C42号墳のように豊富なものが多いといえる。複室系擬似両袖式石室の古墳に外護列石や墳丘内石列が採用されていること、またC19・C42号墳から鉄釘が出土し、後述するように鉄釘を使用した木棺は階層的に上位に位置づけられる古墳からの出土が多いこと(本節第2項(3)参照)など、これらの古墳の被葬者は階層的には上位に位置づけることができる。これは複室系擬似両袖式石室が三河や



第306図 大屋敷C古墳群古墳規模・石室規模相関関係図



第307図1 大屋敷C古墳群石室規模相関関係図①

遠江において有力墳に採用される(鈴木-2000a・b)ことが多いことと軌を一にする現象と考える。ただし、ほぼ同時期に4基が築造されており、地域の小首長や群集墳すべてを束ねるような有力(盟主)墳としての位置づけは難しく、ほぼ同階層の集団がほぼ同時に築造したと考えるのが妥当である。

一方、単室系擬似兩袖式石室は、大型のもの(6m程度)から2m以下の小型のものまで確認することができ、墳丘・石室規模からみた場合、やや上位の階層から、下位の古墳まで確認できる。しかし、無袖式の古墳と比較すると大型のものが多く、無袖式よりは上位である古墳が多いといえるだろう。

一方、無袖式石室は相対的に小型の古墳が多く、階層的には下位に位置づけるのが妥当である。ただし、大人の伸展葬が不可能な石室が単室系擬似兩袖式石室、無袖式石室に存在しており、火葬などの新しい葬法が想定できることから、階層とは別に、小型の石室については埋葬方法等の変化を考慮する必要がある(本節第2項(2)参照)。

## 2 大屋敷C古墳群出土遺物について

### (1) 副葬土器について

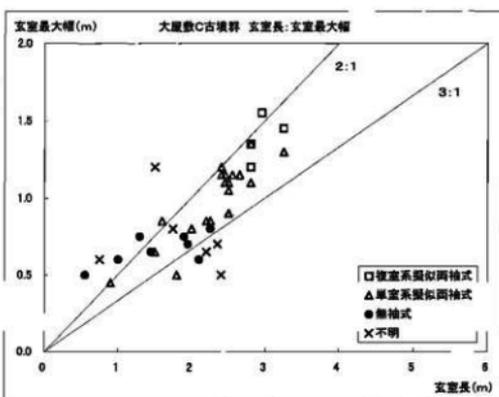
#### ① 副葬土器の構成(第308・309図, 第51表)

大屋敷C古墳群から出土した須恵器の器種は、杯蓋・杯身、返蓋・無台杯、摘蓋・有台杯、甕、無蓋高杯、長頸壺(脚付長頸壺・台付長頸壺)、フラスコ形瓶、平瓶、短頸壺、埴、広口壺であり、土師器では蓋、盤、脚付盤、椀、甕が出土した。土師器の割合は非常に少なく、1・2点の副葬であり、主要器種ではない。

須恵器の器種構成をみると、副葬土器が多く出土したC22号墳は杯類、高杯、フラスコ形瓶、長頸壺で構成され、C36号墳は杯類、高杯、長頸壺で、C43号墳は杯類のみ、C46号墳は杯類と平瓶、C51号墳は高杯、長頸壺、平瓶で、C53号墳は長頸壺(と土師器甕)で構成されている。

したがって、大屋敷C古墳群の基本的な構成は、杯類、高杯、平瓶、フラスコ形瓶、長頸壺であり、これ以外の器種が副葬されることは少ない。

遠江の横穴系埋葬施設から出土した須恵器の器



第307図 大屋敷C古墳群石室相関関係図②

第51表 大屋敷C古墳群横穴式石室副葬土器器種別出土数

出土器種	須恵器										土師器		
	杯蓋	杯身	返蓋	無台杯	摘蓋	有台杯	高杯	長頸壺	フラスコ	平瓶	その他	蓋・盤	甕
C2						2	2						
C3													1
C17	2	1											1
C19					4	1	1						
C20								1					
C21					1		3	1	2				1
C22	1		9	9		1	3	3	2				
C24					3	2	2	1	1				
C30			1		3	1	1	2					
C31								2					
C33										1			
C36	2			1			1	1	1			1	
C38			1		1		1	1	1				
C40								1					
C41													1
C42							2	1	1	1	1	1	1
C43					15	13							
C46	8	12								2	1		
C47									2				
C48										2			
C50										1			1
C51								1	1	1			
C53								1					1



極一部のみ、在地あるいは湖西窯以外の窯から供給を受けていたことが判明した。なお、平瓶(523)は静岡県周智郡森町森山古窯群の製品と類似しており、その可能性が高い。

## (2) 土師器甕の埋納と埋葬方法

### ① 土師器甕を副葬する古墳について—横穴系埋葬施設内より甕が出土した古墳について—

大屋敷C53号墳の横穴式石室より土師器甕が出土した。C53号墳は玄室規模2.0m、幅0.7mであり、大人の身長が150～160cm程度と仮定するならば、大人の伸展葬は可能である。一方、土師器甕は玄室内から散乱して出土しているが、口縁部や底部が出土していないことから、本来は攪乱されている奥壁近くに納められていた可能性が高い。ここでは、土師器甕を副葬する古墳について遺体埋葬との関連で土師器甕の機能を考えておきたい。

遠江において土師器甕が横穴式石室内に副葬され(納められ)た古墳(三河古墳研2001)をみると、浜松市宇藤坂A4・A5号墳、同半田山A2号墳、同瓦屋西古墳群、同下滝古墳群、同地藏平古墳群など古墳約30基を数え、浜松市三方原古墳群に多く、天竜川以東の地域では土師器甕の副葬は顕著ではない。

これらのうち、石室規模が大きいものを除き、大屋敷C53号墳同様、2m以下の古墳に絞ると、浜松市前山3号墳(浜松市博1992a)、同浦前Ⅳ・Ⅴ区2号墳(浜松市博1992a)、同地藏平B2号墳(浜松市博1992b)の3基である。前2者は遠江Ⅴ期前半、後者は遠江Ⅳ期後半に位置づけることができる。

これらの古墳からは人骨は出土しておらず、土師器甕の機能は明確ではない。しかし、前2者に近接する浜松市作原6号墳(石室全長2.8m・玄室長1.6m、浜松市博1992a)から出土した土師器甕には人骨(焼骨?)が納められており、また浜松市浦前Ⅳ・Ⅴ区6号墳(石室全長5.4m・玄室長2.4m、浜松市博1992a)でも、石室内から出土した須恵器甕には焼骨が納められており、これらは骨蔵器として利用されていたことが判明している。この2基の時期は遠江Ⅴ期前半に比定されている。したがって、この2基よりも石室規模が小型で甕を副葬する同時期の前山3号墳、浦前Ⅳ・Ⅴ区2号墳、地藏平B2号墳の3基も土師器甕は副葬品ではなく骨蔵器として納められていた可能性が高いといえる。

また、奈良時代になると遠江においても土師器甕が骨蔵器として利用されたことは周知の事実であり、遠江Ⅳ期前半以降、特に遠江Ⅴ期前半に築造された横穴式石室に副葬された土師器甕は骨蔵器とするのが妥当であろう。

したがって、大屋敷C53号墳は遠江Ⅴ期前半の築造であり、石室規模も小型であることから判断して、上記の5古墳と同様、改葬骨や火葬骨が納められた土器棺を納めていた可能性を想定すべきであろう。

### ② 埋葬方法について

**木棺** 大屋敷C古墳群のうち、C19・C42・C54号墳の3基から鉄釘が出土した。このうちC42号墳は大きさの異なる2種の鉄釘が出土しており、鉄釘で緊結した木棺が2棺納められていた可能性が高い。

木棺は鉄釘で緊結されることにより移動可能な木棺となるが、ただ単に移動するためだけではないことが推測されている。岡林孝作氏によれば、木棺を運ぶという行為自体に有意義があり、それまでの石室内に据え付ける木棺から持ち運ぶ木棺への変化は、その背後にある葬送儀礼自体も大きく変化したとされる(岡林1994)。これに加え、棺を持ち運んで古墳に埋葬するという、それまでにない遺体運搬方法の採用という視覚的な効果も狙ったものと考えられることができる。

**改葬・火葬** 大屋敷C古墳群のうち、石室全長(玄室長)が2m以下である古墳が13基存在する。これらは閉塞部分を考慮すると、大人の伸展葬はほぼ不可能である。小児が埋葬された可能性は残るものの、横穴式石室が小児のためだけに新たに企画・構築されたとは考えにくく、埋葬に当たっては改葬あるいは火葬骨を納めた可能性を十分考慮する必要がある。

人骨の残存状況が良好な遠江の横穴墓に目を向けると、6世紀代には伸展葬が多いが、7世紀になる

と、かたづけ行為あるいは改葬行為と想定される事例が急増するため、7世紀代に埋葬方法が変化した可能性を想定した(大谷2001)。大屋敷C古墳群では、上述したように鉄釘が出土していることから木棺も用いられており、すべてが改葬あるいは火葬に変化しているわけではないが、上記したC53号墳のように土器棺が納められた古墳もあり、土器棺が納められなくとも改葬骨(あるいは火葬骨)を埋納した古墳が存在する蓋然性が高く、特に石室全長が2m以下の古墳は改葬骨あるいは火葬骨を納めたと想定するのが妥当であろう。

これに伴い、改葬骨あるいは火葬骨を納めるにあたっての新たな儀礼が採用された可能性も十分想定可能である。2m以下の古墳は、遠江Ⅳ期後半以降の築造が多く、横穴墓(大谷2001)同様、横穴式石室においても、少なくとも遠江Ⅳ期後半以降葬送儀礼や埋葬行為が変化した可能性が高い。

### (3) 鉄釘について(第310・311図, 第52表)

ここでは、大屋敷C古墳群中より出土した鉄釘について考えておきたい。

類例 東海の後期古墳データベース(三河古墳研2001)および東海の横穴墓データ(静岡県考古学会2001)を参照し、その後の公表された資料等を追加すると、鉄釘が出土している古墳は東海全域で約90基を数える。このうち静岡県西部の遠江地域では、今回報告した大屋敷C19・C42・C54号墳を含めて古墳20基、横穴墓5基を挙げることができる(第52表, 補記2参照)。遠江において鉄釘が出土した古墳は後期古墳約800基のうち20基(約2.5%)、横穴墓約1500基のうち5基(約0.3%)であり、一般的と考えられがちな鉄釘は想像以上に稀少な遺物といえる。

東海地方全域でみると、伊勢や美濃において出土数が多く、東に行くに従い、鉄釘出土古墳の割合は減少する。また、群集墳や同一地域の古墳群から複数の鉄釘が出土している古墳群は、西からみると三重県安濃町平田古墳群(5基)、岐阜県糸貫町船木山古墳群(10基)、岐阜県池田町願成寺西墳之越古墳

第52表 遠江における鉄釘出土古墳・横穴墓一覽表

古墳名	市町村	釘数	釘頭の形状	長さ cm	身厚 mm	頭径 mm	埋圧 不明	埋葬施設	横穴			副葬品	築造 時期	文献	
									全長	実室長	幅				
遠江Ⅳ-V区8	浜松市	1	a型	6.4	5		不明	横穴式土室	1.60	1.60	0.80	なし	V期前半	浜松市博1992a	
作塚2	浜松市	2	a型	4.0	4		不明	無袖式?	1.90	1.90	0.70	須恵器	V期前半	浜松市博1992a	
下塚3区9	浜松市	3	a型	2.6	4	円	8.7	類似筒袖式	3.10	2.60	0.90	須恵器・土師器	V期前半	浜松市博1997	
下塚3区11	浜松市	1	b型	4.0	4	円	12.1	類似筒袖式?	4.90	3.65	1.60	鉄刀・銅鏃・須恵器	V期前半	浜松市博1999	
下塚3区6	浜松市	1	a型	1.9	4	円	1	横穴式石室	1.70		0.50	須恵器	V期前半?	浜松市博1999	
下塚3区8	浜松市	1	a型	5.0	5	方	8.1	類似筒袖式	4.55	2.80	1.10	須恵器	V期前半	浜松市博2000	
下塚3区11	浜松市	4	a型	4.0	3	円	10.1	類似筒袖式	5.60	2.90	1.15	玉環・須恵器	IV期後半	浜松市博2001	
青野D3	浜松市	1	未報告				円	18	筒袖式	5.40	2.30	1.70	金銅製馬具・鉄刀・鉄鏃・玉環・耳環・須恵器・土師器	IV期前半	未報告
鎌子森	浜松市	8+	a型	5.4	8	円	23.6	片袖式	10.60	5.20	1.60	馬具・象嵌内環大刀・銅製金具・鉄鏃・刀子・玉環・耳環・銅製刀柄部・須恵器・土師器	IV期後半	浜松市教委1995	
富岡5	浜北市	3	a型	5.0	4	円	14.6	類似筒袖式	5.60	2.90	1.42	刀鏃・鉄鏃・刀子・玉環・銅製金具	IV期後半	浜北市教委2000	
大屋敷C19	浜北市	3	b型	11	9	円	13.3	類似筒袖式	7.50	2.90	1.65	刀鏃・鉄鏃・刀子・玉環・須恵器	IV期後半	本報告	
大屋敷C42	浜北市	8	a型	9.5 2.6	5 6	円	10.8	類似筒袖式	7.10	3.20	1.20	鉄鏃・刀子・玉環・須恵器	IV期後半	本報告	
大屋敷C54	浜北市	5	a型	2.1	6	円	6.4	類似筒袖式	4.25	2.70	1.25		IV期後半	本報告	
臥下1	磐田市	1	a型	10.3	8	円	10.3	無袖式 (組合式)	4.90	4.90	1.10	鉄鏃・刀・玉環・耳環・須恵器	IV期前半	磐田市教委1979	
大久保原山4	磐田市	7	a型	7.8	5	円	11.5	類似筒袖式	4.80	2.10	1.20	鉄刀・銅製金具・須恵器	IV期後半	磐田市教委1989	
新藤原40	磐田市	a型	11.7	5	円			無袖式	4.20	4.20	1.10	須恵器	V期前半	磐田市教委2004	
玉野金山	浜北市	2	a型	8.0	4	円		類似筒袖式	2.70	3.70	1.00	鉄刀・銅製金具・須恵器	IV期前半	静岡県考古学会2001	
谷口3区11	浜北市	7	a型	7.2	5	円		横穴式	4.80	2.90	1.40	須恵器	V期前半	静岡県考古学会1996	
園子塚5	磐田市	1	未報告				不明	無袖式	0.75	0.30	3.30	刀子	IV期後半?	静岡県教委1992	
天殿1	磐田市	9	a型	6.8	6	円	13	類似筒袖式?	4.20	3.70	1.60	須恵器・土師器	IV期後半	磐田市教委1989	
明堂ヶ谷B1	磐田市	5	未報告					横穴墓	4.00	2.00	2.00	須恵器	不明	静岡県考古学会2001	
大澤ヶ谷C6	磐田市	4	a型	6.5	6	円		横穴墓	3.90	2.40	2.70	馬具・鉄刀・刀子	IV期前半?	明皇大1983	
西ノ谷B4	浜岡町	2	未報告					横穴墓	未報告			鉄刀・玉環・須恵器	不明	静岡県考古学会2001	
大宮A2	相良町	2	a型	7.0	4	円		横穴墓	3.30	2.30	3.10	玉環・須恵器	IV期後半	付良町教委2000	
仁田山ノ崎	磐田市	3	a型	12.0	7	円		筒袖式	5.10		1.30	金銅製馬具・須恵器大刀・刀子・鉄鏃・玉環・耳環・須恵器	IV期後半?	静岡県教委1986	

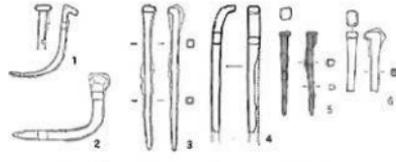
※長さ、厚さに従って、鉄釘が複数出土している古墳は、最も長い釘の長さ記載。

群(4基)、愛知県瀬戸市穴田古墳群(3基)、一宮市浅井古墳群(3基)、岡崎市天神山古墳群(2基)、豊橋市四ツ塚古墳群(2基)、静岡県浜松市下滝古墳群(5基)、浜北市大屋敷C古墳群(3基)、藤枝市白砂ヶ谷D古墳群(2基)である。古墳群群において1基のみという群集墳も多いが、出土古墳数は少ないながらも同一古墳群に集中する傾向にある。これは鉄釘を生産する集団に限られており、これらの古墳群を運営した集団の近で



第310図 東海地方の鉄釘形分類図

鉄釘の生産・供給が行われたことを示している可能性が高いといえる。また、上述したように鉄釘緊結(釘付)式木棺の採用は葬送儀礼の変化と密に関連していると想定される(岡林1994)ことから、据付式木棺の葬送儀礼とは異なる釘付式木棺の葬送儀礼を同一の集団が採用していたことの表れでもあるだろう。



1 大屋敷C42号墳 2 大屋敷C19号墳 3 新屋敷40号墳 4 以下1号墳 5 天段1号墳 6 蛭子森古墳  
第311図 遠江の主な古墳出土鉄釘

**形態的特徴** 大屋敷C古墳群から出土した鉄釘の形状は、頭部T字形あるいは方形で、釘頭と釘身の境でL字形に折り曲げられたもの(第310図a類、田中彩太氏分類A類、田中1978)と、頭部がT字形のもの(b類、田中氏分類B類)がある。また、このほか東海地方では、岐阜県池田町願成寺西墳之越1号墳(池田町教委1999)、岡崎市砂行2号墳(成瀬2001)と愛知県東海市岩屋口古墳(春日井市教委1997)から頭部円形(傘形)のもの(c類、田中氏分類D類)が出土している。

遠江では新屋敷40号墳からは19本以上の鉄釘が出土しているが、a類のみで構成される。このほかa類は、宇藤坂A4号墳、蛭子森古墳、富岡5号墳、太田坊3号墳、篠ヶ谷A9号横穴墓、仁田山ノ崎古墳などから出土しており、遠江で出土する鉄釘の大部分がこの形状を呈しているといえる。さらに、東海地方の古墳から出土した鉄釘の大部分がこのa類である。

また、大屋敷C19号墳で出土したb類は、形態的にa類に近く、頭部がL字形に折り曲げられないだけであり、a類に近い存在といえる。

製作の利便性からみると、a・b類のように鉄棒の先をそのまま、あるいはT字形に伸ばした後、頭部と身の境をL字形に折り曲げる技法は簡易であるといえ、その簡便さゆえ製作されつづけたといえる。一方、願成寺西墳之越1号墳等の円頭のc類は、a・b類よりも製作技術が複雑で製作に手間がかかることから、それほど盛んに製作されていない。

ところで、近畿地方以西では鉄釘の頭部の形状が複数確認されており、大和地方ではその鉄釘の形状に小地域色が確認されている(金田1996)。しかし、東海地方で出土した鉄釘はa類がほとんどであるため、鉄釘には地域色は看取できない。東海地方では製作するのが簡易なa類の情報が広域で共有され、遠江でもこの情報に基づいて鉄釘が複数箇所で作られた可能性が高いといえる。一方、これ以外のc類などの鉄釘情報は伝播元より一部に伝播するのみであった可能性が高く、量産されなかった。

**時期的位置づけ** 遠江において鉄釘が出土した古墳・横穴墓は、上述したように25基を数えるが、最も遅いものは、吉影D3号墳で遠江Ⅲ期前半まで遡る可能性がある。続く遠江Ⅲ期中葉で以下1号墳、遠江Ⅲ期後葉で蛭子森古墳、大寄A2号横穴墓、仁田山ノ崎古墳と少ないが、遠江Ⅳ期前半になると増加し、遠江Ⅳ期前半4基、遠江Ⅳ期後半～末葉9基、遠江Ⅴ期前半7基である。この傾向は東海地方全体の流れとも一致している(註4)。これは、鉄釘の生産・利用が遠江Ⅳ期前半になって本格化したことを意味している可能性が高い。

また、大屋敷C19・C42号墳(太いもの)、蛭子森古墳、仁田山ノ崎古墳から出土した鉄釘は釘身の厚さが7～9mmと他の釘と比較して厚いといえる。蛭子森古墳は遠江Ⅲ期後葉、仁田山ノ崎古墳は遠江Ⅲ期後葉まで遡る可能性があり、比較的古い古墳から出土しているといえる。一方で、遠江Ⅳ期前半以降の古墳から出土した資料をみると、厚さ5mmのものが多く、鉄釘を全国的に検討した田中彩太氏は、7世紀前半に鉄釘が小型化するとしており(田中1978)、遠江における鉄釘の量産の変遷も同様である可能性が高い。

したがって、遠江の鉄釘は釘身が厚いもの(7～9mm前後)から薄いもの(5mm前後)へ変化した可能性が高く、大屋敷C19・C42号墳(太いもの)は鉄釘の厚さからみると、築造時期は遠江Ⅳ期前半まで遡る可能性が高いであろう。一方で、大屋敷C42号墳(細いもの)・C54号墳の鉄釘は、遠江Ⅳ期後半以降に比定できる。

**階層的位置づけ** 遠江において鉄釘が出土した古墳は、墳丘規模10m以下3基、15m以下8基、20m未満1基、20m以上1基であり、石室・横穴墓規模は全長3m以下4基、3～5m13基、5m以上7基を数える。

遠江Ⅲ期前葉～後葉の古墳は吉影D3号墳、蛭子森古墳と有力古墳であり、以下1号墳の規模はそれほど大型ではないものの、遠江Ⅲ期中葉に比定できる横穴式石室が少ないことを考えると、有力な古墳としてよいだろう。遠江Ⅳ期前半は、遠江全体の古墳平均規模約10m、石室規模4.85mであり、Ⅳ期後半以降は古墳平均規模9.3m、石室規模3.79mである。鉄釘が出土した古墳は、大屋敷C19・42号墳が石室全長7mを超え、遠江Ⅳ期前半までは他の古墳も平均規模よりも大型のものが多く、この傾向は東海地方全体でみた場合にも顕著であり(註5)、遠江の様相を補強する。

したがって、鉄釘出土古墳は遠江Ⅲ期後葉までは規模が大きい古墳が多く、有力な階層(小首長層)が釘付式木棺を採用したと想定でき、遠江Ⅳ期前半においても優位な古墳に採用されたといえる。つまり、鉄釘の出土古墳は、それまでの葬送儀礼と異なる祭祀を採用し実施した、小首長あるいは群中の有力者のものといえるだろう。

大屋敷C古墳群においても遠江Ⅳ期前半に築造されたC19・C42号墳は古墳・石室規模が大きく、古墳群中の有力者が、釘付式木棺を取り入れた新しい葬送祭祀を執り行った可能性が高い。

### 3 大屋敷C古墳群の群構成および横穴式石室の系譜とその変遷

#### (1) 大屋敷C古墳群の単位群構成

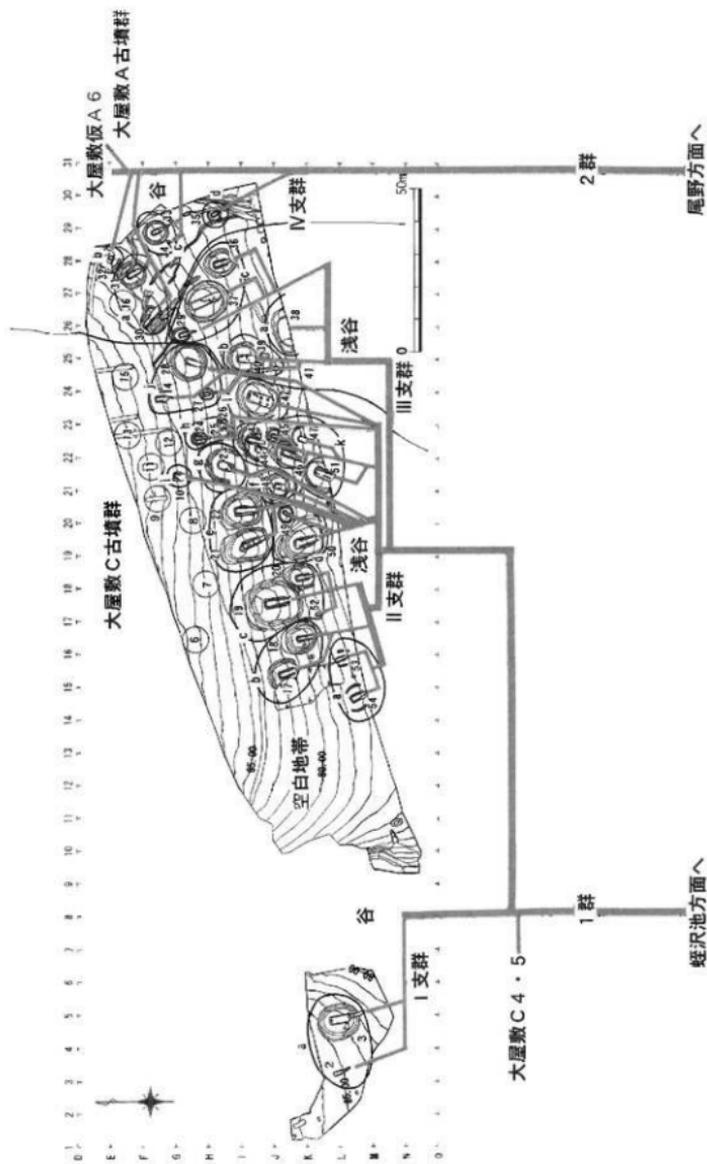
##### ① 支群・単位群の認定(第312図)

大屋敷C古墳群はほぼすべて横穴式石室を有する古墳である。一部の古墳には古墳外に延びる墓道が確認できるものの、三方原古墳群中の浜松市半田山A・C～E古墳群のように残存状況が良好で墓道同士連結するような古墳はなく、石室から続く墓道の共有状況から直接的に単位群を設定することはできない。

しかし、大屋敷C古墳群は同一丘陵にありながら横穴式石室の開口方位が異なり、かつ幾つかに収束する傾向を読み取ることができるため、この開口方位や一部に確認できる墓道の伸延する方向から、単位群の区分を試みたい(註6)。

第312図に図示したように、各古墳の石室の主軸と墓道の方向を伸ばすと、幾つかに収束していくことが判明する。隣接しながらも開口方位から、別の単位群に区分した方が妥当なものがある。

今回調査した51基のうち42基は、大きく4群に分けることができる。まずは谷部でⅠとⅡ～Ⅳ支群に区分することができる。各支群は、Ⅰ支群は1単位群の2基、Ⅱ支群は12単位群27基、Ⅲ支群は3単位群7基、Ⅳ支群は4単位群6基に区分することができ、Ⅱ支群が27基と最も多い。Ⅰ支群は、2区とし



第312図 大屋敷C古墳群単位群区分図

た後述する大屋敷1号窯の所在する谷に向かって墓道が延びていたと考えられ、大屋敷C5号墳(亀玉中学校内古墳)や大屋敷C4号墳などと同一支群に区分することができる。Ⅱ支群は、C50号墳とC20号墳の南側にある、現状で水路となり、周囲よりやや侵食が進み、浅谷になっている箇所に取り東していくことを確認することができる。Ⅲ支群はC42号墳の前の浅谷部分に向かって取東する。Ⅳ支群は大屋敷C古墳群と大屋敷A古墳群を区分する、4区とした谷(東側谷)に向かって開口、墓道が延びており、大屋敷A古墳群中の仮A6号墳(静岡埋文研2003c)と同一支群に区分することができる。

さらに、4支群がそれぞれ延びる墓道(谷)は、Ⅰ・Ⅱ支群の墓道は蛭沢池の方向へ向かっており、Ⅲ支群も最終的にはⅠ・Ⅱ支群の墓道へ向かう可能性が高い。一方で、Ⅳ支群の墓道(谷)は亀玉中学校グラウンドの東側を通った後、大屋敷B古墳群とA古墳群の間を通り、東側に向かって下る可能性が高い。つまり、大屋敷C古墳群は同一の斜面に構築しながらも、興覚寺後古墳の方に基点をもつ集団と、蛭沢池周辺に基点をもつ集団の2集団(2群)に区分される可能性がある。

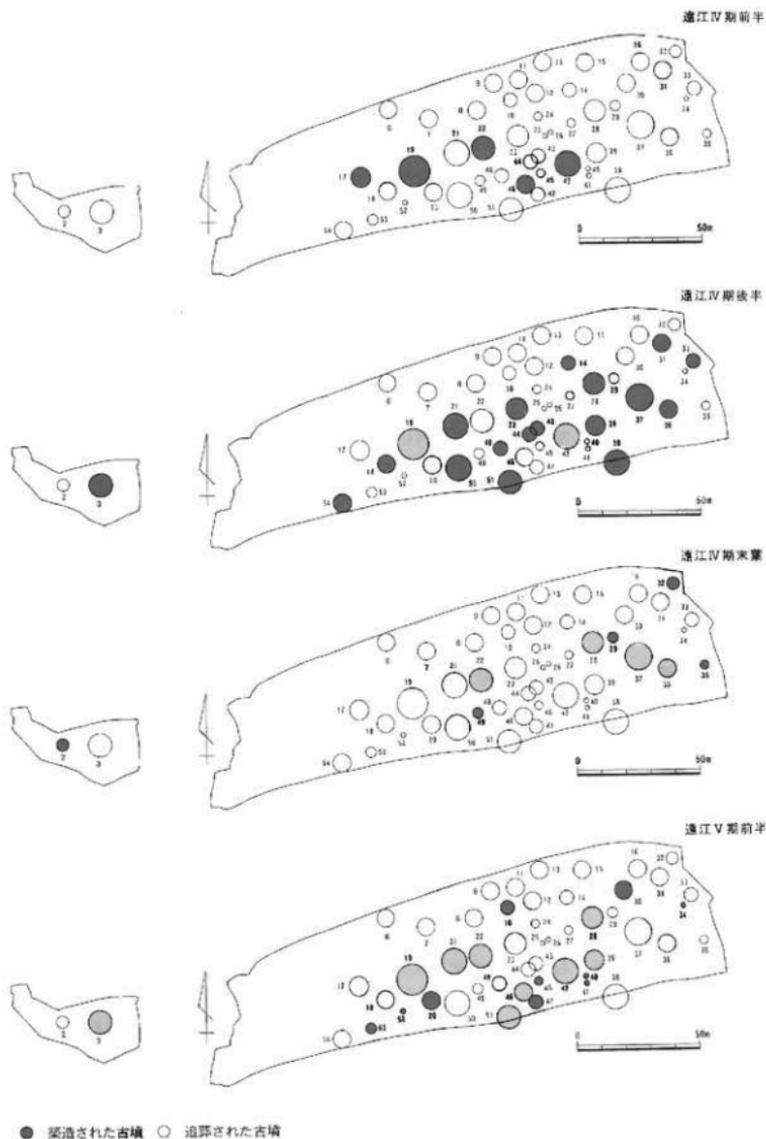
群	支群	単位群	古墳名	古墳規模	石室形態	石室規模	Ⅳ期前半 TK217	Ⅳ期後半 TK46	Ⅳ期未築 TK48	V期前半 MT21
1群	Ⅰ支群	a 単位群	大屋敷C2	なし	無袖式?	2.20+				
		大屋敷C3	9.1×7.0	不明	4.40+					
	Ⅱ支群	a 単位群	大屋敷C53	3.5以上×4.0	単室系擬似両袖式	2.80前後				
		大屋敷C54	6.4以上×6.4	単室系擬似両袖式	4.30					
		b 単位群	大屋敷C17	8.0×6.0以上	単室系擬似両袖式	4.45				
		大屋敷C18	6.6×5.6	単室系擬似両袖式	4.50					
		c 単位群	大屋敷C19	13.3×10.6	複室系擬似両袖式	7.50				
		大屋敷C20	7.5×5.0	単室系擬似両袖式	3.85					
		大屋敷C52	なし	無袖式?	0.75+					
		d 単位群	大屋敷C49	3.7×4.3	単室系擬似両袖式	2.30				
		大屋敷C50	10.3×8.0	複室系擬似両袖式	7.00					
		e 単位群	大屋敷C21	11.6×7.6	単室系擬似両袖式	5.45				
		大屋敷C22	9.4×7.0	複室系擬似両袖式	6.30					
		f 単位群	大屋敷C48	5.5×5.5	単室系擬似両袖式	1.60+				
		g 単位群	大屋敷C23	7.5以上×8.3	不明	3.60+				
		大屋敷C24	3.8×2.9	単室系擬似両袖式	2.30					
		h 単位群	大屋敷C25	なし	無袖式	1.00+				
		大屋敷C26	なし	単室系擬似両袖式	1.35					
		i 単位群	大屋敷C10	不明	不明	1.75+				
		大屋敷C14	不明	単室系擬似両袖式	3.20+					
	j 単位群	大屋敷C27	3.8×2.8	無袖式	1.90					
	大屋敷C28	8.6×8.6	不明	1.50+						
	k 単位群	大屋敷C43	7.2以上×6.6以上	単室系擬似両袖式	3.30					
		大屋敷C44	5.8以上×5.5	不明	2.80+					
		大屋敷C45	2.9×3.2	無袖式	1.45					
		大屋敷C46	7.0以上×6.0	単室系擬似両袖式	4.30+					
		大屋敷C47	4.5以上×5.7以上	無袖式?	2.35+					
		大屋敷C51	8.7以上×7.0	単室系擬似両袖式	5.20+					
		大屋敷C42	10.8×8.5	複室系擬似両袖式	7.10					
	Ⅲ支群	a 単位群	大屋敷C38	14.0前後×9.0以上	不明	未調査				
		大屋敷C39	7.4以上×7.0	単室系擬似両袖式	3.40+					
		b 単位群	大屋敷C40	なし	無袖式	2.10				
大屋敷C41		なし	無袖式	1.30						
c 単位群		大屋敷C36	7.0以上×5.8	単室系擬似両袖式	4.10					
大屋敷C37	10.8×9.0	不明	不明							
大屋敷C29	4.3×3.1	無袖式	2.25							
2群	Ⅳ支群	a 単位群	大屋敷C30	6.2以上×6.1以上	単室系擬似両袖式	3.65				
		大屋敷C31	6.5×5.3	単室系擬似両袖式	4.00					
	b 単位群	大屋敷C32	2.0以上×3.0以上	不明	2.40+					
	c 単位群	大屋敷C33	6.0×5.0	単室系擬似両袖式	3.05					
	大屋敷C34	なし	無袖式	0.55						
d 単位群	大屋敷C35	3.2×3.5以上	無袖式	1.95						

■ 築造 ■ 追葬 ■ 築造の可能性高い

※支群は、開口方位により墓道を推定し、さらにその墓道の合流地点や地形等(水道、自然流路)を考慮して設定。

※単位群は、開口方向による墓道方向や古墳の位置関係から設定。

第313図 大屋敷C古墳群単位群別古墳消長図



第314図 大屋敷C古墳群時期別築造古墳と追葬古墳

したがって、大屋敷C古墳群中の42基はおおよそ2群4支群20単位群に区分することが可能であり、それぞれの単位群が2～3基で構成されている。ただし、Ⅱ支群k単位群の6基は2～3の単位群に分かれる可能性が高いが、開口方向がほぼ同方向に向かっており、厳密に区分することができないためここでは1単位群としている。

また、大屋敷C古墳群においても、非常に隣接しながらも、浜松市半田山C～E古墳群(浜松市教委1988)や浜北市太田坊古墳群(浜北市教委2000)や同富岡古墳群(浜北市教委2000)のように、別方向に墓道を伸ばし、支群を別にする古墳があることが判明する。

#### ②支群、単位群別の古墳消長について(第313・314図)

遠江Ⅳ期前半に、Ⅱ支群のC17・C19・C22・C42・C46号墳の5基が築造される。つまり、大屋敷C古墳群の形成は、Ⅱ支群から開始されたといえる。その後、Ⅳ期後半に古墳の造営が活発化し、いくつかの単位群を除いて、古墳の造営が行われるとともにⅣ期前半に築造されている古墳では追葬が行われている可能性が高い。Ⅳ期末葉になると、古墳の造営は取東へ向かい、7単位群で造営が行われるだけとなり、Ⅴ期前半でも8単位群で造営されるだけで、その他の支群では追葬が行われるのみとなる。この後、遠江Ⅴ期前半でも、第二四半期に最後の古墳であるC41号墳が築造される。またC34号墳もこの時期の築造と推測する。また、この時期に確実に追葬が行われる古墳は確認できないが、C41号墳と同様の広口壺が周溝や石室の覆土から出土しており、追葬が行われた古墳が存在することは明らかである。

したがって、大屋敷C古墳群は遠江Ⅳ期前半、7世紀前半～中頃にⅡ支群においてほぼ同時に5単位群で築造が開始され、遠江Ⅳ期後半、7世紀後半が古墳造営の盛期となり、遠江Ⅴ期前半、8世紀前半にはほぼ終息に向かう。そして、奈良時代に入った8世紀第二四半期に最後の古墳が造営され、大屋敷C古墳群は終焉を迎える。

また、大屋敷C古墳群の造営の契機となった5基の古墳は群中でも規模が大きいものも多く、古墳の造営にあたっては、上位の集団から古墳の造営が開始されたといえる。

#### (2)単位群と横穴式石室形態(第313図)

ここでは、各単位群内において、横穴式石室がどのように変遷しているかをみておく。各支群のうち、単位群内で横穴式石室形態が異なるのは、Ⅱ支群c・d・e・h・j・k単位群、Ⅲ支群b・c単位群、Ⅳ支群c単位群の9単位群である。このうち一方が複室系擬似両袖式石室、もう一方が単室系擬似両袖式石室であるものはⅡ支群c・d・e単位群であり、すべて複室系から単室系へと変化している。複室系・単室系ともに三河系石室(鈴木一2003)あるいはその影響を受けた遠江の在地系石室であり、簡略化・省力化の流れの中で変化した可能性が高い。一方、単室系擬似両袖式から無袖式石室へ変化した単位群はⅡ支群c・h・j・k単位群、Ⅲ支群b・c単位群、Ⅳ支群c単位群であり、単室系擬似両袖式から無袖式へ変化している。単室系擬似両袖式石室は小型化しながらも立柱石で支室と羨道(前庭)を区分する古墳も存在しており、袖を失うことは簡略化とだけでは捕らえにくい、時期が新しくなることへの対応である可能性が高く、石室系統の変化というよりも、同一系統での変化と考えるのが妥当である。

したがって、大屋敷C古墳群の場合、単位群中に複室系、単室系擬似両袖式が混在し、また単室系擬似両袖式と無袖式が混在するなど、石室形態が異なる単位群が存在するが、三河系石室あるいは遠江の在地系石室という強い関連性をもって変遷したと考えることができる。

#### (3)横穴式石室の技術的系譜

##### ①立柱石と天井石の間に石材を挟みこむ古墳(第315図)

石室の系譜を考える場合に、平面形態や立柱石の有無などとともに天井の形状、立柱石上部の構造も

重要となる。ここでは、大屋敷C古墳群中で確認できる立柱石上部に石材を積載する石室(C19・C22・C50号墳)に関して、その系譜を探っておきたい。

大屋敷C古墳群と石室の平面形態が類似する三河地域の古墳の立柱石と天井の関係が「西三河の横穴式石室資料編」(愛知大学1988)、「東三河の横穴式石室資料編」(三河考古学談話会1994)で分類されている。立柱石と天井石との関係は、立柱石が直接天井石を受けるもの、立柱石と天井石の間に1石以上挟むものが確認できる。後者は西三河では豊田市香久礼1号墳、同来姓1・4号墳、同藤山1号墳、岡崎市藏前古墳、同天神山6号墳、幡豆町洲崎山2・4号墳を挙げることができる。東三河では、御津町穴観音古墳、豊川市馬見塚6号墳、豊橋市照山古墳、岡滝の平B2号墳、岡馬越長火塚古墳、同宮西古墳、田原市向山2号墳などを挙げることができる。

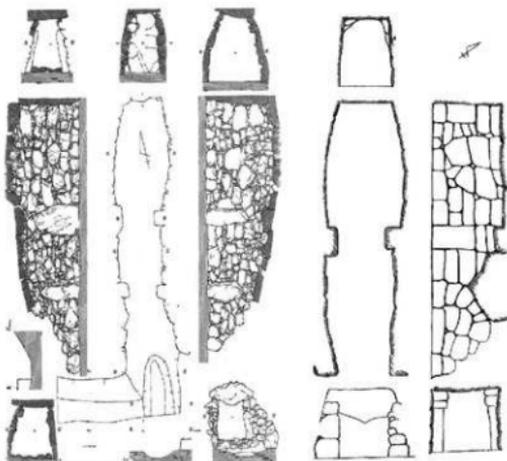
西三河・東三河ともに、畿内系兩袖式・片袖式石室には確認することができず、複室系・単室系擬似兩袖式石室には確認することができ、特に複室系擬似兩袖式石室に採用されることが多い。したがって、三河系擬似兩袖式石室の一つの特徴といえるであろう(鈴木—2003)。これらの古墳は遠江Ⅲ期中葉～Ⅴ期前半に相当し(三河古墳研2001)、遠江Ⅳ期前半併行期に多く築造される形態である。したがって、大屋敷C古墳群の築造前には既に採用されていることは明らかであり、大屋敷C古墳群は三河地域の影響を受けているといえる。

一方、遠江では、都田川流域の浜松市見徳3号墳、浜名湖沿岸(館山寺)の浜松市弘法穴古墳、浜名湖北岸の三ヶ日町釣西山1号墳、同愛宕平古墳、豊岡村新平山A1・A6・A10号墳、同神田1号墳、同大手内A8号墳、袋井市春岡A2号墳、金谷町宮ノ段1号墳など21基が挙げられる(静岡県考古学会2003)。このうち擬似兩袖式石室のもので、角礫を用いたものは上記の11基を挙げることができる。

遠江の10古墳のうち、釣西山1号墳、愛宕平古墳、春岡A2号墳はともに遠江Ⅲ期中葉～後葉に位置づけることができる。見徳3号墳は遠江Ⅳ期前半に位置づけられ、新平山A1号墳・神田1号墳も遠江Ⅳ期前半に位置づけることが可能であり、大屋敷C古墳群はこれらの古墳から影響を受けていると考えることができる。このうち

見徳3号墳は大屋敷C19・C22号墳と同形態であり、非常に関連性が強いといえ、上述した外護列石・墳丘内石列同様、大屋敷C古墳群は直接的な影響を都田川流域から受けている可能性が高い。

したがって、天井石と立柱石の間に1石以上挟み込む技法は、三河地方から浜名湖北岸、都田川を經由し、外護列石・墳丘内列石同様漸移的に伝播した可能性が高い。さらに、東側の新平山A古墳群には浜北北麓古墳群を經由して伝播した可能性が高い。一方、春岡A



見徳3号墳

弘法穴古墳

図315 大屋敷C古墳群と類似する遠江の横穴式石室

2号墳は、採用時期が大屋敷C古墳群や新平山古墳群よりも早いことから、三河地域から直接伝播した可能性が高い。

大屋敷C古墳群では、天井が本来の状態を保持するものがないため、天井の形状との関係などこれ以上の分析は難しいが、見込3号墳と関連性が強いとする筆者の仮定が正しければ、大屋敷C古墳群の疑似両袖式石室の天井は弧状で、立柱石上の天井石は天井と遊離しない掘石であった可能性が高い。

### ②横穴式石室の使用石材の系譜

大屋敷C古墳群では、角礫を大部分に用いる石室と、円礫と角礫を併用する石室、円礫を大部分に用いる石室の3者が確認できる。石材の利用は単純に角礫、円礫の使用ということだけでなく、その背後にある石室構築技術をも規定すると考えることからここでは石材の利用の系譜について考えておく。

このうち角礫を有する古墳は、都田川流域の古墳群や浜北北麓古墳群に多い。特に浜北北麓古墳群のうち興覚寺後古墳、高根山B5号墳、大屋敷仮A10・仮A15・仮A17号墳、雲岩寺C1・C8号墳など遠江Ⅲ期前葉～Ⅲ期後葉の古墳はすべて角礫を採用している。また、遠江Ⅳ期前半以降の古墳にも多いといえる。つまり、大屋敷C古墳群中の角礫使用古墳は、北麓古墳群の伝統を引き継いでいるといえる。また、石室の系統は三河系石室であり、外護列石等の採用から都田川流域の影響を受けているといえる。

一方、遠江において円礫を用いる古墳は、磐田原台地周辺では遠江Ⅲ期前半の段階で袋井市大門大塚古墳、Ⅲ期中葉で袋井市団子塚6号墳、磐田市以下1号墳、同馬坂上16号墳などがある。石室の形態はさまざまであるものの、横穴式石室導入の早い時期から円礫を採用する古墳がある。

また、天竜川流域においても浜松市地蔵平B5号墳(浜松市博1992b)や同瓦屋西C6号墳(浜松市博1991)などで遠江Ⅲ期中葉～後葉には採用されており、特に浜松市三方原古墳群では円礫の採用が横穴式石室導入の初期から最終末まで行われている。したがって、大屋敷C古墳群は、磐田原台地の周辺の古墳群とは距離が離れていること、石室形態も異なることから、石室形態の類似するものが多い三方原台地の古墳から円礫積み横穴式石室構築技術の影響を受けている可能性が高い。

したがって、大屋敷C古墳群の成立にあたっての石室構築技術(石材の利用)は、角礫の使用に関しては北麓古墳群の伝統とともに都田川流域からの影響を受ける一方で、河原石(円礫)の採用に関しては三方原古墳群の影響を受けているといえ、大屋敷C古墳群では両情報が複合的に採用されているといえる。

### ③奥壁を円礫(河原石)積みする古墳(316図,第53表)

大屋敷C古墳群の横穴式石室の奥壁構造は、大型の角礫を用いて1枚1段積みあるいは1枚2段積み基本であり、この構造は遠江型(鈴木一2001a)とよばれる遠江の横穴式石室の特徴である。一方、C41・C48号墳は奥壁を円礫積みしており、遠江では非常に少ない構造といえる(鈴木一2000a)。遠江において奥壁を円礫積みする古墳は、第53表に挙げたとおり30基を数える。

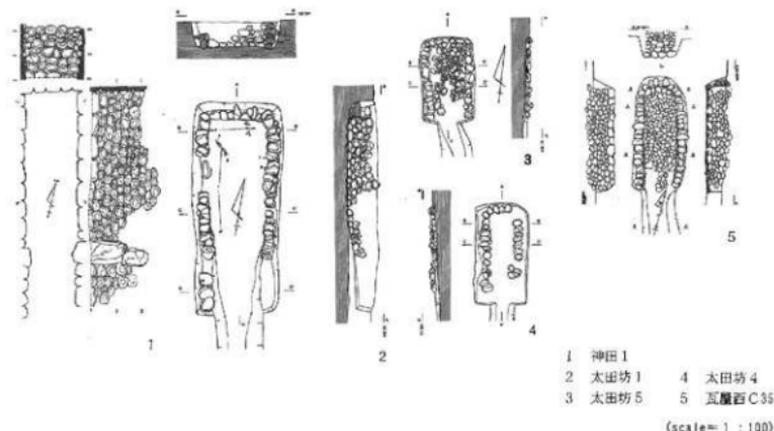
遠江における類例 遠江において奥壁を円礫積みする石室の類例をみてみると、第53表に列挙したように都田川流域や浜名湖北岸を除いて遠江全域において確認することができる。

なお、奥壁を円礫積みする古墳といえども、大屋敷C41号墳や豊岡村神田1号墳のように基底石から円礫積みされるもの(a類)と、大きな石材(鏡石)の上に円礫積みされるもの(b類)、円礫が2列多段積みされるもの(c類)、の三者が確認できる。a類は大屋敷C41号墳をはじめ、19基確認でき、時期は袋井市団子塚6号墳(第1主体部、a1類)のみ遠江Ⅲ期中葉に遡るが、それ以外は遠江Ⅳ期前半～Ⅴ期前半である(a2類)。b類は、大手内A2号墳をはじめ8基確認でき、時期は遠江Ⅲ期中葉～Ⅲ期後葉であり、ほぼ6世紀に限定される。a2類とは時期的に隔たりがあり、平面形態も異なることから、別系譜と考える。c類は島田市水掛渡古墳群に特徴的な構造であり、3基確認することができ、他の古墳群では確認できない。遠江Ⅳ期前半～後半である。

a2類の系譜 ここでは、大屋敷C41・C48号墳と同様の奥壁構造をもつa2類の系譜について考えて

第53表 遠江における円墳積み奥壁をもつ横穴式石室墳一覽表

古墳名	所在地	墳形	墳頂規模	石室形式	玄室形態	奥壁の構造	石室全長	玄室長さ	玄室幅	時期	文献
作原 2	浜松市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	3.1	2.38	0.85	不明	浜松市博1992a
瓦屋敷 C35	浜松市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	2.7		0.9	遠江V期前半	浜松市博1991
下塚 7区R01	浜松市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	2.3		不明	不明	浜松市博1997
大塚集 C41	浜北市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.3*	1.3*	0.75	遠江V期前半	本報告
大塚集 C48	浜北市	円	5.6	扇形両袖式	長方形	円墳積み	1.6		0.86	遠江IV期後半以降	本報告
大塚集前 A6	浜北市	円?		扇形両袖式	長方形	円墳積み				遠江IV期後半以降	静岡埋文研2003c
富岡 6	浜北市	円	9.0	扇形両袖式	長方形	円墳積み	3.8		1.0	遠江IV期後半以降	浜北市教委2000
富岡 4	浜北市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.8		0.4	遠江IV期後半以降	浜北市教委2000
太田坊 1	浜北市	円	8.8	扇形両袖式	長方形	円墳積み	4		1.1	遠江IV期後半	浜北市教委2000
太田坊 4	浜北市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.5		0.7	遠江IV期後半以降	浜北市教委2000
太田坊 5	浜北市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.6		0.4	遠江IV期後半	浜北市教委2000
神田 1	豊岡村	円?		扇形両袖式	長方形	円墳積み	4.5	3.1	1.0	遠江IV期前半	森下・鈴木ほか2000
大子内 A2	豊岡村	円	11	無袖式	長方形	礎石+円墳積み	4.2		0.9	遠江IV期後半	豊岡村教委2000
大子内 A7	豊岡村	円	12	扇形両袖式	扇張り形	角礎+円墳積み	6.2	4.2	1.7	遠江IV期前半	豊岡村教委2000
上神塚 17	豊岡村	円	4	無袖式	長方形	円墳積み	2.2		0.6	遠江V期前半	大塚1999, 鈴木一有2000a
上神塚 20	豊岡村	円	4	無袖式	横切形	円墳積み	1.6		0.8	遠江V期前半	大塚1999, 鈴木一有2000a
神塚 8	豊岡村	円	11	扇形両袖式	扇張り形	礎石+円墳積み	5.2	3	1.36	遠江IV期後半	豊岡村教委1983
神塚 9	豊岡村	不明		扇形両袖式	扇張り形	礎石+円墳積み	4.1*	4.1*	1.6	遠江IV期後半	豊岡村教委1983
住山 1	豊岡村	円	8.5	無袖式	長方形	円墳積み	3.9		0.86	遠江IV期前半	豊岡村教委1982
臥下 1	豊岡市	円	10.3	無袖式	扇張り形	礎石+円墳積み	4.9		1.1	遠江IV期後半	豊岡村教委1979
谷口 4	豊岡市	円	15	無袖式?	扇張り形	角礎+円墳積み	5.0*		1.2	遠江IV期後半	豊岡市郷土館1973
腰子塚 3	袋井市	円	16	無袖式	長方形	礎石+円墳積み	5.1		1.3	遠江IV期前半	袋井市教委1992
腰子塚 6-第1	袋井市	円	12.4	両袖式	長方形	円墳積み	6.4	4.6	1.66	遠江IV期前半	袋井市教委1992
腰子塚 6-第2	袋井市	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.2		0.53	遠江IV期前半	袋井市教委1992
腰子塚 C区3	浅井町	不明		無袖式	長方形	円墳積み	1.3		0.7	遠江V期前半	浅井町教委1992
腰子塚 C区5	浅井町	不明		無袖式	長方形	円墳積み	0.78		0.3	遠江IV期後半	浅井町教委1992
水原渡 B 2	島田市	不明		無袖式	長方形	2列円墳積み	4.5		0.9	遠江IV期後半	遠江考古研1985
水原渡 B 3	島田市	不明		無袖式	扇張り形	礎石+円墳積み	6.3		1	遠江IV期後半	遠江考古研1985
水原渡 C 1	島田市	円	10.5	無袖式	長方形	2列円墳積み	7.47		1.2	遠江IV期後半	静岡埋文研1998
水原渡 C 2	島田市	円	6	無袖式	長方形	2列円墳積み	4.44		0.91	遠江IV期後半	静岡埋文研1998



第316図 遠江の奥壁を円墳積みする古墳(a 2類)

みたい。

遠江には遠江Ⅲ期中葉までに築造された初現的な古墳のうち、袋井市団子塚6号墳(第一主体部、a 1類)のように、奥壁に大型の角礎を用いる古墳とは系譜の異なる石室構築技術が導入されたものがあることが指摘される(鈴木・2000b)が、a 2類とした古墳とは時期が漸絶するだけでなく、玄室平面形態が異なっており、直接的な系譜関係を追うことはできない。

一方、a 2類は7世紀後半～8世紀前半に築造された古墳が多く、7世紀後半以降、遠江において広範に奥壁を円墳積みする石室が出現・増加している様相を窺うことができる。

a 2 類の 7 世紀代の横穴式石室に用いられた円礫積みは他地域からの伝播ではなく、奥壁に大型の石材を用いていた石室 (b 類など) が小型化する段階で出現した、小地域内で跡付けることができる自生的な要素が強く、在地系石室が地域内で散発的に変容していく過程として位置づけられている (鈴木・2000a)。鈴木氏の指摘どおり出現は自生的である可能性が高いが、遠江において浜名湖沿岸 (北岸を除く)、天竜川西岸の三方原古墳群、北麓古墳群、天竜川東岸、原野谷川流域など広域で採用されていることから複数箇所で出現したとするよりも、どこかで出現したものが、伝播した可能性が高い。これは a 2 類の特徴として、奥壁が円礫積みという以外に玄室平面形が矩形 (長方形) であること、さらに玄室長に対して幅が広いことを挙げることができる。さらに、胴張り形の石室が側壁は奥壁を挟み込むのに対し、a 2 類は大屋敷 C 41・C 48 号墳のように側壁を奥壁の内側に当てるように構築される特徴がある。

したがって、a 2 類は奥壁構造、平面形態、構築技法が一致しており、擬似両袖式石室の発展形態として遠江内部で自生 (鈴木・2000a) した後、遠江において情報が広範に伝播・共有されたといえるだろう。また、a 2 類は古墳がほぼ消滅する遠江 V 期前半に至っても石室の構築技術が遠江全体で情報交換されていたことを示している。さらに、奥壁円礫積みの石室 (a 2 類) は大形墳に採用されることはほとんどなく、上記の影響関係により各地で成立したとするならば、小型の横穴式石室を構築する集団同士の交流があった可能性がある。

#### (4) 大屋敷C古墳群の横穴式石室の変遷

##### ① 横穴式石室の分類

大屋敷C古墳群で採用された横穴式石室は、羨道 (袖) を有するものと、無羨道のものの二者に大きく区分することができ、さらに前者は羨道の有無と奥壁の様相により 3 区分することができ、後者は奥壁の様相により 2 区分することができる。

##### 有羨道 (両袖式)

複室系擬似両袖式で、奥壁に大型の石材を用いるもの……C19・C22・C42・C50

単室系擬似両袖式で、奥壁に大型の石材を用いるもの……C14・C17・C18・C20・C21・C24・  
C26・C30・C31・C33・C36・C39・  
C43・C46・C49・C51・C53・C54

単室系擬似両袖式で、奥壁を円礫積みするもの……C48

##### 無羨道 (無袖式)

奥壁に大型の石材を用いるもの……C25・C27・C29・C35・C45・C52・(C40)

奥壁を円礫積みするもの……C34・C41・(C40)

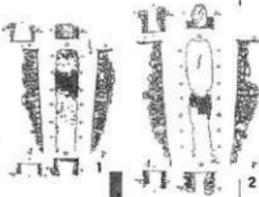
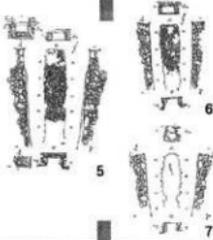
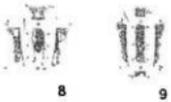
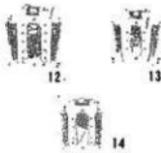
不明……C2・C3・C10・C23・C28・C32・C37・C38・C44・C47

##### ② 横穴式石室の変遷 (第317図)

**複室系擬似両袖式石室** 大屋敷C古墳群では、複室系擬似両袖式石室はC19・C22・C42・C50号墳の4基が確認できる。石室の特徴は一致しており、玄室平面は胴張り形、奥壁に大型の角礫を用いて鏡石とし、側壁は角礫が多用される。

このうちC19・C22・C42号墳は遠江IV期前半に築造されたことが判明し、C50号墳は遅くとも遠江IV期後半に築造されていたことが判明する。現状では、遠江においてこの形式の石室が遠江IV期末葉以降に築造された可能性は少ない。したがって、複室系擬似両袖式石室は遠江IV期前半からIV期後半まで築造されている。

**単室系擬似両袖式石室** 単室系擬似両袖式石室は大屋敷C古墳群で最も多く築造された石室形態であり、19基確認することができる。石室形態が判明する古墳のうち約6割がこの形態である。石室の特徴は、

時期	複室系擬似両袖式	単室系擬似両袖式	無袖式
遠江中期後半 末葉			
遠江前期前半			
遠江中期後半			
遠江IV期末葉			
遠江V期の半	1 大塚敷C22 2 大塚敷C19 3 大塚敷C50 4 大塚敷C46 5 大塚敷C21 6 大塚敷C36 7 大塚敷C43 8 大塚敷C24 9 大塚敷C49	10 大塚敷C20 11 大塚敷C31 12 大塚敷C29 13 大塚敷C27 14 大塚敷C35 15 大塚敷C41 16 大塚敷C45 17 大塚敷C41	

(scale=1:300)

第317図 大塚敷C古墳群横穴式石室変遷図

玄室平面は胴張り形が多く、奥室まり形、長方形が一部に確認できる。奥壁は大型の角礫を用いて鏡石とし、2段積みするものが多い。

単室系擬似両袖式石室は、C17・C46号墳が遠江Ⅳ期前半に築造され、続く遠江Ⅳ期後半に多くの石室が築造される。C20号墳はⅤ期前半に築造された可能性が高い。したがって、大屋敷C古墳群の形成初期からⅤ期前半まで継続的に築造されており、遠江Ⅳ期後半が盛期といえる。

また、単室系擬似両袖式石室のうち、奥壁を円礫積みする石室は、C48号墳の1基のみ確認できる。出土遺物は小片であり、時期を特定することはできないが、遠江Ⅳ期後半に築造された可能性が高い。したがって、奥壁を円礫積みする技術はこの時期に伝播した可能性が高い。

**無袖式石室** 大屋敷C古墳群では、9基で採用されている。無袖式石室は出土遺物が少なく、時期が特定できないものが多い。

奥壁に大型の石材(鏡石)を用いる6基は遺物が少なく、時期を特定することはできないが、大型の古墳の間に築造されるものが多いことから、遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期前半に築造された可能性が高い。石室の特徴は、後述するC41号墳を除いて、玄室平面胴張り形で、石室長に対して幅が狭い傾向にある。

奥壁を円礫積みするC41号墳は前庭から出土した須恵器広口壺は遠江Ⅴ期前半でも新しい時期に位置づけることができ、8世紀第二四半期に築造された可能性が高い。この石室の特徴は玄室平面が長方形で、石室長に対して幅が広いことである。

また、大屋敷C34号墳の石室平面形は円形である。円形(楕円形)の石室は豊岡村上神増E20号墳に確認することができ、上神増E20号墳の築造時期は遠江Ⅴ期前半である。この古墳を参照すると、大屋敷C34号墳は石室が極端に小型化していることも含めて、大屋敷C古墳群における横穴式石室の最終段階に築造された古墳と考えることができ、8世紀第二四半期に位置づけるのが妥当である。

**出現・変遷過程** 大屋敷C古墳群は、遠江Ⅳ期前半に複室系擬似両袖式(C19・C22・C42号墳)、単室系擬似両袖式石室(C17・C46号墳)の5基がほぼ同時期に築造され、群形成が始まる。つづく遠江Ⅳ期後半に築造の盛期を迎え、C21号墳など単室系擬似両袖式石室が活発に築造される。遠江Ⅳ期末葉に単室系擬似両袖式も築造が続けられる一方で、無袖式石室が増加し、この傾向は遠江Ⅴ期前半にも継続する。Ⅴ期前半には古墳の築造は終息へ向かい、C34・C41号墳で遠江Ⅴ期前半でも新しい時期、8世紀第二四半期まで築造が行われ、終焉を迎えた。

#### 4 大屋敷C古墳群の成立と終焉

大屋敷C古墳群の調査報告の最後に、浜北市北部、旧龜玉郡の古墳の動向や横穴式石室の動向からみた大屋敷C古墳群の位置づけについて考え、大屋敷C古墳群の報告を終えたい。

##### (1) 龜玉郡域における古墳の変遷(第318回)

ここでは浜北市北部の北麓丘陵の古墳群(北麓古墳群とする)と、内野台地に築造された古墳群(内野古墳群とする)について、その動向を見ておきたい。なお、記述にあたっては、内野古墳群、北麓古墳群西側(雲岩寺古墳群より西側)、北麓古墳群東側(泉古墳群より東側)、浜北段丘(御馬ヶ池古墳群、天竜川西岸)に区分して、その動向を概観し、大屋敷C古墳群の位置づけについて考えてみる。

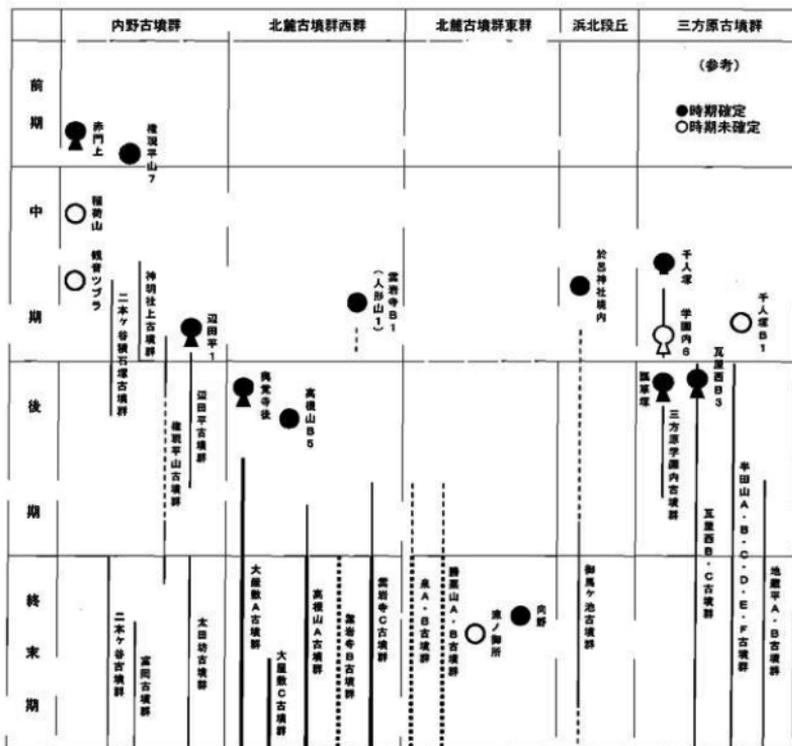
**古墳時代前期後半** 龜玉郡域において、まず古墳が築造されるのが、前期後半(4世紀後半)に築造された内野古墳群中の赤門上古墳である。赤門上古墳は全長56.3mをはかる前方後円墳であり、埋葬施設は割竹形木棺を直葬したもので、主軸は南北に向ける。埋葬施設からは、奈良県天理市黒塚古墳、京都府相楽郡山城町椿井大塚山古墳など5古墳と同型関係にある三角縁「天王日月」銘唐草(雲)文帯四神獣鏡1面をはじめ、管玉、有稜系柳葉式銅鏡、有稜系盃頭式銅鏡、平根三角形式鉄鏡、平根柳葉式鉄鏡、鉄刀、鉄剣(槍)、農具が出土している(浜北市教委・浜名高校1966、大谷2004a)。天竜川以西の西遠江

地域で現状では最初に築造された前方後円墳であり、木棺に割竹形木棺を採用し、北頭位をとり、三角緑神獸鏡、有後系柳葉式銅鏡を有するなど、畿内の大型古墳と同様の内容を有しており、畿内政権との強い関係の下で成立した古墳といえる(大谷2004a)。

赤門上古墳に続くか、ほぼ同時期に権現平山7号墳が築造される。この古墳は、25m前後の円墳で、木棺直葬であり、鉄鏡、銅鏡、農工具を副葬するものの、東西頭位を採用し、銅鏡も定角式銅鏡である。赤門上古墳と比較すると規模も副葬品内容も劣っており、三角緑神獸鏡や有後系柳葉式銅鏡など畿内政権から配布されたと考えられる遺物を副葬しないことから、畿内政権との関係は赤門上古墳と比べると希薄となり、遠江の在地色が強くなる(大谷2004a)。

**中期前葉** 中期前葉(5世紀前半)に入ると、内野古墳群において神明社上1号墳が築造される。規模は25mの円墳であり、鳥文鏡、鉄鏡などが出土している(松井1994)。また、同時期に赤門上古墳の近くに神獸鏡や玉類を副葬する古墳が造営されていた可能性が高い(大谷2004a)。この中期前半段階までは内野古墳群で、赤門上古墳から中規模の首長墓が連続的に築造されている。

**中期中葉** つづく中期中葉(5世紀中葉)になり、首長墓の造営地が変化する。内野古墳群からやや南に下った三方原台地での千人塚古墳の築造である(浜松市博1998)。千人塚古墳は、54mをはかる大型の造



第318図 魚玉郡域における古墳の変遷

り出し付円墳で、三角板革短甲や多数の鉄鏃、淡輪系埴輪を有するなど、畿内政権との関係が強い古墳である。この時期には、磐田原台地に磐田市遠江堂山古墳(前方後円墳113m)が築造されており、この古墳の出現と同様の背景をもって築造された古墳といえる。中期中葉以降においても、千人塚古墳が属す三方原学園内古墳群には、連続的に前方後円墳(学園内6号墳、瓢箪塚古墳)が築造され、安定的に首長墓系列を維持している(鈴木敏1998)。

一方で、中期前半段階まで有力古墳が連続的に築造された内野古墳群では、30mを超えるような古墳は築造されず、千人塚古墳と比較すると圧倒的に小型であり、副葬品も少なくなる。

この時期に二本ヶ谷積石塚古墳群が形成されるが、それまでに古墳が築造されていた場所とは離れて築造される。この古墳群は副葬遺物にその様相は顕著ではないが、小規模ながらも須恵器を多数副葬しており、また4号墳からは鏡が出土するなど新興の渡来系集団の存在が見え隠れする。

**中期後葉** 中期後葉(5世紀後半)になると前方後円墳である辺田平1号墳(20.1m)を契機として辺田平古墳群などが形成をはじめた。また、この時期に至って、新たな動きが確認できる。新たな動きとは北麓丘陵と浜北段丘にはじめて築造された雲岩寺B1号墳(人形山古墳)、於呂神社境内古墳の出現である。しかし、まだ内野台地上の古墳の築造が活発であり、両古墳ともに円墳であり副葬遺物も少なく、三方原学園内古墳群や内野古墳群のほうが優勢であるといえる。

**後期前半** つづき古墳時代後期前半(6世紀前半)になり、龜玉郡城における古墳の築造に変化が起り、大屋敷C古墳群の所在する宮口地区(北麓古墳群西群)で古墳の造営が突如として開始され、様相が一変する。興覚寺後古墳の登場である。興覚寺後古墳は、全長35mの前方後円墳であり、埋葬施設として畿内系片箱式石室を採用している(浜北市教委1988)。三方原学園内古墳群内には中期の千人塚古墳、三方原学園内6号墳に続いて瓢箪塚古墳が築造されるが、興覚寺後古墳は畿内系の横穴式石室を採用しており、副葬品も金銅装馬具だけでなく、銀象嵌鍔を有する(大谷2003)など瓢箪塚古墳よりも優位といえる。

また、興覚寺後古墳と同時期かやや遅れて、高根山B5号墳が築造される。この古墳も興覚寺後古墳と比較すると小型であるが、畿内系石室であり、6世紀前半代に畿内政権と強い関係を有した集団が北麓古墳群西群で古墳の造営を開始したといえる。北麓古墳群西群が築造された宮口地区は、地名考証により、「みやけ(屯倉)」→「みやけくち(三宅口)」→「みやくち(宮口)」に変化した可能性が指摘され(浜北市1989)、この地域に「屯倉」が設置された可能性があることとも関連して、6世紀段階に連続して畿内地域と関係の強い石室が築造されたことは興味深い。屯倉が設置されたかは別問題として、6世紀代は北麓古墳群西群を築いた集団が天竜川西岸地域の中で畿内政権から重要視されていた可能性が高いだろう。

一方、三方原古墳群では、三方原学園内1号墳(瓢箪塚古墳)が築造されるものの、三方原学園内古墳群からやや北側に半田山古墳群や瓦屋西古墳群などの横穴系埋葬施設を有する前方後円墳が築造されるなど、興覚寺後古墳の築造と時を同じくしてそれまでとは異なる場所に古墳群が形成されている。

**後期後半** これ以降(6世紀後半)、三方原学園内古墳群や内野古墳群では築造が衰退していく一方で、浜松市半田山古墳群、浜松市瓦屋西古墳群などや、浜北北麓古墳群では古墳の築造が活発化し、6世紀後半では北麓古墳群西群で大屋敷A古墳群や雲岩寺C古墳群などの築造が開始される。龜玉郡内では明らかに築造箇所が内野古墳群から北麓古墳群に移り変わる。

**終末期** 7世紀前半になると、北麓古墳群でも東群に大型の石室を有する向野古墳や涼ノ御所古墳が築造される。このうち向野古墳は畿内の切石積み石室の影響を強く受けていることが指摘される(鈴木敏1988, 鈴木一2000b)。涼ノ御所古墳は向野古墳と同様の石室が内蔵されたと伝承され、当時の金工技術を結集して製作された仏教系意匠を有する冠を副葬する(大谷2004b)など畿内政権との関係が強いといえる。この時期の最後に、向野古墳・涼ノ御所古墳の南約2kmのところ白鳳期の瓦窯、篠場瓦窯

が造営されたことは興味深い。向野古墳や涼ノ御所古墳を造営した集団が勢力を維持し、畿内政権と深い関係を維持して川原寺式軒丸瓦などを葺く白鳳寺院を建立した可能性が高いであろう。

したがって、龜玉郡内の古墳の変遷には、5つの画期を確認することができる。

第1の画期は、前期後半における西逸江で最初的大型古墳、赤門上古墳の出現、第2の画期は、中期中葉における、三方原台地上での千人塚古墳の出現と、それに伴う内野古墳群の小型化、第3の画期は、中期後葉における北麓古墳群、御馬ヶ池古墳群での古墳の造営開始であり、第4の画期は、後期前半における北麓古墳群での興覚寺後古墳の築造であり、第5の画期は終末期における北麓古墳群東群での向野古墳・涼ノ御所古墳の築造である。また、第5の画期における古墳造営の流れは、浜北市於呂地区に営まれた篠場瓦窯群の操業とも深い関係をもつと考えることができる。

## (2) 龜玉郡域における横穴式石室の変遷(第319図)

龜玉郡域における横穴式石室には、両袖式石室、片袖式石室、複室系擬似両袖式石室、単室系擬似両袖式石室、無袖式石室がある。大屋敷C古墳群の成立における周辺の古墳からの影響を探るためそれぞれの特徴と変遷を簡単にみておきたい。

### ① 龜玉郡域の横穴式石室の系統

**両袖式石室** 畿内系両袖式石室は、高根山B5号墳および向野古墳で採用されている。また、金銅製鈿付冠帽が出土した涼ノ御所古墳も伝承が正しければ、この系統に位置づけ可能である。

高根山B5号墳は、平面が正方形に近いもので、各壁を角礫で多段積みしている。また、袖部は立柱石を用いず、ほぼ同じ大きさの角礫を3段積み上げている。玄室と羨道の天井には段差があり、玄室の天井は玄門に向かって直線的に傾斜する。前壁は2段で構成されている。当古墳は出土遺物がなく築造時期は明確ではないが、同様の石室構造を有する愛知県豊飯郡一宮町舟山2号墳(三河考古学談話会1994)が遠江Ⅲ期中葉に位置づけられることから、ほぼ同時期かやや遅る遠江Ⅲ期前葉に位置づけられている(鈴木敏1988, 鈴木一2000b)。

向野古墳は、切石造であり、明らかに畿内地域の切石積み横穴式石室の影響を受けている(鈴木敏1988, 鈴木一2000b)。玄室平面形は長方形であり、玄門は立石を用いている。天井は玄室部分と羨道部分に段差があり、玄室部分はほぼ水平に架構されている。なお、玄室側壁中央の石材が縦位に用いられており、側壁からわずかに突出する。複室系擬似両袖式石室の影響を受けており、完全な畿内系石室ではなく、在地の石室の影響を受けた石室といえ、畿内系両袖式石室と在地系複室系擬似両袖式石室の融合型石室とすることができる。

両袖式石室の特徴は、使用石材が角礫で玄室平面が矩形で、天井は水平あるいは、玄門に向かって傾斜するもので、畿内系石室である。しかし、高根山B5号墳、向野古墳ともに単発的であり、影響を受けた古墳は現状では確認することができない。

**片袖式石室** 片袖式石室は興覚寺後古墳(右片袖式)、大屋敷飯A10・飯A15・飯A17号墳(右片袖式、静岡埋文研2003)、雲岩寺C8号墳(右片袖式、静岡埋文研2002、武田2002)、高根山A13号墳(左片袖式と推測される、註7、浜北市教委1995)の6者があり、大屋敷A古墳群ではさらに数基が存在している可能性が高い。

興覚寺後古墳は、右片袖式石室で、袖部分は角礫を用いて多段積みしている。奥壁・側壁は角礫を用いており、腰石を採用している。玄室平面形は長方形である。天井はほぼ水平であり、前壁を有する。これらの特徴から畿内系片袖式石室の特徴を具備しているといえる(鈴木敏1988, 鈴木一2000b)。

大屋敷A古墳群の片袖式石室は、現地説明会資料(静岡埋文研2003c)や年報資料(静岡埋文研2004)をみると、角礫を用いており、平面長方形で、袖は立柱石を用いず、角礫を平積みして多段積みしている。

側壁の残存状況は良好ではないため明確ではないが、奥壁は大型の角礫を用いて鏡石としている。正式報告書を持って精緻な検討をしなければならないが、大屋敷A古墳群中の片袖式石室は興覚寺後古墳に類似しており、その系譜を引く石室と位置づけることができる可能性が高い。

また、雲岩寺C 8号墳(武田2002ほか)も右片袖式石室で、玄室平面形は長方形である。袖部は角礫を平積みし多段積みしたもので、この古墳も興覚寺後古墳に類似しており、その系譜を引く石室とすることができる。興覚寺後古墳は遠江Ⅲ期前半の築造であり、雲岩寺C 8号墳、大屋敷A古墳群中の3基は6世紀後半と報告されている。

したがって、龜玉郡内に築造された片袖式石室は興覚寺後古墳の系譜を忠実に引き、6世紀後半まで築造され、7世紀前半には断絶し、終末期には継続しない。

また、片袖式石室・両袖式石室は大型古墳に採用されており、畿内の系統を引くことから小首長墳あるいは古墳群中の有力墳に採用された石室形態といえる(鈴木-1998・2000b)。

**擬似両袖式石室** 一方、以下に報告する擬似両袖式石室と無袖式石室は群集墳中の小型墳に採用されることが多い。

**複室系(狭門区画形)擬似両袖式石室(註8)** 複室系擬似両袖式石室は、遠江全域で確認でき、龜玉郡域でも大屋敷C古墳群をはじめ、複数の古墳群で確認できる。三河系横穴式石室(鈴木-2003)に区分される形態であり、その特徴として、①胴張り指向が強い平面形態を採用する、②玄門や狭門に突出傾向がある立柱石を用いる、③天井を弧状にする、④奥壁には一枚の大型石を用いる、が挙げられている。

大屋敷C古墳群では大型の古墳の埋葬施設として採用されており、C19・C22・C42・C50号墳の4基である。石室形態も類似し、玄室平面胴張り形で、奥壁には大型の鏡石を用い、立柱石を採用し、立柱石の上位には角礫が1～2段積載される。時期は、最も古いものが遠江Ⅳ期前半に出現している。

これ以前に出現している地域は三方原古墳群や浜名湖沿岸地域があり、それらの地域からの影響を受けて、龜玉郡域においても遠江Ⅳ期前半に成立し、Ⅳ期後半まで築造されている。

**単室系(玄門区画形)擬似両袖式石室** 単室系擬似両袖式石室は、遠江全域で最も多く確認でき、龜玉郡域でも大屋敷C古墳群、高根山A古墳群、雲岩寺C古墳群、富岡古墳群をはじめ、複数の古墳群で確認できる。三河系横穴式石室(鈴木-2003)に分類される石室形態である。

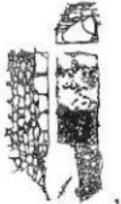
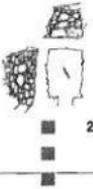
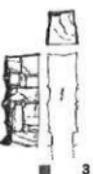
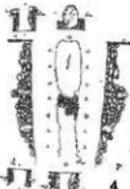
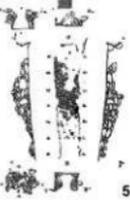
円礫のみ、角礫のみ、両者を併用するものの三者が確認できるが、各古墳の特徴は類似しており、奥壁に鏡石を用い、立柱石を採用し、玄室平面形は胴張り形あるいは長方形、奥窄まり形を呈し、上記した三河系石室の特徴を具備している。

単室系擬似両袖式石室も大屋敷C古墳群が築造される以前に三方原古墳群や、浜名湖沿岸、都田川流域で採用されており、それらの地域から影響を受け遠江Ⅳ期前半に成立し、Ⅴ期前半まで継続的に造営される。

**無袖式石室** 無袖式石室も北麓古墳群の大屋敷A・C古墳群、高根山古墳群、雲岩寺C古墳群、泉古墳群、内野古墳群の富岡古墳群などで確認されている。雲岩寺C古墳群では1号墳で6世紀後半に採用されており、玄室平面長方形で、奥壁は2枚の角礫を樹立している。その他では7世紀以降に築造された古墳に無袖式が採用されており、玄室平面形は長方形あるいは胴張り形、奥窄まり形を呈するものが多い。

また、雲岩寺C 1号墳や將軍塚古墳などで無袖式が遠江Ⅲ期中業～後業に採用されるが、現状ではこれらの石室が継続的に築造されることはなく、Ⅳ期後半段階以降、8世紀第二四半期まで平面形態を変化させながらも築造され続ける。

**竪穴系横口式石室** 辺田平12号墳(浜北市教委2000)は横口構造を有し、その横口に向かって傾斜することから、竪穴系横口式石室と想定される(鈴木-2000b)。しかし、この影響は辺田平12号墳が小規模墳であることも関連してか、他の古墳には引き継がれていない。

時期	片袖式	両袖式	複室系類似両袖式 (畿門区面形)	単室系類似両袖式 (玄門区面形)	無袖式
遠江前期前半	 1	 2			1 彌梵寺後 2 高根山B 5 3 向野 4 大屋敷C19 5 大屋敷C50 6 大屋敷C46 7 大屋敷C20 8 辺田平 12 9 將軍塚
遠江中期中葉	 大屋敷A古墳群 雲岩寺C 8			 雲岩寺C 1	10 高根山A14 11 太田坊 5 12 大屋敷C35 13 大屋敷C41
遠江中期後半	 大屋敷A古墳群			 8  9	
遠江前期末葉～IV期前半		 3	 4	 6	
遠江IV期後半以降	(scale=1:300)	池ノ瀨所	 5	 7	 10  11  12  13

第319図 鹿玉郡域における横穴式石室展開図

## ② 龜玉郡域における横穴式石室の変遷(第319図)

龜玉郡域において最も早くに横穴式石室を導入したのは北麓古墳群西群の興覚寺後古墳と高根山B5号墳であり(浜北市教委1988)、ともに遠江Ⅲ期前葉(TK10型併行期)の築造と考えられている(鈴木敏1988、鈴木一2000b)。興覚寺後古墳は右片袖式石室であり、高根山B5号墳は両袖式石室である。ともに一部に異なる要素を有するものの玄室平面長方形、平天井、立柱石を伴わないなど畿内系石室に位置づけることが可能であり、畿内地域の強い影響のもとに成立した古墳であることが想定できる。

つづく、遠江Ⅲ期中葉(TK43期)～Ⅲ期後葉(TK209型時期)には大屋敷A古墳群中の3～4基、雲岩寺C8号墳が築造される。これらは右片袖式石室であり、興覚寺後古墳の諸特徴を具備しており、興覚寺後古墳の影響を強く受けて成立・継承するものであり、大屋敷A古墳群と雲岩寺C古墳群という複数の古墳群で採用されていることにより、非常に強い影響力を持っていたことが考えられる。これは畿内系石室という石室を採用することにより、畿内との繋がりを維持し、採用する集団の優位性を示していた(鈴木一2000b)結果と想定できる。この時期には、無袖式石室である雲岩寺C1号墳や將軍塚古墳が築造されるが、片袖式石室墳と比較すると小型であり、片袖式石室墳の方が優位であるといえ、また無袖式石室は継続的に築造されない。

一方、7世紀前半(遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半)になると、6世紀後半までの様相が一変する。片袖式石室は6世紀後半～末葉で築造を停止する一方で、切石積み両袖式石室である向野古墳が築造される。また、向野古墳に近接したとされる涼ノ御所古墳も同様の石室と伝承されており、継続的に築造されたことが推測できる。畿内系石室とはいえ、片袖式石室を払拭した新しい別系統の畿内系石室の導入であり、6世紀段階とは異なる首長が採用したといえる。さらに、この現象と軌を一にするように、6世紀後半にはみられなかった複室系擬似両袖式、単室系擬似両袖式石室(三河系石室)が複数の群集墳で出現し、以後古墳の終末まで採用される。

したがって、龜玉郡域の横穴式石室は、大きく2つの画期を見出すことができ、第Ⅰの画期は6世紀前半の片袖式石室の採用とその継続的な採用、第Ⅱの画期は、7世紀前半の畿内系両袖式石室の採用と三河系擬似両袖式石室の採用であり、大屋敷C古墳群は横穴式石室における第Ⅱの画期に出現しているといえる。

## (3) 大屋敷C古墳群の成立の要件

大屋敷C古墳群の位置づけを探るために、やや長めに龜玉郡域における横穴式石室の変遷と古墳の変遷を前期から順を追って検討してきた。

龜玉郡域においては、上述したように古墳の造営に関しては古墳の出現から終末までに5つの画期があったことが判明する。その画期をもう一度みておくと、第Ⅰの画期は、4世紀後半の赤門上古墳の出現、第Ⅱの画期は、5世紀中葉の三方原古墳群における千人塚古墳の築造と、内野古墳群での小規模古墳の築造、第Ⅲの画期は5世紀後半における北麓古墳群、御馬ヶ池古墳群での古墳の造営開始、第Ⅳの画期は6世紀前半の北麓古墳群での興覚寺後古墳の造営、第Ⅴの画期は、北麓古墳群東群での向野古墳・涼ノ御所古墳の築造である。

一方、横穴式石室の築造に際しても2つの画期を認定することができ、第Ⅰの画期が片袖式石室の採用、第Ⅱの画期は切石積み両袖式石室の採用と三河系石室の採用・増加である。第Ⅰの画期は古墳の第Ⅳの画期、第Ⅱの画期は古墳の第Ⅴの画期と対応する。

大屋敷C古墳群の造営は遠江Ⅳ期前半に開始されるが、龜玉郡域における古墳の第Ⅴの画期(石室における第Ⅱの画期)と連動しており、興覚寺後古墳からの系譜を引く大屋敷A古墳群で片袖式石室の造営が停止され、新たな畿内系両袖式石室を採用した向野古墳の出現、擬似両袖式石室へと石室形態が変

化する段階と一致している。

これはそれまでの片袖式石室に表された身分秩序や石室構築技術、祭祀形態の停止であり、擬似両袖式石室の採用という新たな石室構築技術の採用、祭祀形態の採用と考えることができる。また、片袖式石室を採用していた古墳と比較すると擬似両袖式石室を採用する古墳は古墳・石室規模ともに小さくなり、さらに片袖式石室を採用する古墳に限られていたのに対し、大屋敷C古墳群などでは複数の古墳で同時に採用されるなど古墳を築造できる階層の増加現象とも対応している。

大屋敷C古墳群は、各古墳は規模も小さく副葬品も貧弱であり、突出する古墳のない、ほぼ同階層にある集団が複数世代にわたって継続的に築造したと考えることができ、遠江の一般的な古墳群であるといえる。しかし、その成立にあたっては亀玉郡域において畿内地域との新たな関係を持った向野古墳の首長が勃興してきたのと時を同じくして造営が開始されたといえ、この首長と結びつきをもって造営を開始されたといえる。そして、その造営開始にあたっては、姫街道が都田川で分岐し北麓をとって豊岡方面へ抜ける途中で、かつ天竜川平野の最も奥まった場所にあるという地理的な条件から、三方原古墳群や都田川流域の古墳群からの石室構築技術だけでなく、古墳構築技術、葬送祭祀など影響を受けて形成されたといえるだろう。そして、その流れは、さらに東の北麓古墳群や天竜川東岸へ情報を伝播させていた可能性が高い。そして、向野古墳、涼ノ御所古墳と小首長墓が連続的に築造された段階、7世紀前半～後半に築造の盛期を向かい、8世紀前半の律令国家の成立とともに古墳存在の意義を失い、終焉を迎えるのである。

#### (4) 大屋敷C古墳群の終焉

大屋敷C古墳群は、終末期前半、7世紀前半に築造が開始され、7世紀後半に盛期を迎える。一方、8世紀前半に終息に向かい、8世紀第二四半期に終焉を迎える。この過程は、古墳の重要性が失われていく過程として置き換えることができる。

大屋敷C古墳群においては、7世紀前半代には大屋敷C19・C42号墳で釘付式木棺を採用することから伸展葬と考えることができ、従来の埋葬方法(伸展葬)を採用していた可能性が高く、遠江IV期後半段階までは伸展葬が行われていた可能性が高い。

一方で、大屋敷C53号墳は遠江V期前半の築造であるが骨蔵器を用いており、また遠江IV期後半以降に築造された小型石室墳も改葬骨あるいは火葬骨が納められた可能性が高いことを推測した。つまり、7世紀後半から末葉にかけて埋葬方法が複次葬から単次葬へ変化しただけでなく、伸展葬から改葬骨あるいは火葬骨を納める方法に変化している可能性が高い。これに合わせて、葬送儀礼も変化した。また副葬品が極端に減少している可能性が高く、伸展葬の遺体を複数納めることに意義のあった石室の存在意義が薄れていった可能性が高い。そして、本格的な火葬墓の導入、墳墓祭祀の導入、墳墓を築造できた階層の限定により、埋葬場所が変化し、古墳の造営は終焉を迎えたのであろう。

したがって、奈良時代における火葬墓(骨蔵器の導入)への移行は、大屋敷C古墳群など遠江においても徐々に進行していた。その過程は石室内での伸展葬から改葬骨への変化→石室内への骨蔵器(火葬)の導入→石室の不採用という変遷過程があった可能性が高い。大屋敷C古墳群は首長墓を含まないことから、大屋敷C古墳群の造母集団は奈良時代になると墳墓を築くことのできる階層ではなく、またこの地が墳墓の造営地として放棄、あるいは造墓が禁止された結果、他の古墳群同様古墳の造営が終焉したのであろう。

つまり、遠江においても律令期の火葬墓は突如として採用されたわけではなく、古墳が終焉していく過程の中で改葬骨の埋葬など遺体が骨化したものを埋葬する方法が取り入れられるなど徐々に変化しており、奈良時代に入り火葬墓(祭祀)の導入にあたってスムーズに流れやすい土壌が成立していた可能性

が高い。

## 第IV章 註

- 1 「浜北市史」資料編(浜北市2004)の「大屋敷遺跡」の報告において、打製石鏃の一部をサヌカイト製、磨製石鏃を緑色片岩製としたが、脱稿後、静岡大学名誉教授 伊藤通久先生にご鑑定頂いた結果、「サヌカイト」としたものがホルンフェルス、「緑色片岩」としたものが細砂凝灰岩であるとの鑑定を得たため、ここに修正する。
- 2 磐田市中心崎2号墳は、墳丘の裾全体を覆うが、外護列石というよりは葎石とするほうが妥当であると考えられるため、ここでは外護列石としない。なお、城崎2号墳は葎石を採用した中期古墳を破壊して後期古墳としている可能性が高いと考える。
- 3 須志器の産地同定は湖西市教育委員会 後藤延一氏のご鑑定・ご指示による。
- 4 鉄釘出土古墳数をみると、東海地方全域では、遠江Ⅱ期(MT15型式併行期)～Ⅲ期前半(TK10平行期)9基、遠江Ⅲ期中葉(TK43併行期)～後葉(TK209併行期)13基、遠江Ⅳ期前半(TK217併行期)23基、遠江Ⅳ期後半(TK46併行期)～Ⅴ期前半(MT21併行期)34基であり、時期が降るにつれて増加傾向にある。
- 5 東海地方全域において鉄釘が出土した古墳の横穴式石室規模を平均化すると、遠江Ⅱ期(MT15併行期)～Ⅲ期前半(TK10併行期)約5.8m、遠江Ⅲ期中葉(TK43併行期)～後葉(TK209併行期)約7.2m、遠江Ⅳ期前半(TK217併行期)約6.2m、遠江Ⅳ期後半(TK46併行期)～Ⅴ期前半(MT21併行期)4.9mをはかり、遠江の古墳平均規模と比較して、各時期ともに1m以上大型であることがわかる。
- 6 単位群区分は、あくまでも開口方向に墓道が延びていたと仮定しての設定である。したがって、築造当初に墓道が急激に別方向へと折れ曲がることは想定していない。  
この理由は、他の群集墳を見た場合においても、谷底へ向かって墓道が延びるのが一般的であり、大屋敷C古墳群においても開口方向と谷の位置がほぼ一致していることである。
- 7 高根山A13号墳は石材が抜き取られており、墓室内に残された掘り込みから片袖式と判断されたものであり、この想定が正しければ、左片袖式石室となる。しかし、墓室の形状を確認すると、両袖式であり、片袖式石室の墓室が、右室形状と同様片袖式となる一般的な対応関係と異なっており、高根山A13号墳を片袖式石室と断定するのは躊躇する。したがって、ここでは片袖式の可能性があることから記載のみにとどめたい。
- 8 漢門区面形擬似両袖式石室、玄門区面形擬似両袖式石室とは、鈴木一有氏(鈴木一2000b)が定義したものである。  
遠江の横穴式石室において、袖部を2箇所有する、浜松市見郷3号墳や磐田市大久保・高山4号墳などで、いわゆる複室構造が確認できるもの、遠江の横穴式石室は残存状況が良好なものも少なく、複室構造において壊道とされる部分に、天井が架橋されていたか不明瞭であり、かつこの部分が古墳の外に向かって八字形に開放するものが多く、羨道としての機能を果たさない可能性が考えられることから、羨道まで天井石が架橋される複室構造の横穴式石室とは別区分にした。そして、立柱石を4箇所有する古墳を玄室、羨道、前庭に区分し、前の袖部分を漢門として、漢門区面形擬似両袖式石室とした。一方、立柱石を2箇所有するものを玄室と羨道とに区分し、玄門区面形擬似両袖式石室と定義した。  
筆者もこの考えに賛成であり、遠江においてはいわゆる複室構造の石室は現状では確認することができず、いわゆる複室構造で羨道とされる部分は前庭、前室とされる部分は羨道、後室とされる部分は玄室として機能していたと判断している。しかし、本来的には複室構造の石室の影響を受けていると判断していること、文字を見て石室形態を想像しやすいことから、本報告では漢門区面形を複室系擬似両袖式石室、玄門区面形を単室系擬似両袖式石室とした。

## 【補記】

- 1 脱稿後、磐田市梵天18号墳(磐田市理文センター2003)で、外護列石(開口部列石)および墳丘内列石が出土している(報告書第118部、図版62)ことに気付いた。  
梵天18号墳は、墳丘規模5.8mの円墳で、全長3.5mの内環を主に使用した単室系擬似両袖式横穴式石室を埋葬施設とする。築造時期は遠江Ⅳ期後半である。  
外護列石を有する古墳としては小規模であるが、磐田原台地でも擬似両袖式石室に外護列石が伴っており、碓田川流域や北麓古墳群での事例と同様である。
- 2 脱稿後、磐田市梵天18号墳(磐田市理文センター2003)で、鉄釘が出土していることに気付いた。  
梵天18号墳は、墳丘規模5.8mの円墳で、全長3.5mの内環を主に使用した単室系擬似両袖式横穴式石室を埋葬施設とする。築造時期は遠江Ⅳ期後半である。鉄釘は、胴部がL字形に折り曲げられたa類で、法量は定形のもので全長7.0cm、幅4mmをはかる。この法量は、遠江Ⅳ期後半以降の鉄鏃と同様の傾向を示している。

## 第Ⅳ章 引用・参考文献

### 報告・報告書

- 浅羽町教育委員会編・発行 1992『田子塚遺跡(Ⅰ)』(静岡県磐田郡浅羽町)
- 池田町教育委員会編・発行 1999『願成寺西墳之越古墳群調査報告書』(岐阜県池田町)
- 一宮町教育委員会編・発行 1995『城山』
- 磐田市教育委員会編 1973『磐田市竹之内原古墳群調査記録報告書』 磐田市郷土館
- 磐田市教育委員会編・発行 1979『磐田市以下古墳群第1号墳発掘調査報告書』
- 磐田市教育委員会編・発行 1989『大久保・高山古墳群発掘調査報告書』
- 磐田市埋蔵文化財センター編 2004『新豊院山遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 大谷宏治 1999『珍しい主体部をもつ古墳の調査-上神洲E古墳群・寺山古墳群-』『平成11年度静岡の原像を探る発掘調査報告会』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 掛川市教育委員会編・発行 1989『大段古墳・東沢遺跡発掘調査報告書』
- 春日井市教育委員会編・発行 1997『味美二子塚古墳の時代』
- 相良町教育委員会編・発行 2000『大寄塚穴群・山下遺跡』(静岡県榛原郡相良町)
- 静岡県教育委員会編・発行 1989『静岡県の窯業遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 1998『水掛波古墳群C群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2000『山林遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『斜面地に密集する古墳の調査-雲岩寺C古墳群-』『年報』17
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002a『第二東名浜松区全体概要』『年報』18
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002b『密集してつくられた古墳と中世墓の調査-高根山古墳群-』『年報』18
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a『密集してつくられた古墳と中世墓の調査』『年報』19
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b『稲場瓦窯発掘調査現地説明会資料』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c『浜北市宮口大屋敷A古墳群発掘調査現地説明会資料』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『年報』20
- 豊岡村教育委員会編・発行 1983『押越・社山古墳群調査報告書』(静岡県磐田郡豊岡村)
- 豊岡村教育委員会編・発行 1993『新平山遺跡(Ⅱ)』(静岡県磐田郡豊岡村)
- 豊岡村教育委員会編・発行 2000『大手内古墳群』(静岡県磐田郡豊岡村)
- 中嶋郁夫 1992『古墳時代』『磐田市史』史料編 磐田市
- 榛原町教育委員会 1986『仁田山ノ崎古墳-出土遺物保存処理報告-』(静岡県榛原郡榛原町)
- 浜北市史編さん委員会 1989『浜北市史』通史編上巻 浜北市
- 浜北市史編さん委員会 2004『浜北市史』資料編 浜北市
- 浜北市教育委員会・浜名高等学校編・発行 1966『遠江赤門上古墳』
- 浜北市教育委員会編・発行 1981『浜北市東原遺跡D地点 浜名高等学校による東原遺跡第1次・第2次発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 1988『浜北市北蔵古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 1989『明神池運動場内遺跡群発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 1995『浜北市高根山古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 2000『内野古墳群』
- 浜北市教育委員会編・発行 2001『平成12年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 浜北市教育委員会編・発行 2002『東原遺跡A地点・B地点』
- 浜北市教育委員会編・発行 2003『新原古墳群-新原3号墳発掘調査報告書-』
- 浜松市教育委員会編 1984『半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡』 浜松市遺跡調査会
- 浜松市教育委員会編・発行 1988『半田山古墳群』
- 浜松市教育委員会編・発行 1989『都田地区発掘調査報告書』上巻
- 浜松市教育委員会編・発行 1995『浜松市指定文化財-古墳- 一石室を見学できる古墳-』
- 浜松市博物館編 1991『有玉西区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』上巻 浜松市文化協会
- 浜松市博物館編 1992a『佐鳴湖西岸遺跡群』本文編Ⅱ 浜松市文化協会
- 浜松市博物館編 1992b『有玉西区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下巻 浜松市文化協会



- 中野靖久 1994 「赤羽・中野『生産地における編年について』」「中世常滑焼をとおって」資料集
- 成瀬正勝 2001 「美濃の権祖」『古墳の終末』 三河古墳研究会
- 賀 元洋 2001 「甕式編年・床式編年・型式編年」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 西澤正晴 2001 「遠江における古墳の終末」『古墳の終末』 三河古墳研究会
- 松井一明 1986 「宮口窯の生産」『灰釉陶器の時代とその流通』静岡県考古学会
- 松井一明 1989a 「灰釉陶器をつくる人々」『浜北市史』通史編上巻 浜北市
- 松井一明 1989b 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開」『地域と考古学』向板鋼二先生遺稿記念論集刊行会
- 三河考古学談話会 1994 「東三河の横穴式石室資料編」(『三河考古』6)
- 三河古墳研究会編 2001 「東海の後期古墳データベース(CD-R)」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム実行委員会
- 山本忠尚 1998 『日本の美術』391 鬼瓦 室文堂

## 図の出典

- 第304図 菊地2004に加筆。
- 第305図 見徳2号墳(浜松市教委1989より)、岩井原1号墳(中嶋1992より)
- 第310図 新屋原40号墳(磐田市理文センター 2004より)、順成寺西墳之施1号墳(池田町教委1999より)
- 第311図 新屋原40号墳(磐田市理文センター 2004より)、蛭子森古墳(浜松市教委1995より)、以下1号墳(磐田市教委1979より)、天段1号墳(掛川市教委1989より)
- 第315図 見徳3号墳・弘法穴古墳(浜松市教委1995より)
- 第316図 神田1号墳(森下・鈴木ほか2000より)、太田坊1・4・5号墳(浜北市教委2000より)、瓦原西C35号墳(浜松市1992bより)
- 第319図 興覚寺後古墳・高根山B5号墳古墳(浜北市教委1988より)、向野古墳・得軍塚古墳(石橋2003より)、高根山A14号墳(浜北市教委1995より)、逗田平12号墳・太田坊5号墳(浜北市教委2000より)

# 報告書抄録

ふりがな	おおやしきしーこふんぐん・おおやしきいちごうよう							
書名	大屋敷C古墳群・大屋敷1号竪							
副書名	平成11～14年度 (国)362号道路改良(2B一般)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第1分冊							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第151集							
編著者名	大谷宏治(編集) 山形秀樹 植田弥生							
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	静岡市谷田 23番 20号 (〒422-8002)							
発行年月日	2004年8月2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおやしきしーこふんぐん 大屋敷C古墳群・ おおやしきいちごうよう 大屋敷の遺跡	い び 静 岡 北 宮 4831-531 ほか	い び 静 岡 北 宮 4831-531 ほか	22218	世界測地系		20000106～	表面積 17,500 m <sup>2</sup>	平成11～14年度 (国)362号道路改良 (2B一般)工 事に伴う埋蔵文 化財発掘調査
				34° 50'	137° 46'	20001031		
				5°～6°	3°～14°	20011001～		
				日本測地系		20020301		
				34° 49'	137° 46'	20020701～		
				53°～55°	15°～25°	20030131		
おおやしきいちごうよう 大屋敷1号竪	い び 静 岡 北 宮 4831-531 ほか	い び 静 岡 北 宮 4831-531 ほか	22218	世界測地系		20010106～ 20010331		
				34° 50'	137° 46'			
				5°	5°			
				日本測地系				
				34° 49'	137° 46'			
				53°	16°			
所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おおやしきしーこふんぐん 大屋敷の遺跡	その他 (陥し穴)	縄文時代	陥し穴5基	打製石鏃4・剥片2		陥し穴がほぼ等 間隔に並んで出 土。		
		弥生時代		磨製石鏃1				
	竪跡 墓地?	平安時代末～鎌倉時代	土坑1基・自然 流路5条	瓦(平瓦・丸瓦・鬼瓦)・山 茶碗・常滑焼・銅銭1		大屋敷6号竪 (瓦・山茶碗併提 竪)に伴う遺物 ほか。		
墓地	近世	なし	煙管1					
おおやしきしーこふんぐん 大屋敷C古墳群	古墳	古墳時代後期後半 (古墳時代終末期)	古墳51基(うち破壊さ れ、石材が集中するこ とにより確認した古 墳9基含む)。 すべて横穴式石室を 埋葬施設とする。	須恵器・土師器・玉類・鉄 製品(鉄鏃・刀子・釘・刀 装具)		古墳時代後期後 半(終末期)の大 規模群集墳。		
おおやしきいちごうよう 大屋敷1号竪	竪跡	平安時代中期	竪1基・土坑1基・自 然流路1条	灰釉陶器(風字二面硯2・ 碗・皿・無台碗・長頸壺・ 鉢・瓶・高麗1)・竪道具(焼 台・棒状土製品)・滑石製・ 炭化材		平安時代中期の 灰釉陶器焼成の 竪。		
あまてらすこふんぐん 宮口古竪跡群 (付編として)	竪跡	平安時代中期～鎌倉 時代前半(9世紀後 半～13世紀前半)	竪	灰釉陶器・山茶碗・瓦ほか		平安時代中期か ら鎌倉時代の 竪。		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第151集

**大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯**

平成11～14年度（国）362号道路改良（2B一般）工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
（第1分冊）

平成16年8月2日発行

編集発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡市谷田23番20号

TEL (054) 262-4261 (代)

FAX (054) 262-4266

印刷所 図書印刷株式会社